
便利屋はじめました

タクチャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

便利屋はじめました

【Nコード】

N7390S

【作者名】

タクチャン

【あらすじ】

平凡な大学生、御堂ハルはある事がきっかけで、便利屋八ピネスでアルバイトをすることになった。

個性的なメンバーと厄介な依頼、そして理不尽な展開にハルは振り回されていく。

便利屋八ピネスを舞台に、一風変わった人々が描くコメディ作品。

プロローグ1〈御堂家の人々〉（前書き）

本小説をご閲覧頂き、誠にありがとうございます。

この作品は、とある便利屋の日常を描いたコメディ作品です。

実在する便利屋ではなく、何でもやるぜ、と言うフィクションです。現実感やリアスを求める方にはお薦め出来かねます。

オツケーだよ、と言う方は、どうぞ末永くお付き合い下さい。

注：本作品のキャラクターは、作者の前作「悪の組織はじめました」と大部分被っております。設定などを一新しておりますので、初めての方でも問題なくお読み頂けますが、興味がおありでしたら、そちらも読んで頂けたら幸いです。

プロローグ1〈御堂家の人々〉

ハルは困っていた。

とてつもなく困っていた。

どれくらい困っているのかというと、

「お金もねえ、家もねえ、食料もねえ、携帯もねえ……」
某歌手も真つ青なほどだった。

途方に暮れ、一人行く宛もなく街を歩くハルを、風は容赦なく吹き付ける。

寒い。

身体を縮こませながら、ハルは寒さに耐える。

「何で……こんな事に」

本当なら、今頃暖房の効いた家で、だらだらとテレビを見て、ご飯が出来るのを待つ。

そんな何不自由ない生活を送っているはず……だったのだ。

だが、運命の歯車は急に反転を始めた。

ハルの意思を完全に無視して……。

一時間前。

大学の講義を終えたハルが家に戻ると、

「ハルちゃんお帰り〜」

「おう、戻ったか」

「お兄ちゃん、お帰りなさい」

何故か家族全員にお出迎えされた。

「あ、ああ、ただいま。……今日、何かあったっけ？」

戸惑いながらハルは尋ねる。

ハルの家、御堂家は大変なお祭り好きだった。
家族の誕生日や、クリスマスなどのイベントには必ず盛大なパーティーを開く。

だが、ハルの記憶では、今日は何も無かったはずだが。
答えを得られぬまま、ハルはリビングへと連れて行かれた。

「それで、一体なんなのさ？」

リビングのソファーに座り一息つくくと、ハルは家族に尋ねた。

「実はね、パパからちよつと大切なお話があるらしいのよ」

ほんわか間延びした口調で、母親の菜月なつきが答える。

栗色のショートヘアに、大きな瞳。非常に小柄な身体。

小学生じゃないか、と良く思われるが、歴とした二児の母親だ。

「大事な話？」

菜月の言葉に、ハルは訝しむ様に目を細める。

「な、そんなに心配するな。大したことじゃない」

笑いながら答えるのは、父親の冬麻ふゆま。

海賊か山賊、と言われれば納得してしまう風貌。

二メートルを超える筋骨隆々の肉体。気は優しく力持ち、がピツタリの漢。

「ふ、ん、でなにさ」

冬麻の言葉に、ハルはいささか気楽に尋ねる。

「うむ、実はな……………ハル、お前家を出る」

「……………は？」

非常に大したことだった。

「ちよちよ、ちよつと待つてよ。一体どういうことさ」

混乱したハルは、思わずソファーから立ち上がる。

聞かされていなかったのか、菜月と秋乃も驚いた様に見開く。

「少し落ち着け。男がそう簡単に取り乱すんじゃない」

「簡単な事じゃ無いから取り乱してるんだよ」

「分かったから。とにかく座れ。そんなんじや説明も出来ない」
冬麻に諭され、ハルはひとまずソファに座る。

「全く、落ち着きが無いのはガキの頃から変わらん」

「もう、パパがいきなり過ぎるからよ」

「そうか？ うむ、少々性急だったかもしれないな。では、順を追って話そう」

菜月に寤められた冬麻は、コホンと咳払いを一つ。

「ハル、お前ももう二十歳になったな」

「……お陰様で」

「二十歳と言えば、名実共に大人だ。もう一人暮らしをしても良い頃合いだ」

「……うん、それは分かる。でも、何でこのタイミングで言うの？」

ハルの誕生日は九月。

今は二月。

何故に半年近く経った今、そんな話が出るのか、ハルは理解できなかった。

「無論理由がある。……秋乃だ」

「秋乃？」

ハルは先程から沈黙を続けている妹へ、視線を向けた。

秋乃はハルの五つ下の妹だ。

黒髪のロングヘア、漆黒の瞳に、白く透き通った肌。

紛れもない美少女だろう。

子供の頃からハルとそっくりで、それはこの年になっても変わらず、双子と良く間違われる。

秋乃に比べハルは若干中性的な顔立ちで髪も短い、背格好も殆ど同じだった。

そんな妹が、何故ハルが家を出る理由になるのだろうか。

「秋乃がどうしたんだよ？」

「お前も知つての通り、秋乃は先日女子高に見事合格した」
勿論知っている。

何せ合格発表の日は、夜通して祝勝会が開かれたのだから。

「知ってるけど、それが何？」

「それで、だ。今日俺とママは、秋乃の制服あわせに行つて来た」

「うん。それで？」

「可愛かった」

「……………はい？」

思わず聞き返してしまう。

この親父は何を言っているのだろうか。

「可愛かったんだよおお。誰が何と言おうと可愛かったんだああ

ああ……………ぐべえ」

「パパ、少し落ち着いてよ」

菜月が手に持っていたお玉がへし曲がる程の力で、冬麻の喉元を強打する。

……………母さん、そこ人体急所です。

「うむ、すまん。少し思い出して興奮してしまったようだ」

「も〜パパったら、相変わらず秋乃ちゃんの事大好きなんだからケロツとした様子の冬麻の鼻先に、菜月はそつと人差し指を当てる。

夫婦のいちやつきぶりと、人外ぶりにハルはすっかり辟易する。

「さて何処まで話したか……………とにかく、お前出ていけ」

「話飛びすぎだよっ！ てか今の話と何の関係あるんだよ！」

「……………ふ、分かんのか？」

急にきざつたらしく冬麻はハルに問いかける。

勿論分かるはずもない。

「いいか、秋乃は可愛い。それはお前も認めるところだろ」

「ん……………まあそうだな」

自分とそっくりなので若干複雑な気分だ。

だが、世間様から見れば充分可愛いと呼ばれるだろう。

「そう、秋乃は可愛い」

「大事なことでも二度言うな」

「……だからこそ問題なのだ」

ハルを華麗にスルーして冬麻は続ける。

「そんな可愛い秋乃と、お前が一つ屋根の下で生活する。……どうなると思う？」

「どうもしないだろ」

「いーや、何も無いわけが無い。お前も若い男。年頃の秋乃に劣情を……」

「ある訳ねえだろ！！ 秋乃は血の繋がった妹だぞ！！」

何より今日の今日まで一緒に生活していたはずだ。

ハルは父親に良い病院を紹介しようと、真剣に思い始める。

「だがお前はさつき可愛いと認めたではないか」

「それは妹としてだ。大体妹に欲情する奴なんていねえよ」

「……ふつ。これを見てもそう言えるか？」

意味深に鼻で笑う冬麻は、ソファアの影から大きな袋を取り出す。

そして、机の上で袋を逆さにし、中身を机に出していく。

机の上に現れたのは、エロビデオとエッチなゲームの数々。

それも全て、妹を性の対象としたものだった。

「このクソ親父！！ 何てもの出してんだよっ！！」

「見ての通り、十八才未満お断りの品々だが」

「十八才未満の秋乃が居るだろがよっ！ とつと片づける！」

「お兄ちゃん……これって……」

「見ちゃいけません！！」

まるでお母さんのような口調で、秋乃の目を遮るハル。

当の秋乃は顔を真っ赤にしながらも、興味津々の様子だった。

冬麻はそれらを再び袋に戻すと、ハルに向き直る。

「と、言うことだ」

「全然わかんねえよっ!!」

「何時、これらの様な事が起こるかわからん。ならば、悪い芽は摘んでおくに限る」

「芽どころか、種も埋まってねえよっ!!」

「ぜえぜえと肩で息をするハル。」

「ならば、どうしても出ていくつもりは無い、と?」

「一人暮らしはいいよ。でもこんな急に、しかもこんな理由じゃ嫌だね」

徹底抗戦の構えを見せるハルに、冬麻は思案顔。

「……………どう思う、ママ?」

「大丈夫だと思うわよ。二人ともとっても仲良しだし」

「それが心配なんだ。いつ最後の一線を越えてしまうか、考えただけ……………」

頭を抱える冬麻。

寧ろ貴方の頭が心配です。

「大体、この年になって一緒に部屋というのが、そもそもおかしいだろう」

「……………それは俺も思うけど」

ハルと秋乃は、同じ部屋で生活していた。

秋乃が小学校に入る頃、別々の部屋になるはずだったのだが、

「お兄ちゃんと一緒じゃなきゃだやだやだ」

と秋乃が大泣きしたため、やむなく中断。

そのまま今に至っていた。

「部屋のことは秋乃に言えよ。俺は別々の部屋になるのは賛成なんだから」

「……………秋乃。お前も高校生になるんだし、そろそろ部屋を……………」

「いや」

即答だった。

だが冬麻は挫けずに説得を続ける。

「いいか、同じ部屋って事はだ。お前の着替えをこいつが見る可能

性もあるんだぞ」

「別に気にしないもん。だって兄妹だよ」

「ぐ……寝顔だって見られちゃうかもしれないぞ」

「??？ 見られちゃいけないの?」

「ぬううう、な、なら、お前がいない間に下着を漁ることだって…

…」

「ねえよっ!?!?!」

この親父は、どうあってもハルを変態にしたいらしい。

即座に否定するハルだが、秋乃は頬を赤らめて、

「別に……お兄ちゃんだったら……いいよ」

とんでもない爆弾発言を口にした。

その後はもう無茶苦茶だった。

暴走モードに入った冬麻は、ハルをリビングから中庭に引きずりだし、

「お前のような愚息は、世間の荒波で性根を鍛え直してこおおおおいしいiiiiiiii!!」

ジャイアントスイングで、ハルを空高く吹き飛ばした。

そうしてハルは着の身着のまま、実家を追い出されることとなった。

二月の寒空を、ハルはトレーナーとジーパンの薄着で歩く。

吹き飛ばされる前に辛うじてサンダルを履いていたのが、不幸中の幸いか。

「あのクソ親父め……。危うく死ぬところだったぞ」

ハルが飛ばされたのは、実家から遠く離れた公園。

木がクッションにならなければ、その時点で話は終わっていただろう。

身体のあちこちが痛むが、今はそれどころではない。

「マジでこれからどうするか……」

日はすっかり暮れて、寒さは徐々に厳しさを増していく。現在地が分からないので、歩いて家に帰るのは難しい。

かといってお金が無ければ何処にも泊まれず、携帯が無いので誰にも連絡が取れない。

正に八方塞がりだった。

「……仕方ない。交番で事情を話して泊めて貰うか」

恥ずかしいが、背に腹は変えられない。

怪しまれるだろうが、事情を話せば何とかなるだろう。

「よし、それじゃあ交番に……」

そこでハルは気づく。

ここは何処だと。

周囲を見回せば、まるで見覚えのない町並み。

右も左も分からないとはこの事だった。

「俺は一体……何処まで飛ばされたんだ」

全く見覚えのない光景。電車で数駅なんてレベルじゃなかった。

途方に暮れるハル。

そんな時だった。

「……ねえ、あんた」

不意に背後から声を掛けられ、ハルは振り返る。

そこには、一人の少女が立っていた。

「何か困ってるの？」

首を傾げながら尋ねる少女。

この出会いが、ハルの運命を大きく変えることになる。

良い方向にかは、分からないが。

プロローグ1《御堂家の人々》（後書き）

はい、タイトルに偽りアリです。

初っぱなから便利屋が出てきておりません（苦笑い）。

主人公であるハルが、便利屋ハピネスで働くまでを、プロローグという形で描かせて頂きます。少し長くなりますが、ご容赦下さい。

更新は10日前後を目安に行つて参ります。

誤字脱字や表現のご指摘、ご指導、また感想なども絶賛受け付けております。

皆様のお言葉を頂けたら有り難いです。

次回もまた、お付き合い頂けたら幸いです。

ブローグ2へ便利屋ハピネス (前書き)

父親の理不尽な攻撃で吹き飛ばされてしまったハル。途方に暮れるハルに、ある少女が声をかけた。

プロローグ2へ便利屋ハピネス

「何か困ってるの？」

そう尋ねた少女。

年の頃は秋乃と同じくらいだろうか。

茶色がかったショートカットの髪と勝ち気そうな瞳。

何処かの学校の制服を着ている事から、学生だと分かる。

「ねえ、どうかした？」

少女は不思議そうな視線を送る。

どうやら無遠慮に見つめすぎたようだ。

「あ、いや……何でもない」

「そう。それでどうしたの？ 何か凄い深刻な顔をしてたけど」

「……まあ、ちょっとあつてね」

言葉を濁すハルに、

「困ってるの？」

少女はグイッと近づいてくる。

「えっ？」

「だから、困ってるのよね？」

少女は更に近づき、目を輝かせる。

「まあ……そうだな。困ってる……」

「やったああああ!!」

少女は満面の笑みで、ガッツポーズをした。

やった？ 人が困ってるのに？

状況が理解できずに呆然とするハル。

「よしっ、じゃあ着いてきて」

少女はハルの手を掴むと、そのまま何処かに向かおうとする。

「おい、ちょっと待って……」

新車のキャッチセールスかと、ハルは少女の手を振り解こうとす

るのだが、

「心配しなくても大丈夫よ」

華奢な身体からは想像できないほどの怪力で、それを許さなかった。

ハルは成す術なく、少女に引つ張られていった。

「ここよ」

少女が足を止めたのは、とある小さなビルの前。如何にもそう言う事に使われそうな、年季の入ったボロいビル。ますます嫌な予感がする。

顔が引きつるハルだが、少女はそれに気づかず、

「この二階なの。ほら、着いてきて」

グイグイと手を引つ張り、階段を上がっていく。

そして二人は、ぼろいドアの前に辿り着いた。

「なんだここ……便利屋？」

「そう、便利屋ハピネスの事務所よ」

少女が誇らしげに胸を張る。

確かにドアには、『便利屋ハピネス』とプレートが掲げられていた。

何というか、胡散臭い。

明らかに真つ当じゃない空気が漂っている。

本気で逃げようかと考えるハルだが、

「みんな……。……金づる連れてきたよ」

とんでもないことを言いながら、少女はドアを開け放った。

ドアの向こうは、ビルの外からは想像できないほど広々とした空間が広がっていた。

掃除は行き届いており、照明の明るさもあって、清潔な印象を与える。

幾つかの机とパソコン、応接用と思われるソファ。事務所として最低限の設備が揃っていた。

奈美の声に、奥の机で業務をしていた女性が入り口に視線を向ける。

「奈美、入るときはノックをなさいと何時も……あら」

少女と一緒にいるハルに気づいたのか、女性は少し驚いた表情をする。

「ごめんなさい千景さん。でもほら、金づるを連れてきましたし」
奈美と呼ばれた少女は、ハルをグイッと前に押し出す。

女性はハルを軽く一瞥する。

「奈美、そう言うことは口にはいけませんよ。……例え本当のことでも」

「すいません、逃げて良いですか？」

だが、

「まあ立ち話も何ですし、どうぞこちらに」

ハルの願い虚しく、女性はハルをソファへと誘導する。

もはや逃げるタイミングなど、欠片もなかった。

「ようこそ、便利屋ハピネスに。私は所長の柎千景と申します」

千景と名乗った女性は、軽く頭を下げた。

一言で形容するなら、和風美人と言う言葉がピッタリだろう。

今時珍しい着物姿だが、彼女が着るとそれが自然に感じられる。

長い黒髪に白い肌が、人形のような美しさを醸しだしていた。

「あ、御堂ハルです」

思わず見とれていたハルは、慌てて名乗り返す。

「私は早瀬奈美はやせなみと言うの。よろしくね」

千景の隣に座る奈美が、笑顔で名乗る。

歳こそ秋乃と同じくらいだが、全く違うタイプの子のようだ。

「それで、どのような用件でしょうか？」

「……何と言いますか、その子に無理矢理連れられまして」

「奈美……無理な客引きは程々にしなさいと、前から言っているでしょう」

いえ、絶対止めさせて下さい。

「無理矢理じゃないですよ。この子困ってるみたいだし、それに……」

奈美は視線をハルに向ける。

「この寒空で女の子がこんな格好で居るんですよ。絶対ただ事じゃないと思っただんです」

グサツ

奈美の言葉の刃が、ハルの心に突き刺さる。

「成る程。貴方と同じくらいの歳の子ですし、確かに気になりますね」

グサツ、グサツ

容赦なくハルの心に突き刺さる刃。

悪気がある訳じゃない。それは分かるのだが……。

「ねえ、何でも相談して。言いにくいことかも知れないけど、きつと力になれるわ」

落ち込むハルの手を取り、奈美は真っ直ぐな視線を向ける。

いい子だ。それも分かるのだが……。

「あの……まず一っだけ言わせて下さい」

「うん、何でも言っつて」

「……俺は男です」

瞬間、奈美の顔が固まった。

握った手がブルブルと震え始め、そして、

「……き、きやあああああああ……！！……！！……！！」

絶叫と共にハルの手を引っ張り上げ、宙に浮いた身体を思い切り床に叩き付けた。

「がっ……」

突然のことに受け身も取れず……いや、両手が塞がってるから取

りようもないのだが。

とにかく無防備の身体を叩き付けられ、ハルは痛みと呼吸困難に悶絶する。

そんなハルに、

「……この子、男性恐怖症なんですよ」

千景が気の毒そうに声を掛けた。

「さ、最初に……それを……言っただけ……です」

そのままハルの意識は闇の中へと落ちていった。

プロローグ2へ便利屋ハピネス（後書き）

非常にスローペースで進んでおります。

プロローグは全部で五話程で終わらせる予定です。

のんびりとマイペース更新をして参ります。

気が向いたときに、ちょいと覗いてもらえれば嬉しいです。
次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

プロローグ3へ一難去つてまた一難 (前書き)

何とか一命を取り留めたハル。

事情を聞いた千景は、ある提案をするのだが。

プロローグ3へ一難去ってまた一難

「……話は大体分かりましたが、随分過激なお父様ですね」
千景は同情と呆れが混ざった表情をする。

あれから意識を取り戻したハルは、今までの事情を全て説明した。
話し終えたハルに、

「それで、どうしますか？」

千景は事務的な口調で尋ねる。

「どうする、とは？」

「これからですよ。その格好でお金もなく家も遠い。どうなさるつもりですか？」

もっともな言葉だった。

話して解決するなら、世の中に問題など存在しないだろう。

「交番にでも行って一晩泊めて貰おうかと思っただけですが」

「一応警察署はありますが、止めた方が良いでしょう」

「どうしてです？」

「その署長がとくても嫌な奴でして、泊めて貰うなんて絶対無理ですから」

知り合いらしく、千景は本当に嫌そうな顔をする。

だがそうなると困ったことになった。

他に手を考えなければ。

頭を悩ませるハルに、

「……依頼、してみますか？」

千景はそつと告げた。

「依頼？」

「ええ。私達ハピネスは便利屋です。依頼があれば、手を貸すことも出来ますよ」

「でも俺、金無いです」

そもそもそんなお金があれば、こんな苦労はしない。

「ええ。ですから成功報酬と言うことで、後払いでも結構です」

「一度でも家に帰れば、あんたも一文無しじゃないでしょ？」

「まあ、それなりに」

適当に色々なバイトをしていたので、そこその額は貯金してあった。

ハルの答えに千景は満足そうに頷くと、

「依頼内容は一晩の宿を貸す事と、家に連絡を取り、一度でも戻ること。でどうでしょう」

「ま、一人で解決できるならどうぞご自由に。因みに今夜の予想気温はマイナスだから」

挑発的な目でハルを見る奈美。

そう言われると反発したくなるが、

「……………お願いします」

残念ながら今のハルには選択の余地はなかった。

渋々ながらも頭を下げるハル。

「ではこちらの依頼書に記入を。依頼料は……………こんな感じですね」

千景はパチパチとそろばんを弾き、ハルに見せる。

諭吉さん数人とお別れする額を見せられ、ハルの表情は引きつる。

「あの……………もう少し何とかありませんか？」

「申し訳ありませんが、こちらでも仕事ですから」

「そうよ。こんなの相場なんて無いんだから、足下見るのが鉄則でしょ」

「……………奈美。何度も言いますが、心に思っても口に出さないように」

『苦勞してますね』『いつものことですから』

ハルと千景は視線で会話し、少しだけ心が通じ合った。

とは言え代金が割り引かれる訳でもなく、ハルは泣く泣く依頼書にサインをするのだった。

「では今日はこの事務所で寝てください。暖房は効いていますし、布団もありますから」

「布団……あるんですね」

「ここの上の階が私の家です。予備の布団を持ってきますから固い床の上で寝るのは避けられそう」

「その間に、電話を使って構いませんから、ご家族に連絡されては如何ですか？」

「そうさせて貰います」

千景はそう言い残すと、布団を取りに事務所から出ていった。

さて、とハルが机の上の電話をかけようとして、

「じ~~~~~」

さっきから自分をじつと見つめる奈美と目があった。

「……なんだよ」

「べつについ。ただあんたが変なコトしないか、見張ってるだけよ随分と嫌われたものだ。」

まあ、どのみち今日限りの縁。気にする事もないだろう。

「って、黒電話か。懐かしいな」

アンティークかと思ったが、ダイヤルをするとちゃんとコール音が聞こえる。

そして、

「……はい、もしもし」

少し警戒したような声で、相手が出た。

「秋乃か？ 俺だ、ハルだよ」

「お兄ちゃんっ！..!」

突然の大声に、思わず受話器から耳を離す。

「お兄ちゃん今何処にいるの？ 生きてるの？ 死んでるの？」

死んでたらこの電話はホラーだ。

「まあ、何とか無事だよ」

「ううう、よかった……お兄ちゃんが生きてて、良かったよ……」

『泣くなよ全く……。それで、あの後そっちはどうなった？』

『あのね、お父さんも飛んで行っちゃったの』

『はいっ??』

何やらとんでもない事が起こったようだ。

『お母さん凄く怒って、お父さんを投げ飛ばしちゃったの』

『……………母さん、怒ると凄いもんな』

『うん。それでお父さんの携帯から電話があって』

『北海道まで飛ばされたとか？』

『今、北極だって』

母さん、やりすぎです。

まああの親父ならそれくらいじゃ懲りないだろうが。

『それよりお兄ちゃんよ。今どこにいるの？ どうしてるの?』

『今桜ヶ丘だよ』

さつき千景から聞かされた場所を告げる。

家から通っている大学を通り過ぎ、更に五キロほど離れた場所まで飛ばされたらしい。

つくづく何で無事だったのか不思議だ。

『色々あって、取り敢えず今日は何とか泊まる場所を確保した。明日家に帰れると思う』

『よかった……………』

心底安心した声が聞こえる。

本気で心配させてしまったようだ。

『まあこっちは大丈夫だから。母さんにも……………』

会話を続けるハルは気づかなかった。

今まで沈黙を守っていた奈美が、閃いた、とばかりにそっと背後に近づいたことに。

状況説明も終わり、そろそろ電話を切るうかと言っ時だった。

『じゃあそろそろ……………』

『ハルくん。シャワー先に浴びてるね』

奈美が甘つたるい声で、受話器の向こうにギリギリ聞こえる大き
さで言いやがった。

「気まずい沈黙が流れる。そして、

『……お兄ちゃん』

魂が底冷えるような冷たい声が聞こえた。

怒っている。間違いなく怒っている。

『ち、違うんだ。誤解なんだ』

『五階も六階も無いよっ!!』

古典的表現で怒りを爆発させる秋乃。

『だから違っつて』

『酷いよお兄ちゃん。私という者がありながら……』

『人の話を聞けええ!! てか何だよ、私という者って』

『私お兄ちゃんなら、何時でも受けれたのに』

『少し落ち着けえ! ちゃんと俺の話をだな……』

『お兄ちゃんの馬鹿ああ! お母さんに言いつけてやるから!!』

ツーツーツー

一番聞きたくない台詞を最後に、一方的に電話が切られた。

ハルはそつと受話器を置くと、振り返る。

「……さて、何か言いたいことはあるか?」

「効果はてきめんだ、て感じだったね」

「どや顔をする奈美に、ハルの怒りはグツグツと沸き上がる。

「……何で、こんな事した?」

「ちよつとした好奇心かな……… やっっちゃったZ E」

「好奇心で人の人生を壊すなああああ!!」

怒り爆発のハル。

「人生つて、そんな大げさな」

「母さんを怒らせた親父は、北極まで投げ飛ばされたんだよ。マジ

で人生終わるぞ」

「北極か。いいよね、白クマとか。……美味しそうだし」

「こつちが食われるわっ！！ てか飛ばされた時点で普通死ぬからっ！！」

ハルの怒りも、のれんに腕押しとばかりに、奈美には全く効果がなかった。

掴みかかりたい所だが、さっきの事があるので躊躇われる。

そんなハルを救ったのは、

「……奈美」

秋乃以上に冷たい、千景の声だった。

事務所の入り口には、布団を運び終えた千景が立っていた。

表情こそ笑顔だが、全身から巻き上がる怒りのオーラがハッキリと見える。

「ち、千景さん。これはですね……」

「言い訳は無用です。『シャワー先に浴びてるね』から聞いていましたから」

「あっ……」

退路をふさがれ、奈美は言葉に詰まる。

「ハル君、うちの所員が迷惑をかけました」

千景は小さく頭を下げる。

「迷惑料と言つては何ですが、今回の依頼料は無料で結構です」

「え、千景さん、それじゃあ丸損じゃないですか」

「その分は貴方の給料から引きますから、問題ありません」

ガツクリと肩を落とす奈美。

自業自得。辞書に例文として載せたいくらいだった。

その後、奈美はふて腐れながら帰宅。

「この恨み、忘れないわよ」

見事なまでの逆恨みの捨てぜりふを吐く辺り、精神的にタフだと感心してしまう。

「では私も失礼します。帰宅の打ち合わせは、また明日にしまし
う」

おやすみなさい、と千景も事務所を後にする。

一人残されたハル。ようやく訪れた、心やすげる時間だった。

電気を消し、床にひいた布団に潜り込む。

「……寝よう。全ては明日だ」

菜月の怒り具合によっては、明日で終わる可能性もあるが。

嫌な想像に悩まされながらも、ハルは眠りへと落ちていくのだっ
た。

プロローグ3へ一難去ってまた一難（後書き）

長いですね……プロローグ。

もう本編で良いじゃないかと思いはじめています。

プロローグは後二回で終わりの予定です。

ハルとハピネスの縁、簡単には切れなさそうです。

最近何かと忙しく、執筆時間が取れない日が多くなっております。

投稿ペースを若干落とさせて頂きます。

楽しみにしてる方（居たら嬉しいですが）には申し訳ありませんが、
よろしくお願い致します。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

プロローグ4へハルの帰還（前書き）

ハピネスの助けを借り、何とか家に戻ってきたハル。
そんな彼に待ち受けているものとは……。

プロローグ4へハルの帰還

翌朝。

ハルは千景の運転する車で、ようやく家に戻ってきた。

これで全ては元通り、の筈だったのだが。

「……………」

玄関に貼られた張り紙に、ハルは頭を抱える。

『浮気者のお兄ちゃんは入るべからず』

どうやらそうトントン拍子には行かないようだ。

「依頼はひとまず終了です。……何かあれば連絡を下さい」

千景はハルに名刺を渡すと、そのまま車を出す。

それをポツケに入れると、ハルはゆっくり玄関を開ける。

ドアの向こうには、

「ただいま……………秋乃」

三つ指着いた秋乃が待ちかまえていた。

「いらつしゃいませ、お客様」

なるほど、そう来たか。

秋乃の考えを理解し、ハルは苦笑する。

「兄に対してそれは、酷いんじゃないか？」

「浮気者のお兄ちゃんが入って来れません。だから貴方はお兄ちゃんじゃありません」

「だが俺は入ってきた。つまり、浮気者じゃ無いって事だ」

「……………屁理屈です」

どっちがだ、と突っ込みたくなるのを我慢。

ここで機嫌を損ねるわけにはいかない。

「話す時間をくれ。それも駄目なほど、お前の兄は信用できないか

「？」

「……うん」

首を振る秋乃に、ハルは内心ホツと息を付く。

妙なところで頑固だが、秋乃は元々素直。誤解を解くのも難しくはないはず。

後はゆっくり話をすれば万事解決だ。ただその前に、

「ハルくんちゃん」

秋乃の背後で、お玉を手に凄イオーラを放つ、菜月をどうにか出来ればだが。

「なぐんだ、そう言うことだったのね」

「……ご理解頂けて……何よりだ」

全身ボロ雑巾になりながら、ハルは声を絞り出す。

菜月のお玉乱舞を命からがら耐え抜き、何とか誤解を解くことに成功した。

払った犠牲は全身打撲……菜月相手には格安だった。

「お兄ちゃん、私は最初から信じてたよ」

「……妹よ。どの口が言うのかな？」

「ほひひゃん、ひひゃひひひゃひ」

俺はもつと痛かった、とハルは秋乃の頬を引っ張る。

「うんうん、二人ともすつかり仲良しさんだね」

その様子を微笑ましそうに見つめる菜月。

こうして、一夜の騒動は幕を閉じた……かにみえた。

ハルは身支度を整え、大学へ向かい、講義を受けた。

そして夕方、家に戻ると、

「ハルちゃんお帰り〜」

「お兄ちゃん、お帰りなさい」

「おう、戻ったか」

何故か家族全員でお出迎え。

「あれ、なんか既視感……てか、親父！ 何で居るんだよ！！」

「驚くことはあるまい。父が家にいるのは当然だろ」

「昨日北極にいた人間がいたら、誰だって驚くわ！」

「うむ、流石の俺も帰るのに数日かかるところだったが、運良く上空を飛行機が……」

「もついい。何も言うな」

ハルは疲れたようにため息をついた。

「それで何だよ。また大切な話とか言い出すつもりか？」

ハルはリビングのソファに腰をかけ、疑いの眼差しを冬麻に向けてる。

万が一に備え、財布と携帯が入ったコートは着たままだが。

「そう警戒するな。昨日のような事は無い。……やるなら母さんの居ないときにする」

ちつとも反省してませんね。

「じゃあ何？」

「実はだな、この家を壊すことになった」

「はいっ??？」

突然の宣告に、ハルは驚きを隠せない。

「もうパパったら〜、ちゃんと説明しなくちゃ〜。ハルちゃん困ってるじゃない」

「おお、そうだな。すまんすまん」

「あのねお兄ちゃん。壊すんじゃないくて、建て替えるの」

「建て替え？ 何でまた……こんな急に」

朝にはそんな話、全く出ていなかった筈だが。

「今日の昼頃だ。こんなニュースが流れた」

冬麻は夕刊をハルに見せる。

「何々、設計事務所による、耐震強度の偽装が発覚………て、まさか」

「そうなのよ。この家、当たっちゃったみたいなの。困ったわね」

ちつとも困って無い様子の菜月。

「そう言うことで、この家を建て替えることに決めたのだ」

「にしても随分急すぎるだろ。直ぐに危険があるわけでも無いんだし……」

「馬鹿者おおおお！！！！」

冬麻はハルを一喝する。

「僅かでも危険がある家に、大事な可愛い子供（勿論秋乃）と菜月を住まわせられるかああ！！」

「良い言葉だね、カツコが無ければもつと良かったのに」

「……ハルよ。お前ももう一人前の男。自分の身くらい、自分で守って見せる」

「パパったら、格好いいわ」

ひしつと身を寄せ合う馬鹿夫婦に、ハルはため息。

随分幸せが逃げた気がする。

「とにかくだ、建て替えの間家を出なければならん」

「まあそうだね。……それで、その間住む家は決まってるの？」

「うむ。まずこれを渡しておこう」

そう言うつと冬麻は、一枚のメモと鍵をハルに手渡す。

「……これは？」

「お前が住む家の鍵だ。住所はこのメモを見る」

「随分準備がいいね……ん、お前がつて事は、みんなは？」
引つかかる言い方だった。

「俺たち三人は、建て替えの間旅行に行くことに決めた」

「をい、ちよつと待て」

「引越しは一々面倒だからな。ならば旅行したほうがよっぽど楽しい」

「だからちよつと待て」

「案ずるな。建て替えは数週間で終わる予定だ。その頃には戻ってくる」

「待てて言ってるだろうがああ!!」

一方的に話を進める冬麻に、ハルは絶叫する。

「何だ一体。何か問題でもあるのか?」

「問題大ありだろうが! 二人はともかく、秋乃はまだ学校があるだろ」

「大丈夫よハルちゃん。ちゃんと学校には連絡してあるから」

「卒業前に、秋乃に世界の広さを見せ、見聞を広げさせたいと、お願いした」

「学校は何て?」

「『どうせこの時期大した事しないし、どうぞどうぞ』って言うてくれたの」

この国は駄目かも知れない。

ハルはガツクリと肩を落とした。

「本当はハルちゃんも一緒に良かったんだけど」

「お前には大学があると思ってな、断腸の思いで一人暮らしさせることにした」

「……親父。断腸の思いって辞書で調べ直せ」

少なくともニコニコしながら言うことではない。

「ま、講義があるのは事実だけ」

「いや、本当に残念だ。あ、荷物はもう運び込んであるから、安心して」

「へっ?」

「もう向こうの家に着いてるはずだ。水道やガスの契約も終わってるから」

抜かりはないぞ、とどや顔をする冬麻。

ここまで仕組まれては、ハルには抵抗する術がない。

ハルは理不尽な思いを感じながら、渋々納得するのだった。

「ここか……」

ハルがやってきたのは、二階建ての小さなアパートだった。

年季が入ったと言えば聞こえは良いが、実際かなりのおんぼろだ。

二階建てで全部で八部屋。住民は出かけているのか、明かりがついているのは一部屋だけだ。

「えっと、202号室だったな」

メモを確認し、階段を上がる。足を乗せるたび、不快な音が響く。不安だ。

鍵でドアを開けて、部屋に入る。部屋の中は、予想に反してかなり綺麗だった。

部屋は六畳、ボロアパートに不釣り合いなシステムキッチン、トイレ、風呂があった。

リフォームしたのか、畳も綺麗に張り替えられている。

冬麻の事だからとんでもない部屋を覚悟していたが、ハルは正直拍子抜けした。

「あの親父にしては、随分と優しいな」

安心したハルは荷ほどきを始める。

元々秋乃と二人部屋だったため、荷物は着替えや大学の教材など最低限の物しかなく、荷ほどきは一時間もしないうちに終わる。

「ま、家具は暇を見て買いに行くしかないな」

机もタンスも無く殺風景な部屋を見て、ハルは一人ごちた。

一息つくと、腹が控えめな音で空腹を主張する。時計を見ると、もう午後八時をまわっていた。

「飯にするか……たしか近くにコンビニがあったな」

来る途中に見つけたコンビニに行くかと、ハルはコートを羽織って部屋から出る。

二階の廊下を歩くと、

「……お隣さんはいるのか。……挨拶しておくか」

「ご近所付き合いは大切だ。特にアパートでは、音漏れなどの関係から、隣人との関係は重要。もし怖い人だったら生活には細心の注意が必要となる。」

ハルは隣室のチャイムを鳴らす。

「はい」

部屋から聞こえたのは、女性の声。それも随分と若い。

「どちらさまです……」

ガチャリとドアを開けて姿を見せたのは、

「………何で、あんたがここにいるのよ」

「よう、一日ぶり」

ハピネス事務所であった、あの奈美だった。

「あんた、まさかストーカー？」

「冗談。ちよいと事情があって、ここに越してきたんだ。それで挨拶と思つてな」

ハルの言葉に、奈美は意外だと驚いた表情を浮かべる。

「わざわざここに引越してくるなんて……。あんたも物好きね」

「このアパートは何か変なのか？」

「契約の時、聞かなかつたの？」

そもそも勝手に決められた部屋だ。聞くどころではない。

「何だよ、気になるな。何か訳あり物件なのか？」

「前ここで殺人事件があつたのよ」

「……まあ割とべたな話だな。で、何処の部屋だ？」

まあ予想は着く。恐らくハルの部屋だ、とか言うオチだろう。

だが、

「何処つて……全部よ」

奈美の言葉は、ハルの予想を遙かに上回っていた。

「おい全部って事はないだろ……」

「何でも夜に殺人鬼がやってきて、アパートの住人皆殺しにしたらしいわよ」

想像するだけで寒気がする。

「……このアパートの部屋が、外と比べて異常に新しく綺麗なのは」

「殺し方も酷かったみたいだからね。リフォームしないと、とても人が住めなかつたみたいよ」

「なるほどね。……色々納得できた」

何故部屋が綺麗なのか、何故冬麻はここに決めたのか。つまりはそう言うことだ。

「私は気にしないけど、やっぱり人気無いみたい。住んでるの私だけだったし」

「ああ、それも納得だ」

「……なんか気になる言い方ね」

「安心しろ。半分くらいは褒めてるから」

残り半分は秘密だ。

「ま、良いわ。住むのは勝手だけど、私の生活の邪魔をしないでよね」

「それも安心しろ。俺は数週間でおさらば。お前と関わる事なんて無いよ」

「だと良いけど。じゃあね」

それっきり、奈美は部屋のドアを閉めてしまった。

「……たまたま世話になった便利屋の所員が隣室。それだけのことだな」

ハルは頭を切り換え、コンビニへと向かう。

実はこれから先、長い付き合いになるのだが、今のハルには知る

よしも無かった。

プロローグ4へハルの帰還（後書き）

本当に長いプロローグになってしまいました。
いい加減次で終わらせようと思います。

数週間という期限付きですが、ハルは再び家から追い出されました。
しかも隣の部屋が天敵の奈美。お約束という奴ですね。
ここに来てようやく物語が動き始めた感じですよ。

ゆっくり話を進めていこうと思っております。
更新ペースが安定しませんが、最低一月一話で行きたいです。
次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

プロローグ5へハピネスにようこそ (前書き)

実に数ヶ月かけたプロローグもようやく終わります。

なし崩し的に一人暮らしに突入したハル。
そんな彼に社会の洗礼が……。

プロローグ5へハピネスしようこそ

一人暮らしというのは、お金が掛かる。

家賃、光熱費、食費等、今まで意識していなかった公共料金が、主要要因だ。

ハルは一ヶ月分の家賃と光熱費を支払い、それを実感する。

「……まあ、まだ何とかなるな」

バイトで貯めた金はまだ大分ある。

一人暮らし中は忙しいので、出来ればバイトをせずに過ごしたい。今のままならそれは充分実現可能だった。

が、悪いことは重なる物。

「結婚？ おめでとうございます。ええ、勿論行きます」

「……お前も結婚？ あ、いや、こっちの話。勿論参加させて貰うよ」

「……本当に結婚？ うん、ちょっと驚いただけ」

「……結婚だろ。言わなくても分かる」

先輩やら友達やら、お世話になった先生やらが続々と結婚した。

それはおめでたい。おめでたいことなのだが……困ったことになった。

「ご祝儀やらで、余裕のあった貯金は瞬く間に消えていった。

気づいたときには、

「……やばい」

生活するのもギリギリのお金しか、残っていなかった。

「さて、冷静に現状を整理しよう」

ハルは自分に言い聞かせるように呟く。

リサイクルショップで購入した机に、有り金を全てあげる。

「まず今の全財産は、一葉さんが一人、英世さんが三人、小銭が少々……」

泣きたくなってきた。

「絶対欠かせないのは食費。一日五百円でも……諭吉さんがいるな……」

大学の学食でランチを取るだけでも、五百円は使ってしまう。

一日の食費をそれで収めるというのは、初一人暮らしの男子には厳しいものがあった。

そもそも諭吉さんがいないのだから、それ以下にしなければならぬ。

この時点でハルは詰んでいた。

それにハルも大学生。色々な人付き合いがある。

飲み会などを考えると、完全に赤字だった。

「こんな事なら、もっとバイトしとけば良かった……」
後悔しても仕方がない。

何か無いかと、財布を逆さにして振ってみる。

すると、レシートに紛れて、一つの名刺が机の上に落ちた。

「ん、これは……」

ハルはそれを拾い上げると、少しだけ悩む。

「……普段なら避けたいところだが、背に腹は変えられないか」

そう言えば携帯代の支払日も近い。ますます追いつめられたハル。深く深呼吸をし、名刺の電話番号を打ち込む。

数コールして、相手が出た。

「もしもし、私は御堂ハルと言う者なのですが……」

これが、全ての始まりだった。

一時間後。

ハルがやってきたのは、便利屋ハピネスの事務所だった。勿論依頼をするためではない。

バイトとして雇って貰うために、面接に来たのだ。

他に幾つかバイトの宛はあるのだが、全て給料は月末の振り込み。それでは間に合わない。

だからこそ、日払いもOKという、このハピネスにやってきた。

事務所のドアの前に立つと、何人かの人の気配がする。

流石に千景と奈美の二人だけとは思っていなかったが、それなりに所員がいるらしい。

少しだけ安心したハルは、インターフォンを押す。

気づいた中の人が、ドアを開ける。

「はあゝい、いらつしゃいませえ〜」

「…………… すいません、間違えました」

開いたドアを、ハルは光速で閉める。そして深呼吸。

スーハースーハー

よし、落ち着いた。

再度確認をする。ドアのプレートは「便利屋ハピネス」。間違い
ない。

閉めたドアを再び開くと、

「いらつしゃいませえ〜」

閉じる前と同じ光景が広がっていた。

またドアを閉める。そして開ける。

「いらつしゃいませえ〜」

残念ながら状況は変わらない。

言葉だけ聞けば、普通にお客様を迎える所員の対応だろう。

問題なのは、それがとてつもない大柄な男で、しかもお姉系だと
言うことだ。

違う店に来てしまったと、勘違いするのも無理ないはず。

ドアを閉めたかったが、今度は目の前の男ががちりドアノブを

掴んで離さない。

「ネタの天井は二回までよお〜」

「通ですね」

「ようこそお、便利屋ハピネスにい。何かお困りかしらあ、可愛いお嬢さん」

「……俺は男だし、客じゃ無いです。千景さんと約束してる、御堂ハルです」

不機嫌に言っただつもりだが、男は目を輝かせる。

「ああ、貴方が。話は聞いてるわあ。……新しい仲間が増えるっ
てえ」

「まだ採用された訳じゃないですけどね」

「そうなのお？ 千景ちゃん、もう貴方の仕事を割り振ってるけど
お」

何を馬鹿な、と言いかけてハルは思いとどまる。

会ったのは一度だけだが、あの人ならやりかねないと、感じていたからだ。

「立ち話も何だしい、どうぞ中へ」

男に促され、ハルは事務所の中へと入っていった。

事務所の中は、数名の男女が忙しそうに動き回っていた。

ハルに挨拶をするが、直ぐさま仕事を再開する辺り、なかなか鍛えられている。

「……時間通りにちゃんと来ましたね」

「あ、こんにちわ」

「こんにちわ、ハル君。では早速、仕事の話しましょう」

千景はハルを応接用のソファアに座らせる。

「さて、うちでアルバイトをしたいと言ったことでしたが……」

「その前に千景さん、一つ聞いても良いですか？」

「何でしょう」

「あの方は、一体……」

ハルは先程の男について尋ねる。

「ああ、確かに最初はみんな驚きますね。彼は……」

「ローズって言うのよお。よ・ろ・し・く・ね　ふう〜」

「うわああああ」

いつの間にか背後に立っていた男に、耳に息をかけられ、思わず飛び上がるハル。

全身に鳥肌が立ち、背筋が凍る。

「もう、可愛いリアクションねえ」

「……剛彦、その辺にしておきなさい」

「駄目よ千景ちゃん。ローズって呼んで　……はい、お茶を持ってきたわあ」

男は慣れた手つきで、ハルと千景の前に湯飲みを置く。

そのまま、ごゆっくり、とウインクを残して去っていった。

「ち、千景さん……あの生き物は一体……」

「花京院剛彦。あれでも一応、うちの所員です」

「ローズって言うのは」

「自分で広めているあだ名です。本名で呼ばれると不機嫌になるので」

何とも厄介な人種だ。

冬麻を一回り大きくしたような体付きは、どう考えても剛彦と呼ぶに相應しい。

角刈りヘアに、恐らく特注であろう女性用のスーツを着ている

姿は、何というか……。

「まあ、彼については諦めてください」

千景の言葉にも、何処か諦めが混じっていた。

「それで、話を戻します」

千景は男、ローズの話の打ち切ると、机に書類を数枚置く。

「アルバイトは大歓迎です。給料は日払いも可能です」

「助かります」

まず第一関門を突破したことに、ハルはほっと一息つく。

「では簡単に仕事のシステムについて説明しますね」

「お願いします」

「まず、ハピネスは便利屋として、人から依頼を受け、それを解決することで報酬を得ます」

頷くハル。それは先日ので承知していた。

「依頼の内容や報酬は多種多様。それこそお使いの代行から暗殺まで、幅広く取り扱っています」

「あ、暗殺っ!？」

「……というのは冗談ですが、それ程色々な依頼が来ています」

さらりと流す千景。

そのわりに本気の目をしていたが、やぶ蛇になりそうなので、突っ込まないでおく。

「依頼は事務所員で整理して、皆さんに好きな依頼を選んで貰います」

千景は事務所の壁を指差す。

そこには大きな掲示板があり、かなりの数の張り紙がしてあった。

「あの紙は、依頼内容や報酬など、細かな条件が記してあります」

「派遣の仕事と考えても？」

「問題無いかと。あれを取って事務所員に声を掛ければ、依頼が受けられます」

なるほど、とハルは頷く。

派遣会社と殆ど同じシステムを採用しているらしい。

面倒な手続きがない分、こちらの方がより仕事をしやすい感じはする。

「依頼の遂行は、依頼を受けた人間に全責任を持って貰います」

「……失敗したら？」

「クビです」

随分と厳しい職場のようだ。

「まあそれも冗談です。失敗の報を事務にすれば、代わりの人を送

りますから」

「……心臓に悪い冗談ですね」

「ただ、あまり失敗が多いと、こちら仕事も任せにくくなるので、注意してください」

失敗は信用を失い、信用がなければ仕事を失う。

なかなかシビアだが、それだけにやりがいはあるようだ。

「不明な点は、その都度聞いてください。聞くは一時の恥ですから、肝に銘じておきます」

「大まかな説明は以上ですね。今の時点で何か不明な点は？」

「一つだけ。張り出されている用紙に、色が違うものが混じっているのですが」

「ああ、そう言えば説明してませんでした。あれは、特別な依頼です」

「と言いますと？」

「薄緑の紙に書かれた依頼は、特別な資格が必要なものです。いわゆる専門職の依頼ですね」

千景は幾つかの薄緑の依頼用紙をハルに見せる。

「重機の運転資格……医師免許……航空従事者……って、こんな無茶な依頼ありますか？」

「ええ。重機や飛行機は剛彦がやれますし、医師免許所持者もいるので」

とんでもない人間が揃っていた。

普通に就職しろ、と言いたくなってくる。

「これは報酬の高さが魅力ですね。勿論、資格が無い人には受けさせませんよ」

「……身の程は知ってるつもりです」

結構、と千景は依頼用紙をしまう。

「じゃあ千景さん。あの赤色の紙の依頼は何なんですか？」

「あれは……まあ、極めて難しい依頼と想ってくれば良いです」

「随分アウトですね」

「定義が難しいので。今のところハル君には関係のないものです」
千景は少し厳しい表情で話を切った。

その後細かな説明が行われ、ハルは契約書にサインをした。

「はい、確かに。では現時刻をもって、御堂ハルをハピネスのアルバイトとして認めます」

「ありがとうございます」

「ところで、ハル君は取り急ぎ、お金が必要との事でしたね」

「ええ、情けない話ですが」

「生きるための糧を稼ぐのは、何も恥ずべき事ではありませんよ」

千景は優しい笑顔でハルに告げる。

「幾つか簡単な依頼を選んでおきました。仕事に慣れる意味でも、最適かと」

「それはまた、助かります」

「貴方の働きに期待してますよ。……では、お話は以上です」

千景はそう告げると、書類を纏めて、自分の席へと戻っていった。

「どんな仕事なんだろ……」

ハルは手元の依頼書に目を通す。

ほとんどが雑用程度の、本当に簡単な仕事だった。

「何はともあれ、やってみるか」

事務員に依頼を受ける旨を告げ、ハルは事務所を後にする。

こうして、便利屋ハピネスの物語は幕を開けた。

プロローグ5へハピネスによっこそ (後書き)

ようやくプロローグを終えることが出来ました。
更新ペースが安定せず申し訳ありません。

次からようやく本編に入ります。

基本は一話完結。馬鹿なノリでやっていきます。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

始まりは唐突に、そして理不尽に（前書き）

ハピネスでのバイト生活にも大分慣れてきたハル。
そんな彼の元に一本の電話が。

始まりは唐突に、そして理不尽に

何事も初めて体験する事は楽しいものだ。

ハルにとつて一人暮らし、ハピネスのバイトは正にそれ。

始まりこそ無理矢理だったものの、今ではすっかりこの生活を満喫している。

そんなハルにとって三週間という時間は、あっという間の出来事だった。

「ふうー、今日もよく働いたな」

ハピネスのバイトを終え家に戻ったハルは、一人ごちながら電気を着ける。

安っぽい照明が部屋を照らし出す。

ちゃぶ台だけしか無かった部屋は、バイトのお陰で最低限の家具が揃えられていた。

ハルは鞆を乱暴に放り投げると、BGM代わりにテレビを着ける。賑やかなバラエティ番組の声を聞きながら、冷蔵庫を開けお茶を取り出し一気に飲み干す。

「まだ八時か。風呂入って飯食って……ああ、そう言えば課題が出たな」

頭でこれからの行動を軽く整理し、まずお風呂を沸かそうとした時だった。

鞆に入ればなしにしていた携帯が着信を告げる。

「ん？ メールじゃなくて電話か……」

少し急いで携帯を鞆から取り出し通話ボタンを押す。

「もしもし？」

『俺だ。お父様だ』

ハルは無言で電話を切った。

「……………さて風呂を沸かすか」

無かったことにしようとするハルだが、間髪置かずに再び携帯が鳴る。

「……………もしもし？」

『お前が尊敬して止まない、遅いお父様だ』

「そんな奴に心当たりはない」

言い終わると躊躇い無く通話を終える。

冷たいと言うこと無かれ。

この三週間冬麻から幾度と無く電話があつた。

だがそれは近況報告などと言う可愛いものではなく、単なる自慢話だつた。

三人旅を満喫している冬麻の自慢げな声を聞くのにも、いい加減ウンザリなのだ。

「暇なときなら相手してやるからな。今は風呂を沸かしたいんだ」
誰に向けるでもなく言い訳をするハルの手で、三度携帯電話が着信を告げる。

無視しようかと思つたが、ディスプレイに映つた名前を見てハルは通話ボタンを押す。

「もしもし、秋乃か？」

『……………ふっ。と見せかけてのお父　ぐべええ！』

鈍い打撃音が響き、冬麻の声がフェードアウトしていった。

『あ、もしもしお兄ちゃん？　久しぶりだね』

「秋乃……………何があつた？」

『ん？　何も無いよ』

ご機嫌な妹の声に、ハルはそれ以上の追求を止めた。

「まあいいや。一週間ぶり位だけど、今はどの辺りにいるんだ？」

『えつとね、今はドイツにいるよ。ヨーロッパ全部まわる予定なの』

「そいつは羨ましい事だ」

『お兄ちゃんにも沢山おみやげ買っていくから』

「別にいいよ。無事に帰って来てくれるのが一番の土産だ」

ハルが苦笑しながら答えると、何故か秋乃は黙り込んでしまう。十秒、二十秒と続く沈黙。

何か不味いことを言っただろうかと、不安に駆られる。

「あの〜秋乃さん？」

『残念　秋乃ちゃんじゃ無くて菜月ですよ〜』

「か、母さん。どうして……」

『秋乃ちゃん今は話せそうに無いから〜。ピンチヒッターよ』

「……怒ってるの？」

『ん〜、と言うよりも照れてる感じね。何か恥ずかしい事言わなかった？』

無論心当たりは無い。

「俺は何も。無事に帰ってくるのが一番の土産だって言っただけ」

『……不意打ちだったのね。久しぶりの会話だし、無理もないか〜』

「母さん？」

『ハルちゃんは気にしなくて良いわ。ま、兄離れには時間が掛かるとして事ね』

余計に訳が分からなくなる。

『それよりも、今日はハルちゃんに大切なお話があったのよ〜』

急に雲行きが怪しくなってきた。

大切な話を聞く展開は、どうもハルにとって良い結果を招かない。今すぐ電話を切りたい衝動を必死に押さえながら、話の先を促す。

「何かな？」

『良い話と悪い話があるんだけど〜、どっちから聞く？』

「うん、もう嫌な予感しかしないけど……悪い方から聞くのかな」

『でも私は良い方から話したいから、そっちからにするね』
『じゃあ聞くな。』

心の中で時差八時間向こうにいる菜月に、全力で突っ込んだ。

『えっとね〜、何と家の建て替えが無事完了しました〜。パチパチ』

「そうか……それは確かにいい話だね」

そう、いい話だ。この後に悪い話が控えてなければ、もっと素直に喜べただろう。

「で、悪い話ってのは？」

『パパが日本に帰れなくなりました』

「……………いい話じゃないか」

望みうる最高の結果だ。

ハルは命の危機を感じず、家族三人で穏やかに生活出来る。

『もう駄目だよハルちゃん。幾らパパでも傷ついちゃうよ』

「あの親父に傷を付ける方法があれば、教えて欲しいけどね」

『……………核爆弾くらいかな』

たっぷり時間を掛けて答えた菜月。それが妙にリアリティを感じさせる。

ハルは慌てて話題を変える。

「で、でもどうして親父が帰れなくなったの？」

『パパのお仕事なの。海外赴任が決まっちゃって、このまま着任する事になっちゃった』

「親父の仕事って、何だっけ？」

『正義の味方よ』

嬉しそうな菜月の声。きっと受話器の向こうでウインクでもしてるに違いない。

御堂家では何故か冬麻の職業が秘密だった。

小学校の課題で親の職業を聞いた時も、「正義の味方だ」と煙に巻かれてしまった。

それがハルだけなら気にしなかったのだが、秋乃にも同じ対応だった。

菜月に聞いても同じ。どうやら身内にすら隠さなくてはいけないルールがあるのだろう。

この年になり冷静になって考えれば、ある程度の推測は出来る。

恐らく公には出来ない……平たく言えば堅気でない仕事なのだろう。

今更追求する気もないが。

「まあそれは良いとして、だ。帰れないのは親父だけだろ。二人は何時帰ってくるの?」

「?? 何言ってるのよ。パパが帰らないなら、私も帰らないわよ」

「……………ホワイ?」

「だって、パパ一人海外に残すのは可哀想でしょ」

「俺は今一人残されてますが……、とハルは思わずにいられない。」

「だからハルちゃんは、そのまま一人暮らしを続けてね」

「い、いや。ちょっと待って」

「ちゃんと仕送りはするから安心して」

「そうじゃなくて、秋乃はどうするんだよ」

「秋乃ちゃんは高校の寮に入る事に決まったわ」

既に手回し済みらしい。

「親父が良く納得したね」

「勿論散々一緒に暮らすってごねたけど、女子高の寮なら安心だっ

て最後は納得したわ」

「秋乃は?」

「ハルちゃんと暮らすってずっと言ってるのよ。まあ何とか説得してみるわ」

是非頑張って欲しいものだ。

もし失敗すれば、ハルの命は非常に危険なのだから。

「……………はあ」

「どうかしたの?」

「いや、この間まで一緒に暮らしてた家族が、急にバラバラになったからさ……」

「そうね。でもずっとじゃないわ。パパも私もいずれ日本に戻って

くるから』

「分かってるよ。俺も何時だってガキじゃないんだから」

『頑張つてね、ハルちゃん。電話は通じる国だから、何かあったら連絡頂戴ね』

「うん。そつちも何かあったらよろしく。じゃあ身体に気を付けて」
通話を終えたハルは、大きく息を吐いた。

怒濤の展開に頭が着いていかず、畳の上に大の字に寝ころんだ。
目に優しい光を放つ蛍光灯を見つめながら、ぼんやりと考える。

家は完成した。

ただそこに住む家族は居ない。

両親は海外に、妹は学校の寮に。

そして自分は、この一人暮らしを続ける。

急には気持ちの整理が出来ないが、今の生活が変わる訳でもない。
ハピネスのバイトを続けていれば生活費も何とかなるだろう。

「……まあ、やるしかないか」

小さく拳を握り、ゆっくりと立ち上がる。

まず最初にすべき事は決まっている。

いい加減風呂を沸かそう。

ハルの一人暮らしは、無期限の延長戦へと突入したのだった。

始まりは唐突に、そして理不尽に（後書き）

少しだけ話に展開がありました。

のんびり少しずつ話を進めて参ります。

投稿ペースももう少し上げていきたいと思っています。

まだ序盤と言うこともあり、コメディ成分が控えめですが、話が進んでいけば馬鹿成分が増していくと思います。

これからお付き合い頂ければ幸いです。

小話へハルとローズ（前書き）

ハピネス事務所でのちょっとしたやり取り。

小話へハルとローズ

便利屋八ピネスの事務所。

「うーん」

ハルはアゴに手を当てながら、真剣に悩んでいた。目の前には様々な依頼が張り出された掲示板。まあつまりは、どれを受けようか吟味中という訳だ。既に十分はそうしていただろうか。

結論は出ないまま、時間だけが過ぎていく。

そんなハルの背後から、

「あらあハルちゃん。何を悩んでるのかしらあ？」

野太い声がかげられた。

「あ、たけひ……………ローズさん」

「もう他人行儀ねえ。呼び捨てで良いわよお。ローズってえ」

「いやそれは……………この先輩ですし年上の人を呼び捨てというのは」

「本人が言ってるんだしい、良いじゃないのお。ねえ、お・ね・が・い」

「うわああ、分かりました、分かりましたから。首筋に息を吹きかけないで下さい」

全身に浮き出た鳥肌を振り払うように、ハルは身体をよじる。

「呼び捨ててくれるわよねえ？」

「……………分かりました。ローズ」

「敬語も止めてよお。ここでは仲間なんだしい」

「流石にそれは……………わ、分かりまし……………分かったよ」

ため口のハルに満足げに頷くローズ。

「どうやら対等な関係を望むタイプのようなだ。」

未だ少し抵抗はあるが、郷に入っては郷に従え。ハルは友人として接することに決めた。

「それで何を悩んでたのお？」

「あ、うん。どの依頼を受けようかと思って……」

ハルはチラリと掲示板へ視線を向ける。

「ふう〜ん。仕事の内容とかあ、報酬とかに何か要望があるのかしらあ？」

「そんな贅沢は無いよ。ただ、この間ちよっと痛い目を見てね」

少しだけ顔を引きつらせてハルは言った。

三日ほど前だろうか。

庭の雑草取りで報酬が五万円。あまりにも美味しい話に飛びついてしまったのだ。

意気揚々と向かった家は大層な豪邸。

当然庭もそれに比例して広く、作業を終えるのに半日以上掛かった。

翌日は極度の筋肉痛に襲われ、大学を泣く泣く休む羽目に。

それ以来依頼はしつかり吟味してから受けようと、固く心に誓ったのだ。

「なるほどねえ。確かに新人さんは引つかりやすいかも」

「だから依頼の内容に対して報酬が適切かどうか、吟味してる所なんだ」

実際雑草取り何かは数千円が妥当。何万円なんてどう考えても貰。それを頭に入れながら、自分でも出来そうな依頼を選んでいく。

「……これかな」

張り出された依頼の中から、一枚の依頼用紙を手取る。

「ご近所のドブ攫い手伝い。拘束時間は数時間。報酬もそこそこだ。なかなか珍しいのを選んだわねえ」

「ん、そうかな？」

「そう言った依頼はあまり人気無いのよお。出来ればやりたくない仕事って奴ねえ」

「人がやりたがらないから仕事になるんだろ。何言ってるんだか」

さらりと言い放つハルを、ローズは珍しいものを見るように目を見開く。

その驚きの表情は、次第に柔らかな笑みへと変わっていった。

「……うふふ、私ハルちゃんの事気に入っちゃったわあ」

「そ、そうかい？」

「色々な意味で、ねえ」

ニヤリと口元に笑みを浮かべたローズに、ハルは少しだけ顔を引きつらせる。

どんな意味か聞くのは自殺行為に他ならないだろう。

ならやるべき事は、可及的速やかにこの場を離脱することだ。

「じゃ、じゃあ俺はこの依頼に行くから」

「あら残念ねえ。今度ゆっくりお話ししましょうねえ」

「ははは、そうですね。機会があれば……」

曖昧な笑みを顔に貼り付けたまま、ハルはローズから距離を取る。そのまま事務員に声を掛け、急ぎ足で事務所を後にするのだった。

小話へハルとローズ（後書き）

本当に小話です。

特に山も落ちも無いですが、日常風景と言いつつ、

男嫌いを治しましょう(1)(前書き)

ハルに用意された依頼。

それは非常に厄介なもので……。

男嫌いを治しましょう(1)

それは、肌寒いある日の事だった。

いつものように八ピネスの事務所にやってきたハル。

そしていつものように掲示板の依頼を吟味していると……。

「?? 何だこれ？」

張り出された一枚の依頼用紙に、思わず首を傾げた。

【急募】

依頼内容：治療の協力

受諾資格：見た目が男らしくなく、耐久力と忍耐力のある男性

依頼期間：頑張り次第(最短一日〜最長ですつと)

成功報酬：要相談

追記：ハル君にピッタリだと思います。是非受けて欲しいです。

明らかに他の依頼とは毛色が違っていた。

何というか、非常に抽象的な内容で具体的な事が何も書いていない。

それ以前に名指しで指名とはこれ如何に？

「あらハル君。早速その依頼に目を付けるとは、流石ですね」

困惑するハルの背後から声が掛けられる。

ゆっくり振り返ると、そこには微笑みを浮かべた千景が立っていた。

「千景さん……これ一体何なんですか？」

「見ての通り緊急の依頼です。ハル君以外に適任者が居ない、ね」

「あのーどう考えても怪しいので、パスする方向で検討してますけど」

「別に構いませんよ」

予想外の答えだった。

てつきり無理矢理押しつけられると思っていたのだが。

「私達は依頼を提示するだけ。依頼を受けるかどうかはハル君が決める事ですから」

「そ、そうですか。じゃあ今回は見送りと言うことで……」

「ただ」

「……ただ？」

「いえ、ただこの依頼人は私なんです」

嫌な汗がハルの頬を伝う。

「勿論断るのも自由ですけど……」

笑顔で圧力を掛けてくる千景。

言葉とは裏腹に、断ったらどうなるか分かってるな？ と暗に告げている。

「話くらいは聞いてくれたら嬉しいな、と思ったりするわけですね」

「……………はい」

断ることなど出来るはずがない。

ハルは小さく頷くのが精一杯だった。

「それで、俺にピッタリの依頼って何なんです？」

ソファアの置かれた応接スペースに移動したハルと千景。

手元のお茶を啜りながら、ハルは尋ねる。

「実は奈美の事なんです」

「奈美？ ああ、早瀬の事ですか」

一瞬誰のことか分からなかったが、直ぐさま隣室の少女を思い出す。

そう言えばあれから一度も遭遇していないような気がする。

「ええ。あの子が男性恐怖症なのは……知ってますね」

「そりゃまあ」

いきなりぶん投げられ、床に叩き付けられたのだ。忘れるはずもない。

「……なるほど。話が見えてきましたよ」

「話が早いのは助かります。答え合わせをしても？」

「俺にあいつの男性恐怖症を治せっていうんでしょ？」

「グッド。補足するなら、恐怖症を治す手助けをして欲しい、と言ったところでしょいか」

千景は満足げに頷きながら、ハルの言葉を肯定する。

口に含んだお茶が一気に渋くなった気がした。

「えっと千景さん。聞きたいことがあるんですけど」

「答えられることなら、お答えしましょう」

「まず、何で俺を指名したんですか？」

「条件に当てはまると言うのもありますが……一番は可能性ですね
千景の言葉にハルは首を傾げる。

「どうもハル君はあの子にとって、普通の男と違う存在のようです
思い切り投げられましたけど……」

それも意識を失うほど強く。

「あの子にとってはギリギリまで手加減してました。これは初めてのことです」

「あれで……ですか？」

「昔不用意にあの子をナンパしようとした男が居まして……」

「まあ外見は良いですからね。それで？」

「二度とナンパが出来ないような顔になりました」

ゾツと背筋が凍った。

「あの子とは長い付き合いですが、初めてです。男を攻撃するとき
に手加減したのは」

「……よく今まで警察のご厄介にならなかつたですね」

「まあ、まだ未成年ですから。日本の法律は子供に甘く来てます
ので」

さらりと危険な発言をする千景。

どうやらハルが思っていた以上に、壮絶な過去があったようだ。
「そんな訳で、ハル君なら何とか出来るのではないかと思ったので
す」

「俺に死ねと？」

「成功すれば大丈夫です。正に生か死かです」

言葉とは裏腹ににこやかな笑みを浮かべる千景。

だが纏った空気は真剣なまま。

間違いない。

この人は本気で言っている。

そして同時に悟る。

この依頼は今から断ることなど、出来はしないと云うことを。

「ハル君を指名した理由は以上です。他に何かありますか？」

依頼を断れない以上、やるべき事は一つ。

何としても成功して我が身を守るだけだ。

その為にもここでの情報収集は重要だ。

「えっと、あいつが男性恐怖症になった原因とか……」

「それは直接本人に聞いてください。プライバシーに関わりま
すの
で」

正論だ。理不尽ではあるが。

情報収集は第一歩を踏み外した。

「個人的な情報も同様の理由でお見せできません。申し訳ないです
が」

情報収集は第一歩を踏み出す前に終わりを告げた。

「手段は全てハル君に任せます。お願い出来ますか？」

- 1．分かりました。
- 2．何とかやってみます。
- 3．頑張ります

「な、何て根性のない選択肢だ……」

「どうかしましたか？」

「いえ、こつちの話です。えっと……2かな」

「引き受けて貰えるんですね。ありがとうございます」

ありのまま今起こった事を言う。

選択肢を頭に思い浮かべた。でも声に出してはいない。

ひよっとして……。

「嫌ですよ。さとりじゃあるまいし、心なんて読めるわけないじゃないですか」

本当ですか？

「ええ。勿論です」

……まあいい。喋る手間が省けて儲けもの、と思おう。うん、それがいい。

「ポジティブな人は好きですよ」

微笑む千景に、ハルはこれ以上深く考えることを止めた。

かくしてハルの、「奈美の男性恐怖症を治しちゃおう大作戦」は幕を開けるのだった。

男嫌いを治しましょう(1) (後書き)

タイトル通り奈美の話です。

これからはキャラクター紹介編に入ります。

予定している新キャラも順次登場させていく予定です。

と言いますか、彼らが登場しないとなかなか馬鹿話をやり辛いので。

一通り登場人物が揃ってからは、ようやくスタートが切れます。

投稿ペースを少し上げて参ります。

これからもお付き合い頂ければ幸いです。

男嫌いを治しましょう(2) (前書き)

千景に難題を押しつけられたハル。

難攻不落の要塞に、彼はどう挑むのか？

と言つとSF物っぽくなるから不思議です。

男嫌いを治しましょう(2)

まずは話し合うことが必要だ。

何か解決への糸口が見つかるかも知れない。

「とは言え、あいつが素直に俺と話してくれるとは思えないけど」

一人ごちながらハルはアパートへと戻った。

足を止めたのは自分の部屋、ではなくその隣。奈美の部屋だ。

少しだけ躊躇った後、チャイムを押した。

「はい。今開けますよ」と

バタバタと足音が近づき、ドアが開かれる。

中から顔を見せた奈美はハルを見るなり、

「……何か用？」

警戒心を隠そうともしない表情で尋ねてくる。

さて、どうやって切り出したものか。

「えっと、実は千景さんから依頼を受けて」

「……………その事なら聞いているわ」

「聞いているって？」

「私のアレを治すのに協力してくれるんでしょ」

「その通りだけど」

少し予想外だった。

てつきり門前払いを喰らうものだと思っていたが。

「ちょっと意外だな。もっと嫌がるかと思ってたけど」

「私もね、どうにかしたいのよ。藁にもすがる想いってやつね」

「……詳しい話をしたいけど、良いか？」

「ええ。ただこんな場所で話す事でも無いわね。立ち話も何だし」

意外にも本人は乗り気だった。

僅かに。本当に僅かだが光明が見えた気がする。

「そうだな。一応聞くけど、部屋に男と二人つきりってのはどうだ

「？」
「……想像通りだと思っわ」
「オーケー。なら適当な店に行くとするか」
「そうね。準備するからちよつと待って」
第一関門を乗り越えたハルは、奈美と共に近所の喫茶店へと移動した。

「早速話を聞きたいんだけど」
「別に構わないわ」

喫茶店に入った二人は簡単な注文をすると、本題へと入る。

「まず、男性恐怖症になった理由を聞かせてくれ」

「あのね、みんな誤解してるみたいだけど、私別に男性恐怖症じゃ無いのよ」
「はいっ？」

とんでもないカミングアウトだ。

「でも俺を投げ飛ばしたたる？ それに千景さんだって……」

「だから違うのよ。アレは……その……癖なの」

「癖？」

「うん。習性って言うか……条件反射的に攻撃しちゃうの」
まるでゴルゴ13だ。

下手すりゃそれよりも質が悪い。

「何でまたそんな厄介な習性か？」

「詳しくは端折るけど、親のせいよ。そう言う風に育てられたから」
どんな親だ。

「じゃあ男性恐怖症って思われてたのは……」

「近づかれたり触られたら攻撃しちゃうから、そう言うておいた方が安全なの」

「なるほど……」

確かにそれならば説明がつく。

だが状況が良くなったかと言えば、そうでもない。

「私も治そうと努力してるんだけど、全然駄目。だから極力男に近寄らないようにしてるの」

「それはまた……お前も苦労してるんだな」

ハルは目の前に座る少女の評価を改めた。

「だからこれを治す手伝いをしてくれるのは、私にとっても助かるわ」

「まあ最終的にそこに行き着くんだよな。さて、どうしたものかやるべき事は変わらない。」

奈美が男を攻撃しないようにしなくては、依頼は失敗なのだから。

「まずは情報を集めることが必要だな」

「どうやって?」

「……まあ、俺がやるしかないか」

ハルは諦めたようにため息をついた。

早瀬奈美の取扱説明書

- ・ 攻撃するのは男性に限る。女性ならば問題ない。
- ・ 男女の判別は奈美の感覚任せ。男と分かなければ、触ることも可能。

- ・ 男性が半径十メートル以内に入ると、それを察知できる。

- ・ 男性が半径五メートル以内に入ると、臨戦態勢に入る。

- ・ 男性が半径一メートル以内に入ると、攻撃を抑えるのに必死になる。

(その際発汗・赤面・動悸などの状態変化が見られる)

- ・ 男性が半径三十センチ以内に入ると、身体が自動的に攻撃を開始する。

- ・ 攻撃は無意識で行われ、手加減は出来ない。

「……大体……こんな……感じ、か」

「あゝ、大丈夫?」

「頑丈な身体に産んでくれた親（勿論菜月）に感謝してるよ」
ハルは大の字に倒れながら、心配そうに見つめる奈美に答えた。

あれから二人は、市営の体育館にやってきた。

床にマットを敷き詰め、奈美の癖を色々と分析してみた。

結果は上記の通り。

まさに難攻不落の要塞だ。

「予想以上に……手強い」

「何とか抑えようとしてるんだけど、どうしても駄目みたい」

「身体に染みついた習性だもんな。そう簡単に抜けないか」

ようやく痛みが引いてきた。

既に十回以上奈美に投げ飛ばされている。

マットがなければ、最初の一撃で失神KOだろう。

打撃が来なかったのが唯一の救いか。

ハルはフラフラと立ち上がる。

「だけど、こうやって少しずつ慣らして行けば、いずれ治せるはずだ」

癖や習性ならば、時間をかければ矯正することが出来る。

もつとも、かなり気の長い話になりそうだが。

「これからも俺で訓練しよう。マットがあれば怪我もしなそうだし」

「……………」

「早瀬？」

「……………」

「ん？」

「どうしてそこまでしてくれるの？ こんな依頼断ってくれて良いのに」

ハルは奈美の顔を見る。

色々な感情が混じり合った表情。

ハルにはそれが、泣き出しそうな悲しげな顔に見えた。

「どうしてか……。そうだな……。お前が困ってるからかな」

正直に自分の気持ちを告げる。

「別に依頼とか関係なくてさ。困ってる奴がいたら、手を貸したくなるんだよ」

「……………」

「勿論全部の人にそう出来るわけじゃないし、俺は凡人だから出来ることも少ないけど」

「それでも出来ることはやりたい。可愛い女の子が相手なら尚更、な」

最後は少しだけおどけてみせる。

そんなハルを奈美は黙って見つめている。

そして、

「……………ありがとう」

小さな声で呟いた。

ハルの耐久力が限界だったこともあり、今日はこれで終わりにすることにした。

片づけを済ませ、二人でアパートへの帰路につく。

「……………ねえ、本当に大丈夫？」

「な〜に、問題ないさ」

笑顔で答えるハルだが、足腰に大分がたが来ていた。

膝が震え、実は普通に歩くのもきついのだが、そこは男の子。

奈美が責任を感じないように振る舞ってみせる。

結構際どかったが、どうにかアパートに辿り着くことが出来た。

奈美に続いてハルも階段を登っていく。

最後の力を振り絞り、一段、また一段と歩を進める。

先に登り切った奈美が見つめる中、どうにか最後の一段まで登り切った。

ここまで来れば大丈夫。

後は部屋でゆっくり休める。

そんな気の緩みが、命取りだった。

「……へっ？」

思ったよりも高く上がらなかった足は、最後の一段に引つかかる。バランスを崩した身体を立て直すことも出来ず、そのまま後ろへと倒れていく。

ふっと身体が宙に浮く感覚。

思わず手を前に差し出すが、掴むものは何もない。

「ハルっつっ!!」

視界には叫ぶ奈美の姿が映る。

支えを失ったハルの身体は、そのまま階段の下へと……落ちなかつた。

虚しく宙を掴むはずだったハルの手。しかし今、それは確かに掴んでいた。

上から差し出された奈美の手を。

「お、お前……」

「ふんっつっ!!」

驚くハルを余所に、奈美は力を込めてハルを階段の上へと引上げ張る。

重力など何のその。ハルは奈美の隣へと引き上げられた。

「ちよつと、大丈夫なの？」

「あ、ああ。何とか……」

「身体が辛いならそう言いなさいよ。下手したら大怪我したかもしれないじゃない」

強い口調でハルに詰め寄る奈美。

少し涙目になっており、真剣にハルを心配しているのが伝わってくる。

「悪い、迷惑掛けた。お前のお陰で助かったよ……ありがとう」

「べ、別にあんたの為じゃないわ」

顔を赤くしてふいっとそっぽを向く。

「ただあんたが怪我すると、私の特訓に付き合ってくれる人がいな

くなるから……」

「そっか……でもひよっとすると、もうそれは必要ないかもな」
「どういう事、と奈美は首を傾げる。」

ハルは視線を腕に向けた。

奈美の手はハルを引つ張り上げたその時から、ずっと握りっぱなしだ。

「男の手、触れたな」

「ど、どうして？」

驚いたように目を見開き、自分の手を見つめる奈美。

「人を助けようとする本能が、男を攻撃する習性に勝ったって事だろ」

人間非常時には無意識の行動が出る。

習性と本能、同じ無意識の行動で本能が勝ったのだ。

「直ぐに離して。また投げ飛ばしちゃう」

「その心配は無いと思うぞ。本当にそうなら、もうとっくにやってるだろうし」

「……………」

「必要なのは切っ掛けだったな。一度踏み越えちゃえば、案外どうとでもなるもんだ」

「じゃあ……………」

「まだ完璧にじゃ無いけど、いずれ習性だってコントロール出来る筈だ」

ニヤリと笑ってみせるハル。

正に怪我の功名というやつだ。

奈美は信じられないとばかりに、暫し呆然としていたが、

「……………ありがとう！」

やがて喜びを実感したのか満面の笑みでハルに抱きついた。

「お、おいちよっと待てって」

「ありがとう。本当にありがとう」

「分かったから。少し落ち着いて……………」

「私嬉しい。これで胸を張って高校生になれるわ」

瞬間、ハルは硬直した。

今何と言った？

「……お前、まさかとは思うが、今中学生………なのか？」

「え？ そうよ。この春から高校生になるの」

不味いことになった。

ハルよりも背が高くハピネスでバイトをしている。

勝手に同じ年くらいだと思いきんでいた。

だが、実際は中学生。

見た目はともかく、二十歳の男が十五、六の女の子と抱き合っていたら……。

間違いなく問題だ。

「……頼む、離れてくれ。俺の為に」

「あ、ごめん。迷惑だよな、私みたいな子に抱きつかれたら」

「いやそうじゃなくて……あーもー」

素直に理由を話すわけにはいかない。

かといって無下に突き放すわけにもいかない。

ハルはこれから十分ほど、生殺しの時間を味わうことになるのだ
った。

男嫌いを治しましょう(2) (後書き)

何とも呆気なく解決してしまいました。

まああんまり詰め込むのもアレなので、大分省略しました。

次はこの依頼の後日談となります。

果たして奈美の男嫌い、もとい癖は治ったのか？

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

男嫌いを治しましょう(3) (前書き)

今回は後日談となります。

依頼の報告を千景にするハル。

果たして無事に達成できたのか。

男嫌いを治しましょう(3)

「……と言つ事です」

「なるほど、少し驚かされました」

「男性恐怖症じゃ無かったことですか？」

「それもありますけど……まさかこんなに早く解決してくるとは思いませんでした」

「まあ、幾つかの偶然が重なりましたから」

ハルは苦笑いで答える。

依頼を受けてから一週間後。

ハルはハピネス事務所に向き、依頼の報告をしていた。

予想外のスピード解決に、流石の千景も驚きを隠せないようだ。

「それにしても、早瀬の家にも困ったものです」

「確かに。娘を守るためとは言え、男性を無条件で攻撃する様に仕込むなんて」

「まあ、あの父親ならやりかねませんね」

「知り合いなんですか？」

「少々付き合いがありましたので」

千景は呆れたように言うと、コーヒーを啜る。

それに合わせるように、ハルも手元の緑茶を傾ける。

「では確認しましょう。奈美のアレは治りましたか？」

「……定義にもよりますが、少なくとも男を無意識で攻撃する事は無くなりました」

あの日から、ハルは奈美の訓練に奔走した。

まず男と近づいても大丈夫なように、繁華街を歩き慣れていく。

二日かけて、男が近づいても攻撃を抑えられるようになっていった。

その後は触られても平気にするため、ハピネスに男性所員を借りる依頼を出した。

ハルは問題ないが、流石に他の男は抵抗があったらしい。かなりの数の犠牲を出しながら、訓練は続けられた。

そして一週間が経った頃には、ほぼ完全に条件反射を抑えられるようになっていた。

「先程、私の方でも確認しました。確かに男性に触れられても攻撃しませんでしたね」

「……俺の報告では信用出来ませんでしたか？」

「気を悪くしたのならごめんさい。どうも用心深い性格です」

「別に気にしてませんよ。でもこれでハッキリしましたね。奈美はもう普通の女の子です」

「ええ。私の依頼は見事完了となります。ご苦労様でした」

千景の言葉に、ハルはホッと胸をなで下ろす。

色々あったが終わりよければ全てよしだ。

「それにしても……ハル君もなかなかやりますね」

「？ 何がです？」

ニヤリと笑いかける千景。

「あの子の為に一週間付きっきりだったんでしょ？ 大学があるのに」

「大学は今冬休みですから。精々ゼミの講義がたまにあるくらいですよ」

「それに、いつの間にかあの子の事名前ですすし」

「……訓練を通じて打ち解けたんです。友達を名前で呼ぶのは普通ですから」

「友達、ね〜」

嫌らしい笑みを浮かべる千景。

どうにもマズイ方向へ話が向かっているようだ。

ここは流れを変える必要がある。

「それよりも、この依頼の報酬ってどうなってるんです？」
「確か成功報酬は要相談となっていたはず。」

この一週間他の仕事をしていなかったの、そこそこの額を期待したい所だが。

「勿論ありますよ。色々考えたんですけど……これなんかどうでしょう？」

千景はそつとハルの前に一枚の写真を差し出す。

一体なんだとそれに視線を向けて、ハルは硬直した。

「よく撮れてるでしょ？」

「な……ど、どうして……」

「駄目ですよハル君。壁に耳あり障子に目あり、何時でも周囲に気を配らなければ」

「ずっと……見張ってたんですか？」

「さて何の事やら。とにかく今回の報酬は、この写真で如何ですか？」

「俺がこんな脅しに屈するとも？」

「ご家族は欧州旅行中らしいですね。今は確か……イギリスにいるそうですよ」

「報酬、確かに受け取りました！」

ハルは全力で頭を下げて写真を懐に仕舞い込んだ。

もしこれが家族の目に触れたら、と言うより秋乃の目に触れたら、洒落にならない。

下手をしなくても生命の危機が訪れる。

「はい、では確かに。これからも頑張つて働いて下さいね」

「……努力します」

千景の悪魔のような微笑みに、ハルは力無く頷くしか無かった。

「……まだまだ甘いですね」

ハルが事務所を出ていった後、千景は自分の執務机で小さく呟く。引き出しを開けると、そこには一つのネガが入っていた。

「写真とネガはセットで受け取るのが定石ですのに」
取り引きする際、重視するのは寧ろネガだ。

ネガがある限り写真など幾らでも現像出来るのだから。

「まあこれを使う機会なんて無いとは思いますが、一応ね」
用心深い性格だとは自他共に認めている。

役に立つか分からないが、手元に置いておきたくなくなってしまっただ。

「それにひよつとしたら、大切な思い出になるかも知れませんし」
そつとネガを蛍光灯に透かしてみる。

うつすらと映し出される光景。

そこには、ハルと奈美が抱き合っている姿がハッキリと写っていた。

こうして「奈美の男性恐怖症改め、条件反射克服」は無事解決した。

その為に払った犠牲が予想以上に大きかったことを、ハルはまだ知らないのだが。

男嫌いを治しましょう(3) (後書き)

奈美がメインの話なのに、最後にまさかの未登場。

ひとまず、これで奈美の条件反射は無事に解消されました。

他のキャラと絡ませ易くなって助かりました(本音)。

小話を一つ挟み、次のキャラ紹介へ入ります。

投稿ペースは少々不定期になっています。

予定しているキャラが全部登場するまでは、一気に行きたいと思いません。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

小話へ奈美って何者？（前書き）

ハピネス事務所での、ちょっとしたやり取り。

小話〈奈美って何者?〉

それは、とある日のハピネス事務所。

「あの〜千景さん、ちょっと聞きたいんですけど」

「はい、何でしょう」

「あいつ……奈美って何者なんです?」

ハルの問いに、千景は少し首を傾げる。

「何者って、この春高校生になる早瀬奈美ですよ」

「そう言う事ではなくて……」

「……何かありましたか?」

「ええ。実は先日、こんな出来事がありました」

数日前、ハルのアパート。

「御堂さん、部屋は二階ですよね?」

「そうですね、大丈夫ですか?」

「ははは、一応プロですから。おい、準備良いな?」

「何時でもいけますよ」

頼りがいのある屈強な男二人。

彼らはトラックから大きな段ボールを降ろす。

「よつと……」

「バランス気を付けて」

ハルよりも二周りほど大きな段ボールが、二人がかりで担ぎ上げられた。

そのままゆつくりと運搬されていく。

二人を先行し、ハルは進路を確保するために階段を駆け上がる。
すると、

「あらハル。どうしたの？」

丁度外出するところだったのか、奈美が部屋から出てきた。

「冷蔵庫が壊れたから買い換えただよ。今運んで貰ってる所なんだ」

「へへ、どれどれ？ うわ、大きいの買ったのね」

「予定外の出費だよ。店員の話術に乗せられて、気づいたら買った」

頭をポリポリと搔きながらハルは答える。

初めは一人暮らしに充分な、手頃なサイズを購入予定だった。

だが気づいたら、大家族対応かと言っくらい巨大なものを選んでいたので。

恐るべき、店員のセールストーク。

「それにしても、運ぶの大変そうね」

「このアパートは階段が狭いからな。ちよつと厳しいか」

少し手伝うか、とハルが腕まくりをすると、

「ねえ、よければ私が手伝おうか？」

奈美が笑顔で提案してくる。

気持ちには有り難いが、流石に女の子に力仕事を頼むのは忍びない。

「気持ちだけ貰っておくよ。こう言つのは男の仕事だからな」

「ハルつて、力仕事得意？」

「……………得意、とは言えない」

痛い所を突いてくる。

華奢な外見相応に、決して力は強くない。

寧ろ弱い。

「なら遠慮しないで。私結構得意なのよ」

奈美はグツと親指を立てると、冷蔵庫運搬係の二人へと駆け寄った。

そのまま二言三言言葉を交わして、

「……………嘘だろ？」

ヒョイツと片手で冷蔵庫を肩に担ぎ上げた。

まるで中身が何も入っていないように、軽々とだ。
啞然とするハルと運搬係を余所に、軽快なステップで階段を登り
きる。

「これ部屋に運ぶのよね？ 鍵は開いてる？」

「あ、ああ。案内する」

動揺する心を必死に押さえながら、ハルは奈美を先導する。

結局設置までやって貰ってしまった。

「じゃあ私出かけるから、ばいばい」

そして疲労感を全く感じさせずに、奈美は元氣一杯に外出して
いった。

「……御堂さん、あの子は一体？」

「忘れましょう。俺は何も見えていません。貴方も何も見なかったと
言うことで」

自分に言い聞かせるようにハルは告げ、配送係の人達を見送った。
まるで夢のような、悪夢のような出来事だ。

ただ部屋に設置された冷蔵庫が、嫌でも現実だと言うことを突き
つける。

「本当に……一体何者なんだ？」

呟きに答える人はいない。

「と、言うことがあったんです」

「なるほど……大体理解しました」

千景は得心がいったと頷いてみせる。

「ただ、私がお話するのはフェアではありませんね」

「……………」

「気になるなら本人に聞くと良いでしょう。今のあの子なら、恐ら
く答えてくれる筈です」

「分かりました。お時間取らせてすいません」

「構いませんよ。……あ、そうそう、一つだけ忠告しておきます」
立ち去ろうとするハルに、千景が思い出したように声を掛ける。

「あの子は精神的にまだ幼いので、暴走しないよう注意して下さい」

「暴走つて、キレるとかですか？」

「理性のたがが外れると言う意味ですので、その認識でも間違いありません」

「そりゃ気を付けますけど、そんなに大変なんですか？」

妙に真剣な千景の顔が気になり、ハルは聞いてみる。

「私の知る限り、一度だけ大暴走をしたことがあります。初号機もビククリする位に」

「………想像したくないですね。で、どうになりました？」

「鎮圧しましたよ。警察・自衛隊・某国特殊部隊などあらゆる手段を用いて」

「本気で気を付けます」

「本気でお願いします。ミサイルもタダじゃ無いですから」

その言葉が、ある意味早瀬奈美と言う人物を何よりの確に表現したのかもしれない。

早瀬奈美。

この春から高校生になる女の子。

ハルにとっては、それ以上でもそれ以下でもない。

今は、まだ。

小話へ奈美って何者？（後書き）

オチは特にありません、すいませんでした。

基本的に一話完結の話を投稿していく予定ですが、特に短い物はショートショートのように小話として投稿します。

次からは、また別のキャラにスポットを当てた話になります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

女医さん求めて三千里？（1）（前書き）

いつものようにハピネス事務所を訪れたハル。
そんな彼にある頼み事が……。

女医さん求めて三千里？（1）

近づいた春が遠ざかり、冬の寒さがぶり返したある日。

ハルはハピネスの事務所にやってきた。

「こんにちわー」

事務員の人と挨拶を交わし、さて依頼を選ぶかと思った時だった。

「あ、ハルさん。ちよつと良いですか？」

「はい、何でしょうか鈴木さん」

声を掛けてきた女性事務員の鈴木に向き直る。

事務所ではそこその古株で、ハルも色々と仕事のイロ八を教わっていた。

とは言え今回のように向こうから声を掛けられるのは珍しい。

何事かとハルは少し身構える。

「ちよつとお願ひしたいことがあるんですけど」

「丁度手が空いてるので構いませんが」

「ハルさんって運転免許持ってますよね？」

「ほとんどペーパーですけど、一応は」

家に車はあるが、冬麻が運転させてくれない。

何でも男なら自分の金で買えとの事らしいが、明らかに嫌がらせだろう。

それから特に必要でもなかったので、実際車に乗ったのは数える程だ。

「実は車で行って欲しいところがあるんです」

「別に良いですけど、俺車持ってないですよ」

「社用車があるのでそれは大丈夫です」

お膳立ては全て整っている。

ノロノロ運転なら、それほど危険もないだろう。

それに折角自分を頼ってきているのだし、断るのもなんだ。

「分かりました、引き受けます。で、何処に行けば良いんですか？」
「ああ助かります。えっとですね……」

鈴木は嬉しそうに言うと、ハルにメモを手渡す。

「……病院？」

「ええ。そこに人を迎えに行つて欲しいんです」

「患者さんですか？」

「いえ、うちの職員です。その病院から来た依頼を受けに行つて
るんですよ」

「へえ、どんな依頼なんです？」

「難しいオペの代行です。詳細は言えませんが」

「つて事はドクターですか？」

「その通りです。その筋では名の知れた名医なんですよ」

どうしてそんな人がハピネスで仕事をしているのだろうか。

ふと疑問に思ったが、今考えても仕方がない事だ。

「依頼は無事終えたいらしいですが、いざ帰ろうとしたら……」

鈴木が窓へと視線を移す。

朝からやけに寒いと思っていたが、どうやら雨が降り出したよう
だ。

「なるほど。事情は把握しました」

「ご理解頂きありがとうございます。柚子さんには私から連絡しま
すので」

「柚子さん？」

「あ、ごめんなさい。そのドクターの名前で、和泉柚子さんしづみ ゆずと言
います」

名前から察するにどうやら女性らしい。

ならば尚更雨の中を歩かせるわけにはいかないだろう。

「えっと、俺は病院に行つてどうすれば良いですか？」

「ロビーで待つように伝えますので、そこで合流して下さい」

「相手は俺のこと知りませんか？」

「ハルさんの特徴を伝えておきます。柚子さんは……多分見れば直

ぐ分かると思いますよ」

どこか含みのある鈴木言葉。

まあ気にしてもしょうがないし、こう言っている以上それを信じるしかない。

「じゃあ待たせるのも悪いですから、行ってきますね」

「よろしく願います。車は下のガレージにありますので」

ハルは車の鍵を受け取ると、事務所を足早に後にした。

「ハルさんが丁度来てくれて助かったわ。帰ってきたら良いお茶菓子でもご馳走しなくちゃ」

「あの〜鈴木さん」

「何かしら？」

声を掛けてきた事務員の田中に問い返す。

「ハル君に柚子さんの説明しなくて、本当に大丈夫ですか？」

「説明不要でしょう。柚子さんは一目で分かる外見だし」

「いえ、だってハル君は多分普通に女医さんだと思ってますよね」

「……………あっ」

言われてようやく気づいた。

確かに和泉柚子は特徴的な外見をしている。

百人の女医さんがいても、真っ先に見分けられる程に。

それ故彼女の姿と女医さんを結びつけられるかという……………。

「ま、まあ大丈夫でしょう。柚子さんからハル君に声を掛けて貰え

ば」

「あの柚子さんですよ。自分から声を掛けれるでしょうか？」

「……………お願いするしかないわね。勇気を振り絞ってと」

気のせいかな、雨音がさつきよりも強まった様に感じられた。

女医さん求めて三千里？（1）（後書き）

と言うわけで新キャラ登場の話です。

前作「悪の組織はじめました」と同姓同名ですが、

全くの別キャラとして書いております。

続けてお読みの方（いますかね？）は違和感を覚えるかもしれませんが、

んが、
ご容赦下さい。

ペーパードライバーのマニュアル車……絶対乗りたくないですね。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

女医さん求めて三千里？（2）（前書き）

鈴木からの頼み事を受け、ハルは病院へと向かう。
その前に立ちほだかるのは、まさかのマニュアル車だった……。

女医さん求めて三千里？（2）

ハルは悪戦苦闘していた。

用意された社用車は、ペーパードライバーに優しくないマニュアル車だったのだ。

一応免許はマニュアル車で取っていたが、運転したのは教習所以来。

必死に教習を思い出す。

「えっと、これがクラッチで……アクセルとブレーキ……ギアをこ
うして……」

絶対に運転手が言っではいけない単語を連発。

同乗したくない車ナンバーワンだろう。

それでも過去に運転したことがあるのは、やはり強い。

数回のエンストを繰り返して、ようやくハルは車を発車させるこ
とが出来たのだった。

降りしきる雨の中を、法定速度にすら達さない速度でハルは進む。
運良く信号で止まる事がほとんど無かったので、エンストも起こ
さなかった。

実に二十分ほど時間を掛け、ようやく目的の病院へと辿り着いた。

「……はあ、ようやく出来た」

バック駐車に予想以上に時間を取られてしまった。

両側が空車のスペースを狙い、十回以上のトライで何とか無事駐
車成功。

これまでに大分時間がかかっている。

相手を相当待たせてしまったに違いない。

ハルは急ぎ足で病院の正面入り口に向かい、ロビーへと入ってい

った。

待合いロビーは多くの人で賑わっていた。
診察の順番を待つ人。支払いや薬を待つ人等々。
老若男女がそこにいた。

ハルはロビーをぐるっと見回して、

「……………うん、鈴木さん、無理です」

速攻で女医さん探しを諦めた。

白衣を着ていればまだ良かったのだが、仕事が終わりに帰るのなら当然私服だろう。

しかもハルは相手の姿を知らない。

正直お手上げだった。

「まあ相手は俺の事を聞いてるはずだし、ここで待てば良いか」

出入りの邪魔にならないように、ハルは入り口の脇に立つ。

その内向こうから声を掛けてくれるだろう。

だが、甘かった。

十分、二十分、三十分と時間が過ぎていく。

しかし相手は一向に現れなかった。

「俺が来るのが遅かったから、先に帰っちゃったのかな？」

そんな気がしないでもない。

ならば一度事務所に確認すべきだろうか。

仮に帰って無くて、もう一度相手の容姿を確認すべきだ。

「携帯……………は使用禁止だし、その公衆電話で」

ロビー脇に設置してある公衆電話に向かおうとして、ふと気が付いた。

電話の更に奥、少し離れた曲がり角から、一人の少女がこちらを見ているのだ。

秋乃や奈美よりも更に幼い外見。

勿論、ハルの知らない顔だった。

「気のせい……………じゃないよな」

ハルは入り口脇の壁に寄りかかっていた。後ろの人を見てます、と言うオチは無いはずだ。そうなる疑問が出てくる。

何で自分を見ているのだろうか。

「……………うん」

チラリとズボンのチャックを確かめるが、大丈夫だった。

服装も特におかしな所は無いし、ますます持って訳が分からない。暫し考え、ハルが出した結論は、

「気にしない事にしよう」

無視することだった。

興味本位で見ているだけかも知れないし、気にしていても仕方ない。

ハルは少女の視線を感じながら、公衆電話の前へと移動する。

「えっと……………げっ！」

運悪くその電話は硬貨が使えない、テレフォンカード専用だった。携帯全盛期のこのご時世、テレカなど持ち歩いていない。

「参ったな。仕方ないけど、外に出て携帯で……………ん？」

受話器を置いたハルの元に、先程の少女が近づいてきた。

そのまま無言で、テレフォンカードを差し出す。

「えっと、これ貸してくれるのかな？」

コクコク、と頷く少女。

言葉こそ発しなかったが、どうやらハルを助けてくれるようだ。

「ありがとうね、助かるよ」

「あ……………」

感謝の言葉を伝え、少女の頭を撫でる。

少女は驚いた様子だったが、嫌がる素振りは見せなかった。

「じゃあ有り難く使わせて貰うよ。えっと番号は……………」

ピポパ、と八ピネス事務所の番号をプッシュする。

数コールの後、

『はい、こちら便利屋八ピネスでございます』

都合良く鈴木が電話に出た。

「あ、ハルですけど」

『ハルさん。今どんな状況でしょうか？』

「病院に到着してるんですが、相手が見つかりません」

『ごめんなさい。柚子さんに声を掛けるようお願いしたんですけど……』

どうやらまだ相手は事務所に戻っていないようだ。

「相手の特徴を教えて貰って良いですか？」

『勿論です。えっとまず女性で、背が低いです』

「背が低い……俺くらいですか？」

『もつとです。大体……140cm位でしょうか』

それは小さい。

ハルよりも二十センチ程低い事になる。

「俺の想像してた女医さんとは大きく違いますね……」

『ごめんなさい。すっかり私の感覚で説明してしまつて』

「まあ別に良いですよ。それで他にはありませんか？」

『髪は灰色で、小さなポニーテールにしてると思います』

「……………」

ハルはふと言葉を止める。

そして視線をまだ隣に立っている少女に向けた。

身長、髪型、共に鈴木の情報と一致している。

『ハルさん？』

「一つ聞きます。その柚子さんって、人と話すのとか苦手だったりします？」

『あらくよくご存じですね。はい、とってもシャイな性格なんですよ』

「……………」
相手を確認できました。これから事務所に戻ります」

ハルはそれだけ告げて、受話器を置いた。

そして身体を少女の方に向ける。

「ハピネスの御堂ハルです。和泉柚子さんですか？」

「……………」
はい」

小さな、本当に聞こえるギリギリの声で少女は返事をしたのだっ
た。

女医さん求めて三千里？（2）（後書き）

ようやくハルと柚子が出会いました。

少しずつ役者が揃ってきた感じがします。

次で柚子編は完結となります。

少しはハルと打ち解けてくれると助かるのですが……。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

女医さん求めて三千里？（3）（前書き）

ようやく目的の女性と合流できたハル。

後は事務所に帰るだけなのだが、そうは問屋が……。

柚子登場編完結です。

女医さん求めて三千里？（3）

帰りも当然ノロノロ運転。

だが、人生何が幸いするか分からないものだ。

「へえー、じゃあ結構長く働いてるんですね？」

「は、はい。千景ちゃんも八ピネスを作った時から、お世話になってます」

「なら俺の大先輩ですね」

「そ、そんな事……」

恥ずかしげに顔を赤く染める柚子。

どう見ても先輩に見えなかったが、これはこれでアリだと思いついてきた。

ゆっくり運転のお陰で、ハルは柚子と会話をする時間をたっぷり取れた。

最初は会話すらままならなかったが、今ではこの通り。

どうにか軽口を叩けるくらいには、信用して貰えたようだ。

「それにしても、迎えが遅くなってすいません。大分待ったでしょう」

「気にしないで下さい。……私が声を掛けられなかったせいですか」

「まあ、しょうがないですよ。知らない男相手なら、普通は躊躇しますって」

励ますようにハルは返す。

和泉柚子という少女……いや女性は、極度の人見知りらしい。

一度身内、つまり友達や仲間だと認識すれば問題ない。

だが初対面の相手には、どうにも上手くコミュニケーションがとれないのだ。

究極の初見殺し、いやこれは意味が違うか……。

「ひよっとして、直ぐに俺が迎えの人だって気づいてました?」

「は、はい。鈴木さんから、ハルさんの特徴を聞いてましたのでそれを聞いて、ハルはふと気になった事を尋ねてみる。

「因みに、どんな風に聞いてたんですか? 俺はあんまり特徴無いですけど」

「え、そのですね…… 女の子みたいな男の方、と」

「……なるほど。後で鈴木さんとはじっくり話し合う必要がありますね」

「でも直ぐにハルさんって分かりましたし」

柚子さん、それは喜べないです。

「でもでも、ハルさんって本当に女の子っぽいです」

柚子さん、それは追い打ちです。

「ハルさんが実は女の子でした、って言われても違和感ないですし柚子さん、それはとどめです。

言葉の刃というのは、何と鋭いものだろう。

悪意が無い分手加減がない。

ハルのライフはもうゼロなのだが、残念ながら止めてくれる人はいない。

暫くの間、柚子のフォローと言う名の攻撃は続いた。

「……あの、一つ聞いても良いですか?」

「私が答えられる事でしたら」

話題を変えるついでに、ハルは気になっていた事を聞いてみる。

「失礼かもしれないですが、柚子さんはドクターですよ?」

「はい。ちゃんと医師免許も持ってますよ。……そうは見えないでしょうけど」

少し自虐的な笑みを浮かべる柚子。

勿論それは否定しない。

「まあそれは置いておくとして、ならどうしてハピネスで働いてるんです?」

「……と言いますと」

「医者ならもつと良い仕事があるんじゃないかと思ひまして」

ハルのイメージでは、医者というのはかなり貴重な職業だ。

それに鈴木の話だと、柚子はかなり腕の良い医者らしい。

ハピネスで働く理由が思いつかない。

そんなハルの質問の意図を察したのか、柚子は小さくああ、と頷いた。

「私は千景ちゃんと古い友達なのです。働く切っ掛けは彼女からの誘いですね。そして」

柚子は一息つくと、少しだけ寂しそうな顔をする。

「……ハルさんは私を見て、医者だと思えますか?」

「正直に言わせて貰えば、思えません。俺よりも年下に見えます」

「ですよ。自分でもそう思いますし、周りの人もそう思っています」

だから医者として病院などで勤務できない、と柚子は続ける。

「別にそんなの、問題ないですよ」

「じゃあ質問です。ハルさんが重い病気で入院して、手術が必要だとしましょう」

「……………」

「そこで執刀医として現れたのが私だとしたら……………どうです?」

ハルはその情景を思い浮かべて、理解した。

それは確かに無理だ。

どんなに天才だから、腕は一流だと言われても、どうしても納得出来ない。

恐らく執刀医の変更を病院に要求するだろう。

「人は外見じゃないって言いますが、やっぱり大切なんです」

「……………失礼しました」

ハルは素直に頭を下げ謝罪する。

好奇心からした質問が、袖子を傷つけてしまった。

「気にしないで下さい。今はちゃんと医師として働けて、充実しますから」

ニツコリ笑う柚子。

心の芯が強く優しい人だとハルは心底思った。

ハピネスの事務所まで、後少し。

ハルが気を引き締め直した、その時だった。

キキイイイ

耳障りなブレーキ音と共に、前を走っていた車が急停車した。

慌ててハルも車を止める。

「な、何だ？」

そこは一本道で信号も無い。

なら想像される急停車の理由は……。

「……事故」

呟いたハルの言葉を裏付けるように、前の車から運転手が飛び出し、車の前方へ走る。

嫌な予感しかない。

「ハルさん、ひよっとして……」

「恐らく。ちよっと待ってて下さい」

もしも事故なら、無視できる事態じゃない。

ハルはハザードランプを点灯させてから車を路肩に止め、前の車へと駆け寄る。

そこには、ハルが予想していた最悪の光景があった。

降りしきる雨の中、跪き叫びながら呼びかける運転手。

そして、その前で血を流しながら仰向けに倒れている……子供だ。運転手の呼びかけに、子供は反応しない。

「……………」

ハルは無言で、今自分がすべき事を考える。

突然の出来事に若干混乱しているが、当事者でない第三者なので意外に冷静でいられた。

まずすべき事は救急と警察への連絡。

ハルは急いで車へと戻った。

「ハルさん」

「事故だ。子供が轢かれた。俺は今から救急と警察に連絡する」

思わずため口を使ってしまったが、この際気にしない。

携帯を素早く操作して、まず119に連絡する。

「……はい……はい……ええ。急いでお願いします」

通報を終えると、直ぐさま警察へも同様の電話を掛けた。

何分も過ぎていない筈なのに、どっと疲労感が押し寄せてくる。

「俺はこれから応急処置をしに行ってくる」

「私も一緒にします」

「……子供が血まみれで倒れてる。耐えられるのか？」

女性や血に弱い人には、かなりきついだらう。

「私は……医者ですよ」

失念していた。

どう考えてもこの場で一番適任者だ。

「じゃあ行くぞ」

「はい」

二人は子供の元へと駆け寄った。

現場は先程と何も変わっていない。

運転手の男は同じように叫び声で呼びかけ続けているが、反応は無い。

「おい、少し落ち着け。もうすぐ救急車が来るから」

ハルが運転手を落ち着けようと声を掛けるが、気休めにもならない。

その間に、柚子は子供に近づき状態を確認する。

「どんな状態だ？」

「外傷……確認。出血量……甚大。呼吸脈拍……確認」

ハルの声が聞こえないのか、柚子はブツブツと呟くだけ。

「救急車到着までおよそ八分………現状で最適な処置を選択………終了」

「柚子？」

明らかに様子がおかしい柚子に、ハルは少し躊躇い気味に声を掛ける。

それが届いたのか、柚子は顔を上げてハルを見た。

「これより緊急処置を行います。補助を頼めますか？」

「あ、ああ。俺でよければ」

「協力感謝。ならばこちらに。私の指示に従って下さい」

まるで機械の様に、柚子は感情のこもらない声でハルに告げた。

灰色の瞳には光が無く、ゾツと底冷えするような冷たさを感じる。だが今はそれどころではない。

ハルは頭を切り換え、柚子の隣へと座り込む。

「まず止血をします。貴方はこれを組み立てて下さい」

柚子は手持ちの鞆を開け、ハルに簡易テントを差し出す。

ビニール製だが、雨をしのぐには充分だろう。

「………よし出来たぞ」

「結構です。では、術式開始」

救急車到着までの八分間。

ハルはただただ圧倒されるしか無かった。

「……なるほど。そう言うことでしたか」

ハルはコーヒークップを傾けながら頷いた。

応急処置を終えた子供を救急隊員に引き継いだ後、二人は近くの喫茶店に入った。

警察の事情聴取もあり疲れたから休憩しよう、とハルが提案したのだ。

そこでハルは、柚子から先程の事について話を聞くことが出来た。「つまり出血を伴う様な怪我を見ると、本気モード（命名ハル）に切り替わる体質？だと」

「……はい。お恥ずかしい所をお見せしました」

「？ 別に恥ずべき事なんて何もないでしょ。寧ろ誇るべきでは」「普通の人が見れば……私のそれは異常らしいです。昔から奇異の目で見られましたから」

その言葉から、柚子がどれだけ苦労してきたかが伝わってくる。どうしてもこの世は、普通とは違う人に対して厳しい。

それがどれだけ良いものでも、だ。

「ハルさんも……怖いでしょ？」

「怖い？ どうしてです」

「だって目の前の人他突然豹変するんですよ」

「全然。むしろ凄くなって思ったくらいです」

ケロッと返すハルに、柚子は驚いたように目を見開く。

「怖くないんですか？ こんな……異常者が」

「ええ全く。異常って言葉は好きじゃないけど、柚子さんのは誇るべき異常です」

「……」
「貴方のお陰で命が救われた。恥ずべき事など無い。その能力を誇るべきだ」

「少なくとも俺は貴方を尊敬します。他の誰が何と言おうとも」ハルは真剣な目で柚子を見据える。

それは自分の言葉が嘘ではないことを、何よりも雄弁に語った。

「……ありがとうございます」

小さな声で柚子は感謝の言葉を告げた。

「雨上がりましたね。そろそろ戻りましょうか」

「……………」

「どうかしましたか？」

「その……話仕方、さっきみたいにしてくれたら嬉しいです」

「さっきって……あれは緊急事態でつい咄嗟に」

そう言えば焦ってため口をきいてしまった。

先輩で年上の人に失礼この上ない。

「私は……その方が嬉しいです」

「しかし……………」

じっと上目遣いでハルを見つめてくる。

ハルは暫し悩み、

「分かりました」

諦めたように頷く。

「違いますよ。分かった、でしょ？」

「……………」

「では、もう一度……………」

「……………」分かったよ、柚子」

ハルの言葉に、柚子は心底嬉しそうな笑顔を見せる。

それはまるで雨あがりの空のように、眩しいものだった。

女医さん求めて三千里？（3）（後書き）

一見子供で人見知りだけど腕は一流の医者で、血を見ると豹変する。一行で纏めると、和泉柚子はこんなキャラクターです。

ハピネスでの主な仕事は、難しい手術の代行。

まあ、免許のあるブラックジャック先生のイメージですね。

次は柚子の小話です。

謎多き彼女に、奈美が果敢に挑んでいきます。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

小話〈口は災いの元〉（前書き）

ある日のハピネス事務所。

どうも奈美には、柚子の気になるところがあるようです……。

小話〈口は災いの元〉

ある日のハピネス事務所。

「ねえねえ柚子さん」

「はい、何でしょうか奈美さん」

休憩していた柚子に、奈美が声を掛ける。

「柚子さんってお医者さんなんですよね？」

「ええ。そうですよ」

「医師免許って見せて貰って良いですか？ 私興味あるんです」

「はあ……まあコピーでしたら」

柚子はバッグから出したクリアファイルを開き、紙を奈美に渡す。

「あれ、免許って賞状なんですか？」

「よく誤解している人がいますが、医師免許証は賞状ですよ」

「へへ、てつきり運転免許みたいな奴だと思ってました」

「……………偽装するときは気を付けて下さいね」

柚子さん、ちよつと洒落にならないです。

「それにしても、本当にお医者さんだったんですか……………」

「??？」

「失礼ですけど、どう見ても年下だとしか……………」

「ああ、そう言う事ですか。良いんですよ、慣れてますから地雷を踏んでしまった。」

察した奈美は、慌てて話題を変えようとする。

「そ、そう言えば柚子さんはお幾つなんですか？」

ピシィィィ

瞬間、二人の間だけでなく、事務所内の空気が凍った。

事務員の皆さん、とばつちりごめんなさい。

「い、幾つに見えます?」

「十代前半」

「は、ははは。流石にそれは……医師免許を持つてる時点で、ハルさんより上ですよ」

「なるほど、若作りって奴ですね」

「プシイイイイイイ」

氷点下から絶対零度に近づく。

事務員の皆さんは既に自主的に避難を始めている。

「ま、まあそう言えなくもないですけど」

眉をピクピク震えさせながらも、まだ柚子は堪える。

仏の顔も三度までだぞ、と奈美に伝えたい。

だが、彼女は手を休めない。

「それで結局何歳なんです? 三十? 四十? まさか五十って事はないですよ?」

「……さて、実験中の薬は何処にあったかしら」

柚子は危ない台詞を呟きながら、鞆の中を漁る。

このままでは流石に不味いと判断したのか、

「奈美、その辺にしておきなさい」

沈黙を守っていた千景がその場を収めに来た。

「女性に歳を聞くのは失礼ですよ。それが例え同性であってもです」

「は、いい、分かりました。すいませんでした、柚子さん」

「こちらこそ、少し大人げなかつたです。ごめんなさい」

氷河期は終わった。

どうにか大惨事になる前に、くい止めることが出来たようだ。

「そうそう柚子。少し相談があるのですが、この後良いですか?」

「構わないわよ千景ちゃん。今も手は空いてるし」

「二人は仲良しですね」

親しげに呼び合う千景と柚子を見て奈美は言う。

他の人と話す感じとはまた違う、特別な関係に思えた。

「まあ、子供の頃からの仲ですから」

「学校も学年も違ったのに、よく遊んでたよね」

「へ〜どつちが年上なんですか？」

ピキイイイイイイン

氷河期再来。

戻ってきた事務員達が、慌てて再度退避する。

「見た目は千景さんだけど、意外に柚子さんも……そう言えば千景さん、もうすぐ三十路……」

「柚子、行きますよ!!」

「任せて!!」

鮮やかなコンビネーションだった。

千景が奈美の鳩尾を、ひじ鉄で強打。

思わず開いた口に、柚子が赤い丸薬を放り込んだ。

この間僅か一秒足らず。

正に電光石火、熟練のツープラトンだった。

「ちょ、いきなり何を……か、か、辛~~~~~~~~!!」

奈美の顔色が真っ赤に変わり、激しく発汗する。

そして、口から怪獣のように火を噴き出した。

「特製丸薬「激辛君二号」。蒼井さんで試した一号とは比較になりません」

「奈美……私は同じ事を二度注意するのが嫌い……そう言ったはずです」

火を噴きながら悶え苦しむ奈美に、哀れみの視線を向ける二人。その間も奈美の吐き出す火で、事務所のおちこちが焦げていく。

「……修繕費はハル君に請求しておきましょう」

「何故？」

「彼に懐いている奈美には、その方がお仕置きの効果がありますか」

「なるほど、流石千景ちゃんね」

全く関係無いハルに飛び火した。

「さて、どうです？　これから飲みにも行きますか」

「そうね。付き合うわよ。で、何処に行く？」

「……焼き肉が食べたくなりました」

「奇遇ね、私もよ」

千景はメモを避難している事務員に渡すと、柚子と共に事務所を後にした。

一時間後。

「ちわ〜っす……って、何じゃこりゃ！！」

事務所を訪れたハルは、殉職者の様な声をあげる。

散乱している机や椅子に、壁や天井には放火されたような焦げ跡。まるで怪獣でも暴れたような惨状だった。

「ちょ、ちよつと、一体何があったんです？」

「……ハル君、気を強く持ってね」

片づけをしていた鈴木さんが、ハルに何やらメモを渡す。

首を傾げながらそのメモに目を通す。

『修繕費はハル君の口座から引いておきました。悪しからず』

「え、え、ええええええ！！」

全く理解できない。

そもそも引いておきましたって、何で過去形なんだ。

「ど、どういう事なんだ……鈴木さん、一体何が……」

「全ては若さ……若さ故の過ちなのよ」

「意味分かんないですって！」

「詳しくはあの子に聞いてね。全ての元凶だから」

「あの子って……アレ？」

鈴木とハルの視線の先には、床に大の字に倒れている少女。

唇が数倍に腫れ上がり、面影は殆どないが、間違いなく奈美だった。

「千景さんと柚子さんを怒らせた……………それが全てよ」

「馬鹿が……………無茶しやがって」

「因みに修繕費は、概算でこれくらいです。正式な請求書は後日」

「……………俺の口座残高が……………ぐすん」

涙ぐむハルの肩を、鈴木が優しく叩いた。

間違いなく今回一番の被害者は、何故か関係ないハルだった。

教訓、普段怒らない人が怒ると凄い怖い

小話〈口は災いの元〉（後書き）

乙女心は複雑です……例え幾つになっても……。

柚子と千景の年齢については、まあご想像にお任せとしようです。

一つ言えることは、二人ともまだ大台には乗っていません。

この小説がサザエさん方式だと良いのですが……。

次も新キャラ登場の予定です。

少しずつ騒がしくなってきたハピネス。

どんな人物が現れるのでしょうか。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

天才？ 科学者登場（前書き）

長期の出向依頼を終え、ハピネスに一人の男が帰還した。
自らを天才科学者と名乗る彼だが……。

天才？ 科学者登場

三月に入り、少しずつであるが春の訪れを感じさせるある日。ハピネスの事務所に、一人の男が帰ってきた。

「ハピネスよ、吾輩は帰って……………ぐべええ！」

「煩いですよドクター。挨拶は静かにしなさい」
その様子を見ながらハルは思った。

ハピネスはひょっとして、変人ばかりなのではと。

「では改めて、どうぞドクター」

「う、うむ。喜べ愚民共。世紀の大天才、あおいけん蒼井賢が今戻つ……………がは
ああ」

千景のひじ鉄が男の鳩尾にめり込む。

うずくまり悶絶する様子を、しかしハピネスの面々は慣れた様子で見ている。

「……………何なのこの男？」

「俺も知らない」

「ハピネスのメンバーよお。ちょっと出張してただけどねえ」

「帰って来ちゃいましたか……………」

奈美の問いかけに、ローズと柚子が答える。

「どうやら二人は面識があるようだ。」

「さあドクター。仏の顔も……………と言いますよ」

「はい。皆さんお久しぶりです。蒼井賢、ただいま戻りました」

フラフラの男は、小動物のように怯えながら三度目の挨拶を終えた。

「ドクターはハピネスの技術部門担当なんです」

「機械の修理や補修が主ねえ。研究機関への出向なんかもあるわあ」

挨拶を終えた後、初対面のハルと奈美は蒼井の説明を聞く。

「ふん。まあ吾輩の天才的頭脳を持つてすれば、造作もないことだな」

「……ねえハル。こいつ殴って良い？」

「駄目に決まってるだろう。幾ら偉そうでも我慢しろ」

「ああ、別に構いませんよ」

「千景さん？」

何て事を言い出すのだろうか。

「適度に諫めないと頭に乘るので。時に鉄拳制裁も必要です」

「遠慮しないでガンガンやっちゃってねえ」

「はい、じゃあ行きます」

「待て待て待て待て」

笑顔で拳を握りしめる奈美を、ハルは何とか抑える。

「何もしてない人を殴っちゃ駄目だ。やるなら何かやった時にしろ」

「……ハルがそう言うなら」

良く睨てますね、と言う千景の言葉は無視する。

「それで何処に出張してたんですか？」

「何、大した処ではない。ちょっとアメリカ航空宇宙局に三年ほどな」

自慢げに眼鏡をくいっと直す蒼井。

確かにそれは凄い。

偉そうな態度を取るのも仕方ないかもしれない。

「………ねえハル」

「どうした？」

「アメリカ航空……って何？」

をいをい。

頼むぞもうすぐ高校生。

「宇宙開発をやってる機関だよ。そうだな、NASAって言えば分かるか？」

「ん〜聞いたことがあるような、無いような」

どうやって高校入試を突破したのだろう。

小一時間ほど問い詰めたいが、それは後回しだ。

「まあ頭の良い集団が居る場所って思えばいいだろうよ」

「ふん。こいつがね……」

そうは見えないとばかりに、挑発的な視線を蒼井に向ける。

手入れをしていないのか、髪はぼさぼさでだらしない。

切れ長の目をした顔はそこそこ整っているのだが、何故かいい男に見えない。

小さな丸メガネは知的な感じではなく、どちらかと言えばマッドなイメージ。

背は高いが、ヒョロツとした体躯から弱々しい印象を受ける。

「……………人は見かけによらないものだぞ」

「ハルちゃん、さり気なく言うわね」

「ドクターの場合、中身も大差ありませんが」

「同意します」

「ぐすん……………」

軽く凹んだようだ。

何となく蒼井という人物の立ち位置が見えてきた。

「紹介はこれくらいにして、ドクターには早速依頼をこなして貰いましょうか」

「ほう、早速吾輩の頭脳が必要になったのか」

「ええ。もう三件も来てます」

「くつくつく、よからう。どんな依頼だ」

「電子ジャー、ストープ、ラジカセの修理依頼です」

ああ、確かに技術部門の依頼だ。

程度はともかく。

「そ、そんな些事に吾輩を使おうと言うのか？」

「ドクターにしか頼めないと、名指して指名が来てます。如何ですか？」

ている。

「お、おい奈美。早く手を離せ！」

「むむむ、りりり。手ががが、離れないいいい」

「はっはっは、驚いただろう。これが最新の防犯装置『感電君』だ！」

蒼井は満足げに眼鏡をくいつと直す。

「吾輩以外の人間が触れると、十万アンペア、五億ボルトの電流が不届き者を襲うのだ」

「そりゃ過剰防衛だろうが！ てかそんなこと言っていないで、早く解除しろ！」

「……………」

「どうしましたドクター？」

「いや、何でもなし。少し待て、今解除する方法を考えるから」

「大馬鹿野郎！！」

罵声を浴びせても、状況は改善しない。
どうすれば良いのだろうか。

頭を悩ませるハルだが、救いの手は意外な所から出てきた。

「………… 蒼井さん。貴方も鞆に触ってください」

「む、何故だ？」

「そのシステム、恐らく生体認証でしょう。貴方が触れば防犯機能は解除されるはずですよ」

冷静な柚子の言葉に蒼井は渋々従う。

蒼井が鞆の取っ手を握ると、

『対象ノデータヲ確認。防犯システム解除シマス』

機械音声が鞆から聞こえるのと同時に、奈美を襲った電気は解除された。

「………… おい奈美、大丈夫か？」

「私は平気だけど、服が…………」

奈美の服は高圧電流を浴びたせいで、所々焦げて煙を上げていた。

ハルとしては奈美が無傷なのに驚きだが……。

「認証すると防犯装置は解除されるのか。ふむ、これは改善の余地があるな」

「おい蒼井。それよりも、まず奈美に言うことがあるだろ！」

怒りを露わにして蒼井に強い口調で詰め寄る。

例え過失だとしても、謝罪は必要だ。

「ん、ああそうだな。……どうだ小娘、吾輩の技術力は？」

「……ハル？」

ゾツと底冷えするような、冷たい奈美の声。

意図を察したハルは、無言で頷く。

「ねえ蒼井。素晴らしい技術力を見せてくれてありがとう。お礼に、私も見せてあげる」

「ほう、何をだ？」

「私の………破壊力よつ!!!」

渾身の右ストレートが蒼井の顔面にめり込んだ。

事務所の壁に吹き飛ばされる蒼井を、奈美が追撃する。

倒れた蒼井のマウントをとり、一方的な攻撃が始まった。

「……死んだかな？」

「残念ながら無理でしょう。あんな風体ですが、耐久力は凄まじいですから」

「それにしても奈美ちゃんは凄いわねえ。普通即死ものよ、あれえ」

「落雷直撃クラスですからね。医者としてはとても信じられません」

「それが、早瀬奈美なのです」

何とも深い千景の言葉に、みんなはただ頷くしかなかった。

「とにかく、ドクターは妙な発明をしますので、被害に遭わないよう気を付けて下さい」

「ま、ハピネスの所員は一通り犠牲になってるんだけどねえ」

「よく首にならないですね？」

「技術力だけは一流、国家機関以上ですから……」

それさえなければとつくに、と千景は悔しそうな顔を見せる。

「心中お察しします……って、柚子は何やってるんだ？」

「治療の準備です。そろそろ終わりそうですから」

優しいな。

「依頼主が待ってますから。きりきり働いて貰わないと」

前言撤回。

ハルは蒼井の立ち位置を再確認することとなった。

今日、ハルは二つのことを学んだ。

蒼井賢と言う男は、天才だが変人で発明品には注意が必要だと言うこと。

そして、絶対に奈美を怒らせてはならないと言うことを。

蒼井賢の帰還は、流血事件を持って幕を開けたのやら閉じたのやら……。

天才？ 科学者登場（後書き）

トラブルメーカー & やられ役の登場です。

これからはトンデモ発明で、場を乱して貰いましょう。

因みに、普通の人が高圧電流を浴びると大変危険です。

よい子も悪い子も決して真似をしないで下さい。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

入学式に行きましよう(1) (前書き)

父親からの一本の電話。

それが切っ掛けで、ハルの孤独な戦いが始まる……。

入学式に行きましょう(1)

それは、嫌な電話から始まった。

『ハルか？ 俺だ、冬麻だ』

「親父……何度も言うが時差を考えろ」

『勿論計算済みだ。その上でお前が一番嫌がりそうな時間帯を狙って……』

ぶつっとハルは電話を切った。

現在早朝四時。

実に嫌な目覚めだった。

「あのクソ親父め。アラームセットすればもう少し寝れるかって……」

再び着信。

相手は勿論クソ親父こと冬麻だった。

「……この電話は現在使われておりません。諦めて電話をお切り下さい」

『まあ待て。少し真剣な話だ』

ボタンを押すコンマ数秒前で、ハルは指を止める。

冬麻の声がいつになくシリアスなものだったからだ。

『実は、お前に頼みたいことがある』

「親父が俺に？……秋乃の事か？」

『察しがいいな』

「親父が俺に頼む事と言えば、それ位しか思いつかない」

南極から自力で帰還するような男だ。

溺愛する娘以外のこと、ハルに頼るような事はしないだろう。

『秋乃が今日、高校の入学式なのは知っているな？』

「一応聞いてはいるよ」

『なら話は早い。お前、入学式に参加して秋乃の写真を撮ってきて』

くれ』

珍しくまともな頼みだった。

「それくらいは別に良いけど、親父と母さんは来ないの？」

何せ子煩悩な両親。

卒業式の日には、当たり前のように会場に現れていた。

『行きたいさ。行きたいに決まってる。だが……母さんが駄目って』

「母さんも来れないんだ」

『うむ。少々厄介な事態になっていてな、今襲撃作戦の準備を……』

「ごほんごほん、何でもない』

「おいちよつと待て。今明らかにおかしな単語が……」

『パパ〜。突入部隊、配置に付いたわよ〜』

「おい親父。今母さんの声で、凄まじく不穏な単語が聞こえたぞ」

『……………』

「親父？」

『と言うわけでそつちは任せた。ではっ』

そう言い残し、冬麻は一方的に通話を終わらせてしまった。

ハルは暫し呆然として、

「……………俺は何も聞かなかった。寝よう」

現実逃避することにした。

知らない方が幸せな事もある……………はずだ。

「ねえハル、起きてる？ 起きてるよね？ 勝手に入るよ」

玄関のドアが開けられるのと同時に、奈美の声が聞こえる。

「ってまだ寝てたの？ もう七時だよ」

「……………お前もまた一番きつい時間に来たな」

寝直して大体三時間。

丁度深い眠りに入っていたハルは、のっそりと布団から這い出る。

「で、一体なんだ？」

「えへへ、ねえ、どうかな？」

照れたような奈美の声に、ハルは寝ぼけ眼を擦る。

「……制服？」

「うん。今日入学式だから……どう、似合う？」

はにかむように奈美はハルに尋ねる。

奈美が来ているのは、紺を基調としたオーソドックスなブレザー。短めのスカートから白い足が、と言うのは若干親父くさいか。

「……うん、いい感じだと思っぞ」

「そっか……えへ」

褒められ嬉しそうに微笑む奈美。

目覚めは最悪だが、それを見たのなら悪くないかと思えてきた。

「それにしてもお前も入学式か」

「お前も？」

「俺の妹も今日入学式なんだよ。まあ、高校は大体同じ日か」

「へえー、ハルって妹さん居たんだ。どんな子？」

「お淑やかないい子だよ。兄馬鹿かも知れないけど」

自慢の妹だ。

ちよつと暴走気味なところが玉に瑕だが。

「何処の学校なの？　ここから近いなら会ってみたいな」

「そんな遠くないぞ。確か……『白百合女子高校』だったか」

「へっ？」

「何で驚くよ」

「いや、だって私と同じ高校だから」

奈美流の冗談だろうか。

いや、だが奈美が着ている制服は、確かに写真で見た秋乃の物と同じだ。

「世間は狭いな……」

「そうね。……あれ、でもそうになると……」

不意に奈美がアゴに指を当てて思案顔になる。

「ハルって今日、妹さんの入学式、つまり白百合女子高校の入学式に行くのよね？」

「その予定だけだ」

「ひよっとして、知らないの？」

「何を？」

「白百合女子高校って、男子禁制よ。肉親も例外なく、入学式だろ
うが何だろっが」

ナンダッテ？

「……知らなかったのね？」

コクリ、と頷くハル。

ここに至ってようやく事態が飲み込めた。

つまりは押しつけられたのだ。あのクソ親父に。

「何てこった」

「お嬢様高校らしく警備も厳重だから、潜入や盗撮は諦めた方が良
いわよ」

「忠告ありがとう」

さて不味いことになった。

知らぬ事とはいえ、約束をしてしまった。

もし破れば後が怖いし、何より約束を破ることをハルはしたくな
い。

思考の迷路に囚われたハルに、奈美が光を与える。

「……どうしても参加したい？」

「約束したからな」

「一つ、私にアイディアがあるわ」

ニヤリと笑う奈美。

それは天使の導きにも悪魔の囁きにも感じられた。
だが、今のハルに選択肢はない。

「聞かせてくれ」

「そう来なくっちゃ。えつとね……」

嬉しそうに奈美はそのアイディアを伝える。

「……ってのはどう？ ハルならいけると思っけど」

「認めたくないけどね」

「どうする？ やるならもう時間が無いわよ？」

「……ええい、やらいでか！」

「それでこそハルよ。ついでに私の写真もお願いね」

ウインクをする奈美。

最初からそれが狙いだったようだ。

こうしてハルは、悪魔の誘いを受けて女子高の入学式に挑むこととなった。

入学式に行きましょう(1) (後書き)

と言うわけで、今回は新キャラ登場はお休みです。

残暑が厳しいこの時期に、明らかに季節外れのネタですが、奈美と秋乃の入学式編突入です。

第一話で冬麻が制服あわせに同行したと発言していましたが、無論中には入れず、外でお預けを喰らっていました。

結局見れたのは写真だけ……。なので、男子禁制なのは知っていて、あえてハルに頼んでいます。とんだツンデレ親父ですね。

果たして奈美の提案した作戦とは……とカッコつけたところで、もう殆どの人はお分かりだと思いますが。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

入学式に行きましょう(2) (前書き)

奇策を実行するハル。

果たして無事潜入することが出来るのか？

一方奈美は、何やら予想外のものを見つけて……。

入学式に行きましょう(2)

穏やかな陽気に暖かい日差し。

散るのを我慢していた桜が、入学式に文字通り花を添える。

正に絶好の入学式日和だった。

新人生入学式、と花飾りで彩られた看板が校門の脇に立てられている。
いる。

その脇に用意された受付で、入場証を貰うらしい。

ハルは意を決して受付の女性に声を掛けた。

「こ、こんにちわ。入学式に参加したいのですけれど……」

「ようこそお越し下さいました。失礼ですが、どなたの関係者でしょうか？」

手元のファイルを捲りながら、女性は尋ねる。

流石はお嬢様学校。チェックも厳重だ。

「御堂秋乃の母です。菜月と申します」

「お母様……ですか？ 少々お待ち下さい」

少し訝しげに眉をひそめ、ファイルから秋乃の項目を探す女性。

母と呼ぶにはあまりに若すぎるので、その反応は当然だろう。

もともと、本物の菜月が来ても同じ反応だと思いが。

「御堂秋乃さん……あら」

何かに気づいたように、女性は表情を和らげる。

「ご息女とよく似ていらっしやいますね？」

「え、ええ。よく言われますの。私も母に似ているので、遺伝かしら」

ほほほ、と笑って誤魔化す。

「美人の家系なんですね、羨ましいです」

「ありがとうございます」

「こちらが入場証になります。会場は右手の体育館です」
女性は首からかけるパスケースをハルに手渡す。
「どうやら最初の関門は突破できたようだ。」

ハルは笑顔で受け取ると、校門を抜け体育館へと進む。

「……しかし、何とも複雑だな」

誰にも聞こえないよう、小さく呟く。

もう少しくらい疑ってくれても良いのでは無いのだろうか。

例え……女装していたとしても。

奈美の提案と言うのは、ハルが女装して参加すれば良いという物
だった。

あまりに無茶苦茶な提案だが、残念ながら他に手が無く、それを
受ける事になる。

その後急いでハピネスに向かい、千景に事情を説明。

「……依頼します？」

諭吉さんとお別れを告げ、女装に協力して貰った。

千景に化粧をして貰い、カツラを着ける。

グレーの女性用スーツを身に纏い、準備は完了した。

「やはり素材が良いと違いますね。なかなかの仕上がりです」

「それは褒められてますか？」

「勿論です。どうです、こういった依頼も受けてみますか？」

「全力で遠慮します」

身の危機を感じ、本気で断る。

曖昧な態度は身を滅ぼすのだ。特にここでは。

「声は地声で問題ないですね。後は細かい仕草を直しましょうか」

「仕草？」

「女性と男性は根本が違いますから。こういった小さな所を抑える
のが大切ですよ」

「なるほど」

「時間は……二十分ほどありますね。少し厳しく行きますよ」
この後のことは思い出したくない。

男としてのプライドなど、とつくに消え失せてしまったとだけ言
っておく。

そんな涙なしには語れない努力のお陰で、今ハルはここに居る。
一応身分証の偽装もしたのだが、幸か不幸か出番は無かった。
チエックが甘いのか、ハルの外見にそれだけの説得力があったの
か。

どちらにせよ素直には喜べないのだが……。

「これは秋乃のため、秋乃の笑顔のため……ついでに奈美のため」
言い聞かせるように呟きながら、入学式会場へと向かっていくの
だった。

その頃奈美は困惑していた。

右も左も同じ制服を着た女の子達なのだが、

「……マチ？」

見覚えのあるあり得ない人物がいた。

美しい黒髪を持つ、文句なしの美少女。

「女装しろって言ったけど、何で……」

提案したのは自分だが、まさか制服を着てくるとは想定外だった。
そもそも新人生に紛れてしまったら、写真どころではないはず。

「千景さんの指示？ ううん、とにかく話を聞かなくちゃ」
ずずっとその少女に近づき、

「ちよっと来なさい」

有無を言わさず腕を掴み、人気のない場所まで引きずっていった。

「あのね、あんたどういうつもりなのよ？」

「え、あの……事態が飲み込めないのですけれど」

「もう演技は良いわ。人が来れば分かるから。で、どういうつもり？」

「と言われまして……」

奈美の剣幕に、少女は戸惑うように視線を泳がす。

まあ入学初日にこんな目にあえば、当然の反応だろう。

「そりゃ勧めたのは私だけど、何も新生に化ける必要は無いでしょ！」

「?????」

「確かに似合ってるのは認めるわ。寧ろとっても可愛いけど」

「えっと……ありがとうございます？」

「でも、それとこれとは話が別よ。どうすんのよ、写真！」

「写真ですか？」

「目的忘れたの？ あんた妹さんと私の写真撮るために女装までしたんでしょ！」

いえ、秋乃だけが目的なのですが……。

ちやつかり自分も含める辺り、抜け目がない。

「ちゃんと説明しなさいよ、ハル」

「へっ？」

「何惚けてるの。自分の名前でしょうが」

「……………なるほど」

戸惑っていた少女は得心がいったのか、小さく呟く。

「お母さん……ううん、きつとお父さんが」

「何言ってるの？」

「あ、すいません、こちらの事です」

キョトン顔の奈美に、少女は優雅に微笑んでみせる。

それは深窓の令嬢と言う表現がピッタリな、優雅で美しいものだった。

「えっと貴方のお名前……とごめんなさい。まず自分からでした」
「ど、どうしたのよ？」

「初めまして。私は秋乃、御堂秋乃。御堂ハルの妹です」
スカートの端を摘み、ちょこんとお辞儀をして名乗った。

「なるほど、お兄ちゃんの仕事仲間でしたか」

奈美から簡単な説明を聞くと、秋乃は納得したように頷く。
ようは勘違いだったと言うわけだ。

「あの、どうかしましたか？」

「本当に別人よね。私をからかっているんじゃないわ」

「よく双子と間違われるんですよ。お兄ちゃんは嫌みたいですけど」
「ん、確かによく見ればハルより少し女の子っぽいけど……え
いっ！」

ペタン

「えっと、何をなさってるんですか？」

「ちっ、胸じゃ判断できないわ」

「……うるさいやい」

御堂秋乃、きつとこれから成長期。

「その口調もハルそっくりね」

「まあずっと一緒に暮らしてましたから」

「……後でゆっくり聞かせてね。とにかくまだ半信半疑だわ」
じーっと秋乃を見つめる奈美。

もし奈美が男なら直ぐに警察が駆けつけるだろう。

「そうですね……なら確かめてみます？」

「どうやって？ 脱ぐの？」

「流石にそれはちょっと。まだ日も高いですし」

夜なら良いのか？

「要はお兄ちゃんと私の二人が居ると証明できれば良いのですから

……」

秋乃は携帯を取り出すと、手早くある番号に電話を掛ける。
数コールの後、相手が出た。

「秋乃か？」

「あ、お兄ちゃん。ちょっと変わるね」

奈美に携帯を差し出す。

「もしもし、奈美だけど」

「……………どうということだ？」

「うん、それはこっちの台詞なのよ」

いえ、ハルの台詞だと思います。

「ひよつとして、秋乃と会ったのか？」

「まあね。あんたはもう来てるの？」

『ああ。千景さんのお陰でな』

「それは良かったわね。じゃあまた後で」

奈美は電話を切り、秋乃へ携帯を返す。

「納得して頂けましたか？」

「うん。えっと、色々ごめんね」

素直に頭を下げる。

こうして自分の非を認め謝れるのが、奈美の魅力だ。

「いえいえ、全然気にしてませんから」

「そう言って貰えると助かるわ」

「じゃあ改めて。御堂秋乃です。よろしくね」

「早瀬奈美よ。こちらこそ」

二人は握手を交わして笑い合う。

誤解が切っ掛けで、二人はすっかり打ち解けていた。

「じゃあ行こうか。そろそろ集合の時間だし」

「はい。あ、一つ確認ですけど、奈美さんは何でも屋さん何ですよ
ね？」

「奈美で良いわ。正しくは便利屋だけど、秋乃さんの言うとおりよ」

「では私も秋乃で。ならちよつとお願いがあるんですけど……………」

悪戯っ子な顔の秋乃は、奈美にある事をお願いした。

それを聞き、奈美も同じようにニヤリと唇を歪めて笑う。

「その依頼受けるわ。報酬は……現物支給でオーケー？」

「ええ。どうやら奈美とは仲良くなれそうです」

二人はがっちりと、男らしい握手を交わすのだった。

やがて入学式が始まった。

新入生が入場するや、眩いフラッシュの光が体育館に満ちる。

ハルもそれに負けじと、秋乃と奈美を撮影していく。

式が終わる頃には、用意したデジカメのメモリーはすっかり一杯になっていた。

（これだけ撮れば親父も満足だろ。さて、事務所に戻るか）

二人に声を掛けようかと思っただが、新入生はこの後も予定があるらしい。

お祝いした後で言えばいいか、とハルは着替えのため事務所に帰ることにした。

意外にあっさりと、ハルは依頼を完了することが出来た。

入学式に行きましょう(2) (後書き)

何ともあっけなく、依頼を達成したハルですが、このまま終わるほど、世界は甘くありません。次が入学式編の最終話です。

ハルの妹、秋乃が再登場しました。

あらゆる面で兄を上回るハイスペック妹。個人的には活躍して欲しいですね。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

入学式に行きましょう(3) (前書き)

冬麻に依頼完了の報告をするハル。

だが話は、何故か妙な方向へと逸れていき……。

奈美と秋乃の入学式編、完結です。

入学式に行きましょう(3)

『ハルよ』

「ああ親父、送ったデジカメラデータの確認は終わったのか？」

『うむ、確かに受け取ったぞ。よく任務を全うしたと褒めておこう』

「……………」

『どうかしたか？』

「いや、ひよつとして俺、親父に褒められたの初めてかもって思っただけだ」

『はっはっは、無論初めてだ』

畜生この野郎。

「とにかく、これで息子としての義理は果たしたぞ」

『ああ。今回の働きには、俺だけでなくママも非常に喜んでる』

「なら頑張った甲斐があったってものだ」

菜月の笑顔を思い浮かべ、ハルは少し嬉しそうに頬を緩めた。

『そこでママと俺から、お前にご褒美を贈ることにしたぞ』

「ご褒美？」

予想外の展開に、ハルは思わず間の抜けた声で聞き返す。

『ご褒美など生まれてこの方貰ったことが無いからだ。』

『うむ。今イタリアに居るのだが、こっちの服はなかなか趣味がいぞ』

「だろうね。それで？」

『特別にスーツを一式見繕ってやるう。まあママの趣味になってしまっが』

「イタリア製のスーツ？ そりゃ嬉しいよ。ありがとう」

『そうだろう、そうだろう。もっと喜んで良いんだぞ』

頭に乗る親父だが、今のハルには気にならない。

『でだ、お前に一つ聞いておきたいことがある』

「サイズ？ 母さんなら知ってると思うけど」

『違う。つまりだ、紳士物と婦人物のどちらを送ればいいのかと？』

……ちよつと待て。

嫌な汗がハルの背中を流れる。

「当然紳士物だけど、どうしてそれを聞くのかな？」

『愛しのマイエンジェル、秋乃がとつても面白い写真を送ってきたのだよ』

ニヤニヤとからかう様な冬麻の声。

嫌な予感確信に変わる。

『流石は兄姉と言った所か。なかなか良く似合っていたぞ、ハ・ル』

「うわあああああ！！ 何でそんなものが！！」

『母さんなんか大喜びで、携帯の壁紙もその写真に設定してたぞ』

「何で止めないんだよ！ 息子の醜態だぞ！」

『そう照れるな。仕事仲間にも見せたが、大好評だったしな』

「ふざけんな、このクソ親父！」

前言撤回。

少しでも見直したことを後悔した。

『まあ、スーツはちゃんと紳士物を送ってやるから安心しろ』

「これで婦人物送ってきたら、イタリアまで殴りに行くよ」

『……今のはママには黙って置いてやる』

「なんでさ？」

『ママなら「ハルちゃんが来てくれるの？ なら婦人物選ぶわ」と言いかねん』

そんな馬鹿なと言いかけて、思いとどまる。

菜月なら本気でやりかねない。

「そうしてくれ」

『うむ。また何かあれば頼むぞ。文化祭に体育祭、イベントは目白押しだ』

「おいおい、全部俺にやらせるつもりか？ 顔を出してやれよ」

『俺だつてそうしたいさ。でもママが……………ぐすん』

「あー何て言うか……………ゴメン」

マチ泣きは反則だと思ふ。

『とにかく、また追つて連絡する。それまで精々達者で暮らせ。ではなっ！！』

言いたいことを全部言つて、冬麻は電話を切つた。

ハルは一息つくと、直ぐさま思考を切り替える。

「……………さて、行くか」

向かう先は勿論、あそこしかない。

ハピネス事務所には、ハルの目当ての人物が居た。

「あ、ハル。やっほ」

「奈美、まずは高校入学おめでとう」

「えへへ、ありがとう」

奈美は嬉しそくに顔を緩ませる。

「それでだな、一つ聞きたいことがあるんだが」

「何？」

「実は俺が入学式に潜入した姿が、何故か写真になつてるんだ」

「そりゃそうよ。だつて私が千景さんをお願いして撮つて貰つただもん」

「さらりと言い放ちやがった。

「やはりユダはお前だつたか……………」

「湯葉？ 健康に良さそうね？」

「ユダだユダ。つまり裏切り者つてことだよ！」

本当に高校生なのか？

「そんな大げさな」

「俺にとつちや一大事だ。何でそんなことした？」

「依頼されたのよ。ハルの女装姿を写真に撮つてつて」

「誰に？」

「秋乃よ」

予想外の展開だ。

つまり奈美は秋乃に依頼され、千景に写真を撮るように依頼したと。

写真を貰っただけと思っていた妹が、まさかの黒幕だったとは…

…。

「秋乃っていい子よね。ハルそっくりなのに、中身は全然別人だわ」

「まあそれは認める。あいつは俺と違って出来が良いからな」

運動も、勉強も、ありとあらゆる分野で秋乃はハルを凌駕している。

一見同じ車だが、ハルがノーマル、秋乃が超改造車だと思えば分かりやすいか。

「早速メアドも交換したし、もうすっかり仲良しよ」

「さよか……。まあ仲良くしてくれたら助かる」

すっかり氣勢を削がれたハル。

肩を落として事務所から帰ろうとすると、

「あ、ハル君。ちょっと良いですか？」

事務所の奥で仕事をしていた千景が声を掛けてくる。

「何ですか？」

「実はこの写真、うちのHPに使わせて貰えないかと……」

「絶対却下ですっ!!!」

ハルの気苦労は絶えない。

こうして奈美は高校生活の第一歩を踏み出した。

ハルの、完全にとばっちりな犠牲を残して。

入学式に行きましょう(3) (後書き)

無事、奈美が高校生になりました。

これからは、ハピネスの正式な所員として働いて貰います。

次は新キャラ登場のターン。

これで一応、ハピネス関連の全ての登場人物が揃います。

最後に登場するのは、どんな癖のある人物なのか。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

新たな仲間加わります(1) (前書き)

高校生になった奈美が、正式にメンバーに加わった。

新たな仲間を加え意気上がるハピネス。

そんな彼らに、千景は何やら紹介したい人物がいるようで……。

新たな仲間加わります(1)

季節は春。

新たな生活へと旅立ちの季節。

それは、出会いと別れを意味する。

ハピネスもそれは例外ではない。

「と言うわけで、正式にアルバイトになりました早瀬奈美です。よろしくお願いします」

「よろしく」

ぺこりとお辞儀をした奈美に、ハピネスの面々が歓迎の声を掛けた。

「……正式なアルバイトじゃなかったんですね」

「流石に中学生を雇う勇氣はありませんよ」

言われてみれば、奈美が依頼を受けた所をみた事がない。

精々ハルとの出会いの時位だろう。

「今までは非公式にい、ちょっとだけ依頼をやって貰ってたけどお」

「これからはしっかり働いて貰います。ただでさえ人手不足なのですから」

出会いがあれば、当然別れもある。

ハピネスのバイトも結構な数が、退職してしまった。

進学や就職、寿退社とそれ自体はお目出度いことなのだが……。

「早急に人材の確保をしなくては……まあ、毎年恒例ですけどね」

「ハルちゃんと奈美ちゃんは、未永く頑張っただけいいわあ」

ウインクをするローズに、ハルと奈美は苦笑を浮かべて頷くしかなかった。

「では当面の方針としては……」

「バイトの募集を掛けつつ、依頼を頑張って捌くと言つことであ

「異議なくし」

妙なテンションだ。

「じゃあみんなあ、早速仕事に取りかかって……」

「あ、ちよつと待って下さい」

待ったを掛けたのは千景だった。

「実は皆さんに紹介したい子がいるのです」

「紹介？」

「少し私事になりますが、丁度良い機会ですから。……入ってらっ

しゃい」

千景が声を掛けると、事務所のドアが開かれる。

そして姿を見せたのは、一人の少女だった。

見た目は十代前半、柚子と同じ位だろうか。

青い髪のリボンが可愛い少女だ。

「えっと千景さん、この子は？」

戸惑うように尋ねる奈美。

他の所員も同じように疑問の視線を千景に向ける。

「紹介します。この子は私の姪で、結城紫音ゆづきしほと言います」

「姪御さん……ですか？」

ハルの言葉に千景は頷くと、歩み寄ってきた少女を自分の前に立たせる。

「さあ、自己紹介なさい」

「うむ。初めましてだな。私の名は結城紫音だ。よろしく頼むぞ」

何とも偉そうな挨拶だった。

幼い見た目とのギャップに、ハル達はすっかり面食らってしまった。

「紫音、そのしゃべり方は止めなさいと言ったはずですが？」

「仕方なからう。この年までずっとこれで来たのだから」

「全く……みんな驚いているじゃないですか」

「む、済まない。これは癖みたいな物でな、ご容赦願いたい」
頭を下げ謝罪する紫音。

あまりに子供らしくない態度だ。

「まあ良いでしょう。ここにいる間、私がしっかり矯正してあげます」

「お手柔らかに頼むぞ、千景」

ニヤリと笑う紫音。

その様子を見て、ハル達は視線で会話を交わす。

(ねえ、ひよっとして……)

(まさか。幾ら千景さんでも、まだ子供じゃないか)

(だな。流石に働かせるのは無理があると言うものだ)

(でも、千景さんですよ?)

(ある意味非常識の塊だものお。あの子を働かせる可能性もお……)

(……あり得るっ!)

この間数秒。

ハピネスの所員達の見事は見事に統一された。

「ああ、それはご心配なく。この子はハピネスで働かせるつもりは
ありませんよ」

(……何故分かるっ!?)

「皆さん顔に出ていますから。考えてること位分かりますよ」

(……嘘だっ!)

「……患者みたいに言わないで下さい」

(………………気にしたら負けですか?)

「ですね」

全員が悟った。

余計なことを考えるのはよそつと。

「この子は今年から中学に進学しまして、私の家に居候することになっただけです」

「家と事務所が同じ建家故、会うこともあろう。その時はよろしく

頼む」

「あの〜千景さん。その子は何歳でしょうか？」

ハルが拳手をして尋ねる。

「今年で確か十三だと思えますが……何か気になる事でも？」

「御仁は私の話し方が歳不相応だと言いたいのだろう」

いえ違います。

外見と年齢が合わない人がいるので、少し臆病になっているんです。

「いや、それだけ分かれば充分です」

「気持ちは分かるぞ。そこに年齢詐称疑惑の小娘がいるからな」

「頭だけで無く、視力にも問題があるようですね？」

何故か火花を散らす蒼井と柚子。

どうもこの二人は相性が悪いらしい。

「とにかく、紫音ちゃんハピネスの所員では無いんですね？」

「ええ。基本的には」

「例外がある、と？」

「この子は少し特殊な力があってね。場合によっては力を借りるつもりです」

千景の説明に頷く紫音。

「若輩にして非才な身だが、その時は尽力させて貰う」

深々と一礼する紫音につられ、ハル達も思わずお辞儀を返す。

すっかりペースを握られている気がした。

「では、これにて解散とします。今日はご苦労様でした」

千景が締めて、ハピネスの所員達は各々仕事へと戻っていった。

「ねえハル。今日は何か依頼受けるの？」

「ん〜そうだな」

ハルは少し考える。

今日は土曜日で、明日も大学はお休み。
連休を楽しむのもいいし、今日仕事をして明日ゆっくり休むのも
悪くない。

懐具合を計算して、結論を出す。

「手頃なのを受けようかな。春は飲み会とかで出費が多いから」
「そっか。じゃあ私も何かやってみようかな」

「初めは慣れる意味でも、簡単なのやった方が良さぞ」
「えへへ、こっやって依頼を選ぶのも楽しいね」
嬉しそうに笑顔を見せる奈美。

心底楽しんでるようだ。

「ふんふん、どれにしようかな」

「さて、俺も選ぶとするか」

奈美の横で、ハルが掲示板の依頼を選ぼうとすると、

「二人とも、ちょっと良いですか？」

千景に呼ばれた。

「何ですか千景さん？」

「少し特殊な依頼が来てまして、出来れば二人にお願いしたいんで
すが」

「……………」

怪しい。

千景がこういう言い方をするときには、大抵ろくな事にならない。

「報酬も良いですし、難しい仕事ではありません。どうですか？」

「ねえハル、ご指名だよ。受けようよ」

「……………」
こう言う時は焦ったら負けだ。まずは話を聞こう
ハルは視線で千景に説明を促す。

「二人にお願いしたいのは、幽霊退治のお手伝いです」
千景の言葉は、ハルの予想の斜め上に行く物だった。

新たな仲間加わります(1)(後書き)

最後のメンバー、紫音の登場です。

果たしてどの様な活躍を見せてくれるのでしょうか。

次も引き続き、紫音メインの話です。

彼女の力とはいったい何なのか？

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

新たな仲間加わります(2) (前書き)

ハルと奈美に告げられたのは、幽霊退治のお手伝い。
あまりに常識離れした依頼に困惑するハルだが……。

新たな仲間加わります(2)

今は誰も住んでいない一軒家がある。

ボロボロの廃屋、持ち主は既に亡くなっていた。

長らく放置されていたのだが、最近その土地を買った人が現れる。廃屋を潰して新しく家を建てようとしたのだが、問題が起きた。

「事故ですか？」

「ええ。工業者が解体工事をしようとする、必ず事故が起きてます。それも毎回」

「それって、呪いとか祟りなんじゃ……」

「んな訳あるか。どうせ偶然が重なっただけだよ」

「いえ、奈美の考えが当たっています。専門家も霊的なものが原因と診断しました」

何ですか専門家って？

M Rとかですか？

「なら神社とかお寺にお祓いして貰えば良いのでは？」

「効果は無かったそうです。専門家によれば、彼らに霊的な力はないとの事です」

何者だよ専門家……。

「そこで、私達ハピネスに依頼がきました」

「幽霊退治……ですか？」

奈美の問いかけに頷く千景。

「んな無茶な。俺らはごく普通の……俺はごく普通の一般人ですよ」

「ちよつとハル。何でさり気なく私を除外したのよ」

察して下さい。

「それは心配いりません。あなた達にお願いしたいのは、あくまでお手伝いからです」

「……幽霊退治を出来る人が別にいる、と？」

「その通りです」

「幽霊退治か……出来そうな人、ハピネスにいるかな？」

奈美に言われ、ハルはメンバーの顔を思い浮かべていく。

「ローズとか出来そうだな、意外に何でも。後は……千景さんは？」

「あ、出来そう出来そう。何か常識外れだもん、色々」と

「……それを本人の前で言う勇氣だけは、褒めておきましょうか」
「すみません、悪いのは奈美です。」

何はともあれ、二人は瞬時に土下座の体勢をとる。

「お慈悲を頂ければと……」

「すみません、本音が口に出ました」

「まあいいでしょう。奈美は後でお話があります」

さらば奈美。君の勇氣は忘れない。

「話を戻します。私も出来ないことはありませんが、より適任者が
います」

「……出来るんだ」

「……出来るんですね」

「……出来るんです」

「……」

「……適任者がいるので、その子に任せようと思ってます」

妙な空気を振り払うように、千景は話を進める。

「はあ……で、結局誰なんです？」

「私だ」

ハルと奈美が振り返ると、そこには先程紹介された紫音が立っていた。
いた。

「紫音ちゃん？」

「ええ。今回幽霊退治を引き受けるのは、紫音です」

「ちょっと待って下さい。さっき紫音ちゃんは依頼を受けなくて」

「基本的には、と言いました。そして今回は特殊なケースに該当しますので」

「じゃあ紫音ちゃんの特別な力って……」

「うむ。霊的な事柄は少々嗜んでいる。除霊も経験済みだ」

落ち着き払った様子の紫音。

自分に余程自信があるのだろう。

「ただ紫音はまだ子供。一人で行動するのは色々と不便ですからなるほど。手伝いの意味が分かりましたよ」

「理解が早くて助かります。準備が出来次第向かって欲しいのですが」

「俺は何時でも。二人は？」

「私も準備万端よ」

「私の支度は終わっている。直ぐに出れるぞ」

奈美と紫音の返事を聞き、ハルは千景に向き直る。

「では、幽霊退治のお手伝いを実行します」

「検討を祈ります」

かくして風変わりなパーティーは、幽霊屋敷へと向かうのだった。

事務所より歩いて十分ほど。

三人は目的の家へと到着した。

「何か……如何にも出ますって感じよね」

「俺にはぼろいだけの家に見えるが」

「居るぞ。間違いなく」

専門家の紫音が断言する。

「で、どうするんだ？」

「あれでしょ、悪霊退散って格好良く戦うのよね？」

「期待を裏切るように済まないが、今回はもつと地味な作業だ」

紫音は持参したポーチから、紙の束を取り出す。

「それは？」

「札だ。私が退魔の力を込めている」

「それを悪霊に向かって投げつけるのよね？」

「お前はアニメか漫画の見過ぎだ。」

「いや、これを屋敷内に貼って浄化していく」

「直接幽霊を倒すんじゃないんだな」

「それも可能だが、こちらの方がより確実に安全なのだ」

「紫音の言葉にハルは内心舌を巻く。」

この少女は依頼の達成と、ハル達の安全を両立させる方法を選んでいる。

「おおよそ子供とは思えない冷静さだ。」

「では、作業の説明をするぞ」

「紫音の言葉に、ハルと奈美は頷く。」

「まずこの札を家の中に貼っていく」

「うん」

「札がある空間は幽霊が存在出来ない。そうして幽霊を奥に追い込んでいく」

「ふむふむ」

「家から幽霊が出ないように、私が最初に結界を張っておく」

「ほうほう」

「最終的にこの一番奥の部屋に幽霊を閉じこめ、私が退治する」

「俺達がすべき仕事は？」

「札を貼るのを手伝って貰いたい。かなりの数を貼るからな」

「言つて紫音は二人に札を手渡す。」

「これって、私達が貼っても大丈夫なの？」

「札自体に力を込めているので、貼るのは誰でも問題ない」

「じゃなかったら、俺達は役立たずだもんな」

「他に質問は無いか？ 無ければ早速始めるとしよう」

ペタペタ

「……………」
ペタペタペタ

「……………」
ペタペタペタペタ

「……ねえハル？」

「地味な作業とか言うなよ」

「うっん、そうじゃなくて」

「何だよ」

「これって、差し押さえみたいだよね」

「嬉しそうに言うな……気持ち分かるけど」

ちよつとだけ、ハルも同じ事を考えてたとは言えない。

黙々と札を貼り続けること数十分。

家の殆どは札まみれになり、残すは後一部屋となった。

「さて、後はここだけだな」

「本当に閉じこめられたのかな？」

「間違いなく、居る。ここからでも力を感じる」

紫音の顔が一層の真剣みを帯びる。

緊張感がハルにも伝わる程だ。

「これからどうする？」

「私が幽霊を封印する。二人は部屋の外で待っていて欲しい」

「入っっちゃ駄目？」

「奈美、ここは専門家に任せよう」

「理解感謝する」

紫音はハルに軽く礼をすると、最後の部屋のドアを開けた。

十畳ほどの和室。

部屋の外に居るハルですら、その部屋の異様さが感じ取れる。

「……これ、やばい」

「??? 何が？」

「分からないけど……やばい感じがする」

全身に鳥肌が立っていた。

背骨に氷水を流し込まれたような、気持ち悪い寒気だ。絶対にそこに近づいてはいけない。

本能からの警告だった。

「ハルって靈感あるの？」

「無いと思ってたけど……」

因みに家族は全員靈感があるらしい。

よく心霊番組をみて、本物だ偽物だと盛り上がっていた。のけ者にされ、少し寂しい想いをしていたのだが。

「でもこれが靈感なら、こんなの無い方が良い」

今はただ、目の前の部屋から感じる何かが怖くて仕方なかった。

紫音は部屋の中央部に立つと、ポーチから札を取り出す。

ハル達が貼っていた札とはまた違う種類のような。

「……………出て来るが良い」

静かな、しかし拒否することを許さない強い命令。するとそれに呼応するように、ソレは現れた。

「なな、何だあれ？」

「何か見えてるの？」

「黒いガス見たいのが出てきた。凄………怖い」

身体が震えるのが分かる。だが、それを止められない。

本能から来る恐怖が、ハルを怯えさせる。

「……………えいつ」

「な、何を？」

「よく分からないけど、こうしてれば安心出来るでしょ？」

ハルの震えを止めるように、奈美は背中越しに抱きついてきた。

「おい、止めろって……」

「いいから。怖いときは誰かが側にいれば、落ち着くんだよ」

ギョツとお腹に回す手に力が籠もる。

不思議とそれだけで、恐怖が薄れていく気がした。

黒いガスの様なソレは、人を型どり姿を現した。

紫音は鋭い眼光でソレを見据え、札を額に当てて精神を集中する。

「悪霊退散……………散っ！！」

紫音が札をソレに投げつけた。

『ガアアアアアアア』

黒いガスは、見る見る札へと吸い込まれていく。

魂が底冷えするような断末魔を上げ、ソレは完全に消滅した。

「……………除霊完了。この部屋にも札を貼るので、手伝いを」

「はい了解！」

紫音に言われ、奈美が部屋の中へと入っていく。

ハルもそれに続こうとして、気づく。

まだ、あの嫌な感覚が消えていないことに。

「では他の部屋と同じように頼む」

「任せてといてよ。ってハル、どうしたの？」

部屋の入り口で立ち止まったハルを不審がり、奈美は振り返る。

紫音も同様に不思議そうな視線を向ける。

「いや、何かまだ嫌な感じがして……………二人とも、下だっ！！」

「なっ！？」

「へっ？」

ハルが叫ぶのと同時に、床から拭きだした黒いガスが二人を襲う。

間欠泉の様に勢いよく吹き出したそれに、紫音と柚子は弾き飛ば

され、壁に激突した。

「何々、何なのよ？」

ソレが見えない奈美は、何が起きたのか理解できない。

壁に激突してケロッとしているのは流石と言うか、何というか…

…。

だが紫音はそうはいかない。

「紫音ちゃん、大丈夫？」

奈美の呼びかけに反応しない。

気絶したのか、あるいは……。

ソレは再び人型になると、目標を紫音に定めたようだ。

ハルと奈美など気にも留めず、ゆっくりと紫音の元に近づく。

「トドメをさすつもりか……ふざけんあつ!!」

恐怖で竦んでいた身体に一喝して、ハルは駆け出す。

ソレからすれば、自分にとって驚異である紫音以外は眼中にないのだろう。

突っ込んでくるハルのことなど気にも留めない。

それが敗因だ。

ハルは床に転がる紫音のポーチから、一枚の札を取り出す。

さつき紫音が使っていた札だ。

「札自体に力があるから、使うのは誰でも良いんだぜっ!!」

それは作業の前に紫音から言われていた事。

ならば、幽霊の姿さえ見えていれば、ハルにだって使える筈だ。

そしてその通り、ソレはハルが投げつけた札によって、再び消滅した。

静けさが戻った。

もう嫌な感覚は無い。恐らく完全に消えたのだろう。

「ハル、何したの？」

「幽霊が残ってたみたいだけど、もう消えたと思う」

「凄じくない。幽霊退治しちゃうなんて」

「お札のお陰……あ、そうだ。今の内に札を部屋に貼ってくれよ」

「それは良いけど、ハルは？」

「すまん……ホツとしたら腰が抜けた」

大笑いされたのは言うまでもない。

新たな仲間加わります(2) (後書き)

紫音弱つ、の回でした。

……とまあそれは冗談として、無事幽霊退治は終わりです。

一応後付けすれば、幽霊は最初から二体いて、後から出てきた一体が本体。知能があり奇襲をしかけた……て感じ
で。

流石にこのままでは、紫音があまりに不憫ですので、
次もこの話が続きます。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

新たな仲間加わります(3)(前書き)

どうにか依頼を達成したハル達一行。
行動不能になった二人のために、迎えを待つことに。

新たな仲間加わります(3)

「む……ここは？」

「気が付いたみたいだな」

「ハル殿？ 私は……………っ、あの悪霊は？」

「やつつけたよ。お札を勝手に使わせて貰ったけどね」

紫音は信じられないと言う顔で、ハルを見る。

「札に力があつて、誰でも使えるって聞いてたから助かったよ」

「いや、それは……………」

「あゝ紫音ちゃん気が付いたんだ」

何か言いかけた紫音の言葉は、部屋に入ってきた奈美に遮られた。

あれから十分ほどの時間が過ぎていた。

奈美は部屋に札を貼ると、事務所に携帯で連絡をしていた。

『ハルが腰を抜かしちゃったんで、迎えに来て欲しいです』

間違いなく大爆笑されただろう。

自分からかわれる事は覚悟しなくてはならない。

それでも自分と傷ついた紫音が歩いて帰るよりは、余程マシだ。

「軽い打撲だと思うけど、帰ったら袖子さんに診て貰った方がいいわよ」

「だな。頭も打つてると思うし」

「う、うむ。かたじけない」

紫音は姿勢を正して、二人に礼を告げる。

「この度は私の失態で危険な目に合わせた。本当に申し訳なく思う」
「気にしないでよ。依頼は無事終わったんだし」

「だが、ハル殿は起きあがれないほどの傷を負ったのだろうか？」
心配する紫音に、奈美はクスクスと笑いを堪えきれない。

「違うのよ。ハルは単に腰が抜けただけ。全く勇気があるのか、無いのか」

「うるさいやい」

「ハル殿はあの悪霊を視認出来ていたのか？」

「黒いガスみたいなのなら見えたよ」

「なら笑うことなど出来ない。アレに立ち向かうのは、想像を絶するほどの恐怖の筈だ」

「少しかだけ涙が出そうになる。

理解してくれるというのは、こつも嬉しいものなのか。

「そうなの？」

「お前も体験すれば分か……………」

「言いかけて止めた。」

奈美が笑いながら悪霊を退治する姿が、明確にイメージ出来てしまったからだ。

「とにかく、ハル殿、奈美殿、重ね重ね感謝する」

深々と紫音は頭を下げた。

迎えが来るまで、三人は部屋で休憩することにした。

軽い雑談を交わしていると、

「ねえ、紫音ちゃん。ちよつと良いかな？」

奈美が紫音に問いかける。

「何かな、奈美殿」

「その殿って呼び方、止めない？ 呼び捨てで良いわよ」

「目上の方に敬称を付けぬのは、無礼に当たるからな」

「む、でも何かやだ」

唇を尽きだしてブーたれる奈美。

「子供か、お前は」

「ハルだって嫌じゃない？ 何か他人行儀な感じがするし」

「まあ確かに」

君やさんならともかく、殿と言うのは流石にこそばゆい。

言われ慣れてないのもあるが、やはり相手を遠く感じてしまう。

「ふむ、不快に思わせてしまったか。申し訳ない」

「ううん、そんなんじゃ無いけど……もっと仲良くなりたくなってハルもそれは思う。」

だが紫音も意地悪で言っているわけではない。

目上に敬称を付ける、と教え込まれてきたものだろう。
何かいい手はないか……。

「……………なら、目上じゃなければ良いな」

「どゆこと？」

首を傾げる奈美に、ハルは任せると視線を送る。

そして、紫音と正面で向き合った。

「なあ、紫音ちゃん。俺達と友達になつてくれないか？」

「友達？」

「うん。友達なら年上とか関係無しで、お互い名前で呼び合つのが当然だろ」

「なるほど、確かにそうだわ。紫音ちゃん、ううん、紫音。友達になりましょ」

「し、しかし……………」

突然の申し出に戸惑う紫音。

「私は今まで、友人などいなかったから……………」

「じゃあ私達が第一号つてことで、どうかかな？」

「嫌なら断つてくれて構わない。ただ俺達は、友達になりたいと思つてる」

黙り込む紫音に、ハルは答えを急がない。

こちらからは手を伸ばした。

後は紫音がその手を掴んでくれるかどうかだからだ。

奈美もそれを理解しているのか、優しい微笑みを向けるだけ。

無言の時間が流れる。そして、

「……私も、二人と友達になりたい」

頬を染めはにかむ様な顔で、紫音は小さく答えた。

「うん、じゃあこれからよろしくね、紫音」

「よろしく……奈美」

握手を交わす二人。

「俺もだな。よろしく、紫音」

「……………うん、ハル」

ハルが差し出した手を握り返す紫音。

遠かった距離が、今この時確かに近づいたのを感じた。

「迎えが来たみたいね」

「歩けるか？ 紫音」

「うむ、私は問題ない。ハルは？」

「……………」

「おぶってあげようか？」

ニヤニヤと笑う奈美。

「いや、何とか……………むっ」

立ち上がるうとするが、何と根性のない腰だろう。

未だに働くことを拒否している。

「無理をするな。どれ、私が肩を貸そう」

「……………すみません奈美さん。お願いします」

恥ずかしさの天秤は、紫音よりも奈美を選んだ。

「いいわよ。でもおぶるのは断られたし、よっ」と

奈美はハルの首と膝下に手を回し、楽々と持ち上げた。

「いわゆる一つの、」

「お姫様抱っこってやつね」

「辱めだ。」

「なるほど。確かに腰を痛めた相手には、その姿勢の方が有効だな」

冷静に分析しないでください。

痛めたわけでは無いです。

そもそも奈美にそんな気遣いは無いはずですよ。

「紫音のお墨付きよ。さあ行きましょう」

「……神よ、そんなに俺が嫌いか？」

勿論嫌いです

そんな神の微笑みが見えた気がした。

新たな仲間加わります(3) (後書き)

紫音編はひとまず完結です。

特別な環境で育った少女が、ハル・奈美との出会いと交流を切っ掛けに、

どのような変化をしていくのでしょうか。

これでハピネスのメンバーは、ひとまず全員集結しました。

今後は、彼らの日常・依頼のお話になります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話〈紫音と千景〉（前書き）

紫音と千景のちょっとした会話。

今回本当に短いです。

話と話の繋ぎ、とと思ってください。

小話〈紫音と千景〉

幽霊退治の翌日。

紫音は八ピネス事務所の千景を尋ねた。

「少し良いか？」

「あら、怪我はもう良いんですか？」

「問題ない。柚子殿の治療も的確だったのな」

あの後事務所に戻り、紫音は柚子に手当をしてもらった。

外傷は打撲と数力所の擦り傷。一応頭の検査もしたが、異常は無かった。

今は絆創膏と湿布をしているが、傷も残らないだろう。

「それは一安心です。いきなり傷物にしたとあれば、老人達が煩いですから」

「厄介払いした連中に何も言わせるつもりはない」

「……それで、何の用でしょうか？」

話題を変えるように、千景は切り出す。

「聞きたいことがある。……ハルだ」

「ハル？」

思わず千景は目を見開く。

紫音が自分以外の人を呼び捨てにした事に、少なからぬ驚きがあった。

「む、ああ。その……友達になつたんだ。あの二人と」

「そうでしたか」

千景は優しく微笑みかける。

紫音をわざわざ自分の元に呼び寄せたのは、普通の生活を送らせるため。

そうして少しずつ普通の子供のようになれば良いと考えていた。時間がかかると思っていたが、僅か一日で友達が出来た。

これは嬉しい誤算だ。

「それで、ハル君の何が聞きたいんです？」

「ハルは何者だ？」

「……何か少し前に同じフレーズを聞いた気がしますね。普通の男の子ですよ」

「普通の人は悪霊退治などできん。例え多少靈感があったとしても、な」

「貴方のお札を使ったのでしょ？ 誰でも使えると言っていましたよ。依頼の報告は受けていた。」

お札の力を使った、何も問題は無いはずだが。

「浄化の札はそうだが、あの札は違う。使用には霊的な力と訓練が必要なのだ」

「彼に霊的な力がありますか？」

「無い……と思う」

「随分不確かな言い方ですね」

「潜在的に力が眠ってる場合もある。可能性は否定できない」

「なら、本人に聞いても無駄ですかね」

「自覚していない確率の方が高いからな。まあ聞くのも手だが」
ふむ、と千景はアゴに手を当てて考える。

別にハルに力があってもなくても、さほど問題ではない。

ただ自分の駒……もとい会社の所員の事は出来る限り知っておきたい。

「次の週末、貴方を交えてハル君とお話してみましよう」

「随分先だな？」

「貴方、明日から中学校でしょうが」

「……あっ」

結城紫音。大人びているが、まだ中学一年生。

義務教育は大切です。

小話〈紫音と千景〉（後書き）

あまりに短い話ですいません。

本当は次の話とくっつけて居たのですが、少し長くなっていたので、
凄く中途半端な所で切りました。

次はいよいよハルのお話。

今回紫音が抱いた疑問が解決されると良いのですが……。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

ハルの能力（前書き）

ハピネス事務所で雑談を交わすハル達。
そんな時、千景からある質問が……。

前回の小話と話がリンクしてます。

まだの方は、そちらを先にお読みになる事をお薦めします。

ハルの能力

ハル達がハピネス事務所で休憩している時だった。

「そう言えばハル君に聞きたいことがあるんです」

不意に千景が切り出した。

「何ですか？」

「ハル君は靈感とかあるほうですか？」

「ん〜無いと思います。家族はあるみたいですけど」

非常識な父親と同等の母親、そしてハイスペックの妹。

彼らなら何でもありのような気もするが。

「家系か……潜在的にはありそうだな」

「何か言ったか、紫音？」

「いや、こちらのことだ」

「それで千景さん。それが何か？」

「実は……」

千景は先日紫音とした会話を、ハル達にも話す。

紫音の札は普通の人には使えない事。

だからハルにはそう言った力があるのでは無いかと言う事を。

「もしハル君に力があるなら、そう言った依頼も受けて欲しいなと思っ
ています」

「無いと思いますよ」

「だがあの時は確かに札を使ったのだから？」

「ああ、それは紫音が使うのを見てたからだよ」

ハル以外の全員にはてなマークが浮かぶ。

「詳しく話して貰えますか？」

「良いですけど、あまり面白くない話ですよ」

それでも全員が頷くのを見て、ハルは咳払いをしてから話し始めた。

「簡単に言えば、俺は紫音をモノマネしたんです」

「モノマネ？」

「あの、テレビとかでやってる奴ですか？」

ハルは頷き話を続ける。

「そうです。ただ俺が真似るのは、外見では無いですけどね」

「じゃあ何を真似ると言うのだ？」

「その人の技術です。模倣って言った方が伝わりやすいですかね
それだけ聞くと凄まじいチートだ。」

「あり得ん。科学的に考え、そんなことは不可能だ」

「そう思うだろ？ だから俺も言わない」

誰かに話したところで、馬鹿にされるのがオチだ。

だからハルは殆ど誰にもこれを話したことはない。

「まあ紫音を真似たからお札が使えた。俺からはこれ以上何も無い
ですよ」

「信じがたいですが……そう考えれば辻褄が合います」

「でもそんな才能があるのに、どうして普通の大学生やってるの？」

奈美の問いかけ。

確かに技術が模倣できるなら、どんな分野でも活躍できる筈。

それはもつともな疑問だ。

「実はな、結構欠陥があるんだよ」

「と言いますと？」

「まず再現性ですね。偽物である以上、本物よりも大分レベルが落ち
ちます」

ハルは一度言葉を句切り、良い例は無いかと考える。

「例えば俺が一流ピアノ奏者のモノマネをしたらしましょう」

「うんうん」

「当然その奏者の演奏には及ばず、精々並のピアニスト位の演奏し
か出来ません」

「ビデオのダビングのように、劣化すると考えれば良いか？」

蒼井の確認に頷くハル。

まあ、今時の子はビデオテープを知らないかも知れないが……。

「そして、積み重ねた技術では無いので、当然忘れるのも早いです」

「一夜漬けの勉強みたいに？」

「ああ、そんな感じ。一週間もすれば綺麗さっぱりさ」

「随分と詳細ですが、調べたことが？」

「まあ、昔色々とありまして」

それ以上は言いたくない、とハルは無言で告げた。

「俺の話はこんな所ですけど、納得して貰えましたか？」

「……最後に一つ試させて欲しい」

言って紫音は、ポケットから綺麗な布に包まれた、石を机に置いた。

一見何処にでもありそうな、ごく普通の石だ。

「これがどうした？」

「何も感じないか？」

こくりと頷くハル。

周りの面々も同様の様だ。

「よし、なら……こうすればどうだ？」

瞬間、ハルの背筋が凍った。

あの時悪霊を見たときのように、純粹な恐怖がハルを襲う。

「な、なな、何だこれ……凄いやばい感じがする」

「石をよく見て見る」

「……紫の靄みたいなのが、まとわりついてる。凄い……気持ち悪い」

「やはりか……もう充分だ」

紫音が石を布で包み込むと、ハルは恐怖から解放された。

全身に冷や汗をかき、まだ身体の芯が震えている。

そんなハルの様子を、不思議そうに周囲は見ている。

「ハルが技術を模倣すること、信じる。そしてそれに例外が無いこ

とも」

「どゆこと？」

「今私は、一時的に靈的な力を増幅する術を使った」

奈美の問いかけに、紫音は静かに答え始める。

「すると今まで反応しなかったハルが、この石の異常さに気づいた」

「その術を真似たお陰で、ハル君も一時的に力が増したと？」

「うむ。私の目から見ても分かるほどハッキリとな。因みに今もだ」

ナンダツテ？

「ハル、あそこを見てみる」

「ん、何かあるのか？」

「事務員の人は何人いる？」

「六人だろ？ 男が二人と、女が四人」

「えつつつ！？」

何故かハル以外の皆さんから驚きの声。

おかしな事を言っただろうか……。

「六人、だよな？ おい奈美、何で顔を背ける」

「ハル君……言いづらいのですが」

「今居る事務員の方は……」

「五人だぞ」

またまたご冗談を。

「みんなしてからかわないでくれよ。だってほら、ちゃんと六人いるじゃん」

ハルは立ち上がり、事務員の元へ。

その事務員達も、どこか青ざめた顔でハルを見ている。

「鈴木さんだろ、田中さんに佐藤さん、高橋さんに渡辺さん、それに……あれ？」

ふと最後の事務員の前で動きが止まる。

長い黒髪の女性、今週何度か見かけていたが、名前をちゃんと聞いていなかった。

「ごめんなさい、まだ名前を聞いてませんでしたね。お名前は？」

『……………吉田と申します』

「吉田さんですか。俺は御堂ハルです、どうぞよろしく」

「「なつつつ!!」「」

一斉に驚く事務所の皆さん。

その表情は明らかに恐怖で強張っていた。

「あれ、みんなどうしたんです?」

「……………あのねハル、落ち着いて聞いて欲しいんだけど」

子供を諭すように優しく声を掛ける奈美。

「その机は今産休中の、山本さんの席なんです」

恐る恐る告げる柚子。

「そして、今吾輩達には、その席は空席にしか見えないぞ」

冷や汗を掻きながら蒼井が言う。

「最後に、事務員の吉田は……………通勤途中の事故で……………半年前に

亡くなってます」

千景が締めた。

なるほど、つまり要約すると、

「失礼ですが、貴方は幽霊ですか?」

『……………はい』

「そうでしたか、は、ははは」

ハルは乾いた笑いを浮かべ、奈美達の元に戻ってきて、

「……………きゅう」

そのまま見事に気絶した。

十分後。

「俺、幽霊と話しちゃった」

「次から気を付けよ。下手すると取り憑かれかねん」

そもその原因はお前だ。

「良いな、ハル。私も幽霊とか見てみたい」

「残念だが、奈美にはその手の素質が欠片も見あたらぬ」

しくしくと引き下がる奈美。

「出来るなら俺も見たくない。まあ、あの悪霊と違って怖い感じはしなかったけど」

「当然だ。彼女は悪霊ではないからな。強い使命感から、死してなお働こうとしていたのだ」

紫音の言葉に、生前の彼女を知るメンバーは神妙な面もちになる。

「彼女は、大変優秀な事務員でした」

「優しくて頼りがいがあつて、何時も助けて貰ってました」

「吾輩の実験に付き合ったのも、あの女くらいだしな」

感傷に浸るように呟く。

「それで、吉田さんはどうなった？」

「私が成仏させた。彼女にとって一番良い選択だからな」

「そっか」

よく考えれば何とも失礼な態度をとってしまった。

お詫びの一つくらいしたかったが……。

「とにかく、ハルのモノマネは理解した。私の疑問は全て解決したぞ」

「それは何よりだ」

「でもハル、この間も真似たんでしょ？ 今日まで幽霊見なかったの？」

「分かんない。生きてる人が幽霊か、どうにも見分けがつかん」

「そう言われれば、やけに周りに人が多いと思つたが。」

「劣化したからだろう。幽霊を見分けるのは、見る以上の力が必要だからな」

「でも凄いですよハルさん。私を真似れば手術だって出来るんじゃないですか？」

される方の身にもなってください。

「とにかくハル君の事も分かりましたし、今日はここまでにしましよう」

「「はい」」

「さあお仕事です。彼女が安心して眠れるように、バリバリ働きま
すよ」

「「お〜〜〜!!」」

ハピネス一致団結の瞬間だった。

「……あれ、何か忘れてる気が……」

ハルの能力（後書き）

今回は、ハルのちよつと変わった才能のお話でした。

見たものの技術を模倣する。

一見万能ですが、意外にそうでも無いのがハルらしいと言いますか……。

モノマネについては、今後少しずつ話に絡めていきます。

これedyouやく、超人達と肩を並べる事が出来て一安心です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話へローズって……（前書き）

あることに気がついたハル。

そう言えばこのところ、彼の姿が見えないが……。

小話へローズって……」

「あ〜〜思い出した〜！」

「どうしたのよハル。いきなり叫ぶなんて」

「春ですから。良ければ私が診ましょつか？」

「ハルだけに、か？ くつくつく……ぬおおおお、苦、苦、苦い〜」

柚子が無言で口に放り込んだ黒い丸薬で、蒼井はのたうち回る。それを見て奈美は思いきり顔をしかめる。

「あの〜柚子さん、その丸薬って何種類あるんですか？」

「私の丸薬は百八まであります」

「……マヂですか？」

「勿論冗談です」

「勿論本当ですよね？」

「それでハル君、一体何事ですか。突然事務所で叫び出す何て」

「あ、そうそう。前回から気になってたんですが、一人足りませんよね？」

「そうだったけ？」

「そうですね？」

「ぐぐぐ……気のせいじゃないのか？」

蒼井、無理するな。

「いやいや、ここ一週間以上、ローズの姿を見てません」

「……あっ！」「」

「気づこうよ、みんな。」

「最後に見たのって、何時だったけ？」

「確か、紫音さんが初めて来た時ですね」

「依頼で一週間以上不在もあり得るけど、あそこに何も書かれてな

い

ハルが指差すのは、依頼掲示板横のホワイトボード。そこには所員達の行動が記入される。

依頼実行中、事務員なら休憩中、あるいは長期休暇中などだ。

「でもローズの欄には……」

『ヒ・ミ・ツ』

「……………」

どう突っ込めばいいのだろう。

とにかく所在地も目的も、一切が不明だ。

「何か極秘の依頼とか受けてるんじゃないの？」

「極秘って何だよ。そんなの、やばい仕事しか浮かんでこないぞ」

「暗殺とか……って映画の見過ぎですかね」

笑い合うハル達三人。

勿論冗談のつもりだったのだが、

「……………」

千景が一瞬頬を引きつらせ、視線を泳がしたことに気づいてしまった。

「えっと千景さん……一応聞いておきますけど、無いですよね？」

「……当然です。ハピネスは至って健全な優良企業ですから」

「で、ですよね」

信じるしかない。

「剛彦は今、海外出張中です」

「海外って、ハピネスの活動範囲広いですね」

「蒼井のことはすっかり忘れてるハル。」

「依頼は日本からです。詳しくは言えませんが、海外派遣と言う形ですね」

「長期ですか？」

「任務……げふんげふん、依頼完了の報告は既に来ています。今日

くらいに戻ってくるかと」

空耳だと嬉しいです。

「でもスツキリして良かったじゃない」

「そうですね。近々お戻りになると言う話ですし」

二人には聞こえたのだろう。

少しぎこちない笑顔で話題を終わらせようとする。

「ま、それもそうだな。じゃあ俺は依頼を選ぶとするか」

ハルもそれに乗り、依頼掲示板に向かおうとした時だった。

「たっだいまあ〜」

「「噂をすればっ!!」」

凄まじいタイミングで事務所のドアから、ローズが登場してきた。

「おかえり、丁度今ローズの話をしてたんだよ」

「知ってるわよお。お陰でなかなか事務所に入りにくかったんだか

らあ

「ああ、何か色々すいません。気を遣わせちゃって。」

「お疲れさまです、剛彦」

労いの言葉を掛ける千景にローズはビシッと敬礼をして、

「はっ！ 特務兵コード03、ただいま任務を終えて帰還しました

！」

とんでもない事を言い始めた。

なんだ、特務兵って。

てかやっぱり任務って言ってる。

「あ、あの〜千景さん……」

恐る恐る尋ねるハル。

聞くのは正直怖いけど、好奇心の方が勝る。

見れば奈美と柚子、それに事務員の方々も聞き耳を立てている。

全員の視線が集まる中、千景は、

「……………えいっ」

指をパチンと鳴らし、そして……………世界は暗転した。

「依頼は日本からです。詳しくは言えませんが、海外派遣と言う形ですね」

「長期ですか？」

「任務……げふんげふん、依頼完了の報告は既に来ています。今日くらいに戻ってくるかと」

あれ？

何か激しい既視感を感じるのだが……。

「どうしたの？何かポーっとしてるけど」

「いや、何でもない。ちょっとデジャビュを感じただけだ」

「春ですからね」

「ハルだけにか？くっくっく……ぬおおお、酸っぱい、酸っぱいぞおおおお」

ノーモーションで繰り出された柚子の丸薬に、またも蒼井が悶える。

「仏の顔も三度まで、蒼井さんに対する私の顔は一度だけです」

（（鬼だ……仏どころか鬼がおる……））

「とにかく、剛彦に関しては何も問題ありませんので」

「分かりました。じゃあ俺は依頼でも選びますか」

ハルはどうもぼやけた頭を叩きながら、依頼掲示板へと向かう。

「たっだいまあゝ」

「「噂をすればっ!!」」

既視感、と言うかそれ以上の物を感じる。

「……あら、どうしたのハルちゃん。そんな熱い視線を……あつ、もう、大胆ねえ」

「いや違うから」

「お疲れさまでした、剛彦」

千景は労いの言葉をかけながら……何故か目がマジだった。

「はっ!……はっは、久しぶりね千景ちゃん。無事に戻ったわよお」

「それは結構です。正式な報告は明日で結構ですから、今日は身体

を休めると良いでしょう」

「なら、お言葉に甘えんとするわあ。じゃあみんなあ、また明日」
そう言い残し、ローズはあっという間に事務所から出ていってしまっただ。

呆然とそれを見送る一同。

「剛彦も戻ってきましたし、これでハル君も一安心でしょう」

「え、ええ、そうですね」

「さあ依頼を選んでください。報酬が良いのも用意してますよ」

「……気遣い痛み入ります」

余裕があつたはずの貯金は、事務所修繕費ですっかり消え果てた。火の車を鎮火するためにも、ハルは少しでも割の良い依頼を探すのだった。

小話へローズって……（後書き）

オチがない？ 小話なんてそんな物です。偉い人には………すいません。

長期の任務………もとい依頼を終えてハピネスに帰還したローズ。この便利屋、何やら色々な顔を持っているようですね。

次は、別のシリーズに入ります。

折角全員集合したので、オールスターで依頼に挑みます。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう(1)(前書き)

千景の元を訪れた一人の客。

その口から告げられる依頼とは……。

怪盗編、今回は導入部です。

怪盗と勝負しよう(1)

すっかり暖かくなったある日。

ハルがいつものように、ハピネスの事務所を訪れると、

「ん、来客中か……」

入り口のドアに、来客中につき入室は静かに、と張り紙がしてあった。

それにならい、そつとドアを開けて事務所に入る。

「あらハルさん、こんにちわ」

「どうも鈴木さん。来客中ですか？」

「ええ。今応接スペースで千景さんが応対してるわ」

視線をそつと向けると、そこには一人の女性が千景と向き合っていた。

眼鏡を掛けた、一見するとキャリアウーマンに見える妙齢の女性。きつめの顔をしていて、折角の美人が勿体ないと思えてしまう。

「……じゃあ俺はあそこで時間潰してますね」

「すみませんね」

謝る鈴木を手で制して、ハルは応接スペースから離れた休憩スペースに移動する。

と言つても机と椅子が置いてあるだけなのだが。

そこで用意されていた雑誌を適当に読んでいると、

「……………」

応接スペースから話し声が聞こえてくる。

悪いとは思いつつ、そつと聞き耳を立ててみた。

「ですので、大変不本意ではありますが」

「ええ、分かっています。クビがかかっているので、プライドを捨てたんですね」

「なつ、違つ。私はあの悪党が蔓延るのが許せないだけです」
「ご立派ご立派。流石公僕は違いますね」
「馬鹿にして……。とにかく、協力を要請したいのです」
「良いんですか？」
「勿論非公式で。依頼料も私が自腹を切ります」
「こちらとしては、出す物出して貰えば構いませんよ」
「なら契約成立と言うことで」
「では前金としてこれくらい……成功報酬はこんな所で」
「ちよつと待て。前金なんて無かつたでしょう？」
「前金は口止め料です。成功失敗問わず、依頼がばれると不味いでしょ？」
「確かにそうですが……」
「成功すれば貴方の首は当分安泰。決して高い額では無いと思ひますよ」
「……………いいでしょう。この条件を飲みましょう」
「随分と追いつめられてますね」
「私は過去二回失敗している。もう次は無いはず」
「汚名返上のチャンスですか」
「私の管轄に奴が来た。神がくれたラストチャンスだと思つています」
「……………分かりました。ではこちらにも精鋭を用意しましょう」
「貴方だけで充分ですよ？」
「友達の危機に出し惜しみるほど、私は薄情者ではありません」
「そつ……………すまない」
「では今晚十時ですね。現場に話は通しておいて下さい」
「ああ。それでは頼みました」
話が纏まり、女性は席を立ち、そのまま颯爽と事務所を去つていった。

「……………ハル君」

「うわああああ」

突然背後から掛けられた声に、ハルは思わず飛び上がる。

振り返ると、応接スペースに居た筈の千景が、直ぐ後ろに立っていた。

「ち、千景さん、何時の間に？」

「今そつと気配を消して近づいただけです。盗み聞きする時は、気配くらい消しなさい」

んな無茶な。

「すみません、つい話し声が気になって」

「別に構いませんけどね。ただ、事務所以外では他言しないように。彼女の為にも、ね」

「はい、それは勿論」

よろしい、と千景は微かに笑みを浮かべた。

「それに、どうせハル君にも参加して貰う予定でしたし」

「例の依頼ですか？」

「ええ。今回は久しぶりに私も赴きます」

「どれだけ大変な依頼なんですか？」

千景はそれには答えず、無言でハルが開いていた週刊誌を指差す。カラーで特集が組まれていた記事。

見出しにはこう書かれていた。

『怪盗コレクト。その謎に迫る』

怪盗と勝負しよう(1) (後書き)

怪盗……心惹かれる言葉です。
ルパンとか凄い好きなんですよ。

非常識の集まり、ハピネスは怪盗にどう挑むのか。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう(2) (前書き)

事務所に集められた、ハピネスの精鋭達。

そんな彼らに、千景は怪盗と対決することを告げるのだが……。

怪盗と勝負しよう(2)

時刻は午後六時。

ハピネス事務所には、千景が緊急招集を掛けた面々が集まっていた。

「怪盗コレクトって、あの有名な？」

「そうです。世間を騒がす怪盗、それが今回の相手です」

奈美の言葉を千景は肯定した。

「今回の依頼は、彼の怪盗から「悪魔の心臓」を守ることです」

「特殊な形をしたあ、大型のルビーねえ」

もっ少しまともな名前は無かったのだろうか。

「これより私達は美術館に移動。対象の警護にまわります」

「そんなの警察の仕事だろう。吾輩達の出る舞台とは思えんが」

「警察からの依頼です。非公式ではありますが」

「……ひよつとして、美園さんからですか？」

柚子の問いかけに頷いて千景は答える。

「美樹ちゃんかあ。それなら気持ちも分かるわあ」

「あゝ、それって誰ですか？」

「ハル君と奈美、それにドクターは知りませんね。その警察署長です」

「美園美樹ちゃん。キャリア組のエリートさんよあ」

それは凄い。

「ただ、あの怪盗が出てきてから、あまり状況は良くないと聞いてます」

「自分の所轄で、過去に二度犯行を許しています。次しくじれば…」

千景は右手で首の前を斬ってみせる。

「??????」

「クビつてジェスチャーだよ。まあ実際クビにならなくても、責任は取らされるだろうな」

「何で？」

「責任者は、責任を取るためにいるからです。静かに告げる千景。」

ハピネスの責任者として、何か思うところがあるのだろうか。

「とにかく、今回のヤマは彼女にとって、最後の汚名返上のチャンスです」

「知らない仲じゃないしい、助けてあげたいわねえ」

「えっと、知り合いなんですか？」

「私の古い友人です。二年前に赴任してからは、色々とやり取りもありまして」

交友関係広いですね。

「それを抜きにしても、正式な依頼として受けた以上、私達も全力で挑みます」

千景の言葉に頷く一同。

断るならそもそもこの場に来ていない。

「予告は今晚十一時。十時に現地集合の約束です」

「集合まで後三時間半ですか……」

「各員はそれぞれ準備を下さい。出し惜しみは無いです。ギラツとハル以外の目が輝く。」

「ふむ、なら超電磁砲やレーザーの使用は？」

「勿論許可します」
をい。

「劇薬、毒薬の使用も」

「グッドです。即効性のあるものを頼みます」
をいをい。

「実弾は？」

「断る理由がありません。サーチ&デストロイでいきましょう」

をいをいをい。

「えつと……本気出しても？」

「前情報で怪盗コレクトは男と判明してます。貴方の力を見せて下さい」

待てええええい。

「ちよつと、冷静になつて下さい。色々突っ込みどころが多すぎて……」

「何処がおかしな点が？」

「明らかにオーバーキルですって」

「こついつた悪党はしぶといと相場が決まっています。やり過ぎで丁度良いでしょう」

「度を超していますよ。警察だって警備につくんでしょ？ 現行犯じゃないですか」

「ああ、それは安心して下さい。ちゃんと黙認する約束ですから一欠片も安心できない。

頼むよ警察。

「そもそも何を他人事の様な顔をしてるんです。貴方も殺るんですよ」

字が、字がおかしい。

殺る気に満ちあふれていますよ。

「えっ？ 俺は人間止めてないというか、そんなスキルないです」

「無ければ作ればいい。今からハル君には、徹底的に私が暗殺術を伝授します」

使えるんですか？

「普通なら無理でしょうが、貴方のモノマネなら充分実用に耐えるレベルまで達するでしょう」

「達したくない、達したくないですううう」

「さあ始めますよ。みんなは準備を整えて置いて下さい。九時にごこを出ます」

「「イエス・ママ!!!」」

駄目だ……みんな壊れてる……。
悲鳴を上げながら、ハルは千景に引きずられていくのだった。

怪盗と勝負しよう(2) (後書き)

久しぶりにこうした作戦会議を書いた気がします。

今回も非常に短い話ですが、後半が凄まじい長さになったので、
またも中途半端なところでカットしました。
読み苦しくて、申し訳ありません。

次はいよいよ、怪盗との対決です。

過激な準備をしているハピネスの運命は如何に。

次回もまた、お付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう(3) (前書き)

遂に決戦の地に辿り着いたハピネス一同。
いよいよ、怪盗との勝負が始まる……。

怪盗と勝負しよう(3)

時刻は、午後十時。

八ピネス一行は、美術館に到着した。

「千景……」

「美樹、約束通りうちの精鋭を揃えてきましたよ」

「一応確認するけど、お願いしたのは「悪魔の心臓」を守る事で間違いない？」

「何を今更」

「戦争する訳じゃ無いよね？」

「当然です」

「……ならいいのですが」

戸惑う警察署長の美園美樹^{みそのみき}。

その気持ちは痛いほど分かる。

明らかに警護と呼べない、重装備が目の前にあるのだから。

「美樹ちゃんご無沙汰あ。今夜はよろしくねえ」

「剛彦。お願いだから他の展示品を傷つけないでね」

サブマシンガンを主武装に、全身に重火器を纏ったローズ。間違いなく危険人物だ。

「お久しぶりです。お互い頑張りましょう」

「柚子……その服を着てると言うことは……本気なんですね」

小さなポケットがあちこちに付いている、ズボンルックの柚子。全身くまなく色々な薬を仕込んでいるのだろう。

ある意味ローズよりも危険だ。

「吾輩は大天才科学者の蒼井賢だ。まあ大船に乗ったつもりでいるが良い」

「はあ、初めまして。美園美樹です」

背中に長距離砲を背負った蒼井に、美園の笑みが引きつる。

「初めまして、早瀬奈美と申します。よろしくお願いします」

「御堂ハルです。どうぞよろしく」

「ようやくまともな人達が……。美園美樹です、本当によろしく」

一見普通のハル達に、美園は本気で嬉しそうに握手を求めた。

どうやら突っ込み役、もとい常識人の方らしい。

そして、

「結城紫音だ。まだまだ若輩者だが、微力を尽くさせて貰う」

「こ、子供？ いえ、柚子の例もありますし……」

「ご心配なく。歴とした中学一年生です」

「余計不味いでしょう！ こんな夜に子供を連れ出すなんて」

「案ずるな。本来なら睡眠の時間だが、先程まで睡眠を取っていたので問題ない」

「そうじゃなくて……もおおお」

頭をかきむしる美園。

常識人が馬鹿を見るんです、とハルは心の中で同情した。

「紹介は充分でしょう。さあ、現場に案内してください」

「……………辞表の用意しておこう」

そつと美園は諦めたように呟いた。

美術館は三階建て。

各フロアが六つの部屋に別れており、それぞれに展示品が並べてある。

今日のメイン「悪魔の心臓」は三階の一室にあった。

「この部屋は価値のある一品物を展示する、特別展示室です」

美園の言葉通り、広い室内に展示してあるのは「悪魔の心臓」ただ一つ。

部屋の中央にあるガラスケースに、誇らしげにその姿を晒していた。

「……………俺、ネーミングセンスが悪いのかと思ってた」

「一切の加工無しにあの形状をしていることもお、価値を高めてるのよお」

「人体模型に入っているても、気づかれないくらいそっくりです」

柚子の言葉通り、「悪魔の心臓」は人間の心臓に酷似した形をしていた。

握り拳二個分ほどのルビー、恐らく値段も相当なものだろう。

「なるほど、怪盗コレクトのお眼鏡に合う品と言っわけですか……」

「ええ。とある資産家の善意によって貸し出され、展示を許されています」

「美樹、貴方の判断は正解です。これは本気で首が飛びかねません」

「だがそれほどの品にしては、あまりに警備が薄いのでは無いか？」

蒼井の言葉は的確だった。

価値ある物を話題の怪盗から守るにしては、人員が少ない。

美術館の各所に数名ずつ、この部屋にも五名程度の警察官しか配備されていない。

「ご指摘はもつともですが、奴には数が多いと逆効果なのです」

「と言いますと？」

「奴の特技は変装。警官の数が多いほど、容易に紛れてしまいます。木を隠すなら森の中。」

五人の警官よりも、五十人の警官の方が紛れ込み易いと言っことか。

「過去の二度は、いずれもその手段によって敗北を喫しました」

「だから今回は人数を減らしたんですね？」

柚子の言葉に美園は頷く。

彼女なりに対抗策を色々練っているようだ。

「この警護は、いずれも柔道剣道空手、合わせて十段以上の精鋭。遅れはとりません」

「うっす！」

一系乱れぬ返事を返す警官達。

両手を腰の後ろに組み佇む姿は、確かに猛者の雰囲気漂わせて

いた。

「各出入り口、警備室や電源室にも、私が信頼する部下を配置させています」

「他には？」

「各階に三名編成で、巡回する部下がいます。彼らとは無線で直ぐに連絡が取れます」

警備体制は万全のようだ。

「そしてこのケースにも仕掛けがあります」

「触ると警報が鳴るとか言うオチじゃ無いですよね？」

「警報の代わりに高圧電流が流れます。象だってイチコロですよ」

「へ〜どれどれ……………!!!」

ビリビリビリと青白い電流が、ケースに触れた奈美の身体を包み込む。

象でもイチコロ、常人だったら即死の筈だが、

「……………ん〜あんまり強くないわね」

「ば、馬鹿な……………」

「蒼井の奴の方が、よっぽど痛かったわ」

「ふん、当然だ。凡人の作った装置と吾輩のを比べることが間違っている」

腕を組み、自慢げに胸を張る蒼井。

「ま、動きくらいは止められるかもね」

「は、ははは……………」

「美園さん、気を強く持つてください。こいつが非常識なだけですから」

乾いた笑みを浮かべる美園に、ハルは優しくフォローを入れた。

「ふむ、十時半ですか。最後に細かい打ち合わせをしておきましょう」

千景は懐中時計を確認して言った。

「私達ハピネスは、怪盗コレクトを確認次第……………」

「殲滅しますっ!!」

「ちよつと待てえええいつ!!」

ハルと美園の突っ込みが八毛る。

数少ない突っ込み役同士、何とも言えない親近感が湧いてきた。

「何か問題でも?」

「問題しかありませんよ!」

「そうですね。「悪魔の心臓」を守るのが目的。忘れたんですか?」

「ですから、それを狙う相手を仕留めるのが一番確実かと」

「違あああう。違わないけど、理論的には合ってるけど、倫理的に間違ってます」

「……美樹」

千景は優しく美園の肩に手を置く。

「失敗すればクビ。手段を選んでいられないのでは?」

「それじゃあ成功してもクビですよ。もっと穏便に……」

ハルがフォローするが、当の美園は無言で思考している。

そして、

「……死体の処理は依頼できますか?」

ダークサイドに堕ちた。

「後十分。各員、第一種戦闘態勢に移行。安全装置の解除を許可します」

「イエス・マム!」

何度も突っ込むと思うなよ。

「では、私も秘策を使いましょう。電源室、プラントを発動」

美園が無線で指示を出すと、美術館の電気が一斉に消えた。

「な、何だ?」

「ふふふ、これが怪盗コレクト用の秘策「最初から暗闇作戦」です。激しく不安になる作戦だ。」

「奴の手口は、明かりを奪い暗闇にすることで、我々の視界を奪う姑息なものです」

人の眼球は明暗の急激な変化に弱い。

明るい場所が急に暗くなった場合、一時的に視力を失う。

「ならば最初から暗闇に慣れておけば、奴の手口に戸惑うことは無いはず」

「まあ、理屈ではありませんけど……」

「ブレーカーまで落とす徹底ぶり。死角はありません」

え？

「怪盗コレクト！　ここが貴様の墓場となるのです」
完璧に悪役の台詞です。

すっかりダークサイドに染まったようで……。

「良いんですか千景さん？」

「現場責任者は彼女です。私にそれをとやかく言う権利はありません」

良いながら千景は、ハルにある物を渡す。

「……これは？」

「私がコレクトなら、確実にアレをやります。かけておいて下さい」

「俺だけですか？」

「他のみんなは、怪盗が出現したと同時に攻撃しますので、それは使えません」

「そりゃ確かにそうですが……」

「万が一の時は、視力を確保しているハル君が頼りになります。期待してますよ」

千景はハルの肩をポンと叩く。

正直荷が重いのだが、やるしかない。

ハルが腹を括ったとき、時計の針がカチリと動いた。

時計の鐘が、午後十一時を告げる。

全員の緊張感が高まり、室内の空気が張りつめた。

九回、十回、そして十一回目の鐘が鳴り終わると、静寂が訪れる。

呼吸の音さえ聞こえそうな静けさは、
パライイイイイン

窓ガラスが割れる音によって、打ち破られた。

「はっはっはっは、怪盗コレクト、ここに参上!!」

暗闇を切り裂く真っ白な影が、窓から室内に飛び込んでくる。

役者が揃い、舞台は始まった。

「久しぶりだね美園君。今宵の舞台は、随分と趣向を凝らしたようだね」

「怪盗コレクト！ 社会のためと私の為に、貴様をここで消す!!」

「え？ いやいや、違うよね？ 「悪魔の心臓」を盗るか守るかの

勝負を……」

ただならぬ様子的美園に、少し引き気味の怪盗。

そして、その隙を逃すハピネスではない。

「目標、怪盗コレクト。薙ぎ払いなさい!!」

「「イエス・ママ!!」」

バババババ、チュドーン、バンバン、ビチャバチャ

「ななな、何だこりや？」

自分に向けられ一斉に放たれた攻撃に、思わず叫んでしまう怪盗。
心中お察しします。

ローズが両手に持ったマシンガンを、ひたすら撃ちまくる。

蒼井が超電磁砲で鉛玉を放つ。

柚子が色鮮やかな薬品を、水鉄砲でかけようとする。

奈美に至っては、拳を打ち出した衝撃波で攻撃していた。

非常識、ここに極まれり。

「おいおい美園君、随分過激な歓迎じゃ無いかな？」

「安らかに眠れコレクト。貴様との因縁も今日限りだ」

「ふっ、残念だがそうは行かない。私は……怪盗なのだから」

守る側が非常識なら、攻める側も非常識。

雨霰と襲いかかる銃弾その他を、人間離れた動きで回避していき。

壁や天井を凄まじい速度で動き回る怪盗に、八ピネスは翻弄される。

「ふっ、やるわねえ。彼……実弾の味を知ってるんだわあ」

「これでは的が絞れぬ。ちっ、レーザーに切り替えるぞ」

「この水鉄砲の水圧では……。投擲に移行します」

「接近戦に持ち込みたいけど、この弾幕じゃあ厳しいわね」

各々、怪盗の技量に敬意を示し、次なる手を模索する。

すっかりバトル物のノリだ。

「今夜は早々に退散した方がよさそうだ。「悪魔の心臓」を今、我が手中に」

「かかった！ そのガラスケースは超電圧の防犯装置付きです！」
自信満々の美園。

彼女の脳裏には、ケースに触れたコレクトが感電する光景が浮かんでいるのだろう。

だが、
パライイイイン

コレクトの手は、何の抵抗もなくガラスケースを破壊した。

「ば、馬鹿な。何故防犯装置が作動しない」

焦る美園とは対照的に、怪盗は小馬鹿にするように笑う。

「美園君、徹底するのは良いが、ブレーカーを落としたのはやり過ぎだよ」

「何ですって！」

「電気式の防犯装置なら、その供給源が無ければ無力なのだから」

「……………あああああ！！！」

駄目だ、この人。

怪盗と勝負しよう(3) (後書き)

遂に怪盗コレクト登場です。

アルセーヌをモデルに、全身白スーツ、シルクハット、モノクル着用。

一目で分かる出で立ちは、怪盗の必須条件ですよ。

美園がすっかりアホの子みたいになってますが、本当は優秀な女性です。

ただ、ここ一番で抜ける悪癖がありまして……。

ドジっ子が実際に居たら迷惑、を体現して貰ってます。

前半戦を終わり、やや怪盗有利の展開。

「悪魔の心臓」も奪われてしまいました。

果たして逆転する術はあるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗と勝負しよう(4) (前書き)

怪盗コレクトとの勝負は、いよいよ佳境に。

果たしてハピネスは、「悪魔の心臓」を守りきれぬのか？

怪盗と勝負しよう(4)

「かくして怪盗コレクトは、見事に「悪魔の心臓」を奪い去ったとさ。めでたし」

「めでたくなあああい!!」

「おや美園君。もうショックから復活したのかい？」

「何勝手に終わらせようとしてるんですか。まだ勝負は付いてませんよ」

「ほう……」

「貴方はどうやって逃げ出すつもりで？　ここは既に暗闇、貴方の得意技は使えません」

自分の策に自信満々の美園。

どう考えても負けフラグだが。

「怪盗を甘く見ないで貰おう。君たちの目を奪う方法は、幾らでもあるのだよ」

「強がり」

「ならばその一つを見せよう」

怪盗は筒状の何かを手に取る。

「舞台に幕が降りるとき……光に包まれるものさ」

それ、を思い切り床へ叩き付ける。

瞬間、展示室が眩い光に包まれた。

閃光弾、の様な物だろうか。

暗闇に慣れていた目が、そんな強烈な光を浴びてしまったら、

「目がああ、目がああああ!!」

ム　力大佐が量産されるのも当然だ。

光が消え、再び暗闇に戻る。

暗、明、そして暗のコンビネーションだ。

怪盗コレクトはその隙に、ゆうゆうと窓から脱出しようとして、
「……むっ！」

目の前ギリギリを通過したナイフに、驚きの声と共に足を止めてしまった。

「悪いけど、まだ勝負はついてないぜ」

「今のナイフはお嬢さん、君が投げたのかな」

「俺は男、だっ！！」

「おっと。ふむ、なるほど、サングラスをしていたのか……」
千景を真似たナイフ投げ。

だが怪盗は、暗闇の中でそれを指で止めるといふ離れ業を披露した。

「しかし残念だが、君では私に勝つことは出来ないよ」

「ちくしょうめ……」

何度ナイフを投げても結果は同じ。

オリジナルの千景ならいざ知らず、劣化したハルの腕では怪盗を仕留められない。

「最後の策も尽きたようだね。ならば今夜の戦いは、私の勝ちだ」

「……まだだっ！！」

ハルは地面を蹴り、怪盗へ飛びかかる。

千景をモノマネした身体が、鋭い暗殺術を次々に繰り出す。

だが、

「良い動きだが、まだ甘いよ」

苦もなくハルをあしらう怪盗。

「しかし妙だね。付け焼き刃にも、熟練の技にも見える……ふむ」

「真正正銘の借り物だよ。ただ、今は俺のものだけだな」

「興味深いが、今はあまり時間がない。ここらでお暇させて貰おうか」

怪盗は大きく跳躍し、再び不規則な動きを見せる。

壁、天井を縦横無尽に動き回り、ハルを突破しようとするのだが、

「……ほう？」

「もう少し付き合っつて貰うぜ」

ハルも怪盗の動きに合わせ動き、逃がさない。

「これは驚いた」

「俺も驚いた。足をこうやって動かすと、壁が走れるなんて知らなかったぜ」

「怪盗の技術を盗むなんて、なかなかやってくれるじゃないか」

埒が明かれないと思っただのか、怪盗は部屋の中央に静かに舞い降りる。

「だがそれだけでは私を捕まえないよ？」

「ああ、それはみんなに譲るとするさ」

ニヤリとハルは笑みを浮かべる。

「……時間をかけすぎてしまったか」

視力を失うと言っても、それは一時的なもの。

ハルが時間を稼いだお陰で、他の面々はすっかり元通りの視力を取り戻していた。

「形勢逆転だな。さあ怪盗コレクト、チェックメイトだ！」

「だが未だに「悪魔の心臓」は我が手中にある。どちらが有利かは、分からないよ」

誇らしげな美園の言葉に、怪盗は冷静に答える。

先程の攻撃を怪盗は見事に回避し尽くした。

強引に脱出することも可能かも知れない。

「あまり美しくないが……派手なダンスも悪くないね」

怪盗の言葉に、室内の緊張がグッと高まっていく。

「ねえ、コレクトさん。一つ、取引をしませんか？」

一触即発の状況で、千景が口を開く。

「取引、かね？」

「ええ、そうです」

「取引は対等な条件が必要だよ。何と何を引き替えるのかな？」

「貴方には「悪魔の心臓」を返して貰います」

バチバチバチバチバチバチ

「ぎゃあああああああああ!!!!!!!!!」

断末魔の悲鳴を残し、黒こげになって床にボトリと落ちた。慌てて柚子が駆け寄るが、悲痛な表情で首を横に振る。

最悪の事態に、ハル達が言葉を失う中、

「……残念ながら無事です。」

「紛らわしいわっ!!!」

怪盗まで参加しての、全員突っ込みだった。

「さあ、これで先程の話が本気であることは分かりましたね？」

「な、何も無かったかのように話を進めるとは……」

「すみません。これがこの人なんです」

「そう、か。君たちも大変だな」

「分かってくれますか？」

「……あなた達？」

「素晴らしい上司です。一生付いていきます!!!」

よろしい、と千景は満足げに頷く。

その様子に怪盗と警察の皆様から、暖かい視線を頂いてしまった。

あれ、何か暖かい液体が目から……。

「では怪盗コレクト、取引を受けるか否か、返答をお願いします」

「……これを解除するという保証は？」

「信じて貰う、と言うのは都合が良すぎますね。……紫音、出ていらっしやい」

千景に呼ばれ、今まで姿の見えなかった紫音が現れた。

展示室の入り口の、外側に。

「貴方が「悪魔の心臓」を返した後、彼女は装置を解除してここに入室します」

「その時なら装置は作動しない、か。確かにフェアだな」

「不安なら彼女と入れ違いに、そのドアから出ても構いませんよ」
解除するのはドアの部分だけ、と疑うのは当然。

いらぬ疑いは、取引の邪魔になる。

「ふむ、ならお言葉に甘えよう。だが私が彼女を人質に取るとは思わないのかな？」

「それは絶対に有り得ません」

「何故？」

「貴方が……怪盗だからです」

怪盗とは誇り高き犯罪者。

去り際を汚すような事は絶対にしないはず。

千景はそう告げることで、怪盗の行動に牽制をつつたのだ。

「……素晴らしい。君は私のことを実によく理解しているようだ」

「では、取引は成立ですね」

「ああ。「悪魔の心臓」は、ここに置く」

怪盗は部屋の中央に、「悪魔の心臓」をそつと置いた。

「……紫音？」

「本物だ。間違いなく」

「おや、このお嬢さんは鑑定士かな？」

「古い物には力が宿る。特に宝石はその傾向が強いのでな、真贋の

判別など容易い事だ」

「末恐ろしいお嬢さんだ。さて、この後どうすれば良いかな？」

「紫音が装置を解除し、入室すると同時に逃げなさい」

それに美園が慌てて異議を出す。

「ちよつと待ちなさい。コレクトが宝石を再び奪って逃げる可能性も……」

「彼は誇り高き怪盗、それはありません。そうですね？」

「痛いところを突くね。まあ、その通りだ」

怪盗はお手上げのポーズを取り、戯けてみせる。

既に勝負は終わっている。

ならばこれ以上の悪あがきは見苦しいだけ。

「こちらは条件を終えた。次は、そちらの番だ」

「ええ。紫音、装置を解除して入っていらっしやい」

「承知した」

「紫音は手に持ったボタンを押して、展示室に入っていく。それと入れ替わるように、怪盗は一瞬で室外へと脱出した。」

「君達とはまた見たいものだ。名を何という？」

「私達は便利屋ハピネス。そして私は代表の柊千景です」

「憶えておこう。ではさらばだ、ハピネスの諸君……とついでに警察の諸君」

「はっはっは、と高笑いを残して怪盗は姿を消した。」

「巡回の警官では捕まえられないでしょう。とにかく、依頼は完了ですね」

「はあく、なかなかしんどい依頼だったわあ」

「世界は広いわね。あんな凄い奴が居るなんて」

「まともにやり合っていたら、私達も無事では済まなかったでしょう」

「だな。ま、怪我人も無く無事に……ああああ、蒼井は？」

「すっかり纏めムードになっていたが、彼を忘れていた。」

「正直洒落にならない感じだったが。」

「無事です。単にショックで倒れてるだけです。憎らしいことに怪我一つありません」

「柚子……蒼井の事嫌い？」

「好きな子ほど意地悪したくなる、と言っているのでどうでしょう？」
「絶対嘘ですよ。」

「良いじゃないの、そんな事は」

「そんなことって……。」

「とにかく依頼は終わったんだし、私は早く眠りたいわ」

「もう日付が変わるな。私も流石に眠い……」

「ああ紫音、ここで寝るな」

「立ったまま眠り始めた紫音。」

「緊張の糸が切れた為か、大人組も皆眠気を隠せない。」

「では美園、私達は引き上げます。後の始末は任せますよ」
「えっっ!!」

美園は顔を引きつらせる。
あれだけ派手に暴れたのだ。展示室は凄まじい有様になっていた。暗闇で目立たないが、明かりを付ければそれはよりハッキリと分かるはず。

「さあみんな、帰りますよ」

「はい。それじゃあ失礼します」
そそくさと出ていくハピネス一同。

後に残されたのは、

「あの署長、これ、どうしましょう?」
荒れ果てた展示室の様子に困り果てる警察の皆さん。

怪しい液体であちこちが溶解し、銃弾の跡まで残ってしまっている。

このままでは、確実に責任問題だ。

「……美術館内の全員を集合させなさい。朝までに証拠隠滅を図ります」

「署長……すっかり悪役ですね」

「他人事じゃ無いですよ。これだけやらかせば、責任は私だけでは取り切れません」

「っ、つまり……」

「北海道か沖縄か……。単身赴任は嫌ですよね?」

「りよ、了解しました。直ちに作業にかかります」

慌てて敬礼をする警官達。

無線で美術館内の仲間集合をかける。

「……その前に、一つやり残しがありました」
「何でしょう?」

「まず……電気をつけましょう」

夜が明けるまで、美園達の戦いは続く。

色々な犠牲を払って、「悪魔の心臓」の護衛依頼は無事に達成出来たのだった。

怪盗と勝負しよう(4)(後書き)

色々突っ込みどころ満載ですが、どうかご容赦下さい。

次は後日談。

それで怪盗編は完結となります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗との勝負は終わったが……（前書き）

千景の元を訪れた美園。

報酬の支払いをするだけの筈だったのだが、
何故か話が妙な方向へと進み……。

怪盗と勝負しようの後日談です。

先にそちらを読んでいないと、全く意味不明の内容ですので、ご注意下さい。

怪盗との勝負は終わったが……

事件の翌日。

そろそろお昼に差し掛かる時間、ハピネス事務所に来客があった。

「あら美樹、おはようございます」

「……私はこれからおやすみなさいですよ」

目の下に濃い隈を作り、千景を睨む美園。

「どうやらあれから一睡もせず、ここに来たようだ。」

「それで、今日は何かご用ですか？」

「これを渡しに来ました」

鞆から封筒を取り出す。

「ちゃんと数えました、そちらでも確認をお願いします」

「あら、振り込みで良かったのに」

「記録が残ると都合が悪いので、こうして直接渡した方が足がつきにくいんです」

「美樹もすっかり染まりましたね」

「貴方のせいだと思います。」

「では失礼して……」

千景は受け取った封筒から札束を取り出しパラララと捲る。

「確かに、成功報酬はしかと受け取りました」

「……全く、痛い出費です」

「でも首は繋がりそうでしょう？」

「ええ、お陰でね。週明けにも警視總監から表彰される話も来てます」

「それはそれは、私達も頑張った甲斐がありました」

「頑張りすぎです……」

心底疲れた声を出す美園。

展示室の証拠隠滅には、結局八時間以上を費やした。

『ええい、もう限界です。この部屋爆弾でぶっ飛ばしてしまいましょう』

『署長落ち着いて』

『ふ、ふふふ、警察の底力を今こそ示すとき……』

『だ、誰か、署長を止めるおおお!!』

何てやり取りもあつたが、無事隠蔽は終わった。

「しかし、あそこまでやること無いでしょう」

「何がです？」

「銃弾は撃つは、危険な薬物は撃つは、力押しもいいところです」

「……ああ、アレは困です」

「はあ？ 何の？」

「電気の壁を張るには時間がかかりますし、暗闇では光が見えてしまえますから」

「じゃあ何、アレはコレクトを仕留めるのが目的じゃ無かったの？」

「時間稼ぎと目くらまし、それに注意を引きつける為の攻撃です」

あつさり言い放つ千景に、美園は開いた口が塞がらない。

「でも、あなた達凄く殺る気満々だったじゃない」

「盗聴器の可能性を否定できなかったので、不自然じゃないように

あのノリで

「……」

「大丈夫、ノリノリだった美樹の事は、私達の胸に留めておきますから」

「うわあああ、恥ずかしいいいいい!!」

顔を真っ赤にして絶叫する美園。

自分は本気だったのに、周りが演技だと知れば、それは確かに恥ずかしい。

「でも美樹がどうしても、と言つなら、忘れることも出来ますが」

「……何よ」

「頑張ったみんなに、ご褒美としてご飯でもご馳走したいと思いましてね」

「ふ、ふん。証拠が無い以上、誰がそんな言葉に……」
「ポチっとな」

『……死体の処理は依頼できますか？』

『怪盗コレクト！　ここが貴様の墓場となるのです』

『怪盗コレクト！　社会のためと私の為に、貴様をここで消す！！』
『安らかに眠れコレクト。貴様との因縁も今日限りだ』

「……………」

「うん、感度良好。良く録音出来てますね」

「ちいじいかあああげええ！！」

「大丈夫ですよ、警視総監宛に送ったりしませんから」

「……分かりました。どうか皆さんにご飯をご馳走させて下さい」
「あら、悪いですね。ではテープをどうぞ」

千景がプレイヤーから出したテープを美園に手渡すと、
バキィ

「ふっ、詰めが甘いですよ。これで証拠は……」

『……死体の処理は依頼できますか？』

『怪盗コレクト！　ここが貴様の墓場となるのです』

『怪盗コレクト！　社会のためと私の為に、貴様をここで消す！！』
『安らかに眠れコレクト。貴様との因縁も今日限りだ』

「な、ななななな」

「この音源が入ったテープを渡す、とは言ってますんよ？」
「ぬぬぬぬう」

「しかも今時テープの訳無いでしょ。本物はこちらです」
そう言って千景は、PC対応の録音機を見せる。

「これはお食事の会計が終わったときに、お渡ししましょう」

「おによれえええ」

「何を食べるのかは、これからみんなで相談して決めます。決まったら連絡しますね」

ガツクリと頂垂れる美園。

もう彼女に抵抗する気力は残っていなかった。

「……帰ります」

「そうですね、ではお気を付けて」

とぼとぼと事務所から出ていく美園。

その後ろ姿がとて小さく見えた。

「やり過ぎじゃないのぉ？」

「あの子には良い薬です。普段の力を発揮できれば、怪盗にだって後れはとらないのに」

「そうねえ。普段は本当に優秀な子なのにい」

「大一番で必ずドジる、これはある意味才能なのかもしれません」

「随分優しいのね、千景ちゃん」

「一応は友達ですから……心配するのは当然です」

「お食事会かあ。みんな喜ぶわねえ、何処に行こうかしらあ」

「多数決で決めましょう。お店はその後で、私が選びます」

「美味しいお店？」

「勿論、一番高級なお店です」

知らぬが仏。

美園の懐は、当分寒波に見舞われそうだ。

怪盗との勝負は終わったが……（後書き）

美園の立ち位置がハッキリしましたね。

まさしく、ハルと同じポジションのようです。

突っ込み役は貴重なので、頑張つて欲しいものです。

次はまだまだ美園のターン。

ご飯をご馳走する事になった彼女の運命は如何に？

皆様のご感想を絶賛募集中です。

ご意見・ご指摘・ご指導、何でも結構です。

自己満足で書いている未熟な作者でございますが、皆様のお声を聞くことで少しでも良い作品を投稿していきたいと思っております。

宜しければ、ご協力をお願いします。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

焼肉を食べよう(前書き)

依頼達成のご褒美に、焼肉をご馳走して貰うことになったハル達。
肉を焼く火に、美園の財布も火の車に……。

焼肉を食べよう

某日、某焼肉屋前。

「ね、ねえ千景。一つ聞きたいんだけど」

「何でしょう？」

「ご馳走するって、あの時参加した人達だけじゃないの？」

「私は頑張った「みんな」と言いましたよ。当然ハピネスは全員頑張ってますから」

「ちよ、ちよっと近くのコンビニに……」

「大丈夫、ここはカードが使えますから」

そつと逃げようとした美園を、がっちり千景は捕まえる。

「心配しなくても、食べ放題コースで予約してるから平気ですって」
「私の知ってる食べ放題とは、何か値段が明らかに違うんだけど……」

そりゃ、高級店ですから。

「細かいことは気にしない。さあみんな、入店しますよ」

「は〜い」

美園を引きずる千景を先頭に、ハピネス一同は焼肉屋に入っていた。
つた。

奥座敷に案内された一同は、適当に席を決めて座る。

その様子を見てから、

「今日は私の友人が、皆さんにご馳走をしてくれる事になりました」

「わああああ」

「しかも、この店で一番高級の食べ放題コースを選んでくれたので
す」

「「おおおお」

「遠慮するとかえって失礼です。みんな、全力で飲み食いしちゃい

ましよう！」

「「はいつ、ごちになりますっ！！」」

一斉に美園へ頭を下げる八ピネス一同。

ここまで来たら、美園に出来ることはただ一つ。

「ええい、肉も酒も、じゃんじゃん持つてきなさああい」

「ご褒美焼肉パーティーの始まりだ。」

「ハルは焼肉食べたことある？」

「まあ、人並みには。えつと二人は？」

「実は初めてなのよ。だから今凄いワクワクしてるわ」

「私も経験が無い」

奈美と紫音は焼肉初体験。

なら自分がリードするかと、ハルは手早く肉を網に乗せていく。

「食べたい生肉を、このトングで網に載せて焼く。火が通ったら小皿に取るんだ」

「へ〜簡単なのね」

「家族にも人気の料理だからな。誰でも簡単に出来なきゃ」

ハルは菜箸で肉をひっくり返す。

「これはもう良いな。食べて見るよ」

「このまま食べるの？」

「でも良いし、そこにタレがあるだろ。好みで使つといいさ」

「だがハルよ。何やら随分種類があつて、どれを使えば良いのやら」
焼肉屋には数種類、店によっては十を超えるタレが常備されている。

何も知らなければ確かに迷うか。

「甘口とか説明があるだろ。それを参考にして、色々試してみると良いよ」

「ふむ……ではこれを」

紫音は一番甘口のタレを皿に注ぎ、肉を付けて口に運ぶ。

カツと目を見開き、動きが固まる。

「ど、どうした？」

「……少々侮っていたようだ。正直、これほど美味な食べ物とは思っていないかった」

お気に召したようだ。

「じゃあ私は、このすたんだーど？つてやつで……うん、美味しい」

「

「そりゃ良かった。肉にも色々種類があるから、食べてみると良い」

「うわ、また随分色々あるのね」

「今食べたのがロースだ。後はカルビなんか人気かな」

お品書きを見ながらハルは説明する。

「みの？ はつ？ まめ？ さがり？ 随分と珍妙な肉があるのだな」

「鶏とか豚は分かるけど……どんな動物なのかしらね？」

「ああ、そいつは肉の部位だ。紫音が言ったのは……内臓だな」

「「ぶぶふうううう！」」

二人一斉に吹き出した。

「内臓って、あれよね、胃とか心臓とか」

「ああ。ミノは胃、ハツは心臓、マメは腎臓、サガリは確か横隔膜

だった筈だ」

「ならそう記せば良かろうに。こんな可愛い名前をつけおって」

お店側の気遣いです。

品書きに部位をモロ書いてしまったら、食欲減退しますから。

「気になるなら食べてみるか？ 無理なら俺が残りを食べるし」

「そりゃ、興味はあるけど……」

「だが奈美よ、この機を逃せば恐らく今後食べないだろう。それはあまりに惜しい」

「じゃあ頼むぞ……すいませ〜ん」

ハルが店員に注文して、それがやってきた。

「見た目は……案外普通ね」

「だが。人間の臓器を想像していたから、いくらか安堵した」

「……………うん、良いな。食べて見るよ」

二人は小皿に乗った肉を、眉をひそめて見つめる。

内臓と聞かされて多少気後れしているのだろう。

「無理に食べなくてもいいぞ。はむっ……………ん、これは美味しい」

流石は高級店。

ハルは舌鼓を打ちながら、次々と網に肉を投下していく。

「ねえ紫音。セーの、で食べない？」

「よかるう。では行くぞ、いつせいのーせっ！」

パクリ、とハツを口に入れる紫音。

味わうように咀嚼し、ごくりと飲み込む。

「これは……………美味だ。食わず嫌いはいけない、と今実感したぞ」

「へへ本当に美味しいんだ。じゃあ私も……………うん、美味しい」

「な、ちよつと待て。一緒に食べるって言ったじゃないか」

「えへへ、ゴメンね。でも美味しかったし、結果オーライってこと

で」

ぺろりと舌を出して謝る奈美。

もし口に合わなかったら大惨事だったところだ。

「まあ良い。この肉に免じて許してやろう」

「そうしましょ。ねえ、色々頼んでみましょうよ」

「応とも。折角だし、この店のメニューを制覇してみるか」

ノリノリの奈美と紫音。

すっかり焼肉がお気に入りの様だ。

「……………二人は平気そうだし、俺は他の人にお酌でも……………って、あれ

は何だ？」

周りを見回したハルは、思わず目を奪われた。

「す、鈴木さん」

「あらハル君。楽しんでますか？」

「ええ、俺は。それよりも、あそこの席は何事ですか？」
ハルが指差す先。

そこでは、

「ふう、美味しい。これで三十杯目ですね」

「私もこれで……三十杯です。そろそろ調子が出てきましたよ」

「（こきゆこきゆ）ふう、お二人とも強いですね。私はまだ二十六杯目です」

「ま、負けん。負けられん。………吾輩は二十八杯クリアだ」
壮絶な飲み比べが行われていた。

「ああ、ハル君は初めて見るんですね」

「鈴木さんは随分落ち着いてますけど」

「あの三人の飲み比べは、もう恒例なんです。美園さんもいける口みたいですね」

いけるどころの話じゃない。

二十とか三十とか、明らかにおかしい。

「つてか、何飲んでるんですか？」

「彼らの特別ルールで、五杯事にお酒を変えるんです」

そういう話している間も、空のジョッキが増えていく。

千景と美園はワイン、柚子と蒼井は無色の……焼酎か日本酒を飲んでる。

「ジョッキで飲むことあるまいに……」

「グラスではキリがないから、と前に千景さんが言っていましたよ」

「ざるって言うか、底なしですね」

「まあ、結果は見えてますので、あまり気にしない方が良いでしょう」
どうということだろう？

「ドクターが負けて罰ゲーム、と言ったところまでが恒例ですから」
言われてみれば、確かに分かる。

平然と飲む三人と比べて、蒼井は若干苦しそうだ。

今は柚子をリードしているが、そのペースは明らかに落ちてきて

いる。

「あらあら蒼井さん、あんまり味わっていると追いついてしまますよ?」

「ふ、ふん。良い酒だからな……ついいつもの癖が出てしまったぞですよね。あ、一つ言っておきます」

「何だ?」

「私今日、絶好調です。記録更新出来るかも知れません」
蒼井の顔色がにわかにながさめる。

それは決してアルコールのせいじゃないだろう。

「三十七杯目……私も調子が良いみたいです」

「同じく。久しぶりのアルコールは、身体に染みますね」

「……どうです、百を超えたら少し高級なお酒を頼みませんか?」

「いいですね」

「それは別料金ですよ?」

「ではビリの人が払うと言うことで……賛成の人?」

「はい」

「反対だ!」

「賛成三、反対一、多数決により可決されました。さあみんな、ガンガン行きましょう」

「お〜」

蒼井の顔色が青ざめていく。

ハルに出来ることは、無言で合掌する事だけだった。

「……さて、何も見なかったと言うことで」

「それが賢明です」

「あれ、そう言えばローズは………何で一人なんだ?」

「行ってみれば分かりますよ」

少し意地悪に笑う鈴木に後押され、ハルはローズの元に向かった。

「やあ、ローズ」

「あらあ、ハルちゃん。どうしたのお？」

「いや、今みんなの所をまわってるんだ」

流石に一人だから気になって、とは言えない。

「そうなのねえ。なら一緒に食べましょうよお」

「ん、ならご一緒させて貰うよ」

ハルはローズの向かいに腰を下ろす。

瞬間、

シユパパパパパ

ハルの小皿に、大量の焼けた肉が積まれた。

「えっ？」

「どどん食べてねえ」

「あ、ああ。ありがとう」

面食らったハルだが、折角の好意だ。

好みにタレをブレンドして、肉を食べ始める。

だが、

「ふんふん」

「……………」

「ふんふん、ふんふん」

「……………」

「ふんふん、ふんふん」

「な、なあローズ」

「あらあ、足りないかしらあ。ちよつと待っててねえ、直ぐ焼ける

からあ」

「いや、そうじゃなくて。何でひたすら俺に肉を差し出すのかな？」

ハルの目の前には、十センチ以上に肉が積み重なっていた。

食べるペースよりも早く、ローズが補充する為、徐々に高く積み

上がっていく。

「私はねえ、人が食べてる姿を見るのが好きなのよお」

「……………」

この瞬間、ハルは悟った。

ローズは最初から一人で居た訳じゃない。

一緒にいた人が食べきれなくなり、次々に脱落していったのだと。

「あの、ローズ。俺はそんなに食が太くなくて……」

「だからよお。ちゃんと食べればあ、きつとまだ大きくなるわあ」

「肉ばかりだと、流石にそんなに食べれ……」

言い終わる事すら許されなかった。

次の瞬間には、程良く焼かれた人参、タマネギなど野菜がハルの前に置かれていた。

さらに、焼肉を巻く用のレタスまで配置されている。

「バランスは大切だもんねえ、さあ、め・し・あ・が・れ」

「……………頂きます」

限界に挑戦し、ハルは散った。

その後も狂乱の焼肉騒ぎは続く。

「このクツパって言うのも美味しいわね」

「うむ。ご飯、肉、汁、野菜、焼肉と言うのはバランスが良いな」

「もうメニユー一週しちゃったわね。二週目行く？」

「……………行けるのか？」

紫音は各メニユーを少しづつしか食べていない。

それでも充分満腹なのだが。

「美味しい物は別腹よ　あ、デザート忘れてたわ。すいませ〜ん」

「胃袋は宇宙……あながち妄言では無いのかもしれないな」

底知れぬ奈美の食欲に、紫音は本気で感心したように呟いた。

「そう言えば、今何杯目でしたっけ？」

「二百を超えた辺りから、もう数えてませんでしたね」

「良いじゃないですか。飲み比べは決着つきましたし、後は楽しむ」

だけですよ」

今はジョッキではなく、ちゃんとしたグラスでお酒を楽しむ三人。別料金であるう酒瓶は、もう数えるのが馬鹿らしい程だ。

「ですね。それにしても本当に美味しいお酒……ドクターに感謝です
ね」

「多分、私以上に消費が大きいと思いますよ」

「NASAへの出向で稼いでいる筈ですから、ここはご厚意に甘え
ましょう」

酒瓶を片づける店員に、三人は新たに注文を告げる。

「では、美味しいお酒との出会いに」

「「かんぱい」」

グラスを重ねる音が響き渡る。

「……ば、化け物……共……め……ぐふ」

端っこで朽ち果てた蒼井を、誰も責めることは出来まい。

「ハルちゃん、大丈夫？」

「……も、もう限界だ。喉まで肉が詰まってる……」

「「ハル君、感動しました!!」」

勇敢なハルの散り際に、ハピネス所員から暖かな声が掛けられる。

「ごめんね、ハルちゃん。食べてくれるとつい嬉しくなっ
てえ」

「い、いいよ。肉は美味しかったし……当分は見たくも
ないけど」

「私も少し食べ過ぎました。家で体重計に乗るのが怖くて……」

鈴木言葉に、女性所員達が賛同の言葉を掛ける。

「ハルちゃんは平気？」

「ああ、俺は食べても太らない体質だから」

キラリ

その言葉がいけなかった。

女性所員達はハルの身体を拘束すると、

「「ローズさん、ハル君はまだまだ行けるみたい
です」」

「ななな、何でそうなる？」

「乙女心を弄んだ罰です。さあ、ローズさん、たっぷり太らせてあげて下さい」
「了解よお。ハルちゃん、全メニュー制覇コース、行ってみましょうかあ？」
「んなアホなああ!!」
ハルは二度死ぬ。

そして時は流れ、そろそろお開きかと言う時だった。

「さて美樹、先にお会計を済ませてしまいましたようか」

「え、ええ。そうね……………あら、ちよつと失礼」

美園は携帯電話を取り出す。

「はい、美園……………なんですって？ 殺人事件？ 直ぐに向かうわ」
携帯をしまつと、

「緊急の仕事が入ったわ。じゃあ私は行くか……………ら」

「美樹……………ちよつと待ちなさい」

ダッシュで立ち去ろうとして、千景に裾を掴まれる。

「ちよつと千景。今事件が起こって……………」

美園の言葉を無視して、千景は自分の携帯を操作する。

「……………あ、村上？ 殺人事件……………そう、分かったわ、ご苦労ね」
通話を終わると、千景は美園にニヤリと笑いかける。

「事件は何も起こっていないそうですよ？ 美園署長？」

「貴方……………どうやってそれを？」

「今日当直の村上警部。彼には色々と貸しがありましたね」

「村上いいいいいい!!」

完全に八つ当たりです。

「さあ美樹、会計に行きましょうか……………」

「さようなら……………私の秘湯巡り」

当分趣味にお金は使えないと、美園は涙ながらに会計に向かった。

こうして、ハピネスの焼肉食事は幕を閉じた。

「ぬおおおお、何だこの請求額はああああ!!」
後日、蒼井はカード明細を見て絶叫する。

酒豪達が飲み干した酒のお代は、一桁も二桁も違うもの。

一番痛い目を見たのは、彼かも知れない……。

焼肉を食べよう（後書き）

凄まじい食事会でした。

でも、仲間で焼肉に行くとこんな感じになりますよね？（汗）

勝てないと分かっている飲み比べにも、男の意地で参加する蒼井。
ある意味、本当の漢なのかもしれません……。

作者は焼肉好きですが、書いた事は全部受け売りです。

間違っただけでも責任が取れないので、興味のある方は是非調べてみて下さい。

色々尾を引いた怪盗編も、これで本当に一区切り。

ようやくハピネスの日常に戻れそうです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

学力が全てでは無いけど(前書き)

ハピネス事務所にテレビが設置された。

しかし、それが新たな騒動の引き金になるとは、誰も知るよしは無かった。

学力が全てでは無いけど

ある日の夕方。

ハピネス事務所はにわかに活気づいていた。

その原因は、

「へえ〜大きなテレビですね」

事務所に設置された大型テレビだった。

フルハイビジョンの液晶で、そこそこの値段がするものだ。

「しかし、良いんですか柚子？」

「ええ。私には大きすぎるので……」

「まさかクジで一等が当たるとは」

「そもそも商店街のクジにい、一等って本当に入ってたのねえ」

まあつまり、柚子がクジで当たったテレビを、事務所に寄贈したのだった。

「ねえねえ、早速付けて見ようよ」

はしゃぐ奈美が、テレビの電源を入れる。

だが、画面は暗いまま。

「あれ、壊れてる？」

「チャンネル設定がまだ何だろ。こうやってリモコンで……」

ハルが設定を終えると、大画面に番組が映し出される。

有名なクイズ番組だ。

「あ、これ知ってる」

「お馬鹿な答えが売りの、テレビ番組ですね」

「でも本当ですかね。案外演技だと思っんですけど」

「流石にねえ。私も疑っちゃうわあ」

ハルとローズは苦笑する。

そうこうしている間に、テレビでは問題が始まった。

『問題、アメリカの首都は？』
『ハワイ！』

「千景よ、この者達は馬鹿なのか？」

「そう言う芸風なのです。人は自分より劣っている人を見ると、安心感がありますから」

「んな身も蓋もない」

「でも私も演技だと思えますよ。アメリカの首都が分からない大人は、普通居ませんから」

柚子も苦笑いを浮かべている。

子供ならいざ知らず、義務教育を受けた大人が知らない等あり得ないだろう。

そんな一同だが、

「本当にそうよね。アメリカの首都はニューヨークに決まってるじゃない」

奈美の言葉でピシリ、と固まった。

全員が信じられないと言った驚きの表情で、奈美を見る。

「ん？ みんなどうかした？」

「あのな、奈美。冗談で言ったんだよな？」

「どゆこと？」

滅茶苦茶本気だった。

これは不味い。幾らなんでも不味い。

「奈美よ……お主は高校生だよな？」

「そうよ」

「高校には入学するための試験があると聞くが？」

「ええ、あつたわ」

「それを突破したから、高校生になったのだな？」

「当然よ」

「……謎だ」

紫音は頭を抱えて悩む。

それはハル達も同じだ。

「奈美ちゃんの高校が簡単な試験だったとかあ？」

「いや、俺の妹も同じ高校だが、結構難しいところだぞ」

「地理だけ特別苦手かも」

なるほど一理ある。

「試して見ましょう……。奈美、水素の元素記号は？」

「元素記号……。あ、分かった。水兵さん」

違う。

ちよつと惜しいけど違う。

千景は頭痛を堪えるように、頭を軽く振る。

「じゃ、じゃあ、江戸幕府を作った人は？」

「水戸黄門！」

色々違う。

ハルは力無く項垂れる。

「文学はどうだ。源氏物語の作者は？」

「……源氏さん？」

誰だよそれ。

紫音は首を小さく横に振る。

「生物はどうでしょう。人の血が赤く見えるのはどうしてですか？」

「心が通っているから」

深い……。でも違う。

柚子は困った視線をハル達に向ける。

「ん〜何か得意教科とかあるかしらあ？」

「体育！！」

でしょうね。

結局分かったのは、地理以外も駄目だと言ったことだった。

「でも、それならどうやって入試を合格できたんだ？」

その疑問が残る。

運やまぐれで合格できるレベルではない。

「えっとね、試験は答えを選択して塗りつぶす奴だったの」

「マークシートですね」

「で、選択肢は五個しか無かったから」

嫌な予感がする。

「適当にどれにしようかなくて、問題見ないで選んだの」

「それは山勘だああ!!」

盛大に突っ込んだ。

「だが、一問二問ならともかく、試験というのはかなりの問題があるのだろ」

「確率は五分の一……ちよっと信じがたいわねえ」

ローズの意見に、ハル達は激しく同意する。

仮に百問あったとして、五分の一なら正解は二十五個。

多少上下するだろうが、試験で合格出来るとは到底思えない。

「なら考えられるのは……」

「奈美さんのカンが、人並み外れている可能性ですね」

柚子の答えに千景は頷く。

「試してみましよう……」

千景は紙に何かを書き込む。

「ここに一から三十までの数字があります。ハル君、この中の数字を一つ思い浮かべて下さい」

「えっ、は、はい……」

言われてハルは、十三という数字を思い浮かべる。

「では奈美。ハル君が選んだ数字はどれだと思いますか？」

当てずっぽうで当たる確率は三十分の一。

普通なら当たるはず無いのだが、

「んんん、何となく十三の気がする」

この子は普通じゃない。

ハルの引きつった顔で、正解を悟ったのだろう。

千景達は奈美に驚きの視線を向けた。

「ここまで来ると、ある種の才能ですね」

「いや、褒められると照れちゃいます」

「褒めてないっ!!」

お約束の突っ込みを入れる一同。

「ですが事は深刻です。学力が全てとは言いませんが、最低限は必要ですから」

「確かに、社会に出てから苦勞するのは奈美ですし」

「と、なればあ」

「私達に出来ることは」

「あれしかあるまい」

気迫のこもったハル達の視線に、奈美は少したじろぐ。

「な、何でしょう?」

「これから奈美の勉強会を始めます。異議のある人はいますか?」

「異議なくし」

「え、え、ええ?」

戸惑う奈美だが、ハル達は手を緩めない。

「目標は……確か明日学校でテストがありますよね?」

「は、はい。よくご存じで」

「そのテストで八十点以上取って貰いましょう。良いですね?」

「無理ですよおお。テストは選択式じゃ無いんですよ」

「だからやるんだよっ!!」

一切の反論は許さない。

これは奈美のため、と一同は心を鬼にする。

「点数の確認は……ハル君、お願いできますか?」

「了解です。妹に報告させます」

「そんなあああ」

逃げ道は封じられた。

「一日一教科と聞いています。明日のテストは何ですか?」

「えっと……確か数学だったと」

「ではハル君と柚子、二人でお願いします」
てきぱきと指示を出す千景。

ハルと柚子は無言で頷いてみせる。

「紫音は国語と古文を、地理と歴史は私と剛彦で、物理と化学はハル君と柚子で」

「了解っ!!」

「え、え、え……」

「よし、行くぞ奈美。一睡もしなければ、まだ半日以上ある」

「最悪ドーピングもやむなしです。頑張りましょう」

「ちよつと、待ってええええ!!」

ハルと柚子によって、奈美は叫び声を残して事務所から引きずられていった。

翌日。

「お、おはよう……秋乃」

「どうしたの奈美。凄い隈が」

「ちよつと勉強のしすぎで……」

「そ、そう。随分気合い入ってるのね」

鬼気迫る奈美の様子に、秋乃は少し戸惑う。

「ふふ、今日の私は違うわよ。ハルと柚子さんに徹底的に仕込まれたんだから」

「え、お兄ちゃんと勉強したの?」

「一晩中ね。ハルって意外とSっ気があると思うわ」

「……お兄ちゃんと一晩中……いいな」

ポツリと呟いた言葉は奈美に届かない。

「さあ来い数学。振り返ちにしてやるわっ!!」

「へっ?」

「何よ、変な顔して」

「あのね、奈美。今日のテストは……国語よ」

「……………ああああああ、間違えたあああああ！！！」

奈美のテストがどうなったのか、は言うまでもあるまい。

『ねえ、お兄ちゃん。奈美と一晩中一緒にいたって本当？』

「あの〜秋乃。声が怖いんだけど……………」

『本当なんだ』

「い、いや、違う。奈美の勉強を見てやって……………袖子って人も一緒に……………」

『私が受験の時は……………全然付き合ってくれなかったのに』

「お前は俺より頭がいいだろうが」

『いいな〜奈美。いいな〜』

結局、今度買い物に付き合つと言うことで許して貰った。

勿論ハルのおごりで。

『お兄ちゃんとおっ買いつ物っ』

「……………どうしてこうなった？」

それは誰にも分からない。

学力が全てでは無いけど（後書き）

奈美は馬鹿と言うよりも、勉強が出来ない子です。良い先生に巡り会い、一から勉強し直せばかなり化けると思われま

す。

ただ、世界はそんなに甘くないんですね。

作中で出たテレビ番組は、勿論アレがモデルです。

執筆したときは、あの事件の前。

世の中、何が起きるか分かりません。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

草むしりは危険な仕事？（前書き）

ハピネスに入った新人バイト君。

しかし、彼がとある依頼に失敗したことで、事態は厄介な事に……。

草むしりは危険な仕事？

初夏の日差しが眩しい今日この頃。

ハピネスにも新たなアルバイトが加わっていた。

まだまだ新人と言うこともあり、まずは簡単な依頼を行っていたのだが。

「依頼失敗？」

ハルは思わずオウム返しする。

「そうなのよお。新しく入った加藤君があ、失敗しちゃってねえ」

「あれ、でも彼が受けた依頼って、庭の雑草取りだったよな」

新人の依頼は千景が選別する。

間違っても失敗するような、難しい依頼では無いはずだが。

「ええ。どうも予期せぬ事態が起きたらしいのぉ」

「雑草取りで？」

どうすれば予期せぬ事など起きるのだろうか。

「あらあ、ハルちゃんだって経験あるでしょ？」

苦い記憶。

「庭の雑草取り」なのは間違いなかったが、果てしなく広大な土地だったという罨。

確かに予期せぬ事だったが、それでも依頼が果たせなかった訳じゃない。

「……気になるね」

「今千景ちゃんが状況の確認をしてるわあ。その内詳細が分かるでしょ」

ローズの言葉に頷き、ハルは自分の依頼を選ぶことにした。

「ハル君、ちょっと良いですか？」

「何でしょうか」

「少し手伝って欲しい事があるのです」

恐らくさつきローズと話していた件だろう。

ハルは千景に向き直り、話を聞く姿勢をとった。

「実は新人の加藤君が、依頼を失敗しました」

「さつきローズから聞きました。何でも雑草取りの依頼だったとか」

「その通りです。先程彼と連絡が取れまして、状況が把握できました」

「何があつたんですか？」

「彼が言うには、いきなり巨大な植物に襲われたと」

What?

「現在その植物に拘束され、身動きが取れない状態との事です」

「……何ともシユールな光景ですね」

「電話越しの彼の様子から、嘘は言っていないと思うのですが……」

「にわかには信じがたい、と」

ハルの確認に、千景は頷いて答える。

「そこで、応援部隊を派遣したいと思います」

「状況の確認と、加藤の救出ですね？」

「ええ。彼に怪我でもされたら大変ですから」

素晴らしい上司だ。

「まだ雑草取りが終わってませんし」

前言撤回。

「ハル君にも参加して欲しいのですが、如何ですか？」

「そりゃ構いませんよ。他には誰が行くんのです？」

「今現在手が空いている、ローズと奈美。それに柚子を派遣します」

「柚子？」

「万が一負傷していた場合、治療役が必要ですから」

流石千景さんだ。

「何があるうとも、依頼はちゃんとこなして貰わなくてはいけません」

んしね」

流石千景さんだ。色々な意味で。

「事態は急を要します。直ぐにでも赴いて欲しいのですが」

「俺は何時でも行けますよ」

「結構です。では現地ではローズの指示に従って行動して下さい」

「了解しました」

「では、検討を祈ります」

こうしてハルは、応援部隊として現地に向かうことになった。

「……いや、世界は広いね」

「そうよね。大きな植物つてのは見たことあるけど、これは流石に

……」

「私も世界中まわったけどお、これは凄いわあ」

「ただ、これを植物と言つて良いのか疑問ですけど」

現地に着いた応援部隊は、各々感想を口にする。

古い日本家屋の庭は、サッカー場ほどの広さがあった。

その中央に、高さ十メートルはあろうかという、巨大な一本の花。そして極太の茎からは、庭中を埋め尽くすツタが溢れかえっていた。

「あれつて、何の花かしら？」

「花は多少詳しいけどお、見たこと無いわねえ」

「突然変異か新種の可能性もありますね」

「まあ、何だ。ただ一つ言えることは」

「「ラフレッシュアじゃ無くて良かった」」

あの大きさに臭いをまき散らされたら、間違いなく致死量だろう。

「それでどうするんだ？」

「そうねえ。状況の確認は出来たからあ、まずは加藤ちゃんの保護

かしらあ」

「……何処に居るんでしょうね」

ハル達からは、その姿を確認できない。

恐らく、あのツタの中、中心部に囚われてしまった可能性が高い。

「少し急ぐ必要がありますね」

「どうしてです?」

「もしあれが食虫植物なら……」

あの大きさだ。

食べるのが虫だけとは限らない。

柚子の言葉に嫌な光景を想像してしまい、奈美は顔をしかめる。

「とにかくう、ツタを処理しながら進むしか無いわねえ」

ローズの指示に従い、ハル達は巨大植物へと近づいていく。

すると、

「やばいな、俺達を見つけたみたいだ」

ズルズルと動いていたツタが、ハル達を警戒する様に動きを変えた。

そして、ハル達を敵だと認識したらしい。

「つ、ツタがつー!!」

まるで大蛇の様なツタが、ハル達に襲いかかってきた。

鞭のようにしなるそれをまともに受けたら、ただでは済まないだろう。

「ふふん、ここは私に任せて。てりやああああ!!」

奈美は手をパキパキと鳴らし、ツタに向かって突進。

そのままの勢いで、思い切り手刀を放った。

スパアア

まるで鋭い刃物の様に、手刀は巨大なツタを一刀両断した。

「「おおおお」

感嘆の声を挙げるハル達。

恐るべき達人の技だった。

「いくらでかくても、所詮は植物よ。私の敵じゃないわ」
振り返り、誇らしげに胸を張る奈美。

「……いや、まだだ！」

「へっ？」

両断された筈のツタは、直ぐさま切断面から新たなツタを生やす。そしてそのまま、油断していた奈美に襲いかかる。

「んなろおおお！！！」

咄嗟に奈美の前に躍り出たハルは、迫り来るツタに手刀を打つ。
ジヨリジヨリジヨリ

切れ味の悪い包丁で切ったような鈍い音だったが、何とかツタを切り落とす。

「あらあ、やるわねハルちゃん」

「奈美さんの手刀をモノマネしたんですね」

「ハル……格好いい」

賞賛の視線を向ける一同だったが、直ぐさま眉をひそめた。

「ハルちゃん、どうしたのぉ？」

「……手の骨、折れちゃった」

手刀をした右手を押さえ、苦悶の表情を浮かべるハル。

「折角格好良かったのに……」

「モノマネしたのに、ですか？」

「身体が強くなる訳じゃ無いから……」

チラリと奈美を見るハル。

「何よ、私が頑丈だって言いたいの？」

「違うとでも言うのか？」

「むうううう」

ふくれ面をする奈美。

キチンと鍛錬を積んだ手刀なら、ハルのように怪我などしないだろう。

だがあくまでモノマネ。どうしても技術は劣化してしまう。

「ハルさんこちらに………あ、これは骨折と言うよりは」

「だ、打撲とかで済んでるか？」

「いえ、粉碎骨折ですね。ざっと、全治六週間位でしょうか」
何てこつたい。

「直ぐ処置した方が良いのですが、痛みは無いんですか？」

「手首から先の感覚が無いんだ」

「ああ、じゃあこれから凄い激痛来ますので、覚悟しておいて下さい」

「そんな覚悟したくないいいいい」

「やっぱり口調で言われると余計怖くなる。」

「もうハルちゃんたらあ、甘えん坊なんだからあ」

「これから激痛が来る、と言われると凄い恐怖なんだよ」

「ではこうしましょう」

プスリ

「ゆ、柚子さんや。一体何を？」

「鎮痛剤です。まあ、処置するまでの一時しのぎですけど」

「柚子ちゃんは優しいわねえ」

「……せめて注射する前は一声欲しいけどな」

「予告無しで手の甲に注射は怖すぎる。」

「まあ、ハルちゃんは戦線離脱と言うことでえ」

「面目ないです」

御堂ハル、開始十分でリタイア。

「てえええい、たああああ、とりやあああ」

スパ、スパ、スパ

次々に迫り来るツタを、奈美が鮮やかに切り裂いていく。

だが、斬った先から再生されてしまい、数を減らすことが出来ない。
い。

「もう、これじゃキリが無いわね」

「負けることはないが、勝つことが出来ない。」

「驚異の再生力を前に、奈美に僅かに焦りの色が出る。」

「単体攻撃が駄目ならあ、範囲攻撃しかないわねえ」

「ろ、ローズ。その背中に背負ったボンベと、ホースは一体何処から……」

「それは突っ込まないのが大人よお。さあ、これならどうかしらあ？」

ローズはニヤリと笑い、ホースについているスイッチを入れる。

瞬間、

ゴオオオオオオオオオ

猛烈な勢いの炎が、植物に向かって噴射された。

「か、火炎放射器……」

「ドクターの技術を元にい、私が完全監修した特別製よお」

「効果は抜群みたいですね」

「あつ、聞いたことあるわ。確か……五行思想とかいう奴でしょ」

奈美、それは違う。

五行思想なら、木に強いのは金だ。

まあそれは置いておくとして、ローズの攻撃は確実に植物を追いつめる。

炎の勢いは凄まじく、ツタだけでなく花の本体まで包み込もうとして、

「あつつつちいいいいいいいい！！！！」

絶叫が響き渡った。

ハル、奈美、ローズ、柚子は炎の圏外に居る。

なら今の声は、

「加藤（さん・ちゃん）の事忘れてたあああ！！！！」

植物に捕らえられていた加藤だった。

慌てて火炎放射器を止めるローズ。

「加藤、無事かああ？」

「その声は、ハルさんですよ。死にかけましたけど無事です」
最悪の事態は回避されたようだ。

「ハルさん、気を付けて下さい。こいつ、いきなり燃え始めますから」

「あ、あ、それは……」

「加藤ちゃん、忠告ありがとう。今助けるからあ、待っててねえ」
隠蔽しやがった。

焼かれた植物だったが、既に再生を始めている。

表面のススが剥がれ落ち、以前と変わらぬ姿を現す。

「しかし困ったな。加藤が中に居る以上、燃やすわけにもいかないし」

「じゃあ凍らせちゃえば？」

凍死しますって。

「こうなれば最後の手段ねえ。柚子ちゃん、お願い出来るかしらあ？」

「……やむを得ませんね。ハルさんとローズさんは離れていて下さい」

「ん、どうして？」

「まあまあ、いいからあ。じゃあ、任せたわよあ」

ハルはローズの脇に抱えられ、庭から外に避難させられた。

「奈美さん、あのツタの動きを止められますか？」

「ん、一本だけで良いなら」

「充分です」

「じゃあやるわよ。……ふんっつっ!!」

再生したツタの攻撃を、奈美は正面から受け止めた。

そしてそのまま、両手でツタを抱えるようにホールドする。

「これで良い？」

「ええ。後はこれを……えい」

プスリ

柚子は鞆から取りだした箱から、更に取り出した注射器をツタに打つ。

ちゅうう、と注射器の液体が注ぎ込まれ、そして、

「か、枯れていく」

「除草剤の改良品です。直接注入すれば、どんな植物だろうとイチコロです」

何とも恐ろしい事を可愛らしく言つてのける。

その言葉を証明する様に、奈美が抱えたツタが茶色に変色していく。

それは瞬く間に全体に広がっていき、本体の花が萎れるまで一分と掛からなかった。

「効果発現まで一分少々。まだ改良の余地はありそうですね」

「こんながあるなら、最初から使えば良かったのに」

「……実はこの薬、少々厄介な特性があります」

「厄介？」

「男性が万が一、薬に触れたり気化したものを吸い込むと……不能になります」

お、恐ろしい。

「不能？ 無能になっちゃうって事？」

「……お耳を拝借。ごによごによ」

柚子の言葉を聞いた奈美は、一瞬ポカンとした顔をして、ボンツ

真つ赤な顔で頭から湯気が上がった。

どうやら理解してくれたらしい。

「だからギリギリまで使用は控えてました。あの二人を遠ざけたのも、万が一に備えてです」

「ハルが不能……ハルが不能……」

「本人の前で言わないことを勧めますよ」

真つ赤な奈美に苦笑すると、柚子は避難していた二人を呼び戻す。ハルもローズから事情を聞いていたのか、何とも言えない複雑な顔をしている。

「どうやらあ、成功したみたいねえ」

「はい。最終的には副作用無しを実現するつもりです」

「お願いします。いや、本当に」

切実だった。

「さてえ、無事巨大植物も処理できたしい、帰りましようかあ」

「ですね」

「ハルさん、帰ったら右手の治療をしますね。可能な限り早く治るように頑張ります」

「頼むよ。利き手が使えないと不便で仕方ない」

「ハル……右手……不便……」

「ん、どうかしたか？」

「ななな、何でもないわよ。ほら、早く帰りましょ」

急に顔を真っ赤にしたかと思うと、奈美は駆け足で行ってしまっ
た。

呆然とするハルに、

「うーん、若いわねえ」

「少し刺激的すぎましたか」

何やら意味深な事を呟く年長者組。

ハルの疑問は解かれることなく、一行は事務所へと帰っていくの
だった。

「誰か………助けてくれええええ!!」

枯れた巨大植物に挟まれ、動けない加藤の叫びが、虚しく響き渡
るのだった。

草むしりは危険な仕事？（後書き）

植物を舐めたらあかん、と言うことで。

某怪獣映画に出てくる、ビオランテ氏がモチーフでしたが、見る影もありません。

久しぶりにハルが活躍したと思えば、まさかの負傷。

この主人公、持っていないです。

因みに初登場のサブキャラ加藤君は、千景に怒られて戻ってきた口
イズと奈美によって、救出されております。その後勿論雑草取りを
やりました。

まともな人は少ないので、頑張つて欲しいです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

手料理にご用心（前書き）

ハルの負傷を知った秋乃。

それだけで心配なのに、更に奈美が暴走を始め……。

手料理にご用心

「えっ、お兄ちゃんが怪我？」

授業の合間の休憩時間。

奈美から聞かされた言葉に、秋乃は驚いた。

「うん、この間の依頼で。まあ、大したことは無いみたいだけど」

「そう……打撲とか捻挫なの？」

「右手の複雑骨折だって」

「重傷じゃないのっ！！」

思わず突っ込む秋乃。

どうも目の前の友達は、基準がずれているようだ。

「でも三日もすれば治るって言ったし」

「骨折……なのよね？」

普通何週間かかかる筈だが。

「うちには柚子さんって言う、凄い優秀なお医者さんがいるのよ」

「骨折を三日で治せるお医者さん……」

「凄かったのよ。こう、手をパカッと切って、骨をパズルみたいにくっつけて」

あの後ハルに施されたのは、もはや応急処置の域を超えた治療だった。

手を開き、骨を並べ直し、特製の薬品を骨折部に塗っていく。

『これで大丈夫。今夜は死ぬほど痛みますが、三日後にはすっかり元通りです』

天使のような笑顔で、悪魔のように残酷に告げる柚子。

その夜、ハルの絶叫が夜通しアパートに響いた。

「今日が二日目だから、明日我慢すれば治ってる筈よ」

「でも利き手が使えないと不便よね。日常生活にも支障が出るだろ

うし」

「そうなのよ。料理も出来ないから、私はハルの料理お預けだし」
ぴくつと秋乃の耳が動く。

「お兄ちゃんの料理って？」

「毎日ハルに夕ご飯作ってもらってるのよ。言ってなかったっけ？」

「初耳ね。そう、お兄ちゃん……」

何やら黒いオーラが秋乃の全身からほとばしる。

ただならぬ気配に、思わず奈美は後ずさり。

「で、でも料理って言っても、普通の家庭料理よ」

「家庭料理……良いな。お兄ちゃんの手料理……良いな」

立ち上るオーラ。

怖い。普段大人しいからこそ、この雰囲気は怖い。

「あ、秋乃だつて食べたことあるでしょ？」

「無いよ。今まで一度も」

「どうして？ ハルって結構面倒見良さそうだけど」

「……だって、私の方が料理上手かったから」

ジレンマここに極まれり。

優秀すぎるのも考え物だ。

「なら今度作ってもらおうよ。頼めば作ってくれるって」

「そう、よね。うん、そうに決まってる。よし、そうしよう」

自己完結完了。

黒いオーラは消え去り、秋乃は満面の笑みを奈美に向けた。

「でも心配だわ。お兄ちゃん食事はどうしてるんだろ」

「確かカップ麺とか言ってたわよ。左手じゃ箸が使えないから、フ
オークでって」

「ん、あまり身体に良く無さそうね」

「精々三日四日だから心配いらなと思うけど……あ、そうだ！」「
何かを思いついたようだ。」

「私が料理を作れば良いんだ」

「えっ！？」

「何よその反応は？」

「だって奈美……料理出来ないでしょ」

「どうしてよ。私秋乃の前で料理した事無いでしょうに」

「だってこの間……」

『ねえ秋乃。お弁当少し分けて。このレタスの千切りでいいからさ』

『……これ、キャベツよ』

『秋乃、これ茹で過ぎよ。ブロッコリーが白くなっちゃってるじゃない』

『……それ、カリフラワーよ』

『あれ、秋乃。この大根、隠し包丁してないの？』

『してるけど……味染みてなかった？』

『だって、包丁入ってないわよ』

『……』

「料理……出来ないわよね？」

「う、うう」

実例をあげられ、奈美はぐうの音も出ない。

「今回は大人しくしててね。今度ちゃんと料理を教えてあげるから」

「大丈夫よ。「料理は愛情」だって偉い人が言ってたもん」

胸を張る奈美。

「それはまた別の話……っていうか、奈美はお兄ちゃんに愛情があるの？」

「……」

秋乃の言葉に、奈美は思わず言葉に詰まる。

好きか嫌いかと言えば、好きだ。

だがそれが「Like」か「Love」かと言われると……。

乙女心は複雑だった。

「ふむ、まだハッキリ意識してないけど、脈はあるって感じね」
その様子を見て、秋乃は鋭く分析する。

美しい漆黒の瞳に見つめられ、奈美は頬を赤く染める。

「べ、別に秋乃には関係……無くはないけど」

「あるわよね？　じゃあその辺の話を詳しく……」

「じゃ、じゃあ私ハルの所に行くから、ばいばい！」

詰め寄る秋乃を振り切り、奈美は一目散に教室から離脱していった。

あまりの早さに、暫し呆然とした秋乃は、

「……授業、まだ残ってるのに」

取り敢えず友人為、授業のノートをとってあげようと決意した。

一日の授業が終わると同時に、秋乃は駆けだした。

私服に着替える時間も惜しいとばかりに、制服で街を突っ走る。

「奈美が出て行ってから二時間……不味いわね」

料理にもよるが、それだけ時間があれば充分完成してしまうだろう。

奈美の料理の腕は未知数だが、決して楽観視は出来ない。

何とか食べる前にくい止めねば。

「人が少ない最短ルートは……こっちなね！」

商店街は夕食の買い物にきている主婦や、学校帰りの学生が多い。
混雑を避け、最短距離でハルのアパートへと猛ダッシュ。

ローファーを履いているとは思えない速度で、ハルの元へと向かった。

「お兄ちゃんっ……！」

叫び声と同時に、ハルの部屋のドアを開け放つ。

瞬間、

「ぐ、うつつ、何、この煙……………目に染みるう」

出迎えたのは、室内に充滿した紫色の煙だった。

あまりの臭気に、ハンカチで口と鼻を覆いながら中に入る。

「お兄ちゃん、奈美、居るなら返事して」

「あ、秋乃。ここだよ」

部屋の奥から奈美の声が聞こえる。

「な、奈美、無事なの？」

「何よそれ。丁度これから食べる所だから、秋乃も一緒にどう？」

室内の様子など気にも留めず、平然と誘う奈美。

「少しはおかしいことに気づいて」

「へっ？ 何が？」

「こんな状況で食事なんて、おかしいでしょ」

「だって、この本にはちゃんと書いてあるよ。視界を悪くして食べるって」

「……………あなた、何を作ったのよ？」

「えっとね、闇鍋」

嬉しそうな奈美に、

「とりあえず、換気しましょう」

秋乃はどつと押し寄せた疲労感に耐えつつ、窓を開けるのだった。

闇鍋。

親しい人同士、多人数がそれぞれ自分以外には不明な突飛な材料を持ち寄り、

暗中調理して食べる鍋料理。

食事というよりは遊び、イベントとしての色彩が濃く、

スリルと笑いを楽しむために行われることが多い。

「以上、出展はWikipediaよ」

「あってるじゃない」

「基本的に暗中なのっ！ 鍋から出た煙で闇鍋なんてやらないのっ

！」

「そうなんだ」

「そもそも煙が出る鍋って何よ。何入れたらそうなるの？」

「えっとね、これ」

奈美が差し出した材料リストを、秋乃は確認する。

「……お兄ちゃん、箸付けた？」

「ううん、蓋を開けて直ぐに、煙をかいで気絶しちゃった」

それは僥倖。

もし食べていたら、病院ではなくお墓に直行だっただろう。

「奈美、一つだけ闇鍋をやる時のアドバイスをするわ」

「何？」

「必ず、食・べ・ら・れ・る・ものを入れなさい」

「分かったわ。それでね、秋乃？」

「何かしら」

「これ、食べていく？」

「即刻処分しなさいっ！！！！」

病院に緊急搬送されたハルは、何とか一命を取り留めた。

次に彼が目覚めたときには、右手の骨折がすっかり治った後だった。

手料理にご用心（後書き）

まさかの病院送りオチでした。

皆様も闇鍋をやられる際は、充分にご注意下さい。

経験談を言いますと、カレールウがあれば最悪何とかかなりますんで、何時かハピネスメンバーで、闇鍋リベンジしてみたいです。

奈美は料理苦手です。

と言うよりも、身体を動かすこと以外は、全般的に駄目です。

これは後々出てくると思いますが、色々な事情があります。

各キャラの背景も、いずれ書いていきたいと思っています。

今のところ、仕事が落ち着き執筆の時間が定期的に取りれています。

それが変わるまでは、現在の投稿ペースを続けて行きたいと思っております。

これからもお付き合いよろしく願います。

お気に入り登録して下さい、大変嬉しく思います。
現在モチベーションがぐんぐん上昇中です。

少しでも良い作品を投稿できるよう、日々精進して参りますので、次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

野球やるつぜ(1)(前書き)

千景に招集を掛けられたハピネスの面々。
何事かと身構える彼らに、千景の口から告げられた事は……。

野球やるつぜ(1)

ある日の夕方。

ハピネス事務所には、いつもの面々が集まっていた。と言うよりも、集められていた。

突然の招集に首を傾げる一同を前に、

「みんな、野球をやりましょう」

千景は全く似合わない爽やかな笑顔を浮かべて告げた。

「野球……ですか？」

事態が飲み込めない奈美が尋ねる。

「そうです。野球、英語で言えばベースボール。貴方の想像通りのスポーツです」

「でもお、どうして急に野球をするなんて言いだしたのお？」

ローズが全員の気持ちを代弁する。

「まあ当然の疑問ですね。実は依頼があったのです。野球の助っ人をお願いしたいと」

「誰からです？」

「芍薬商店街の会長さんからです。今日の昼間、直接依頼に来ました」

ハルの問いかけに千景は答える。

芍薬商店街は、ハピネスが事務所を構える通りにある。

デパートなど大型店舗が遠い地元にあって、そこそこ賑わっている。

「今週末、牡丹商店街と草野球の試合があるらしいのですが……」
千景の説明はこうだ。

芍薬商店街と牡丹商店街は、場所が近い事もあり長年ライバル関

係にあるらしい。

巨人と阪神、ルパンと銭形、トムとジェリー……最後は少し違うか。

とにかく、売り上げやその他で長年競い合ってきた仲なのだ。今週末に行われる草野球もその一つ。

当然芍薬商店街も精鋭メンバーで挑む筈だったのだが。

「少々トラブルが起き、人数が足りなくなったそうなのです」

「トラブルですか？」

「肉屋魚屋が食中毒、薬屋が風邪、鍼灸院が腰痛など、不幸な事故が相次ぎました」

最初の二つは洒落になりませんって。

「ですので、足りない分を私達ハピネスのメンバーで補って欲しいと言っ訳です」

「お話は分かりましたけど、何人くらい足りないんです？」
柚子が尋ねる。

「無事なメンバーは二人、つまり七人足りません」

「過半数超えたっ！！」

もはやそれはチームハピネスと呼ぶべきだろう。

「今回は棄権した方が良いのでは？」

「私もそれを勧めましたが……牡丹商店街へのライバル心は相当なものにして」

「意地でも戦い、そして勝利すると、その会長殿は譲らなかったのだな」

紫音の言葉に千景は頷いて肯定する。

「とにかく引き受けた以上、それは正式な依頼。私達は全力で遂行するまでです」

千景が断言したのなら、もうこれ以降の議論は無用だろう。

どうあがいても、結局やることになるのだから。

「では早速、作戦会議に移りましょう」

ハピネスの野球助っ人作戦は始動した。

「まず、野球のルールを知っている人？」

「はい」

まず、紫音と奈美が脱落した。

「次に、過去にどの様な形でもいいので、野球をやったことのある人？」

「はい」

柚子と蒼井が脱落した。

「最後に、実は野球得意で自信あるぜ！ って人？」

「はい」

そして、ハルが脱落した。

残ったのはローズ一人。

うん、無理だ。

「なるほど……戦力としては充分ですね
どこが？」

「私と剛彦が即戦力。奈美はルールさえ覚えれば充分戦えるでしょう」

それが一番難しい気もしますが。

「柚子とドクター、それに紫音は卑怯な手段を選べば問題ないです」

さようなら、スポーツマンシップ。

「そしてハル君。貴方には万能選手としての活躍を、期待していますよ」

「んな無茶な。俺は学校の授業で少しやったことがある位で」

「心配ないわよお。ある意味ハルちゃんが一番ずるいんだからあ」

「なんでさ？」

「プロ野球も開幕しましたし、お手本は選り取り見取りですから納得です。」

「今日は水曜日ですから、土曜の試合まで後三日もありますね」
「三日しか無いですよ」

「充分です。私が各人に必要なトレーニングメニューを作りましたから」

千景は音と奈美に何やら紙を渡す。

「二人はまず、ルールを憶えてください。それに書いてある事だけ結構です」

「承知した」

「了解です……あれ、千景さん。紫音と私の紙、内容が違いますけど?」

「……個人の力量にあつたメニューを選びました」

「ああ、なるほど」

「ちよつと、どういう意味よ!」

「そのまんまの意味だ」

紫音に渡された紙には、野球のルールが細かく記されている。

一方の奈美の紙には、

『相手が投げたボールを、手に持った棒でぶつ叩きましょう』

等々、凄まじく奈美用にカスタマイズされた説明文が箇条書きにされていた。

ルールと言うよりも、何かの説明書の様だ。

「細かい事はその都度教えますから、まずその紙に書いたことだけ憶えてください」

「乱闘になつたときは、一番優れた選手を集中的に狙う……なるほど」

間違いなく奈美専用だった。

「柚子とドクターには、三日間でこれを用意して頂きたいです」

千景は二人にも何やら書かれた紙を渡す。

「……千景ちゃん、一つ確認しても良いかな」

「どつぞ」

「ドーピング検査の可能性は？」

柚子さん、草野球ですって。

「勿論あります。両商店街にとっては、正に天下分け目の決戦ですから」

……あるんだ。

「分かったわ。ちゃんと陰性になるように、細工しておくね」

「頼りにしますよ、柚子」

力の入れ方を激しく間違っている気がする。

「吾輩も聞きたいことがあるぞ」

「どうぞ」

「予算はどの位だ？」

「そうですね………こんなもので」

パチパチとそろばんを弾き、蒼井に見せる。

「ふん、充分だな。吾輩の傑作達を楽しみにしているが良い」

「頼みますよ、ドクター」

もう完全に野球の話じゃない。

「剛彦は商店街メンバー二名と共に、試合に向けて調整をして下さい」

「良いわよお。その二人、若い子だと嬉しいんだけどお」

「……商店街会長が御歳八十五歳。もう一人の副会長が七十歳です」
マスターズリーグですね。

「二十代、三十代の主力選手達は、先程言ったようにリアイアですので」

「計略を疑うレベルですね」

「……否定はしません。何でも昔は、試合前によく死者が出ていたらしいですから」

スポーツマンシップよ、帰ってきてくれ。

「でもお、スタメンに入っていた位だし、野球は得意なんじゃない？」

「その通りです。若い頃は単身アメリカに渡り、ブイブイ言わせていたそうです」

「ならあ、思い切りやれそうねえ」

「ええ。方法は貴方に任せますので、きっちり仕上げてください」「うふふう、お・ま・か・せ」

御大方、どうかご無事で。

「さて、最後になりましたが……ハル君が実は一番厳しいスケジュールです」

「何故です？ プロ野球を観戦すれば良いんですよ？」

その後練習するのは当然だが、さほど厳しい日程では無いはずだ。ハルの疑問に、千景は静かに切り出す。

「貴方のモノマネは、あくまで技術の模倣。身体が強くなるわけじゃないありません」

「ですね。だから重量上げとか真似しても、あんまり効果は無いです」

身体の使い方は真似できても、身体はハルのもの。

筋肉が増える訳でも無いので、特に力業関連のモノマネは意味が薄い。

「プロの野球選手は、技術の根本に鍛えられた肉体があります」

「まあ、そうですね」

近くで見るとよく分かるが、プロの選手は体付きが凄まじい。

肉厚、と言っのだから、とにかくがたいが良い。

腕や足の太さを見れば、身体に纏う筋肉が容易に想像できる。

「本来ならハル君の肉体を鍛えるのが理想的なのですが、時間が足りません」

「今日を入れて三日しかありませんからね」

「そこで、ハル君には世界最高峰の技術を真似て貰うことにしました」

「……はい？」

「あの人の技術なら、ある程度の筋力不足は補える筈ですから」
「えっと、一応聞いておきますけど……誰です？」

千景は質問に答えず、ハルに封筒を手渡す。

「……パスポート、飛行機の手ケット……それとこれは……」

「西海岸ですので、見て直ぐ帰ってくれば間に合いますね」

「いや……それはそうですけど……」

「空港までは鈴木が送ります。今すぐ出発して下さい」

目がマジだった。

「時差ボケに気を付けて。機内での時間で、上手く調整して下さい
ね」

もう逃げることは敵わない。

ハルは実は人生初の、海外旅行へと旅立つことになった。

凄まじい強行日程だが。

ハピネスの一同は、それぞれ試合に向けて自分のやるべき事をこ
なす。

そして、試合の日がやってきた。

野球やるうぜ(1) (後書き)

草野球編スタートです。

ハルがモノマネしに行く選手は、みんなご存じあのお方です。今年は200本廠しそうですが、最後まで諦めないで欲しいですね。

過半数が素人のハピネス。

果たして依頼を達成できるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

野球しようぜ(2) (前書き)

芍薬商店街と牡丹商店街。

宿命の対決を前に、今選手達が決戦の地に集う。

野球しようぜ(2)

試合当日。

ハルは空港の到着ロビーに降り立った。

「あ、ハルさん。お帰りなさい」

向かえに来ていた鈴木が、ハルを出迎える。

「鈴木さん……無事、帰ってきました」

「大分お疲れみたいです」

「疲れない方がおかしいです。往復すると時差で体内時計がもう滅茶苦茶で」

「ははは……それで、お疲れの所申し訳ないですけど」

「分かってます。車で爆睡させて貰いますね」

目の下に大きな隈を作ったハルに、鈴木は苦笑いしながら頷く。

二人は車に乗り込み、決戦の地へと向かうのだった。

一方、他のハピネスマンバーは、一足先に決戦の地へと到着していた。

「ここが、今日試合を行う球場です」

「へ〜大きな所ですね。でもどうして屋根がついてるんですか？」

「ドーム球場って言うてねえ、天気に関係なく試合が出来るからよ
お」

ローズの説明に、奈美はなるほどと頷く。

「草野球……素人が行う野球と認識していたが……なかなかどうして立派な会場だな」

「最大収容人数は五万人。まあ今日はプロの試合では無いので、一割程の入りでしょう」

「そうか。少なくとも声援を受けられるのは、心強いものだな」

しみじみと呟く紫音。
突っ込み役の不在の影響は大きかった。

一時間ほど遅れて、ハルが球場に到着。
「ななな、何で草野球でドーム球場なんだあああ!!」
突っ込み役の帰還だった。

「さて、それでは全員揃ったところで、自己紹介しましょう。まず、
主将からどうぞ」

千景の言葉に、高齢の男性が頷きハル達の前に立つ。

「ひょうひゃ、ひよひゅひひえひゅへ……」

「みっちゃんや。入れ歯忘れとるぞ」

「ひゅ、ひゅん。はぐはぐ……うん、これで平気じゃな
不安だ。」

「今日はよく集まってくれた。儂が芍薬商店街会長の、水戸家光みといえみつ
や」

惜しい、混ざった。

「みんなも気軽に、みっちゃんと呼んでくれい」

「はぐい、よろしくね、みっちゃん」「」

欠片の躊躇いも無く、フランクに呼ぶハピネス一同。

内心ヒヤヒヤするハルだが、呼ばれた本人が嬉しそうなのでスル
ーする。

「そして、副主将が……」

「儂が芍薬商店街副会長の、助産格三すけさんかくさんじゃ。格さんと呼んで欲しい
のう」

「「よろしく、格さん」「」

呼ばれて満足げに頷く格さん。

八十五歳と七十歳にはとても見えない。

「では続いて私達が。ハピネス代表の、柊千景です」

「私は不要だと思うけど改めてえ。ローズよお」

「蒼井賢だ。足を引っ張るなよ」

「い、和泉柚子です。……チームドクターも勤めますので、よろしくお願いします」

「結城紫音だ。若輩の身だが、誠心誠意力を尽くす所存だ」

「早瀬奈美です。乱闘なら任せてください」

「御堂ハルです。乱闘以外なら頑張ります」

順々に自己紹介をするハピネスメンバー。

そんな彼らを見て、うんうん、と頷くみっちゃんと格さん。

「これはまた、頼もしい若人が集ったもんじゃ。のう、格さん」

「じゃな。牡丹の奴らと十二分に戦えそうじゃわい」

男二人、女二人、（見た目）子供二人、性別不詳一名ですけどね。

まあ依頼主が納得したなら良いのだろう。

「そろそろ私達の練習時間です。みんな、準備してください」

「はいっ！！」

何故かみっちゃんと格さんまで返事をしていたが、細かいことは気にしない。

試合開始の時は、刻一刻と迫ってきた。

試合開始十分前。

両チームのメンバー表交換が行われた。

「久しいな、家光。まだ迎えが来てなかったのか」

「お互い様じゃろうが、のう牡丹の」

「全くだ。ところで、今回は随分風変わりなメンバーじゃないか」

「一見のう。じゃが、実力は本物じゃよ」

「ここ五年で二勝二敗一分け。そろそろ決着を着けたいな」

「それはこっちの台詞じゃ」

ニヤリと笑うご老人二名。

因縁の戦いを前に、既に血湧き肉躍っている様だ。

「いよいよ試合開始です。では、守備位置と打順を発表します」
「随分引つ張りましたね」

「先程の練習で適正を見極めました。恐らくベストオーダーの筈です」

「では柊ちゃんよ。発表してくれい」

みっちゃんに促され、千景はスターティングオーダーを告げた。

一番 ライト ハル
二番 レフト 紫音
三番 キャッチャー 格さん
四番 ピッチャー みっちゃん
五番 サード ローズ
六番 センター 奈美
七番 ショート 千景
八番 セカンド 柚子
九番 ファースト 蒼井

何とも凄まじいラインナップだ。

電光掲示板に並ぶと、その異常さがよりハッキリする。

「……ローズって、名前だけで凄い威圧感だよな」

「ハル君も人のこと言えませんかよ」

漢字で表記されなかったのは、千景の優しさなのだろうか。

分かる人だけ分かってくれ。

「相手のスタメンも出てきたわねえ」

「どれどれ……あれ？」

「何かあったの、ハル？」

「いや、見間違いかな。俺、あっちのベンチに居る人達に見覚えが

……」
ゴシゴシと目を擦るハル。

だが、間違いない。

「なかなか豪華なメンバーを揃えてきましたね」

「元プロ野球選手にい、バッテリーは去年夏の甲子園を制した子達ねえ」

「あの黒人は見覚えがあるぞ。NASAに居たとき、向こうで試合に出てたな」

「ら、ラインナップに素人が一人もいねえ……」

草野球の根本を揺るがす事態だ。

名前だけでお客が呼べそうな、豪華な面子が集結。

道理で五千人も観客が居るわけだ。

「ふおふお、牡丹の奴らは相変わらずじゃな」

「生え抜きを育てぬのは、奴らの悪い癖じゃよ」

「ま、毎度の事なんですか？」

「今年はマシな方じゃ。前は現役の選手を呼んだことがあったからのう」

「参加資格が曖昧じゃからな」

確か参加資格は、その商店街の関係者の筈。

「商店街で買い物をした人の友達の親戚の隣の家に住んでいる人の知り合いとかも、アリじゃ」

「……見直した方が良いですよ」

いや、本当に。

「何、若いの。心配は無用じゃ」

「知名度では引けをとるが、実力では決して後れはとっておらん」

「……へっ？」

ついに呆け始めたのか？

「儂らが若い頃は、ベールブルースやピートローズ何かと戦ったんじや」

「ONは流石じゃったな。みっちゃんのボールをバットに当てた日本人は彼ら位じゃった」

「……千景さん？」

「全ては、試合が始まれば分かりますよ」
否定はしないんですね。

舞台は全て整った。
いよいよ、決戦の時。

野球しようぜ(2) (後書き)

段々と收拾がつかない事態になって参りました。

恐らく風呂敷を閉じきれずに終わるか。先に謝っておきます。

「カツとなつてついやってしまった。今は反省している」

二話もつかつて、まだプレイボールしない野球編。

次回で完結です。

屈強な相手に、チート軍団はどう挑むのか。

と言うより、どう叩き潰すのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

野球おわるうぜ(3)(前書き)

遂に始まった因縁対決。

果たして勝負の行方は如何に。

野球編完結です。

野球おわるっぜ(3)

試合が始まった。

芍薬商店街は後攻。ハル達はグラウンドの守備位置につく。

マウンド上には、御歳八十五歳のみっちゃん。

「投球練習は不要じゃ」

無駄に格好良かった。

『プレイボール!!!』

審判の声と共に、最初の打者が打席に入る。

「……あの人が、去年引退した元プロ野球選手だ」

確か全盛期に首位打者も取った名選手。

いきなりとんでもない敵だ。

だが、マウンド上のみっちゃんは余裕の表情。

「まずは肩慣らし。いくぞ、格さんや」

ゲートボールでも始めそうな様子で、みっちゃんは投球モーシヨンに入る。

押せば倒れそうな細いから身体から、ボールが投げられた。

シュゴゴゴゴゴゴゴゴ、ドパアアアアン

『ストライク』

「……………はいっ?」

思わず目を疑う。

ボールは凄まじいうなりを上げ、格さんのミットに納まっていた。慌ててハルは電光掲示板を見る。

164km。

先日観戦してきたメジャーリーグのピッチャー以上の剛速球だ。

「おいおい家光よ。年々遅くなってるぞ、もう歳か?」

「笑わせるな牡丹の。まだ肩慣らしじゃよ」

唖然とするハルに、追い打ちを掛ける老人二人のやり取り。

「……………世界は広い」

剛速球で次々に三振を取るみつちゃん。

結局相手は一球もバットに当てられず、攻撃を終えていた。

「みつちゃんや、少し球が浮いとるぞ。丁寧な低めをついていこうや」

「ああは言ったが歳かな。足腰に粘りが足りんわい」
ベンチでは怪物爺さん達が打ち合わせ。

あの剛速球を難なく捕球する格さんもただ者じゃない。

と、ここでハルにある疑問が浮かぶ。

「……………何でこの人達が居て勝ち越して無いんだ？」

相手も凄いが、この二人は正直チートだ。

打たれる姿が全くイメージ出来ない。

その疑問は、

「流石にお年ですから。九回を投げきれないんです」

千景の言葉で解決した。

「どの試合も、御大が降板してからは大量失点をしています」

「そりゃそうですね。普通の人じゃ、あの面子は抑え切れませんし」

「ですので、試合は結局乱打戦になります」

「つまり勝負を握るのは……………」

「私達と言うことです。さあハル君、出番ですよ」

スツとバットを差し出す千景。

そう言えばハルは最初のバッターだった。

「モノマネ、いけそうですね？」

「大丈夫だと思いますけど、体調は最悪です」

「ならハルさん。これを飲んでください」

横から声を掛けた袖子が、ハルに一本のドリンクを差し出す。

「私特製の栄養ドリンクです。元気はつらつです」

「あ、ああ、じゃあ頂きます」

「ごくりと飲み干すと、途端に身体中が熱くなる。疲れなど吹き飛び、力が溢れかえってきた。

「こりや凄い……けど、随分即効性があるんだな」

「それは、私の秘伝レシピですから」

「……副作用とか、無いよな？」

「……………」

「黙るなよっ！ 何か凄い不安になるから」

「……ほらハルさん。審判の方が呼んでますよ」

あからさまに話題を逸らした柚子。

小一時間ほど問い詰めたいが、相手を待たせるわけにもいかない。果てしない不安を抱えながら、ハルは打席へと向かった。

左打席に立つと、ハルは精神を集中する。

異国の地で活躍をする、天才バッターのモノマネ。スタジアムの観客が僅かにざわめく。

「あ、私知ってますよ。あれ、ユニルのCMに出てる人の真似ですよね？」

「そっちですか……まあその通りです」

他にもヨーグルトやらネットやらに出演中です。

「外見は完璧ねえ。後は中身だけとお」

一同が見守る中、注目の初打席。

相手のピッチャーが投じた外角の速球を、ハルは逆らわずに流し打つ。

「「おおおおお……」」

ハルの振り子打法に、客席が沸いた。

鮮やかなレフト前ヒットだ。

「あの若いの、やりおるわい」

「血が騒ぐのう」

クリーンナップ二名に火がついた。

燃え尽きないように祈るだけだ。

次の打者は紫音。

若い少女の登場に、相手からは失笑が洩れる。

だが、

『ボール。フォアボール!』

まさかの四球。

「あの小ささで、更に屈んでますから、ストライクゾーンは極めて狭いです」

「甲子園優勝投手もまだまだ小童。精密なコントロールは甘いのが、着々とランナーをためる芍薬チーム。」

その後、格さん、みつちゃん、ローズが連続でヒットを放つ。

先制点を奪い、尚もチャンス。

そして打席には、

「よし、私の出番ね」

やる気満々の奈美が立った。

果たしてルールを憶えられたのだろうか……。

「奈美、分かってるよな?」

「任せてよハル。ボールを打って、あの壁を超えれば良いのよね」
「さらりとホームラン予告。」

明らかに相手投手の顔色が変わる。

そして投げられたボールは、

「「ピンボールだつ!」!」

顔面向かって一直線の危険球だった。

150km近い速球が、奈美の顔に直撃……しない。

「てりやあああああ!!!」

「「大根切り!」?」

奈美がバットを思い切り振り下ろす。

ボールはまるでピンポン玉のように、勢いよくスタンドへ。

そのまま壁の看板にめり込んだ。

「……んなアホな」

これには流石にチート老人達も啞然。

「上には上があるのう」

「未恐ろしいお嬢ちゃんじゃ」

あまりの光景に静まり返った球場。

その中、奈美はベンチに向かって尋ねる。

「ねえ、この後どうするんだっけ？」

相手の心を折るに充分な言葉だった。

野球のルールも知らない素人が、あれだけのプレーをやった。
た。

すっかり意気消沈した牡丹チーム。

もはや大勢は決した。

「必殺、ワンバウンドボール打ち！」

ハルが少し調子に乗る。

「降霊術……偉大なる野球選手の霊達よ、私に力を貸して欲しい」

紫音がチート技を披露する。

「ふあつふあ、若かりし頃の血が騒ぐわい。ええい、この紋所が

目に入らぬかああ！」

格さんが芍薬商店街のトレードマークを掲げる。

「秘技流星打法じゃああ！！」

みつちゃんは説明不要。

「みんな元気ねえ。じゃあ私は、繋ぐとしますかあ」

ローズが大きな体に似合わぬシャープなバツティングをする。

「ぶーぶー勝負しなさいよ。え、敬遠？ 何それ美味しいの？」

奈美は完全に勝負をして貰えない。

「甲子園優勝、立派です。でも、未成年の飲酒はいけませんよ……
ねえ？」

千景が逆ささやき戦術で絶好球を要求する。

『集中力強化薬と筋力増強剤。これなら私だって……』
袖子が隠す気全くないドーピングで、ボールを弾き返す。

『この全自動大リーガー養成ギプスを装着すれば、吾輩は何もする必要が無い』

蒼井が人間の可動域を超えた動きを見せる。

何というか、試合は一方的だった。

大量得点を得たみっちゃんは、ますます調子を上げていく。

「いい感じじゃわい。久しぶりに乗ってきたぞう」

最高球速170kmを記録したみっちゃん。

パーフェクトピッチングのまま、五回でマウンドを降りる。

「ピッチャー交替。みっちゃんに替わって、奈美」

替わりにマウンドに上がった奈美。

「格さんの手を目掛けて投げれば良いのよね。行くわよお！」

シュゴゴゴゴゴ、ドスウウウン

みっちゃんに勝るとも劣らぬ速球を披露する。

「ピッチャー交替。奈美に替わって、剛彦」

次の回はローズがマウンドに上がる。

「一球でもバットにかすったら褒めてあげるわあ」

キュイイイイイン、スパアアン

物理法則を無視した変化球で、相手を翻弄する。

「ピッチャー交替。剛彦に替わって、ドクター」

その次は蒼井がマウンドに上がる。

「くつくつく、行くぞ。消える魔球だああ!!」

蒼井の放ったボールは、ミットに納まることなく消えた。

「「おおおおお!!」」

観客席が驚愕に沸く。

「……おい、蒼井。ボールは何処に行ったんだ？」

「言っただろう、消える魔球と。時空湾曲装置で、この次元から消したのだ」

「アホかああああ！！」

「……ピッチャー交替。馬鹿に替わって私」

結局蒼井は一球もストライクを取ることなくマウンドを降りた。

千景の小刻みな継投により、牡丹商店街は完全に打線が沈黙。

最終回は、ハルがついでにモノマネしてきた、ナックルボールでトドメ。

『ゲームセット。七十四対ゼロで、芍薬商店街チームの勝利！』

歴史的な大勝利で、野球勝負の幕は降りた。

「ふあつふあつふあ、いや〜目出度い」

「こんな快勝は、長い歴史でも初めての事じゃよ」

依頼主の二人はご満悦の様子。

「……なんか、途中から可哀想になってきたよ」

「私もだ。完全に彼らの牙は折れていた」

「戦う気力が無くなった相手では、流石に吾輩も氣勢を削がれたぞ」

「途中から何か泣いてたわよ」

「ちよつと、やりすぎましたね」

ハル、紫音、蒼井、奈美、柚子は素直に喜べない。

だが一方で、

「悪くない勝利です。これで今後の対戦も、優位に進められるでしょう」

「勝つときは徹底的に基本ねえ。もう少し抵抗して欲しかったけどお」

千景とローズは満足げに勝利を味わう。
まるつきり悪役の様だ。

何はともあれ、ハピネスの依頼は完了だ。

一行は球場を後にする。

その道中、

「……あの〜みっちゃん。一つ聞いても良いですか？」

「ふむ、何じゃい？」

「どうして芍薬商店街と牡丹商店街は仲が悪いんですか？」

ハルはずっと疑問だったことを尋ねてみる。

「若いの、こついう言葉を知っておるかな？ 立てば芍薬座れば牡

丹歩く姿は百合の花、と」

「はあ、まあ一応は。確か美人を形容する言葉だったと思いますけ

ど」

みっちゃんはハルの答えに頷く。

「うちの芍薬、奴らの牡丹は、その言葉から取られたもの何じゃ」

「なるほど。で、それが何の関係が？」

「立ち姿と座り姿……どっちが美しいか、と意見が分かれてのう」

「……………」

「最初は口論だったんじゃが、次第に対立は過激になった」

「……………」

「死者が出るようになって、互いに協定を結び、スポーツで優劣を競うようになったんじゃ」

あまりに子供じみた理由に、ハルは脱力する。

他のメンバーも知らなかったのか、同じように呆然とした顔をしている。

「そうじゃ、若いの。お主はどうだ？ 立ち姿と座り姿、どっちが

好みじゃ？」

「……………歩く姿です」

疲れた。

本当に、疲れた。

野球おわるうぜ(3) (後書き)

酷いオチですね。

反省しております。

この小説、一応ストーリーと言いますが本筋の様な物があります。まだ全然話が進んでおりませんが、そろそろ動かしていこうと思います。

基本は馬鹿話をやりつつ、その間に挟んでいく予定です。

次回もまたお付き合い頂けたら幸いです。

小話〈紫音とゲーム〉（前書き）

何やら様子のおかしい紫音。

どろどろ悩み事があるようだが……。

小話〈紫音とゲーム〉

ある日の夕方。

ハピネス事務所に紫音がやってきた。

同じ建家に部屋があり、いつも帰宅の報告をしに来るのでおかしくはないのだが、

今日の紫音は明らかに様子が変わった。

何かを考え込んでいるような、そんな顔をしていた。

「おかえり紫音。何かあったのか？」

「ああ、ハル。ただいま戻った。……少々考え事があったな」

何を、と聞きかけてハルは思いとどまる。

学校帰りと言うことは、その原因が学校にある可能性は高い。最悪の想像として、イジメが浮かぶ。

だとすれば、気軽に聞いて良い話ではない。

今度はハルが難しい顔をする。

そんな考えを察したのか、

「ん、何か勘違いしていないか？ 学校生活は特に問題無いぞ」

「……顔に出たか」

「心配は感謝する。私を気に掛けてくれる人が居ると言うのは、心強いものだ」

ハルが思っているよりも、ずっと大人だった。

「なら、何を考えてたんだ？」

「そつだな、ハルは相談相手に適任かもしれん」

短く思考して、紫音は小さく頷く。

「ハルよ、少し聞きたい。お主はてれびげーむ、と言うものを知っているか？」

「つまり、学校の友達とゲームの話題になったと」

「うむ。だが私は生まれてこの方、そのてれびげーむをやった事が無い」

普通なら考えにくいが、紫音は特別だ。

特殊な環境で育ったのなら、充分に有り得る話。

「それを友人に話したら驚かれてな、何故か同情までされてしまったのだ」

「……なるほど」

事情を知らない友人は、きっと紫音の育ちを誤解したのだろう。

ゲームをやる余裕すらない生活を送ってきたのだ、と。

「まあ、良い友達だな」

「自慢の友だ。だが、私は少し考えてしまっ」

「と言うと？」

「友と共通の話題を持ってめと言うのは、どうも歯がゆくてな。こんな気持ちは初めてだ」

学校というのは、子供にとって情報共有の場所でもある。

テレビやゲーム、雑誌などの話題で会話が弾む。

それに加われないことに、少し疎外感を感じているのかもしれない。

「だからテレビゲームを知ろうとしたのか」

「そうだ。だが、千景の家にはてれびげーむは置いていない」

確かに千景がゲームをしている姿は想像出来ない。

「それで困ってしまったな」

「友達の家とかは？」

「それも考えたが、無知な者が居ては遣りづらいのでは無いかと思っ
つて」

「……………」

紫音なりの気遣いなのだろう。

ハルは無言で、紫音の頭を撫でた。

少し考えた後、ハルと紫音は千景に相談する事にした。

「……と言っわけです」

「なるほど、話は分かりました」

業務を一時止めて、千景は休憩スペースに移動して話を聞いた。

これはあくまでプライベートな話。

公私の区別をきっちり付ける千景らしい配慮だった。

「ちなみに、ハル君はゲーム機を持ってますか？」

「あつたんですが、奈美に壊されました」

暇つぶしに対戦ゲームをしたのが運の尽き。

負け続けた奈美が暴れ出し、ゲーム機は無惨な姿に変わり果てた。

「そうですか………確か倉庫に」

千景は二人に少し待つように告げ、事務所から出ていく。

十分ほどして戻ってきた彼女の手には、一つのゲーム機とソフトがあつた。

「ち、千景さん……それは」

「昔手に入れたものです。私はゲームをやらないので、倉庫で埃を被っていました」

千景は手に持ったゲームを紫音に手渡す。

「これは貴方にあげましょう。箱に入っていたので、まだ動くはず
です」

「い、良いのか？」

「構いません。テレビに接続するのが少々面倒ですが………お願いできますか？」

千景の頼みにハルは二つ返事で了承する。

ここまで来て断る理由はない。

「千景……その………ありがとう」

滅多に見せない笑顔で紫音は礼を言う。

それだけで、どれほど喜んでいいのか充分伝わってくる。

千景は紫音の笑顔に、少しだけ驚いた様だが、黙って頷いてみせる。

「ああ、そうでした。一つだけ約束して下さい」
指を一本立てて、

「ゲームは一日一時間です」
悪戯っ子の様に微笑んで見せた。

紫音と共に千景の部屋に移動したハルは、早速ゲーム機の取り付けを行う。

「まさかファ コンとは……。これ凄いレアなんじゃないか」

「どうだハル。上手く出来そうか？」

「ガキの頃散々やったからな。っと、これで良い」
接続は完了した。

ソフトを差し込み、紫音が恐る恐る電源を入れると、

「おお、おおお」

大画面液晶テレビに、古めかしいゲーム画面が映し出された。
超有名RPGゲームの一作目。

ハルが産まれる前に発売された、かなり昔のゲームだ。

「こ、これがてれびげーむか……」

「ああ。で、これがコントローラー。こいつでゲームをプレイするんだ」

興奮で震えた手で、四角いコントローラーを握る紫音。

「説明書は無いから、俺が最初だけ簡単な説明をするよ」

「た、頼む」

「まずAボタンが……」

基本的な操作説明と、ゲームの進め方を教える。

それを紫音は真剣に聞くと、いよいよプレイを始めた。

「な、何だこやつは。王族なのか？」

「この国の王様だな。紫音は勇者になって、悪い親玉を倒して姫を

「救い出すんだ」

「何故私は正面を向いて移動するんだ？」

「……大人の事情だ。勘弁してやってくれ」

「鍵がなくなるなら、何故この部屋に鍵を掛けたのだ」

「プレイヤーに使い方を教える為だよ。そう信じよう」

「装備を調べると言われたが………このGとは何だ？」

「この世界の通貨だな」

「竹竿でどう戦えと言っただ」

「……殴るんだろうな」

「金が足りんぞ」

「取り敢えず最低限の装備だけ買って、外に出てみな」

「うおお、何やら襲ってきたぞ」

「モンスターだ。そいつを倒せば、お金と経験値が手に入る」

二人がゲームをやっている事を聞きつけたのか、

「話を聞いたわよお。懐かしいわねえ」

「当時は凄い話題になりましたよね」

「ローズと柚子が様子を見にやってきた。」

「えっと、二人はリアルタイムでやりました？」

「何か問題でも？」

「いえ……ありません」

凄まじい威圧感にハルはさすがに引き下がる。

そんなやり取りを気にも留めず、紫音はゲームに熱中する。

「私は勇者なのに弱すぎないか？」

「こついったゲームはあ、段々と強くなっていくのが楽しみなのよ」

「む、何だこのファンファーレは？」

「レベルアップですね。経験を積んだことで、一つ強くなったんです」

順調にゲームを進める紫音。

だが、

「ふむ、大分慣れてきたぞ。ここは一つ、遠方まで進んでみるか」

「それは駄目だああ!!」
落とし穴が待っていた。

ハル達の静止も虚しく、紫音は最初の街から遠くへと進んでしま
い、

『テロリロリ〜 あなたは死にました』

「……………」
真っ赤な画面を無言で見つめる事になった。

このゲームの恐ろしさの一つ。

ある場所を境に、急激に敵が強くなる。

油断して先に進もうとすると、見たことのない敵と出会ってしま
う。

何人のプレイヤーが絶望したことだろう。

「…………油断大敵と言うことか。流石はてれびげーむ、一筋縄ではい
かな」

紫音の心は折れなかった。

最初からやり直しと言う悲劇を乗り越え、再びゲームをプレイす
る。

「むうううう、起きろ、起きるんだ」

「一人旅の辛いところだな」

「うわああ、やられた」

「もう回復が出来ぬ。このMPとはいったい何なんだ」

「魔法を使う為の力ねえ。精神力みたいなものかしらあ」

「ああ、やられた」

何度も挫折を繰り返しながら、紫音は徐々にゲームに慣れていった。

そして、約束の一時間が過ぎようとする。

「紫音、そろそろ時間だぞ」

「む、丁度盛り上がりすぎてきた所だが……約束なら仕方ないな
素直ないい子だ。」

「だがハルよ、これは中断できないのか？ 流石に最初からやり直してはキリがない」

「最初にあつた王様の所に戻れば良いよ」

「……………む、なんだこれは？」

画面には、数十文字のパスワードが表記される。

当時はまだ、セーブ機能が付いていなかった。

「復活の呪文ねえ。再開するときにはあ、これを入力すればいいのお
「そうすれば、今の状態で始めることが出来ますよ」

「なるほど……………ではメモをとるとするか」

紫音は画面とにらめっこをして、復活の呪文を書き写す。

「……………よし、書き終えたぞ」

「じゃあ今日はここまで。どうだ、初めてのゲームは？」
「驚きの連続だ。難しいが……………楽しいぞ」

満足げな紫音に、ハル達は優しい笑顔を向ける。

紫音は変わりつつある。

色々な事に興味を持ち、少しずつだが視野が広がってきている。それは、とても大切な事だった。

翌日の夕方。

「……千景さん、どうしてアレをあげたんですか？」

「手持ちがあれだけでしたから。それに」

「それに？」

「世の不条理を学ぶのに、あれはピッタリですから」

その言葉は、数秒後に証明された。

『復活の呪文が違います』

「何だとおおお……！」

紫音の絶叫が、ハピネス事務所まで響き渡るのだった。

その後、紫音の通うクラスで、何故かレトロゲームが流行したらしい。

何はともあれ、紫音の望みは叶えられたようだ。

「よし、ならば今度はみんなに対戦をしよう」

彼女は今日も元気に中学生をしている。

小話へ紫音とゲーム (後書き)

作中でお分かりと思いますが、紫音がプレイしたのはアレです。突っ込みはご容赦下さい。

人は環境によつて、その生き方が変わる。

普通、の生活を送る紫音も、徐々に変わっていくでしょう。

次回もまたお付き合い頂けたら幸いです。

小話へ柚子の悩みへ（前書き）

ハピネスが誇る名医、和泉柚子。

そんな彼女だが、最近ある悩みがあるらしく……。

小話〈柚子の悩み〉

和泉柚子。

医師にして、ハピネス結成当初からのメンバー。

天才的な手術の腕から「神の手」と称される程の名医である。だが、そんな彼女にも悩みがあった。

それは、

「お嬢ちゃん。今日は平日だけど、学校はどうしたのかな？」
と言うわけだ。

街を散策していると、十分に一度のペースで声を掛けられる。

それがナンパならまだ気持ちい楽なのだが、

「学生証は持つてるかな？ 名前と学校を教えてね」
補導だから洒落にならない。

柚子は深いため息をつく、学生証ではなく運転免許証を見せる。

「こ、これは……失礼しました！」
年齢を確認した警官は、慌てて敬礼をしてその場から離れていった。

毎度のこととは言え、流石にこれだけ頻繁だと辟易する。

とはいえ、これは昔からのこと。

これだけなら、まだ我慢できたのだ。

だが。

ハルと二人で映画館に訪れた時。

「ごめんなさいね、ハルさん。付き合って貰って」

「良いよ。俺もこの映画見たかったし」

「私割引券持ってますから、一緒に券を買っちゃいますね」

ハルを残し、柚子は窓口に向かう。

「すみません、大人二枚お願いします。これ、割引券です」
「ありがとうございます。二枚で1500円です」
「あれ、大人二枚だと二千円では？」
「中学生は五百円ですから」
「……………」

奈美と食事に行った時。

「今日は助かりました。お礼にご飯をご馳走しますね」
「うわゝありがとうございます」

遠慮を知らない奈美は、お腹一杯平らげる。

「もう食べれません。ごちそうさまでした」

「ここまで気持ちよく食べて貰えれば、ご馳走する方も嬉しいです」
二人は並んで会計に。

「お会計、二万八千円です」

「……………」
店員の視線は、財布を取り出した袖子ではなく、奈美の方に固定される。

どちらが支払い能力者に見えるのか、と言うことだろう。

「……………カードで」

持ち合わせがあるのに、あえてカードを提示する。
小さな意地だった。

事務所の備品を蒼井と買い出しに出た時。

「ちょっとお兄さん。この子とどういう関係？」

「な、何だいきなり」

「防犯パトロール中なんだけど、まさか誘拐とかじゃ」

「巫山戯るな。吾輩がこんな年齢詐称女を誘拐するわけ無かるっ」

「……………お嬢ちゃん。この人は知り合いかな？」

「うっん、知らない人。お菓子あげるから着いてきなって言われた」
の

「貴様ああああ!!」

「こちらB地区パトロールの加藤。少女誘拐の犯人を確認、これより確保します」

「謀ったなあああああ!!」

喚きながら警官に引きずられていく蒼井。

少しだけ気が晴れた。

とにかく、こうした出来事が多発している。

以前よりもずっと多く。

何か原因があるのではないか、と千景に尋ねてみる。

「……貴方、最近ますます若くなってませんか？」

「へっ？」

「あくまで私の意見ですけど、前よりも若く、悪く言えば幼く見えます」

そんな事はありません。

人間は歳を取るにつれて、老化していく筈だ。

「冗談はやめてよ。だって私何もしてないわよ」

「生活のリズムとか、食生活を変えたとかは？」

「何にも。朝六時に起きて、夜九時には寝るし、ご飯も栄養バランスに気を付けてるだけよ」

非常に健康的な生活だった。

若さを保つ理由にはなるだろうが、若返る筈もない。

「……貴方が若く見え始めたのは、ハル君達がハピネスに入ってからです」

「そうね。大体その頃から、子供に間違えられる事が急増したわ」

「なら、考えられる事は一つです」

一体なんだ、と柚子は真剣な面もちで千景の言葉を待つ。

「若い子達と触れ合うことで、若いエキスを吸ったんじゃないですか？」

「もう、冗談は……………」
言いかけて止める。

高齢者が若者と触れ合うことで精神が刺激され、身体にも良い影響を与える例がある。

それがハル達と触れ合う事で、自分にも起きてるとしたら。

「あくまで可能性の話ですけどね」

「…………でも、有り得るわ。最近は紫音ちゃんと一緒にゲームで遊んでるし」

「なら、あの子達と距離を置けば良いと言つことにはなりますが」

「それは駄目」

ハル達と過ごす日々は、柚子にとって非常に楽しかった。

自分を特別視せず、友人として、先輩として扱ってくれる。

どんな理由だろうとも、それを失うことはしたくない。

「他に何か方法は無いかな？」

「ありますよ。要は逆のことをすれば良いのですから」

千景は小さく笑みを浮かべ、柚子にその案を告げた。

「あれ、柚子はまた老人ホームの慰問か」

「最近熱心よねえ。昨日は高齢者の健康診断だったしい」

「流石柚子殿だ。先人への敬意を忘れぬ姿勢、私も見習いたいな」

「でも、このところ毎日よね。何かあったのかしら？」

ハル達は不思議に思いつつも、福祉に尽力する柚子に尊敬の念を向ける。

「吾輩は信じぬ。信じぬぞ。あの女…………今度は何を企んでいる」

一人疑う蒼井。

それも無理はない。あわや犯罪者になるところだったのだから。

「彼女なりに思うところがあったのでしよう。私達も負けてられませんよ」

千景の言葉にハル達は賛同し、一層やる気を出し仕事に挑むのだった。

さて、そんな事を知るよしもない本人はといえば、

「は、肌年齢十歳!? また、若返ってる……」

満を持して行った健康診断の結果を見て、ガツクリと肩を落とすのだった。

小話〈柚子の悩み〉（後書き）

連続で小話の投稿になってしまいすいません。
ストーリーを本格的に進める前に、ちょっと箸休めと言った感じ
です。

因みに柚子の背格好は、紫音と同じくらいの設定です。
それは間違われても仕方ないですよ。

次の話は、ハピネスメンバーが登場しません。
暫く登場していない、あの二人にスポットライトを当ててみます。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

冬麻と菜月の日常？（前書き）

舞台はハピネスを離れ、遠く海外へ。

冬麻さんと菜月さんは元気でしょうか……。

冬麻と菜月の日常？

バババババババ

「あら、そう言えば私、ガスの元栓閉めたかしら？」

「大丈夫だと思うよ。菜月は心配性だな」

「えへへ」

バババババババ

「そう言えば、昨日秋乃ちゃんからメールが来たのよ」

「おお、愛しの秋乃からか」

「お友達も一杯出来て、学校生活は順調ですって」

「はっはっは、それは何よりだ」

バババババババ

「それとね、ハルちゃんからもメールが来たのよ」

「あの愚息が連絡を入れるとは珍しい」

「駄目よパパ。ハルちゃんだって、私達の可愛い子供でしょ」

「すまんすまん、どうも癖でな」

「あのね、バイト先の人達に、モノマネの事話したんだって」

「……ほう？」

「その人達の事、随分信頼してるのね」

「俺達以外には殆ど教えなかったからな。まあ、無理もないが」

「よね。子供の頃は大変だったし」

「まあ、あいつが自分で話したのなら問題無かるう。しかし、ハピネスと言ったかな？」

「うん、便利屋さんだって聞いてるわよ」

「少し調べておくか。場合によっては、一度直接伺うのも良いだろ
う」

「ふふ、パパったら何だかんだ言っても、ハルちゃんの事心配なのね」

「君や秋乃と違って、あいつは弱っちいからな」

「そう言う事しておくね」

ババババババ

「それとね、ハルちゃん怪盗コレクトに会ったんだって」

「彼は今日本にいるのか？」

「みたいね。美術品の宝石を巡って戦ったらしいわよ」

「勝ったのか？」

「引き分けだつて。美術品は守ったけど、逃げられちゃったみたい」

「それは勝ちに等しいな。しかしハルめ、なかなか良い経験をしている」

「次会うときは、凄く遅しくなつてたりして」

「……菜月、期待はしない方が良さそう」

ババババババ

「そうだ、菜月。実はトムから雰囲気の良いレストランを教えてくださいました」

「あら素敵ね」

「どうだい、今夜二人で夜景を見ながら食事、と言うのは」

「喜んでお誘いを受けるわよ」

「もう予約をしてあるんだ。最近忙しくて、なかなか時間が取れなかったからね」

「そうね。ゆっくり寝る暇も無かつたし」

「……今夜もそれは無理だと思うが？」

「あらやだ、もうパパったら」

「……りとも」

「菜月……」

「……人りとモ」

「パパ……」

「お二人ともっ！！」

横から聞こえてきた叫び声に、菜月と冬麻は近づくと唇を止める。

「何だねジャック。今良いところなんだが」

「何だね、じゃ無いですよっ！！ 状況を考えて下さい」

ジャックと呼ばれた金髪の青年は、顔を真っ赤にして叫ぶ。

「状況？ 勿論把握して居るとも」

「武装したテロ組織のアジトに、突入作戦中。つまり」

「「戦場だ（よ）」「」

「戦場でノロてんじゃねええええ！！！」

ジャックの絶叫に、先程から絶え間なく聞こえてくる銃声がかき消された。

状況説明。

敵アジトの広い通路。奥からは数名の敵が、マシンガンで絶え間なく銃撃。

冬麻、菜月、そしてジャックは、曲がり角に隠れて隙を窺っている。

以上説明終わり。

「どう考えたら、この状況でノロケられるんですかっ！？」

「若いなジャック。戦場では心を乱した者から死んでいくのだよ」

「流石パパ。カッコ良いわ」

「ああもぉ」

頭をかきむしるジャック。

「ここを突破出来なければ、敵のボスに逃げられて作戦失敗なんですよ」

「分かっているさ。少し落ち着けよ」

「だから……」

「ジャックちゃん。慌てた心じゃ、良い作戦も出てこないわよ」

「そう、菜月が今良いこと言った」

マイペースな二人に、ジャックは気が気じゃない。

このまま時間が過ぎれば、作戦は失敗。

巨悪を取り逃がすことなど、正義感の強いジャックには到底許せない事だ。

「落ち着けよ。君が落ち着いたら、そろそろ動くからさ」

「……はい？」

「ジャックちゃんたら、ここ来てからずっと慌てっぱなし何だもん」

「平静を保てとは言わないが、焦った状態では良い結果は出ないぞ」

「では、お二人は自分のためにわざと時間を稼いで……」

「あ、パパ。私この間新しいネグリジエ買ったのよ」

「ほほう、それは楽しみだ。君の艶姿、たっぷり堪能させて貰おうかな」

「そんな訳無いですねえええ。分かってましたよおお!!」

叫ぶジャックだが、心は先程よりも大分落ち着いてきていた。

「では、そろそろ仕掛けるとするか」

「……何故このタイミングで？」

「ずっと銃撃してて、相手から何のリアクションも無かったら、どう思う？」

「それは、不審がります」

「良い答えだ。不審は迷いを産み、迷いは隙を産む」

「それでも銃撃を続けるのは、彼らが良く訓練されてるからね」

「なら、どうやって突破を？」

「簡単だ。心を乱して、奇襲をかければ良い。姿勢を低くして、耳を塞いでいる」

冬麻は懐から、煙草の箱を取り出す。

二十本の煙草を全て口にくわえて、火を点けた。

「じゃあよろしくね」

菜月に頷くと、冬麻は一気に煙草を吸う。

火を点けられた煙草は、全て根本まで灰になった。

そして、

「ふうふうふうふうふうふう」

口と肺一杯に溜まった煙を、通路の奥に向けて思い切り吹き出した。

周囲に真つ白な煙が充満して、視界はほぼゼロになる。

突然の変化に敵は動揺したのか、怒声が響き銃撃がまばらになる。

ほんの一瞬乱れた心。その隙を冬麻は逃さない。

「喝つつつつつつつつ!!!」

気合い一閃。

冬麻から発せられた「気」の様なもの、アジト中を震わせる。

それで充分だった。

煙が晴れた時には、通路の奥に敵が折り重なるように倒れていた。

その後はさしたる抵抗もなく、無事敵のボスを捕縛することが出来た。

応援部隊に引き渡し、ようやく冬麻達はお役ご免だ。

「ふむ、任務は無事完了だな」

「お疲れさまね」

「なぐに、本当の戦いはこれからだぞ」

「もう、パパったら」

バカップルモード突入の二人に、一人の男が近づく。

「御堂様、お役目お疲れさまです」

「ああ、何とか無事に終わったよ」

「それでどうでしたか、うちの若いのは」

「良い物持ってるわ」。もう少し実戦経験詰めば、良い捜査官になると思うわよ」

「もうちょっと心にゆとりが欲しいが、まあ初陣としては立派かな」
「それは何よりです。すいませんでした、お二人の手を煩わせてしまいい」

「気にしないで」。味方の育成も大事な仕事だから」

「悪の組織は多いからな。優秀な味方が一人でも増えるのは、大歓迎」

「ありがとうございます。では私は事後処理がありますので」

男は一礼して、二人の前から立ち去った。

この世に悪があるかぎり、二人の戦いは終わらない。
何故なら二人は「正義の味方」なのだから。

冬麻と菜月の日常？（後書き）

実際にいたら、寿命が縮むほどイライラするバカップルですね。
ジャックはみんなの代弁者でしょう。

少しだけ、物語は動き始めました。

ハルのモノマネ。

これが、この物語のキーになります。

これからも、スローペースで話は進んで参ります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

逃げたペットを探します(前書き)

依頼を受けに事務所にやってきたハル。
そんなハルに、千景はある疑問を尋ねる。

逃げたペットを探します

ハピネス事務所。

「うーん」

「あら、どうかしましたか？」

依頼掲示板で何やら考え込むハルに、千景が声を掛ける。

「あ、千景さん。依頼について少し考えてまして」

「何か気になるものでも？」

「えっと、例えばこれとか、まるで探偵にする依頼みたいだなと思
つて」

「ああ、なるほど」

ハルが指差した依頼に、千景は納得したように微笑んだ。

行方不明者の搜索、ストーカー対策、夫の浮気調査 e t c e t c
……。

「どちらも依頼主から依頼を受けて、それを解決すると言っ点に置
いては一緒ですから」

「言われてみれば。じゃあ区別は殆ど無いんですか？」

「得意分野の違いというだけでしょう」

「と言いますと？」

「うちは広く浅く依頼を受け、探偵は特定分野に狭く深く、と言っ
た感じでしょうか」

なので一部依頼内容が被る場合があります、と千景は説明した。

「でもそれじゃあ、縄張り争いとか起きるんじゃない」

「どちらに依頼するかは依頼人次第。振られた方に文句を言う権利
はありませんから」

「シビアな世界なんですね」

「それ故、無用な争いが起きないんです」

ハルの疑問は解決した。

「……そう言えば、ハル君に伺いたい事があつたんです」
「俺にですか、何でしょう？」

「最近、動物関連の依頼をよく受けてますよね？」

「そうですね。あまり意識してませんけど」

「ちよつと待って下さい」

千景は自分の机から、一冊のファイルを手取る。

それをハルの前でパラパラと捲り、あるページを見せた。

「これは？」

「所員の依頼データです。受けた依頼数、内容、達成率などが記録されてます」

「へ〜そんなものが」

今開かれているのは、ハルのデータが載っているページだった。

御堂ハル

依頼受諾件数：84件

依頼達成率：100%

依頼内容：一般分野58件、動物分野22件、派遣分野2件、その他分野2件

「随分細かく記録してるんですね」

「状況把握は大切ですから。このデータで、それぞれの得意分野も分かりますし」

「なるほど」

「ハル君は見事なまでに平均的、力仕事以外は万遍なく受けて居るのです」

千景は動物分野を指差す。

「これが全体の四分の一を占めています。それもここ最近急増していますね」

「確かにそうですね。意識してませんでした」

「動物関連の依頼は数が多い反面、解決するのが難しいんです」
ここまで聞いて、千景の言いたいことが分かった。

「どうして動物の依頼を多く受け、しかも解決出来るのか、ですね？」

「理解が早くて助かります。良ければ教えて貰えますか？」

「別に構いませんけど、一つ条件があります」

「何でしょう？」

「他の人、特に奈美には絶対に言わないって、約束してください」
ハルの言葉に、千景は少し困ったような顔をする。

「出来ればその技術を、他の人にも参考にして欲しいのですが」

「多分無理です。聞けば納得すると思いますけど」

「……………良いでしょう。では、聞かせて下さい」

ハルは事務員にも聞こえないよう、小さな声で千景に耳打ちした。

「……………全て理解しました。それは確かに、人に知られたく無いですね」

「本当に頼みますよ。奈美が知ったら、絶対にからかわれます」

「勿論、約束は守ります」

「よろしくお願いします」

「ではハル君。この依頼はどうですか？」

千景は迷子になった飼い猫を探す依頼を、ハルに提示した。
依頼額もそこそこで、悪くない依頼だ。

「……………引き受けましょう」

「それでは頼みますね」

ハルは早速、猫探しに向かう事にした。

キヨロキヨロ

周囲確認。

右良し、左良し、後ろ良し、今が好機。

ハルはブロック塀でくつろいでいる、猫にそつと声を掛ける。

「にゃんにゃんにゃん（ねえ、ちょっと聞いても良いかな？）」

「！！にゃ、にゃん（おっ！ お前猫語が喋れるのか）」

「にゃんにゃん（まあね。実はこの子を捜してるんだけど）」

ハルは懐から、迷子の猫の写真を取りだし、その猫に見せる。

「にゃ〜にゃんにゃん（ん〜、あ、思い出した。さっきあそこで見たぜ）」

「にゃんにゃんにゃん（そうか、ありがとうな）」

「にゃにゃにゃにゃ（良いって事よ。また何かあったら聞きに来な）」

ハルは猫に頭を下げて、教えられた場所へと向かう。

ほどなくして、迷子の猫は見つかり、無事に保護することが出来た。

事務所に戻ると、早速飼い主に見つかったと連絡を入れた。

数十分後、厚化粧で派手な服を着た、いかにもなマダムがやってきた。

「まあ〜エリザベスちゃん。よく帰って来てくれたわね〜」

「ぎゃぎゃぎゃにゃ〜（頼すり寄せるなよ。香水が臭くて鼻が曲がるぜ）」

猫の叫び声に、ハルは苦笑するしかない。

道理でなかなか説得に応じない訳だ。

「便利屋なんて胡散臭いと思ってたけど、それなりに役に立つみたいね」

「ありがとうございます。またの機会がありましたら、是非当社に
「そうするわ。じゃあこれ、依頼料ね」

「確かに頂きました」

千景は頭を下げながら、マダムから封筒を受け取る。

何を言われてもにこやかな笑みを浮かべるあたり、流石は大人だ。

「さあエリザベスちゃん。お家に帰りましょうね」

「にやにやにやんにやん（次は兄さんのいない遠くまで逃げるとするぜ、あばよ）」

そんな猫の言葉など知るよしもなく、マダムは上機嫌で事務所を後にした。

「……あの猫、また逃げる気ですね」

「気持ちは分かります。私なら喉元に噛みつく所ですから飼う猫に首を噛まれる。」

新しい諺が産まれそうだった。

「それにしても、猫の言葉を解せるとは驚きです。他の動物も？」

「犬は出来ましたね。ほ乳類以外はまだ分かりませんが」

「素晴らしい才能です。これは、以前から出来ました？」

「いえ、実はこれ最近気づいたんです」

ハルは正直に話す。

「どうも言語も技術に入るらしく、前から外国語はモノマネ出来たんです」

それを知ったのは中学生の時。

英語の成績は平凡だったのだが、何故かネイティブの先生とは流暢に会話が出来た。

街で外人に道を聞かれた時も、知らないはずの言語が何故か理解できた。

モノマネは言語にも対応している、とは認識していた。

「でも動物の言葉なんて、全然分からなかったんですよ」

「何時分かるようになりました？」

「……多分、幽霊を見てからだと思います」

正確ではないが、恐らく間違いないはず。

霊感が強い間、妙に騒がしく感じたのは、幽霊以外に動物の声も聞こえていたからだろう。

そう考えれば辻褄が合う。

「紫音のモノマネをしたことで、何らかの影響があったと？」

「恐らくは」

「幽霊は今は見えていないんですね？」

「影も形も」

「でも、動物言語のモノマネは今の出来ている」

「そうなりますね」

千景はアゴに手を当て、何か考え込む仕草をする。

「暫くそうしていたが、」

「日常生活に不便はありますか？」

「特には。たまに犬の遠吠えが面白くて、笑っちゃうくらいですね」

彼らの遠吠え、実は結構ネタ満載だった。

「なら、当面は深く考えない事にしましょう」

「ですね。あ、くれぐれも他の人には内密に……」

念を押すハルに、千景はクスクスと笑いながら頷いた。

事務員も退社し、一人きりの事務所で千景は考える。

「ハル君のモノマネ……あれは異常ですね」

常識外れも良いところ。

それは他のメンバーの比ではない。

「劣化、忘却、それらの欠点は制約と言うよりも、寧ろ……」

不意に浮かんだ想像を打ち消すように、千景は煙管を口にくわえる。

事務所は禁煙なので吸いはしないが、それでも幾分心が落ち着く。

「紫音の影響を受けて進化した……と考えるよりも……」
「考えるほど分からなくなる。」

これ以上は先入観になる、と千景は思考を止めた。

「一度、ご両親とお話してみたいですね」

その結果次第では、千景の仮説が立証できる。

ただ、それが良いか悪いかは分からないが。

「御堂冬麻、菜月……少し調べてみますか」

千景は決意を込めた目で、小さく呟くのだった。

逃げたペットを探します（後書き）

言語は技術かと言われると微妙ですが、この小説ではその扱いと言
うことで。

動物と会話出来るのは、動物好きの人にとっては憧れですね。
聞かない方が幸せというのは、あるかもしれませんが。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

季節外れの運動会（1）（前書き）

ウンザリするような暑さの中、何故か始まる運動会。
果たして何人が生き残れるのか……。

季節外れの運動会（1）

照りつける太陽。

ねっとりとした身体にまとわりつく湿気。

季節は本格的な夏。

そんな時に、

「何で運動会なんだああ！！」

ハルの絶叫は、雲一つ無い青空に吸い込まれて行った。

年に一度、商店街対抗の運動会が開かれるらしい。

それぞれが代表選手を出し、競技の点数で優勝を争う。

それはいい。

そこまでは良くある話だ。

だが、

「何でこの時期に？」

うだるような暑さで、ハルの額からは既に汗が流れていた。

普通運動会は、梅雨の前か秋にやるものじゃ無いのだろうか。

「若いのに、それには海よりも深く山よりも高い事情があるのじゃ」

「……みつちゃんは元気ですね」

「ふおお、僕は汗が出るほど身体に水分が残ってないからのう」

水分補給してください。いや、マジで。

「でも確かに不思議よねえ。毎年この時期だし」

「医者立場からは、あまりお薦め出来ません」

「うむ、それが奴らの狙いなんじゃ」

格さんが答える。

「他の商店街と比べ、僕ら芍薬商店街は平均年齢が高いんじゃよ」

「……確かに」

本拠地に集まったメンバーは、ハピネスを除けばお年寄りが非常に多い。

学校の運動会なら、敬老席に招待されるレベルだ。

「対して牡丹、百合、彼岸花の連中は若いのを揃えておる」

「若いっていうか、俺この間の世界陸上であの選手見ましたよ……」
牡丹商店街の本拠地には、筋骨隆々の外国人選手がアップをしている。

助っ人外人にしてはやりすぎだ。

他の百合、彼岸花……彼岸花？

「何か、一つだけ名前が浮いてませんか？」

「話せば長くなるが、かつて名前を掛けた闘争で敗れたからじゃ
一行で済んでしまった。」

「じゃが奴らは、新たな分野を開拓して急成長を遂げておる、油断はできんぞ」

「新たな分野？」

「どこぞの電気街と提携してな、特定の客層を取り込んだのじゃ
皆まで言わずとも分かった。」

彼岸花の本拠地には、サポート役のメイドさんが沢山いたから。

「百合が一番古い商店街じゃ。規模も一番大きく、四つの元締めの存在じゃよ」

「あそこはうちと同じく、生え抜きを育てるのが上手い。手強いぞ
違う点は若さだろう。」

あつちは見たとこ二十代、三十代の人が多く揃っている。

「ん〜、でもそれがどうしてこの時期にやることと関係あるの？」

奈美が再び最初の疑問を口にする。

「この暑さは皆辛いが、一番影響を受けるのは、高年齢化が進んでいる農らじゃ」

「奴らは団結し、農らに不利なこの時期を選んだんじゃ」

忌々しげにみっちゃん和格さんが吐き捨てた。

恐らく多数決だったのだろう。

「一チームだけ不利なら、他のチームが団結するのも無理はない。

「えっと、因みに今までの成績は？」

「ここ十年ほど、最下位じゃ。それも圧倒的大差で。」

「解せぬ。貴様らがいるなら、それ程大差で負けるとは思えないぞ」

蒼井が無礼に突っ込む。

だがそれにはハルも同意見。

人間離れた二人がいれば、そこそ競ることは出来るはずだが。

「…………… 去年は一番酷かったのう」

「儂ら以外全員、緊急搬送で団体競技はほぼ全滅じゃった」

遠い目をする二人。

もう、何も言えなかった。

「じゃが、今年は違うぞ」

「お主達の他に、若干力は劣るが体力のある若い衆も集めた」

「おつつす」

十名ほどの男が気合いの声をあげる。

前回野球をリアイアのは、彼らだったのだろう。

リベンジに燃えている顔をしていた。

「まさに総力戦じゃ。今年こそ、儂らが勝たせて貰う」

「うむ、その通りじゃよ」

気合い充分の二人。

「優勝すると何か貰えるんですか？」

ハルの何気ない問いかけ。

しかしその瞬間、間違いなく周囲の気温が下がった。

「若いの……悪いことは言わん。それ以上は聞くな」

「商売人にはそれなりの闇があるんじゃないや……お主は知らん方がえ

え」

背筋がゾツとする様な迫力の二人に、ハルはコクコクと頷くしか無かった。

「……そろそろ開会式が始まりますね」

千景が時計を見て声を掛ける。

みれば各チームのメンバーが、グラウンドに集まり始めていた。

「うむ。者共、出陣じゃ!!」

「おっっ!!」

やる気満々の芍薬商店街一同。

ハピネスメンバーと少し温度差があるが、追求しない方が良い。

こうして、商店街対抗運動会は始まりを告げるのだった。

季節外れの運動会（1）（後書き）

商店街編第二弾です。

今回は運動会と言うことで、四チームの対抗戦。

野球をちょっと引つ張り過ぎましたので、今回は短めに
次回で完結します。

果たして芍薬商店街は勝利を掴めるのか。
それ以前に、無事競技を終えられるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

季節外れの運動会（2）（前書き）

ついに開幕した真夏の運動会。

灼熱の戦いを制するのは、果たしてどの商店街なのか。

季節外れの運動会(2)

「宣誓！」

我々選手一同は、スポーツマンシップにのっとり、ありとあらゆる手段を使い、時に外道と蔑まれようとも、勝利のため修羅になることを厭わず、肉親の情すら忘れることを誓います」

「……………スポーツマンシップ何処行つたよ？」
長期旅行中のようです。

ここからは、ダイジェストでお送りします。

男子100m

「ぬうう、まさか儂が二着とは」

「流石の格さんも、歳には勝てぬと言うことじゃな」

「……………世界レベルの選手と写真判定の時点で、充分ですって」
もう一人の代表選手は、四着という突っ込みにくい結果だった。

女子100m

「いえ〜い、ぶっちぎりの一ぱ〜ん」

「こ、この女、非公式だが十秒切ってたぞ」

「蒼井、気にしたら負けだよ」

「……………おや、あそこで騒いでいるのは、ローズ殿では？」

ハル達が視線を向けると、

「私は女よお。性別詐称？ 確かに付いてるけどお、心は女だってばあ〜」

「……………」
審判に猛講義をしているローズの姿が。

「……………」私が出ましよう

ため息をついて、ローズの元に向かう千景。
何やら話した後、替わりにレースに出場。

「ふう、こんなものですかね」

「うわあ〜千景さん速〜い」

「あ、あの女、非公式だが八秒位で走ったぞ」

「……………」後半流してたな

「縮地じゃな。あの若さで嗜むとは、未恐ろしいおなじじゃ」
反則的なのは、自分達の様な気がしてきた。

借り物競走

「えっと、借り物は……………」

メモに辿り着いたハルは、借り物を確認する。

一瞬考え、芍薬商店街本拠地に。

「お、若いの。お題は何じゃった？」

「綺麗な女性です」

瞬間、何とも言えぬ空気が漂った。

「まあ、ハル君がどうしても言うのなら」

「仕方ないわね。手伝ってあげるわよ」

「もう、ハルちゃんたら、綺麗ななんて嫌だわあ」

「……………」頑張ります」

一斉にハルへ視線を向ける女性陣プラス一名。

何という緊張感。

迂闊に言葉を発すれば、間違はなく地雷を踏む。

「ここは、と紫音に視線を送るが、

「（無理だ。私では綺麗、と言う条件をクリア出来ない。ここは腹を括るが良い）」

冷静な彼女に拒否された。

こうしている間にも、勝利が遠ざかっていく。
負けたら後が怖い。

勝利最優先の思考でハルが選んだのは、

「奈美、頼む」

「ふふん、仕方ないわね」

口ではそう言いながらも、嬉しそうに奈美はハルの元に進み出る。
「俺の足じゃもう間に合わない。頼めるか？」

奈美を選んだ理由は、ハルをおぶっても一着になる可能性がある
からだ。

だが奈美は、

「任せてよ。さあ、行くわよ」

何故かハルを前に抱きかかえた。

まさかのお姫様抱っこ二回目だった。

「ち、違う。おんぶを……」

「飛ばすわよおおお!!」

その言葉通り、奈美は快足を飛ばして見事一着でゴールした。

「……どちらが借り物ですか？」

審判の言葉が胸に刺さった。

次の走者は蒼井。

ピリでメモを取ると、芍薬商店街本拠地に向かってきた。

「蒼井もか……今度の借り物は何だ？」

「うむ、胸の小さい成人した女だ」

「千景さん、お願いしますっ!!」

「……死にたいようですね？」

怖かった。

結局柚子が選ばれたのだが、

「……成人ですよ？」

年齢を証明するのにひたすら時間がかかった。

玉入れ

「先手必勝です、奈美っ！！」

「合点承知！ てりやあああああ！！！」

奈美は全力で、玉を投げつけた。

……他のチームの選手目掛けて。

次々とあがる叫び声は、一分と経たずに消え果てた。

今グラウンドに立っているのは、芍薬商店街の選手だけ。

「さあ、今のうちに玉を入れてしましましょう」

「……そんなのありかよ」

「相手選手を攻撃してはいけない、何てルールは存在しませんので」
スポーツマンシップの早期復帰を願わずにいられない。

玉入れは、芍薬商店街の一人勝ちだった。

綱引き

もはや語るまでもない。

奈美とローズが居る時点で、勝敗など見えているのだから。

その後も競技は進む。

芍薬商店街の圧勝かと思われたが、そうは問屋が卸さない。

選手には出場できる競技に制限があった。

そうになると高齢化が進む芍薬商店街は、途端に劣勢に立たされる。
若い衆も頑張ったのだが、戦力差は翻しようがない。

最後の種目、リレーを残し、芍薬商店街は団子状態の三位につけていた。

「さて、いよいよ最後の種目です」

「点数は僅差。これの勝者がそのまま優勝ねえ」

「……被害は甚大だけどね」

絶え間なく救急車のサイレンが聞こえてくる。

この暑さの中、激しい運動を続ければ当然、体調を崩す選手が続出。

芍薬だけでなく、牡丹、百合、彼岸花も相当な人数が緊急搬送されてきた。

「まさか、みつちゃんと格さんまでダウンするなんて……」

「いや、一番危険だったと思うぞ。最初から」

芍薬商店街トップ二人も、無念のリタイア。

騎馬戦に二時間も費やしたのが原因だろう。

「とにかく、残りの選手でリレーメンバーを選ぶしかありませんね」

「男女各二名ずつ選出……。女性は確定ですね」

このリレーに関しては、出場制限が解除される。

奈美と千景の二人は文句なしの選出だろう。

「ですが、問題が一つ。実は100mを走った選手は、リレー出場禁止らしいのです」

「何でそんなルールが……」

「みつちゃんと格さん対策でしょうね。道理でどちらも配点が高い訳です」

「じゃあ、千景さんと奈美は出れないと……」

ハルの確認に頷く千景。

このリレーは四人の男女混合。

現在残っている女性はと言えば……。

「柚子と紫音だけか……」

「私を忘れてないかしらあ？」

「出場禁止だったことを忘れて無いか？」

女性メンバーは確定した。

「後は殿方だな。殆どが今病院にいるから、出場できるのは……」

「蒼井と俺、それに……」

一応視線を向けるが、顔の前で手を×に交差する。

ローズは男性の種目には、意地でも出ないつもりらしい。

「となれば、蒼井とハルに決まりね」

勝ち目が欠片も見えない。

運動が得意なメンバーが、一人として加わっていない。

選手層の薄さがここに来て響いた。

選手の呼び出しがかかり、ハルがグラウンドに向かおうとする

「……ハル君、ちょっと」

千景が手招きをして呼び止めた。

「一つ、アドバイスをしましょう」

「はあ」

「本気で走ってご覧なさい」

どこがアドバイスなのだろうか。

「そりゃ全力で走りますけど」

「結構です」

謎の言葉にハルは首を傾げながら、グラウンドへと向かった。

「位置について、よい」

パアアン

最後の競技、男女混合リレーが始まった。

第一走者紫音……ビリの四着でバトンパス。

第二走者蒼井……同じく四着でバトンパス。

第三走者柚子……少しだけ差を詰めた四着でバトンパス。

スウエーデンリレーの本レース。

勝負の行方は、アンカーハルの400mに託された。

「ああ、もうトップと100m位離れています」

「ちよつと厳しいかもねえ」

悲観的な奈美とローズ。

だが、

「……さて、それはどうでしょう」

ただ一人、千景だけは不敵な笑みを浮かべていた。

最終走者の走りに、各商店街の応援もヒートアップする。

それぞれが自分のチームの走者に、声援を送る。

しかし、その声援の中に、戸惑いのようななどよめきが混じり始めてきた。

次第にそのどよめきは大きくなり、やがて声援を飲み込む。

全員の気持ちはただ一つ。

『あれは一体何なんだ？』

「……やはり、モノマネ出来ましたか」

千景は予想通り、と言った感じで表情を変えずに呟く。

視線の先には、凄まじい速さで走るハルの姿があった。

「ハル……凄い」

「驚いたわねえ。トップの選手、捕らえそうよお」

ローズの言葉通り、300mを通過する辺りで、ハルは二着まで順位を上げていた。

「あれ、千景ちゃんのモノマネ？」

「確かみつちゃんか縮地とか言っていましたね」

「ええ。特殊な足運びで、距離を縮めるかのように高速移動する技術です」

「なるほどねえ。だからあの時、ハルちゃんに見せたのねえ」

「……見えてはいなかったと思いますけどね」

ローズに聞こえないよう、千景は小さく呟いた。

その後、ゴール直前でハルがトップの選手をかわす。僅かな差だった。芍薬商店街が見事一着に輝いた。この結果、芍薬商店街は実に十何年ぶりの優勝を勝ち取ったのだ。つた。

「……ひとまず、今日はこのまま解散します。みんな、よく頑張ってくれました」

「被害甚大だもんねえ。祝勝会はまた今度ねえ」

「蒼井は慣れない運動で腰を痛め、緊急搬送。」

「ハルはゴール後に倒れ込み、緊急搬送。」

「柚子も大会本部テントで、酸素吸入器で治療中。」

「リレーメンバーで無事だったのって、紫音だけだもんね」

「あの三人は己の限界まで力を振り絞った。私はまだまだだ」

「運動会優勝こそ果たしたが、約半数を失う厳しい戦いだった。」

「では解散しましょう。しっかりとクールダウンしておきなさいね」

「キチンとやらないとお、筋肉痛が酷いわよお」

「大丈夫ですよ、まだ若いですから」

ピクッ

千景の顔が僅かに引きつる。

「駄目よ油断しちゃ。筋肉痛に年齢は関係ないのよお」

「そ、そうです。奴らは油断したとき、そう、二日後三日後に突然

……」

「確かに年齢は関係ないな。私ももう、足に痛みが出ている」

ピクウウウ

紫音の言葉に、千景の顔が一段と引きつる。

「あら、じゃあ帰ったら私がストレッチ手伝ってあげるわよ」

「そうか、かたじけない」

「それでは千景さん、ローズさん、お疲れさまでした」

奈美と紫音は笑顔で事務所に帰っていった。

後に残された千景の肩に、ローズは慰めるように手を置く。

「……剛彦、今夜空いてますか？」

「付き合っわ、何時間でも」

「……あれが、若さか」

真夏の運動会は幕を降ろした。

色々な人に、色々な傷痕を残して。

季節外れの運動会（2）（後書き）

炎天下での運動は、熱中症などのリスクが高く、大変危険です。
夏の運動は、朝か日が沈んでから行いましょう。

作中で出てきた「縮地」ですが、世間一般で言われているものとは異なります。

この世界では、目にもとまらぬ速さの移動技術と違って下さい。

筋肉痛、作者も最近運動後三日後くらいに来るようになりました。
若さが懐かしいです。

運動会はこれにて閉会。

物語も少しずつ、現実の季節に追いついてきました。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幸せの前には試練がつきもの(前書き)

学生の夏休みも間近に迫ったある日。

紫音とハルは、一番不安な人を思いだして……。

幸せの前には試練がつきもの

「あれ、紫音。今日は学校休みか？」

ハルは事務所に入ってきた紫音に声を掛けた。

「平日の昼間に彼女が姿を見せるのは珍しい。」

「いや、今は期末試験中で、学校は半日で終わりなのだ」

「そっぴゃそんな時期だな」

今は七月。

夏休み前の学生、最大の関門が期末試験だ。

「出来はどうだ？」

「明日の英語が少々不安だが、それ以外の教科は、概ね問題なく消化できている」

「そりゃ何よりだ」

もし赤点を取れば夏休み中に追試や補習が待ち受けている。

中学校ではそれは無いかもしれないが、無事試験を突破する事に越したことはない。

「大学も期末試験はあるのか？」

「あるよ。もう終わったけどな」

ハルの通う大学は、他の大学に比べ早く試験を終えていた。

テストの返却も終わり、今はもう殆ど夏休みと変わらぬ状態だった。

「不可は無かったから、夏休みは無事迎えられそうだ」

「そうか……まあ、ハルに心配は無用だったな」

「買いかぶりすぎだよ。まあ、奈美ほど心配は……」

ふと言葉が途切れる。

そう言えば、彼女も期末試験があるはず。

「奈美は……大丈夫かな？」

「聞いて見たらどうだ？」

紫音の言葉に頷き、ハルは携帯を奈美にかける。
だが、

「ん〜繋がらないな。電源切ってるみたいだ」
電波が届かないか電源が……のお姉さんボイスが再生された。
「ひよつとしたら、今頃勉強に集中してるやもしれんな」

「……………無いな」

机に向かい、はちまきを締めて勉強に取り組む奈美。

一欠片も想像出来なかった。

「てか、あいつ最近姿を見てないんだよ。夕飯もたかりに来ないし」
「妙だな。もしか何かあったのでは？」

「……………ちよつと聞いてみるか」

ハルは再び携帯を操作し、電話をかけてみた。

『もしもし？』

「ああ、秋乃か？　ちよつと聞きたいんだけど」

『私の夏休みの予定？』

「聞いてどうするよ」

『一緒に旅行、とか？』

「夏休みに兄妹二人で旅行は、流石に寂しすぎるだろう」

『良いじゃない。お兄ちゃんと私で、一夏のアバンチュール』

「……………言葉は正しく使おうな。どう転んでも洒落にならんぞ、それ」

『冗談よ。半分は』

残りは……………聞きたくない。

「聞きたいのは奈美の事だ。あいつを最近見かけないんだけど」

『あれ、聞いてないの？』

「何か知ってるのか？」

『奈美は今、寮に監禁されてるのよ』

衝撃の事実だった。

「さ、さらりとんでもない事言うな。何だよ監禁って」

『言い方が悪かったね。監禁じゃなくて、軟禁が適当かも』

どっちもろくなものじゃない。

「とにかく、順を追って話してくれ」

『あのね、うちの学校明日から期末試験が始まるのよ』

「ああ」

『でね、奈美はお兄ちゃんも知つての通り……あれでしょ？』

「まあな」

『流石に一年の一学期から赤点追試補習のコンボは、学校も避けたいらしくて』

「……大体読めてきた」

『一週間くらい前から、睡眠時間以外は勉強漬けの生活を義務づけられたの』

学校ぐるみとは、流石は奈美だ。

「事態は理解した。それで、あいつは……いけそうか？」

『……シスターは最近毎日お祈りしてるわ』

まさに神頼み。

『そう言う訳だから、奈美が家に帰るのは試験が終わってからになるわね』

「分かった。まあ、頑張るように言ってくれ」

『……私も試験なんだけど？』

「お前に関しては、何の心配もいらないだろうよ」

ハルは秋乃の答案に、x印が付いているのを見たことがない。

出来の良すぎる妹を持って、正直肩身が狭かった位だ。

「まあ精々ミスらず頑張れよ」

『……うん、ありがとう』

ハルは秋乃との通話を終えた。

「って事みたいだ」

「試験は明後日からか。私の試験は明日で終わりだから、私もやるか」

「何を？」

「……祈るのдарる？」
本気で心配していた。

数日後。

「やったあああ。全部赤点無しだよおおお!!！」

「……これは、ある意味凄いかも」

秋乃は奈美の答案を見て、ため息混じりに呟いた。

国語、数学、英語、物理、科学、歴史、世界史 e t c ……。

全ての教科が、赤点ラインの30点ピッタリだった。

「ギリギリでも何でも、クリアした者勝ちよ！」

「それはそうだけどね」

「秋乃はどつなのよ？」

「えつとね、ミスは無かつたよ」

秋乃に渡された答案を見て、奈美は思わず目を疑つた。

「……た、確かにミスは無いわね」

「お兄ちゃんにミスするなつて励まされたから、気合い入つちやつた」

嬉しそうに微笑む秋乃。

その答案は、文句なしの満点だった。

試験が終わり、待望の夏休みがやつてくる。

幸せの前には試練がつきもの（後書き）

今はほとんどの学校が二学期制を導入していると思います。

ただ作者は三学期の世代なので、この小説は三学期制と言っことで。

期末テストは辛い記憶しかありませんが、何故かどんな出来でもテスト返却の時間だけは楽しかったです。

友達と勝負したり見せっこした、あの時を思い出しました。

何はともあれ、無事に夏休みを迎えられる奈美。

これから、夏休み編に突入です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(1) (前書き)

待望の夏休み。

ハピネスはみんなで海に行くことに。

海編開幕です。

海に行こう(1)

突然だが、ハピネス一同で海に行くことになった。

しかも一泊二日の泊まりがけ。

更に費用は全て会社持ち。

予定もなかったので、ハルは二つ返事でOKした。

出発は明日。

準備をするため買い物に行こうとしたハルに、

「ねえハル。ちょっと付き合ってくれない？」

奈美が声を掛けた。

「ん、何処に？」

「明日の買い物。紫音と柚子さんに行くんだけど、ハルも着いてきてくれない？」

「荷物持ちか？ まあ良いよ。俺も丁度買い物行くところだったから」

こうしてハル達は、揃って買い物に行くことになった。

電車で揺られること三十分、

「は、やっと着いたな」

「やっぱり大きいわね」

「商店街が丸ごと中に入ってると思えば、これ位の大きさは必要でしょう」

「ほう、これがデパートか。実際利用するのは初めてだ」

少し遠くにある、大型デパートに到着した。

四階建ての店舗は、平日昼間にもかかわらず大勢の客で賑わっている。

「でも何でわざわざここに？」

買い物なら地元の芍薬商店街で、充分事足りるはずだが。

「それは勿論、こっちの方が色々選べるからよ」

「品揃えに関しては、どうしても大型店舗に軍配があがりますね」

「と二人が言うので私もそれに倣った」

そう言われて、ハルはふと疑問を口にする。

「……まだ聞いてなかったけど、何を買いに来たんだ？」

「あれ、言っただけじゃなかったっけ？」

「色々ありますけど、一番の目的は」

「水着らしいぞ」

嫌な予感がビンビンする。

だが、もはや逃げることは敵わず。

ハルは奈美に腕を引っ張られながら、デパートへと入っていった。

水着売り場に到着した一行。

シーズンだけあり、売り場は多くの女性客が居た。

「……居づらい。この空気は辛い」

「何言ってるのよ」

「そうです。ハルさんもちゃんと溶け込んでますから、平気です」
嬉しくない。ちつとも嬉しくない。

「じゃ、早速選ぶとしましょうか」

スタスタと売り場へと進む。

「……水着というのは、随分と種類があるのだな。それに彩りも豊
かだ」

「紫音ちゃんは水着買いに来たことは無いの？」

「学校から支給されたものがあるからな。買い必要など無かった」

「駄目よそんなダサイの。ちゃんと可愛いのを着なきゃ」

まあそれはそれで受けると思います。

一部の方々には。

ひとまずばらけて、それぞれ水着を吟味する。

一人になると気まずいので、ハルは奈美に同行した。

「ん〜迷うわね。ねえ、ハルはどんな水着が好き？」

「俺は女物の善し悪しは分からない。店員に聞いたらいいいだろう」

「……じゃあ、ビキニとワンピースならどっちが好き？」

「その人に似合うならどっちでも」

「なら、私にはどっちが似合う？」

問われてハルは少し考える。

奈美は女性にしては背が高く、スタイルも良い。

だとすれば、ビキニタイプの水着の方が見栄えが良いだろう。

「どっちかと言えば、ビキニかな」

「そっか……ハルは意外と大胆ね」

「ん、何か言ったか？」

「なな、何でもないって。じゃあビキニにしようかな」

慌てて手を振り、奈美はハンガーに掛けられた水着探しを始めた。

ハルはその様子に首を傾げるが、

「ま、早く選んでくれるならそれでいいか」

深く考えないことにした。

十分後。

「ひとまず、こんな所かな」

「決まったのか？」

「うん。とりあえず、これを試着してみようと思うの」

「……これ全部？」

奈美の手には、十着くらいの水着がある。

てっきり買う水着を選んだのだと思っていたのだが。

「やっぱり実際着てみないとね。感想聞くから、そこで待ってて」

ハルの返事を待たず、奈美は試着室のカーテンを閉めた。

がさごそと衣擦れの音が洩れ聞こえてくる。

何とも居心地が悪い。

「お〜い、まだか？」

「ちょっと待つてよ。……………うん、これでよし」
「シャーっとカーテンが開かれた。」
「なっっ！」

奈美が着ていた水着は、何とというかかなり過激なデザインだった。胸を隠す生地は小さく、下の角度はかなりのもの。

その水着を着こなす奈美は、着やせするタイプなのか、ハルの予想以上のプロポーション。

思わず顔が赤くなるハルを、誰が責められるか。

「お、おま……………それは流石に過激じゃ無いか？」

「だって、ハルはこう言うのが好きなんでしょ？」

「それは誤解……………とは言わないけど、身内が着るとちょっと恥ずかしい」

思わず目を背けてしまう。

その様子をあまり好みでない、と受け取ったのか、

「じゃあこれはボツね。次はもう少し露出を抑えた奴にしてみるわ」

奈美は再びカーテンを閉め、次の試着に取りかかった。

目の前から奈美が消え、ようやくハルは落ち着きを取り戻す。

「……………あれは反則だ」

秋乃に付き合って、水着を買いに来たことはある。

だが、同じ年とは思えない圧倒的戦力差に、完全に不意打ちを受けた形だ。

「黙ってれば可愛いもんな……………って、俺は何言ってるんだ」

頭をブンブン振り、邪な想像を振り払う。

そんなハルの苦悩を知るよしもなく、奈美の試着は続いた。

「あ、あかん。これ以上はやばい」

奈美の水着姿は、相当の破壊力だった。

最初ほど過激では無かったが、それでもハルの煩惱を刺激するのに充分すぎた。

結局、

「それとそれと、あとこれが良いと思う」

露出の少ない水着を選び、早々に奈美の元から逃げ出した。荒れ狂う心臓の鼓動と、真っ赤になった顔が、ハルの状態を雄弁に語る。

ふと周りを見れば、あちこちで水着を試着している女性達。

「……駄目だ。ここにいるのは、精神衛生上良くない」

少し落ち着きたいが、水着売り場を離れるのは不味い。

どうしたものかと考え、

「あそこに行くか」

ハルは子供用の水着コーナーに移動した。

「紫音、水着は決まったか？」

「む、ハルか。どうしたのだ、そんなに顔を赤らめて」

「……聞かないでくれ」

説明するのも恥ずかしい。

「まあ良い。私は既に選んである。柚子殿に見繕って貰った」

「ワンピースか」

紫音の水着は、スカートに着いた水色のワンピース水着だった。

余計な飾りは付いていないが、紫音によく似合いそうだ。

「正直不要だと思っていたが、いざ買うとなると少し嬉しいものだな」

「……そっか、良かったな」

はにかむ紫音の頭を、ハルは優しく撫でた。

色々な経験を重ね、紫音は確実に変わり始めている。

それが嬉しかった。

「あ、そう言えば柚子はどうしたかな」

奈美も紫音も、水着はほとんど決まっている。

後は柚子だけの筈だが。

「柚子殿ならあそこにいるぞ」

「えっ、何処……… ああ、居たな」

大勢の親子連れの中、そこに柚子の姿はあった。完全に溶け込んでいたが。

「『ウォーリーを探せ』かよ」

「何だそれは？」

「……後で本屋に寄ろうな」

あれは名作だ。買ってあげるのも良いだろう。

お子様へのプレゼントにお薦めです。

紫音と柚子の水着も決まったので、ハルは奈美の元に戻った。

「……お前、まだ悩んでるのか」

「二つまで絞ったんだけど、どっちにするか。む〜」

「今着てる奴で良いんじゃないか？ 似合ってるし」

「えっ、そう？ うん、じゃあこれにする」

迷っていたはずなのだが、奈美は即断する。

「それじゃ着替えるね。あ、これ持っていてくれる？」

「構わないぞ」

選ばなかった水着をハルは受け取る。

そしてそのまま、試着室の前で奈美の着替えを待つ。

悲劇はその時起こった。

「お客様」

そつと女性店員がハルの隣にやってきた。

「はい、何ですか？」

「あちらの更衣室が空いておりますので、宜しければご試着をどうぞ」

「……………」

奈美の大爆笑が、更衣室の中から響き渡った。

色々あったが、準備は整った。
晴れを祈りつつ、ハピネスメンバーは明日を迎えるのだった。

海に行こう(1) (後書き)

旅行の準備で一話使ってしまった。
なるべくテンポ良く行きたいものです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(2) (前書き)

いよいよ旅行当日。

天気にも恵まれ、順調なスタートが切れる筈だったのだが……。

海に行こう(2)

天気は快晴。

雲一つ無い青空に、ハルはホッと一安心。

「てるてる坊主効いたな」

夜の天気予報では、降水確率は50%。

気休めかと思っただが、一応昨晚一つだけ吊してみた。

これのお陰だけでは無いと思うが、ハルは手を合わせ拜んでおく。手早く身支度を整えると、昨晚の内に用意しておいた荷物を持つ。そのまま集合場所の事務所に向かおうとして、

「……ま、一応な」

隣の部屋のドアを叩く。

「は〜い、どちら様って、ハルか。おはよう、良く晴れたわね」

「おはよう。流石に寝坊はしないか」

「もう、私は子供じゃないわよ」

頬を膨らませる奈美に、ハルはすまんすまんと笑う。

幾らなんでも、高校生には失礼だったか。

「興奮して寝られないから、寝坊なんてする訳ないでしょ」

「世にそれを子供という」

前言撤回。

「まあ良いさ。準備出来てるなら、一緒に行こうぜ」

「もちバッチリよ。鞆取ってくるから、少し待ってて」

奈美はドアを開けたまま、室内に戻る。

ハルが何気なく中を見ると、

「……………て、てるてる坊主が…………」

まるで白いカーテンのように、大量のてるてる坊主が吊されている。太陽の光を浴びたそれは、かなり異様な雰囲気醸しだしている。

「お待たせ……ん、どうかしたの？」

「いや、随分沢山てるてる坊主を作ったなって思ったただけだ」

「ハル知らないの？ あれは一個吊すと、降水確率を1%下げられるのよ」

とんだガセビアだ。

「……誰に聞いた？」

「蒼井」

「奈美、それは嘘だ。後、集合場所に行ったら、蒼井を思い切り一発殴って良いぞ」

冗談は人を選ぶべきだ。

子供や純粋な人、それに奈美は本気にしてしまうのだから。

「……ってことは、ひよっとしたら」

「どうしたの？」

「紫音も同じ事してるかもな、って思った」

「それは無いんじゃない。千景さんが居るだろうし」

紫音が蒼井に騙されたことを、千景が知ったとしたら。

脳裏に浮かぶのは、てるてる坊主の代わりに吊されている蒼井の姿。

「まあ良いか。蒼井だし」

「??？」

「ああ、何でもない。じゃあ行くか」

首を傾げる奈美を促し、二人は事務所へと向かった。

事務所の前には、既に所員のみんなが集まっていた。

「ハル君、奈美、おはようございます」

「千景さん、おはようございます」

「おはようございます」

笑顔で二人を迎える千景。

どうやらハルの想像はハズレのようだ。

「もうみんな集まってるんですね」

「ええ。なので、出発時刻を少し早めるつもりです」

「あれが今日のバスですか？」

「貸し切りですよ。車内で使わない荷物は、あそこに入れてください」

バスの側面に、荷物を入れるスペースがあつた。

とは言え一泊二日なので、みんなそれほど荷物が無いのか中は殆ど空。

入っているのは幾つかのバッグと、

「千景さん……あれは？」

「嘘発生装置です。本当は粗大ゴミに出したい所ですが、被害者が恩赦を求めたので」

布団で簀巻きにされた蒼井。

どうやら相当ご立腹のようです。

「やっぱり、紫音にもほらを吹き込んだんですね」

「では奈美にも？ やはりロープで縛って引きずりましようか」

まさに市中引き回しだ。

「……向こうに着いてから、サンドバッグの刑で手打ちと言つことに」

「そうですね。今日は楽しい旅行ですから」

蒼井の処刑は辛うじて回避された。

まあ、酷い目にあうのは確定だが、自業自得と言つことで。

参加者全員が集まり、バスは予定時刻よりも早く出発することになった。

目的地までは、大体二時間ほど掛かるらしい。

それ間、ハピネス一同は各々時間を潰す。

音楽を聞いたり、談笑したり、本を読んでいる強者もいる。

自分はどうするかとハルが考えていると、

「ねえ、暇なら一緒にトランプやらない？」

前の座席から奈美がひよっこりと顔を覗かせた。

「トランプか、いいな」

「そうこなくっちゃ。やっぱりゲームは大人数じゃないとね」

奈美の誘いに乗り、ハルは座席を移動する。

「えっと、この面子か？」

「そうよ。私とハル、それに紫音と柚子さんとローズさんね」

「随分と豪華な面子だな」

主要メンバーが殆ど揃っていた。

「千景さんも誘ったんだけど、鈴木さんとこの後の段取りするから
って」

「まあ責任者だしな。しょうがないだろう」

「そうねえ。ここはあ、私達だけで楽しみましょう」

「トランプか……知識はあるが、実際遊ぶのは初めてだ」

「なら初めて慣れる意味でも、簡単なゲームを選んだ方がいいです
ね」

もっともな意見だ。

「簡単か……ババ抜きなんてどうだ？」

これなら誰でも直ぐに出来るはず。

しかし奈美は首を横に振る。

「駄目よ。だってそれじゃあ、柚子さんが参加でき……ぬうわああ

あああ！！」

口は災いの元。

柚子がノーモーションで口に放り込んだ丸薬で、奈美はのたうち
回る。

「に、にが……から……しび……な、何なのこれえええ！」

「今回の丸薬は何味なんだ？」

「新薬の「混ぜるな危険三号」です。苦味辛味渋味等の味覚を徹底的に刺激します」

「み、水が……水が凄まじい不可思議な味にいい」

ペットボトルの水を口に含んで、再び叫ぶ奈美。
彼女が落ち着くまで、十分ほどかかった。

結局、今回はババ抜きをやることになった。

「それじゃあ配るわねえ」

シユパパパパパパ

鮮やかな手つきでシャッフルしたカードを、これまた見事な手さばきで配るローズ。

「何か、手慣れてないか？」

「長く生きてるとお、色々出来るようになるのよお」

「……何か？」

「いえいえ、何でも無いですよ」

慌てて否定する奈美。

大分トラウマになっているようだ。

これで少しは大人しくなるだろう。少しの間だけは。

「確か、手札で二つ揃ったカードを捨てるのだったな？」

「そうだよ。捨てるカードが無くなったら、プレイヤー同士でカードを引き合っ」

「手札をそうやって減らして行つてえ」

「最終的に全ての手札を捨てられたら勝ちです」

「ジョーカーは捨てられないから、それを持っていると勝てないのよね」

「いかにジョーカーを手元に置かないかが、勝負の鍵だな」

それぞれ手札を整理し、机代わりの補助席に捨てていく。

「……あら」

「どうかしたのか？」

「えっと、全部無くなっちゃいました」

「天和!？」

恐るべき豪運。

戦わずして勝利してしまった。

「またですか」

「また？」

「私、ババ抜きやると大抵こうなるんです」

何という偏った運否天賦なのだろう。

そう言えば以前も、くじ引きでテレビを当てていたような気がする。

「一応言っておくけどお、今回はイカサマしてないからねえ」

「……出来るんだ」

謎多き男だ。

ただローズの手札がある程度残っている以上、その言葉は真実だろう。

「柚子殿は、どうやら天運に恵まれた御仁のようだな」

「ギャンブルとかやったら、凄い事になるんじゃない」

「……賭け事は成人してから。ベガスのカジノでは、門前払いを受けました」

黒服さん、GJです。

もし入れてたら、間違いなく根こそぎでしたよ。

「そうだ、折角だから罰ゲームをつけましょう」

「「自分が抜けた後に!？」」

「ビリの人は、私が作った特製ドリンクの試飲に付き合おうと言っただけ」

この瞬間、ハル達の思考は一致した。

(絶対には負けられない戦いが、ここにある)

かつて無い緊張感の中、ババ抜きは始まった。

殺伐とした空気でババ抜きは進む。

楽しい旅行気分など、当の昔に忘れ去られていた。

(後三枚……このババがやっかいだな)

ハルのカードを引くのは奈美なのだが、これが手強い。

天才的な勘で、ババを回避し続けている。

(このままじゃ駄目だ。奈美の勘を封じるには……………そうだった！)
ハルはババを真ん中に移し、目立つように上にずらした。

「奈美、この飛び出てるのがババだぞ」

「えっ…………」

奈美は伸ばしかけた手を止める。

「やだな、ハル。そんなの、子供だって引つかからないわよ」

「信じるか信じないかは、お前次第だ。因みに、俺は別に正直者じゃない」

ハルの言葉に、奈美の瞳に迷いが浮かぶ。

伸ばした手を、右に左にフラフラと彷徨わせる。

(そうだ、悩め。考えれば考えるほど、勘の要素は薄まるはず)
果たして奈美は、飛び出した一枚を選び、まんまとババを引いてしまった。

「あゝババだ〜！！ ハル、騙したわね！！」

「…………あれ？」

「奈美よ、ハルは最初からそれがババだと言っていただろう」

「それはそうだけど……………なんか納得行かない」

「気持ちは分かるけどねえ。そう、ババは奈美ちゃんかあ」

自分がババを保持していることは、可能な限り隠すべき情報。

他の三人は、大きなアドバンテージを得た。

ハルが上がり、ローズもそれに続いた。

勝負は奈美と紫音の一騎打ちとなる。

「最終局面ですね」

「紫音ちゃんがカードを引く番だからあ、これでババを引かなければあ、紫音ちゃんの勝ちい」

「ババを引けば、互いの立場が入れ替わりますね」

有利なのは紫音。

だがこれを外せば、戦局は一気にひっくり返る。

紫音からすれば、ここで決めたい場面だ。

「……ババ抜きがこれ程神経をすり減らす遊びだとは。やはり実戦に勝る勉強は無いな」

いえ、普通はこんな酷くないです。

初体験でこんな死闘を強いてしまい、申し訳ありません。

「勝負よ紫音。さあ、選びなさい！」

カードを差し出す奈美。

右か、左か。

遊びとは思えない緊張感に、思わずごくりと喉が鳴る。

「……………ん？」

その中、紫音は何かに気づいた。

僅かに目を細めると、それは確信に変わったのか、

「奈美、悪いが私の勝ちだ。ババは右手、つまりこちらが正解だ」

自信に満ちた顔で奈美の左手からカードを抜き去る。

そして、

「はああああ」

安堵のため息と共に、二枚のハートの六を見せた。

「「おおおおお！！」」

決着に思わず歓声を上げるハル達。

ガツクリと肩を落とす奈美。

今ここに、勝者と敗者の明暗が分かれた。

「……………奈美は？」

「お休み中です。恐らく到着するまで起きないと思いますよ」

「何飲ませたんだよ」

「聞きたいですか？」

結構です。

「それにしてもお、どうして紫音ちゃんはあるに自信満々だったの？」

「あ、それ俺も知りたい」

興味津々のハル達に、

「大した事ではない。単純に、どちらがババか分かったただけだ」

こともなげに答える紫音。

「でも、調べてみても、見極められる様な傷はありませんでしたよ？」

「外見ではなく、中身を見たのだ」

「……と言つと？」

「今回私達は、ババ、つまりジョーカーを忌むべき物として扱った
少し大げさだが、その通りだ。」

「そうした思いは物に宿る。僅かだが、カードから負の念が見えた
のだ」

「な、何というチート……」

「柚子ちゃんとは違うベクトルだけどねえ」

「……私はそんなビツクリ人間じゃ無いですよ」

自覚は無いみたいだ。

勿論突っ込みはしない。後が怖いから。

「何にせよ、もう罰ゲームありのトランプは勘弁だな」

「そうねえ。まさか戦場以外での緊張感を味わうとは思わなかつ
たわあ」

「到着まで半刻ほど。他の遊び方もやりたいのだが」
断る理由はない。

だがその前に、

「罰ゲームは無しで」

ハルとローズは柚子に声を揃えて言った。

そして、バスは目的地へと到着した。

海に行こう(2) (後書き)

いい加減タイトル通り、海に行けよ言いたくなるスローペース。今回は移動中のバスで終わってしまいました。

次こそは、ちゃんと海に行きますよ……多分。

運のいい人と勘のいい人。

ババ抜きで強いのは間違いなく前者だと思います。

だって、配られた時点で圧倒的に有利ですもの。

この次こそは海に着いていることを願いつつ、次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(3) (前書き)

ようやく海に到着したハピネス一行。
さあ楽しい時間の始まり……の筈だったが。

海に行こう(3)

バスで移動すること二時間。

ハピネス一行は、温泉旅館の前に降り立った。

「ここが今日泊まる所ですか？」

「ええ。百年以上の歴史のある老舗です」

「……歴史と言うか、年期が入ってますね」
物は言い様です。

「さあみんな、荷物を置いたら早速海に行きますよ」

「はあ〜い！」

ここまででは、ごく普通の旅行だった。

異変に気づいたのは、海水浴場に着いたときだった。

「……あれ？」

「誰もいない？」

「おかしいですね。プライベートビーチと言うわけでも無いでしょうし」

「これが海。何と大きな……何と美しいのだ……」

感動に浸っている紫音は置いておくとしてだ。

水着に着替えた一行は、人っ子一人居ない浜辺に言いようのない違和感を感じていた。

現在夏真っ盛り。

何処の海水浴場も、大勢の人で賑わっている筈なのに。

「はあ〜い、みんな揃ったわねえ」

「ローズ。これは一体……」

振り返った瞬間、ハルは石になった。

極限まで鍛えられた筋肉の肉体が、そこにあった。

放送コードギリギリ、と言うかNGレベルの際どいビキニを履いて。

「もうハルちゃんたらあ、そんな見つめられると照れちゃうわあ」

「……これは……反則だろう」

「ハルさん……俺はもう駄目です」

強力な精神攻撃に、加藤を始め男性所員達が次々に撃沈されていく。

周りにいる女性陣の水着姿すら、目の保養にならない。

圧倒的な存在感だった。

「剛彦、だから言ったでしょう。その格好は刺激的すぎると」

「ちよつと悩殺し過ぎちゃったかしらねえ」

「悩殺というか……脳殺だな」

「ハル君は大丈夫みたいですね？」

「親父が同じような水着を着てましてね、少し耐性があるみたいですよ」

きついことには変わらないが。

「それは何よりです。さて、それでは今日の依頼について説明しましょうか」

「「依頼〜!?!」」

そんな事は聞いてない。

今回は旅行の筈。

「旅行ですよ。ハピネス総出での、依頼旅行です」

「「騙されたああ!」」

「人聞きの悪い。私は一言も慰安旅行と言ってませんよ」

一同は腕を組み記憶を遡り、同時に顔をしかめた。確かに旅行としか言っていない。

「酷いですよ千景さん。私凄く楽しみにしてたのに」

「依頼を達成すれば、後は自由で結構です。早く片づけてれば、充分遊ぶ時間がありますよ」

「話が美味すぎると思ったわ」

「タダで旅館に泊まれ、しかも依頼料も出る。美味しい話でしょ？」
その通りなのだが、気持ちの問題が大きい。

遊びで来たつもりが実は仕事。テンションはがた落ちた。

「……で、依頼って何なんです？」

「ゴミ拾いとかですかね。でもこの浜辺綺麗ですし」

加藤の言うとおり、この海水浴場にはゴミ一つ落ちていない。

「そんな身構えなくても平気よ。ただ、ここで遊んで入ればいいのよ」

「はあ？」

「簡単に言えば、海開き前に異常がないか調べるのが依頼です」

「じゃあ、特に何をするわけでもないんですか？」

「ええ。自由に遊んで結構です。ただ、なるべく海で泳いで欲しいですけど」

「それくらいなら……」

ガツカリしていた所員達の目に、光が再び戻る。

上げて下げて、また上げられた感じた。

「どうやら不満は無いようですね。それではみんな、存分に遊んで下さい」

「了解ですっ！！」

あっさり手の平を返したハル達は、海を堪能すべく動き出した。

照りつける太陽の下、各々好き勝手に遊ぶハピネス一同。

そのまま、三時間ほど経った。

「ふう、やっぱり海は良いな」

「そうね。後海の遊びと言えば……」

「ビーチバレー、西瓜割り、砂浜でお城作り、一通りやりました」

「なら競争はどう？ あそこのブイをタッチして帰ってくるのよ」

ローズは沖にある黄色のブイを指差す。

目測で百メートル程だろうか。

「良いぜ。柚子と紫音はどうする？」

「私は遠慮します。あまり泳ぎは得意で無いので」

「折角の誘いだか私も辞退させて貰う」

参加者はハルと奈美、それにローズと決まった。

「千景さんは泳がないのかな？」

「そう言えば、着物のままずっとパラソルの下にいるわね」

「……千景ちゃんは今回監督者だからねえ。自分が遊ぶ訳には行かないわよお」

「大変ですね」

「なら、その分私達が遊ばないとね」

「じゃあ行くわよお。位置についてえ、用意、ドン」

砂浜を駆け、海に飛び込む三人。

先頭は奈美。荒々しい平泳ぎだが、凄まじい速さで差をつける。

続いてローズ。雄々しいバタフライは、見る者を恐怖に叩き落とす。

最後はハル。綺麗なフォームのクロールだが、化け物相手には分が悪すぎる。

「よし、私の独走ね」

「そうは行かないわよお。私、スロースターターなお」

「む、流石ローズさん。でも負けません」

「望む所よお」

完璧にハルは忘れ去られていた。

(……てか、何で泳ぎながら喋れるんだよ)

せめてリアイアはしないように、ハルは懸命にクロールを続ける。

先頭の奈美がブイに辿り着こうとした、その時だった。

「……殺気？ 水中からかな……」

奈美は海に潜り、目を凝らす。

すると、前方から黒と白の生物が球速接近してきた。

見覚えがある。あれは……。

「ぷはあ、みんな、イルカが近づいてるよ」

「イル」

「力？」

嬉しそうな奈美の報告にキョトンと顔を見合わせるハルとローズ。
こんな近海に出現するだろうか？

疑問に思いながら、ハルとローズは海に潜り……。

「さ、サメええええ！！！」

(そうね。でもハルちゃん、水中で叫ぶのは止めた方が良いわよお)
「じ、じまった……」

口の中の空気を全て吐き出してしまい、一気に苦しくなった。

慌てて水面に顔を上げる。

「ごはああ、はあ、はあ、馬鹿野郎。アレはイルカじゃ無くてサメ
だあ！」

「良いじゃない細かいことは。どっちも似たようなもんでしょ？」

「全然違ああう」

チラリと見たただけだが、かなり大型のサメだった。

あの大きさなら、人を襲う可能性も高い。

「とにかく、早く岸に戻るぞ。このままだと、俺達も食われちゃう」

「それは良いけど、ローズさんは何処行ったのかな？」

「……まさか」

喰われたのか。

嫌な予感がハルの脳裏をよぎる。

「それは無いんじゃない？ だってサメは私の前から近づいてきて
たし」

「襲われるならお前からか。確かにそうだけど、じゃあローズは一
体……」

その時だった。

ザパアアン、と水しぶきをあげ、噂のサメが水面に姿を現した。
恐怖に歪むハルの顔。

だが、

「ぷっふあく。た・だ・い・ま」

「ろ、ローズ（さん）！？」

サメの下から、その身体を持ち上げるようにローズが出現したのだ。

「ろ、ローズ。そのサメは……」

「うん。私が仕留めちゃった」

そんな馬鹿な。

水中で人がサメに勝つなんて。

「凄いですローズさん」

「そんな褒めないでよお。大したこと無いわあ」

とんでもない事ですって。

「残念だけど競争は中止ねえ。一度浜まで戻りましょう」

「あ、ああ」

「はい」

サメを背負ったローズを先頭に、ハル達は浜辺へと戻った。

浜辺には、異常を察知した一同が集まっていた。

「ハル、奈美、ローズ殿、無事か？」

「怪我してませんか？」

駆け寄るみんなを笑顔で制して、ローズは千景の元へ。

パラソルの下でくつろいでいる彼女の前に、サメを降ろす。

「……ご苦労でした、剛彦」

「やっぱり駄目ねえ。今年もここは遊泳禁止だと思っわあ」

「そうですね。先方にはそう伝えておきましょう」

何やら勝手に話を進める二人。

「あの、一体何が何やら分からないんですけど」

「依頼は完了した、と言うことです」

千景は優雅に微笑んだ。

「はああああ!?!」

千景の説明に、ローズを除く全員が叫んだ。

「じゃあ、今回の依頼は……」

「ええ。この海水浴場が安全かどうか、確認する事が目的でした」

「実はここ、去年からサメが出没するようになってねえ、遊泳禁止だったのよお」

「ですので、今年の手開きを前に安全性の調査が必要だったのです」
「結果はNG。サメが出ちゃったからあ、また今年も駄目ねえ」

二人の言葉にハピネス一同は思い切り脱力する。

怒りよりも、無事で良かったという安堵の感情が勝った。

そんな中、

「でも千景さん。もし誰かが襲われたら、どうするつもりだったんですか?」

ハルが強い口調で千景を問い詰める。

「あの場面、奈美が襲われる可能性は高かったです。あまりに無責任過ぎませんか」

「ハル……」

「なるほど、ハル君の言うことはもつともです。ですが」
「しかし千景は動じずに頷くと、

「無論対策はしていましたよ。これで、ね」
側に置いてあった銃を手にとって見せる。

スコープのついた、狙撃用の銃だ。

「これは特注の、水中狙撃可能ライフルです」
「千景ちゃんはある、ここでサボっていた訳じゃないのよお」

ローズが指差す先には、何やら大型の機械が。

「ドクターが作ったソナーよお。千景ちゃん、ずっとこれで警戒してたのよお」

「このサメが接近したときも、剛彦が対応しなければ狙撃するつもりでした」

言われて思い出した。

ローズが千景を監督者だと言っていた。

何を疑っていたのだろう。

しっかりと守ってくれていたでは無いか。

「……すいませんでした」

「いえ、黙っていたのは事実ですから。おあいこ、と言っことて如何です？」

片目をつぶる千景に、ハルは微笑を浮かべて頷いた。

話によると、サメは一匹だけでないらしい。

依頼は達成出来たので、ハル達は旅館へと引き上げる事にした。

「あの旅館は、料理も温泉も一級品ですよ」

「それは楽しみです」

「……ハルちゃん、残念だけどお、混浴じゃないわよお」

「ハルのエッチ」

「何でそうなるっ!」

「ま、まあ、ハルさん位の男の人なら、当然の反応ですし……」

「誤解、誤解だ」

「何だ、ハルは女性と入浴したいのか？ 私で良ければ付き合っが」

「違あああう」

「ハルさん、あんだ男です」

「親指を立てていい顔するなああ」

「ハルさんなら、女湯に入っても気づかないかもしれませんね」

「……鈴木さん、一番きついです」

笑い声が絶えない和やかな空気で、海水浴は終わった。

海に行こう(3) (後書き)

到着まで二話、海の話が一話。

タイトルに偽りアリですね、すいません。

因みに、水中で人間がサメに勝つ可能性は絶望的らしいです。
間違っても戦いを挑まないようにしましょう。

海編はもう少し続きます。

旅館に戻ったハピネスのちょっとしたお話。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(4) (前書き)

依頼を終えて、旅館に戻ったハピネス。
疲れを癒すため温泉に向かうのだが……。

海に行こう(4)

旅館に戻った八ピネス一行。

食事の前に、温泉で疲れを癒すことにした。

勿論、男性女性は別々だ。

「それではここで。入浴後は食事まで自由に構いませんから」

「温泉　温泉　」

「冷え性、腰痛、美肌効果……グッドです」

「大勢で入浴というのは初めてだ」

「じゃあそう言うことでねえ」

「「あんたはこっちだろおおお!!」」

実に自然な流れで女性陣に着いていこうとしたローズを、男性陣が引き留める。

何と羨ましい、じゃなくてとんでもない事をするのだろうか。

その様子に苦笑を浮かべながら、女性陣は女湯ののれんをくぐっていった。

判断を間違えた。

そう気づいたのは、脱衣所で服を脱ぐ時だった。

「へえ〜吉田ちゃんって、良い身体してるわねえ　」

「ちよ、ローズさん。あんまり見ないで下さいよ」

「あら加藤ちゃん。結構引き締まった身体ねえ。私好きよあ　」

「うっ、何か悪寒が……」

「佐伯ちゃん、いい感じで日焼けしてるわねえ。グツと来るわあ　」

「ひいひい」

背後で聞こえる会話に、ハルは頭痛を感じる。

考えてみれば、ローズにとっては男湯の方が楽園だったのだ。

素直に女湯に放り込んで置けば良かった。

「どうしたのハルちゃん。そんな暗い顔をしてえ」

「……羊の群に狼が入り込んだんだ」

「それは大変ねえ。残らず食べられちゃうじゃない」
是非自重して欲しい。

「……………へえ」

「人の身体見て、意味ありげに頷くの止めい」

「ハルちゃんの身体、本当に女の子みたいに華奢よねえ」

「はは、もう言われ慣れたよ。学校の旅行じゃ、風呂の度に言われ
てたから」

高校の時は真剣に貞操の危機を感じたこともある。
色々と苦労してるのだ。

「ま、お陰でローズに狙われなくて済むけどな」

「あらあ、どうしてかしらあ？」

「そう言う趣味の人は、男らしい男が好みなんだろう？」

しかしローズはニヤリと悪人顔。

「甘く見ないで欲しいわあ。私に好き嫌いは無いわよあ」

「……………聞かなきゃ良かった」

後悔先に立たず。

ハルは今、その言葉を心底実感していた。

温泉は素晴らしい。

疲れと一緒に、嫌な不安も全て溶かしてくれる。

ハルは湯船に浸かり、極楽義分を味わっていた。

「はあく極楽だ。温泉ってのは良いもんだ」

湯気が立ち上る空を見つめ、のんびりとした時間を過ごしている
と、

「……………こっちは駄目だ。そっちはどうだ？」

「厳しいな。あのポジションは？」

何やら他の男性陣が妙な動きを見せる。

露天風呂を囲んでいる木の壁を、真剣な表情で調べている。

「何やってんだ？」

「若いわねえ……」

「は？」

「隣は女湯って事よお」

理解した。

「止めないのか？」

「険しい関門を乗り越えようとする男の背中、うつとりするわねえ」

「止める気は無い、と」

「水を差すのは悪いわよお。それに、ある意味お約束のイベントじゃない」

確かにその通りなのだが。

「ハルちゃんは興味ないのお？」

「……まあ、興味が無いと言えば嘘になるけど」

「けどお？」

「リスクがでかすぎるだろ」

女湯には、ハピネスの女性陣が入浴中。

そこには当然、あのお方も居るわけで。

「千景さんにばれたら、それこそ生命の危機だ」

「何言ってるんですか、ハルさん！」

と、突然会話に入ってきたのは新人の加藤。

気が付けば、吉田に佐伯も揃っていた。

「確かにリスクは高いです。けど、それ以上の報酬が待ってます」

「知ってますか？ 実はハピネスの事務員って、結構スタイルが良

いんですよ」

「それに美人揃い。俺、実は鈴木さんタイプなんです」

加藤のカミングアウトは取り敢えずスルー。

「ハルさんだつて興味あるでしょ？」

「そりゃ俺だつて男だ」

「我々が見つけたポイントは四つ。万が一千景所長に見つかるとしても、確率1/4です」

「ばれた場合も、仲間のことは売らない盟約です。如何ですか？」
ハルは暫し考える。

加藤の提案は確かにリスクを減らせる。
そして成功報酬は大きい。

「……………行く」

決意を込めた瞳で、ハルは参戦表明した。

「それでこそハルさんです。因みに、今この時は絶好のチャンスですよ」

「何とターゲット達は身体を洗っているのです」

「上手くいけば、お宝が待っていますよ」

「……………もはや迷いはない。全員、速やかに作戦を開始するぞ」

「了解っ!!」

勇者達の静かな戦いが始まった。

(さてえ、どうなる事やらあ)

一人湯船に残ったローズは、勇敢……………無謀な男達の背中を黙って見送った。

百年を超える老舗旅館。

言い換えれば、それだけ建物は古いと言うことだ。

どれだけ手入れをしても、綻びはある。

今回ハルが辿り着いたポイントは、その一つだった。

「なるほど、これは盲点だ」

短い木の板が縦に三つ重なり、それが壁を作っている。

一見鉄壁だが、その内一枚の板が緩み外せるようになっていた。
手が辛うじて通る程度の大きさだが、覗くには充分。

ハルは音を立てないように板を外し、向こう側を覗き見る。

そして、固まった。

「……………」

「……………」
二人同時に。

今ハルの目の前には、丁度身体を洗おうとしていた奈美がいた。
無論全裸で。

ハルが外した板は、座った奈美と目が合う高さ。

当然、バツチリ目が合ってしまった。

「は、ハル？」

「……………」

目を見開き驚く奈美に、ハルは口に指を当ててお願いする。
願いが通じたのか、奈美は悲鳴を寸での所でくい止める。

「あ、あんた、何してるのよ？」

「すまん。覗きだ」

「そんな事ハツキリ言わないでよ」
顔を真っ赤にする奈美。

タオルで身体を隠しているが、相当恥ずかしい筈だ。
叫ばなかったことを感謝するしかない。

「そ、そんなに…………私の裸を見たかったの？」

「…………まあ、そう言う事になるな」

ターゲットが奈美だったのは偶然だが。

「それって……………」

奈美が何かを言いかけたその時、

「不届き者には、死あるのみっ！！！！」

「ぬわああああああ」

「ぎゃああああああ」

「うほおおおおお」

千景の鋭い声と男達の断末魔が、温泉に響き渡った。

「あいつら、ばれたのか」

「…………ハル、早く戻って」

「す、済まない」

ハルは礼を言うと、素早く外した板を元に戻す。
そのまま大急ぎで湯船へと舞い戻った。

「お帰りなさい」

「た、ただいま……」

「無事戻れたのはあ、ハルちゃんだけみたいねえ」

「……加藤……吉田……佐伯……」

壁際に倒れている勇者達。

これから彼らに待ち受ける運命を思うと、涙を禁じ得ない。

「立派な最後だったわねえ」

「ああ。俺はあいつらの勇姿を忘れない」

ハルとローズは、無言で三人に敬礼を送るのだった。

『この者達、危険な覗き魔につき、エサを与えることを禁ずる』

旅館の軒下に、簀巻きにされて吊される勇者達。

就寝時間までこのまま反省していると、千景の判決。

当然罰として夕食も抜きだ。

「おい、生きてるか？」

「あ、ハルさん。何とか無事です」

「手ひどくやられたな」

簀巻きから覗かせる顔は、ポコポコに殴られた性で原型を留めて
いなかった。

それでもハルを売らなかつた彼らは、賞賛に値するだろう。

「リスクは……承知の上でしたから」

「そっか。それで、桃源郷は見れたのか？」

ハルの言葉に、三人は涙する。

そのリアクションが全てを語っていた。

「……今度、飲みに行こう」

「是非に」

四人の友情が強固になった瞬間だった。

海に行こう(4) (後書き)

温泉と言えば、やはり覗きは欠かせませんよね。

まあ、大抵酷い結果が待っていますか。

大分間延びしてしまった海編も、いよいよ次がラストです。

このまま終わるとスッキリしない二人がいますので、

延長戦と参りましょう。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海に行こう(5) (前書き)

覗き騒動も終わり、旅行最後の夜。
どうも寝付けないハルは散歩に出るのだが……。

海編完結です。

海に行こう(5)

深夜。

なかなか寝付けないハルは、気分転換に庭を散歩することにした。浴衣姿で歩いていると、

「……………奈美？」

庭で一人佇む奈美の姿を見つけた。

足音に気づいたのか、奈美は振り返る。

「ハルも散歩？」

「あ、ああ。何か寝付けなくて」

すると奈美はニヤリと笑い、

「それは当然よ。何せ私の裸を見たんだから、興奮しちゃって寝られないんですよ」

痛い所を突いた。

「……………あゝその、なんだ……………ごめん」

「へっ!？」

突然頭を下げるハルに奈美は困惑する。

「ちよつと、いきなり何よ」

「お前の裸を覗いた。本当に悪かった」

「あのね、謝るくらいなら最初から覗きなんてするんじゃないわよ」
「ごもつともです。」

正論過ぎて反論できない。

「まあ良いわ。謝ったし許してあげる。てか、元々そんなに怒ってないから」

「……………裸を見られたの？」

「そりゃ恥ずかしいわよ。今思い出しても顔から火が出そう。でも、病気なら仕方ないでしょ」

「病気？」

「男は女性の裸を見たくなる病気に掛かってるんでしょ？」

ある意味真理だ。正誤はともかく。
情報の発信源は恐らく柚子だろう。

「それに、他の男ならともかくハルなら……」

安全パイ扱いされているのだろうか。

まあ友人の兄として、実の兄妹の様に思ってくれているのかも
れない。

ハルはそう思い、ホッと一安心する。

顔を赤らめた奈美を見れば、違う感情が入っているのは一目瞭然。
とんだ朴念仁だった。

何はともあれ和解した二人は、そのまま少し話をすることにした。
虫の音が聞こえる静かな庭で、会話を交わす。

本当に何も無い雑談ではあったが、それでも楽しい時間だった。

「そう言えば、奈美はこの夏帰省するの？」

「ん〜帰ってこいとは言われてるけど、帰り辛いよ」

「何かやらかしたのか？」

「ちよつとお父さんと喧嘩してね、病院送りにしちゃったの」

ちよつとどころの話では無い。

「ず、随分過激な親子げんだな」

「だって酷いんだよ。お父さんたら、いきなり私にお見合いさせよ
うとするんだもん」

「お見合い!？」

「だから頭来ちゃって、思い切りフルボッコにして、飛び出して来
ちゃったわよ」

「……それ家出って言うんじゃない」

「ちゃんとお母さんの許可は貰ってるもん。家出じゃないわ」
複雑な事情があるようだ。

あまり追求しないのが優しさだろう。

「ならハルはどうなの、帰省するの？」

「俺はしないよ。てか出来ない」

「え？」

「帰省する場所が無いんだよ。親父と母さん、結構無茶と一緒になつたみたいでね」

「あ、ごめん。変なこと言って」

「別に良いよ。子供の頃は代わりに色々旅行に連れて行って貰ってたしな」

申し訳なさそうな奈美に、ハルは気にするなと笑いかける。

「それに今年は、秋乃と一緒に海外の親父達に会いに行く予定なんだ」

「海外か。私も行ってみたいな」

「ならお前も来るか？」

「え、ええええええ!!」

「……何でそんなに驚く」

「だ、だって、それって、ハルのご両親に挨拶って事よね……まだ心の準備が……」

「心の準備って……友達の親に会うのに大げさだな」

「へっ？」

「お前の事を秋乃がよく話してるらしくて、一度会いたいって言うてるらしいんだ」

情報源は秋乃だ。

「そ、そっか。そうよね……はは」

「何かガツカリしてるな。あんまり乗り気じゃないか？」

「……ううん。是非一緒に行きたい」

「なら詳しい話は帰ってから、秋乃を交えてしようぜ」

「分かったわ。うん、何か楽しみ」

ハルと奈美はその後もう少し話を続けた後、

「じゃあお休み。寝坊するなよ」

「そっちこそ。寝てたら拳でたたき起こすからね」

「止めてくれ。永眠するから」
それぞれの部屋に戻り眠りにつくのだった。

翌日夕方。

ハピネス一行は、一泊二日の旅行から事務所に帰ってきた。

「みんな、今回はご苦労様でした。今日はゆっくり休んで、明日からの業務に備えて下さい」

「はいっ、お疲れさまでした！！」

解散の号令を受け、ハピネスの旅行は終わった。

その後。

「……ど、ドクター・蒼井っ！！」

バスの荷物置き場に横たわる蒼井が発見され、病院に搬送された。
千景は、

「純粋な子供に嘘を教えるのは重罪です。当然の報いでしょう」と揺るがない姿勢を見せた。

「……本当は？」

「向こうに着いたら解放するつもりでしたが……忘れてました」
この事実を闇に葬られることとなる。

以来、ハピネスメンバーで紫音に嘘を教える者は現れなかった。

海に行こう(5) (後書き)

えゝまず、蒼井に関しては……千景と言うよりも作者がすっかり忘れてました。

温泉で思い出したのですが、つい出しそびれてしまい……。

結局、落ち担当になってしまいました。

すまん、蒼井。

長かった海編がようやく終わりました。

夏の海は男女を引きつける魔力があるらしいですね。

ハルと奈美も例外では無かったよう……。。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話へきな臭い話 (前書き)

怪盗コレクトの元に、何者かが現れて……。

小話へきな臭い話

夜の闇を、白い影が舞い踊る。

ビルからビルへ、華麗に飛び移るその影は、彼の怪盗コレクトだった。

やがてかれは、とあるビルの屋上に身体を止める。

「やれやれ、今夜は少々歯ごたえのないショータイムだったな」

手の平に握られた宝石を見つめ、コレクトは一人呟く。

青白い光を放つそれは、闇の中にあつて少しも輝きを損なわない。

「……美しい。まさに「女神の涙」の名に相応しい」

しばし堪能した後、隠れ家に戻ろうとしたその時だった。

「流石は怪盗コレクト殿。噂に違わぬ、見事な手際ですな」

「お褒め預かり恐悦至極だ。何処の誰かは知らぬがね」

コレクトは振り向きもせず、声の主に答える。

「これは失礼を。申し遅れました、私はブラック。コードネームですがご容赦を」

「……悪の組織、かな」

「お分かりになりますか？」

「匂いでね。あまり好ましくない匂いがするよ」

「これは手厳しい」

くぐもった笑い声を出すブラック。

かなり失礼なコレクトの物言いにも、全く気分を害した様子はないようだ。

「それで、私に何か用かな？　ここが君達の場所なら、直ぐに去るつもりだが」

「実はコレクト殿に、少々お伺いしたい事がありました」

「私から情報を得るには、相応の対価が必要だよ？」

コレクトはここに来て、初めて後ろを振り返る。

背後に立っていたのは、黒スーツにサングラスの男だった。

四十代半ばだろうか、充分に鍛えられているのが物腰から伝わってくる。

「勿論存じております。ささやかですが、これをご用意しました」
ブラックは布から宝石を取り出して見せる。

「悪くないが、少し困ったな。それに見合う情報を私が持っているかどうか」

「幾つか質問にお答え頂ければ結構です」

「ふむ……まあいいだろう。それで、質問とは？」

「単刀直入に伺います。この人物を知っていますか？」

ブラックは懐から一枚の写真を取りだし、コレクトに投げる。

コレクトは写真を確認して、僅かに表情を変えた。

「……………知っているよ」

「その人物と直接会ったことはありませんか？」

「……………あるね」

「では最後に。その人物は」

「……………その通りだ。だが何故、君はそれを知っている？」

「情報の提供には対価が必要、ですよ」

「その宝石、持って帰りたい」

「ならば答えましょう。私は、いや私達はその人の事をよく知っているのです」

男はニヤリと笑い、こう続けた。

「何故なら、その人は私達の計画に欠かせない……………実験体なので
から」

小話へきな臭い話（後書き）

超短編です。

物語の骨組みが、これを切っ掛けに少しずつ見えてくるかと思いません。

平凡な日常によぎる不穏な影。

一体八ピネスはどの様な陰謀に巻き込まれるのか……。

と煽った所で、次からはまた日常話に戻ります。

ちよつとずつストーリーを進めて行ければと思っております。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話〈紫音とゲーム2〉（前書き）

紫音に呼び出されたハル。

何やらゲームの攻略法を聞きたいらしく……。

小話〈紫音とゲーム2〉

ある日のこと。

ハルは紫音に家に来て欲しいと頼まれた。

珍しい呼び出しに、何事かと思っていたのだが。

「ここが何度やっても突破できんだ」

「そう来たか……」

ゲーム攻略の為だった。

紫音がプレイしているのは、超有名RPGの三作目。

三部作の完結編だ。

「よく二作目をクリア出来たな」

「最後の方は少々情緒不安定になったが、あそこまで行くとは意地だ」

「……ザキ」

「ぬううううう、呪いの言葉が……」

「……痛恨」

「くううううう、追い打ちを掛けてきよって……」

「……メンテ」

「ひいひいひい、画面が真っ赤に……」

大分トラウマを植え付けられている様だった。

「で、それを乗り越えた紫音が詰まってるのは何処だ？」

「実はある場所を船で通ろうとすると、押し返されてしまうのだ」

「ああ。それは……」

ハルも迷った経験がある。

簡単にヒントを伝えると、紫音はなるほどと頷く。

「では早速やってみるとしよう」

「紫音はゲームを起動させ、冒険の書を選ぶ。

主人公の名前は、やはり「シオン」だった。

「おっ、結構レベル高いな」

「ヒントを探してあちこち彷徨ったからだ」

画面が切り替わり、王様の前にパーティーが現れる。

「武闘家と賢者、それに……遊び人？」

随分変わったパーティーだ。

ここまで進めて、遊び人のまま連れてくる人も珍しい。

「仲間の名はみんなの物を使わせて貰った。職業もそれに合わせたつもりだ」

「ナミとチカゲ、それに……ハル？」

ちよつと待て。

「紫音よ、どうして俺が遊び人なんだ？」

「他の職業に適当な物が無かったのだ」

「まあそれはいい。けどな、どうして性別が女になってる？」

「最初は男にしたのだが、ピエロ面よりこっちの方が、ハルに近かったからな」

お気遣いありがとう。

でもそれは余計なお世話とも言う。

「け、賢者になればイケメンになれるのに……」

「残念だがチカゲを賢者にしたから、ハルは無理だ」

「あれ、知らないのか？」

「何がだ？」

「遊び人はアイテム無しで、賢者に転職出来るんだぞ」

有名な話だと思っただが。

「ほう、それは初耳だ。しかし賢者か……」

「分かってるよ、似合わないって」

「……いや、ある意味ハルにピッタリかもしれん」

「お世辞はいらないよ」

「賢者は万能職業。モノマネを使うハルに通じる物がある」

少し寝すぎだが、悪い気はしない。

「なら早速転職するでしょう。謎解きはその後だ」

紫音はゲームを進める。

「なあハルよ。一つ気になったのだが」

「ん？」

「どうして遊び人から賢者になれるのかな？」

それは全国のプレイヤー達共通の疑問だ。

「遊びすぎて悟りを開いちゃったとか、一つの事を極めたからとかもな」

「ふむ、一理あるな」

「あんまり難しく考える必要はないよ。ゲームだし」

「……もしかすると、この遊び人は最初から賢者だったのかもな」

「どういうことだ？」

「あまりに強大な力を封じるため、あえて道化を演じていた、とは考えられぬか？」

なかなか面白い発想だった。

真実が証明出来ない以上、可能性の一つではあるだろう。

「話が脱線したな。ほら、ゲームを進めよう」

「うむ、そうするでしょう」

その後、紫音は無事詰まっていた箇所をクリア。

暫く一緒に遊んだ後、ハルは帰っていった。

「と言うことがあってな、ハルのお陰で無事終局を迎えられそうだ」
夕食の席で、紫音は千景に昼の話をする。

「それは良かったですね。でもゲームだけでなく、宿題もしっかりやるんですよ」

「宿題は既に終わっている。今は日々の復習を行っている所だ」

憎らしいくらい優秀な子供だった。

最終日に慌ててやるのが、夏休みの定番だというのに。

「それにしても、賢者ですか……」

「ハルにピッタリだと思わないか？」

「……彼の場合、寧ろ逆かもしれないね」

「む、それはどういう……」

「何でもありません。忘れてください」

話を終えた千景に、紫音は僅かに違和感を憶えたが、追求はしない。

千景が話さないなら、それは自分が聞かなくて良いことだと知っているからだ。

「そう言えば、ハル君と奈美は海外旅行に行くらしいですよ」

「うん、らしいな。ハルと妹君、奈美の三人で、ハルのご両親に会いに行くらしい」

「……何も無ければ良いのですが」

窓から見える夜空を見て、千景は誰に向けるでもなく呟くのだった。

小話〈紫音とゲーム2〉（後書き）

すっかりゲームにはまって居る紫音。

そろそろ次世代機を買ってあげたいところです。

今回のゲームは、お察しの通り国民的RPGの三作目です。

最近リメイクされたらしいですね。私ももう一度やってみたいです。

小話連発のあとは、少し長いエピソード。

海外の話になる予定です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう！へいざ出国（前書き）

冬麻と菜月を訪ね、海外旅行をすることになったハル達三人。
果たして無事にたどり着ける……無事に出国出来るのだろうか。

海外旅行編スタートです。

海外に行こう！いざ出国

八月某日。

ハル、奈美、秋乃の三人は空港にやってきた。

「えっと、国際線だから、あっちのターミナルだな」

「ハルは慣れてる感じだけど、海外旅行は慣れてるの？」

「……この間、アメリカに日帰り旅行したばっかだ」

実際は日付が変わっていたが、まあ気分と言うことで。

「秋乃はどうなの？」

「私はお父さん達と一緒に、入学まであっちに居たから」

「そう言やそうだったな」

「じゃあ海外旅行初は私だけか」

歩きながらキョロキョロと、周りを興味深げに見回す奈美。

「俺も初めてみたいなものだよ。今回は、秋乃先生に色々教えて貰おうかな」

「えっへん、任せて頂戴」

ドンと胸を叩く秋乃。

三人は受付を済ませ、搭乗口へと向かった。

「飛行機に乗るのって、大変なのね……」

早くも疲れた声を出す奈美。

国際線の洗礼に参っているようだ。

「国内線はもうちょい緩いけどな。まあテロとか警戒してるし、しようがないだろう」

「そうだけ……」

「ほら、もう搭乗口だ。乗っちゃえば後は楽だよ」

三人は搭乗口に到着。

ここでチケットを確認して、順番に飛行機へ搭乗する。

周囲には搭乗を待つ人が待っていた。

「あ、そうだ。奈美、飛行機に乗るときは靴を脱がなきゃいけないから注意してね」

「えっ、そうなの？」

何と古典的なジョークだろう。

見れば周りの搭乗客も苦笑を浮かべている。

「おいおい、あんまり奈美をからかうなよ」

「……お兄ちゃん知らないの？」

秋乃は真剣な顔で続ける。

「一昨日、国際航空法が改定されて、危険物持ち込み防止の為、国際便は靴を脱ぐ事になったの。靴はX線検査して、問題なければ飛行機の中で返して貰えるのよ」

「し、知らなかった……」

周囲の搭乗客達も知らなかったのか、一様に動揺している。

「ふふ、秋乃先生に任せなさい。靴はチケットと一緒に、係の人に渡せばいいから」

「うん、分かった。ありがとうね、秋乃」

素直に靴を脱ぐ奈美。

周りの皆様方も、続々と靴を脱いで手に持つ。

そして、係のお姉さんが現れ、搭乗が始まった。

「お願いしますっ!!」

元気いっぱい、奈美が一番手で手続きを行う。

チケットと一緒に渡された靴を見て、

「あのお客様。靴は履いたままで結構ですよ」

気の毒そうに告げた。

「えっ……だつて……」

チラリと視線を秋乃に向ける奈美。

「……と言うのは全部嘘なんだけどね」

「「何iiiiiiiiiiii!!!」」

ペロツと舌を出す秋乃に、乗客全員が同時に叫んだ。

「お兄ちゃんが突っ込んでくれると思ったんだけど、信じちゃったから言いだしにくくて」

「お前の嘘は設定が細かすぎるんだよっ!!!」

「航空法は基本的に航空運航業者に対しての物だし」

「一般の人がそんな詳しい事知ってるわけないだろうが!」

「私も少しやりすぎたって思ってるの。奈美とお兄ちゃんをちよつと騙すつもりだったんだけど」

秋乃の視線の先には、恥ずかしそうに靴を履き直す乗客のみなさん。

本当にご迷惑をおかけしました。

「良いか、嘘は時と、場所と、相手と、レベルを選んでつけ。良いな?」

「はい、気をつけます。次はもっと上手くやるね」

「少しは反省しろおお!!」

ハルの絶叫が搭乗口に響き渡った。

第一歩目から躓いた、今回の海外旅行。

果たして、どのような騒動が待ち受けているのだろうか。

海外に行こう！へいざ出国（後書き）

靴を脱ぐ、はもう定番のたまし文句ですね。
作者も子供の頃、見事に騙された事があります。

何はともあれ、出国することが出来たハル達。
どのような旅になるのでしょうか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう2へ到着したけど (前書き)

ハル、奈美、秋乃の三人は、両親の待つドイツに辿り着いた。
しかし無事に、とは言えず……。

海外に行こう2へ到着したけど

日本を出発して半日程。

ハル達に乗せた飛行機は、ドイツの空港へと着陸した。

到着ロビーへ続々と降り立つ乗客。

その中に、グツタリとしたハルを背負う奈美の姿があった。

「……まさか奈美が飛行機恐怖症だったなんて」

「べ、別にそんなこと無いわ。ただちよつと、怖かったただけだもん」

「お兄ちゃんを絞め落として置いて、今更言い訳は無用よ」

「うう、だってあんな事言われたら……」

涙目の奈美。

悲劇は、着陸前に起きた。

ハル達に乗せた飛行機は、空港の上空で旋回を繰り返していた。

天候の悪化により、一時的に着陸を見合わせているのだ。

ただでさえ不安定な奈美の精神状態は、一気に悪化する。

「ははは、ハル……だ、だ、大丈夫よね？」

「少しは落ち着け。天候が良くなれば着陸するし、悪ければ他の空港に行くから平気だよ」

「奈美、乗った時から様子がおかしいと思ったけど、ひよつとして貴方……」

秋乃の言葉を遮るように、アナウンスが流れた。

『お客様にご案内致します。当機は天候悪化の為、着陸を見合わせておりましたが、管制塔との連絡で着陸可能と判断致しました。よつて、これより着陸態勢に入ります。若干の揺れが想定されますので、必ずシートベルトを着用の上、備え付けの手すりに捕まり、揺れに備えて下さい』

ぶつり、と放送が終わると飛行機は着陸に向けて動き出す。

「二人とも、シートベルトは問題ないな？」

「平気だよお兄ちゃん」

「……………」

「奈美？」

返事が無い奈美を不審に思い、ハルは顔をのぞき込む。

奈美は顔面蒼白で、冷や汗を掻いていた。

「おい、大丈夫か？」

「……………も、勿論よ」

やせ我慢が丸分かりだ。

ハルは小さくため息をつくと、

「ほら、手を繋いでおけば少しは落ち着くだろう」

奈美の左手を優しく握った。

「ハル……………ありがとう」

小さく礼を言う奈美。

少しは落ち着けたようだ。

「……………で、何でお前は俺の手を握る？」

「私も怖いんです。いけませんか？」

「いや、構わないけど」

何故かふくれっ面をする秋乃が、ハルの左手を握る。

これでは手すりに掴まれないが、やむを得ない。

断った方が余程怖い。

そうこうしている内に、飛行機は着陸態勢に入る。

天候のせいか、機体は激しく揺れる。

そして、ガタンと一際大きな振動が機内に伝わると、

メキメキメキメキ

「ぬおおおおおお」

ハルの右手が思い切り握りつぶされた。

「お、お兄ちゃん！？」

秋乃の声と同時に、機体を更なる揺れが襲う。

引き金は引かれた。

「きゃあああああああ！！！」

「ぐううう……………」

感情が限界まで高まった奈美が、シートベルトを外しハルにしがみつく。

首に回された手が、思い切りハルの首を締め付ける。

「っ…………っ…………っ…………」

「奈美手を離して。お兄ちゃんの顔が赤から青…………白くなってるよ！」

「墜ちるうううううう！！！！」

奈美による完璧なチョークスリーパー。

ハルは抵抗する間もなく、安らかに意識を失った。

「ま、まあ私も流石に不味かったかな〜って思ったり思わなかったり」

「お願いだから思っ。犠牲になるのはお兄ちゃんだけで充分だから」

「とにかく、終わったことを悩んでもしょうがないわよ。これから
の事を考えましょ？」

「貴方のそのポジティブさが羨ましいわ」

二人ぶらすお荷物は、空港の出口に向かって歩き続ける。

「それにしても、ここは本当に外国なのね」

「急にどうしたの？」

「ほら、標識とか看板が全部外国語。何か外国に来てるって感じがするのよ」

「何となく分かる気がするわ」

「でも何が書いてあるのか全然分からないわね。秋乃は分かる？」

「簡単な単語くらいなら。じゃなかったら、出口に向かって歩けないでしょ」

標識や案内と言うのは、比較的分かりやすい言葉で書かれている。

秋乃も決して語学堪能ではないが、それでも出口の案内は分かった。

「流石秋乃。出口まで言ったらどうするの?」

「タクシーでお父さん達との待ち合わせ場所まで行くわ。でも出来れば……」

「出来れば?」

「それまでに、お兄ちゃんが起きてくれると良いんだけど」

チラリと奈美の背で意識を失っている兄を見る。

顔色は戻っているが、まだ駄目みたいだ。

「どうして?」

「タクシーに乗るには、ドイツ語話さなきゃいけないから」

「秋乃ドイツ語出来るじゃない」

「ネイティブの人と会話できる程じゃ無いもの」

「ハルは喋れるの?」

「モノマネすればね」

なるほど、と奈美は納得したように頷く。

そう言えば以前モノマネの説明を聞いたとき、そんな事を言っていたような気がした。

「……って、秋乃はモノマネの事知ってるの?」

「当たり前でしょ。だって私は妹だもの」

微妙にずれた回答だったが、何故か説得力があった。

「それに、お兄ちゃんの事で私が知らないことはほとんど無いわ」

「へえ、例えば?」

「実は椎茸が苦手とか、初恋はお母さんだとか、初めて貰ったラブレターは男からとか」

「……ハル」

惜しげもなく秘密を暴露されるハルに、奈美は少しだけ同情する。

とはいえ、この機会を逃すつもりもない。

「でもそれ位は普通よね。もっと本人しか知らないような事は無いの?」

「エッチな本は友達の家で隠してるとか、胸の大きな女の人がタイプとか」

「……なるほど」

「友達から借りた恋愛ゲームを、一度もクリアしたことが無いのとかが」

優柔不断で八方美人だからだろう。

その後も秋乃はハルの秘密を暴露し続ける。

「……ねえ、秋乃」

「何かしら？」

「それ、完全にストーカーのレベルだと思うわ」

「大丈夫、妹だから」

凄まじく強引な理屈だった。

出口のロビーで待つこと十分。

ようやくハルは意識を取り戻した。

「……ここ、ここは……一体俺は……」

「お兄ちゃん、実はかくかくしかじか……」

「成る程。まるまるうまうまって訳か」

「????????」

「状況は理解した。なら早速タクシーに乗ろう」

「ほ、本当に今ので分かったの？」

「お前は分からなかったのか？」

「え、ええ、私が変わなの？」

シヨックを受ける奈美はひとまず置いておき、三人はタクシー乗り場に移動する。

待機していたタクシーに乗り込むと、

『ハーメルホテルまで』

手短に行き先を告げる。

運転手は頷き、タクシーを発車させた。

「本当にドイツ語喋れるんだ」

「まあ最低限はな。多分相手には、相手には違和感のある発音だと思うぞ」

日本語を話せる外国人を、イメージして貰えば分かりやすい。

流暢だが、アクセントなど細かな点がネイティブとは異なる。

「でも羨ましいわ。私英語も全然出来ないのに」

「学校の授業では会話を重視しないからな。それは仕方ないだろ」

「……奈美の場合はそれ以前の問題だけだね」

「うぐう」

痛いところを突かれ、奈美の顔が引きつる。

「そう言えばそうだった」

「先生達、奈美が赤点クリアした時泣いてたもの。今夜は祝杯だった」

本当に先生方、お疲れさまです。

「わ、私だつてやる気になれば凄いんだから」

「やる気になるのは何時になるんだろうな」

「因みに、夏休みの宿題はやってる？」

「……………ま、まだ半月も残ってるじゃない」

やってないんですね。

そしてこれは、最終日まで残す流れですね。

「ここまで予想通りだと、かえって清々しいな。秋乃はやってるのか？」

「最初の一週間で終わらせちゃった。休みは有効に使いたいから」

「……………さよか」

全く死角のない妹に、ハルは呆れ混じりの返事をする。

奈美と秋乃を足して二で割れば、丁度良いのでは無いかと想想つしまつ。

「案外、お前達は良いコンビなのかもな」

色んな意味で正反対の二人。

だからこそ、引かれ合うのかも知れない。

やがて、ハル達を乗せたタクシーは、両親が待つホテルへと到着するのだった。

海外に行こう2へ到着したけど（後書き）

ようやくドイツに到着です。

海外ってやはり独特の空気がありますよね。

作者も奈美と同じく、標識などが日本語以外で書かれているとき、外国に居るんだという実感が沸くタイプです。

次はこの旅行の目的、冬麻と菜月との再開が待っています。

破天荒な両親に、ハル達三人はどう立ち向かう……翻弄されるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こうよへ久方ぶりの再会 (前書き)

両親と再会するハル・秋乃兄妹と奈美。

果たしてどの様な展開が待っているのか……。

海外に行こう3へ久方ぶりの再会

待ち合わせ場所の、ホテルのラウンジ。

ハル達は約束の時間少し前に、そこに辿り着いた。

ぐるりとラウンジを見回すと、見覚えのある二人の姿が見える。

午後のティータイムを楽しむ、大柄な男性と小柄な女性。

冬麻と菜月だった。

「親父、母さん」

ハルが呼びかけると、二人は同時に振り返る。

そして、

「秋乃おおおおお!!!」

冬麻は一直線に秋乃へと駆け寄った。

そのままハグに移行しようとして、

「ふう………てりゃ!」

鮮やかに投げ飛ばされた。

床に叩き付けられた冬麻の背中から、ちよつと不味い音が聞こえる。

嫌な沈黙がラウンジに漂うが、ケロリとした様子で立ち上がる冬麻。

「はっはっは、見事な投げだ。流星はマイスイートエンジェル秋乃だな」

「お父さん、公衆の面前です。少し落ち着いて下さい」

「いやゝすまん。つい父さん興奮しちゃったようだ」

「………は、ハル?」

「何時も通りだ。残念ながら」

戸惑う奈美にハルは頭を抑えながら答えた。

この溺愛ぶりは、もう病気の域だと思っ。

「もう駄目だよパパ。秋乃ちゃんのお友達、ビックリしてるじゃない」

「おっと、そうだった。今回はお客人在るんだったな」

菜月の言葉に我を取り戻した冬麻は、呆然としている奈美に向き直る。

「お嬢さん初めまして。私は御堂冬麻。秋乃とハルの父です」

礼儀正しく一礼をする冬麻。

長身で体格が良いため、スーツを着ている姿は様になっている。

「こ、こちらこそ初めまして。早瀬奈美と申します」

慌てて自己紹介をする奈美。

普段からは想像できない動揺っぷりだった。

「そして、こっちが私の妻の……」

「はい。初めまして、私は御堂菜月です。よろしくね」

「こちらこそ………つて、え？」

菜月の姿を確認して、奈美は思いつき予想通りの反応を見せた。

「……お母………さん？」

「そっだよ。二児の母で人妻」

妖艶さの欠片も無いが。

「奈美、お前の気持ちは痛いほど分かるが……残念ながら事実だ」

「理解しなくても良いから、納得して」

子供達は何とも言えない表情で奈美を諭す。

初顔合わせは、奈美の完敗に終わった。

一行はラウンジのテーブル席に着き、適当な飲み物を注文する。

『まずビールと……』

「昼間っから酒飲むのか」

「ここでは水みたいなものだ。それで、君達は何にする？」

「私はアールグレイで。奈美は？」

「メニューが読めない……。じゃ、じゃあ私もR・GLAYで」

宇宙人がバンドグループみたいですね。

「俺はコーヒー」

「私はね〜、ココアが良いな〜」

冬麻から全員のオーダーを聞くと、ウェイターが一礼をして下がる。

これでようやく一息つけた。

「それにしても、秋乃に奈美さん、よく来てくれたね」

「……おいこら」

「長旅大変だったろう」

「さてこら親父」

「今夜は一流のレストランを予約してあるから、期待して欲しい」

「話を聞けええええ!!!」

思わず叫ぶハル。

周囲の客が何事かと視線を向けるが、どうせ言葉が伝わらないので無視する。

「久方ぶりにあつた息子に、随分な挨拶だな？」

「……………」

「何だよ？」

「……えつと…………… おお、ハル。勿論憶えているぞ」

「そのレベルからかああああ!!!」

再び絶叫。

「も〜駄目だよパパ。あんまりハルちゃんをいじめちゃ」

「ははは、違うよママ。これは親子のスキンシップさ。なあ、ハル?」

「…………… 貴方誰ですか? 秋乃は知ってるか?」

「さあ。私も知らない人です」

「のおおおおお!!!」

秋乃の会心の一撃に、涙を流し絶叫する冬麻。少し気が晴れた。

運ばれてきた飲み物を飲みながら、たわいない会話を交わす。
秋乃と奈美の学校生活。

ハルと奈美のバイト生活。

近況報告を兼ねた話を、冬麻と菜月は楽しそうに聞いていた。

「みんな元気に暮らしてるんだね。お母さんホツとしたよ」

「うむ。上手くやっているようで何よりだ」

「ところで、そっちはどうなんだよ」

「ふっ、お前に心配される程、落ちぶれてはいない」

「仲良しさんだよ」

「いちゃつく二人には、心配など無用だった。」

「相変わらず、お父さんとお母さんは仲良いね」

「ああ、昼夜問わずな」

「えへへ。ひよっとしたら、二人に弟か妹が出来るかも」

「……自重して下さい。悪い事じゃ無いけど」

本当にお願ひします。

その後も談笑を続ける一同。

楽しい時間は過ぎるのが早い。

気が付けば、そろそろ夕食の時間となっていた。

「あらあら、もうこんな時間なの？」

「今ここを出れば、予約の時間に丁度と言った所だな」

時計も見ずに答える冬麻。

「きつと体内時計とか言い出すので、あえて突っ込まない。」

「さっき言ってたレストラン？」

「うむ。何かの本で三つ星を貰った店だ。店主とは少々付き合いがあつてな」

「美味しいのよ。みんな期待してね」

菜月の言葉に奈美の顔が輝く。

そう言えば、ドイツに着いてから殆ど何も食べていなかった。

飢えているのだろう。

「では早速行きましようよ」

秋乃の言葉に、それぞれが頷き席を立つ。

そんな中、

「ああ、済まないが俺は一服してから行くから、先に行っていてくれ」

冬麻が煙草を見せて謝る仕草を見せる。

他の面々が非喫煙者だったので、控えていたらしい。

一同はそれを理解して、菜月の先導で店に向かうことにした。

筈だったのだが。

「……………何故？」

「おいおい、一人きりなんて寂しすぎるじゃないか。少しは付き合え」

強引にハルは、ホテルの喫煙室に連行されてしまった。

当然抵抗したのだが、勝てるはずも無い。

間接を完全に決められた状態で、ハルは喫煙室へと入る。

そこは煙が充満した視界ゼロの世界、では無かった。

換気がされていて、他に利用者が居ない喫煙室は、臭い以外は普通の部屋と変わらない。

「はあ、良かった」

「煙草は吸わんのか？」

「まあね。てか、親父は煙草吸ってたっけ？」

「吸えるが、吸わないぞ」

「はあ？　じゃあ何でここに来たんだよ」

「……………少し、お前とサシで話がしたくてな」

答える冬麻の顔は、いつになく真剣なものだった。

「改まって、一体なんだよ？」

「お前、モノマネのことを人に話したらしいな」

こくりと頷くハル。

「信じたか？」

「最初は疑ってたけど、色々あってね。結果的には」

「……そうか」

意味深に頷きながら、冬麻は難しい顔をする。

何を聞きたいのか、ハルには理解できない。

「それが一体どうしたってんだよ」

「子供の頃起きた、あの事件。憶えているか？」

「……忘れると思うか？」

深層意識に刻み込まれた嫌な記憶。

どれだけ時が経っても、決して消えることはない。

「あの事件の犯人は捕まったが、黒幕は残っている」

「……それで？」

「どうも最近、一部の悪の組織が妙な動きを見せているのだ」

「悪の組織って……漫画の読み過ぎだろ」

「理解できないなら、裏組織やテロ組織とでも思えばいい」

冬麻の表情は真剣なまま。

いつものように、ハルを茶化す様子は全く見えなかった。

「分かったよ。で、何が起きてるって？」

「あの時と同じ事がだ」

思わずハルの顔が、ピクリと引きつる。

「だから忠告しておく。お前の力については、一切他言するな」

「元々するつもりないよ」

「情報は何処から漏れるか分からない。注意するに越したことは無いだろう」

「……まあ、一応了解しておくよ」

ハルの言葉に、冬麻は小さく頷く。

「話は終わりだ。さて、それじゃあ店に行くとするか」

二人は喫煙室を後にして、女性陣の待つレストランへと向かう。

道中、ハルの気持ちのモヤモヤが晴れることは無かった。

海外に行こう3へ久方ぶりの再会（後書き）

少しだけ、また物語が動きました。

まだピースの欠片ですが、いずれ形が見えてくるかと。

と、格好いいこと言っていますが、この物語にはそれほど重かったり、暗かったりする話はありません。

基本的にコメディですので、そこだけご了承下さい。

海外旅行編も折り返し地点通過。

頑張ってピースアップして参ります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう4へ食事は賑やかに (前書き)

レストランでディナーを楽しむ、ハル達一行。
とは言えこの面子、大人しい食事会になる筈もなく……。

海外に行こう4〈食事は賑やかに〉

冬麻の予約したレストランは、予想以上だった。

店構え、雰囲気、店員のレベル、そして料理。

どれをとっても、超一流の名店だ。

その店内、VIP御用達の特別室で、

「では、出会いと再会を記念して」

「「かんぱ〜いつ」「」

ハル達の食事は始まった。

「な、何か高そうなお店ですね……」

「はっはっは、気にすることはないよ。存分に食べてくれ」

「親父、後悔するなよ」

「偉大なお父様を甘く見るなよ。フルコース十人前が来ようとも、

財布はびくともせんわ」

「……それで済めば良いんですけど」

秋乃が諦め混じりに呟く。

この後の展開が、大体予想できているようだ。

だされた料理に、ハル達は舌鼓を打つ。

「美味しい〜。何これ、スツゴイ美味しいよ」

「奈美、料理は逃げないから落ち着きなさい」

「だってだって、凄い美味しいんだもん」

「ほら、口元にソースが……」

奈美の口に付いたソースを、布で拭き取ってあげる。

「お兄ちゃん、何かお母さんみたいだよ」

「……最近そんな気がしないでもない」

「」

そんな兄妹の会話を全く気にせず、奈美はひたすら食べまくる。幸せ全開の表情に、思わずハル達の表情も緩む。

「ここまで美味しそうに食べてくれれば、ご馳走する方も嬉しいものだ」

「そうね。ハルちゃんも秋乃ちゃんも小食だから」

「奈美と比較しないでくれ」

「それを抜きにしても、お前は食が細い。だから成長出来ないのだ」

「……母さんの遺伝だろうに」

ハルは恨めしそうに、にこにこ顔の母親を見る。

「良いじゃないの。ハルちゃん可愛いし」

「父親としては複雑だ」

「妹としても複雑です」

「張本人はもつと複雑だよっ!!」

エキサイトするハルだが、菜月には何も効果はない。

ほんわかオーラと笑顔で、するりと流される。

正にのれんに腕押し状態だった。

「あの、菜月さん」

「もっ奈美ちゃん固すぎよ。もっと仲良く、なっちゃん、て呼んで」

「え、いえ、その、流石に……」

「だったらく、お義母さんでも良いよ」

「「ぶうううううう！」」

子供三人が一斉に吹き出した。

「ななな、何を言い出すんだよ母さん」

「そうよ。お兄ちゃんは私のよ」

「お前も何言い出すんだ！」

「大丈夫。上手くやれば戸籍上は他人になれるから」

「全然大丈夫じゃ無い！」

「と言うわけで、私を養子に出してください」

十分後。

ようやく正気に戻った奈美は、取り敢えず料理の追加注文をする。

「メニューのここからここまでお願い」

『……………と云うことですので』

『畏まりました』

通訳のハルを介して、注文を終える奈美。

既に十人前以上を平らげているのに、苦しむ様子は欠片も見えない。

どこにそれだけ入るのかと、ハルは思わず奈美のお腹に視線を向けてしまう。

「あゝハルちゃん、奈美ちゃんの胸見てる。エッチだ」

「「なっ！」」

同時に反応し、奈美は胸を手で隠す仕草をする。

「ちょ、違う。俺はただ……………」

「そう言えば、ハルは子供の頃から女性の胸が大好きだったな」

「ねっ造するんじゃないか」

「残念だけど本当よ。赤ちゃんの頃から、女の人の胸に良く触ってたもの」

「兄さんのエッチ」

「流石にそれは責任外だろ……………」

親や親戚にはらされる子供の頃のエピソード。

これほどきつい物はない。

「やっぱり、私の胸じゃ足りなかったのかしら」

足りないと言うか……………無い？

「菜月、気に病むことは無い。俺は君の身体全てを愛しているよ」

「パパ……………」

見つめ合い、何やら良いムードを作り出す両親。

冗談抜きで家族が増えるかも知れない。

「ハルは子供の頃からエッチだったんですね」

「からって何だよ」

「……覗き」

「本当にすいません。どうか内密に」

全力で情報漏洩を阻止するのだった。

食事は続く。

「ハルよ、折角だしお前も付き合え」

「……あんまりワインは好きじゃないけど」

「その土地の名産を味わうのも、旅の醍醐味だ。ドイツのワインもなかなかだぞ」

「じゃあ、少しだけ」

グラスに注がれた白ワインを、少しだけ口に含む。

思ったよりも苦味が少なく、今まで飲んだワインよりも飲みやすかった。

「へえ、美味しいや」

「そうだろう。ほらどんどん飲め。奈美さんもどうかな？」

「えっ、いえ私未成年ですから」

「お父さん……奈美は私と同じ年ですよ」

「ああそうだった。少し大人びて見えるから、つい忘れていたよ」
否定はしない。

自身はともかく、外見はハルと同じ年でも違和感が無い。

「じゃあハルちゃんとは、五歳くらい違うんだね」

「五歳か……問題ないな」

「何が？」

「安心してハルちゃん。五歳なら歳の差婚とか言われなからう」
話を掘り返すなっ！

見れば奈美の顔は、再び真っ赤に茹で上がっている。

同時に秋乃が手に持ったグラスにひびが入る。

「実は俺と菜月も歳の差婚だ。血は争えないな」

「あの時のパパ、とつても情熱的だったわ」

二人の世界に飛び込む冬麻と菜月。

まあ、歳の差婚なのは見れば分かるが。

「そう言えば、二人はどれくらい歳が離れてるんだ？」

「私も聞いたこと無いわ」

「えっとね、十歳くらいよ」

へーと驚くハルだったが、不意にハルは気づいた。

「ちよつと待て。確か二人が結婚したのは、親父が二十歳の時だよな？」

「うむ。正確には十九の時だな」

十九引く十は……………。

「「犯罪っつー！！」」

一斉に席から立ち上がり、冬麻から距離を取る子供達。

その顔には、軽蔑の色が浮かんでいた。

「親父……………残念だよ」

「身内から犯罪者が出るなんて……………」

ハルと秋乃の言葉に、ようやく冬麻は得心いったらしい。

ああ、と納得したように頷き、

「そう言うことか。お前達勘違いをしているぞ」

慌てた素振りを見せずに言う。

「俺はママより年下だ。まあ、姐さん女房って奴だな」

「「ええええええええええええ！！」」

二度ビツクリだ。

どう見ても逆だろうに。

「し、知らなかった……………」

「私も……………」

シヨックを受けるハルと秋乃。

子供なら知っていて欲しいものだが。

「てことは、親父と結婚したとき、母さんは二十九歳か」

「お兄ちゃんが二十歳だから、今の年齢は……」

「（ニコニコ）」

（し、信じられない……）

微笑む母親の姿は、どうみても十代半ば。

人体の神秘を垣間見た。

「お二人の馴れ初め、聞いても良いですか？」

奈美の何気ない言葉に、一瞬ハルと秋乃の顔が固まる。

両親は祝福されて結ばれていない。

あまりこういった話題に、触れて欲しくないと思ったのだが。

「そうだな……一言で言えば、一目惚れかな」

「あの時のパパ、素敵だったわ」

意外に当人達は気にしていないようだ。

ノロケムードで、過去を語り始めた。

海外に行こう4へ食事は賑やかに（後書き）

御堂家の人々は、やはり何処か変わっています。

常識人はハルだけ……彼の苦勞は察するにあまりありますね。

因みに、ハルと秋乃は血の繋がった本当の兄妹です。

某柑橘少年漫画、みたいな展開は期待しないでください。

次は冬麻の回想です。

菜月との馴れ初めを語って貰いましょう。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう5へ昔話は手短かに(前書き)

食事の席で、奈美に妻菜月との馴れ初めを聞かれた冬麻。
子供であるハル・秋乃すら聞いたことのない、その出会いとは。

海外に行こう5 〈昔話は手短に〉

御堂冬麻は困っていた。

理由は簡単、道に迷ったからだ。

周囲を生い茂る木々に囲まれ、冬麻は完全に迷子になった。

「軽い散歩のつもりだったが……」

趣味の山歩きを楽しんで居たのだが、少々トラブルがあった。

崖から落ちそうな動物を助け、代わりに自分が落ちた。

「怪我一つ無かったが、自分の居場所が分からなくなってしまったのだ。」

「まあ、適当に歩けば何とかなるだろう」

特に時間に追われている訳でもない。

冬麻は気持ちを切り替え、この状況を楽しむことにした。

山中を歩くこと数時間。

前方に一件の日本家屋が見えた。

「こんな場所に人が居るのか……」

人が居るなら道を聞けるかも知れない。

冬麻はそう思い、家へと向かった。

「ごめん下さい、どなたかいらつしやいませんか？」

インターフォンが無いので、ドアを叩いて人を呼ぶ。

数度繰り返した後、

「……何用じゃ」

がらがらとドアが僅かに開かれ、着物を着た老人が姿を見せた。

「突然失礼しました。実は道に迷ってしまいました」

「こんな山奥でか？」

不信任を露わにする老人。

それも当然と、冬麻は事情を説明した。

「　　と言っわけです、宜しければ道を教えて頂けないでしょうか」

「……ここより北に一刻ほど歩けば、街に出られる」

老人はそつとある方向を指差す。

「どうやらあまり歓迎されていないようだ。」

「ありがとうございます。それでは私はこれで」

それでも道を教えてくれたことは素直に感謝。

冬麻が礼をして立ち去ろうとすると、

「あら～お客様？」

横から間延びした女の子の声が聞こえた。

視線を声の方に向けると、そこには着物姿の少女が立っていた。

栗色のロングヘアにくりつとした瞳。

日本人形の美しい顔に、柔らかな笑顔を浮かべている。

一目見た瞬間、冬麻の心は彼女に奪われた。

「夏紀！ 外に出てはいかんと言っただじゃろうが！」

「良いじゃないの～。お客様なんて本当に久しぶりだし」

「……君は？」

「初めまして～。私は夏紀と言います。貴方は？」

「御堂冬麻です。あの、もし良ければ……結婚してくれませんか？」

「喜んで」

夏紀は満面の笑みで、冬麻の求婚を受け入れた。

二人は互いに歩み寄り、抱擁を交わす。

「いかん、いかんぞ！ そんなもの許されん！ お前はここに居なくてならん！」

「……何か事情が？」

「し～らない」

「お前が外に出れば、必ず災いが起こる。それが分かるのか！」
「し～らない」

「普通の人と違うお前は、幸せなど望んではならんだ！」
事情はよく分からない。

きつと深い訳があるのだろう。

だが、今の老人の言葉にはカチンと来た。

「……おい、じいさん」

冬麻は夏紀と老人の間に立ちはだかる。

「どんな事情があるか知らないが、幸せになっちゃいけない人なんて存在しないんだよ」

「冬麻さん」

「黙れ小僧。お前は夏紀の力を知らんから、そんな戯れ言が言えるのじゃ」

「問答は無駄か。なら、実力行使させて貰うぜ」

冬麻は夏紀をヒョイツと抱き上げる。

このまま夏紀を連れ出そうとするのだが、

「……なんだこりゃ？」

家の敷地から出ようとした瞬間、見えない壁に阻まれた。

「ふん、無駄じゃ。この家には結界が張ってあるからもう」

「結界？」

「夏紀の力を封じるためのものじゃ。外に逃がさぬ効果もある」

「まるで鳥籠だな」

「だよね。このせいで私、今まで一步も外に出れないの」

冬麻の腕の中で、不満そうに頬を膨らませる夏紀。

彼女にとつて、これはまさしく檻なのだろう。

「無駄と知ったか？ なら夏紀を置いて早々に立ち去れ」

「籠か……なら、ぶっ壊せば良いだけだ！」

冬麻は全身全霊の力を込めて、右拳を見えない壁に打ち付けた。ガラスが割れるような音を立てて、それは碎け散る。

「ば、馬鹿な……」

「冬麻さんすごい」

「愛の力だ。それじゃあ、夏紀は連れて行くからな」

冬麻は何やら叫ぶ老人を無視し、そのまま北へ走り抜けた。

果たして老人の言葉通り、二人は街へとたどり着いた。

「少々強引だったが、構わないよな？」

「ええ。ありがとう冬麻さん」

「じゃあ早速だが、家に案内するよ。小さな家だがね」

「うん」

公衆電話でタクシーを呼び、冬麻の家に向かった。

そして二人は一緒に暮らすことになった。

数日後。

「問題は戸籍か……少々裏技を使うしかないな」

結婚するため、冬麻は持ちうるあらゆる手段を使った。

信頼できる職人に、戸籍を偽造させる。

「冬麻さんの頼みなら喜んで」

「すまん。名前は夏紀……いや、菜月だ」

この瞬間、彼女は別人として生まれ変わる。

漢字を変えたのは、冬麻なりに過去との決別を意味していた。

全ての問題をクリアし、二人は正式に夫婦になった。

海外に行こう5へ昔話は手短かに(後書き)

まるっと一話、冬麻の昔話で終わってしまいました。
反省してます。

長かった旅行編も、次で終わります。
次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

海外に行こう6へ立つ鳥後濁……したかも（前書き）

冬麻の昔語りを聞き、神妙な一同。
しかし……。

海外旅行編完結です。

海外に行こう6 〈立つ鳥後濁……したかも〉

冬麻は語り終えると、ワインを飲み喉を潤した。

予想外にシリアスな話を聞き、ハル達は上手く言葉が出てこない。まさか二人に、そんな過去があったとは想像すらしていなかった。

「親父……まあその、何て言っていていいのか」

「二人は、色々な障害を乗り越えて結ばれたのね」

「ごめんなさい。好奇心で聞くなんて失礼な事しちゃって」

神妙な表情を浮かべるハル達。

そんな空気を、

「と言う話だったら面白かったのにな」

冬麻はあっさり粉碎した。

「をい、クソ親父。今の話、全部嘘か？」

「全部ではない。九割ほど脚色が入っているだけだ」

「ほら話で丸々一話も使っくんじゃねえええ!!」

メタ発言は程々に。

それから一時間ほどで、食事は終わった。

結局奈美は三十人前ほどの料理を平らげ、満足げにお腹をさする。会計で慌てふためく冬麻が見れると、ハルは内心楽しみにしていたのだが、

「これで頼むよ」

余裕の笑みでブラックカードを出す冬麻に、器の違いを見せつけられてしまった。

流石にそれは反則だ。

「ん、どうかしたか？」

「親父、正義の味方って儲かるのか？」

「公務員とさほど変わらんさ」

「じゃあ、何でそんなもの持ってたんだよ」

「副業が順調でな」

それが何かは聞かないことにした。

聞いたら引き返せない気がして。

食事を終えた一行は、そのままホテルへと戻った。

旅疲れもあるだろうとの配慮で、今日はここで解散となる。

冬麻と菜月、秋乃と奈美、そしてハルという部屋割りだ。

「え〜お兄ちゃんと一緒にじゃないの〜」

不満たらたら秋乃だったが、

「……奈美を一人にするリスクを考える」

「ひ、否定できないわね」

ハルの一言で渋々引き下がった。

言葉が一切分らない外国のホテルに、奈美を一人放置。

問題が起きない筈がない。

「そうだ、ハル。一つ教えておこつ」

「何を？」

「有料チャンネルは、リモコンのボタンで見れるぞ」

「海外まで来て見ねえよ！」

そのやり取りを最後に、一行は各々の部屋へと向かった。

〈冬麻と菜月の部屋〉

ワインをサイドテーブルに並べて、冬麻と菜月はくつろいでいた。久しぶりのゆつくりとした時間だった。

「今日は楽しかったわね〜」

「若いうちはあれくらい騒がしい方が良い。秋乃は良い友に恵まれたよ」

「そうね。学校生活も充実してるみたいだし、一安心だね」

「ハルも良い影響を受けているみたいだ」

「少し人と距離を置く子だったのに、変わったわね」

「元々人懐っこい奴だ。アレの性で少々人間不信気味だっただけだよ」

「……例の件、ハルちゃんに話したの？」

「簡単に忠告だけした。悪戯に不安がらせる必要はない」

「そうね……。未然に防げれば、それが一番いいわ」

「ああ。俺達に出来ることは、少しでも早くここでの仕事を終えて、日本に戻る事だ」

「明後日から、また仕事再開ね」

「うむ。だから今この休暇を、出来る限り楽しむとしようか」

「もうパパったら」

二人の夜はまだまだ続く。

↳秋乃と奈美の部屋↳

シャワーを浴びた二人は、ベッドに横になった。

ふかふかのベッドの寝心地はよく、直ぐにでも眠れそうだ。

「はあ、今日は楽しかったわね」

「ここに来るまでどうなることかと思ったけど、無事に終われて良かったわ」

「秋乃の家族、とっても素敵ね」

「うん、自慢の家族よ」

「……………」

「どうしたの？」

「ちよっと、家族って良いな〜て思っただけ」

「帰省すれば良いじゃない。誘い来てるんだよね」

「でも、ちよっと帰り辛いと言うか……………」

「確か、お見合いさせようとしたお父さんと喧嘩別れしてたんだっ

「うん。帰ったらまたお見合いさせられるのかと思うと……」
「お母さんは味方なんでしょ？」
「そうだけど……」
「珍しく弱気ね」
「だって、もしお見合いさせられて、断れなくなったら……」
「ひよっとして、好きな人でも出来たの？」
「な、なな、何でそうなるのよ」
「そうじゃなければ、そんなに不安にならないからね」
「べ、別に好きな人なんて……」
「……お兄ちゃん？」
「どうしてハルが出てくるの!」
「お兄ちゃん以外に、奈美と親しい男の人が居ないからよ」
「むづううう」
「……私は、奈美なら構わないと思ってるけどね」
「??？」
「奈美と出会って、お兄ちゃんは変わったわ。凄く感情を表に出すようになった」
「そうかな……最初からハルはあんな感じだったけど」
「家族の前ではね。でも他人とは、表面でだけ付き合ってる感じだったの」
「……」
「でも奈美には違う。家族と同じように、本音をさらけ出して向き合ってる」
「……」
「だから、そんな奈美ならお兄ちゃんを譲っても良いかな……って思ってるわ」
「そ、そんな事言われても……」
「な……んて、お子様の奈美にはまだ早い話だったかしら」
「ちょっと、私は子供なんかじゃ……あっ」

立ち上がるうとして、体勢を崩した奈美。

思わず手を着いたそこに、偶然テレビのリモコンがあった。電源ボタンが押され、急にテレビが映る。

「わ、わわ、私何かやっちゃったの？」

「ただテレビを着けただけよ」

「どどど、どうしよう。料金とか取られちゃうんじゃない……」

「どんな悪徳ホテルよ」

「えっと、どれが電源ボタンだろう……これかな」

当然リモコンに書かれている表記はドイツ語。

読めない奈美は、適当なボタンを押す。

すると、

「!!!!!!!!!!!!!!」

突然画面に、裸の男女が絡み合う姿が映し出された。

奈美が偶然押したボタンは、有料チャンネルのボタンだったのだ。

「ちよつと奈美、一体何を押したの？」

「わ、分からないわよ」

顔を真っ赤にして慌てる二人。

高校生には、あまりに刺激的過ぎるものだった。

「とにかく、早く電源を消して………奈美？」

「……………ゴクリ」

奈美の視線は、テレビに釘付けだ。

「全く……………（ちらり）」

文句を言いつつも、秋乃もテレビが気になる。

二人もお年頃の女子。

そう言った事に、興味津々な訳で。

結局そのまま、二人はテレビ鑑賞を続けるのだった。

〈ハルの部屋〉

「ハックション、ハックション、ハックション、ハックション」

風呂上がり、突然くしゃみが止まらなくなった。
何処かで噂されているのだろうか。

「……ハックション、ハックション」

その割には、随分と続く。

「……風邪かな。確か柚子に薬を買ってたな」

鞆から薬セットを取りだし、風邪薬を飲む。

「旅行疲れたな、きつと。今日はもう寝るか」

ハルは一人寂しく、眠りにつくのだった。

翌朝。

チェックアウトの為、ハル達はロビーに集合した。

「……眠れ無かったのか？」

「は、ははは、ちよつとね」

「旅行で気持ちが高ぶってるせいかと思います」

真っ黒な隈を作った秋乃と奈美は、揃って苦笑いを浮かべる。

言えるはずがない。

エッチなテレビを見ていたら、いつの間にか朝になっていたなんて。

「帰りの飛行機で寝れると思うけど、辛かったら言えよ」

素直に信じたハルの視線が痛かった。

今日の予定は軽く観光をして、夕方の飛行機で日本に戻る。

観光するためのタクシーを待っている時、

「ねえ、秋乃ちゃんと奈美ちゃん。一つ教えてあげるね」

不意に菜月が声を掛けた。

「ホテルの有料チャンネルの料金は、チェックアウトの時に精算するのよ」

「……!!!」

二人は身体を硬直させる。

「一応成人向けだから、あんまり見ちゃ駄目よ」
ばれた。

親にエッチなテレビを見たことがばれた。
秋乃は思い切り凹む。

「でも、二人はお年頃だもんね。興味があっても仕方ないわね」
「お、お母さん。この事は……」

「勿論ハルちゃんには黙ってるわよ」
心底安心した。

もし知られてしまったら、まともに顔を合わせられない。

「あれ、そう言えばハルは……？」

「あそこよ」

菜月は少し離れた場所を指差した。

そこでハルは、

「何故見なかった。折角一人部屋にしてやったのに」

「何故怒られてるのか分からないけど、俺は見ないって言ったぞ」

「ならば何故、女子の部屋に忍び込まなかった。旅行の定番だろう」
が

「……俺がもし、秋乃と奈美の部屋に行ってたら？」

「無論、愚かな息子に鉄拳制裁を加えるのみ」

「納得いかねえええ!!」

理不尽なお説教に、朝っぱらから絶叫するのだった。

その後、ハル達は名所や美術館を巡り、予定の飛行機で日本へと戻った。

短い間だったが、ハル達にとって印象深い旅になった。

様々な想いを胸に、日本へと帰国する。

お土産を買うのを、完全に忘れたまま。

海外に行こう6へ立つ鳥後濁……したかも（後書き）

冬麻の話、脚色こそ入っていますが、大体合ってます。

本当はもう少し殺伐とした、ドロドロした話で、二人で逃げた後も色々あったので、冬麻なりの気配りで濁したと言っています。

有料チャンネルは、カード方式の方がばれにくいです。

家族で旅行に行かれる際は、是非お試し下さい。

今回の旅行は両親に会うのが目的と言うことで、観光はおまけ程度に。

これ以上間延びするのもあれですから。

日本に戻って、また日常話が続きます。

現実の季節感に追いつくために、そろそろ夏休みも終わりにしたいです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話へ二つ名持ってます？（前書き）

今日も平和なハピネス。

そんな中、奈美がまたもや妙な事を言い始め……。

小話へ二つ名持ってます？」

八月下旬。

夏休みも残り少なくなったある日。

事務所にやってきた奈美は、何やら難しい顔で考え事をしていた。

「何か困り事か？」

「あ、ハル。ちょっと気になる事があって」

「へえ、一体なんだよ」

「あのね、ハルは二つ名って持ってる？」

実に下らない事だった。

事の発端は数日前。

読書感想文の為、奈美はライトノベルを購入した。

何度も挫折そうになりながら、何とか読破したのだが。

「登場人物がね、みんな二つ名を持ってるのよ」

「……まあそう言うものだからな。てか読書感想文にラノベって…」

…

「でね、気になったの。みんな二つ名って持ってる物なのかなって」

「普通は無いと思う。あれはあくまでフィクションだから」

「ここで話は終わる筈だった。」

だが、

「でも、二つ名って格好いいわよね。欲しくない？」

奈美は予想以上に、ラノベにはまったらしい。

あまり良くない兆候だ。

「いや、俺は別に……」

「あらあらあ、今日も元気ねえ。何の話をしてるのかしらあ」

「あ、ローズさん。実は」

話に加わったローズに、奈美はいきさつを説明する。
聞き終わると、なるほどねとローズは頷く。

「二つ名ねえ。昔の事だけども、私も持ってたわよお」

「本当ですか!？」

嬉しそうに食い付く奈美。

「ええ。確かあ……『完璧な兵士』と呼ばれてたわあ」

「由来が聞きたくない……てか、それ二つ名じゃない気が」

「……格好いい」

げんなりするハルだが、奈美はうつとりした表情を浮かべる。

完璧にそっちの方向に染まりつつあった。

「良いな〜私も欲しいな〜」

「正気か？」

「別に勝手に名乗っても良いんじゃない？」

「んな無責任な!」

「自分でつけた二つ名があ、後で世に広まる何て事、良くある話よ

お

「成る程。無ければ作ればいい。確かにその通りですね」

奈美の暴走が始まった。

話をしている間にやってきたメンバーを捕まえ、二つ名命名式が
開催される。

「当然、最初はボスの千景さんよね」

「二つ名ですか……昔、勝手に呼ばれた名がありますけど」

「嫌な予感しかشませんが……因みにそれは？」

「『死刑宣告者』です。ただ私は認めてませんし、呼ばれたくあり
ませんけど」

聞かなきゃ良かったと、心底後悔した。

「じゃあ、千景さんの新たな二つ名を付けちゃいましょう」

ノリノリの奈美。

こつなつたら手がつけられない。

「千景さんのイメージにピッタリなのを、一人一個ずつ上げていきましよう」

一同は暫し考え、順に答えていく。

「万能超人、とか？」

「氷の女かしらあ」

「鉄面皮」

「知将とかどうでしょう……」

「金の亡者だろう。これ以外にありえん」

「……みんなが私をどう思っているのか、よく分かりました」
額に怒りマークをつけた千景に、一同は震え上がった。

「それじゃあ次は、ローズさんの二つ名を」

「……筋骨隆々かな」

「威風堂々でしょうか」

「質実剛健が適当だろう」

「金剛力と言うのは」

「筋肉ダルマで決まりだ」

「……少し、身体を絞ることにするわあ」

可愛らしさの欠片もない二つ名に、ローズは少し意気消沈する。

「お次は柚子さんですね」

「柚子は二つ名を持ってますよ。確か……」

「『神の手』だったわねえ」

医者としては文句ない二つ名だろう。

しかし奈美は納得せず、新たな二つ名を考えさせる。

「……小さい天使とか」

「小さな名医なんて良いかと」

「ちっちゃなお医者さんはどうかしらあ」

「山椒は小粒でぴりりと辛い、はどうだ」

「年齢詐称女、これで決まりだ」

「……牛乳飲んでるもん」

柚子が拗ねた。

「この調子で、紫音に行きましょう」

「……靈感少女かな」

「未完の神器、少し叔母馬鹿でしょうか」

「子供霊能者とかあ」

「地獄少女は如何でしょう」

「電波女だ」

「……これは何かの罰ゲームなのだろうか」

お気に召さなかったらしく、少し不満げな顔を見せる紫音。

まあ、気に入ったらそれはそれで大変だが。

「いい感じです。では蒼井のを」

「……マッドサイエンティスト」

「頭でっかち」

「頭脳の無駄遣いかしらあ」

「奇人変人博士」

「頭脳明晰な粗大ゴミ」

「……ぐすん」

意外に打たれ弱かった。

「さあラストスパートです。ハルの二つ名に行きましょう」

「凡人と奇人の狭間で」

「技術の模倣からあ」

「模倣物語」

「模倣の器はどうでしょう」

「モノマネ大百科」

「……なんか、本のタイトルみたいになってないか？」

趣旨が完全に変わってきていた。

「ではいよいよラスト。私の二つ名をお願いします」

「「脳筋!」」

心は一つだった。

「ぐっ、何か格好悪い。ほ、他のは何か……」

「「トラブルメイカー!」」

見事なシンクロだ。

だがしかし、奈美は何処か嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「……うん、ちょっと格好いい。よし、今日から私はトラブルメイカー奈美よ!」

「じ、自称しやがった」

「完全に自覚が無いみたいですね」

「そもそもお、トラブルメイカーが分かってないんじゃないかしら
あ」

「横文字だから格好良いと思ったのだろう」

「奈美さん……」

「ここまで割り切られると、流石に突っ込めんぞ」

呆れた顔で見つめる一同を余所に、奈美は幸せ一杯の笑顔。
こうして、自他共に認めるトラブルメイカーが誕生した。

その後、奈美は所員全員に二つ名を付けてまわった。

「経理の達人、鈴木」

「電話番の鬼、田中」

「書類整理の匠、佐藤」

「神速のブラインドタッチ、高橋」

「実は一番年上、渡辺」

絶対に外で呼ばれたくない二つ名を付けられた所員達。

この騒動は、奈美の熱が冷めるまで続くことになるのだった。

「……自分、特徴無いんでしょうか」

後日、渡辺を励ます会が開かれたことは、言うまでもない。

小話へ二つ名持ってます? (後書き)

何とも酷い話になってしまいました。

ちよっとした出来心だったんです……。

この間幻想殺しの小説を少し読んでしまったもので……。世界観って大切だなと改めて実感致しました。

日常話を交えながら、本筋も進めて参ります。

次回もお付き合い頂ければ幸いです。

事態は静かに動く(前書き)

千景の元に掛かってきた一本の電話。
果たしてその相手とは……。

事態は静かに動く

夜のハピネス事務所。

既に業務時間は終わり、事務員は皆帰宅している。

閑散とした事務所には、今千景が一人残るだけ。

静かな空間に、千景がタイピング音だけが聞こえてくる。

その作業も後僅か、と言うときだった。

静寂を破るように、電話の着信音が鳴り響く。

昔懐かしい黒電話を取り、受話器を耳に当てた。

「もしもし、こちら便利屋ハピネスでございます」

「あれ、この電話三丁目のラーメンやじゃなかったですか？」

電話から聞こえてくるのは、男の声。

「下二桁を確認下さい。間違えやすいので」

「あちゃー間違えちゃったか。すいません、綺麗な半月に見とれて
て」

「……結構です」

「ふう〜、久々なんで、ちょっと緊張しましたぜ」

男の雰囲気が変わる。

「それで、定時連絡外に貴方から連絡とは、何事ですか？」

「何、大した事じゃないんですが、ちよいとお耳に入れときたいネタ
があります」

「伺いましょう」

「……とある悪の組織が、ハピネスのことを調べてますね」

千景は僅かに眉をひそめる。

裏社会では、悪の組織の存在は周知されている。

規模や目的は様々だが、全般に非合法の手段を使う悪人集団。

そんな連中が自分の会社を調べている。あまり気持ちのいい話で

は無い。

「詳細を」

「調べてる悪の組織は一つ。カラーパレットと言う、まあ中堅どころですわ」

「聞き覚えがあります。あまり良い噂ではありませんが」

「最強の兵士を作り国家転覆を図るのを目的にした、一種のテロ集団ですね」

ますますもって、疑惑が深まる。

そんな悪の組織が何故、一便利屋であるハピネスを調査するのか。彼らはハピネスの何を調べてますか？

「すみません、そこまではまだ……」

「ふむ……貴方の所には？」

「うちとは別系統の情報屋を使ってるみたいですよ」

「ならば、心おきなくお願いできますね」

情報屋は情報を収集し、それを顧客に提供する職業。その性質上、信頼関係は極めて重大。

間違っても依頼の二股など許されない。

「引き受けましょう。何を、何故、で？」

「それに追加で、彼らの本拠地を突き止めて下さい」

「……少し高くつきますぜ」

「構いません。それが分かれば幾らでも手は打てます」

「おっかないですね。分かりやした、情報が入り次第連絡しますんで」

「朗報を期待します」

千景は受話器を静かに戻し、小さく息を吐く。

「悪の組織……穏やかではありませんね」

心当たりが全くない訳ではない。

ハピネスは一部で、少々危険な仕事に手を染めているからだ。

天才科学者である蒼井に、薬学研究でもその才を發揮する医者

柚子。

ローズや紫音にも、目をつけられる要素はある。
そして、千景自身にも。

「折角手に入れた平穩、守るためならば……」
千景は一人、決意を固めるのだった。

事態は静かに動く（後書き）

本来小話にする長さなのですが、本筋の内容でしたので。

お馬鹿な日常と、きな臭い非日常。

果たして、どのように交わっていくのでしょうか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

夏祭りに行こう(前書き)

夏休みの定番イベントと言えば夏祭り。
ハピネスは全員で遊びに行くことに……。

夏祭りに行こう

夏と言えば、夏祭り。

奈美の大プッシュと、一度も行ったことの無い紫音の希望もあり、「では、みんなで行きましょうか。夜なら仕事も片づいてますし」「ハピネスメンバーは、揃って夏祭りに参加する事になった。」

「うわ〜凄い賑わってるわね」

「芍薬商店街が力を入れている祭りですから。外からのお客さんも多いらしいです」

「そう言えばあ、参加した事無かったわあ。ハルちゃんは？」

「実は毎年参加してる。秋乃に連れられてな」

浴衣に着替えた一行は、ゆっくりと歩みを進める。

「なあハル。あれは何だ？」

「ん、ああ。金魚すくいだよ。紙で出来たぼいで、金魚をすくんだ」「すくった金魚を貰えるんですよ」

ハルと柚子の説明に、紫音は興味深そうに頷く。

「気になるならやってみたら？」

「うむ、出来ればそうしたいが……」

チラリと視線を千景に向ける。

「……世話をちゃんとするなら、構いませんよ」

「する、ちゃんとする」

必死に頷く紫音。

その様子は、どうみても年相応の女の子にしか見えなかった。

一行は金魚すくいの屋台へ。

「いらっしゃい。ぼい一個百円だよ」

屋台の親父に代金を渡して、紫音はぼいを受け取る。

水槽の前にしゃがみ込み、
ジャボン

思い切りばいを水中に突っ込んだ。

「……………」
当然紙で出来ているばいが、それに耐えられる筈無く、

「……………破けた」

一匹の金魚も掬うことなく、ばいは役目を終えた。
寂しそうな表情を浮かべ、ばいを見つめる紫音。
何とも言えない空気が漂う。

「あゝ、何だ、初めてなら仕方ないさ」

「そ、そうよ。誰だって最初から出来ないわ」

必死に励ますハルと奈美だったが、

「はゝ楽勝過ぎてつまんねゝぜ。おい親父、これいらぬから返す
わ」

その横で数十匹掬った茶髪の男が、嫌みな態度で腕を親父に突き
返す。

「全く、これが出来ない奴なんて居ないよな」

馬鹿にしたように紫音を見下ろし、その場を立ち去る。

紫音は何も言わない。

だが、手の持ったばいの震えで、心中を察するに充分だった。

「……………剛彦」

「私ちよつとトイレに行つて来るわあ」

千景と目配せして、すつとその場から離れるローズ。

紫音以外の全員が、小さく頷いてローズを見送った。

あつちはローズに任せておけば大丈夫だろう。

後は傷つけられた紫音のプライドだ。

「……………紫音、俺が手本を見せよう」

ハルは代金を渡してばいを受け取り、紫音の横にしゃがみ込む。

「水に極力漬けない、金魚は頭から掬う、これがポイントだ」

「なるほど……………」

「後はねらい目だ。水面にいてなるべく動かない奴が掬い易い」
ハルはなめらかな動きでぼいを操り、金魚を掬い上げる。
その様子をじっと見つめる紫音。

「……もう一度、挑戦するか？」

「うん、やる」

紫音の目に強い光が宿った。

慎重に狙いを定め、受け取ったぼいをハルのように扱う。

一匹の金魚が乗った。

だが、ぼいが耐えきれずに今にも破けそうになる。

「くっ……」

「手首で弾け！」

咄嗟に紫音は手首のスナップを利かせ、金魚を腕に飛ばす。

ぼいが破けると同時に、紫音の腕に一匹の金魚が飛び込んだ。

「「おおおおおお！！！」」

その光景に、ハル達だけでなく周囲の見物客からも歓声があがる。

「す、掬えた……掬えたよな？」

「ああ。見事だったよ」

紫音は安堵した表情で、腕の中を泳ぐ金魚を見つめる。

先程のやり取りを見ていた人達から、自然と拍手がわき起こった。

「おめでとう、お嬢ちゃん」

「あ、ありがとう」

親父が金魚をビニール袋に入れ、紫音に手渡す。

愛おしげにそれを受け取る様子に、ハル達も思わず笑顔になる。

「……どうやら、問題解決したみたいねえ」

「ご苦労でしたね」

「ちょっとお灸を据えてきたからあ、もう大丈夫だと思っわよあ」

「最近、マナーを知らない若者が増えて困りますね」

「全くだわあ。お祭りはみんなが楽しむ場所なのにねえ」

紫音初の金魚すくいには、色々な人に支えられて無事に終わった。

続いて一行が立ち寄ったのは、型抜き屋台。

お菓子を上手にくり抜けば、景品が貰える遊び。全員が挑戦したのだが。

「あゝ割れた」

開始数秒で奈美がリタイア。

「む、割れてしまった」

慎重に進めていた紫音も、曲線部で失敗。

「ぬううう、まさか吾輩が……」

後僅かの所で、蒼井が痛恨のミス。

続々脱落するメンバーだが、

「っと、これでクリアだな」

ハルが簡単な型抜きを成功させる。

「私もです。職業柄、手先は器用なんですよ」

柚子も続く。

「よゝし、私も終わったわあ」

ローズが中級レベルの型抜きを、見事完遂した。

残るは千景だが、

「あれ、まだ始めてないんですか？」

何故か手をつけていない。

「みんな終わりましたね。では……」

千景は爪楊枝をお菓子に突き刺し、ピンと指で弾く。

パライイイン

乾いた音を立てて、お菓子は崩れ、後には完璧にくり抜かれた型が残った。

「「んなアホなああ！」」

「まあ、コツさえ掴めばこんなものです」

呆然とする店主から景品を受け取り、千景は優雅な笑みを浮かべる。

「多分一生かかっても、それは掴めません」

ハルの言葉に、その場にいた全員が頷くのだった。

次の屋台はくじ屋だ。

無数のひもの中から一本を選んで引き、先端に結ばれていた商品を貰える遊びだ。

上位の商品は、ゲーム機などかなり良い物が揃っているのだが。

「……当たらないんだよな、これ」

「まあねえ。それが分かつてる大人はあ、誰も手を出さないものお」
「何故だ。くじなら運次第では無いのか？」

「大人の事情と言うものです。大多数の子供は、これで世間の厳しさを学ぶのです」

ハルも子供頃は純粹に信じていたものだ。

今思えば、あの時両親が苦笑していたのは、全てを知っていたからだろう。

ここはスルーしようとしたのだが、

「あの〜私やってみても良いですか？」

柚子が申し訳なさそうに手を挙げる。

「実は私、一度もやったこと無いんです」

「まあ、物は試し。話のネタに一度くらいは良いんじゃないか」

ハルの言葉に頷き、柚子は代金を払ってひもを一本選ぶ。

そして、

「あああああああ!!!」

ハル達と店主が同時に驚きの声を挙げた。

柚子が見事、一等の最新ゲーム機を引き当てていた。

「これ、一等ですよ。やりました」

「ば、馬鹿な。それはひもに繋がって無いはず……」

それは言わないお約束のように。

「えへへ、得しちゃいました」

「……強運にも程があるだろう」

「豪運、ここに極まれりねえ」

そんなハル達のやり取りを余所に、景品を受け取る柚子。

店主の親父は思い切り凹んでいるが、そんな悲観する事はない。

何せ、今のやり取りを見ていた子供達が、目を輝かせて待っているのだから。

「まさにサクラだな。この女、悪事の片棒を担いだぞ」

「こうやって、子供は学ぶんです。お金の尊さをね」

大勢の子供で賑わうクジ屋を、ハル達はすぐすごと立ち去った。

食べ物屋台を数軒巡り、訪れたのは射的の屋台だ。

コルクを飛ばし、並んだ景品を棚から落としたり、それを獲得出来る。

景品は多種多様で、ゲーム機やぬいぐるみから小物まで並んでいた。

多くの客で賑わう屋台に、鬼が一人現れる。

「「おおおお」」

一つ、また一つと景品が落とされ、その度にギャラリィから歓声が沸く。

正確無比な射撃を披露するのは、「完璧な兵士」ことローズだった。

「す、凄いな。何かコツとかあるのか？」

「そうねえ。銃の癖を掴む事とお、景品の重心を正確に打ち抜く事かしらあ」

「なるほど。参考になる」

なるわけがない。

ローズだからこそその技だ。

ハル達も適当に楽しんでいると、

「つて、つと、やつ、ああ、もう、全然駄目だわ」

「随分苦戦してるけど、何狙ってるんだ？」

「べ、別に何も」

奈美はハルの問いかけに、口笛を吹いて誤魔化する。
今日子供でもやらないだろうに。

「……あのぬいぐるみか」

奈美が集中的に狙っていたのは、大きな熊のぬいぐるみ。

目玉商品の部類で、あれを落とすのはかなり難しい。

さつきから命中してはいるのだが、僅かにぐらつくだけで落ちる
気配は全くない。

「ふむ……」

ハルは暫し考える。

アレを一人で落とすのは厳しい。ならば、協力者が必要だ。

「千景さん、ローズ、ちょっと手伝って貰って良いですか？」

「あらあ、何かしらあ？」

「実は……ごによごによ」

ハルは二人に頼み事を伝える。

「へえ、面白いじゃない。私は構わないわよあ」

「私も問題ありませんが、そんなにあれが欲しいんですか？」

「俺と言つよりも、奈美がさつきから狙ってますして」

「あらあら、それは余計気合い入っちゃうわねえ」

「分かりました。ただ、ハル君は射的得意ですか？」

「……目の前に、絶好のお手本がいますので」

千景は納得の表情を見せる。

勇者達の協力を得て、ハルは巨大ぬいぐるみに挑む。

三人が一行に並び、照準を合わせる。

「じゃあ行きますよ。三、二、一……」

ポンッ

三つのコルクが、同時に放たれた。

一本の矢より三本の矢、と昔の偉い人が言っていた通り、三つの
コルクは強力だった。

不動と思われたぬいぐるみが、大きくぐらつき、そして。

「おおおおおおお！！！！！」

今日一番の歓声と共に、見事柵から落とされた。

「うん、いい感じだったわよお」

「よい仕事でした」

「二人とも、ありがとうございます」

ハルは二人に礼を言い、店主からぬいぐるみを受け取る。

そしてそれを、ポカンとしている奈美に手渡す。

「ほい、やるよ」

「べ、別にいらないわ……」

「そうか。奈美にプレゼントしたかったけど、いらなら仕方ないか……」

「でも……どうしても言うなら、貰ってあげても良いわよ」

「……じゃあ、どうしても」

ハルが優しく微笑むと、奈美は真つ赤な顔を隠すように、ぬいぐるみを抱きしめた。

嬉しさを隠しきれずに、笑みがこぼれる。

そのやり取りに、周囲はさっきまでと違う意味でざわつく。

「あれ、天然かしらあ」

「だとしたら、天性のジゴロですね」

「奈美が嬉しそうで何よりだ」

「……落ちましたかね」

「まだ土俵際だな。だが、かなり押し込んだと見えるな」

好き勝手言うハピネスメンバー。

だが、奈美の笑顔と引き替えなら安いもの、とハルは本気で思っていた。

祭りの締めは、やっぱり花火。

夜空を彩る火の華に、参加者達は目と心を奪われる。

日本人で良かったと思える瞬間だ。

「はあ〜これは見事だな」

「やっぱり花火は打ち上げに限るわねえ」

「……あれ、蒼井は？」

「打ち上げに参加してます。ドクターも自家製花火を提供している
ので」

「役に立つこともあるんですね」

蒼井が柚子に認められる日は、果たして来るのだろうか。

色とりどりの花火を眺めていると、

「……あの、ハル」

隣に立つ奈美が不意に声を掛けてきた。

「どうかしたか？」

「あのね……その……ありがとうね」

一瞬考え、それがぬいぐるみの礼だと気づく。

「別に良いよ。俺がプレゼントしたかったただだから」

「でもやっぱり、ありがとう」

「まあ、気に入って貰えたら俺も嬉しいよ」

「勿論。私これ、家宝にするわ」

由来を聞かれたら恥ずかしいので、それは止めて欲しい。

「それでね、何かお礼をしたいんだけど……」

「気にしなくて良いって」

「私の気が済まないの。何かして欲しい事ってない？」

「……頑張つて勉強して欲しいかな」

「むうううう、それ以外で」

「……なら、ずっと元気で、笑顔で居て欲しいかな」

「えっ!？」

「お前が笑つてると、俺も楽しい気持ちになるから。ずっと笑顔を
見せて欲しい」

「そ、それって……」

何故か奈美は困惑した表情。

おかしい事を言っただつもりが無いハルも、つられて困惑する。

「ずっと、って事は……つまり……」

奈美が言葉を続けようとした瞬間、

ドオオオオオン、バアアアアアン、ドカアアアアン

明らかに花火とは違う爆音が、夜空に響いた。

「な、何だ!？」

異変に気づいたのか、周囲の観客達もざわつく。

「……剛彦、これは」

「戦場で良く聞いた音だわあ」

と言うことは。

ポンポンパンポーンと、アナウンスが流れる。

『ご来場のお客様に、お知らせ致します。』

只今、花火に混じっていた対空ミサイルを打ち上げてしまいました。
た。

幸い、被害はありませんでしたので、ご安心下さい。

下手人は運営委員会が、既に捕縛しております。

引き続き、夜空を彩る花火をお楽しみ下さいませ』

アナウンスが終わる。

観客達は沈黙の後、

「「「楽しめるかああああ!!!」」」

再び夜空に上がった花火に、一斉に突っ込みを入れるのだった。

夏祭りは、最後に大波乱を起こして終わった。

因みに蒼井は、人知れずパトカーで連行されて行く。

「誤射だ! ちょっと間違っただけだああ!」

「ミサイルを所持している時点で、アウトですから!」
美園さん、お疲れさまです。

夏祭りに行こう（後書き）

夏祭りって楽しいですよね。

建ち並ぶ屋台を見るだけで心が騒ぐのは、やはり日本人の血でしょうか。

今回は久しぶりにハルが活躍しました。

子供の頃から秋乃に、あれこれせがまれた事が功を奏した形です。

ハルと奈美の関係は、少しずつ変わりつつあります。

敵対 知人 友達 信頼 ？。

どのような結末を迎えるのか、お楽しみに。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幸せの後にも試練がつきもの(前書き)

夏休み最終日。

と言えば何が起こるか……ええ、お察しの通りです。

幸せの後にも試練がつきもの

八月三十一日。

夏休み最終日だ。

と言つても大学生であるハルの休みは、九月も続く。

今日も何時も通りハピネスで依頼を受けようとしていた時だった。

「ハ〜ル〜。助けて〜〜」

ノックもせずにドアを開けて飛び込んできた奈美。

「お前な、せめてノックくらいしろよ」

「そんな場合じゃないの。大変なのよ〜」

「……何かトラブルか？」

「そう、そうなの。大変なことが起こったの」

ただならぬ奈美の様子に、ハルは話を聞く姿勢を取る。

「で、何が起こったんだ？」

「今日で夏休みが終わりになのに、宿題が全然終わってないの!」

「……さて、事務所に行こうかな」

「み〜す〜て〜な〜い〜で〜」

外に出ようとするとハルの腰にしがみつき、必死に懇願する。

「あんな、どう考えても自業自得だろ」

「分かっているから。反省してるから。次からちゃんとやるから〜」

「そう言う奴ほど、同じ事を繰り返すんだよ」

「ううう、お願いよ〜。次は絶対やるから。約束する」

涙目と上目遣いのコンボ。

流石のハルもそれには抗えず、

「はあ〜仕方ないな」

奈美の頼みを飲むことにした。

「それで、後どれくらい残ってるんだ？」

「えっと……」

数学ドリル、自由研究、工作、日記、裁縫 e t c ……。
次々に告げられる宿題の山。

「ちよつと待て、お前どれくらい宿題やったんだよ」

「……読書感想文だけ」

「そう言えばラノベ読んでましたね。」

「……さて、事務所に行こうかな」

「お願い〜手伝って〜」

「どう考えても俺が手伝っても終わらん。諦めて怒られるんだな」

「そこを何とか」

「秋乃に写させて貰えば良いだろうよ」

「……もうとつくにお願ひしたわ。でも……」

「秋乃、宿題写させ……」

『私はこの間の登校日に提出したから、手元に無いわよ』

「って。酷いよね」

「我が妹とは思えぬ抜かりなさだな」

「うっ、祟ってやる」

「完全に八つ当たりだ。まあ、素直に諦めて……」

「……なら、沢山の人に手伝って貰えば良いのよね」

「おい、まさか……」

「ふ、ふふ、ふふふ、こうなったら、他力本願を極めるのみよ!」

格好悪い台詞を格好良く叫び、奈美は作戦を行動に移すのだった。

「と言うわけで、皆さんにはこれから、私の宿題を手伝って貰います!」

満面の笑顔でとんでもない事を宣言する奈美。

ハピネス一同も呆れ顔で見つめるのだが、

「依頼か……」

正式な依頼として出された以上、反論は封じられてしまった。

「千景さん、どうしてこんな依頼受けたんです？」

「少々事情が変わりまして、この依頼は私達の為にも必要でしたから」

「それは？」

「……とにかく、依頼を受けたからには、全員全力で完遂なさい。いいですね！」

「「イエス・マム！」」

究極の他力本願、宿題の手伝いが始まった。

まずは状況分析。

果たすべき宿題を正確に把握する。

「数学のドリルが二冊。一冊百ページちよつとだから……かなりきついな」

「自由研究は三十枚以上のレポートですか」

「身近な物を使っての工作を一品提出。小学生みたいねえ」

「日記帳。当日の天気を書かせる辺り、対策してますね」

「英語もドリルだな。こちらは一冊で百五十ページ。かなりの密度だぞ」

「これは……聖書の写本を作るだと。何日掛かると思ってるんだ」

「家庭科は料理を作って、レシピと写真、レポートを纏めて提出……」

「地理は好きな国を選んで、その国の歴史を五十枚以上のレポートに……」

その他モロモロ、とにかく凄まじい量だ。

これをおつさり終わらせた妹に、ハルは今更ながら感服する。

状況分析が終わったら、作戦立てだ。

各々得意分野を分担する。

「みんな……ありがとう！」

奈美は深く一礼すると、山のように積み上がった宿題を手に、学校へと向かった。

「おはよう、秋乃」

「お、おはよう……随分ご機嫌ね」

「えへへ、だってほら、宿題全部やってきたからね」

「あれから全部やったの？」

「えっへん。やれば出来る子なのよ」

今ここにハル達が居たら、全力で突っ込みを入れたらう。

だが残念ながら彼らは夢の中。

世の不条理がかいま見える瞬間だった。

「……ハピネスの皆さん、お疲れさまです」

顔も知らぬ犠牲者達に秋乃は本気で同情した。

数日後。

「それで、結局駄目だったのか？」

「うん。他の人にやって貰ったのがばれたの」

「まあそりゃそうだな。筆跡とかバラバラだし」

「そうじゃ無いの。ばれたのは、自由研究と工作が原因よ」

「??????」

『提出した内容があまりに専門的で、しかも革新的な技術だったらしくて……』

「まさか……」

『色んな研究所とかから、是非うちで働いてくれってスカウトが押し寄せちゃって』

「担当は柚子と蒼井か。有り得る話だな」

『それで他の人がやったってばれちゃったの』

「……じゃあ、奈美は？」

『一応他の宿題はやってたって事で、罰は軽減されて構内清掃一ヶ月で済んだわ』

「自業自得だな。ん、軽減されてって、元々の罰は何だったんだ？」

『……強制的に入寮させられて、補習漬けの毎日』

それを聞いて、ハルは納得した。

何故奈美があれほど、必死だったのか。

何故千景が奈美の依頼を受けたのか。

「今の生活を守るため、か」

『奈美にとって、今の生活は本当に大切な宝物みたいね』

「……次からはちゃんと自力でやらせるよ。宝物なら、尚更自分で守らなきゃな」

『……お兄ちゃんにとってもね』

「ん、何か言ったか？」

『別に何も。それじゃあ、またね』

通話を終えたハルは、近所のスーパーに行くことにする。

きつとお腹を空かせて来る奈美に、少し良い晩ご飯をご馳走するために。

長い夏休みが終わり、季節は秋に移っていく。

幸せの後にも試練がつきもの（後書き）

冷静に考えると、夏休みの宿題が一番きつかったのは、小学校の頃だった気がします。あの量は異常だったなと。

夏休みも終わり、いよいよ暦の上では秋に突入。そろそろ現実の時間軸に追いついて参りました。

一応、一年でこの話の区切りをつけようと考えています。そろそろペースアップしないと、と気合いを入れ直し頑張ります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

納涼百物語をしよう(前書き)

九月に入っても、残暑が厳しい今日この頃。
そんな暑さを吹き飛ばす妙案があるよう……。……。

納涼百物語をしよう

「第一回、怪談で暑さを吹き飛ばせ。ハピネス納涼百物語大会！」

「「おおおおおお！！！」」

夜のハピネス事務所に、雄叫びが響き渡った。

「怪談やるのに、何でテンション上げるんだよ……」

「おや、ハル君はあまり乗り気では無いようですね？」

「幽霊見てから、こういった話が身近に感じられちゃって……」

割と本気で困っていた。

事の発端は今日の昼間。

暑い夜を過ごしやすくする方法を、みんなで話している時だった。怪談は割と良いかもしれませんが。人は精神的な恐怖で体温が下がりますから」

柚子の一声が全ての始まり。

みんな話には聞いていても、実際怪談をやったことがなかった。折角だからと、あれよという間に話が纏まり、今に至る。

「因みに、この畳は何処から？」

「倉庫にあった物を運び込みました」

「何でもあるんですね」

ハルは事務所の床に並べられた畳に座りながら、呆れ半分に呟いた。

床に敷かれた畳、火が点けられた百本の蠟燭、そして、

「……あれは何だ？」

ハルは事務所の壁に飾られた、白い紙の飾りに気づく。

「私が設置した物だ」

「紫音が？」

「百物語は少々危険が伴うからな。簡易だが結界を張らせて貰った。そこまでされると、逆に不安になるのは何故だろう。ともかく、準備は整ってしまった。」

そして、百物語は始まった。

「最初は誰から行きます？」

「……じゃあ、私が先陣を切ろうかしらあ
スツと手を挙げたのはローズだった。」

「ローズの怪談か……これはきつそうだな」

「えっとお、怖い話をすればいいのよねえ？」

「はい。それでは、お願いします」

「では……コホン。これは、私が十年以上前に実際体験した話よお」
咳払いを一つ、ローズは静かに語り始めた。

~~~~~

私は当時、とある軍の部隊に在籍してたの。

三十名ほどの部隊は精鋭でね、今まで数々の作戦を成功させてきたわ。

今回の任務である、敵の前線基地強襲作戦も、問題なくこなせるはずだった。

「隊長、全員配置に着きました」

「ご苦労。定刻通り、二二　をもつて、作戦を開始する」

「了解！」

私の役目は狙撃班。部隊から少し離れて、作戦開始の号令を待ったわ。

でも、それは永遠に訪れなかった。

「敵襲！ 敵襲！」

「馬鹿な！ 何故背後から敵が……うわああああ！！」  
安全なはずの後方から、突然敵が奇襲を掛けてきてね。

必死に応戦したけど、前後を敵に挟まれた状態では勝ち目は無かった。

「隊長！！」

「タケ、お前だけでも逃げろ」

「出来ません。自分も最後まで戦い抜きます！」

「命令だ！ お前はこの場を離脱して、本部に状況を連絡するんだ」

「し、しかし……」

「お前はまだ若い。この戦いの結末を見届ける義務がある。分かるな？」

「……了解しました」

私は隊長に敬礼をすると、全力で逃げたわ。

無我夢中に、なりふり構わずにね。

銃声、怒号、爆発音の中を、とにかく駆け抜けた。

自分が今どこにいるのかも、何処に向かっているのかも分からなくなつて。

やがて私は、戦場から離れた川岸で意識を失つたわ。

「おい、おい、生きてるか？」

倒れた私は、運良く友軍に見えられて、救出された。

そして、全てを知つたわ。

あの奇襲は、部隊をよく思わない一部の将官が、敵に情報を漏らしたことが原因だったこと。

私の部隊は、全滅したこと。

その後、別の部隊に編入され、終戦まで生き残つたわ。

~~~~~

「本当に怖いのは、人間の嫉妬だって話よお。どう、怖かつたあ？」

「重いわ！！ しかも怖い違いだ！！」

綺麗に突っ込みが八モつた。

「妙にリアルだから、少し感情移入しちゃったぜ」

「幽霊よりも怖いのは人間、ある意味真理かもしれませんね」

千景が妙に共感を覚えているようだが、あえて突っ込まない。

「これで私の話は終わりよお」

「確かに怖い話ですが……何か違う気が……」

残る蠟燭は、九十九本となった。

「で、では気を取り直して、次は誰が話しますか？」

「はい、私話します」

元氣一杯に名乗りを上げたのは奈美だった。

「……大丈夫か？」

「任せてよ」

自信満々に胸を叩く奈美に、一抹の不安を感じずにはいられない。

「じゃあ、行くわね」

奈美は静かに語り始めた。

~~~~~

ある家に、赤ちゃんが産まれたの。

その家は代々お酒を造る家柄で、跡継ぎの誕生を一族揃って喜んだのよ。

夫婦だけでなくて、お爺ちゃんお婆ちゃんも、よく面倒を見てたわ。

愛情を一心に受けた赤ちゃんは、すくすく成長したの。

そんなある日、ようやく赤ちゃんが言葉を憶えてね、みんな喜んだわ。

最初に赤ちゃんが喋った言葉は、

「お・か・あ・さ・ん」

だったわ。

最初に呼んで貰えたことを、その母親は家族に自慢してたんだぜ。

次の日、母親は死んだわ。

外傷は一切無く、原因不明の病死で警察は処理したの。  
悲しむ家族の中、あかちゃんが再び喋ったわ。

「お・じ・い・ちゃ・ん」

そして次の日、今度は祖父が死んだの。

母親と同じく原因不明の病死。

家族は少し赤ちゃんが怖くなった。

ひよつとしたら、この子に名を呼ばれると死んでしまっんじゃないかって。

次に呼ばれたのは、旦那さんの弟、つまりおじさん。

翌朝、おじさんも死体で発見されたわ。

やはり原因不明の病死。

予感確信に変わり、残った旦那さんとおばあさんは大層怯えたわ。

この子は死を呼ぶ子供だと。

そして次に赤ちゃんが喋ったのは、

「お・と・お・さ・ん」

旦那さんの顔は恐怖に引きつっていたわ。

でも、旦那さんは死ななかった。

やっぱりこれは偶然だったのか、と自分の母親と抱き合って安心する旦那さん。

その時、隣家に住むおばあさんがやってきて、こう言ったの。

「私の息子が死んだ」

てね。

~~~~~

「どう、怖かった？」

「確かに怖い話だけど……最後完全にブラックジョークだよな」

「千景よ、結局どういう事なの？」

「赤ちゃんの母親は不貞を働いており、本当の父親は隣の家の息子

だったのです」

なるほど、と頷く紫音。

情操教育に良くない話だった。

「赤ちゃんのその後が気になるわねえ」

「あ、それなら、声帯を切って喋れなくしたんですよ」

「何故知ってる!？」

「だって、これ私の地元であつた本当の話ですから」

「……やべ、今本当に怖くなった」

他のメンバーも同様らしく、小さく身体を震わせている。

予想に反して、奈美の怪談は充分すぎる効果を発揮したのだった。

「な、なかなかの怪談でしたね。この調子で次に行きましょう」

「ふん、ようやく吾輩の出番だな」

「あれ、蒼井は服役中じゃ無かつたのか？」

「ミサイル事件で警察にご厄介になつてはるはずだが。」

「恩赦が貰えたのだ。あのミサイルの技術を自衛隊に提供してな」

お勤めご苦労様です。

「では話そう。吾輩が実際に体験した、見も凍るような話を」

蒼井の怪談が始まつた。

~~~~~

死体洗いのバイト、は一度は耳にしたことがあるだろう。

ホルマリンプールに入った死体を、棒で沈めるあれだ。

都市伝説とか言われているが、あれは実在する。

吾輩は大学の教授から紹介され、一度だけ引き受けたことがあつた。

発明には金がかかる。高額なバイトは魅力的だったからな。

「ふん、退屈な仕事だ」

作業自体は極めて単純で簡単なものだ。

幽霊など信じぬ吾輩にとって、退屈な方が苦痛だった。



数時間経ち、もうすぐ交替だと言ったときに、それは起きた。

「む、交替が来たな。楽な仕事だった……ぬ、おおおお」

足を滑らした吾輩は、頭を強打して気を失い、ホルマリンプールに落下した。

意識を取り戻した吾輩は、慌てて浮き上がるうとする。

だが、

「あら、生きのいい死体がありますね。えい」

交替に来た奴が、吾輩を死体と間違えて、棒で水中に押し戻そうとしたのだ。

(違う、吾輩は生きてるんだ)

「死にたてでガスが溜まつてるんですかね」

容赦なく棒で突かれ、吾輩はどうしようもなかった。

酸素を全て吐き出し、万事休すかと言ったとき、

「あれ、でも白衣を着てる？ ひよっとして生きてます？」

交替員がようやく気づいた。

薄れ行く意識の中、吾輩は地下から地上の病院に搬送され、九死に一生を得たのだ。

~~~~~

「今思い出しても恐ろしい話だ」

身体を抱きしめて震える蒼井。

味わった本人にしか分からない恐怖なのだろう。

つまり、聞いていたハル達には、全く伝わらなかった。

「む、何だその顔は。怖かっただろ？」

「……え、ええ、まあ」

曖昧な返事をするしかない。

正直に言えば、また面倒なことになるから。

「……」

「柚子、どうかしたか？」

「えっとですね、蒼井さん。先に謝っておきます、ごめんなさい」

突然頭を下げる柚子。

「何だいきなり。お前が謝るなど、明日は雹が降るぞ」

「蒼井さんを沈めたの、私です」

「お前かああああああ!!!」

衝撃の新事実だった。

世間は狭い、本当に。

その後も怪談は続いた。

メンバーが順々に怪談を披露し、蠟燭を減らしていく。

そして、残り十本になったとき、ある問題が起きた。

平たく言えば、ネタ切れだ。

稲川さんレベルならともかく、一般人のストックには限界がある。

どうしようかと一同が困っていると、

「そう言えば、紫音はまだ話してないよね?」

奈美が不意に気づいた。

確かに今まで紫音は聞き手に徹している。

専門家なら、かなり怖い話が期待できる筈だが。

「ねえ紫音。今まで出た話以外に、何か話を知らない?」

「多少は持ち合わせているが、あまり気がすすまん」

紫音は困ったように言う。

「えゝ聞かせてよ。ね、お願い」

「むう……………仕方ないな。あまり話は得意で無いから、期待するなよ」

「(ワクワク、ドキドキ)」

渋々了承する紫音に、一同は期待の眼差しを向ける。

怖い物見たさ、と言う奴なのだろう。

「では語るか……………それは、そう。今日みたいに暑い日、百物語をしている者達が……………」

「……………そして、最後には誰も残らなかった」
紫音は語り終えると、ふっと蠟燭を一本消した。
「ん、皆黙り込んでしまったな。やはりつまらなかったか」
無言のメンバーに、紫音は寂しそうに呟く。
だが、それは違う。

「（ガクガク、ブルブル）」
みんな、あまりの恐ろしさに口が利けなかったのだ。

「し、紫音……………それ……………作り話だよな？」

「お願い、そうだと言って。う、うつつ」

「申し訳ないが、私は創作話が出るほど器用ではないので、当然実話だ」

だめ押しされ、一同は恐怖に震える。

「ふ、ふふ、なかなか良い怪談でしたね……………」

「あ、あらあ、千景ちゃん、強がってるけど……………どうして後ろを振り返らないのぉ？」

「き、気のせいじゃ無いですか？ 私は別に……………剛彦こそ」

「べ、別に……………後ろにあれが居るなんてえ、し、信じて無いわよお……………」

「無理だ……………この話を聞いて後ろを振り返る事など……………無理だ……………」
トラウマが産まれた瞬間だった。

「結局、私の話は楽しんで貰えたのだろうか」

「充分すぎる位だ……………うつつ」

「そうか。ならば、残りの九本、私に任せて貰おうか」

「「ひいひいひいひい！！」」

「今回は控えめだったからな。次は少し怖い話をするでしょう」
死刑宣告だった。

「では語ろう。あれは、今日のように月のない夜の事……………」

「……………彼の死に顔は、恐怖で引きつっていたそうだ」
最後の蠟燭を吹き消し、百物語は終わった。
終わったのだが、

「（……………）」

もはやハル達の精神は完全に、恐怖に飲み込まれていた。
「そんなに心配せずとも、幽霊は出ないぞ。対策を立てておいたからな」

ずれたフロアを入れる紫音。

しかし、それに突っ込みを入れる力は、誰にも残っていなかった。
「で、では……………これにて……………解散しましょう。全員、頑張って帰宅して下さい」

好奇心は猫を殺す。

二度とやるまい、と紫音以外の全員は固く心に誓ったのだった。

アパートに辿り着いた時、奈美が不意に切り出す。

「ね、ねえハル。お願いがあるんだけど……………」

「何だ……………？」

「今日……………一緒に寝てくれないかな？」

普段なら当然断るのだが、

「し、仕方ないな。今日だけだぞ」

あっさり了承する。

正直一人で眠れる気がしなかったので、正に渡りに船。
臆病者と言う無かれ。

あの話を聞いて一人で寝れる人間なんて、存在しないはずだ。

二人はハルの部屋で、同じ布団に入る。

本来ならドキドキの展開になるはずが、欠片も邪な気持ちが沸いてこない。

身体を密着させ、恐怖に耐えながら眠ろうとしたが、

「……暑いね」

「……暑いな」

二人がくつついていれば、それは暑いに決まってる。

そもそも何のための百物語だったのだろうか。

恐怖と暑さで、二人は眠れぬ夜を過ごすのだった。

「……紫音」

「む、どうした千景？」

「トイレに行きたくありませんか？」

「私は別に……」

「行きたいですよ。なら私が着いていってあげましょう」

「……………」

紫音の怪談は、各地に被害をもたらしたのだった。

納涼百物語をしよう（後書き）

まず最初に謝ります。ごめんなさい。

全然怪談話では無かったですね。

一番怪談ばい奈美の話は、作者がこの間実際に怪談大会で聞かされた話です。

ネットで検索すると、割と有名な話らしいですね。

笑話の筈なのに、何故か薄気味悪さを感じる怪談でした。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

柚子の秘薬（前書き）

事務所に響いた歓喜の声。

その発生源は、何やら上機嫌の柚子だが……。

柚子の秘薬

「遂に出来ました」

ハピネス事務所の奥にある研究室から、柚子の声が響き渡る。

何事かと一同が視線を向ける中、ゆっくりと研究室のドアが開かれ、柚子が現れた。

ニコニコと満面の笑みを浮かべ、ご機嫌であるのが一目で分かる。柚子、一体何が出来たんだ？」

「よくぞ聞いてくれました。私が長年研究してきた秘薬が、遂に完成したのです」

ハルの問いかけに、柚子は薄い胸を張って答える。

「そりゃ良かったな……で、どんな薬なんだ？」

「名を「チート君1号」。強制成長促進薬です!!」

某青狸ロボットのようになり、薬を高々と掲げる。

それを見て、事務所にいる全員は同じ事を考えていた。

(絶対、ろくな事にならない)

「人が成長するメカニズムを解明し、それを人工的に促進する働きがあります」

「それってえ、かなり危険なんじゃない？」

「うむ。人為的な成長、身体に歪みが出ると思われるが」

ローズと紫音が疑問を口にする。

「副作用は覚悟の上です。ですが、もはや後戻り出来ないのですよ」
「……柚子、そこまで追いつめられていたとは」

「早まるな。もし命の危機に関わる副作用なら、成長したって意味無いだろ」

「そうですね。大体試しもしないで飲むなんて、自殺行為です」

ハルと奈美が必死に説得をする。

奈美のは説得ではない気がするが……。

「……奈美さんの言うことはもつともですね。動物実験はクリアしましたか」

人体実験はまだらしい。

柚子はキョロキョロとハル達を見回して、うん、と頷いた。

「と言うわけで蒼井さん。グイッと飲んでください」

「何でああああ!!」

「大丈夫。一口だけなら、精々五年分の成長しかしませんし」

「そう言う問題じゃない。何故吾輩がそんな得体の知れない物を飲まねばならんのだ!」

「もつとも。正論です。」

しかし、暴論は時に正論すら押しつぶす。

「誰かが飲まなければならぬんです。だったら、蒼井さんが適任ですから」

「異議を申し立てるぞ!」

「異議は却下します。と言うわけで、さあグイッと」

「誰が飲む……な、貴様ら……まさか裏切るつもりかっ!？」

逃げようとする蒼井の身体は、ハル達によって取り押さえられた。

「すまん蒼井。お前の犠牲は無駄にしない」

「女の子に飲ませる訳には行かないでしょ。頑張ってねえ」

「貴様らああああああ……ゴクゴクゴクゴク」

叫んでしまったのが運の尽き。

大きく開かれた口に、虹色の液体が容赦なく流し込まれた。

「即効性ですから、効果は直ぐ出る筈です」

「……ちよつと待ってくれ。あれって、一口で五年分成長するんだよな?」

「ええ、概算ですけど」

「蒼井、今凄い量飲んだぞ」

「……………」

気まずい沈黙が事務所を包む。

「……ねえ千景。蒼井さんって、今何歳？」

「確か、今年三十三だったかと」

「……うん、大丈夫。老衰ギリギリで踏みとどまるはず」

「ごめんドクター。」

本当にごめん。

十秒ほどすると、突然蒼井が悶え苦しみ始めた。

「ぬ、ぬぬぬ、ぬおおおおお！！！！！！」

うめき声に合わせるように、身体も次第に変化していく。

髪の色、皮膚、筋肉、その他モロモロが凄まじい速度で老化する。

一分も経つ頃には、

「……蒼井……」

若き奇人科学者の姿は何処にもなく、ただ一人の老人がそこに居るだけだった。

もはや喋ることすら困難なのか、何か言いたげにハル達に視線を送る。

「な、何も言えない」

「これはちよつとお、洒落にならないわねえ」

「流石に……可哀想かも」

哀れみの視線で蒼井を見るハル達。

同時に、自分が飲まなくて良かったと心底思っていた。

「それで柚子殿、これは元に戻るのか？」

「試作品ですから、当然戻っちゃいます。効果は十分ほどだと思いますよ」

それを聞いて一安心。

このままでは、幾らなんでも夢見が悪すぎる。

「とにかく、効果があるのは実証出来たみたいですね」
充分すぎるほどに。

「ふふふ、では満を持して、私が飲みましょう」

柚子は危険な笑みを浮かべて、虹色の液体を見つめる。

そして、ゴクゴクと二口飲んだ。

「十年分か……」

「さあ、私の本当の姿を見せてください！」

しかし、何も変化が起きない。

時計を見ると、既に三十秒ほど経過しているのに。

「何も……起こらないですね」

「そんなはずは……」

予想外の展開に動揺する柚子。

「薬の量が足りなかったのかも。後少し、ゴクゴク」

更に二口飲み干す。

しかし、やはり変化は起こらない。

「どうして……理論は完璧、目の前に成功例があるのに……」

ガツクリと膝をつき、敗北に打ちひしがれる柚子。

その姿に、誰も声をかけられない。

「もしや女性には効果が無いのでは？ 失敬……ゴクゴク」

「あああああ！！」

周囲が制止する間もなく、紫音は柚子から薬を取り、二口飲み干してしまった。

そして、

「男は見るなあああ！！」

事務所にいた男性は、一瞬のうちに視界をふさがれた。

ハルも例外ではなく、奈美が飛びついて両手で目を塞がれてしま
う。

目隠しされる前の一瞬だけだが、確かに見えた。

美しい青髪をなびかせた、絶世の美女……の裸を。

「紫音、早く身体を隠しなさい！」

「そうは言うが、服は破れてしまったし」

「タオル、タオルとありませんか？」

「直ぐに持つてきます!」

女性陣が慌ただしく動き、紫音の裸体を隠そうとする。

「ハル、見てないわよね?」

「……も、勿論」

勿論嘘だ。

子供の裸ならいざ知らず、成長した紫音は絶世の美女。

一瞬でも網膜に焼き付いた映像は、脳裏に記憶されはつきり残っている。

「……十年後に会いたかった」

「……………ふんっ!」

奈美は目隠ししているハルの顔を、思い切り横に倒す。

ゴキツと嫌な音と共に、ハルの意識は薄れていった。

ハルが目覚めたとき、紫音は元の大きさに戻っていた。

残念なような、安心したような複雑な気持ちだ。

「ハルのスケベ!」

「冤罪だ!」

「ふむ、ハルは私の身体を見て欲情したのか?」

「今の姿で言われると凄いやばいから!」

本気で洒落にならない。

「でもこれでえ、女性でも薬の効果があることが分かったわねえ」

「じゃあ、どうして柚子さんには効果が無いんでしょう」

結局問題はそこに戻る。

一同が頭を悩ませていると、

「……私に一つ、仮説があります」

千景が言葉を発した。

「それは一体なんなの?」

「薬は効果があった。しかし柚子の外見に変化が無い。ならば考えられるのは一つ」

千景は柚子を指差し、

「柚子、貴方の成長は完全に終わっているのです!!」
「なっつ!!!!」

衝撃の事実を突きつけた。

「少なくとも四十過ぎまで、下手すれば老衰するまでその姿かもし
れません……」

「そ、そんな……」

シヨツクのあまり、身体を硬直させる柚子。

認めたくない現実と、認めざるを得ない現実がせめぎ合う。

「……柚子、あまり深刻に考えない方が」

「認めない、私は認めない。私だって、グランマと呼ばれるお婆ち
やんになれるんだもん!!」

そして柚子は、残った薬を一気に飲み干した。

十口分はあつた薬が、全て空に。

「どんな姿でも良い、私に未来を見せてええええ!!」

その後。

「千景さん、柚子は？」

「……私の部屋で寝込んでいます」

「よっぽどシヨツクだったのねえ」

「無理ありませんよ」

「優秀すぎるが故の悲劇だな」

「………吾輩は同情なんかせんぞ。まあ、流石に気の毒だとは思
うが」

結局、柚子の身体に変化は一切無かった。

それどころか、

「肌年齢一桁つて……そりゃシヨツクだわな」

寧ろ若返ってしまったのだ。

「恐らく泣き疲れて眠るでしょうから、今日は私の部屋に泊めるとにします」

「あの薬はあ、私が処分しておいたからあ」

「過ぎた技術は身を滅ぼすか」

「…… 柚子さん」

「まあ何だ。今度飲みにも連れて行ってやるか」

何とも言えぬ後味を残し、「チート君1号」騒動は幕を降ろした。

柚子の秘薬（後書き）

柚子は主役の回で、必ず痛い目を見ている気がします。少し位はいい目を見せてあげたい物ですが。

将来安泰の紫音ですが、彼女には羞恥心が殆どありません。育ってきた環境が大きいですね。

人の感情の中でも、羞恥心だけは他人に依存する感情ですので。そのうち、紫音のその辺の事も書いていききたいと思います。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話へ千景の悩みへ（前書き）

文武両道才色兼備、完璧超人の千景。
ハピネスの要である彼女もやはり人の子。悩みはあるもので……。

小話〈千景の悩み〉

柊千景。

便利屋ハピネスの女社長。

容姿端麗、頭脳明晰と完璧超人を地で行くような女性。

「所长、ここ三ヶ月ほど、経費が二割ほど増えています」

「ふむ……では事務用品の仕入れ先を変えましょう。既に業者とは交渉済みです」

「最近依頼が溜まり気味ですが」

「最優先の物から処理を。臨時の助っ人を手配しておきます」

「赤紙の依頼が来てますけど……」

「適任者は……良いでしょう、私が引き受けます」

「労働基準監督署から、監査の通知が来てます」

「パターンCにて対応を。と の書類は隔離しておきなさい」

「ドクターが研究室を半壊させました！」

「三日以内に修理を。費用は水増しして、ドクターに自腹を切らせなさい」

「奈美さんの成績が芳しくなく、依頼受注に支障が出てます」

「……ハル君に連絡。何とかさせなさい」

「動物関連の依頼が、ハルさんの達成能力を超える量来てるんですけど」

「柚子にドーピング薬の作成を指示します。限界まで頑張ってもらいましょう」

「紫音ちゃんの授業参観日が、全国便利屋協会の会合とバッティングしました」

「……………保留で」

と、ハピネスを実質管理しているのが、千景という女性だ。困ったときの千景頼み。

まさにハピネスの要にして切り札的存在。

だが、そんな彼女にも悩みがあった。

それは……………。

仕事を終えた夜。

千景は一人、下着姿で自宅の洗面所に立っていた。

真剣な面もちからは、決意めいた何かが伝わってくる。

「……………」

精神を集中し、そっとメジャーを胸に回す。

恐る恐る数値を確認し、

「……………変化……………なし」

落胆のため息をつくのだった。

つまりは、そう言うことだ。

彼女の悩みは、一向に成長しない胸のサイズだった。

「三週間のマッサージで、バストサイズアップ……………とんだデマでしたね」

あらゆる手段を試した。

マッサージや体操、怪しい器具にも手を染めた。

だがしかし、効果は無かった。

「……また次の手を考えなくては」

千景は気持ちを切り替え、入浴することにした。

「ふう、いいお湯でした」

「あがったか。では、私も入らせて貰うでしょう」

お風呂上がりの千景に、リビングでくつろいでいた紫音が声を掛けた。

「ええ。お待たせしてしまいましたか？」

「構わない。丁度興味深いテレビを見ていたからな」

「あら、災害対策の特番ですか」

「うむ。何時起きるか分からない災害への備えは、必要なものだ」

「そうですね。うちも本格的に準備しなくては……」

非常食や必需品の備蓄、避難訓練に緊急時の連絡網。

千景は脳内で計画を立て、明日にでも早速実行するかと考えを纏めた。

「千景、私のシャンプーハット知らないか？」

洗面所から紫音が姿を見せ、千景に尋ねる。

「ああ、今日消毒をしたのであつちの部屋に……紫音、せめてタオルを巻きなさい」

「む、別に構わないだろう。お前しかいないのだから」

「全く貴方は……」

裸の紫音を見て、ふと千景は思い出す。

「つい最近、同じような事があつたような……」。

「どうかしたのか？」

「いえ、何でもありません。持っていくますから、浴室に入ってなさい。冷えますよ」

「あ、ああ、では頼む」

浴室に引っ込む紫音。

千景はシャンプーハットを手に取りながら、ある案を思いついた。

翌日。

「……千景ちゃん、それ本気なの？」

「ええ。もはやなりふり構ってられません」

休憩時間に、千景は柚子を自室に招き、あるお願いをした。

「出来るとは思っけど……」

「何か問題でも？」

「ハッキリ言うけど、効果があるかは保証出来ないわ」

実感のこもった柚子の言葉。

ある意味経験者の発言だけに、重みを感じずには居られない。

「それでも構いません。今は僅かな可能性にも縋らずにはいられません」

「分かったわ。でもどうして急に？」

「……身近な所に、将来が約束された子がいるので」

「……頑張るわ。私にも責任あるし」

乙女の密約が交わされた。

数日後。

「その……あんまり気を落とさないで」

「気遣いは無用です。私は何も………くすん」

柚子特製の秘薬も、千景の胸に変化を与えることは出来なかった。

「成長じゃなくて、純粋に増加させる薬を研究してみるから」

「う、うう。心の友よ……」

柚子に励まされ、千景は事務所のドアをくぐる。

するとそこには、女性事務員達と談笑する奈美の姿があった。

「あ、千景さん。こんにちは」

「随分盛り上がってますね。何の話をしてたんですか？」

「可愛いブラを売ってるお店の話です。最近また大きくなったのか、

サイズが合わなくて」

ピシイ

千景のこめかみに、青筋が浮かぶ。

「奈美ちゃん成長期ですからね。これからもっと大きくなるかも」

ピシイイイ

青筋が増える。

「でも、あんまり嬉しくないです。動くのに邪魔だし」

ピシイイイイイ

「奈美ちゃん位のサイズなら、可愛い沢山選べるわよ」

「そう言う物ですかね？」

「ええ。それにハル君は、胸の大きな女の子がタイプって、この間
言ってたわよ」

「本当ですか？ よし、じゃあ早速豊胸のマッサージしなくちゃ

」

ピシイイイイ、プツン

何かが切れた。

グワシ、と千景は奈美の胸を鷲掴みにする。

「ち、千景さん……？」

「胸なんて、胸なんて、所詮は脂肪の塊なんですからああああああ
あ！……！」

「「ご乱心！ 所長がご乱心……！」

「殿中、殿中でございます……！」

女性事務員と柚子が必死に千景を取り押さえる。

「ええい離しなさい。こうなったら是非もない、その胸貰い受ける
！」

「一体どうなってるのおおお……！」

この一件は「ハピネス胸の変」として、密やかに語り継がれる事
になる。

そして以降、便利屋ハピネスでは胸の話はタブーとなった。

破った者は……。

「でさ、このグラビアのEカップ女優、実はDカップらしいぜ」

「まじで？ 騙されてたわ」

「加藤君、佐伯君、特別依頼です。シベリアのバイカル湖で水を汲んできなさい」

人事「移動」させられるとか。

真相を確かめる勇者は、未だに現れていない。

小話〈千景の悩み〉（後書き）

前回の柚子に続いて、千景も遂に被害者に……。この小説は主役になるとろくな事になりません。

千景のサイズは……平均よりやや……結構下といった感じです。着物を好む理由が何となく分かったような。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

こちらはまた、別の話（前書き）

今回はある意味番外編。

主役はハピネスではなく、とある会社のとある男。
どのような物語が紡がれるのか。

こちらはまた、別の話

色彩製薬と言う、中堅製薬会社がある。

街から少し離れたビルを拠点に構える企業。

社員は少ないが、安定した業績を残していた。

その業績を支えているのは、一人の男。

色彩製薬営業、事務、広報、開発、総務、経理……部長を兼務する男。

その名は黒田雅也。

今年四十才になる、眼鏡の似合う知的な男だ。

朝は誰よりも早く出社し、帰りは誰よりも遅くまで仕事をする。

仕事は真面目で正確、しかも迅速。

厳しいながらも、優しさを持った人柄は部下からも慕われている。

彼が居なければ、色彩製薬は間違いなく潰れると言われるほどの逸材だ。

しかし、そんな彼にも裏の顔がある。

それは……。

午後七時。

社員が退社し誰も残っていないビルの廊下を、黒田は一人歩く。

彼がやってきたのは、社長室。

ノックをし、返事を確認してから、ゆっくりと入室する。

「失礼します」

社長室には、二人の人影があつた。

「おう、来たか。遅かったな」

革張りの高級椅子に腰掛ける、毛根が死滅した五十才くらいの男。ブクブク太った小柄な姿は、愛玩動物の様な愛嬌すら感じさせる。「申し訳ありません会長。少々業務が長引きまして」

黒田は男のぞんざいな言葉に、頭を下げて謝罪した。

「全く、すっかりしろよ。社長である俺の顔を潰すつもりかよ」
会長の横に立つ男が、非難の言葉をぶつける。

茶髪にピアスと、如何にもな姿の、二十代後半と思われる若者。社長室に似つかわしくない、だらしない服装をしていた。

「以後気をつけます」

黒田は一切の反論をせず、ただ謝罪をした。

「まあ良い。それで、どうなっているのだ？」

「どの件でしょうか？」

「馬鹿かお前。親父が呼んだんだから、あの薬の件に決まってるだろ」

社長が苛立つように告げる。

そうは言うが、黒田は色彩製薬のほぼ全ての業務を担当している。主語を抜かれては流石に答えられない。

「失礼しました。既に十件ほどの実験を終え、結果は良好です」

「足が着くことはあるまいな？」

「情報漏洩については、細心の注意を払っておりますので、問題ありません」

冷静に答える黒田に、社長は不満顔。

「てかお前よ、こう言うのは報告書とか提出するのが常識だろ？」

「……社長には先日、報告書を提出してりましたが」

「あんな細かい字が沢山ある書類読めつての？ ふざけんなよ」
声を荒げる社長。

完全に理不尽な怒りだが、黒田は反論することなく謝罪する。

「申し訳ありませんでした」

「まったく使えねえな。あんまり迷惑かけんなつての」

「はい、気をつけます」

「それにしても、まだ最強の兵士は出来ないのか？」

「万が一にも嗅ぎ付けられぬよう、慎重に作戦を進めておりますので」

「はっ、自分が無能だからだろ。言い訳すんなよ」

「返す言葉もございません」

黒田は今日何度目になるか分からぬ謝罪を行う。

「大体その実験体とやら、いつまで放置してんだよ。とっとと攫えば良いだろ」

「正義の味方が護衛に付いておりますので、そう簡単には……」

「腰抜け野郎が。ビビッてんじゃねえよ」

「迂闊に仕掛ければ応援が来ますので、慎重に状況を見ております」

「けっ、話にならないな」

そう吐き捨てる、社長は黒田の横を通り過ぎドアの前に。

「何処に行く？」

「使えない部下に気分を害されたから、ちょっと気晴らしに行くだけだよ」

振り向きもせず告げると、社長はそのまま社長室を後にした。

後に残されたのは、会長と黒田の二人。

「……黒田よ、お前の役割は分かっているな？」

「無論です」

「儂がお前を救ったのは、その才覚を見込んだ。だから多額の治療費を出している」

「……はい、感謝の言葉もありません」

「ならば、儂を失望させたらどうなるかは……言つまでもないな？」

「肝に銘じておきます」

「よろしい。今日はもう下がれ」

「はい、失礼しました」

黒田は深く頭を下げ、社長室から退室した。

人気のない夜道を一人、黒田は帰路につく。

「……全く、あの馬鹿親子の相手をするのは時間の無駄だよ」
「お疲れさまです」

他に誰もいないはず、しかし黒田の言葉には返答があった。

「例の薬はどうだ？」

「はい、全て貴方の計算通りに進んでおります」

「……『ステルス』は？」

「申し訳ありません。適当な者に投与しましたが、ロストしました」

「まあ効果を考えれば仕方ない、か。所在確認を続ける」

「了解しました」

「それと、例の試験体は？」

「変わらずです。正義の味方が二名、常時監視・護衛を続けています」

「過保護だな。まあ価値を考えれば当然と言えるが」

黒田は何かを考える様に、しばし言葉を止める。

「そのまま監視を続ける。居場所が分かっていたら良い」

「了解です」

「後、例の馬鹿息子……シルバーの動きも注意しろ。勝手に動く可能性がある」

「……」

「どうした？」

「始末してしまっても宜しいのでは？ もはや彼らは用済みでしょう」
「う」

「……まだ早い。今はまだ、私の足かせが外れていない。個人的な事情ですまないが」

「いえ、出過ぎた事を言って申し訳ありませんでした」

「構わないよ」

「……それでは、私は組織に戻ります」

「苦勞を掛けるな、ホワイト」

「我らの目的は、貴方の幸せですよ……ブラック」

その言葉を最後に、ホワイトと呼ばれた声の気配は闇に消えた。

「自分の幸せの為他者を不幸にする……悪の組織としては当然だが
……人としては最低だな」

黒田は自嘲気味に笑った。

こちらはまた、別の話（後書き）

非日常サイドが、少しずつ姿を現しました。
色々複雑な事情がありそうです。

ただ、今回ハピネスは正義の味方でも警察でもありません。
悪の組織と敵対する理由は、今のところ無いです。
どの様にして両者は巡り会うのでしょうか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幽霊退治の筈ですが(1) (前書き)

幽霊退治の為、廃墟のビルを訪れたハル・奈美・紫音。
だが、どうにも事情が違うようで……。

幽霊退治の筈ですが(1)

ハル、奈美、紫音の三人は、町外れにあるビルにやってきた。廃墟、と呼ぶのが相応しい程の荒れ模様。

ガラスは割れ、むき出しのコンクリートにはあちこちヒビが入っている。

「ここが依頼の場所なの？」

「えっと……うん、間違いない。このビルだ」

三人は五階建てのビルを見上げる。

「……ふむ、妙だな」

「どうかしたか、紫音？」

「うむ、このビルだが……霊的な力が欠片も感じられないぞ」
思わず紫音を見るハルと奈美。

そんな筈はない。

もし紫音の言葉通りなら、この依頼はあり得ない。

「でも、実際に被害者が出てるんだぜ？」

「肝試ししていた人だっけ？」

「ああ。被害者は十人。内二人は全治一ヶ月の重傷だ」

ハルは事前に資料を思い出して答える。

「だから妙だと言ったのだ。無論、私の力で感知できないレベルの相手、と言っ可能性もあるが」

「……となると、考えられるのは二つだな」

ハルは考えを纏めて告げた。

「一つは紫音の言ったとおり、幽霊は居るけど感知できないケース」
「他にあるの？」

「もう一つは、幽霊以外の何か居て、そいつが犯人ってケースだ」
ハルの考えでは、後者の可能性が高い。

「それじゃあどうするのよ？」

「原因の究明と対処が依頼。中に入って調べるしかないな」
ハルは気合いを入れ直し、奈美と紫音を連れてビルへと入っていた。

今回ハル達が受けた依頼は、廃墟ビルの幽霊退治だ。
依頼主は地元の若者数名。

何でも肝試しをしていたら、突然机やら椅子が襲ってきたらしい。
懐中電灯を壊され、暗闇の中で数名の仲間が怪我をした。
その仕返しのため、幽霊を退治して欲しいとの事だが。

「どうして警察に行かなかったんだらうね？」

「一応不法侵入になるからな。あまり大事に出来ないんだらうよ」

「法を守らぬ者は、法によって守られない。社会の原則だな」

そんなわけで、ハピネスに依頼が舞い込んできた。

そして紫音が休みの土曜日、ハルと奈美と共にこのビルへとやってきた訳だ。

ハル達はビルの一階に入った。

放棄されてかなりの年月が過ぎているのだらう。

中は足跡がハッキリ残るほど、塵や埃が積もっていた。

肝試しなどで多数の出入りがあったのか、廊下は無数の足跡が残っていた。

「……ん、これは……」

ハルが何かに気づいたその時、背後で奈美が噎せ返る。

「げほげほ、随分ほこりっぽいわね」

「資料によると十年以上放置されてるからな。ほら、マスク」

ハルは二人にマスクを手渡す。

「ありがとう」

「助かる」

「それで紫音。何か感じるか？」

「いや、何も。少々感度を上げてみるぞ」

紫音は何やら呪文の様な言葉を呟く。

すると、それを見ていたハルの視界に変化が現れる。

「……また見えちゃったな」

「何が？」

「幽霊の皆さんだよ」

無人だったビルに、何人かの人が出現していた。

当然、それは幽霊と言うことになる。

「霊的な探知能力を増幅する術だ。ハルにも見えているようだな」

「ああ。でも、嫌な感じはしないぞ」

「うむ。彼らは浮遊霊。悪事をする力も、意思もない」

その言葉を証明する様に、幽霊達は何もせずその場に立ち尽くしている。

足がないので立ち尽くすと言って良いかは分からないが。

「だが、やはり悪霊の気配は感じないな」

「じゃあやっぱり、ハルの言うとおり他に原因があるってこと？」

「いや、まだ決めつけるのは早い。もう少し調査してみよう」

ハル達はビルの中を歩き回る。

一応紫音に結界を張って貰い、原因が幽霊だった場合に備えておく。

一階、二階、三階と上に上がっていく。

その途中で、野良猫たちと遭遇した。

雨風がしのげるこの場所は、彼らにとって絶好のすみかなのだろ
う。

「まさかこの子達が犯人……なわけないか」

「……二人とも、ちよつと離れててくれないか？」

「単独行動は危険だぞ？」

「そつよ。何か理由があるの？」

「何というか……あんまり見られたくないと言うか……」

困り顔のハル。

「説明してくれないか？」

「理由があるなら、私達も納得できるわ」

「ん〜」

ハルは暫し悩み、

「実は俺、猫と会話が出来るんだ。でもそれを見られたくないんだよ」

正直に言うことにした。

だが、逆効果だったようだ。

「本当？ 凄いいじゃない。ねえ話してみてよ」

「私も是非見てみたい」

目をきらきらと期待に輝かせる二人。

こうなったら、何があっても離れてはくれないだろう。

ハルは諦めることにした。

「分かった。でもこれからのことは、絶対他の人に言わないでくれよ」

二人が頷いたのを確認して、ハルはそつと猫に近寄った。

「にゃにゃにゃにゃ（ねえ、ちょっと聞きたい事があるんだけど）」

「へっ!?!」

素つ頓狂な声を挙げる二人を、取り敢えず無視する。

「にゃんにゃにゃにゃ（お兄さん猫語がわかるんだ）」

「にゃにゃにゃんにゃん？（少しだけね。ねえ、このビルに誰か住んでる？）」

「にゃんにゃん（僕達の他は居ないと思うよ。でも）」

「にゃん？（でも？）」

「にゃにゃにゃにゃ（最近、姿は見えないけど何か居る気配があるんだ）」

「にゃにゃにゃにゃ？（そうなんだ。それは今もする？）」

「にゃにゃにゃにゃ（うん。一番上の階に居るみたいだよ）」

「にゃにゃにゃん（そうか、教えてくれてありがとうね）」

会話を終えたハル。

その姿を、呆然と見つめる奈美と紫音。

「あの、ねハル……」

「何も言わなくて良い。言わなくても分かっているから」

「モノマネ……だが動物の言語まで真似られるものなのか……」

「とにかく、なかなか重要な情報を掴めたぞ」

話を変えるように、わざとハルは大きな声で言った。

「どうもこのビル、何かが居るらしい。ただ、姿は見えないようだ」

「何かって何？」

「それが分かれば苦労しないって」

「姿が見えないか……やはり霊的な存在なのだろうか」

「分からない。だけどそれは今、一番上の階にいるらしい」

ビルの最上階は五階。

そこに何かが居る。

「正体不明、何が起きるか分からない。気を引き締めて行こう」

三人は頷きあうと、慎重に最上階を目指した。

そして、三人は最上階に繋がる階段の前にはやってきた。

エレベーターは使用不能で、二つある階段の一つはコンクリートの破片で埋まっている。

つまり、出入りできる唯一の場所というわけだ。

「この上ね」

「被害にあった場所も、やっぱり最上階らしい」

「蛇が出るか鬼が出るか……」

三人が階段を見つめる。

その時、突然階段の上から、ハルを目掛けてカッターが飛んできた。

「なっ！」

「ハル危ないっ！！」

咄嗟に奈美がハルを突き飛ばす。

カッターは奈美をかすめて、窓の外へと落ちていく。

「痛っ！ 何なのよ一体」

「すまん奈美。助かった」

「怪我はないか？」

「うん平気。この位なんて事ないわ」

問題ないと笑いかける奈美。

だが、

「……奈美、その頬……」

「ん？ あ、ちよつとかすつたみたいね」

奈美は頬に小さな傷を負い、僅かに血が滲んでいる。

それを見て、ハルは切れた。

「……上等じゃねえか。幽霊だか何だか知らねえが、絶対許さねえ

ぞ！」

いきり立ったハルは、階段を駆け上り最上階へ。

一変したハルの様子に、奈美は呆然とする。

「ハル、どうしてあんなに怒ったんだろ？」

「……大切な人を傷つけられて、怒らぬ者などいないだろう」

「大切……私が？」

「ハルのあの姿が、何よりの証明だ」

「……ハル」

「だが一人では危険だ。私達も行くぞ」

紫音は惚けている奈美に声をかけ、最上階へと向かった。

幽霊退治の筈ですが（1）（後書き）

遂にハルの猫語がばれました。

いや、別に話は何の影響も無いのですが……相当恥ずかしいと思いますよ。

奈美の負傷によって、恐らく初めてハルが本気で怒りました。

本人も気づかぬ内に、奈美は大切な存在になっているようです。

次はいよいよ謎の敵とご対面。

ハル達は果たして依頼を達成できるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幽霊退治の筈ですが(2) (前書き)

奈美を傷つけられ、怒りのハルは最上階へ。
果たして姿の見えぬ敵の正体とは。

幽霊退治の筈ですが(2)

ビルの最上階は他の階のように壁が無く、大きなワンフロア構造になっていた。

テナントで入っていた会社が残っていた、事務机や椅子などの事務用品。

そして崩れたコンクリートの破片などが、あちこちに放置されている。

「こここそ隠れてないで出てこい！」

ハルは勢いよく最上階に突入すると、周囲を威嚇するように叫ぶ。しかし、そこには人の姿は見えない。

試しに足下を転がる小さな破片を投げつけてみるが、全く反応無しだ。

悩むハルの元に、奈美と紫音が遅れて合流する。

「ハル、大丈夫？」

「ああ。でも、見ての通りここには何も居ないみたいだ」

「……だが霊的な力は、やはり感じない」

「だとしたら、一体何が居るっていうんだよ……」

「ん〜」

思考の袋小路に突入しようかと言うとき、奈美が何かを考えるように唸る。

「どうかしたか？」

「あのね、人の気配がするの」

「そりゃ本当か？」

「うん、あの辺から。でも誰もいないし、気のせいなのかな……」

ハルと紫音は、奈美が指差す方を見る。

人の姿は当然ない。ないのだが……。

「ハルよ、どう思う？」

「口にするのも馬鹿らしい考えだけど、一つ思いついたことがある」
「靈的な力は感じず、人の気配はするが、姿は見えない。これから導き出せる答えは」

「「透明人間」」

ハルと紫音が口を揃えて言った瞬間、ガサツと視線の先から物音が聞こえた。

「……どうやら正解みたいだな」

「ああ、俺はどうかしてた。よく見れば、ここ、足跡がくつきり残ってるしな」

埃と塵が積もった床には、人の物と思われる裸足の足跡が多数あった。

頭に血が上っていた時は気づかなかったが。

「えっと、どゆこと？」

一人話に乗り遅れた奈美が、首を傾げて尋ねる。

「つまりだ、あそこに姿の見えない人間が居て、そいつが今回の犯人って訳だ」

「じゃあそいつをとっ捕まえれば良いのね？」

「……いや、まずは話をしてみよう」

奈美の怪我の貸しは、後で一発殴ればいい。

ハルは姿の見えない相手に声を掛ける。

「俺達は便利屋ハピネスの人間だ。貴方に危害を加えるつもりはない」

まずは名乗り、相手の警戒を解くことから始める。

「もし言葉が通じるなら、話をしたい。どうか答えて欲しい」

しかし返答は無い。

「恐らく貴方は、つい最近透明人間になったばかりだろ？ もしそれで困っているなら、うちには科学者や医者がある。きっと力になれると思う」

ハルは語りかけながら、相手に近づいていく。
その時。

「痛っっ！」

前から飛んできた、コンクリートの破片がハルの額を直撃した。
思わずうずくまり、額を手で押させる。

「ハルっ！」

「大丈夫か？」

「あ、ああ、平気だよ」

駆け寄る二人に笑顔を見せるハルだが、

「血が出てるじゃないか」

皮膚の薄い額は、固い物の直撃で少し出血していた。

「大した事じゃない。女ならともかく、男の顔なら少しくらい傷ついても問題ないよ」

「そう言う問題じゃないだろ。まず傷口を……………奈美？」

「おい、奈美」

ハルと紫音の呼びかけに答えず、奈美は無言で歩み寄る。
見えない何かに向かって。

その奈美に、再びコンクリート片が投げつけられる。

が、

パシィィィィン

右拳を軽く振るうと、コンクリートは砂糖菓子のように碎け散った。

「…………マヂかよ」

「これは…………不味いぞ」

「ああ、確かにやばいな」

二人が心配しているのは、奈美のことではない。

これから悲劇を迎えるであろう、見えない何者かの事だ。

次々に投げつけられる、コンクリート片を、奈美は何事もなく全て打ち砕く。

そして、辿り着いた。
拳の届く距離に。

「だ、だがどうするつもりだ。相手は姿が見えないんだぞ」

「……嫌なこと思い出した。あいつ、物凄く勘が良かったよな？」

「……透明人間の天敵だったと言う訳か」

ハルと紫音が見つめる中、

「すうううう、よくもハルにいいいいいい！！！！」

奈美が何もない空中に突き出した拳は、しかし確実に何かに直撃した。

ボキメキバキゴキ

「があああああああ！！！！」

何かが碎ける嫌な音と、男の絶叫が広いフロアに響き渡る。

そして、どさりと床に人が倒れる音。

決着は一瞬でついた。

「……うん、何とか生きてるみたいだ」

ハルは透明人間の身体に触れて、脈があることを確認する。

傍目には間抜けな光景だった。

「本当にそこに居るのか？」

「ああ、間違いない。取り敢えず拘束するか……何か縛る物が欲しいな」

「ふむ、少し待て」

紫音はお札を取り出すと、何事か呟く。

そして、

「この者の手は何処だ？」

「ここだけ……」

「……確認した。では……縛！！」

透明人間の両手首を合わせ、そこにお札を貼り付けた。

「これで、腕の自由は封じた。足も封じておくか？」

「いや、それは平気だけど……」

「お礼って便利なのね」

感心したように呟くハルと奈美。

「別に大した術ではない。それより、これからどうするのだ？」

「完全に気絶してるみたいだし、今の内に事務所に連れて行くのが良いだろうな」

正直、ここに居るメンバーでは手に余る話だ。

事務所に戻り、千景達に相談すべきだろう。

「透明なら目立たないだろうし、俺が背負っていくか………んっ
!？」

「どうした？」

「いや……こいつ……結構重い……」

ハルは担ぎ上げようとするが、なかなか上手くいかない。

透明云々ではなく、単純に男がハルより大きいからだ。

「もう、怪我人が無理しちゃ駄目よ。いいわ、私が担いでいくから」
奈美は手探りで透明人間の首と股下に手を差し込み、

グニユウ

「……………ん？」

奇妙な手応えを右手に感じ、動きを止めた。

「奈美、どうした？」

「えっと、何か変な物を掴んじゃったけど……これ何かかな？」

「……………奈美、冷静に聞いて欲しい」

全てを察したハルは、奈美を刺激しないように語りかける。

「透明人間は身体だけ透明、服とかが消える訳じゃない」

「うん、それで？」

「だから透明人間は、基本的に衣服を着れない……つまり全裸な訳だ」

「服だけ浮いてたらばれちゃうものね」

「で、だ。当然ズボンもパンツもはいてないから……お前が掴んだのは……………」

「……………」
見る見る奈美の顔色が青ざめていく。
「つまり……………男の……………アレだ」
「つつつつつつつつつつ！！！！！！」
そして、惨劇が起きた。

あまりに凄惨な事件。
偶然が重なって起きた悲劇だった。

彼の名誉のため、詳しくは語るまい。
ただ一つだけ。

事務所に運び込まれた彼に待ち受けていたのは、事情聴取でも身体検査でもなく、

「……………私のキャリアで、最も難易度の高いオペになりそうです」
柚子による男の尊厳回復手術だった。

幽霊退治の筈ですが(2) (後書き)

と言うわけで、正体は透明人間でした。

紫音が霊ではないと言っていたので、気づいていた人も多かったかと。

透明人間自体は、数多くの小説や漫画、映画などに登場しているので、恐らく知らない人は居ないのではないかとつくづくに、メジャーです。

作者のイメージでは、包帯グルグル巻きの男、が一番強かったです。

ひとまず透明人間の捕獲に成功したハル達。

次は後日談的な話になります。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幽霊退治の顛末（前書き）

奈美の活躍？によって、解決の目を見た幽霊退治。

その翌日、ハルと奈美は何故か千景に呼び出されて……。

幽霊退治の顛末

透明人間事件の翌日。

「あれ、ハル。どっかに出かけるの？」

「そう言う奈美こそ」

ハルと奈美は、アパートの廊下で顔を見合わせる。

「私は千景さんに呼ばれて、ハピネスに行くところだけど」

「俺もだけど……ひよっとして昨日の件かな？」

「ん〜でも報告終わってるよね」

奈美の言うとおり、透明人間の件は、既に報告を終えている。

「別件かもしれないな。まあ折角だし、一緒に行くか」

「うん」

ハルと奈美は並んで、ハピネス事務所へと向かった。

事務所でハル達を迎えたのは、千景を始めとするいつものメンバ
ー。

そして、

「ど、どうも……」

見覚えのない若い男性だった。

二十代前半だろうか。短く刈り上げた黒髪が、スポーツマンの印象を受ける。

「あれ、お客様ですか？」

「違うわよお。まあ、こっちに座ってえ」

状況が理解できないまま、ハルと奈美は応接用のソファアに座ら
される。

隣に紫音、向かいには千景とローズに挟まれた若い男が座る。

「まず紹介します。彼は東野秀樹君、ハル君と同じ年の男の子です」

「東野秀樹と申します」

男、東野はソファアールから立ち上がり、深々と一礼する。

「初めまして、早瀬奈美です。よろしくね」

「御堂ハルです、よろしく」

自己紹介をする二人。

「えっと、彼は新メンバーですか？」

「そうです。今日からハピネスで働いて貰います」

「じゃあ今日呼ばれたのは、東野さんを紹介する為だったんですね」
納得するハルと奈美だが、千景は首を横に振る。

「それもあります、彼がどうしても二人に謝りたいと言い出し
まして」

「謝る？」

「私達初対面ですよね？」

尋ねる奈美に、

「いえ、実は……昨日お会いしてます」

東野は申し訳無さそうに答えた。

「昨日……ごめん、ちよつと憶えてないな」

「私も。昨日は依頼以外に、外に出てないと思ったけど」
ハルと奈美は揃って首を傾げる。

謝罪に来てくれたのに覚えがない。流石に気まずい。

「まあ無理ありませんね。何せ、彼とは会って居ても、姿を見て
いないんですから」

「……まさか」

「そうです。東野秀樹君、彼が透明人間の正体です」

元透明人間、東野は縮こまりながら頷いた。

「……なるほど。透明人間は薬物による物だったんですね」
説明を聞いたハルは、納得したように呟いた。

あの後、柚子が血液検査を行ったところ、未知の薬物が発見され

た。

それを調査した結果、人の身体を空気と同等の透過率に……まあつまり、人体を透明化する薬物だと判明したのだ。

「はい。私はそれを元に、身体を元に戻す薬を開発して、東野さんの身体を戻しました」

「和泉さんには、感謝してもしきれないです」

東野は恐縮しながら言う。

「でも、どうしてそんな薬を？」

「無理矢理投与されたらしいです」

柚子は東野に話すように促す。

「三日ほど前の夜、バイトから家に帰る途中で、変な連中に襲われたんです」

「襲われたって……」

「数人に身体を押さえつけられ、錠剤のような物を無理矢理飲み込まされました。その後車に乗せられそうになった時、必死に暴れて逃げだしたんですが……」

「身体が透明になっていた、と」

ハルの言葉に、東野は悔しそうな顔で頷く。

東野は実家暮らしだったが、透明になった身体では帰る事も出来ず、あてもなく街をぶらつき、あの廃墟ビルに辿り着いたのだ。

「怖かったです。自分がどうなってしまうのか、あの連中が何時やってくるのか」

「じゃあ、肝試しの連中が襲われたのは」

「過剰防衛ねえ。まともな精神状態じゃ無かっただろうし」

透明人間になった夜に、正体が分からない集団が自分の隠れたビルにやってきた。

恐怖を感じるのは当然だろう。

「ハル君達が襲われたのも、同じ理由です」

「本当にすいませんでした！」

ガバツと頭を下げる東野。

あの時は怒りを憶えたが、事情を聞いた今、その怒りは殆ど残っていないかった。

「……まあ良いさ。奈美を傷つけた分は、もう充分お返しされただろっし」

「う」

思い出したのか、奈美が顔を歪める。

「それで、アレは大丈夫なのか？」

「……はい。和泉さんが何とか守ってくれました」

「結構際どかったですけどね」

男の尊厳が無事守られた事に、ハルは心底安心した。

悪霊退治を発端にした、透明人間事件は無事幕を降ろした。

元透明人間のハピネス入りという、おまけ付きで。

幽霊退治の顛末（後書き）

突然透明人間になったらどうしますか？

子供の頃からの夢を叶えるべく行動できる人、と言っるのはごく一部。実際は、途方に暮れてしまふと思います。

今回の東野君もその一人ですね。

それにしても、見えない患者の手術をした柚子は流石です。

正直、この小説で彼女は一番のチートキャラ。

死なない限りはどうにでもなる、ギャグ小説に欠かせない人材です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話〈千景と美園〉（前書き）

とある飲み屋での一幕。

小話へ千景と美園

「それでは」

「互いの無事と、忙しさを祝って」

「乾杯」

キン、とグラスが澄んだ音を響かせた。

芍薬商店街の裏路地にある、小さな居酒屋。

看板を出していないが、それでも店内は常連客でそこそこの賑わいを見せていた。

そんな中、カウンター席で隣り合いながら、千景と美園は杯を交わす。

「ふう、こうして美樹と飲むのも久しぶりですね」

「お互い、なかなか時間が取れませんから」

美園は答えながら、大将に追加のお酒を頼む。

「最近そつちの様子はどのなの？」

「お陰様で商売繁盛です。今期はかなりの黒字が見込めそうですよ」

「羨ましい限りですね」

美園はくいつとグラスを空にし、お代わりを頼んだ。

「そう言う美樹の方も、最近は特に忙しそうですけど」

「……ええ。もつてんでこ舞いつて感じよ」

「犯罪検挙数は、既に去年を大幅に超えているとか。頑張ってますね」

千景は大将に一升瓶を注文し、大ジヨッキに注ぐ。

「私の仕事は、暇なほど良いんです。平和な証拠ですから」

「今は、そうではないと？」

「正直な所ね。最近は特に妙な事件が多くて……」

「少し聞かせて貰えるかしら？」

極上の日本酒を頼み、それを美園のグラスに注ぐ。

「……口外厳禁で頼みます」

「当然」

「実は最近、今まで無かった様な事件が増えてます」

「今までに無い？」

「説明しにくいのですが……何というか、犯人が人間離れしてまして」

一升瓶を更に追加して、千景は話の続きを要求する。

「先日起きた銀行強盗事件は知ってますか？」

「深夜に忍び込み、ご用となったあれなら」

「……犯人は素手でコンクリートの壁を破壊して、中に侵入したんです」

「へえ、それはまた、随分と豪快な犯行手段ですね」

「駆けつけた警官数名は、犯人に殴られ重傷。今も入院中ですよ」
ピシッと美園のグラスにヒビが入る。

千景はグラスの交換と、追加の酒をお願いした。

「結局麻酔銃を使って、何とか身柄を確保しました」

「その判断を下せる貴方は、やはり優秀です」

「部下の犠牲を減らせるなら、始末書なんて安い物ですから」

苦笑する様子から、相当絞られたのだろう。

それを気にもしない美園は、やはり上司として極めて優秀だ。

「犯人の事情聴取は？」

「残念ながらはまだ。今は病院の特別病棟で治療中ですので」

「……薬物ですか」

「可能性はかなり高いですね。現在調査チームを編成して、解明に取り組んでいます」

美園は一升瓶の追加を注文する。

「増えている、とさっき言いましたが、こうした事件が他にも？」

「ええ。事件の種類は違えど、犯人の状態は全て同じです」
「人間離れした力を持ち、いずれも薬物の使用が疑われる。確かに妙ですね」

「お陰でここ暫くは、署に泊まり込むことになりそうです」
ゴクリと酒を飲み干し、美園は苦笑した。

「事情聴取が済んだら、是非情報を貰いたいですね」

「……一応機密なんです」

「実は先日、年に五本しか生産されない、秘酒『行かず後家』が手に入りまして」

「最優先で連絡するわ」

随分と安い機密だった。

「さてと。湿っぽい話はこれ位にして、後は楽しく飲むとしましよ
うか」

「ええ、大賛成よ」

微笑み合う千景と美園。

そして、

「「大将、樽お願いね」「」

何時も通りの酒盛りが始まるのだった。

小話へ千景と美園（後書き）

今回は小休止的な話でした。

美園の話にもありましたが、ぼちぼち非日常が顔を出し始めて来ました。

交わる日も近いかと

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

悪は静かに牙を研ぐ(前書き)

スポットライトは再び悪の組織に。

苦勞人の黒田に、謎の声が報告を行う。
その内容とは……。

悪は静かに牙を研ぐ

午後六時。

業務を終えた黒田は、誰もいないオフィスで大きく背伸びをする。

「ふう、今日も忙しかったな」

部下は有能だが、如何せん人数が少なすぎる。

会社の規模にしては異常な程だ。

それ故、黒田に掛かる負担は凄まじい物があった。

「とは言え、あの無能に任せれば、三日と持たずに倒産するだろうしな」

名ばかりの社長、馬鹿息子と内心蔑む男を思い浮かべて、黒田は苦笑する。

彼はあくまで御輿。

精々持ち上げてやればいい。

「まあ、社員のみんなを路頭に迷わせるわけには行かないからな。

そう思わないか？」

「……仰るとおりです」

誰もいないオフィス。

しかし返事は影から返ってきた。

「提示報告は先の筈だが……何かあったかな？」

「例の『ステルス』について、ご報告が」

「聞かせてくれ」

黒田は足を組み直し、声に促した。

「はい、まず『ステルス』を投与した者が身柄を捕らえられました」

「へえ、あれを捕らえられる者が居たのか」

「……捕らえたのは便利屋ハピネスの構成員です」

一瞬驚いた表情を見せた黒井だが、直ぐさまいつものポーカーフ
エイスに戻る。

「詳しく聞かせてくれるかな？」

黒田の要求に応え、声は詳細な報告を行う。

監視していた対象が、偶然『ステルス』を投与した相手と遭遇。見事身柄を捕らえ、彼らの事務所連れ帰った。

そして、その姿が元に戻ったと。

「……そうか、彼らには『神の手』がいたか」

「はい、それにマッドサイエンティストとして名高い、蒼井賢と言う男も在籍しています」

「秀才を百人揃えても、一人の天才には敵わないと言うが……正にその通りだな」

僅かに悔しさを込めた声色だった。

ステルスを始めとする薬は、黒田達が総力を挙げて開発した自信作。

それを二人で、しかもこの短期間で破られてしまった。

効果を解除する事は開発に比べて容易とは言え、あまりにスペックが違いすぎる。

「とは言え、それを妬んでいては仕方ないな。効果の確認が出来ただけ良しとするか」

「幸い、投与者から私達の情報が漏れた様子はありません」

「正体不明の連中に、突然薬を飲まされた。こんな感じかな？」

「恐らく」

ふむ、と黒田は手をアゴに当てて暫し考える。

（私達がハピネスの事を調べたことは、耳に入っているだろう。だとすれば、当然私達のことを調査しているに違いない。今回の件、恐らく私達の存在に気づいただろう）

声の主は、黒田の思考を遮らぬよう沈黙している。

（だが今回は偶発的な遭遇。彼らと私達を結びつける要素は無いはずだ）

思考を終え、黒田は小さく息を吐いた。

「……計画に支障は無いだらう」
「なによりです」

「そして、そろそろ計画も次の段階に進むとしよう」

黒田の瞳が、怪しい光を宿す。

「下準備は整っている。後は、試験体にお越し頂くだけだ」

「……………」

「とはいえ、計画の進行には大きな問題がある」

「監視をしてる正義の味方ですね？」

「実のところ、それはさほど問題ではない」

声は黒田の言葉に少し驚いた様子を見せた。

「正義の味方とは言え、たった二人。奇襲を掛ければ無力化は充分可能だ」

「……なるほど、そう言う事ですか」

「ああ、応援に関してもやりようがある」

「では問題とは？」

「……便利屋ハピネスだ」

黒田は椅子から立ち上がり、窓から外を眺めなる。

「あそこには、とんでも無い化け物が所属している」

「確かに『死刑宣告者』と『完璧な兵士』は驚異ですが、動きますか？」

「ハピネスの所員は彼女の身内同然。間違いなく動くさ。それも本気でね」

「……………」

ゴクリ、と唾を飲む音が聞こえた。

「正直な所、もし彼女に計画が洩れたら、その時点で私達は終わりだ」

「貴方の力を持ってしても、ですか？」

「器が違いすぎる。彼女と対峙してしまえば、万が一にも勝機はない」

少し自嘲気味に黒田は言った。

「彼女の目を盗んで攫ったとしても、恐らく一両日中には気づかれるだろう」

「……時間が足りませんね。最低でも三日は必要です」

「だが、攫うというアクションを起こせば、本拠地の特定にさほど時間はかかるまい」

「八方塞がりですか……」

悔しそうに声が呟く。

「故に待つ。天が私を見捨てていなければ、必ず機会は訪れるはずだ」

「ブラック……」

「あの馬鹿親子は私が抑えておく。君はその時に備えてくれ」

黒田の目には、一切の迷いは無かった。

会話が終わり、いつもの通り声の主は姿を……消さなかった。

「ブラック」

「おや、珍しいな。君が姿を見せるとは」

背後から掛けられた声に、黒田はゆっくり振り返る。

そこには、月明かりに映し出された一人の女性が立っていた。

二十代中頃だろうか。

ビジネススーツを着こなした、黒いショートカットの女性。

美しい顔立ちだが、その左半分の皮膚は焼けただれていた。

「ブラック、貴方に一つだけ伝えておきます」

「……聞こう」

「私達は貴方を信じております。本当の目的を知って尚です」

「……」

「あんな奴らではなく、貴方という人間の為に私達は動きます」

「……」

「だから貴方は目的を達成しなければなりません。例え、どんな犠牲を払ったとしても」

「全てを失うぞ？」

「みんな貴方に惚れていますから。勿論、私もですが」
「……ありがとう」

女性に向かって、黒田は深々と頭を下げた。

普段本心を隠している男の、本心からの言葉だった。

非日常は動き出した。

日常と交わる日は近い。

悪は静かに牙を研ぐ（後書き）

悪
の組織、その姿が少しずつ見えて来ました。

時を待つ、の言葉通り、次に彼らが動き出す時には、
日常と非日常が交わる時です。

果たして彼らが待つ機会とは何なのでしょ
うか。
そんな思惑など知るよしもなく、ハル達
は日常を過ごします。

次回もまたお付き合い頂ければ幸い
です。

小話へタイムパラドックスって？〈前書き〉

またも何かが気になっている奈美。

いつものようにハルに尋ねるのだが……。

小説へタイムパラドックスって？

「ねえねえハル。教えて欲しいんだけど」

「今度は何だ？」

「ハピネス事務所で、奈美はハルにいつものように尋ねる。」

「あのね、タイムパラドックスって何？」

「また随分予想外の言葉が出てきたな」

「秋乃から借りた小説に出てきたんだけど、どうしても理解出来ないのよ」

「ん〜簡単に言うと、タイムスリップする事による矛盾かな」

「??????」

「ハテナマークが頭に浮かぶのが見える。」

「とは言えハルもさほど詳しくないので、上手く説明できない。」

「どう説明した物かと思っていると、」

「ほう、なかなか面白い事を話して居るでは無いか」

「白衣を着た蒼井が話しに加わってきた。」

「あ、そうだ。なあ、蒼井ならタイムパラドックスを上手く説明出来るかないか？」

「楽な物……と言いたいが、この女に分かるようにか？」

「そうじゃ無ければ苦労しない。」

「ハルが頷くと、蒼井は暫し考えて、」

「ふむ、なら具体的な例を出して説明するか」

「奈美に説明を始めた。」

「例えばだ、貴様が過去にタイムスリップしたとする」

「うん」

「そこで、まだ結婚する前の両親と出会ったでしょう」

「うんうん」

「貴様が両親の仲を引き裂く、一番簡単な方法として、片方を殺害したとしよう」

「ならお父さんの方ね」

物騒です、奈美さん。

「だが両親が居なければ、貴様は産まれない筈だな？」

「そりゃそうよ」

「つまりだ、貴様が父親を殺せば貴様は産まれない」

「まあね」

「ならばだ、父親を殺そうとする貴様は存在しない。父親を殺すことも出来ないだろ」

「……………」

「これがタイムパラドックス。つまりは時間移動による矛盾だ」

因みに、タイムパラドックスについては幾つかの解釈がある。

どうしても創造主、つまり親を殺すことが出来ないから、矛盾は起きない説などだ。

蒼井の説明が一番一般的な矛盾の説明だった。

「うーん、何となくは分かったけど……………」

「あんまり深く考えないと嵌るぞ。何となく理解できれば十分だろ」
小説を読むには問題ないはずだ。

「じゃあ結局、過去に行ってもあまり意味無いつて事？」

「一概には言えないがな。だが所詮過去は過ぎ去ったもの。今を生きる者に価値があるとは、吾輩には到底思えんぞ」

「……………ま、それは人それぞれって事で」

全国の歴史研究家ならびにマニアの皆様、申し訳ありません。

「なら未来に行くのは？」

「未来の競馬新聞買い集めて一財産築くとかか」

某映画はスポーツ結果だったが。

「……………ふん下らんな。未来は未定、故に人は今に希望を持てるのだ」

もう別人だろ、と言う程蒼井の言葉はカツコ良かった。

「希望か……確かにね。結果が分かっているなんて、つまらないものね」

「俺もそう思う。蒼井も良いこと言うじゃないか」

「……さて、吾輩は用を思い出したからもう行くぞ」

研究室に向かう蒼井の後ろ姿は、今まで見たことがないほど輝いていた。

後日。

「ふはははは、良いぞ。これで四十連勝だ」

競馬中継を見ながら、高笑いをする蒼井。

その手には、何故か明日の日付の競馬新聞が握られていた。

「あの小娘もたまには良いことを言う。これで発明資金の心配は無用だ。はっはっは」

有頂天の蒼井。

だが、事務所の研究室で騒いでいたのが不味かった。

当然その声は千景にも届いていて、

「ドクター、少々お話ししましょうか」

不正はあっさりバレて、長いお説教の後、儲けは没収されてしまった。

後でその話を聞かされたハル達。

「やっぱり蒼井ね。少しでも尊敬したのが間違いだっただわ」

奈美の蒼井株は、ストップ高の後ストップ安に急落した。

「……てか、誰もタイムマシンがあった事には突っ込まないんだな」「……だつて、ドクター・蒼井だから」

人類初のタイムマシンは、最低の使われ方をして闇に葬られた。

タイムマシンのご利用は計画的に。

小話へタイムパラドックスって? (後書き)

妙にシリアスな話が続いていたので、小休止という感じで。

正直作者もタイムパラドックスを、正確に理解していないので、詳しい人から見れば突っ込みどころ満載かもしれません。
どうかご容赦下さい。

一息ついたところで、次からはまた続き物を。

久しぶりにあの人に登場願いまししょう。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗コレクト再び(1) (前書き)

事務所を尋ねた美園。

何やら困り事があるようだが……。

怪盗コレクト再び（1）

ハピネスに、来客があった。

警察署長の美園警視だ。

彼女がここを訪れる理由は、ただ一つ。

「……またですか」

応接スペースで話を聞いた千景は、呆れたように呟いた。

「ええ、またです」

「開き直ってどうするんです。少しはプライドとか……」

「昨日不燃ゴミに出してきました」

完全に開き直った美園に、千景の嫌みは通用しなかった。

「大体、怪盗コレクトから予告が来るたび、私に頼ってどうするんですか」

「今回は対策以前の問題なのよ」

「と言いますと？」

「これです」

美園は一枚のカードを千景に差し出す。

カードには、怪盗コレクトからの犯行予告が記されていた。

『光と闇が等しくなり、子らが身を休める日の正午。

聖母が抱きし輝きを我が手中に収めるため、

汚れを知らぬ花達を育む秘密の園に、我は参上する』

「随分洒落たメッセージですね。それで、何処が特殊なのです？」

「まず、コレクトが具体的じゃない予告を送るケースは、今までありません」

「……ふむ」

「そして、今回の予告状は何故か警察に直接届けられました」
「……なるほど」

何時もと違う怪盗の行動。

これはなかなか興味深いものだ。

「それで、対策以前の問題とは？」

「……………この予告状の意味が分からないの」

美園の言葉に、千景はため息をつく。

「何よその反応は。貴方には分かるの？」

「……………少し待っていて下さい」

千景は席を立つと、自分のパソコンで何やら調べる。

やがて目的の情報が得られたのか、満足げに頷くと美園の元に戻ってきた。

「分かりましたよ」

「え……………」

「謎掛け、と言うには簡単ですけどね」

「何処なの。奴は何時何処で何を狙っているのよ？」

身を乗り出して食い付く美園。

「少し落ち着いて下さい。冷静になって考えれば、美樹にも分かる筈です」

「冷静にって言われても……………」

「はあ、なら一つずつ考えてみましょうか」

千景はカードを美園向きに机の上へと置く。

「まず最初の一行。これは犯行日時を表しています」

「正午だものね。でも日付が……………」

「頭を柔軟にしないさい。光と闇は比喻表現ですよ」

「ん〜」

「ヒント。実際に等しくなる訳ではありません」

「?????」

「ヒント。子、と言うのは学生を指します。社会人は休まらないか

「も知れません」

「……………あつ」

「分かったみたいですね」

「ええ、ちよつと考え方が固かったみたいだわ」

「答えに辿り着いた美園に、千景は微笑みを向けた。」

「では次は、最後の行です。これは何処にを示します」

「……………花屋、それとも花畑？」

「これも比喻表現です。美園の管轄範囲の場所ですよ」

「ん〜」

「汚れを知らぬ花達が人を、育むが場所、秘密の花園が場所の特殊性を表現してます」

「……………」

「ヒントを。予告の日、汚れを知らぬ花達はお休みしてます」

「……………」

「そして、花という単語は、実は場所のヒントにもなっています」

「あつ、そうか」

「ええ。花の名を冠するその施設は、貴方の管轄に一つしかありません」

「美園は場所の特定に成功した。」

「最後は二行目、何をですが……………これは場所が分かれば問題ありません」

「予告した場所の関係者よね？」

「ええ。先程調べたら、直ぐに分かりました」

「名前？」

「ご明察。下の名前が『麻里亜』でした」

「輝きは恐らく宝石、だとすればその人が持っている宝石が狙われているわけね」

「あくまで私の解釈ですけどね」

ここまで話したのは全て千景の考え。

実は全く違いました、と言う可能性も否定できない。

「いえ、間違いないわ」

「その根拠は？」

「勘よ！」

何故か自信満々に言い切る美園。

「……まあ、貴方が納得しているなら、それで良いのですが」

「うふふ、怪盗コレクト恐れるに足らず。今度こそ引導を渡してあげましょう」

「精々頑張ってください」

「何言ってるのよ。貴方にも手伝って貰うわ」

そっちこそ何を言っているのだろうか。

「対策以前の問題と言いましたよね？」

「対策以後の手伝いが不要とも言っていないわ」

「……全く貴方は」

諦めたように千景は呟いた。

「それに今回は、彼は貴方をご指名みたいだしね」

「……………」

「当然気づいてたのよね？」

「……その頭の回転があつて、どうしてあの予告状が解けないんでしょっ」

「それは言わないお約束で。それで、依頼は受けてくれるの？」

千景は暫し考え、

「ここまで挑発された以上、無視するわけにも行きませぬね」

美園の依頼を受けることを決めた。

こうして、怪盗コレクトとの再戦は静かに幕を開けた。

怪盗コレクト再び(1) (後書き)

怪盗と言えば予告状、と言うわけでやってみました。

とは言え推理物の才能無しの作者、中身はペラッペラな訳でして。苦笑いしながら見守って下さい。

怪盗コレクト編スタート。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗コレクト再び(2) (前書き)

予告状を解明し、ハピネス一行と美園は予告の場所へ。
そもそも本当に予告状が解明出来たのだろうか……。

怪盗コレクト再び(2)

怪盗コレクトが予告した日の朝。

千景率いるハピネス一行と美園は、予告された場所にやってきた。

「あの〜千景さん、本当にここなんですか？」

「ええ、私の考えが正しければですが」

一行がやってきたのは、私立白百合女子高校だった。

「汚れを知らぬ花達、と言つのは女子生徒を指していると思われま
す」

「それを育むのは学校、秘密の花園は女子高を意味してるわけね」

自信満々に美園は千景の言葉を引き継ぐ。

「でも、他にも女子高はありますよね。何でここなんです？」

「花、と言つ言葉を数回使い強調しているのは、場所を特定させる
ためです」

「私の管轄内で、学校名に花が入っているのはこの白百合女子高校
だけ」

「どうして美園ちゃんの管轄内って言い切れるのお？」

「でなければ、わざわざ私に予告状を送ってきませんから」

千景と美園の説明に、ハル達はなるほどと頷く。

「光と闇は昼と夜の比喩、等しくなるとは昼夜の時間が等しくなる
秋分を示します」

「だが実際の秋分はまだ先だろ。今日はあくまで祝日と言っただけだ
が」

「子らが身を休める、つまり学校が休みの祝日だぞ、と丁寧に忠告
してますので」

「随分優しい怪盗さんですね」

「彼はある意味愉快犯ですので、相手がいなければつまらないのでしょう」

「確かにな。予告を出したが誰もいません、では虚しすぎる」

蒼井は両手を組み、うんうんと納得する。

何か共感する所があるのだろうか。

「そしてこの理事長は、「新藤麻里亜」。聖母の名と同じです」「事前に話をしたところ、やはり狙われるに値する宝石を所持していました」

「今度は悪魔の横隔膜とかですか？」

「天使の肝臓と呼ばれる、大型のルビーです」

凄い健康そうですね。

意外と脂肪肝だったりしたら面白いが。

「よって、本日正午、この理事長の宝石を奪いにコレクトが来ると結論づけました」

「私達は以前のように協力し、怪盗コレクトから宝石を守り抜くことが依頼達成条件です」

美園と千景の言葉に、ハル達の緊張感が高まる。

前回の件で、怪盗コレクトの凄さは知っている。

果たして今度は守りきれのだろうか。

「それで千景さん、中に入らないんですか？」

「ハル君、ここを何処かお忘れですか？」

「白百合女子高校は、あらゆる状況においても男子禁制。今回も例外ではありません」

「つまり、中に入れるのは女性だけです」

「……って事は」

ハルは周囲を見回す。

ハピネスで参加しているのは千景、ローズ、柚子、蒼井、紫音、ハル。

警察は美園と数名の婦警さんが居るだけだ。

「うちからは、千景さんに柚子と紫音だけか……………あれ？」
指で数えながら違和感に気づいた。

「奈美は何処に？」

「……………本人の強い希望により、今回は不参加です」

「どうしてですか。こう言うときこそ、あいつの力が必要なんじゃ」

「ここ、バイト禁止なんですよ」

あく、とハルは納得した。

のこのご参加してしまえば、無断のバイトがばれてしまうよと。

「ですので、うちからは私と柚子、紫音、そして……………」

「……………どうして俺にカツラを差し出すんです？」

「服はそれで問題ありませんから」

「いえ、そうではなくて」

「剛彦とドクターは、男性警官達と協力して、外から警戒をお願いします」

「あの、話を、話を聞いてください」

「では行きますよ。後二時間ほどしかありませんので」

「話を聞けええええ！！」

ハルは強引にカツラを被らされ、無理矢理敷地内へと連行されていくのだった。

一行は昇降口で上履きに履き替え、理事長室へと向かう。

その途中で、

「げっ！！」

制服姿の良く知った少女と遭遇した。

流れる黒髪と端正な顔立ちの美少女。

少女はハル達の姿を見ると、優雅に一礼し声を掛けた。

「こんにちわ。本日はお休みですが、何か当校にご用でしょうか？」

「ええ。理事長にお会いする約束がありました」

「もし宜しければ、理事長室までご案内しましょうか？」

「それは助かります。何分不慣れなもので」

少女は千景の言葉に微笑み、案内すべく身体を反転させようとして、

「……お兄ちゃん？」

気が付いてしまった。

ずっと下を向いて、顔を見られないようにしていたのに。

「……と言うことは、皆様はハピネスの方ですか？」

「はい。申し遅れました。私は柊千景。ハピネスの所長を務めております」

「ご丁寧にありがとうございます。私は御堂秋乃です。兄が何時もお世話になっております」

スカートを摘み、今度はハルの妹として挨拶をする。

「貴方が秋乃さんですか。お話しはハル君から伺ってますよ」

「あら、どの様な話でしょう」

「文武両道で非の付け所のない、自慢の妹だと」

「ふふ、話半分に聞いて置いてください。不肖の妹ですので」

チラリと視線を向ける秋乃に、ハルは冷や汗を掻くしかない。

仕事中に身内と会うのは、何とか気恥ずかしいものがあつた。

その様子を察したのか、千景は話を切り替える。

「もっとお話したいところですが、約束の時間がありますので」

「これは失礼を。ではこちらにどうぞ」

秋乃の案内で、ハル達は理事長室へ足を進める。

理事長室は予想していたよりも、ずっと普通の部屋だった。

ドアの正面は、一面窓ガラス。

壁には本棚が並び、難しそうな分厚い本がずらりと揃っている。

窓を背に、重厚な執務机が一つ。

床は茶色のカーペットが敷かれていた。

どれも年季は入っているが、手入れが行き届いているお陰で古さを感じさせない。

「……ゴルフパットとか、剥製とかあると思ってたよ」

「ハルちゃんはドラマの見過ぎねえ」

反省してます。

「理事長、お客様をお連れしました」

「ご苦労でしたね、御堂さん」

理事長と呼ばれた年輩の女性は、威厳と慈愛に満ちた声で労った。

「ようこそ白百合女子高校へ。私が理事長の新藤麻里亜です」

「今回警備を担当します、美園警視であります。この方々は民間協力者です」

「お話しは何ってましたが、皆さん随分とお若いですね」

「若輩者ではございますが、以前怪盗コレクトを撃退した優秀な者達、不足は無いかと」

美園の言葉に、理事長は細い目でハル達を見据える。

全てを見透かすような視線に、思わず身を固くしてしまう。

「ふふ、確かに只人ではありませんね」

理事長は優しく微笑んだ。

何を根拠に、とハルが内心思っていると、

「伊達に七十年も生きてませんよ。人を見る目だけは自信があります」

まるで心を読んだかのように笑って見せた。

驚く一同に、

「皆さんでしたら、私も安心して任せられます。よろしく願います」

理事長は頭を下げて告げた。

秋乃が退室し、残されたハル達は作戦の確認を行う。

「今回は昼間と言うことで、視界を奪う方法は限られています」
「煙幕とかですか？」

「ええ。催涙ガスなどを使われる可能性もありますので、まずこれを渡しておきます」

千景はそう言うと、ハル達にガスマスクを配った。

軍で使われるような本格的なもの。

入手経路は……聞かないでおこう。

「そしてコレクトの進入経路ですが、恐らくあそこかと」
「如何にもですしね」

「抜け穴等はこれから調べますが、可能性は高いですね」

一同は視線を向けるのは、大きな窓ガラス。

派手好きの怪盗が破って登場するのに、おあつらえだ。

「発煙筒なりを投げ込み、窓から侵入。その隙に宝石を奪う流れかと」

「ん〜」

「ハルよ、何か疑問が？」

「いや、あの怪盗にしては素直すぎないかなと思って」

「勿論全く違う手段をとる可能性もあります。そこは臨機応変に対応を」

千景の言葉にハル達は頷いた。

予告時間まで後三十分。

「……理事長、「天使の肝臓」を見せて頂いてもよろしいですか？」

「構いませんが、どうしてです？」

「万が一に備えてです」

理事長は美園の要求に答え、執務機の引き出しから小箱を取り出す。

蓋を開けると、そこには大きなルビーが布に包まれていた。

「これが、「天使の肝臓」」

「……健康ですね。やはり天使は節制してるのでしょうか」

流石はお医者様、目の付け所が違つ。

色々な意味で。

「失礼します」

美園は断りを入れてから、その箱を手取る。

そして、紫音の前まで持ってきた。

「これは本物ですか？」

「……古い宝石特有の力は感じる。「天使の肝臓」の本物かは分からぬが」

美園は満足げに頷くと、宝石を布で覆い、理事長へと返した。

「あの〜美園さん。今のは何を？」

「既にすり替えられている可能性が浮かんだので」

「怪盗コレクトが予告前に犯行に及ぶと？」

「予告通りに現れれば、すり替えられていても気づきませんから」

美園は真剣は顔で答えた。

冷静さを失わなければ優秀。

その言葉を証明する行為だった。

予告まで後十分。

「それでは、全員配置に着いてください」

千景の指示で、ハル達はそれぞれ持ち場に着く。

宝石がしまわれている、執務機の引き出し前には千景が。

美園はドアの前に立って、ドアからの襲撃に備える。

ハルと柚子、そして紫音は部屋の中央で、臨機応変な対応を。

そして、理事長は椅子に座り微笑む。

「張本人が逃げ出す訳にはいきませんものね」

芝居を楽しみにするかのようになり、嬉しそうに言った。

美園が説得したが、結局自己責任という事で、この場に残る事に。

予告時間が迫ってきた。

怪盗コレクト再び(2) (後書き)

予告状については、どうか寛大な目で見てください。

「見た目は子供頭脳は大人」に登場する怪盗を見て、真似を試みたのですが……如何せん謎を考える頭脳が足りませんでした。

天使の肝臓については、握り拳半分ほどの大きさと思ってください。本物より大分小さい設定です。

さて、次はいよいよご対面。

今回はどのような策を弄してくるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗コレクト再び(3) (前書き)

いよいよ怪盗との再戦の時。

怪盗コレクト再び(3)

時計の針が動き、正午を告げる鐘が鳴り響く。

理事長室の緊張感が極限まで高まる中、鐘は鳴り続ける。

そして、

パライイイン

派手な音を立てて、窓ガラスが割れた。

同時にゴトリとカーペットに何かが落ちる音がする。

「来ますよ！」

千景の言葉とほぼ同時に、室内に白煙が満ちた。

「発煙筒か？」

「各自警戒を続けてください！」

視界が失われたが、身体が自由が失われた訳ではない。

ハル達はこの後やってくるであろう、怪盗の登場に備えて身構えた。

「はははは、美園君、そしてハピネスの諸君、ようこそ私のショーへ」

白煙の中、怪盗コレクトの音が響く。

比喻ではなく、本当に部屋中に声が響き渡っているのだ。

「これ、マイクでも使ってるのか？」

「恐らく位置を特定できない様にしよう」

「発信源は、壁のスピーカーからですね」

部屋の壁には、校内放送用のスピーカーが設置されている。

声は確かにその方向から聞こえてきた。

「見事私の招待に応じてくれて、嬉しく思うよ」

「コレクト！ 姿を見せなさい！」

「ふふふ、これもショーの一環さ」

怒鳴る美園に、しかしコレクトは平然と答える。

「それではご堪能あれ。この怪盗コレクトの奇術を！」

コレクトの言葉が終わると同時に、

ジリリリリリリリ

目覚ましをパワーアップした様な音が、理事長室に響き渡った。

「ぐっ、これは……」

耳障りの音が、大音量でハル達に襲い掛かる。

慌てて手で耳を押さえるが、僅かに音を押さえられただけで、根本的解決にはならない。

煙と音の合わせ技で、コレクトは視覚と聴覚、そして両手の自由を奪った。

やがて、けたたましい音が止む。

「と、止まった？」

「くつくつく、既に輝きは我が手中に……」

「馬鹿な……不可能だ！」

「不可能を可能にしてこそ奇術。さて、此度のショーはこれにて終幕だ」

「巫山戯るな！ 姿を見せなさい！」

「ふっ、さらばだ！」

怪盗コレクトの言葉と共に、窓ガラスが再び破られた。

恐らく外に逃げたのだろう。

「おのれええ、逃がしはしませんよ。こちら美園、コレクトが外に出ました」

美園は携帯で、外に待機していた警官達に指示を送る。

「全員警戒態勢。ネズミー匹逃がさぬように！」

「……私です。警官の皆さんと協力し、コレクトの行方を確認しなさい」

千景もローズに連絡をする。

この攻防は、コレクトに軍配が上がったようだ。

煙が消え、ようやく視界が戻ってきた。

「全員無事ですか？」

千景の問いかけに、ハル達は頷いて答える。

理事長も含め、負傷した者は誰もいないようだった。

「それよりも千景、早く「天使の肝臓」の確認を」

「ええ、分かっています。理事長、お願いできますか？」

千景に促され、理事長は引き出しから箱を取りだし、蓋を開けてみせる。

そこには、先程と同じく布に包まれた宝石が入っていた。

「……やっぱりブラフだったのかな？」

「紫音、どうですか？」

「………やられたな。これはさっきの宝石とはまるで別物、いや宝石ですら無い」

「イミテーションですか」

「そんな馬鹿な……一体コレクトはどうやって……」

美園は信じられない、と驚愕の表情を浮かべる。

ハル達も同じ気持ちだ。

「千景、貴方移動しましたか？」

「いいえ、最初から最後まで、引き出しの前に立っていました」

「それは私が証明しましょう。間違いなく、この方は私の隣にいましたよ」

理事長の言葉で、千景が持ち場を離れていない事が証明された。

だとすれば、引き出しを開けて入れ替えるのは不可能だ。

「ではどうやって入れ替えたと……」

美園の呟きに、答えられる者は居なかった。

「……ええ、では追跡を行って下さい。決して見失わないように」

美園は通話を終えると、ハル達に向き合った。

「学校の敷地から空に逃げる、小型の気球があったそうです」

「逃走用ですかね」

「恐らくは。今追跡班を編制し、行方を追っています」

「剛彦とドクターも、その気球を確認しました。位置的に、その窓の付近から飛んだかと」

状況を整理してみる。

コレクトは、窓の外から発煙筒の様な物を投げ込み、視界を悪くした。

その後室内に侵入し、大音量で聴覚を封じ、その間に何らかの方法で宝石を入れ替える。

後は窓から外に出て、用意してあった気球で外に脱出。

これが現状で推察される、コレクトの行動だ。

「……………そもそも、コレクトはどうやって学校に侵入したんでしょうか」

「奴は変装の達人。事前に女学生に化け、中に入ることは容易でしょう」

美園は全く忌々しい、と吐き捨てる。

「捕まえられるでしょうか？」

「昼間なら見失う心配も無いと思うが」

「……………ビルの屋上に着陸、その後変装して街に移動すれば、恐らく発見は困難だと思います」

柚子と紫音に、千景は冷静な見解を告げる。

気球はあくまで、この包囲網を破るため。

少しでも目を離せば、コレクトならば容易に逃げ切れるだろう。

「て事は……………俺達は失敗したんですね」

……………
落胆したハルの言葉に、千景は無言。

「……………申し訳ありません。此度の失態、全て私の責任です」

美園は様子を見守っていた理事長に、深々と頭を下げた。

「ふふ、構いませんよ」

しかし理事長は穏和な笑みを崩さず言った。

「皆さんが全力を尽くしたのは、私にも伝わりました。その結果奪

われたのなら、それは怪盗が一枚上手だっただけの事。それを責めるつもりはありません」

「……………くっ」

その言葉に、ハルは思わず拳を握りしめる。

この人の信頼に応えられなかった自分に、腹が立って仕方なかった。

怪盗コレクト再び(3) (後書き)

まさかの敗北……。

GAME OVERの文字が、目の前に広がります。

とまあここで終わっては、あまりに後味が悪いので、そろそろ反撃と行きましょう。

怪盗コレクト編、次で完結です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗コレクト再び(4) (前書き)

まんまとコレクトに宝石を奪われてしまったハピネス。
果たして逆転の手はあるのか。

怪盗コレクト再び(4)

「……それでは、私は追跡班と合流します。後日、改めて謝罪に伺いますので」

一礼して理事長室から出ようとする美園を、

「待ちなさい美樹」

千景は制止する。

「何ですか。話は後にして下さい」

「……面白いショーでしたが、そろそろ幕引きにしませんか？」

「一体何の話です？ 私は急いでるんですが」

明らかに不機嫌な顔の美園。

「変装の達人とは聞いていましたが、ここまでとは思いませんでしたよ」

「だから一体何を言ってるんです？」

「もう良いでしょ。美樹………いえ、怪盗コレクト」

「ええええええ！！」

千景の言葉に、ハル達は驚きの声をあげた。

「ち、千景さん。それ本当なんですか？」

「ええ。状況から考えて、間違いないと思います」

「ちよつと千景、いくら貴方でも冗談が過ぎるわよ」

怒りの表情を向ける美園。

「勿論これから説明しますが、その前に……変装を解いてくれませんか？」

「だから何の事だか……」

「変装を解け」

ゾツと、思わず背筋が凍るような冷たい声だった。

千景の瞳は一切の感情を失った様に、底知れぬ闇のように暗い。「友人の姿を奪われて冷静でいられるほど、私は優しくありません」「……ふう、どうやら逆鱗に触れてしまったようだね」「美園は諦めたように笑うと、服を掴んでバツと脱ぎ捨てた。現れたのは、白いシルクハットにスーツの男、怪盗コレクトだった。

「久しぶりだねハピネスの諸君、そして」

コレクトは理事長へ視線を向け、

「お初お目に掛かる。私は怪盗コレクト、以後お見知り置きを」
優雅に一礼する。

「貴方が有名な怪盗殿ですか。私は新藤麻里亜です。お目にかかれて光栄ですわ」

「ふ、流石はマダム。いささかの動揺も見せぬとは」

「年寄りには、ちよつとやそつとの事では驚かないのですよ」

微笑み合うコレクトと理事長。

「さて、まずは見事と言っておこつか。よく我が変装を見破った」

「……世辞は結構です。それに、消去法で貴方が犯人だと分かっただけですから」

「ほう、詳しく聞きたいね」

「簡単な事です。今回のケースでは、貴方以外に犯行が可能な人がいない。それだけです」

千景はそう言つと、自分の推理を話し始めた。

「今回、幾つかおかしな点がありますが、一番の謎は宝石の入れ替えです」

「どうやって入れ替えたか、ですか？」

「いいえ、「どうやって」ではなく「どうして」入れ替えたかが問題なのです」

ハルの問いに千景は静かな声で続ける。

「宝石を盗むだけなら、わざわざ偽物を残す理由がありません」

「あっ……」

言われてハル達はハツとする。

冷静に考えれば、確かにその通りだ。

「驚かせたかっただけ、とは考えられないか？」

「可能性はあります。怪盗コレクトは愉快犯的な思考を持っていますから。ですが」

千景は視線をスツと細める。

「入れ替えなければならぬ理由があった、と考えればどうでしょう？」

「理由ですか？」

「ええ。そしてそれは、今回の一連の流れを思い起こせば、容易に想像が出来ます」

ハル達は揃って今まで起きたことを思い起こす。

まず、ハル達が理事長室にやってきた。

部屋のあちこちを確認して、その後美園が紫音に宝石の真贋を確認。

全員が配置に着く。宝石のある引き出しの前に千景が立つ。

予告時間、ガラスが割れ室内に白煙が満ちる。

コレクトの声と、けたたましい音が暫し響く。

音が止むと、コレクトは盗み終わったと宣言。

再びガラスが割れる音がして、見張りの人が空に逃げる気球を発売。

煙が消えた後宝石を確認し、入れ替わりが発覚。
そして今に至る。

「……ん？分からないですね」

「私もちよつと……」

「千景よ、一体何が理由なんだ？」

「視点を変えてみてください。何時なら、宝石を入れ替えられますか？」

「そりゃ……あの音が鳴っている間では？」

「……………いや、違う。それがコレクト殿の狙いだ」

紫音が何かに気づいたように、ハルの答えを否定する。

「如何にもあのタイミングで作業したように思えるが、大きな落とし穴がある」

「落とし穴？」

「千景が宝石の周辺に居ることだ」

「ご名答。私があそこに立っている以上、宝石に近づく気配に気づかぬ筈がありません」

「随分自信がありますね」

ハルの問いに千景は薄く笑う。

「色々ありましてね。とにかく、私があそこに立つてから宝石は動いていない。これは確実です」

「ではコレクトは何時入れ替えたの？」

「答えはもう出ている筈です。私が配置に着いたら犯行は不可。ならば」

そこまで言われ、ようやくハルと柚子も察しがいった。

「……………紫音に真贋を鑑定させる時、ですか？」

「そうです。本物と言わせた後、理事長に返すまでの間に、入れ替えは行われました」

天使の肝臓は拳半分ほどの大きさ。

コレクトほどの怪盗なら、苦もなく入れ替えは行えるだろう。

「後は全てお芝居。ガラスは遠隔装置で割れるでしょうし、発煙筒をタイミング良く転がせば、さも窓の外から投げ込まれたように見えるでしょう」

「あのコレクトの声は？」

「コレクトがピンマイクで、スピーカー越しに話していたのでしょ

う。視界は封じられていますが、私達には美樹とコレクトが言い合っている様に思えますので」

「大きな音の意味は何？」

「ブラフです。あの時間に盗んだぞ、と思わせるだけのものです」

「気球は見張りの人が目撃してますが？」

「ラジコン飛行機のオモチャがあるご時世です。気球の遠隔操作は容易でしょう」

千景は最後に一連の本当の流れを説明した。

コレクトは紫色に宝石を見せた後、理事長に返す前に偽物とすり替える。

予告時間に何らかの装置で窓ガラスを割り、タイミングを合わせて発煙筒を床に投げる。

マイクを使い、校内スピーカーから台詞を発してコレクト登場をアピール。

肉声で美園を、マイク越しにコレクトを演じ分けた。

そして、大きな音を鳴らし、今犯行が行われている様に見せる。

頃合いを見て音を消し、再度ガラスを割って、外に逃げたように思わせる。

後は気球を遠隔操作して、空から外に逃げたと信じ込ませれば、計画は完了。

自分も追跡するふりをして、この場を離脱すれば全てが終わる筈だった。

「……以上が私の推理ですが、何か間違いはありましたか？」

「くつくつく、いや、見事だよ。ほぼ全て正解だ」

コレクトは拍手をして、千景を称えた。

「まさかここまで見破るとは。正直驚いたよ」

「では、天使の肝臓を」

「ああ、主の元に返すでしょう」

コレクトはゆっくりと理事長へ近づき、懐から宝石を手渡した。

「あの子に鑑定して貰うと宜しいでしょう」

「いいえ、怪盗の貴方が負けを認めた以上、これは本物でしょうか」

理事長は箱に宝石を収める。

コレクトは僅かに驚きの表情を浮かべたが、小さく頷き恭しく一礼した。

「やれやれ、まさかりベンジマッチでも敗れるとはね」

「今回の事件は、やはり私達への挑戦でしたか」

「気づいて貰えたのだろ？」

「何故か美樹に届けられた予告状と、謎めいた文章を考えれば当然です」

千景の言葉にコレクトは満足げに笑った。

「彼女なら、きっと君に頼ると思ったからね」

「……その彼女、美樹は無事ですか？」

「ああ。一切危害を加えていない。私の誇りに誓おう」

「今何処に？」

「自宅で眠っているよ。そろそろ睡眠薬の効果も切れる頃だ」
人を傷つけない。

コレクトの誇りだった。

「さて、そろそろ私はお暇させて貰おうかな」

「……残念ですが、そうは行きません」

「私を捕まえるかね？ 正義の味方でも警察でも無い君が、何の為に？」

「貴方は美樹の、私の友人の誇りを傷つけました。少し見過ごせませんね」

再び千景とコレクトの間の空気が張りつめる。

「捕まえられるかな？」

「……そのつもりはありません。ただ、五体満足で返すつもりもあ

「彼らの目的と御堂ハル、それはある一点で結ばれる」

「……………」

「精々気をつける事だ。少なくとも彼らの中に一人、凄腕が居るか
らね」

情報は以上だ、とコレクトは千景の答えを待つ。

一分ほど沈黙が続き、

「……………行きなさい」

千景は瞳を閉じてコレクトを解放した。

コレクトが去った後、千景はローズ達と警官達に事の次第を伝え
た。

気球はフェイク。本物の宝石は守り抜いた。

後の処理は美園に任せ、全員帰投するようにと。

指示を出し終えた後、千景は理事長の前に立ち頭を下げた。

「申し訳ありません。私事で賊を逃がしました」

「ふふ、何を謝るのです。貴方は私の宝石を守ってくれた、これ以

上何も望んでませんよ」

「そう言っただけで助かります」

理事長の優しい笑みに、千景も自然と表情が軟らかくなる。

先程までの殺気ばしった空気は、すっかり消え去っていた。

「この修理費は警察……………美樹に言えば支払うと思いますので」

「構いませんよ。良い物を見せて頂いた駄賃とすれば、安いくらい
ですから」

「……………」

「過去は過去、今は今です。心乱して未来を失う事は許しませんよ
?」

「……………心に刻んでおきます」

千景は深々と頭を下げた。

ハピネス一同も事務所に戻るべく、理事長室を後にしようとして、
「ああ、一つ言い忘れてました」
理事長の言葉にその足を止めた。

「今日は非常事態でしたし、学校もお休みなので大目に見ますけど

.....」

視線はハルに向けられる。

「うちは基本男子禁制なので、お願いしますね」

「.....いつからお気づきに？」

「ふふ、最初からです」

お見それしましたと、ハルは本気で謝るのだった。

こうして、怪盗コレクトとの再戦は幕を閉じた。

怪盗コレクト再び（4）（後書き）

入れ替わりは怪盗のお約束ですね。

美園は食べ物に混入された睡眠薬で、当日の朝からお休み中。

白百合女子高校に来た時から、既に入れ替わっていました。

紫音に宝石の鑑定を頼むなんて、明らかにおかしかったですからね。

予想外の方向から、話が進展しました。

以前コレクトに接触したブラックは、ハルのことを訪ねました。

容姿と、モノマネについての確認です。

その情報を、今回千景達に提供しました。

少しずつ見え隠れする非日常の影。

果たしてハルを狙う目的とは。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

怪盗との再戦は終わったが……（前書き）

無事に怪盗コレクトから、宝石を守り抜いたハピネス。
となれば、あれが待っているわけで……。

怪盗との再戦は終わったが……

某日、某寿司屋前。

「ね、ねえ千景。一つ聞きたいんだけど」

「何でしょう?」

「今回はご馳走することに異論は無いの。私から言い出した位だし」

「ええ、珍しく殊勝でしたね」

「でもね、ここは流石にちよっと……」

美園は冷や汗を掻きながら、目の前の寿司屋に視線を向ける。

老舗の高級店。勿論まわらない寿司だ。

「何でも食べたいものを、と言ったのは貴方ですよ?」

「限度があるでしょ! こんな店に入る勇氣なんて、ボーナス後しか無いわよ!」

「大丈夫、ここはカードが使えますから」

「鬼ですか、貴方は……」

「怪盗コレクトの魔の手から貴方を助けた天使、と思ってますけども」

にやり、と千景は悪魔の笑みを浮かべる。

大きな借りがある美園は、それに逆らう術を持たない。

「……当分カツプ麺生活ですね」

「細かいことは気にしない。さあみんな、入店しますよ」

「は……い」

美園を引きずる千景を先頭に、ハピネス一同は寿司屋へと入っていった。

「いらつしゃい」

店内に入ると、カウンター越しに壮年の男性が低く渋い声を掛け

てきた。

「お久しぶりです、店主」

「おう、来たな嬢ちゃん」

「今日はたつぷり堪能させて貰いますね」

「へへ、そう言われちゃ下手なものは出せねえな」

親しげに会話を交わす千景と男性。

「で、その子達が嬢ちゃんのお仲間かい？」

「ええ、私の会社ハピネスの所員です」

「ほくかなか面白い連中が揃ってるな。っと、客を立たせたままじゃいけねえ」

店主はハル達に、カウンター席に座るように促した。

今回店にやってきたのは、ハルを始めとする主要メンバーのみ。

全員連れてくると流石に洒落にならないので、千景はやむを得ず自重した。

カウンター席に一同は並んで着席する。

「千景、貴方はこの店主とお知り合いなのですか？」

「……昔少々縁がありました」

千景はお茶をすすず、と噤りながら事も無げに答える。

「へへへ、まあちよいと昔に世話になった事があってな。それ以来の付き合いだ」

「だったら千景、少しくらいお会計をサービス……」

「する必要はありませんよ、店主。他のお客様と同様に扱って下さい」

「ううう」

僅かに見えた光明が即座に費え、美園はガツクリと肩を落とした。

「ではみんな、美樹のご厚意に甘えて、じゃんじゃん注文して下さい」

「あの、出来れば控えめに……」

「だが美園殿。この店は品書きも値段も何処にも無い故、控える事が難しいぞ」

「……タダなの？」

「そんな訳なからうに。」

「違いますよ。これは「時価」と言うものです」

「じか？」

「ええ。お寿司と言うのは魚を食材とするので、その日の漁獲量や品質、また季節によっても提供できるお寿司の種類や値段が上下するのです。それを逐一修正するのは大変なので、多くのお寿司屋さんでは時価、として品書きや値段を表記しない事が一般的なのです。珍しく饒舌な柚子の説明に、ハル達はおくと感嘆の声をあげた。

「へえ〜お嬢ちゃんは小さいのに物知りだな」

「……店主、日本酒を」

合わせて運転免許証を見せつける柚子。

静かな抗議だ。

「おっと、こりゃ失礼。お詫びに秘蔵の酒を振る舞うから、許してくれい」

「分かって貰えればそれで良いです……ただ、そのお酒は頂きましよう」

「……あれもお勘定に入るのかしら」

開始数分、美園の懐に早くも大打撃が加えられた。

「さ〜て、そろそろ握らせて貰おうか。じゃんじゃん注文してくれ」

「み、皆さん……出来るだけ、出来るだけ安価なネタを……」

「……店主、今日一番お薦めのネタは？」

ニヤリと美園に笑いかけた後、千景は店主に尋ねる。

「マグロだな。良いのが入ったんだよ」

「……マグロ、うん、それなら何とか……」

「では私は大トロを」

「ぐふう」

美園に五十のダメージ、と言った感じか。

「ねえハル。トロって？」

「ん〜マグロの身体で、脂がよくのった部位って言えば分かるか？」
「美味しいの？」

「おいおい嬢ちゃん。うちの店で美味しくない寿司なんて無いぜ。
特に今日のトロは絶品だ」

「じゃあ私も大トロ！」

「ごふう」

美園に百のダメージ。

「あいよ、大トロお待ち」

店主は千景と奈美の前に大トロを差し出す。

「……ふふ、見事です」

「うわ〜美味しい。凄い、こんなの初めて！」

「そうかいそうかい。そんな喜んで貰えると嬉しいね」

グルメリポーター顔負けの奈美のリアクションに、嬉しそうに笑う店主。

それを見てハル達も黙っては居られない。

「店主、俺にもお願いします」

「私にも」

「握って頂こう」

「お願いねえ」

「ふん、頼むぞ」

「……げふう」

畳みかけるような連続攻撃に、美園のライフは零に近づいていった。

何事も最初の一步が肝心だ。

その意味では、ハピネスの面々は最高のスタートを切ったと言える。

美園にとっては最悪の、だが。

スタートダッシュが決まれば、後は最高速度まで加速するだけ。もはや彼らは止まらない。

「次はイクラお願い」

「ウニに挑戦してみるか」

「店主、ヒラメを」

「私はカレイにするわぁ」

「うーん、エビかな」

「私はイカで」

「吾輩は貝類を並べて貰おうか」

美味しいお寿司に舌鼓を打ちながら、食欲を満たしていく。

「こうなってくると、全部の種類食べてみたいわね」

「……奈美、それは流石に」

ハルはチラリと、隅っこで生氣のない顔をしている美園を見る。

だが、無邪気というのは時に残酷なもの。

「ねえおじさん、全部頂戴！」

食欲魔神の好奇心は、美園の懐にとどめを刺すに充分な一撃だった。

それから一時間ほど。

すっかり満足しきったハル達と対照的に、

「……………」

この世の終わり、とばかりに凹む美園。

これからお会計の時間だ。

ハル達を店外に出し、千景と二人レジの前に。

「はは、随分食ったな。勘定はしめて……………」

安い新車を買えそうな額だった。

美園は財布を開き、震える手でカードを取り出し店主に渡す。

「まいど。じゃあこいつにサインを頼むぜ」

「はい……………あれ？」

渡されたレシートを見て美園は気づく。

先程言われた額の、半分しかそこに記載されて居なかった。

「これは……」

「ああ、残り半分は千景嬢ちゃんから、もう貰ってた」

店主の言葉に、驚きの表情で千景を見る。

「千景……貴方」

「今回のご馳走は、貴方に反省を促す為。でも、私も反省する点があったので」

「一体何よ。報告を聞く限り、貴方にミスは……」

「怪盗コレクトを捕獲出来たのに、個人的な事情で見逃しました。

その戒めです」

無論、それは千景の役割ではない。

ただ千景は、美園の誇りのためコレクトを捕らえる、あるいは仕置きをするつもりだった。

しかし、個人的な取引で彼を見逃した。

あくまで自分自身への戒めだ。

「へへ、千景嬢ちゃんが変わらねえな。自分に厳しいくせに、身内には甘い」

「……気のせいでしょう。私は自他に厳しいですから」

「ま、そう言う事にしとくぜ」

澄まし顔の千景からは、その本心はうかがい知れない。

だが美園には、彼女に後光が差しているのがハッキリと見えた。

「ありがとう千景……」

美園は涙ぐみながら、残り半額の支払いをするのだった。

結局、美園は気づかなかった。

半額とは言え、ご馳走で多額の出費をしたこと。

そして、千景が出した半額も、自分が払った依頼料から出ている事を。

（依頼料は残っていますし、コレクトからの情報料とすればお釣りが来る）

（そして、美樹の心証は良くなり、多少無理なお願いも聞いてくれるでしょう）

「……計画通り、ですね」

千景は人知れず、クスリと笑みを浮かべるのだった。

怪盗との再戦は終わったが……（後書き）

回らない寿司、良いですよね。

数えるほどしか行った事はありませんが。

毎回痛い目を見ている美園。

いつか彼女の優秀な面も、書いてみたいものです。

相手がコレクトで無ければ……。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

魔法使いに、私はなる！（前書き）

小説や漫画、ドラマにアニメ。何かと影響されやすい奈美。
今回彼女が影響されたものとは……。。

魔法使いに、私はなる！

それは、正に運命の出会いだった。

ハルの部屋に遊びに来ていた奈美は、何気なくテレビを着けた。

丁度やっていたのは、金曜日の夜に放送される、ロードショウの映画。

一目で奈美は、その虜になった。

食い付くように最後まで見続け、奈美はある決意を固めた。

「……ねえ、ハル」

「ん、どうかしたか？」

「私は、私は……魔法使いになる！」

某海賊漫画の様に、奈美は声高らかに宣言するのだった。

翌日。

ハピネス事務所を訪れたハルと奈美は、紫音に話を持ちかける。

「……魔法使い？」

「うん。私魔法使いになりたいの」

怪訝そうに視線を向ける紫音に、奈美はきらきらと瞳を輝かせて答える。

「ハルよ。一体何事なんだ？」

「すまん。実は昨日、魔法使いが主人公の映画を見ちゃって……」

眼鏡少年が活躍する、ベストセラー小説が原作のあれだ。

最新作公開に合わせて、一作目が地上波で放送されていた。

「なるほど。それに影響された訳か」

「もう昨日からずっとこの調子だよ」

ハルは疲れた顔で言った。

「事情は分かっただが、何故私の所に？」

「だって、紫音は不思議な力があるじゃない。この間、透明人間の手を縛ったし」

「……あれは単なる術だが」

「どう違うの？」

「むっ……むうう……」

奈美の突っ込みに、紫音は思わず答えに窮する。

紫音の知識では、魔法は現実には不可能な手法や結果を実現する力。

そう考えると、実は自分の力と違いが無いような気がした。

「……ハルはどう思う？」

「うーん、魔法は西洋、術は東洋ってイメージかな」

「性質そのものに区別は無いと言う認識か……」

「素人考えで悪いけど、どっちも超常的な力を使っただ点では同じに思うよ」

ふむ、と紫音はハルの言葉を受け入れる。

今まで考えたことも無かったが、確かに同じような力なのかも知れない。

「まあ、仮に同じだとして、奈美は私に何を求める？」

「私に魔法教えて！」

「無理だ」

コンマ数秒で、奈美の野望は敗れた。

「ど、どうしてよ。教えてくれたって良いじゃない」

「前にも言ったと思うが、奈美には素質というか……霊的な才能が欠片もないのだ」

一刀両断な回答だった。

「そんな〜」

「……素質が無いと、その術ってのは全く使えないのか？」

傍目で分かるほど凹んだ奈美を見かねて、ハルは紫音に聞いてみる。

「基本的にはな。厳しい修行を長年積み、簡単なものなら使えるかもしれないが……」

「ホント!？」

「うむ。俗世から完全に離れた世界で、大体五十年ほど頑張ればあ
るいは」

上げて落とす、見事な技だった。

「そう気を落とすなよ。あの映画だって、魔法使いはごく一部だろ
?」

確か魔法使いの血筋が必要だったはずだ。

「うっ……私の野望が……」

「野望?」

失意の奈美が口にした言葉に、ハルは思わず聞き返す。

「そう言えば、お前は何で魔法が使いたかったんだ?」

「実は来週から、休み明けの学力確認テストがあるの」

「……をい、まさかそのテストを魔法で、とか考えてたんじゃ」

「だってね、もし赤点とったら一ヶ月間毎日補習で、ハピネスに
来れなくなっちゃう」

寧ろ今までバイトを許可されていた事が驚きだ。

「だったら勉強すれば良いだろ。まだ時間あるし、俺も手伝ってや
るから」

「勿論そのつもりだけど……どうしても英語は苦手なのよ」

ハルに泣きつく奈美。

魔法にすぎりつく辺り、相当追いつめられていたのだろう。

「んなこと言っても、魔法は結局使えないしな……」

「……ふむ、そう言うことなら、私に一つ考えがあるぞ」

黙っていた紫音が、不意に二人に告げた。

「本当に?」

「ああ。要はそのテストを突破できる学力を、奈美が身につければ
問題ないのだから?」

「簡単に言うけどな、結構難問だぞ」

「正攻法では、な。だから今回は、少々ずるをしましょう」

紫音はそう言うと、懐から一枚のお札を取り出した。

「手の平を上にも、こっちに向けてくれ」

「こっち？」

差し出された奈美の手に、紫音はお札を乗つけた。

「……彼の者に……天の英知を……分け与えよ……添！」

紫音が言葉を発した瞬間、お札が薄く発光し、それが奈美の手に吸い込まれていく。

神秘的な光景を、ハルと奈美は呆然と見届けるしか無かった。

やがて全ての光が奈美に溶け込むと、紫音は小さく息を吐く。

「……よし、これで良いだろう」

「一体何をしたんだ？」

「奈美に魔法を掛けた。学力が向上する、な」

「本当!？」

顔を輝かせる奈美に、紫音は頷く。

「とはいえ、そのままでは効果は無い」

「どうすればいいの？」

「この札を常に身につけて、勉強すればいい。通常の十倍以上の学習効果が得られる」

とんだチートだ。

「来週のテストなら、今から勉強すれば満点を取れる実力が身につくだろう」

「……紫音、ありがとう」

「礼はそのテストを突破してから受け取ろう」

「うん……そうね。それじゃあ早速勉強しなくちゃ。ハル、先に帰ってるから!」

奈美はやる気に満ちた表情で、意気揚々と事務所を後にした。

「……紫音、あの魔法は本当なのか？」

「勿論嘘だ」

しれっと言い放つ。

「魔法使いでは無い私が、魔法を使える筈が無いだろう」

言われて気づく。

確かに紫音はあの時、術ではなく魔法を掛けたと言っていた。

「とは言え、満更全て嘘だという訳でも無いがな」

「どういうことだ？」

「人は思いこむことで、その力を十二分に発揮する事が出来る」

「らしいな」

「勉強しただけ効果があると、奈美は思いこんだ。さて、どうなる

と思う？」

「……なるほど」

紫音の意図を察し、ハルは納得の笑みを浮かべた。

人の思いこみは時に不思議な現象も起こす。

偽薬効果と呼ばれるものが分かりやすいだろうか。

薬としては効果の無い物を飲み、それを薬と信じた患者の状態が

回復した例があるらしい。

科学的な根拠は無いが、精神が肉体に影響を及ぼす可能性は充分

あるだろう。

「何にせよ、奈美が自分から勉強する気になったのは、有り難い話だ」

「うむ。とは言え独学では限界がある。フォローは頼んだぞ」

「分かってるよ」

奈美の勉強に付き合うべく、ハルも事務所を後にするのだった。

そして、一週間後。

全教科平均点以上の答案を誇らしげに掲げる、奈美の姿があった。

「やったね 紫音のお陰よ、本当にありがとう」

「……いや、実は……」

「おいおい、家庭教師の俺は？」

「真実を告げようとする紫音を、ハルはそつと制する。

「ハル？」

「紫音は真正銘魔法を掛けたよ。努力っていう名前の魔法を」

「……少々くさく無いか？」

「うるさいやい」

信じる心が産み出す奇跡。

それが魔法だと、ハルは思っていた。

魔法使いに、私はなる！（後書き）

タイトルは……ごめんなさい、悪ふざけです。

奈美が主役の話にしては、珍しく、と言うよりも初めて綺麗に終わりましたね。

たまにはこういうご褒美があっても良いと思います。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

俺があいつであいつが俺で？（1）（前書き）

いつものようにハピネスを訪れようとしたハル。
そんな彼に突然……。

俺があいつであいつが俺で？（1）

それは、偶然に偶然が重なって起きた悲劇だった。

依頼を受けるべく、事務所に向かっていたハル。

ビルの下を進んでいると、

「きやあああああ」

何故か上から女性の悲鳴が聞こえた。

咄嗟に視線をあげると、そこには、

「……奈美？」

ハピネス事務所の窓から、真つ逆さまに落ちてくる奈美の姿が。

奈美はハルに向かって一直線に落下して、

ゴキイイイ……………ピシィ

堅い物がぶつかり合う音と、何かが割れる音が響く。

「お、親方……………空から……………女の子が……………」

それが、意識を失う寸前にハルが残した、最後の言葉だった。

「……………はっ！」

意識を取り戻したハルは、大きく目を見開く。

白い天井と蛍光灯、見知らぬ光景がそこに広がっていた。

「こ、ここは……………」

「あああ、気がついたのねえ」

声の主はすたすたとハルの元に歩み寄る。

「ローズ？」

「そうよお。まだ意識がはっきりしないのかしらあ？」

「いや、大分戻ってきたよ」

「よかったわあ〜。一時はどうなることかと思ったわよお」

「……悪いけど、こうなつた経緯を教えてくださいませんか？」

ハルの言葉にローズは怪訝そうな表情を見せたが、何も言わずに頷いた。

「そうねえ、折角だし最初から話すわあ」

「ああ、頼む」

「あの時、奈美ちゃんはハルちゃんが、事務所の下を歩いているのを見つけてえ、思い切り身を乗り出して脅かそうとして落っこちたじゃない」

「……………」

「それでえ、ハルちゃんと頭と頭がゴツチンコ。病院に搬送したの
お」

「……なるほど。全ての元凶はあいつだったか」

少し説教しなくてはならない様だ。

ハルがぐつと拳を握ると、ローズが不安げに声をかけてきた。

「あのねえ、本当に大丈夫？ まだ相当混乱してるみたいだし」

「お陰で意識ははっきりしてるよ。それより聞きたいんだけど、奈美はどこにいる？」

「え……………」

思い切り顔を引きつらせて、ローズは一步後ろに下がる。

「ん、どうした？」

「……頭の確認するけどお、貴方は誰？」

「心配しすぎだよ。俺は御堂ハル。ハピネスのアルバイトだよ」

瞬間、ローズの顔が青ざめた。

そのまま首を傾げるハルに手鏡を差し出す。

「鏡？ 寝癖でもついてるのか？」

「……気をしっかり持ってねえ」

意味がわからないが、とりあえずハルは素直に従い鏡をのぞき込む。

映し出されたのは、勝ち気そうな顔をしたショートカットの美少女。

黒髪のハルとは似てもつかないその姿は、
「な、な、な、何じゃこりやああああ!!」
早瀬奈美そのものだった。

「じゃあ、本当にハルちゃんなのお？」

「だからそう言ってるじゃないか」

「……江戸幕府を開いたのはあ？」

「徳川家康。その後秀忠、家光、家綱、綱吉、家宣、家継、吉宗、家重、家治、家斉、家慶、家定、家茂、慶喜と全部で十五代まで続いた」

「どうやら本当みたいねえ」

納得していただいたようで何よりです。

「だとしたらあ、やっぱり中身が入れ替わったってやつかしらあ？」

「極めて非科学的だけど、それが一番可能性が高いな」

ハルはため息混じりに答えた。

頭をぶつけて、身体の中身が入れ替わるなんてのは、漫画なんかでよくある話だ。

だがまさか、自分が体験する羽目になるとは思ってもみなかった。

「何か不具合とかでてない？」

「流石に違和感はあるけど、今のところは何も」

ハルは身体を動かしてみせる。

背が自分より高く、女性と言うことで細かな違和感はあるが、問題なく動かせた。

「まあこんな感じだ。それで、奈美……てか俺の身体はどこにいるんだ？」

「この病院に居るわあ」

「そりゃそうか。じゃあ案内してくれよ」

しかしローズは無言のまま。

「どうかしたのか？」

「……覚悟だけはしておいてねえ」

「何だよそれ」

ローズはハルの問いに答えず立ち上がる。

「こつちよ。着いていらつしやい」

ハルは様子のおかしいローズを疑問に思いながらも、その後を着いていくのだった。

案内されたのは、ICU（集中治療室）だった。

嫌な予感を胸に奥へと進んでいく。

そして、

「お、俺が……」

頭に包帯をグルグル巻きにした、御堂ハルと対面した。

「あら、奈美。具合は良いのですか？」

「えっと千景さん……実はかくかくしかじかでして」

ハルは簡単に事情を説明する。

驚いた表情こそ見せたが、千景は納得する。

紫音のお陰で、非科学的な事柄に耐性が付いているようだ。

「なるほど……ではこちらのハル君には、奈美が入っていると」

「何か言葉だけだと混乱するわねえ」

「すいません。」

「それで千景さん。俺のと言うか、奈美のと言うか……どんな具合なんですか？」

「袖子が居なければ、今頃あの世行きだったそうです」

「さらりと言われ、背筋がぞつとした。」

「そ、そんなにやばかったんですか？」

「頭蓋骨陥没で、緊急手術が行われました。幸い一命は取り留めましたが」

「意識はまだ戻らないみたいねえ」

「……俺は改めて、奈美の身体の強度に驚きましたよ」

頭をさすってみても、たんこぶ一つ出来ていない。
同じ人体だと言うのに、こつも硬度が違う物なのか。

「……ハル君、少し顔色が悪いですね」

「……自分のこういう姿を見るのは……何というか……きつくて」
鼻から管を通すハル（奈美）の姿に、少なからずショックを受けていた。

「まあ、普通は絶対に見ることのない光景だものねえ」

「手術は成功したので、何日かすれば目覚めるだろうと、柚子が言っていました」

「そうですね」

少しだけホツと胸をなで下ろす。

「一生寝たきりです、と言われたどうしようかと、真剣に困っていたからだ。」

「しかし、困ったことになりましたね」

「ええ。どうにか元に戻れないでしょうか」

「うふふう、大丈夫よお。うちに天才科学者が居ることをお忘れじゃない？」

「誰です？」

ハルと千景の声が綺麗にはもった。

「……くれぐれも本人の前で言わないでねえ。拗ねるとフォローが大変だからあ」

「分かっていますよ。それでドクターには連絡を？」

「ここに来る途中にい。もう凄いやる気になってえ、治療装置の開発に取り組んでるわあ」

「ん〜蒼井つて、そんなキャラだっけ？」

有り難い事だが、にわかには信じられない。

あの蒼井が自分達の為にそこまでやる気になるとは思えなかった。
「ドクターにあるのは発明欲よお。未知の発明こそお、彼を奮い立

たせるのお」

「良くも悪くも純粹ですから。扱いさえ間違えなければ、優秀な人材なのは確かです」

「はあ、まあそれなら良いんですけど」

「どうも釈然としないが、この二人が言うのならそうなのだろう。

それにこの事態を解決してくれるのなら、他に何も言うことはない。

「さて、それでは一度事務所に戻りましょうか」

「連絡はしたけどお、みんな心配してるだろうしねえ」

「……えっと、入れ替わったことは？」

「現時点で私と剛彦、それにドクターしか知りません」

「ハピネスのみんなには伝えるつもりだけどお、どうかしらあ？」

「別に構わないかと。当分依頼は受けられないと思いますし、事情

説明は必要でしょう」

ハルの言葉に二人は頷く。

「では戻りましょう」

こうして三人は病院を後にし、ハピネス事務所へと向かう。

ハルと奈美を襲った不思議な出来事は、こうして幕を開けるのだ
った。

俺があいつであいつが俺で？（１）（後書き）

はい、お約束の入れ替わり現象です。

もう定番中の定番ですね。

ただ一つ違うのは、ハル（奈美）が意識不明という点でしょうか。

……まあ、身体の強度が違いすぎますから。

果たしてこの奇妙な出来事は、どのような展開を迎えるのでしょうか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

俺があいつであいつが俺で？(2)(前書き)

ハルと奈美が入れ替わって、早一日。

早くもハルはグロッキー。

そんな彼に、更なる試練が訪れようとしていた……。

俺があいつであいつが俺で？（２）

正直、甘く見ていた。

身体が入れ替わった程度、難なく乗り越えられると思っていた。事実、相手が同性であったのなら、ここまで困らなかつただろう。だが現実は厳しい。

女性である奈美の身体を持ったハルは、絶望的な状況に追い込まれていた。

入れ替わり翌日。

ハピネス事務所に呼び出されたハルは、傍目にも分かるほど疲れ果てていた。

「こんにちわ……」

「来ましたねって……随分お疲れの様子ですけど」

「ははは……正直もう限界です」

日常生活を一日足らず送っただけで、ハルは根をあげた。

しかし、誰が彼を責めることが出来よう。

お風呂やトイレ、着替えと言った行為がどれほどハルを蝕んだか。ハルが受けた精神的ダメージは計り知れない。

「不謹慎ですけど、意識のない奈美が羨ましくなります」

「……そんなハル君に伝えるのは、少々酷かもしれませんが……」
「つお願いが」

「もう何でも来いです」

「では遠慮無く。明日から学校に行ってください」

「……は？」

思わず聞き返してしまう。

「学校って……大学じゃ無いですよね？」

「貴方は今奈美でしょ。だったら当然、白百合女子高校に決まって

ます」

「絶対嫌です！」

日常生活だけでも、もう参っているのだ。

女子高に通うなど冗談じゃない。

「俺はこれ以上、男としての尊厳を失いたくありません」

「ですが、奈美を欠席させるわけにも行かないですよ？」

「病欠なりなんなり、理由つけて休めるでしょうが」

「……まあ普通はそうですが……あの子の場合、普段が普段でして千景はハルに、奈美の通知票を見せる。」

見事にロスコアが並ぶそれに、ハルは思わず顔を引きつらせる。

「これは酷い……」

「そして、こつちを見て下さい」

「……欠席無し……早退……遅刻……へっ？」

「時間にルーズですから」

諦めたように千景は告げる。

「……実際に出席の半分が遅刻という、アホの所行をやったのけていたのだ。」

「これ相当やばいんじゃない？」

「ええ。成績と素行の合わせ技一本、留年や退学の可能性もあります」

「……あの馬鹿」

これからは、朝起こしてやろうと固く心に誓った。

「まあそう言うわけで、どんな理由でも欠席するのは不味いのです」

「自業自得ですけどね」

「最終的な判断はハル君に任せますが……どうします？」

ハルは目を閉じ、暫し思考を巡らせる。

数分間考え、結論を出す。

「……やります」

「良いんですね？」

「あいつの泣き顔は見たくないですから」

「……わかりました。装置完成まではこちらに顔を出す必要はありません。そちらに専念を」

領き事務所を立ち去ろうとしたハルに、千景は一冊のファイルを手渡す。

「これは？」

「あの子のデータです。学校での交友関係やクラスの座席等、参考にして下さい」

「助かります。でもどうやってこんな物を？」

「……企業秘密、としておきましょうかね」
クスリと笑う千景。

問い詰めるのは無駄、とハルはお礼だけ言い事務所を後にするのだった。

ドクターの発明が完成するのが先か。

ハルがギブアップするのが先か。

まさに、男の意地を掛けた死闘が始まるうとしていた。

そして、翌日。

抜かりは無いはずだ。

服装も何もかも、奈美の普段通りの筈。

後は、自分の演技力次第。

「……行くか」

ハルは覚悟を決め、白百合女子高校の門をくぐるのだった。

奈美のクラスは1 - B。

意を決して、教室のドアを開ける。

「あ、奈美ちゃんおはよう。今日は珍しく早いね」

「お、おはようございます」

「……あれ、身体の調子悪いの？」

「べ、別に普通ですけど」

「だっていつもの奈美ちゃんなら、『はよ〜』とか『やっほ〜』って言うし」

（あいつは普段どんな挨拶をしてるんだよ！）

お嬢様学校と言うことで意識しすぎた様だ。

ハルは瞬時に誤差を修正する。

「は、はは、ちょっと昨日テレビで見たお嬢様っぽくしてみただけよ」

「そうなんだ」

クラスメイトの女子は、何とか納得してくれたようだ。

ファーストコンタクトから冷や汗ものだった。

（早く、早く座席について……なるべく会話をしないように……）

「あら奈美。今日は早いよね？」

「げえ、秋乃……」

某三国志の軍師様より怖い相手が現れた。

「何よ、げって。随分なご挨拶ね」

「あ、あはは、ごめんね。ちょっと考え事をしてて、つい」

「……どこが悪いの？」

「別に平気だけど、どうして？」

「だって、奈美が考え事なんて、今まで一度も無かったし」

（読めない、あいつの行動パターンが読めない！）

「ん〜そう言えば、何か何時もと雰囲気が違う感じだし……」

「気のせい、そう、気のせいよ」

「……まあ良いわ。それで今日は早いけど、何かあったの？」

ふと壁に掛けられた時計を見る。

朝礼開始五分前。

特別早いわけでは無いと思うが。

「そ、そうかな？」

「だって朝礼開始前に奈美が居るなんて、何ヶ月ぶりじゃない？」

(あいつはあああ！)

「……気持ちを入れ替えたのよ。ほら、ハルにお説教されちゃって」「お兄ちゃんに?」

「うん。時間を守れないのは、恥ずかしいことだって嘘は言っていない。」

これから奈美にそうやって、説教する予定なのだから。

「へえ、あのお兄ちゃんが」

「意外なの?」

「お兄ちゃん奈美には甘いところあるから」

(……面目ない)

「でも良い事ね。三日坊主にならなきゃ良いけど」

「……暫くは平気だと思うな」

少なくとも元通りになるまでは。

五分後、女性教師がやってきて朝礼が始まった。

そこで教師はハル……奈美を見て、

「は、早瀬さん!!」

滅茶苦茶驚いた。

「私の時計遅れてたのかしら……」

(先生、ご迷惑お掛けしてます)

「いえ、今日から心を入れ替えて、遅刻を無くそうと決めたんです」「文字通りだが。」

教師は暫し固まり、思い切り涙を流す。

「おおお神よ、迷える子羊を導いて下さったのですね……」

そんな大げさな、と笑うことは出来なかった。

何せクラスメイト全員が、うんうんと頷いていたから。

(こりや戻った後も、本気で頑張らせなきゃいかな)

ハルは真剣に思った。

学校生活を送っていると、奈美と言う人物が分かってくる。

まず、授業は殆ど聞いていないと言うことだ。

「は、早瀬……どうしたの、授業を聞いたりして先生、問題発言ですよ。」

「はい、実は心を（以下略）」

「う、うううう、先生は嬉しい……」

国語の教師は涙を堪えきれなかった。

「では早瀬さん。この問題を解いてみて下さい」

「はい」

数学の教師に促され、ハルは黒板の前に歩み寄る。

「は、早瀬さん……一体どうして？」

「????？」

「いつもなら、分かりません、と言って挑もうともしないのに……」
（……ご迷惑お掛けしてます）

「実は（以下略）」

「……ぐすん……いけませんね、歳をとると涙もろくて眼鏡を外し、ハンカチで涙を拭う教師。」

「ここの英文を……じゃあ早瀬に訳して貰おうか」

「はい。トムは」

ハルは指定された教科書の英文を、訳して告げた。

特別得意ではないが、それでも高校一年レベルの英語なら問題なく訳せる。

訳を終えて座ろうとして、

「「早瀬（奈美ちゃん）が壊れた!!」」
教師とクラスメイト達に叫ばれた。

「どどど、どうしたんだ早瀬。何か変な物でも食べたのか？」

「奈美ちゃんが英語を喋った……」

「日本語以外は認めないって、今まで一度も和訳しなかった奈美ちゃんか」

「言語を日本語だけにするって息巻いてた早瀬さんが」

「一億人と会話できるから、日本語だけで充分って言った奈美が……」

（奈美 いいいいい！！）

信じられない物を見た、とクラス中の視線がハルに集まる。

（不味い……奈美の行動は俺の予想を遙かに超えてた）

言い訳を必死に頭の中で考え、最善な物を選び取る。

「実は家庭教師がついて……少し喋れるようになったのよ」

「お前に英語をやる気にさせたお方……是非お会いしたいものだ」

「は、ははは、まあ機会があったら」

色々あったが、どうにか昼休みまで乗り切った。

「はあ、疲れた」

「じいじいじい」

「……どうしたの秋乃？」

「やっぱり変ね。貴方本当に奈美？」

「鋭いぞマイシスター。」

「い、嫌ね、決まってるじゃない」

「む……」

「大体、違うって言うなら、私は誰なのよ」

「ん……、奈美であり奈美じゃない、って感じなのよね」

「鋭すぎるぞマイシスター。」

「ほ、ほら、お昼にしましょうよ」

疑いの眼差しを向ける秋乃に、ハルは話題を強引に変える。
鞆から弁当箱を取りだし、机の上ののつけた。

「……お弁当？」

「え、ええ」

「それ手作りよね？ 奈美が作ったの？」

「……ハルが作ってくれたの」

嘘は言っていない。

真実でも無いが。

「さして、中身は何かなく」

パカリと弁当箱の蓋を開ける。

まあ作った本人なので、当然知っているわけだが。

「うわあ、美味しそうだわ」

「……確かにお兄ちゃんのお弁当ね」

「見た目で分かるの？」

「おかずの盛りつけとかは、結構癖が出るから」

（その癖を何故知って居るんだ、秋乃よ）

「だから言ったじゃない。ハルが作ったって」

「……そうね。ごめん、変に勘ぐっちゃって」

「気にしてないわよ。さ、食べましょ」

結局昼休みも、一時だつて気が休まる事は無かった。

午後の授業も、大体午前と同じ感じた。

普段どれだけ奈美が好き勝手やっていたのか、充分思い知らされた。

一日の授業が終わり、帰り支度をしながらハルは、

（……あいつの将来のためにも、今の内に矯正しておかなきゃ）

まるで親のような決心を固めた。

「ねえ奈美、ちよつと付き合ってくれない？」

「あ、ごめん。今日これからバイトが……」

「時間は取らせないから、こつち来て」

秋乃は無言わず、ハルの手を引っ張り、屋上へと移動した。

「一体どうしたのよ、随分強引じゃない」

「……」

「秋乃？」

「ここの会話が誰かに聞かれる事はないわ。だから、もう良いでし

よ……お兄ちゃん」

(!!!!!!!!!!)

思いがけない言葉に、ハルは動揺を抑えるのに必死だった。

「ふう、やっぱりね」

「な、何を言ってるのよ」

「あのね、結構バレバレだったよ」

秋乃の言葉に、ハルは動揺しながらも反論を考える。

「じよ、冗談は止めてよ。どう見ても私は私じゃない」

「……身体はね。だとすると……心が入れ替わったとか、そんな感じかな」

(何処まで鋭いんだマイシスターよ)

「今日は最初から様子がおかしかったしね」

「だからそれは、心を入れ替えて……」

「そこは流石お兄ちゃんね。嘘は言っていないんだもん」

全て見切った、と言わんばかりに秋乃は小さく笑う。

「細かな仕草や癖、立ち方歩き方食べ方、全部お兄ちゃんそのもの」

「……い、一緒にいたから、移ったのかもしれないわ」

「そして決定的なのは……お兄ちゃん、奈美は文字を左手で書くのよ」

「なっ、そんな筈は……」

そのハルの反応に、秋乃は満足げに頷く。

「やられた。」

「まんまと、罠に嵌ってしまった。」

「奈美が右利きなのは知っていた筈なのに。」

「まだ何か、反論はある？」

「……はあ〜」

ハルは両手を上に、降参の意思を示す。

「お前は将来探偵にでもなるつもりか？」

「ふふ、それも悪くないかな。さあお兄ちゃん、話して貰えるわね？」

「……ああ。だけど他言無用で頼む」

秋乃が頷いたのを確認し、ハルは今まで起こったことを説明した。

説明を聞き終えた秋乃は、複雑な表情を見せた。

「何というか……奈美らしい話ね」

「全面的に同意する」

「それで、お兄ちゃんは……お兄ちゃんの身体は平気なの？」

「命は取り留めた。医者の見立てでは、数日中に意識が戻るらしい」

「よかった」

心底ホツとしたように呟く。

本気で心配してくれたようだ。

「まあ、事情は分かかって貰えたと思う」

「えっと、千景さんだっけ。その人の判断は大正解よ」

「やっぱりやばかったのか？」

「うん。一週間も休めば、恐らく留年は確実だと思うわね」

首の皮一枚とはこの事か。

「あいつは……」

「でもこの間のテストは凄い頑張って、いい成績だったの。あんまり怒らないであげて」

「……知ってるよ」

実は仕掛け人の一人ですから。

「まあそんなわけで、元に戻るのには早くても一週間かかるらしい」

「その間はお兄ちゃんか？」

「……不本意ながらな」

不満そうに告げるハルに、秋乃は何故か笑顔を向ける。

「何だよ、随分嬉しそうじゃ無いか」

「だって、その間はお兄ちゃんと一緒に居られるもん」

「頼むから人の居るところで呼ぶなよ？」

「任せてよ。こう見えても外面の使い方は上手いんだから」

褒めて良いやら……。

「えへへ、そう言えばお兄ちゃんと一緒にの学校に通うの、小学校以来だね」

「お前は中学から私立だったからな」

過保護の父親に、女子中学へ強引に入れられた。

あの時の親子げんかは、今でも思い出せるほど激しかった。

「奈美には悪いけど、折角のチャンス、堪能させて貰うとしましょ
う」

小悪魔の笑みを浮かべる秋乃に、ハルはただ祈るしか無かった。

妹が、Sじゃありませんように、と。

俺があいつであいつが俺で？（２）（後書き）

奈美の学校生活については……ご想像通りだと思います。

皆さんのクラスにも居ませんでしたか？

朝先生と同時に、教室へ飛び込んでくる強者が。

奈美はそのパターンです。そして大抵遅刻にカウントされますが。

早々と秋乃に正体がばれました。

彼女の場合、ハルと奈美両方と親しいので、ある意味仕様がなにかと。

ハルに不利益なことを絶対しないので、強力な味方ではありませんけどね。

あまり引き延ばすのもあれなので、学校生活はこれで最後。

ハルの名誉のため、どうかご容赦下さい。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

俺があいつであいつが俺で？ (3) (前書き)

入れ替わりから数日。

ハル達は、病院に訪れていた。

俺があいつであいつが俺で？(3)

入れ替わりから三日後。

ハルの身体、つまり奈美の意識が戻ったと連絡があった。

急ぎ駆けつけたハル達を見て、

「あたしがそこにいるうううう!!」

お約束通りのリアクションをしてくれた。

動揺しまくりの奈美に、千景が根気強く説明をする。

「……と言っわけです。分かりましたか？」

「はぁ……まだ信じられない気持ちですけど……流石に自分が目の前にいるんで」

「俺も同じ気持ちだよ。自分が女言葉で話す姿は、結構きついな」

「ハルちゃんの声は元々女の子っぽい、違和感は無いけどねえ」

千景と柚子が頷き賛同する。

何とも複雑な気分だった。

「それで奈美、身体はどんな感じですか？」

「頭が少し重いくらいですね」

「ハルちゃんの身体の居心地はどう？」

「……何というか、凄い頼りない感じがします」

サクツとハルの胸に言葉の刃が突き刺さる。

「奈美さんの身体が規格外なだけですから、あまり気にしちゃ駄目ですよ」

「そうよお。奈美ちゃんとは比べたらあ、誰だってF1と軽自動車位の違いがあるものお」

「ありがとうございます……半分慰めになってないけども」
心で涙した。

「ドクターの装置は、順調に開発が進んでいます」

「数日中には完成するみたいよお」

「奈美さん……ハルさんの身体も、数日中には退院できる位回復してます」

「本当にか？ 頭蓋骨陥没したんだろ？」

「ええ。信じがたいのですが、異常なほど回復が早くて、もう外傷は完治してるんですよ」

そう言えばいつの間にか、ICUから一般病室に移されていた。ハルの身体は一般人そのもの。

だとすると、その回復力の源は……中の人しか考えられない。

（（奈美、恐ろしい子！））

某演劇先生のように、ハル達は奈美を見つめるのだった。

暫く話をして、ハル達が引き上げようとした時。

「あのね、ハルはちょっと残ってくれる？」

「ん？」

「話したい事があるの」

みんなの前では言いづらいのだろう。

ハルは頷き、千景達に残ると告げた。

「では私達は先に引き上げますね」

「奈美ちゃん、お大事にねえ」

「ご自愛下さい」

三人は病室を後にした。

静かになった病室に、ハルと奈美が残された。

「それで、話って何だ？」

「……あのね……ごめんなさい」

奈美は頭を下げ謝罪した。

「急になんだよ」

「だって、私のせいでハルの身体怪我させちゃったから」
「……いいよ、許す。もし謝らなかつたら、少しお説教する所だったけどな」

少し茶化すようにハルは笑う。

「それに、ある意味おあいこだしな」

「ん？」

「ああ、こつちのことだ。まあもうすぐ戻れるんだし、綺麗さっぱり忘れようぜ」

何時までも気にしては仕方ない。

不幸な事故だったとして、水に流すのが一番だ。

「ありがとうね、ハル」

「どういたしまして」

戯けて礼を返した。

その後軽い雑談を交わしていると、

「……あのハル。一つ聞いても良い？」

「構わないけど」

「ハル……私の身体に変なことしてないわよね？」

「アホか。するわけ無いだろ」

「……そんなに魅力無いかな？」

「いや充分魅力的だが……ってそう言う話じゃないだろ！ 常識で考えてくれ！」

変な流れになった話を強引に引き戻す。

「俺はそんなに信用が無いか？」

「違うの。違うんだけど……やっぱり気になるし」

「無宗教だから神には誓わないけど……やましいことは何もない。信じて欲しい」

「……うん、変なこと聞いてごめんね」

真っ直ぐ見つめるハルの眼差しを奈美は信じた。

身体は逆なので、傍目には奇妙な光景だが。

「あ、それじゃあお風呂とかトイレとかは……」

「それはある程度諦めて欲しい」

ハルだつて相当辛かったのだから。

「そう、よね。仕方ないものね……あ、部屋とか学校は？」

恥ずかしさを誤魔化すように、奈美は話題を変える。

「部屋はお前のを使つてる。何処に人の目があるか分からないしな」

「そっか……学校は？」

「申し訳ないが、秋乃にはばれた。他の人には気づかれてないと思
う」

「秋乃に……ばれたんだ」

「すまん。初日にいきなり突っ込まれた。あいつの勘の良さはお前
レベルだな」

「ハルの事に関してはね。まあ秋乃なら大丈夫だと思うけど」

複雑な表情の奈美。

戻つてからどうなるかを考えているのだろうか。

「もし何かあつたら言ってくれ。俺にも責任はあるから」

「……うん、ありがとね」

「さて、そろそろ俺も帰るよ」

「……また来てくれる？」

「ん、ああ。一応毎日顔を出すつもりだけど」

「そっか……それじゃあまた明日ね」

「ああ、また明日」

数日前なら、毎日行つていた挨拶。

徐々にそれを行ったハルは、少しだけ心に暖かいものを感じた。
病室を後にして、アパートへと帰る。

大切なものは無くしてから気づく。

ハルはその言葉を、改めて実感するのだった。

数日後、蒼井の発明が完成したと報告が入った。
いよいよ、元に戻る日がやってきた。

俺があいつであいつが俺で？（3）（後書き）

今回一番複雑な心境なのは、奈美なのかもしれません。恋心を抱いている男が自分の身体に……。

口には出しませんが、色々と思うところがあったかと。

入れ替わり編は次回で完結です。

ハルの学校生活も書いてみたのですが、凄まじく長く間延びしたのでカットしました。ハルと秋乃を組ませると、ホントろくな事にならないので。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

俺があいつであいつが俺で？（4）（前書き）

中身が入れ替わってしまった、ハルと奈美。
それを戻す装置を、蒼井が完成させたのだが……。

俺があいつであいつが俺で？（4）

「はっはっは、待っていたぞ！」

まるでラスボスの様な台詞で、蒼井はハルと奈美を出迎えた。

こけた頬と目の下の隈から、相当急ピッチで作業したのが伝わってくる。

「蒼井大丈夫なのか……あんまり寝てないみたいだけど」

「ふふふ、これほど興奮した発明は久しぶりだった。睡眠など最低で充分だ」

「……蒼井、私達のためにそこまで……」

「ちやうちやう、とハピネス全員が首を横に振った。

「それで、元に戻す装置は出来たのか？」

「くく、見るが良い。これが吾輩の発明した『入れ替えちゃん1号』だ！」

蒼井は誇らしげに、発明品をお披露目した。

現れたのは、銀色のヘルメット状の機械。

複数のコードで、二つのヘルメットと端末らしき機械が繋がっていた。

「……これ？」

「ああ。これを被った状態で起動させれば、見事中身を入れ替えられるのだ！」

「何か凄い胡散臭いわね」

奈美の言葉にハルも同意する。

そもそも何が入れ替わったのかも分からないのに、果たして戻せるのだろうか。

「二人とも、気持ちは分かりますが、今は他に選択肢がありません」

「失敗のリスクが少ないしい、駄目元で試してみたらあ？」

「万が一の時は、私が全力で治療します」

「虎穴に入らずんば、と言っ奴だな」

励ましの言葉を掛ける面々。

微妙に不吉なことを言っているような気もするが。

「ま、選択肢が無いってのは確かだし、やるか」

「ええ」

頷きあい、ハルと奈美はヘルメットを装着しようとした。

のだが、千景が待ったを掛ける。

「その前に、少し良いですか？」

「何かありましたか？」

「確かめたい事があります。紫音、あの幽霊が見える術を使つてく
ださい」

「む、構わないが……」

紫音は首を傾げながらも、霊的な力を増幅する術を使った。

そして、

「……あゝ久しぶりに見えた」

ハルは苦笑しながら呟いた。

「奈美は何も見えませんか？」

「ええ、まるつきり何も変わりません」

「……これは興味深い」

「どういうことお？」

「ハル君の身体に入った奈美はモノマネ出来ず、奈美の身体に入つ
たハル君がモノマネ出来た」

つまり、と千景は続ける。

「モノマネは身体的能力ではなく、魂や心などのソフト面による能
力だと考えられます」

「えっと、それが何か？」

「……いえ、ただ少し気になっただけです。時間を潰してすいませ
ん」

そう言うと、千景は二人にヘルメットを着けるように促した。

ハルと奈美は、銀色のヘルメットを頭に装着した。

「準備は整ったな。では始めるとするか」

蒼井は端末らしきものを操作し、装置を起動させる。

ブウウン、という駆動音がなり始めた。

「吾輩の発明の力、存分に見るが良い。それでは、システム解放！」
ポチッと蒼井が最後のキーを押す。

すると、ヘルメットから明らかにやばそうな黒煙が立ち上る。

「お、おい蒼井。これ……大丈夫なのか？」

「……と、当然だ」

「今の間は何だよ！」

「気にするな。とにかく今、装置を停止させるから……」

「やっぱり駄目じゃない!!」

「奈美、とにかくこれを外して……」

「あゝ止めておけ。今外すと、下手すれば廃人だぞ」

「馬鹿野郎ううう!!」

こうしている間にも、黒煙はどんどん勢いを増していく。

「……ここまでですね。総員退避！直ちに事務所の外に退避を！」

「イエス・ママ！」

「止むを得まい。ここは一度引いて……」

「あんたは逃げるなああ!!」

この突っ込みが、逃げ出す足を遅らせた。

そして、

ドッカーン

事務所は爆発した。

現場は酷い有様だった。

机やパソコンは無惨に破壊され、建物のあちこちに亀裂が走る。

窓ガラスは全て割れ、天井からはコンクリートの破片が落下して

いた。

「う、うう……」

全身の痛みで、ハルは意識を取り戻した。

根性で身体を起こそうとするが、思うように動かない。

「何てこった……」

窓から煙が逃げたお陰で、視界が徐々に晴れていく。

そうして目に入った光景に、ハルは呆然と呟いた。

以前の面影など欠片も残さぬほど、破壊された事務所。

そして、吹き飛ばされた所員達が床のあちこちに倒れていた。

「とにかく……救急車を……」

何とか立ち上がるうとして、ハルは動きを止めた。

床に着いた自分の手が、明らかに子供の物だったのだ。

「……まさか……」

恐る恐る視線を自分の身体へと向ける。

子供用の、青いワンピース。

ついさっきまで、紫音が着ていた服だった。

「今度は紫音かああああ！！！！」

絶叫するハル。

他の面々を意識を取り戻して、同じようなアクションをする。

「これは……剛彦の身体？」

ローズには千景が。

「あああ、私ドクターになっちゃったあ！」

蒼井にはローズが。

「今度は柚子さんなの？」

柚子には奈美が。

「千景の身体か……やはりただ者では無いな」

千景には紫音が。

「……この身体、これこそ私が求めていた物……うっ」

奈美には柚子が。

事務所員達も、それぞれが入れ替わって居るようだ。

原因は考えるまでもなく、
「あいつは誰だ!!!」
蒼井賢、その人だった。

大混乱に陥ったハピネスだが、
「……全員冷静になりなさい！ これより私の指示に従って行動して下さい」

千景の一喝により、落ち着きを取り戻した。
ローズの体躯もあり、恐るべき迫力だ。

「まずこれから、誰が誰と入れ替わっているのかを確認します」
「事務員は関係筋に連絡を。警察と消防には、ガス爆発で誤魔化しなさい」

「柚子は信頼できる病院に話をつけて、治療の段取りを」
手早く指示を出す千景に、ハル達は直ぐさま応える。
こう言うとき、具体的に何をすべきか指示が出ると動きやすい。

「千景さん、俺達は？」
「この事件の張本人に、早急に爆発しない装置を作らせる手伝いを」
「了解です。思い切り殴ってやりますね」
「……元に戻ってから頼む」
なにせ、蒼井が入れ替わったのは自分の身体なのだから。

数日後。

蒼井が作った装置によって、全ての入れ替わりは元通りになった。
「……ハピネス始まって以来の大損害です」
「事務所は全壊、備品や器具も大破、怪我人多数、これは酷いわねえ」

「幸い、データは別の場所にリアルタイムでバックアップを取っているので無事でしたが」

「当分は営業停止ねえ」

千景は頭痛を堪えるように、頭を押さえる。

「入れ替わりが戻ったことだけが、唯一の救いですけどね」

「取り敢えず、事務所の復旧を急がせるわあ」

「頼みます。経費に糸目はつけません、超特急工事をお願いしますね」

「ドクターの貯蓄全部使い切るつもりでえ、前より良い事務所にしてみせるわよあ」

こうして、入れ替わり事件は解決した。

信じられないほど、甚大な犠牲を払って。

俺があいつであいつが俺で？（４）（後書き）

まさかの爆発＋全入れ替わりオチでした。

因みに、ハピネス所員は全員軽傷で済んでいます。
さり気なくタフな奴らです。

入れ替わりは戻りましたが、事務所が全壊してしまいました。
当分活動休止をせざるを得ない状況です。

次の話から、ほぼギャグ無しのシリアス話が長く続きます。
この小説に合わない話ですが、進行上必要と言うことで。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハピネス活動休止（前書き）

喫茶北風に集合したハピネスメンバー。
千景とローズからの報告とは……。

ハピネス活動休止

ハピネスの事務所損壊事件。

これは予想以上に大事となっていた。

「調査の結果、事務所だけでなく、ビル全体に深刻な損傷がある事が分かりました」

「正直倒壊しなかったのが奇跡な位にねえ」

事務所の隣にある、喫茶北風で千景とローズは被害状況の報告を行う。

大事な連絡と言うことで、バイトも含め全員が集合していた。

「検討した結果、ビルの建て替えを行うことにしました」

「た、建て替えですか？」

「ええ。中途半端に補修するよりも良いとの判断です」

千景はいつもの調子で答える。

「期間は大体一ヶ月ほど。その間は、便利屋としての活動を休止します」

突然の言葉に、所員達は動揺する。

「それじゃあ所長、私達は……」

「お給料無しですか!!」「」

鈴木を始めとする正所員達が、一斉に悲鳴を上げた。

バイトのハル達もそうだが、正所員達には死活問題だ。

「うふふう、大丈夫。休止するのはあ、あくまで便利屋としての活動だけだからあ」

「建て替えの件も含め、細々とした仕事は山ほどあります」

「臨時の事務所もお、テナント募集中のビルをゲットしてあるわあ」

二人のフォローに、鈴木達はホッと胸をなで下ろした。

「あ、千景さん、私達は……」

「依頼の受注なども休止しますので、その間はお休みになります」
今度はハルを含めたバイト達に動揺が走る。

こちらにも生活がかかっている人も多い。

「とは言え、突然言われてはみんなも困るでしょう」

コクコク、と揃って首を縦に振る。

「仕事は回せませんが、希望者には無利子で必要な資金をお貸しします」

「それとお、働きたい人は期間限定のバイトを紹介するわぁ」

ハピネス以外で働けない人は、必要な資金を貸し出す。

働きたい人には、建て替えの間の働き先を斡旋。

勿論どちらも選ばないと言う選択肢もある。

何にせよ、所員の生活は守られる。

二人の言葉は所員達に安心感をもたらした。

「連絡事項は以上です。正所員はこれから、私と共に臨時の事務所に向かいますよ」

「資金が斡旋が必要な子はあ、何時でも良いから連絡してねえ」

こうして、便利屋ハピネスは活動を休止した。

「ねえハル。ハルはどうするの？」

「お休みさせて貰うよ。最近忙しかったから、ちょっと勉強しないとな」

「お金大丈夫？」

「動物関連の依頼、結構報酬が良かったから」

御堂ハルの名は、その道では有名になっていた。

名指しでの指名も多く、お陰で当面の生活資金に不自由しない位に貯蓄出来ていた。

「奈美こそどうするんだ？」

「じゃあ私も休む」

「何だよそれ。生活費は平気か？」

「お母さんが振り込んでくれるから。贅沢しなければ平気よ」

ニコリと笑う奈美。

考えてみれば、奈美は未だ高校生。

家からの仕送りがあるのは当然と言えるだろう。

「そうか……それじゃ帰るか」

「うん！」

二人は他の面々に挨拶をしてから、アパートへと帰宅した。

ハピネスの活動休止。

これが全ての引き金となるのだった。

ハピネス活動休止（後書き）

非常に短い話ですが、嵐の前の静けさと言うことでご勘弁を。

ハピネスは一月ほど休み、千景達は事後処理に大忙し。
これが、引き金となります。

次からは少し長い、ハル編に突入します。
日常と非日常が、遂に交わる時……。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語1へ悪は静かに動きだす（前書き）

平和な日常は終わりを告げ、非日常がやってきた。

ハルと悪の組織編スタートです。

ハルを巡る物語1へ悪は静かに動き出す

十月某日。

一つの悪の組織が、動き出した。

その名はカラーパレット。

最強の兵士を作りだし、国家転覆を狙う組織だ。

「こちらホワイト。ブラック、聞こえますか？」

「……こちらブラック。よく聞こえている」

「私を含め、各員配置に着きました。何時でも開始できます」

「そうか……」

ブラックは、携帯電話から聞こえてきた報告を受け、暫し目を閉じる。

この作戦、動き出せば一切の後戻りは出来ない。

そして成否は時間が鍵を握る。

引き金を引くタイミングを、慎重に見極めなければならない。

「隣人の少女は、学校に行っている時間だな？」

「はい。帰宅予想時刻は六時間後。その間、目標の周囲に障害はありません」

「化け物共は？」

「現在イギリスにて任務中。連絡は不可能な状況です」

「目標は？」

「本日は大学の講義が無いため、自室に居ることは確認済みです」
舞台は整った。

後は、決断を下すのみ。

「今十時四十二分か……では、午前十一時丁度を持って、作戦を開始する」

もはや、ブラックに迷いは無かった。

「ふう、大分片づいたな」

ノートパソコンから手を離し、ハルは大きく背伸びをした。

大学も後期が始まり、講義やら研究室の作業やらで、それなりに忙しい。

バイトもなく、講義も無い今日のような日に、纏めてレポート等を作成していたのだ。

「しかし、パソコンってのは便利だな」

机の上に置かれた、銀色のノートパソコンを眺めてハルは呟く。

大学の友人が新しいものを購入したので、格安で譲って貰ったものの。

少し古い型だが、レポート作成などする分には、充分すぎる程だった。

「こいつのお陰で予定よりも早く終わりそうだな」

手書きと比べて、作業効率は圧倒的に向上した。

一日かかると見込んでいたのだが。

時計を見ると十一時。僅か三時間ほどであらかた片づいてしまった。

「後は……ああ、そう言えばアレがあったな。今の内に部屋を片づけておくか」

これからの予定を考えていると、

ピンポン

来客を告げるチャイムが鳴った。

「ん、誰だろ」

奈美ならチャイムは鳴らさないし、友人達が遊びに来る予定もない。

新聞の勧誘かな、とハルは立ち上がりドアを開けた。

「はーい、どちら様？」

ドアの向こうには、一人の女性が立っていた。
千景と同一年くらいだろうか。

スーツを着こなした、黒髪の女性。

俯いているため顔を見ることは出来ないが、少なくとも見覚えのない人だ。

「あの、失礼ですがどちら様ですか？」

「……御堂ハルさんですね？」

こちらの問いかけに答えず、問い返してきた。

無礼にも程があるが、それ以上にハルは得体の知れぬ気持ち悪さを感じていた。

決して勘がよい方ではない。

勘に頼る事も少ない。

だが、今の時だけは身体が勝手に動いた。

「人違いです」

咄嗟に嘘を付き、ドアを閉じようとする。

だが、

「！！！！」

ドアが閉まる前に、女性は足を挟み、それを中断させた。
異様な行動に、思わず背筋が凍る。

「……くっ」

焦ったハルは、思い切り力を入れてドアを閉めるが、女性は全く動じない。

それどころか、隙間に手を入れて、閉まり掛けたドアをこじ開けた。

「なっ！」

小柄とは言え、ハルは男だ。

奈美のような例外はさておき、普通の女性に力で負ける訳がない。

だが、目の前の女性は軽々とハルの力を上回った。

「あんた……一体何なんだよ！」

ハルは恐怖を誤魔化すように、女性に向けて叫ぶ。

「……ご足労願います。返事は結構ですので」
言葉と同時に、女性はハルの腹に拳を叩き込む。
腹部に走る激痛と息苦しさに、思わずハルはうずくまる。
そして、首筋に衝撃を感じると、ハルの意識は闇の中へと落ちて
いった。

アパートの屋上。

そこに、三つの人影があった。

一人は全身黒のスーツ姿の男、ブラック。

対峙する二人は、銀と青を基調としたジャケットを着た男達。

「貴様、一体何者だ？」

「……あなた達の敵ですよ」

「悪の組織か。何処の手の者だ？」

「答える必要はありませんね」

油断無く距離を取りながら、両者は睨み合う。

「自分達は彼の周囲の監視、及び護衛を任されている」

「貴様の正体は、彼の安全を確保してから確かめさせて貰う」

一人は警棒を、そしてもう一人は拳銃を構える。

その構えに無駄はなく、男達の技量が確かな事が伺い知れる。

「……時間がないので、手短に済ませるとしよう」

ブラックは身をかがめると、思い切り男達に突進した。

凄まじい速さで拳銃を構えた男の懐に入ると、勢いそのままに拳
をアゴに打ち込む。

「がっ……」

一撃で意識を刈り取られた男は、屋上に力無く崩れ落ちた。

「き、貴様……」

「ふんっ！」

仲間をやられた動揺を見逃さず、ブラックは回し蹴りを警棒の男

に放つ。

綺麗に側頭部を捕らえた蹴りは、男の意識を奪うのに充分すぎる威力だった。

対峙から僅か数分。

ブラックは正義の味方二名を、あっさり打ち破った。

「……特A級の化け物共や、『ジャスティス』クラスならともかく、倒れた男達に視線を向け、

「貴様らのような雑魚に後れは取らないよ」

ニヤリと悪役らしい笑みを浮かべてブラックは呟いた。

倒れた男達の身体を探り、通信機を見つけると、踏みつぶして破壊する。

そして、男達の身ぐるみを剥ぐ。

「定時連絡は一時間後か」

呟きながら、ブラックは気絶した男達の身体を縄で拘束して、両肩に担ぎ上げる。

そして、アパートの二階に降り立つ。

「やあホワイト、終わったみたいだね」

「ええ、問題なく。そちらも？」

「所詮は連絡係、大した相手じゃない」

ブラックは微笑みながら、男達を担いで一階へと移動する。

そして、一番は端の空き部屋の鍵を開け、男達を放り込み鍵を掛けた。

「後はこれだな……」

ブラックが呟くと、アパートに一人の男がやってきた。

ごく普通の中年男性だ。

「手配は済んでいるな？」

「はい、まもなく来ると思います」

「よし、では頼むぞ」

ブラックは男性に、男達の衣服を手渡す。

男性は衣服を受け取ると、直ぐさまアパートから離れた。

「これで、異常に気づいた連中が状況把握するまでの時間は稼げる」
「では早急に離脱しましょう」

ホワイトの言葉に頷くと、ブラックは下に用意してある車に乗り込んだ。

ごく普通の乗用車。

町中を走っていても、何一つ違和感はない。

例えトランクの中に、男が一人放り込まれていたとしても。

「実験の手配は問題ないね？」

助手席に座ったブラックは、運転席のホワイトに尋ねる。

「はい、到着次第直ぐさま始められます」

「結構だ」

ブラックは満足げに頷くと、携帯電話を取り出す。

「……ああ私だ。作戦終了、各員折を見て帰投してくれ」

指示を出し終わると、大きく息を吐く。

(ここまでは計画通りだ。後は時間と……天が私を見捨ててないか、だな)

祈るように目を閉じるブラック。

その様子を横目で見ながら、声を掛けずに車を走らせるホワイト。

車は様々な思いを乗せて、怪しまれない速度で進んでいく。

賽は投げられた。

どのような目が出るかは、まさに神のみぞ知る。

ハルを巡る物語1へ悪は静かに動きだす（後書き）

遂にカラーパレットが動きました。

まずは彼らの予定通り事は運び、ハルは悪の手に落ちました。

果たして彼らの狙いとは。

次回もまたお付き合い頂けたら幸いです。

ハルを巡る物語2へカラーパレットへ（前書き）

実験体、ハルの拉致に成功したカラーパレット。
大仕事をやってのけた黒田だったが……。

ハルを巡る物語2へカラーパレット

色彩製薬ビル。

その地下エリアに、カラーパレットの本拠地はあった。

攫ったハルは、意識のないまま研究者達に引き渡される。直ぐにでも実験が行われるだろう。

ブラックはその様子を確認してから、社長室へと向かった。

ノックを二回し、相手の許可を得てから、

「……失礼します」

ブラックは静かにドアを開けて入室した。

「来たか黒田……いやブラック」

「はい、ご報告に参りました」

社長室には、会長と社長の二人がブラックを待ちかまえていた。

「随分待たせてくれたんだからよう、少しはマシな報告するんだろ
うな？」

社長が相変わらずの挑発的な口調で尋ねる。

「はい、先程の作戦で計画は最終段階に入りました」

「例の試験体、もったいぶっていたわりに、やけにあっさり手に入
ったでは無いか」

「手前がサボって良い証拠だろうか」

「……返す言葉もございません」

ブラックは頭を下げて謝罪する。

勿論そんなことはない。

一つのミスも許されない緻密な計画を立て、それを完璧にこなす。あらゆる事態を想定し、奇跡的とも言える好機を逃さなかった。褒められこそすれ、罵倒される要因など欠片もない。

このやり取りで、二人がお飾りである事が改めて浮き彫りになっ

た。

「それで、見通しはどうなんだ？」

「既に実験は始まっております。予定では七十二時間以内に終了するかと」

「三日も掛かるのかよ。休まずやればもっと早く出来るだろうが」

「全員不眠不休で作業にあたっての時間です」

勿論嘘だ。

三日も不眠不休で作業すれば、効率は落ちるしミスも出る。

納得させるためそう言ったが、実際は交替で休憩を取るシフトを組んでいる。

限界まで働くことが、必ずしも良い結果を生むとは限らないのだ。「まあ良い。それで、邪魔者は入らないだろうな？」

「……最大限の配慮をしました。三日は恐らく持つかと」

普通なら誘拐後、何もアクションを起こさなければ、三日という時間は守られる。

だが、今回の相手は普通じゃない。

ブラックの予想を超える可能性も否定できないのだ。

「てかよ、三日過ぎたら正義の味方が来るんだろ？ それはどうすんだよ」

「実験が完了すれば、悲願であった最強の兵士が誕生します。恐れるに足らずかと」

「くつくつく、そうだな……いよいよ我らが世界を牛耳る日がやってくるわけだ」

卑しい豚のように笑う会長。

その様子にブラックは内心毒づくが、表情には出さない。

「……では、私は業務に戻りますので」

「あん？ 会社なんて放っておけば良いだろうが」

「会社経営に異常が出れば、そこから発覚する可能性もありますので」

本音を言えば、実験に専念したい。
だが、ブラックが居なければ色彩製薬は成り立たない。
自然を装うためにも、ブラックは通常業務をせざるを得ない。
一人の力に頼る泣き所だった。

社長室を後にしたブラックは、オフィスの自分の机に座る。

山のように詰まれた書類。

平日に数時間席を外しただけで、このさまだ。

可能であれば、周囲の動きや正義の味方とハピネスの動きを探り
たかったが。

「……やむを得ないか」

業務を滞らせる訳には行かない。

ブラックは大きく息を吐くと、書類の山に挑んでいった。

偽装工作は完璧な筈だった。

犯行現場を誰にも目撃されず、現場の隠蔽も終えている。

正義の味方の目も、三日程度なら欺けるだろう。

急用で出かけると、でっち上げたメモをドアに張り出した。

これで隣人の少女を欺けば、最大の懸念だったハピネスも事態に
気が付かない。

完璧な筈だ。

だがしかし、事件というのは思いも寄らぬ所で露見するもの。

何せ人というのは、何故かその日に限って普段と違う行動をとる
ものだから。

ハルを巡る物語2へカラーパレット〈（後書き）

今のところ、カラーパレットの計画通りに事が進んでいます。

黒田と言つ男、それなりに出来る男です。

それに比べて、会長と社長はとことん駄目な奴。

立場はNo1・No2ですが、実際組織を仕切っているのは黒田です。

今現在、ハルの拉致に気づいている人は、カラーパレット以外に居ません。

ハルの運命は如何に。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです

ハルを巡る物語3へ思わぬ所に名探偵〈(前書き)〉

ハルと夕食を共にすべく、帰宅した奈美。

今日に限って、そこに同行者の姿があつて……。

ハルを巡る物語3へ思わぬ所に名探偵

ハルが攫われた日の夕方。

「ふんふん」

「ご機嫌ね、奈美」

鼻歌を歌うほど機嫌の良い奈美と、秋乃がアパートに向かって歩いていった。

普段察暮らしである秋乃が、奈美と一緒に居るのは珍しい。

「だって、遂に本当の闇鍋が食べられるんだもん。もう楽しみで」

「……まあ、喜んで貰えるなら良いけどね」

「きつと長靴とか、空き缶とか入ってるのね。んゝ燃えてきたわ」

「一応言って置くけど、今回は初心者用。全部食べられる食材だから」

暴走一歩手前の奈美を、秋乃は冷静な口調で戒める。

先日、ハルと鍋料理を食べた奈美は、すっかり鍋の虜になっていった。

水炊きから始まり、キムチやすき焼きなど一通り制覇したのだが、何かが足りなかった。

そう、以前大惨事を引き起こした闇鍋だ。

食べたいと駄々をこねる奈美に、ハルが出した条件は、

「材料を全部秋乃と一緒に買え。それならやってもいい」

と言う極めて安全なものだった。

そこで奈美は、早速秋乃に事の次第を話した。

秋乃は快諾したが、自分も参加することを条件に出したのだ。

品行方正、成績優秀の秋乃にとって、門限の例外申請など朝飯前。

三人の都合を合わせた結果、本日夜に闇鍋が行われる運びとなった。

二人は夕暮れの道を進み、アパートまで辿り着く。

「……ねえ奈美、お兄ちゃんには言ってるのよね？」

「勿論よ。準備しておくって言ってたわ」

「でも、居ないみたいよ？」

秋乃は視線をアパート二階に向ける。

大分暗くなってきたというのに、二階にある全ての部屋は明かりがついていなかった。

「ありゃホントね。何か買い物にでも行ってるんじゃない？」

「……かもね」

両手にスーパーの袋を持ったまま、考えていても仕方がない。

奈美と秋乃はひとまず、ハルの部屋へと向かった。

そして、ドアの前で動きを止める。

「何よこれ」

「……………」

『急用が出来た。悪いが三日ほど留守にする』

一行だけの簡潔なメモが、ハルのドアに貼られていた。

「秋乃、何か聞いてる？」

「……何も。奈美は……って私に聞くって事は同じよね」

互いに連絡が無かったことを確認する。

「もお〜ハルめ〜。ドタキャンなんて良い度胸してるじゃない。帰ってきたら……………」

袋を下に置き、指をパキパキと鳴らす奈美。

楽しみにしていた鍋がお預けとなり、より一層怒りに拍車が掛かったようだ。

秋乃にもその気持ちは分かるし、普段なら止めることもないのだが、

「……………変ね」

奇妙な違和感を感じて、小さく呟いた。

「何が変なのよ？」

「教授のお付きで出張、例えば学会の手伝いなんかで遠くに出かける事はあると思うわ」

「まあね。それで？」

「でも、約束していた私達に一言も無く、と言うのはちょっと変じゃない？」

「ん〜言われてみると確かに。ハルってそう言うところ細かいし」
「ルーズな奈美と違い、ハルは約束事などの取り決めに煩い方だ。時間に遅れるときなど、必ず一報入れる。」

「それだけ急いでたんじゃない？」

「メモを書く時間があれば、メールを送ること位出来るわよ」

「そりゃそうね。じゃあ何で連絡くれなかったかな？」

「携帯が壊れていた可能性が高いけど……」

秋乃は少し思考を巡らせる。

「中に入れないかしら」

「あ、それは平気。えっと、たしか……」

ゴソゴソと、奈美は鞆を漁り、

「じゃじゃ〜ん。ハルの部屋の合い鍵〜」

某猫型ロボットのようになり、高らかに鍵を掲げた。

「これで中に入れるわよ」

「……ねえ、どうして合い鍵なんて持ってるのかしら？」

「え……」

「ひょっとして、二人はそう言う関係？ ふ、ふふ、まさか私の知らない間に……」

「ち、違っつてば。これはハルが」

「お兄ちゃんからアプローチしたのね。妹の友人に手を出すなんて……」

「……少しお灸を据えなくちゃ」

「だから違っつて。話を聞いて！」

危険な光を瞳に宿す秋乃に、奈美は必死に弁明する。

自分の部屋でテレビが見れないため、ハルのテレビを借りていること。

依頼で不在の時の為、合い鍵を作ってもらったと。

「そう言う訳だから、決して秋乃が言うような……ふしだらな事なんて無いの！」

「ふふ、勿論分かってるわ。ちよつとからかっただけよ」

絶対嘘だ。

奈美は目だけ笑っていない秋乃を見て、心底そう思った。

何はともあれ、二人は合い鍵を使ってハルの部屋に入った。

室内は暗く、主が不在であることを示している。

ひとまず荷物を置いて室内に上がり込むが、当然ハルの姿は無い。

「やっぱり居ないみたいね」

「……パソコン？」

秋乃はちゃぶ台に置かれていた、パソコンに目を留める。

「何でも友達から安く買ったって言ってたわよ」

奈美の言葉を聞きながら、秋乃は開いたままのノートパソコンのキーを押す。

すると、低いうなりと共に画面が映し出された。

「秋乃、勝手に弄ったら怒られるわよ？」

「……………」

「ちよつとどうしたのよ、怖い顔してる」

秋乃は答えず、部屋のあちこちを調べる。

十分ほど経った時、

「……気のせいみたい。今日は諦めましょう」

そう言って、奈美の手を引き強引に部屋の外へと連れ出した。

二階の廊下に出て、ドアを閉めた所で奈美は秋乃に問いたです。

「で、一体何なの？」

「ごめんね。でもあの部屋、盗聴されてる可能性があったから」
「盗聴って、あのドラマとかで出てくるやつ？」

「ええ。確証は無いけど、一応用心でね」

秋乃の真剣な表情に、奈美はそれが冗談でないことを察する。

「何か分かったの？」

「お兄ちゃん……何か事件に巻き込まれた可能性があるわ」

思わず奈美は息を飲む。

「まず引つかかったのはパソコン。三日も留守にするのに、作業途中でスタンバイモードだった」

「変なの？」

「元々少しの時間、作業から離れるときに使うモードなの。三日も離れるなら、電源切るはずよ」

奈美は良く理解できないのか、首を傾げている。

「次は洗濯物。籠の中に入っていた物が、全部湿っていたわ」

「選択前だったんじゃないの？」

「それにしても、湿りすぎてた。あれは干している途中で取り込んだ感じよ」

「今日はよく晴れてたし、確かに変ね」

秋乃の言葉に奈美も頷く。

「そして、さつきからお兄ちゃんの携帯に電話を掛けてるんだけど、一向に繋がらない」

「電源切ってるんじゃない？」

「それだけならね。でも、全部の違和感を合わせると、ある可能性が浮かんでくるの」

「それは？」

秋乃は少しだけ躊躇したが、自分の考えを告げる。

「お兄ちゃん……誘拐、あるいは拉致されたのかもしれない」

「ゆ、誘拐……!!」

「あくまで可能性だけど、そう考えると辻褃が合っわ」
秋乃は努めて冷静に続ける。
「私の考える筋書きはこう」

まず犯人は、部屋に居たお兄ちゃんを捕らえる。

そして、不自然にならないように、干していた洗濯物を籠に放り込む。

何時も夕食と一緒に食べる貴方が不審がらないよう、メモを残す。そうすれば、このアパートには他に人は居ないし、ハピネスもお休み中。

大学は高校と違って、欠席に煩くないから、そっちは問題ないわ

「メモに三日と書いてある以上、少なくともその間は怪しまれないと思うわ」

「そ、そんなドラマみたいな事、現実には有り得るの？」

「確証は無いわ。でも、もし万が一そうなら……」

少なくとも、ハルの身が危険なのは間違いない。

「それじゃ警察に……」

「この程度の話じゃ、鼻で笑われるのがオチね。警察は証拠がないと動きにくいし」

「どうしよう、どうすればいいの」

「……こう言うときこそ、ハピネスの人に頼れば良いのだけど」とある事情で、現在活動休止中と既に聞いている。

依頼をすることは出来ない。

「これを狙ってた？ だとすれば、相当計画的な犯行……」

呟きながら思考を続ける秋乃。

だが答えは出ない。

自分の手札の中で、この事態を打開する術は無かった。

そんな時、

「ねえ秋乃。千景さんの所に行こう」

奈美が不意に言いだした。

「千景さんって、ハピネスの所長さんよね。でも依頼は出来ないし」

「依頼じゃ無くてお願いするの」

「えっ？」

「家族が誘拐されたとき、秋乃は両親に依頼する？」

「それはしないけど……」

「ハルはハピネスの仲間よ。きっと力になってくれるはず」

予想外の言葉に、呆然とする秋乃。

奈美は早速千景に電話を掛ける。

「大丈夫よ、千景さんならきっと……」

祈るように呟く。

そして、通話が繋がった。

ハルを巡る物語3へ思わぬ所に名探偵〈（後書き）〉

完璧に思えた黒田の計画。

それが秋乃の登場で、少し狂ってきました。

秋乃の事は当然知っていましたが、寮暮らしと言っこともあり、ほとんど警戒していません。

文面で表現していませんが、闇鍋をやることに決めたのは、当日の朝です。

ハルが「アレ」と言っていたのは、闇鍋の事でした。

黒田にとって、本当に予想外です。

ハピネスに気づかれぬ事を前提にした計画。
それが崩れてしまった。

果たして物語は、どのような展開を見せるのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語4へそして事件は発覚し〜（前書き）

千景の元を訪れた奈美と秋乃。

二人から事の次第を聞かされた千景がとる行動とは……。

ハルを巡る物語4へそして事件は発覚し

奈美と秋乃が、ハピネスの仮事務所に辿りつく頃には、日はすっかり落ちていた。

事務所に駆け込む二人を待ちかまえていたのは、千景とローズだった。

「ち、千景さん！」

「……まず落ち着きなさい」

掴みかからんとばかりに駆け寄る奈美に、千景は一息つかせる。動揺しているの是一目で分かる。

そんな状態で話を聞いても、余計に時間を取られるだけだ。

「すくはすくは」

奈美と秋乃は大きく深呼吸し、呼吸と動揺を落ち着かせる。

「それで、ハル君の身に大変なことが、と言うことでしたが」

「そう、そうですね。ハルが……攫われちゃったんです！」

「「！！！！！」」

奈美の言葉に、千景とローズは目を見開いた。

「本当なのお？」

「詳しく話を」

「えっと……だから……」

気持ち先走り、奈美は上手く話を纏められない。

その様子を見て秋乃がそつと一歩前が出る。

「私から説明させてください」

「あら、貴方は」

「確かハルちゃんの妹さんでえ、秋乃ちゃんだったわねえ？」

「はい。私は奈美と同じ情報を持っていますし、幾分冷静ですから」

千景は秋乃の目をじっと見た後、小さく頷いた。

「実は」

秋乃は今までのこと、そして自分の考えを千景達に説明する。勿論秋乃も動揺していたが、ハイスペックな彼女は筋道を立てて整然と説明する事が出来た。

「そして、今ここにやってきました」

話を聞き終えると、千景とローズは真剣な顔で考え込む。

「どう思う？」

「突飛な話ではありませんが、可能性は高いかと。私も秋乃さんと同じ意見です」

「じゃあやつぱりハルは……」

呆然とした顔で呟く奈美。

秋乃だけでなく千景も同意見と言うことで、ハルが誘拐された事実を認識させられたのだ。

「……最悪のケースを想定して手を打ちましょう」

懐から携帯電話を取りだし、電話を掛ける。

「……私です。……ええ、御堂ハルの行方とカラーパレットの本拠地を。……最優先です」

短い通話を終えると、千景は不安げな視線を向ける二人に向き直る。

「私の情報網をフル活用して、ハル君の行方を捜させます」

「ならあ、私も知り合いに声を掛けてみるわねえ」

ローズは三人から離れると、携帯電話で連絡を取り始めた。

「大丈夫ですよね？」

「ええ、私達ハピネスの総力を結集して、何としてもハル君を取り戻して見せます」

力強く言い切る千景に、奈美はホツとした顔を見せた。

「今日はもう遅いです。進展があれば連絡するので、ひとまず二人は帰りなさい」

「でも……」

「もしもの場合、貴方の力も必要です。その時のため、身体を休め

「ておいて下さい」

千景の言葉を聞いても、不満げな奈美。

「奈美、今私達が出来たことは無いわ。ここは、柊さん達を信じて待ちましょ」

「……うん」

秋乃が肩を叩いて説得し、ようやく奈美は納得した。

そのまま事務所の外に出ようとしたところを、

「あ、秋乃さん。ちょっと直しいですか？」

千景が呼び止める。

「はい、何でしょう？」

「実は」

「……構いませんけども。ではメモを」

「いえ、口頭で結構です」

「分かりました。えっと」

秋乃の言葉を、千景は瞬時に記憶する。

「ありがとうございます」

「これが、お兄ちゃんを捜すことに役立つのですか？」

「ええ。場合によっては、切り札になります」

そう断言されてしまえば、秋乃もそれ以上追求する訳にもいかない。

千景の用事は終わった。

だが、秋乃は帰ろうとしない。

「何かありましたか？」

「柊さん、失礼ですが、貴方は兄が誘拐される心当たりがあるので
は？」

「何故そう思います？」

「先程の電話中、カラーパレットと言う単語が出てきましたから。

本拠地という言葉から、それが何らかの組織、あるいはグループ名と推察できます」

「……………」
「兄の行方と同時に調べさせると言うことは、恐らくそれが犯人グループですよ？」

「……ええ、確証はありませんが、十中八九間違いないかと思えます」

この時点で、秋乃は千景がこの事態を半ば予測していた事に気づく。

胸を渦巻く複雑な感情を押し殺して、一言だけ。

「どうか……お兄ちゃんを助けて下さい」

「……必ず」

深々とお辞儀をして、秋乃は奈美の待つ外へと出ていった。

「手当たり次第連絡したわあ。今のところ目撃報告は無いみたいだけれどお」

「ご苦労です」

千景は背後のローズに振り向かず答えた。

「それにしてもお……なかなか抜け目無い連中みたいねえ」

「ええ、ハル君を取り巻く環境の変化を見逃さずに、誘拐を実行した」

「私の知るカラーパレットはあ、そんな優秀な組織じゃ無かったけどもお」

「……居ますね。コレクトが凄腕と言っていた、文武兼ね備えた強者が」

ようやく千景は振り返る。

何時も通り表情は変わらない。

「侮っていた訳ではありませんが、少し見込みが甘かったようです」
情報屋から寄せられた情報では、カラーパレットはそれほど驚異では無い筈だった。

規模も三十人前後、そしてボスは無能な人物。

まさかここまで大胆に行動すると、千景は予想していなかった。

「調査報告の結果を鵜呑みにしてしまった事が、私のミスです」

「それでえ、反省が済んだ後はあ、どうするのぉ？」

「ふふ、決まっています」

口元を僅かにつり上げる。

「私の身内に手出ししたのです。徹底的に……………潰す」

千景の瞳は、深い闇のように何処までも暗く、冷たかった。

「まずカラーパレットの拠点を特定。その後、奇襲を掛けます」

「面子はあ、貴方と私で？」

「他の子達には、あまり見せたくない世界ですから」

「……………了解よぉ」

「ハル君を攫った目的が私の予想通りなら……………急ぐ必要がありますね」

千景は決意を込めて呟いた。

ハルを巡る物語4へそして事件は発覚し〜（後書き）

拉致当日中に、事態が発覚してしまいました。

これは、黒田にとつて、最悪の予想外です。

何せ、ハピネスが自分達の事を調べており、拉致の実行犯と自分達を結びつけられるのは、千景達が一番可能性が高いのですから。

日常サイドは、ハルの救出の為に動き出しました。

果たしてどの様に事態は動くのか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語5 〈舞台は整った〉 (前書き)

カラーパレットに拉致されたハルを救出すべく、
千景とローズは動き出す。

彼らの本拠地を掴む為、二人が選んだ行動とは……。

ハルを巡る物語5 〈舞台は整った〉

ハル誘拐から一夜明けた、土曜日。

ブラックはビルの地下にある、本拠地へと姿を見せた。

多くのパソコンが並び、構成員達は一心不乱に作業を行っている。

「調子はどうか？」

「はい、予定のスケジュールは順調に消化しております」

声を掛けられた青年が答える。

その答えに満足げに頷くと、ブラックは視線を正面へと向ける。

パソコンのある部屋の正面は、一面ガラス張り。

その向こうには、真っ白な実験室が広がっていた。

様々な器機が備え付けられた部屋の中央には、一つのベッド。

そこに横たわっているのは、試験体こと御堂ハルだった。

「ブラック、お越しでしたか」

「ああ、土曜と言うことで業務が早く片づいたからね」

「実験は第二フェーズに入っています」

「そうか……」

視線をハルから動かさず、ブラックはホワイトに小さく返答する。

「第一フェーズの結果は？」

「現在解析中です。後数時間で結果が出るかと」

「本来なら、結果が出てから危険度の高い第二以降へと移りたい所だが」

「解析と実験を平行しなければ、とても時間が足りませんね」

ブラックは頷く。

検査目的の第一フェーズと違い、第二フェーズ以降は被験者に危険を及ぼす。

満足のいく成果が第一で出ているのなら、それ以上の実験は無意

味だ。

だが、時間制限がある現状がそれを許さない。

「彼には気の毒な事になるな」

「同情ですか？」

「否定はしないよ。ただ、それで手を緩める程、私は善人ではないがね」

ブラックの声に迷いや嘘は無かった。

二人は部屋を移動する。

「それで、相手方の反応はどうか？」

「正義の味方は、貴方の予定通りの反応です。今日一杯は誤魔化せるかと」

「ふむ……化け物共は？」

「任務が終わり、イギリス支部に入ったところまで確認しています。その後、外に出ては居ません」

「連絡が行っていないか……日本支部はやはり隠蔽体質のようだ」「自力で解決し、もみ消すつもりなのでしょう。彼らにしてみれば、不祥事ですから」

冷やかすようにブラックとホワイトは笑い合う。

「それで、ハピネスに動きは？」

「特に変わりはない。ただ……」

「ただ？」

「昨日の夜、隣人の少女と友人が、ハピネス事務所を訪れています」
ピクリ、とブラックの眉が動く。

「タイミングが良すぎるな」

「滞在時間は十分ほど。中の様子はうかがえませんでした」

「……事件が露見した可能性も考えられる。動きがあれば直ぐに連絡させる」

「畏まりました」

一礼して、ホワイトは部屋を後にする。

残ったブラックは、目を閉じて一息つく。

「大丈夫……大丈夫だ。まだ計画に狂いは生じていない」

自分に言い聞かせる様に呟いた。

「警察も、正義の味方も問題ない。化け物共もまだ海外だ。不確定要素はハピネスだが、たとえ気づかれたとしても、この場所を特定するには時間が掛かるはず」

不安を抑える様に、言葉を続ける。

「やれるはずだ。私なら……やれるはずだ」

ハピネスの仮事務所。

忙しく動き回るスタッフ達の中に、千景とローズの姿は無かった。

「あの二人はどうした。サボリでは無かるうな？」

「大切な用事があるらしいですよ」

文句を言う蒼井に、柚子は壁の行動予定表を指差して答える。

二人の欄には、重要な案件のため外出中、と記されていた。

「この忙しさを解決する方が重要だろうに」

「……どの口が言いますかね」

原因を作った張本人に言われる筋合いは無いだろう。

「分かっているわ。だからこうして、必死に働いているんだろうが」

「なら、これもお願いしますね」

ドスン、と紙の束を蒼井の前に積み上げた。

「これは？」

「各方面への謝罪文です。誠意を示すため、直筆でお願いします」

「いや……だって……凄いやだぞ？」

「たかだか数百枚です。後の仕事も詰まっていますから、ちゃっつちやと書いてください」

ニコリと微笑む袖子。

その手に握られた注射器を見て、蒼井は悟る。
逆らう余地など無いと。

「ううう、覚えてるよ、この年齢詐称女め」

「……蒼井さんこそ覚えていて下さいね」
何だかんだで、ハピネス正所員達は頑張っていた。

同時刻。

ハピネス事務所からほど近いビルの一室。

そこに、一人の男が居た。

スーツ姿の三十代中頃と思われる男性。

彼は閉じたカーテンの隙間から、望遠鏡でハピネスの事務所を監視していた。

「……あの二人は外出中か。一応連絡を入れておくか」

小さく呟き、懐から携帯電話を取り出そうとして、

「お邪魔しますね」

誰もいないはずの背後から声を掛けられ、驚きのあまり身体を硬直させた。

慌てて後ろを振り返る。

そこには、着物姿の女性が立っていた。

「お、お前は……」

「直接会うのは初めてですね。柊千景、貴方がずっと見ているハピネスの所長です」

「何で……この場所が……」

「視線を感じて気づかぬほど、腑抜けてはいませんので」

しれっと告げる千景に、男は驚きを隠せない。

「馬鹿な。じゃあ何で今まで……」

「ええ、分かっただけ泳がせていました」

思わず後ずさりする男。

だがそこは窓際。もはや逃げ場所は無い。

「必要最小限の情報を入札として与えつつ、あえて泳がせていたのは……この時のため」

千景の意図を察し、男は携帯電話をその場で踏みつぶす。

これで携帯のデータを知られる事は無い。

「俺は何も喋らないぞ。尋問されたってそれは同じだ」

「尋問？ そんなことするつもりはありませんよ」

千景はニツコリ微笑み、

「これからするのは、拷問ですから」

ゾツとする程冷たい声で告げた。

一時間後。

「千景ちゃん、入るわよお？」

「ええ、構いません」

ローズは一声掛けてから、千景が居る部屋へと入った。

足を踏み入れた瞬間、室内の光景から全てを察する。

「随分派手にやってみたみたいだけどお、聞き出せたのねえ？」

「ええ、少々時間が掛かりましたが」

千景の足下には、先程の男が倒れている。

気絶しているのか、ピクリとも動かない。

「さつさと喋っちゃえばあ、ここまで傷つく事も無かったのにい」

「忠誠心はかなりの物です。七本まで耐えたのは立派と言えるですよ」

「……そうねえ」

ローズは拷問の本質を知っている。

どれほど痛みに耐える訓練をしたところで、絶対に耐えられない。程度に差はあるだろうが、いつかは必ず口を割る。

対抗手段は、自ら死を選び口を閉ざすことだけだ。

「それで、そちらの準備は？」

「問題ないわあ。整備は完璧よあ」

爆発事故により、ローズが事務所に隠していた武器類も被害を受けた。

目立った損傷は無かったが、実戦で使うためには一度整備が必要だった。

「あっちへの連絡はあ？」

「既に終わっています。タイミング的にはギリギリですが」

「まあ、大丈夫でしょ」

「ええ、正直連絡した時点で決着は着いていますから」

「私達はやることをやるだけねえ。それでえ、彼らのアジトはあ？」

「カラーパレットの本拠地は、色彩製薬という会社の地下です」

「なるほどねえ、隠れ蓑にはピッタリって訳かあ」

「ええ、薬の開発に何の不自然さもありません。例えそれが裏の薬でも」

「……直ぐ仕掛ける？」

「ハル君の安全を考えれば、もはや一刻の猶予もありませんね」

千景の言葉に、ローズは頷く。

色々な薬を研究している組織に囚われれば、どんな扱いを受けるかは容易に想像がつく。

救出が目的なら、時間を掛けるほど状況は悪化するのだ。

「行きますよ剛彦。戦場へ」

「イエス・ママ」

二人は静かに出陣した。

ハルを巡る物語5へ舞台は整った（後書き）

遂にカラーパレットの本拠地が特定されました。ここからは、直接対決を残すのみです。

千景が監視の人間に行った拷問については、全面カットしました。書いていても、読んでいてもいい気分にはならないので。七本、と言う単語で大体察して頂けるかと。

いよいよ本拠地に乗り込むのですが、メンバーは千景とローズだけです。

裏の世界には裏の人間、と言うことで。今回は綺麗事で終わらせるつもりは無いので、他のメンバーには一切知らせていません。汚れ仕事をさせたくないと言う思いもあります。

長々語ってしまいましたが、ハル編も大詰め。最初以外出番の無い主人公の運命は……。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語6へ襲撃、そして……く（前書き）

カラーパレット本拠地へ奇襲を掛ける千景とローズ。
果たして二人は、無事ハルを救出出来るのか。

ハルを巡る物語6 〈襲撃、そして……〉

カラーパレット本拠地。

ブラックは自室で、実験の結果を確認していた。

そこに、

「ブラック！」

勢いよくホワイトが入室してきた。

「どうした、そんなに慌てて」

「は、ハピネスの監視を命じていた者と、連絡が取れなくなりました」

ホワイトの言葉に、思わず立ち上がる。

「何時だ？」

「五分ほど前、定時連絡がありませんでした。その後も連絡がつきません」

「……私の失策だ。あの時点で監視役は引き上げさせるべきだった」

「ではやはり……」

「来るぞ。間違いなく」

この場所が洩れたのは、疑いようがないだろう。

「定時連絡は三十分間隔だったな？」

頷くホワイト。

「よし、直ちに実験を中止、プランEを発動しろ。上に残っている者は？」

「あの二人です」

「精々時間を稼いで貰おう。直ちに全ての入り口のシャッターを閉鎖」

「了解です」

手早く指示を出すブラックに、ホワイトは敬礼をして直ぐさま行動に移す。

「……危機ではあるが、まだ凌げる。やれるはずだ」
ブラックは拳を強く握りしめ、部屋を後にした。

地下が騒がしくなっている頃、千景とローズは地上のビルへと潜入していた。

気配を消して忍び込んだが、人の姿は無い。

「……ものけの殻ねえ」

「恐らく地下に集まっているのでしよう」

「じゃあ、その入り口を探して潜入するわあ」

「任せても良いですか？」

「構わないけどお、貴方は？」

「……人の気配がします。憂いを断つてから合流します」

「分かったわあ。それじゃあ後でえ」

千景とローズは二手に分かれた。

色彩製薬社長室。

今この部屋には、二つの人影が対峙していた。

一人は会長。

そしてもう一人は、着物姿の女性、千景だった。

「ひいひい、殺さないでくれ！」

「……知っている事を全て話しなさい。この男のようになりたくなければ」

千景は床に倒れている男をアゴで指す。

若者風の男、社長だった。

「話す、話すから命だけは……」

「一つ、貴方がカラーパレットのボスで間違いありませんね？」

「そうだ。儂がボスのゴールド、息子がシルバー、儂らが最高幹部だ」

「一つ、貴方達は御堂ハルを誘拐しましたね？」

「それは儂じゃない。部下が勝手にやった事だ！」

冷や汗を流しながら、見苦しく言い訳をする会長。

それを千景は、冷たい眼差しで見つめる。

「一つ、何故彼を誘拐したのですか？」

「……最強の兵士を作るためだ。その為に必要だと……」

「何故必要なのですか？」

「知らない、本当に知らないんだ！ ただ黒田が言うから」

「その者は？」

「ブラックという男だ。こいつが全部やったんだ！」

責任転嫁を始めた。

見苦しいことこの上ない。

「彼は今何処に？」

「地下だ。地下に研究所と基地がある。他の連中もそっちにいる」

あっさりと情報を漏らす会長。

「儂の知っている事はそれだけだ。頼む、見逃してくれ……」

椅子から飛び降り、土下座をする。

「ええ、見逃してあげます………命だけは、ねっ！」

瞬間、千景の右足が会長の鼻にめり込む。

そのまま足を振り切り、会長の身体は壁に激突した。

鼻を潰され、鼻血を垂れ流しながら、だらしなく失神する会長。

「……どうやら本当の敵は、ブラックという男の様ですね」

千景は床に倒れる男達に目もくれず、ローズとの合流を急いだ。

ローズが特殊合金のシャッターを破った時、丁度千景が現れた。
「上はどうだったあ？」

「名ばかりのボスが居ました。今はおねんねしてます」

「時間稼ぎの捨て駒だったみたいねえ」

「ええ。真に組織を支配しているのは、ブラックという男の様です」

「……OK。油断せずに行きましょう」

二人は破れたシャッターを通り、地下へと降りていく。

自分達が襲撃している事は承知している筈。

てつきり、激しい抵抗があると思っていたのだが、

「……誘いかしらあ」

「畏かもしれません。慎重に進みましょう」

敵の姿は無く、静かな基地を進んでいく。

基地の構造は単純で、ほぼ一本道。

所々にある部屋を覗きながら、二人は奥へと進んでいく。

そして、一つのドアの前まで辿り着いた。

「……いますね」

「いるわねえ」

このドアの向こうに、人の気配を感じて二人は気を引き締める。

互いに準備できていると頷きあい、静かにドアを開けた。

広い部屋だった。

楕円形の白い机に、椅子が八つ。部屋にあるのはそれだけ。

壁には大きなスクリーンが設置されているが、今は何も映し出し
ていない。

その部屋の中に、一人の男が待っていた。

眼鏡を掛けた、黒いスーツ姿の男性。

侵入者である千景達を前にしても、落ち着き払った様子だ。

「ようこそ、カラーパレットへ」

「貴方が、ブラックですね？」

「はい、その通りです。『死刑宣告者』と『完璧な兵士』にお目にかかれ光栄です」

慇懃に一礼するブラック。

「そこまで知っているなら、私達がここに来た理由も分かっていますね？」

「ええ。御堂ハルを救出しに、ですね」

「なら話は早いわあ。死ぬか、従うか、選びなさい」

「サツとローズは、サブマシンガンの銃口をブラックに向ける。」

「それでもブラックの様子は変わらない。」

「彼は渡せません。私達の目的のために、必要不可欠なパーツですから」

「OK。なら死になさ……」

「少し待ちなさい」

引き金に掛けた指に力を込めるローズを、千景が制する。

「ブラック、貴方の目的とは？」

「上の豚に聞いたでしょ。最強の兵士を作る事ですよ」

「何故ハル君が必要なのですか？」

「冥土のみやげを貰うのは私の方ですが……まあ良いでしょう」

ブラックは眼鏡をクイツと直す、語り始める。

「私達は薬によって、超人的な力を得る研究を行っていました。超人的な怪力や速度、跳躍力や耐久力。そして、透明人間を始めとする特殊体質の発現です」

「そこまでは知っています」

「ですが、それらを複合する事は出来なかった。それでは最強とは言えない」

二人はブラックの話を黙って聞く。

「そこで御堂ハルです。彼の特殊能力は、あなた方もご存じでしょう」

「モノマネ……他者の技術を即座に模倣する」

「その通り。それを解明できれば、極めて短時間で、あらゆる戦闘・殺人技術を身につけた兵士を産み出す事が出来る。それも、幾らでも。それがどれだけ恐ろしいことか、お二人ならお分かりかと」

「……………」

「そして、解明が進めば先程の能力の複合も可能かもしれない。そうすれば、最強を超えた究極の兵士を誕生させることも夢では無いのです」

「……なるほど」

千景は納得したように頷いた。

「ご理解頂けましたか？」

「ええ、貴方はあの二人をそうやって騙した……いや、欺いていたのですね」

ピクリ、とブラックの身体が震える。

「貴方の話は一見筋が通っている様に聞こえる。でも、大きな落とし穴があります」

「伺いましょう」

「仮にモノマネが解明出来たとして、その効果を得られる薬を作成、投与、さらに短期間で済むとは言え技術を教え込むのに、かなりの時間が掛かります」

「それが何か？ その間一切裏の活動を行わなければ良いだけの話です」

誘拐というのは、犯人からアクションがあつて発覚する事が多い。日本では年間かなりの数、人が居なくなっているが、その殆どが失踪扱いだ。

要求も目撃者もない誘拐が気づかれる事は少ない。

「普通なら、ね。ただ御堂ハルという人間に関して、それは通用しません」

ブラックは無言で千景の言葉を聞く。

「当然、私達も調査に乗り出すでしょうし……何よりあの人達が黙ってる筈が無いでしょう」

「ハルちゃんの両親、勿論調査済みでしょ？」

「私も調べてゾツとしましたよ。表向きは国連の職員となっていていますが、その実体は」

「……『闘神』、『戦女神』と呼ばれる、正義の味方」

絞り出すように答えるブラックに、千景は頷く。

「息子が姿を消した。誘拐失踪問わず行方を追うでしょう。そんなれば」

「間違いなく気づくわねえ。そうなればあ、確実に潰されるわよお」
ブラックは何も答えない。

それが千景の言葉が正しいことを証明していた。

「とすれば、貴方が語った目的は、あくまであの二人に対する建前と考えられます」

「私が愚か者だと考えないのかな？」

「これでもそれなりの経験はしてますので。人を見る目はある方です」

「……やれやれ、そこまで言われては仕方がない」

ブラックは参ったと、両手を上げて笑う。

「モノマネが必要と言うのは本当だ。ただそれは、兵士を産み出す為では無いがね」

「……………」

「私には娘が居るのだが、生まれつき身体の臓器が正常に働かない障害を抱えている。医療機器による補助を受け、どうにか命を維持している状態だ」

「……………」

「そうだ。モノマネを解明出来れば、臓器を機能させると言う動作すら、モノマネという形で実現できるかも知れない。そんな彙にも絶る願望が、私の目的だよ」

「この組織に属したのはあ、研究の為？」

「それもあるが、上の豚共には娘の治療費を、莫大な金を出して貰った。絶対服従を条件にな」

自嘲気味に笑うブラック。

「……………」モノマネを解明してしまえば、この組織は不要」

「そうだ。例えば組織が潰され、命を失おうとも、私の目的は果たさ

れる」

「まるで捨て身ねえ」

「否定はしないよ。だが、私の信念に基づいてこの道を選んだ」
そう言うと、ブラックは拳法の様な構えをとった。

「勝てるとは思わない。だが、一分一秒でも足止めさせて貰うぞ」

「充分時間稼ぎは出来た、と言うことですか」

「他の構成員とハルちゃんはある、今頃秘密の出口から脱出したかしらねえ」

二人の言葉に、ブラックは動揺する。

「おや、不思議ですか？ 何故知っていてわざわざ時間稼ぎに付き合ったのか」

「…… 困か！」

「敵の拠点を攻めるのに、正面から無策で挑むほど私も自信家ではありませんので」

「脱出する所を捕らえる伏兵が居ると言うことか。だが」

「勿論脱出班にもお、それなりの使い手が居るんでしょ？ 並の正義の味方なら倒せる位のお」

「安心して下さい。考え得る中で、最も強力な伏兵ですから」

「まさか……」

二人が言わんとする事を理解し、にわかに青ざめるブラック。

その時、ブラックの携帯が着信を告げる。

「どうぞ」

「…… 私だ」

千景達を見据えながら、ブラックは電話に出た。

『はい、もしもし、聞こえますか』

画面に表示された相手は、ホワイトだった。

だが今受話器から聞こえた声は、間違いなく他の女性のものだった。

「…… 何者だ？」

『えつとね、御堂菜月って言います』
『つつつつつ!!』

一瞬、心臓が停止する程の衝撃を受けた。

『あれ、聞こえてますか。ブラックさんで間違いありませんよね』

『……そうだ』

『良かった。間違いだったらどうしようかと思っちゃった』

『こ、この電話の持ち主はどうした!』

『えへへ、さして、どうなったでしょう?』

悪戯っ子のように笑いながら告げる菜月に、ブラックは思わず携帯を落とす。

相手が本物であるかなど、もはや意味はない。

ただ一つ確かなのは、自分の腹心が携帯を奪われる様な事態に陥っていると言うことだ。

『あれ、おい、もっしもし』

床に転がる電話から、菜月の声が漏れ聞こえている。

千景は呆然と立ち尽くすブラックに近寄って、携帯を拾い上げた。

『もしもし、ハピネスの千景です』

『あ、ちーちゃん。こっちはぜんぶ終わったよ』

『お疲れさまです。それで、ハル君は?』

『ちよつと良くない感じだったから、パパが病院に運んでるの』

『そうでしたか……心中お察し致します』

『うん、ありがとだね。あ、そうそう、もうすぐそっちに部下が行くと思っけど』

菜月の言葉通り、千景達の居る部屋に、複数の人影が現れる。

銀と青を基調としたジャケットに身を纏った、正義の味方だった。

『……はい、今私達の元に来ました』

『そっか。じゃあ後始末は彼らに任せて、ちーちゃん達は上に出てきてくれるかな?』

『分かりました』

通話を終えると、千景はジャケットの面々に視線を移す。

身のこなしや雰囲気から、いずれも凄腕だと分かる。

「ハピネスの方ですね。後は我らにお任せを」

「……そうさせて貰います」

彼らでも、正面から戦えばブラックに勝てるかは分からない。

だが、戦意を喪失したブラックには、もはや抵抗の意思はなかった。

正義の味方に身柄を拘束される様子を見てから、千景とローズは地上へと戻って行くのだった。

ハルを巡る物語6へ襲撃、そして……（後書き）

まずは、一応の決着を見ました。

随分呆気なく終わったように感じますが、元々カラーパレットには千景達に対抗する戦力が無いため、本拠地を特定された時点で負けは決まっていたいました。

ブラックが足止めする間に、他の拠点に移る予定でしたが、千景達を超えるチートの登場でゲームオーバーです。

本来であれば、場所の特定をされる恐れのある監視は、作戦成功時に撤退させるつもりでしたが、奈美と秋乃がハピネスを訪れた為に今後の動向を知るためのこしてしまいました。結果として、それが裏目に出た形です。

千景が秋乃から聞き出したのは、冬麻と菜月の携帯番号です。これで、イギリスにいる二人と連絡を取りました。直接の面識はありませんが、二人はハピネスのことを調べていたので、この話を信じました。

決着は着きましたが、まだハッピーエンドにはほど遠いです。

ハルを巡る物語は、これから後半戦に突入です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語7へチート両親登場〈(前書き)〉

千景とローズは、ハルの母親と対面を果たす。

そして、病院に運び込まれたハルの元へと向かうのだが……。

ハルを巡る物語7へチート両親登場

色彩製薬ビルの周囲は、騒然とした空気に包まれていた。

正義の味方と警察が、忙しげに動き回る。

悪の組織摘発と言うことで、大物取りになっているようだ。

ビルから出てきた二人を、一人の少女が出迎えた。

栗色の大きな瞳をした、ショートカットの美少女。

千景とローズを見て、ニコニコ笑顔で声を掛ける。

「あゝ来た来た。お疲れさまです」

ぺこりと頭を下げた。

見覚えのない少女に、千景は少し戸惑ったが、ふと気づく。

「……その声、もしかして……」

「ふふ、直接会うのは初めましてだね。御堂菜月って言います、よろしくね」

眩しい笑顔を見せる菜月。

対する千景達は驚きを隠せなかった。

「ほ、本当に……貴方が、ハル君の母君……」

「これが……高名な『戦女神』なのお？」

どうみても紫音と同じ年位にしか見えない。

ハルの母親、世界でも指折りの正義の味方、どちらも連想出来なかった。

「今回はハルちゃんの為にありがとうね。本当に助かったよ」

「い、いえ……ご息は私達にとっても、大切な仲間ですから」

「えへへ、そう言っただけだと嬉しいな」

「それでえ、ハルちゃんの様子はどうでしたかあ？」

菜月の笑顔が曇る。

「良くないの。直ぐにでも治療が必要な感じかな」

「……そうですか」

「私達がもう少し早く動いていたらあ……」

「ううん、もし二人が居なければハルちゃんは無事じゃ済まなかったかもしれない。だから二人には本当に感謝してるんだよ」

暗くなった空気を吹き飛ばすように、菜月は再び笑顔を見せる。

「それに腕のいい医者さんの知り合いも居るし、頼んでみるから」
「でしたら、私の仲間にとびきりの医者があります。是非ハル君の治療を」

「本当？」

「えええ、見た目はともかく、『神の手』って呼ばれる程の凄腕ですよお」

「うわあゝ凄そう。じゃあお願いしちゃうね」

「はい、直ぐにでも。それで、ハル君が運ばれた病院は？」

「えっとねゝ、桜ヶ丘国際病院だよ」

千景は頷くと、携帯で直ぐさま柚子に連絡を取る。

詳しい事情は後で説明すると話して、病院に直行して貰った。

「直ぐ向かうそうです」

「よし、じゃあ私も行くね」

「私達も同行して良いかしらあ？」

「勿論だよ　じゃあみんなで行こう」

「病院までは多少距離がある。

足が欲しかったので、菜月は部下から車両を借りる。

運転をローズに任せ、後部座席に乗り込もうとしたところで、不意に声を掛けられた。

「御堂様、どちらに行かれるのです」

「あ、みーちゃん。ハルちゃんの所だよ」

「困ります。この場の責任者は貴方なのですから」
声を掛けたのは、美園だった。

「あら美樹。貴方が担当だったのですか？」

「……管轄範囲でここまで大騒ぎになって、私が出てこないわけ無いでしょう」

「みーちゃんが責任者って事をお願い」

「気持ちばかりですが、私では正義の味方への指揮権が……」
美園は心底困ったように顔をしかめる。

「ん〜じゃあ………おい、がーちゃん」

菜月は事後処理をしている正義の味方達に向けて、大きく呼びかける。

その声に気づき、一人の大柄な男が近づいてきた。

ローズに引けを取らないがたい。

頭はスキンヘッドに剃り上げ、丸いサングラスが威圧感を与える。

「……菜月様、お呼びでしょうか」

「うん、私これからハルちゃんのとこに行くから、責任者やって

」

丸投げした。

「……承知しました。どうぞ、ご子息の元へ」

「ありがと〜。警察の責任者はこのみーちゃんだから、仲良くやってね〜」

「はい、報告は纏めて後でお持ちしますので。行ってらっしゃいませ」

深々と一礼する男。

そして啞然とした表情で立ち尽くす美園。

そんな二人に見送られながら、菜月を乗せた車は病院へと向かうのだった。

「……さて、美園警視。今後の段取りについてですが」

「………」

「警視？」

「……あの方は、いつもああなのですか？」

「何分自由奔放な方ですので。それに、今回はご子息が被害にあっていますから」

「そ、そうですね」

「事後処理程度で、手を煩わせる事ありません。頼りないかもしれませんが、どうぞよろしく」

「い、いえ、こちらこそ」

ようやく冷静さを取り戻した美園は、サングラスの男に頭を下げた。

組織構成員の逮捕、証拠の押収、施設の調査 e t c e t c ……。

やるべき事は山ほどあるが、テンパらなければ優秀な美園。

的確な指示を下し、事後処理をこなしていった。

病院に辿り着いた菜月達。

そこで三人は、手術室の前で仁王立ちしている冬麻と出会った。

「パパ」

「おお、菜月。そっちは片づいたのか？」

「うん、がーちゃんに任せて来ちゃった」

「そうかそうか、岩田君なら俺達よりよっぽど上手くやってくれただろう」

胸に飛び込んだ菜月を抱きしめながら、冬麻は豪快に笑う。

その様子を、呆然と見つめる千景達。

「ん、菜月、そちらの方々は？」

「えっとね、ハルちゃんが働いているハピネスの人よ」

「おお、君達が」

菜月を降ろし、千景達に向き合う冬麻。

「お初お目に掛かります。便利屋ハピネスの所長、柊千景と申します」

「同じく、ハピネス社員のローズです。お二人のご勇名はかねがねえ」

「ほう、これはまた……。いや、失礼した。私は御堂冬麻、此度は愚息が迷惑をかけた」

冬麻は深々と千景達に頭を下げる。

先程の菜月と同じようなやり取りをし、話題はハルの事に。

「それでパパ、ハルちゃんはどうかの？」

「うむ……。ここは隠さず言うが、あまり芳しくない状態の様だ」

冬麻は渋い顔で答える。

まず、血液が致死量ギリギリまで抜かれていた上、多量の薬物投与。身体のおちこちに、人体実験と思われる傷がくつきりと残っていた。

「命は大丈夫だろうが……。後遺症が残るかもしれん。最悪、日常生活に影響が出るだろう」

「……………」

「な、そんなに顔しないでくれ。知り合いの医者に頼んで、意地でも完治させてみせるさ」

ニカッと笑みを浮かべる冬麻。

動揺を見せない姿が、巨漢と相まって安心感を与える。

「確か、ドイツで闇医者してるあいつが暇そうにしてたな。取り敢えずそいつを引っ張ってこよう」

「その事ですが……。私どもの仲間に、腕利きの医者が居ます」

「是非ハルちゃんの治療を任せて貰えませんか？」

「なんでもね、『髪の毛』って呼ばれてるらしいわよ」

柚子涙目。

「いえ、正しくは『神の手』でして……」

「ほう、そこまでの医者が居るとは僥倖だ。是非お願いしたいな」

「ここに来るよう連絡してあるのでえ、間もなく来る頃かとお」

その時、千景達の元に近づいてくる足音が聞こえてきた。

「二人とも、来たよ」

「待っていましたよ、柚子」

現れたのは、小さな医者さんこと、和泉柚子だった。

「はあ、はあ、急いでこいつて言うから来たけど、何があったの？」

「ええ実は……」

千景はざつと事情を説明する。

細かい所は端折り、ハルが危険な状態だと言うことを伝える。

「事情は分からないけど、ハルさんが大変なのね」

「今、その手術室で治療を受けています」

「うん、任せて。全力で挑むわ」

柚子は気合いを入れると、手術準備室へと入っていった。

無言でその様子を見ていた冬麻と菜月。

「不安に思われるかもしれませんが、ああ見えて腕は超一流です」

「ええ。外見で判断しないで下さいねえ」

二人に言われ、冬麻と菜月は一瞬キョトンとした後、直ぐさま微笑む。

「はっはっは、心配などしていないよ」

「うん あの子凄いな。私達の知り合いよりも腕が良いかも
予想外の反応に千景達は驚く。

大抵は、柚子の姿を見て不安を抱くのだから。

「仕事柄、人を見る目はある方なんだ。一目で分かったよ、信頼に
足る人物だと」

「ハルちゃんも友達に恵まれてるわね」

「勿論、君達も含めてだが」

笑いかける冬麻に、恐縮です、と千景達はお辞儀をする。

一同が見守る中、ハルの治療は続けられる。

手術中のランプが消えたのは、それから数時間後の事だった。

ハルを巡る物語7へチート両親登場（後書き）

冬麻と菜月、この二人が出てくると途端に空気が緩みますね。ここから物語は、シリアスから脱却していきます。

正義の味方については、次回以降簡単な説明が入ります。その時後書きで補足させて頂きます。

ハルの状態は、詳しく書くと重くなるのでスルーの方向で。結構酷い実験され、通常なら日常生活復帰できない位のダメージを負っています。

まあ、この小説にはチート医者が居るので、問題は無いのですが。

次はこれまでの空気を振り払うべく、和やかな話となります。今まで触れなかった部分も、少し紹介する予定です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語⑧ へ事件の後はお食事会 へ (前書き)

あれから幾日か過ぎ、ハルは無事退院することが出来た。
迷惑を掛けたお詫びと、冬麻達はハピネスの面々を食事に誘う。

ハルを巡る物語 8 〈事件の後はお食事会〉

あの事件から一週間が経った。

柚子を始めとする、優秀な医師達の活躍により、ハルの治療は無事完了した。

三日もする頃には一般病棟へと移り、懸命にリハビリを行った。その甲斐あって、日常生活が行えるレベルまで回復することが出来た。

そして今日、晴れて退院する運びとなり、
「愚息が迷惑を掛けたお詫びに、是非食事をご馳走させて欲しい」と冬麻がハピネスの面々に呼びかけ、ハルの退院祝い食事会を行う運びとなったのだ。

「それでは、ハル君の退院を祝って」

「「かんぱい」「」

グラスをうち鳴らす、賑やかな音が響いた。

今回一同がやってきたのは、中華料理店。

使い慣れぬ円卓に、奈美や紫音は興味津々といった様子だ。

千景が簡単にマナーを説明して、食事会は始まった。

「うわあ〜美味しい、何これ」

「ほう、中華料理は餃子がラーメンと思っていたが……認識を改めなければ」

「ふふ、いい味です」

「流石ハルちゃんの両親お薦めの店ねえ」

「この老酒、いけますね」

「おい、その小娘。円卓を一回転させるな！ 回し続けるな！」
料理に舌鼓を打つハピネスの面々。

「はっはっは、気に入って貰えたようで何よりだ」

「みんないっっぱい食べてね」

「はい」

和やかなムードの食事会。

そんな中、

「あら、お兄ちゃん。食べないの？」

一人箸が進まないハルに、隣に座った秋乃が尋ねる。

「ん、いや……ちょっと箸が上手く使えなくて」

ハルは震える手で箸を掴もうとするが、なかなか上手くいかない。

実験の後遺症で、末端神経の反応が鈍くなっている。

一時的なものらしく、場の空気を壊さぬよう黙っていたのだが。

「そっか……じゃあ私が食べさせてあげるよ」

「へっ？」

「はい、あ〜ん」

秋乃は青椒牛肉絲を箸で摘むと、ハルの口元へと持っていく。

俗に言う、あ〜んだ。

「そんな恥ずかしい事が出来るか」

「良いじゃない、兄妹なんだし恥ずかしい事なんて無いわよ」

「でもな……」

「あ〜ん」

秋乃は一步も譲らない。

こうなったら、絶対に引かないことをハルは知っていた。

しぶしぶ口を開き、料理を食べさせて貰う。

「美味しい？」

「もぐもぐ……ああ、美味しい」

病院食に慣れた舌には、この上ないご馳走だった。

「良かった。じゃあ次は……」

笑顔でハルに料理を食べさせていく秋乃。

その様子を大抵のメンバーは微笑ましそうに見ていたのだが、

「う、羨ましい」

「全くだ」

奈美と冬麻だけは違う感想を持っていた。

（お嬢さん、ここは）

（ええ、任せてください）

一瞬のアイコンタクトで、意思疎通は充分。

奈美と冬麻は素早く席を入れ替わり、奈美はハルの、冬麻は秋乃の横に座る。

「ハル、私も食べさせてあげるわ」

「え、いや別に気を遣わなくても……」

「いいから、はい、あ〜ん」

「……………」

目の前に差し出されたのは、北京ダック丸ごと。箸で掴めたことを心から賞賛する。

「ほら、口開けて」

「無理だ……面積というか体積と言うか……」

「いいから!」

奈美は空いている片手でハルの口をグイッと開き、北京ダックを押し込んだ。

「!!!!!!!!!!!!!!」

「美味しい?」

返事など出来るはずがない。

味わうどころか、噛むことも出来ない。

何せ、アゴを外されてしまったのだから。

「つつつつつつ!!」

「そっか〜そんなに美味しいんだね」

必死に非常事態をアピールするが、奈美は勘違いして受け取る。そして、口からはみでたダックを強引に押し込む。

「……………」

「あれ、何か顔色が青く……」

「呼吸させてっ!!!!」

間一髪、ハルは窒息死を免れた。

死因は北京ダックなんてテレビで流れた日には、死んでも死にきれない。

「む〜お兄ちゃん取られちゃった……」

「なら秋乃よ、是非お父さんにあ〜んを」

「……………良いわよ」

てつきり断られると思った冬麻は、心の中でガッツポーズ。

口元に近づくと秋乃のレンゲを、ぱくりと口にくわえて、

「ぬおおおおおおお！！」

思い切り口から火を吐いた。

「美味しいでしょ、特製辛さ万倍激辛麻婆」

「あ、あ、あ、ああ、とつても……美味しいさ」

顔を真っ赤にし、汗をたらたら流しながらも、冬麻は微笑む。

まさに男の、親の意地だった。

「あ〜一つお聞きしても宜しいですか？」

「うん、何かなゆーちゃん」

「ゆ、ゆーちゃん？」

「……………母さんは人に勝手なあだ名を付けるんだ」

柚子だからゆーちゃん。

ひねりも何もないあだ名に、一同は苦笑いを浮かべる。

「それで何を聞きたいのかな〜？」

「あの……………ですね」

真剣な柚子の表情に、一同は思わず箸を止める。

ハルの主治医でもある彼女の質問。

「聞きたいのは……………」

ゴクリ、と緊張感が高まる。

「今、お幾つですか？」

全員が机に突っ伏した。

緊張感を返せ、と叫びたくなる。

「えへへ、幾つに見える？」

「失礼ですが……十代前半かと」

仮にも二児の母にそれはないだろう。

だが、菜月は嬉しそうに笑う。

「えゝそんなに若く見えるかなゝ。もう、ゆーちゃんはお世辞が上手いんだから」

「母さん……絶対にお世辞じゃないよ」

「もゝハルちゃんまでゝ。そんな褒めても何も出ないわよ」

本気で喜んでいるので、あえて地雷を踏むこともあるまい。

「でも、もうおばさんなのよゝ。本当はゝ」

菜月は片手の指を全部立てる。

五本指、と言うことは……。

「この年齢詐称女の上に行くだと……」

「若さを保つ術も無くはないが、ここまでは……」

「データが間違っていると思いましたが」

「事实は小説より奇なり、ねえ」

目の前にいる人知を超えた存在に、驚きを隠せないハピネス一同。そして柚子は、思い切り凹んだ顔で肩を落とす。

「……私の未来……」

イメージできてしまったようだ。

今と全く変わらぬ姿で歳を重ねる、自分の姿が。そんな柚子に、かける言葉が見あたらなかった。

「……ねえお父さん」

「おお、どうしたマイスイートハート」

「そろそろ教えてくれない？」

「ん、ハルが子供の頃の恥ずかしい話か？」

「それは後で聞くとして……今回の事全部よ」

秋乃の言葉に、円卓の会話が止まる。

みんな意識的に避けていた話題。

だけでも知りたかった話だ。

「どうしてお兄ちゃんが誘拐されたのか。お父さん達の仕事のこと。全部聞かせて」

「……そうだな、頃合いかもしれん」

冬麻は小さく頷き、口を開いた。

「まず俺達の仕事だが……これは前から言っている様に、正義の味方だ」

「それは、漫画とかに出てくる？」

「半分正解だ。正義の味方は、悪と戦う組織の事。そしてそこに所属している者の呼び名だよ」

冬麻は酒を一口のみ、喉を潤す。

「国連直属の組織で、本部をスイスに、世界各国に支部を持っている」

「目的は、悪の組織を倒す事ね」

「は、初めて聞いた……」

「正義の味方、と言う名称は伏せられているからな。表向きは国連の一機関に過ぎん」

ハルの呟きに、冬麻はさらりと答える。

「じゃあお父さん達は、日本支部の正義の味方なの？」

「ううん、私達は本部所属よ」

「世界中が活動範囲。ま、体の良い応援部隊と言った感じだ」
警察に例えるのが早い、と冬麻は言う。

本庁が本部、各地の警察署が支部と言い換えられる。

「なら親父達は、エリートなのか？」

「そんな事無いんだけどね」

「……ご謙遜を。『闘神』と『戦女神』の名は、世界中に鳴り響いていますよ」

「とうしん？」

「いくさめがみ？」

千景の言葉に、ハルと秋乃は間抜けな声で繰り返す。

「ふっ、君は色々詳しいようだね」

「何だよ、二人だけで分かり合って……」

「折角だ、説明を任せても良いかな？ 自分で言うのは少々気恥ずかしいのでね」

「では僭越ながら」

千景はコホン、と咳払いをして話し始める。

「正義の味方は数多く居ますが、本部の、それも渾名を持っている正義の味方はごく僅かです」

「渾名って二つ名ですよ。私も持ってますよ」

「そうなんだ。奈美ちゃんは何て言うの？」

「その名も、『トラブルメーカー奈美』です」

えへん、と胸を張る奈美。

まだそのネタを引つ張っていたのか、とハル達は呆れるが、

「うわ〜格好いいね」

「うん、良い名だ。うちの連中も、そのネーミングセンスを見習って欲しいくらいだよ」

当の本人達には好印象だったようだ。

「……こ、コホン。とにかく、渾名を持つ正義の味方は、超一流のエリートです」

「何というか……一部の人が喜びそうですね」

「まあ俺達も勝手に付けられただけだ。あまり気に入ってはいないよ」

「そうよね。もっと可愛いあだ名だったら良いのに」

「……例えば？」

「そうだな、『躍動する筋肉』とか、『クールなナイスガイ』なんて良いな」

「ん〜『若奥さん』とか『エプロン姿が素敵』だったら可愛いかも

「名付けた人、グッジョブです。」
自分の親がそんな名で呼ばれた日には、本気で寝込みそうなんだから、とにかく……二人は優秀な正義の味方と言ったことです」
微妙な空気の中、千景は強引に話を纏めた。

「では次だな。悪の組織については……まあ説明するまでも無いと思うが」

「悪いことをしようとする人達の集まりよ」

「シヨ カーみたいなの？」

それだ、と冬麻と菜月は同時に頷く。

「規模や目的は様々だが、平和を乱す存在というのは共通している」

「お兄ちゃんを誘拐したのも……」

「カラーパレットと言う、悪の組織だ」

秋乃の言葉に冬麻が答える。

「日本で活動していた、Dランクの組織。規模も危険度も中の下程度だ」

「Dクラスって？」

「悪の組織は、危険度によってランク分けされているのだ」

「上はSから下はGまであるのよ」

カラーパレットは、丁度真ん中くらいの位置だ。

「あえて低ランクでマークを外す組織もあるので、参考程度にしかならんがな」

「てか、そんなに悪の組織ってあるのかよ」

「数えるのはちょっと無理ね。日本だけでも、百は軽く超えるでしょうし」

治安が本気で心配になってきた。

知らぬが仏、とはよく言ったものだ。

ここまででは良いかな、と言う冬麻の確認に一同は頷く。

秋乃だけでなく、すっかりこの場の全員が話に聞き入っていた。

「さて、ハルが誘拐された理由だが……」

「ちーちゃんとりーちゃんは知ってるよね？」

菜月に問われ、二人は頷いて答える。

「一言で言えば、モノマネのせいだ」

冬麻は一連の流れを簡潔に説明する。

カラーパレットは最強の兵士を作り、国家転覆を狙っていたこと。その為にハルのモノマネを解明しようとしたこと。

最強の兵士とは、優れた戦闘技術を持った人間のこと。

そして、超人的な能力の複合のくさびとしても、モノマネが有効だと考えたこと。

「だが、実際は違った」

組織は名ばかりのボスではなく、部下の黒田という男が支配していた。

黒田には娘が居て、その病気の治療にモノマネを使おうと考えた。その為に、組織も自分の命も、そしてハルも犠牲にするつもりだった。

「黒田という男は、実に上手く事を運んだ」

誰にも誘拐を気づかれないタイミングで、ハルを拉致。

護衛の正義の味方を倒し、服に付いていた発信器を宅配便で九州に送る。

その為、日本支部は追跡隊を西日本に誘導されてしまった。

「もし秋乃がハルの部屋を訪れなければ、違和感に気づかなければ、もし奈美君が友人でなければ、ハピネスの所員でなければ、

もしハピネスに千景君やローズ君のような人材が居なければ、
全ては黒田という男の計画通りに進んでしまっただろう」

幾つもの偶然が重なり合った結果が、今この時。

黒田が言っていた天は、彼ではなくハルに味方したと言えるかも
知れない。

ハルを巡る物語8 〈事件の後はお食事会〉（後書き）

大きな事件の後は食事、これはもう定番になりつつありますね。

今回で少し、正義の味方など非日常の世界が紹介されました。

本編で絡むネタはもう無い予定ですが、一応設定を作っていたので。

冬麻と菜月は問答無用で、超一流のエージェントです。

日本に居たときも、ちよくちよく世界を回って仕事をこなしていました。

ハルと秋乃は正にサブレッドと言えるのですが、ハルに関しては
えばモノマネ以外はごく普通の一般人と変わらない能力です。

食事会は次まで続きます。

シリアスはこれでお終い、と言う感じで徹底的に出し切ってしま
います。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語9 〈物語は幕を閉じ〉 (前書き)

食事会の後編です。

前回の話を読んでいないと、全く内容が意味不明だと思うので、未読の方はどうぞそちらからお読み下さい。

ハルを巡る物語9 〈物語は幕を閉じ〉

「……少々重苦しい話をしてしまったな。秋乃、これで満足かい？」
「うん、ありがとう」

秋乃に礼を言われ、冬麻はだらしなく顔を崩す。

「それにしても、全部ハルのモノマネに話が収束するのだな」

「言われてみるとそうかも。じゃあ原因はハルにあるって事？」

「え、冤罪もいいところだろ、それ」

徹底して無罪を主張したい。

「でも確かに便利よね。動物とも会話できるし」

「ほう、なかなか面白い話だな。奈美さん、是非詳しく聞かせてくれないか？」

「えつとですね、ハルってにゃんにゃん、とか言つて猫と話したんですよ」

奈美は透明人間事件の、ビルでの出来事を話し始める。

知っていた千景と紫音以外の面々は、興味深そうにそれを聞く。

張本人のハルは、物凄く羞恥プレイに身を縮ませていた。

「動物と会話かぁ、素敵じゃない」

「ですよ。私も話してみたいです」

「動物の意思が分かる装置はあるが、意思疎通できる発明と言うのも面白そうだ」

ハルをネタに、わいわいと騒ぐハピネスメンバー。

話題は次第にハルのモノマネ自体へと移っていく。

「よく考えてみると、モノマネって不思議よね」

「確かに。ねえお兄ちゃん、モノマネする時ってどんな感じなの？」

「そう言われても、特に意識してないし……」

「自分に出来ないことが出来るのに、違和感とかは？」

「いや、無いんだよ。何か……元々出来る様に思えるんだ」

「……結局、カラーパレットとやらは、モノマネを解明出来たのか？」

蒼井がぶしつけに冬麻に尋ねる。

「押収したデータを見る限り、無理だったようだね」

「なら……その黒田という人の娘さんは……」

命を維持するためにかかる莫大な費用を、悪の組織のボスから貰っていた。

それが途絶え、更に頼りにしていたモノマネの解明も失敗したと言っことは。

ハルの言葉に、円卓に沈黙が訪れる。

「……その事だが、事情聴取した黒田から、娘さんの情報を得た」

「年齢は五歳で、とつても可愛い女の子だったわ」

「会ったのか！」

驚くハルに、冬麻と菜月は頷く。

「病院関係者からも話を聞いてな、今後の対応を決めた」

「対応って……」

「正義の味方は、特殊な事情の子供を保護する事も出来るの。だからその子も、正義の味方で保護して治療を続けさせようと思ったんだけど」

「だけど」

嫌な接続詞に、ハル達はごくりと唾を飲む。

「その必要は無くなったよ」

「……」

治療も保護も必要なくなった。

その言葉が意味する事を察し、ハル達は悲痛な顔を浮かべる。

「今朝……彼女は……」

「無事手術が終わって治ったの」

全員椅子から転げ落ちた。

「はっはっは、いいリアクションだね。どうだい、今度コントでも？」

「お〜や〜じ〜！」

「お〜と〜う〜さ〜ん！」

額に怒りマークをつけて、ハルと秋乃は冬麻に詰め寄る。

「紛らわしい言い方すんなっ！！！」

「そうよ！ 凄く嫌な想像しちゃったじゃないっ！！！」

「おいおい、早とちりしたのは二人だろう。それに母さんだって」

「お母さんは良いの！！！」

理不尽な二人に、冬麻は少し凹む。

「だが、今まで治療できなかった難病なのだろう。一体どうやって」

「そうね〜。天は黒田ちゃんも見放さなかったって事かな」

「……柚子ですね？」

千景の言葉に、菜月はニツコリ微笑んで頷く。

「ハルちゃんが運ばれた病院に〜、たまたまその子も入院してたの」

「

「あそこは日本でも指折りの医療設備がある病院だものねえ」

「でね、折角だからゆーちゃんに、その子を診て貰ったのよ」

事情聴取後、冬麻と菜月は黒田の娘を見舞った。

その帰り、偶然ハルの治療を終えた柚子と会い、事情を説明した。

柚子は快諾し、娘の診断を行い、

「……治せますよ。ほぼ百パーセント」

周りの医者達も驚かせる結論を出した。

手術には家族の同意が必要と言うこともあり、黒田と面会出来るまで待ち、昨夜ようやく手術が行われることとなった。

今朝まで掛かる大手術は無事終わり、娘の臓器は正常な働きを行う様になった。

長いリハビリが必要だろうが、やがては普通の生活が送れるらしい。

「と言うわけで、ハッピーエンドです」

「な、何というご都合主義……」

「そうでないさ。黒田という男が、必死にあがいた結果だからな」

「最初から柚子さんにお願ひしたら良かったのに」

「……天使か悪魔かあ、先に出会ったのがどっちかって話ねえ」

「そして彼は、悪魔との契約を選んだ」

「人の巡り合わせは運命と言うが、やりきれない話だな」

しんみりする一同。

「と言いますか、柚子さん知ってたなら教えて下さいよ」

奈美は沈黙を続ける柚子に声を掛ける。

「どうせ親父達に、驚かせたいから黙っててくれって、頼まれたんだろ？」

「……………」

苦笑を浮かべるハルに、しかし柚子は答えない。

それどころか、先程からピクリとも動かない。

「柚子？」

「無駄だぞ、この女気絶してる」

「はあ〜??？」

蒼井の言葉に間の抜けた声を出す一同。

試しに奈美が柚子の目の前で手を振るが、反応はなかった。

「一体どうして？」

「そう言えば、先程蒼井殿が何か柚子殿に言ってるから、様子がおかしかったが」

紫音の呟きに、一斉に非難の視線が向けられる。

「ちょっと蒼井、あんた何言ったのよ！」

「気絶するほど酷いこと言ったのか！」

「女の子にあんまりじゃないのぉ！」

「事と次第によっては……………」

ざわっと殺気立つハピネスの面々。

そのあまりの迫力に、蒼井は大慌てで弁明をする。

「ち、違うぞ。吾輩はただ、この女に教えただけだ」

「何をです？」

「この女が、『この料理美味しい、何のお肉だろ』とか言うから、『そんな事も知らないのか、それはカエルの肉だ』と教えただけだ。そしたら急にこの女が……」

「……千景さん、ひよっとして」

「柚子はカエルとか蛇とか、つまりは虫類と両生類が大の苦手です。美味しいと食べていた料理の正体を知った。

しかもそれが自分の大嫌いなもの。

どれほどの衝撃が柚子を襲ったのか、ハル達には計り知れない。

「柚子……」

「全く、とんだ言い掛かりだ。大体貴様らは何時……ぐぶうええ」

「そもその原因はあんたでしょ！ もっとビブラートに包んで言いなさいよ！」

「……奈美、それを言うならオブラート」

秋乃は疲れた声で、そつと突っ込んだ。

賑やかな食事会も、そろそろお開きとなった。

「それで、お二人はこれからどうなさるのですか？」

「明日朝一番の飛行機で、スイスに戻る予定だ」

「随分急だな」

「ボスが煩いのよ。ちゃんと報告しに来いって」

ほわわん、と菜月は答える。

「こつちも丁度用があるから、一度直接会いに行く」

「用？」

「野暮用だ。朝早いから見送りは結構だぞ」

冬麻は短く答え、話題を切った。

「当分身の危険は無いと思うけど、何かあったら直ぐ連絡してね

「

秋乃は何もなくても連絡してくれて良いんだぞ。むしろしてくれ」

「この親父は……」

変わらぬ父親に、ハルは呆れ半分で呟いた。

ハルを巡る一連の騒動は決着をみた。

これからは、再び日常が戻ってくる。

ハルを巡る物語9 〈物語は幕を閉じ〉 (後書き)

随分長いこと引つ張ったハル編、いよいよ完結です。
ある程度救いのある終わりだったかと。

ハル編は終わりですが、この話の後日談が続きます。
視点はハピネスから、冬麻達に。

この機会に、正義の味方の話も片づけちゃおう、と言っ勢いです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語後日談へ正義の味方（前書き）

ボスへの報告のため、本部へと向かう冬麻と菜月。
ただ今回は、二人旅ではなく……。

ハルを巡る物語後日談へ正義の味方

一機の飛行機が、早朝日本を飛び立った。

小型のそれは、旅客機とは明らかに違うフォルムをしている。

両翼が無く、大きな涙のような流線型をしていた。

定員十名にも満たない機内には、四人の乗客があった。

「到着までは五時間程か」

「朝食は向こうに着いてからにしましょ」

「ふっ、問題ないさ。昨晚は君をたんまり頂いたからね」

「もう、パパったら」

冬麻と菜月は隣に座り、何時も通りのいちゃつきぶりを見せてついている。

見せつけられているのは、通路を挟んで反対側の席に座る二人の男女。

何とも言えない表情で黙っていた。

「……おや、どうした？ ひよっとして飛行機苦手なのかな？」

「いえ、問題ありません」

「同じく」

二人は冬麻の問いかけに短く答える。

「そうか、まあ向こうに着くまで五時間ある。何なら眠っていても良いぞ」

「もし眠くないなら、一緒にトランプやらない？ 私ババ抜き得意なの」

「……………」

「どうしたのかな？」

「何故、私達を連れてきたのですか。貴方達にとって、忌むべき相手でしょう」

「息子さんを拉致し、非道な実験を行った……私達を」

男女、ブラックとホワイトは沈んだ顔で尋ねた。

「理由は色々あるが、まあ詳しくは向こうに着いてから話すよ。どうせボスに報告するしな」

「正義の味方のトップ……」

「あはは、そんな緊張しないで平気だよ。とっても面白い人だから」

「直接……私達を裁くつもりですか」

「ん、どうにもネガティブだな。そんなんじや人生詰まらんぞ」

硬い表情の二人に、冬麻は苦笑しながら告げる。

「どの様な裁きも受けません。私の目的を果たしてくれたお二人に、逆らうつもりはありません」

「ブラック……」

「心配しないでよ。別に食べたりはしないから」

菜月は心配そうに呟くホワイトに答えると、素早くトランプを手渡す。

「じゃあやろう、最初は大貧民ね」

暗くなりがちな空気を振り払うように、菜月は強引にゲームを始めるのだった。

一行を乗せた飛行機は、五時間のフライトを終えてスイスに到着した。

上空を旋回しながら、着陸の許可を待つ。

「……本当に五時間で……通常の半分以下だぞ」

「はっはっは、まあ発明好きの爺さんが作った特別製だからな」

驚愕の表情を浮かべるブラックに、冬麻は軽く答える。

考えられない速さなのだが、冬麻にとっては驚くことでは無いよ
うだ。

「空港では無いのですか？」

「君達の身柄は少々複雑だからな。直接うちの本部に来て貰った」

「あれが……正義の味方の本部」

大きなビルを中心に、大小様々な施設が集まっていた。
敷地は六角形の形に区切られている。

「流石、攻めにくそうですね」

「防衛力なら間違いなく世界一だろう。お、着陸許可が出たな」

飛行機はゆっくりと高度を下げている。

垂直に。

「とんでも無い科学力ですね」

「はは、本音は滑走路を作るスペースが勿体ないってだけなのだがな」

その間にも、飛行機は地面へと近づいていく。

「そろそろ着くぞ。降りる用意を……」

「もう少し、もう少し時間を。せめて一矢報いねば」

声を掛ける冬麻に、ホワイトが必死な形相で願ひ出る。

「さあ菜月さん、もう一度勝負です！」

「ん〜じゃあこれで最後ね。これから幾らでも遊べるし」

菜月は笑いながら、トランプをシャッフルして配る。

「……すっかり打ち解けてる」

「菜月は人見知りしないから、友達を作るのが上手なんだよ」

大貧民で大敗を喫したホワイトは、菜月にサシでの勝負を持ちかけた。

ブラックが冬麻と話をしたかったこともあり、二人で出来るポーカーで遊んでいたのだが。

「五百戦零勝五百敗……せめて一度だけでも」

「えへへ〜はい、じゃあ始めよう」

配り終わったカードを互いに手に取り、ホワイトは唇を笑みの形に歪めた。

「くっくっく、勝利の女神は私に微笑んだようです。ノーチェンジで」

「おお、いい手みたいだね。なら私は全取っ替えて」

菜月は手札を捨てて、新たに五枚のカードを引く。それを裏返しのまま確認しない。

「勝負を捨てましたか？ なら勝たせて貰いましょう。オープン、ストレートフラッシュです！」

ダイヤのストレートフラッシュを、誇らしげに見せつける。

「うわあ、凄いね。さてと、私の役は」

伏せたままのカードを、一枚ずつ捲っていく。

ダイヤのエース。クラブのエース。ハートのエース。クローバーのエース。

「ふお、フォーカード!？」

「さ、流石ですが……私の役の方が上です」

冷や汗を掻きながら強がるホワイト。

全員が見つめる中、最後の一枚が捲られ、

「ふあ、ファイブカード!?!？」

姿を見せたジョーカーに、ブラックとホワイトの絶叫が重なり合った。

「えへへ、私の勝ちね」

ファイブ・オブ・ア・カインド。

ルールにもよるが、ロイヤルストレートフラッシュすら上回る幻の役。

全取っ替えてそれが入る確率など、計算したくもない。

「気に病む事はない。トランプで菜月に勝てる人間など、この世に居ないだろうからな」

「……身をもって知りました」

ガックリ肩を落とすホワイトは、参りましたと菜月に頭を下げるのだった。

着陸した飛行機を降りた四人。

車で敷地内を移動し、中央のビルへと向かった。

「ここは？」

「本部の中枢施設だよ。さて、手続きをするから少し待っていてくれ」

冬麻は一人受付へと向かい、何やら話をする。

受付嬢が内線で何処かと連絡を取った後、小さく頷き戻ってきた。

「丁度良いタイミングだった。早速行くか」

「えへへ、さーちゃんとも会うのは久しぶりだね」

「最上階がボスの部屋だ。案内するから着いてきなさい」

四人はエレベーターで最上階まで移動する。

そして、廊下の一番奥にあるドアの前に立った。

「ボス、俺です。入ります。返事はいりません」

軽くノックをすると、返事も聞かずにドアを開く。

ドアの向こうには、広い執務室があった。

その部屋の主は、椅子に座って来客を待ちかまえていた。

「まったく、あなたは礼儀をしらんね。女の部屋に入る時は少し遠慮したらどうだい？」

冬麻に悪態をつくのは、一人の女性だった。

美しい黒髪、透き通る様な白い肌、神秘的な紫の瞳。

寝間着の様な浴衣を雑に着崩し、気怠そうに煙管を加えている。

「そりゃ失礼。「女」の部屋に入る時は気を付けますわ」

「はあ、そんなんだから娘さんに嫌われるのさね」

「うう、そうなんですよ……最近メールの文章が短くなってきて…

…」

「菜月も久しいね。直接会うのは何ヶ月ぶりかな」

「うん、さーちゃんもお久です」

「元氣そうで結構。それで、その二人が……例の子達かね？」

女性は値踏みするような視線を、ブラックとホワイトに向ける。

言いしれぬ威圧感を感じながら、二人は姿勢を正す。

「初めまして、黒田雅也と申します。ブラックと言うコードネームで悪事を働いていました」

「同じく、白井京子です。コードネームはホワイトでした」

「へえ、これはまた……」

興味深そうに二人を見つめる女性。

「名乗らせっぱなしか、婆さん？」

「お黙り、青二才。コホン、あたしが国際正義の味方機構の頭、西園寺要さね」

ニヤリと笑って、要は名乗る。

「まあ、大抵はボスって呼ばれるけどね。あんたらも好きに呼びな」
「それにしても、客が来るって分かってその格好は酷いな」

「徹夜後の仮眠中だったから大目にみな。それとも、この艶姿に欲情しちまったかい？」

「黙れババア。俺は菜月一筋だ」

「もう、パパったら」

ノロケモードに入り掛けた二人を、要が煙管を叩いて押し戻す。

「つたく、寝起きに胸やけさせるつもりかい」

要はさつと浴衣を直すと、真剣な顔で一同を向く。

「……こっからは仕事モードで行くよ。では冬麻、まず報告から聞こうかね」

「オーケーボス。まず」

先程までの空気は何処へやら。

引き締まった雰囲気の中、冬麻は事件のあらましを要に報告する。

「以上が顛末です」

「なるほどねえ、いきなり日本に行くなんて言い出すから、何事かと思っただけど」

「一応悪の組織は潰したので、活動権限内ですよね？」

「たかがD潰すのに、『闘神』と『戦女神』が出張ったから、あちこち大変さね」

「そうなの〜？」

ハルを巡る物語後日談へ正義の味方（後書き）

凄い中途半端な所で切ってしまいすいません。
少し長くなったので、前後半で分けました。

色々話がぶっ飛んでいます、詳しくは次回に。

正義の味方のボスは、日本人の女性です。
年齢国籍に関係なく、国連加盟国の人間であればなれます。
勿論、それ相応の実力は必要ですが。

突然勧誘を受けた、黒田と白井の運命は如何に。
ハルを巡る物語、本当の意味で、次の話で完結です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハルを巡る物語後日談へそして新たな物語が (前書き)

正義の味方への、突然の勧誘。

黒田と白井の答えとは。

ハルを巡る物語、ようやく完結です。

ハルを巡る物語後日談へそして新たな物語が

「どうだい、落ち着いたか？」

「え、ええ…… すいません、取り乱してしまい」

「あんた達が気にすることじゃないさ。そのアホが順序踏み違えただけさね」

じーつと冬麻に非難の視線を送る要。

「こういう事は、ズバツと言った方が良いだろ？ 分かりやすいし」

「ね」

ちっとも反省していない二人に、要は小さくため息をつくど、

「ま、遠回しなのはあたしも嫌いだしね。それで、どうするんだい？」

ブラックとホワイトに尋ねる。

「うちは慢性的な人員不足でね、腕の立つ奴なら大歓迎さね」

「し、しかし自分達は……」

「過去の経歴は一切問わないよ。今正義の味方として働く意志があれば充分」

「実際、犯罪歴や元悪の組織メンバーも、結構居るんだよ」

「大事なのはこれからだよ。過去は忘れちゃ駄目だけど、囚われるのはもつと駄目」

要達に言われ、ブラック達は戸惑う。

この様な事態は、まるつきり想定していなかった。

「無論断ってくれても構わない。決定権は君達にある」

「ただ結論は今ここで出して貰うよ。一応、あんたらは仮釈放中だしね」

要はすーつと煙管を吸い、煙を吐き出す。

「あの、ブラックはともかく、私には正義の味方に相応しい力なんて……」

「筋肉馬鹿だけの組織じゃやってられないからね。情報処理能力や隠密行動に優れたあんたみたいな人材は、結構貴重なのさね」

「……………」
「あんたは言うまでもないね。黒田雅也、十五の時から殺し屋として裏社会で生き、三十の時結婚を機に足を洗う。娘の誕生と妻との死別で悪の組織に所属。悪くない人材さ」

要の元には、二人の膨大な資料が届けられていた。

「そこまで知っていて、なお誘うのですか？」

「言つたろ、経歴は問わないと。正直な話、どんな大悪人でも構わないんだよ。毒を制するのに、薬だけじゃ弱い……………あえて毒を使う事も必要さね」

「それが、正義の味方……………」

「正義つてのは便利な言葉さ。どんな人間にだって、自分なりの正義がある。ただ、あたし達正義の味方の正義は、表社会を生きる人達が裏社会によって侵されるのを防ぐ事。それを果たす為にどんな手段でも使うのが、あたし達だよ」

要の言葉には、確固たる信念が込められていた。

強い意志を感じさせる、紫の瞳に射抜かれ、ブラックは言葉を失う。

「つと、長話が過ぎたね。あまり時間も仕方ないし、選んで貰おうかね」

静かに目を閉じ、思考を巡らせるブラック。

その手に軽く触れ、ホワイトは優しく告げる。

「どの様な道を選んでも、私はお側におります」

「……………ありがとう」

心を決め、ブラックは目を開いて要を見据える。

「決まっただみただね」

「はい、黒田雅也、この時より正義の味方の為、微力を尽くさせて頂きます」

恭しく頭を下げる黒田に、

「白井京子、同じく正義の味方のため尽力致します」
隣に建つ白井も続いた。

その様子をじっと見つめる要は、やがて顔を笑みの形に崩す。

「結構結構、うくん、優秀な人材が二人も入るとは嬉しいね」

「ではボス」

「分かってるさね。では……『出来損ないの魔法使い』西園寺要の名において、両名を正義の味方として迎え入れる事を認める」

要は凜とした声で宣言し、黒田と白井は正義の味方の一員と認められた。

「んじゃ、後はあんたらに任せるよ」

「へいへい、分かっています」

仕事モードが終わり、再びだらけた空気の中、要と冬麻は会話を交わす。

「はあくようやく仕事モード終わったね」

「あなたは何時も黙るよね」

「だって、真面目な話って詰まらないんだもん」

「うんうん、良いんだよ菜月。俺も怖い声を出す君なんて見たくないんだから」

「パパ」

「菜月……」

「……あんた達も覚悟しときなよ。当分この二人について仕事するんだし」

ウンザリしたように要は黒田達に忠告する。

「そ、そうなのですか？」

「流石にいきなり単独で動かせないしね、名目上の監視役って訳さ」

「まあ、当然の処遇かと」

二人の世界に入った冬麻達を無視して、話を続ける。

「そっぴや二人は恋仲なのかい？」

「へっ、ち、違います！ 私なんかじゃ釣り合いませんし……」

ボン、と顔を赤くして白井が慌てる。

「……ボス、あまり彼女をからかわないで下さい。真面目な子ですので」

「おやおや、朴念仁がよく言うね」

二人の関係を瞬時に見抜き、要はニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべる。

「あたしの目には、二人はお似合いに見えるけどね」

「とんでもない。私は彼の……隣には立てません。影から支えるだけです」

「……ちよつとこつちに来な」

俯く白井を、自分の元呼び寄せる。

不審がりながら近寄る白井。

「……その傷だね、あんたを縛ってるのは。随分古いものみたいだけど」

「子供の頃、両親から虐待を受けて……酸を浴びました」

「酷いコトするね。顔は女の命だったのに」

要は白井の顔を優しく撫でる。

この傷で、どれだけ苦しんだかは聞かずとも分かる。

「……ふむ」

「あの〜」

「いつもはこんな事しないけど、ま、加入記念って事で」

要はすーっと煙管を吸うと、白井の顔目掛けて煙を吐き出した。

「げほ、げほ、一体何を……」

「ちよつとしたサービスさね。お代は結構だよ」

「何のこと……えっ!？」

要に向けられた手鏡を見て、白井は思わず固まった。

鏡に映る自分の顔。

そこには、忌むべき傷痕は一片も残っていなかった。

「そんな……どうやって」

「ま、出来損ないとは言え、伊達に魔法使い名乗ってないって事さ

ね

「ホワイト！」

その様子を見ていた黒田が、慌てて駆け寄る。

「ブラック……私……」

「……うん。ボス、感謝致します」

「別に構わないよ。それより、あんたらいい加減コードネームやめたらどうだい」

頭を下げる黒田に、要は呆れ口調で言う。

「もう組織は無いんだし、そもそもここは正義の味方だよ」

「……そう、ですね」

黒田は微笑んで頷き、白井に正面から向き直る。

「これからも頼む、白井」

「……はい、黒田」

「かゝ、せめて下の名で呼ぶくらいの甲斐性みせたらどうだい」
要は頭を掻きながら言い放つ。

「ま、それは追々の楽しみかね。にしても……」

横で見つめ合う二人と、二人の世界に入っている二人。

「……本気で胸やけしそうだね、こりゃ」

小さく呟きながら、口直しとばかりに煙管を思い切り吸うのだった。

「それじゃあ、今度こそあんた達に任せるから……とっとと出ていきな！」

「何か不機嫌だな」

「さーちゃん一人きりだったから、寂しかったのよ」

「喝~~~~ツ~!!」

要の一喝に、部屋の空気が震え、ガラスにひびが入る。

「冬麻！ あんた三ヶ月減給だよ！」

「……いいさ、愛する菜月のためなら」

「パパ」

「無ツツツツ!!!」

要から発せられる鬨気に、黒田と白井は思わず膝を着いてしまう。が、張本人達には全く効果が無いようだ。

「なあ、婆さん。あんまり怒るとシワが増えるぞ」

「駄目だよパパ、さーちゃん本気で気にしてるんだから」

「……………どうやら一度、その身体に教え込まなきや駄目みたいだね」

殺気の籠もった視線を冬麻に向ける。

まさに一触即発。その時だった。

「と、冬麻様。ボスはお忙しい様なので、ここは退席した方が」

勇敢…………無謀にも、黒田が場を取り持つ。

ヒヤヒヤと状況を見守る白井。

「…………やれやれ、新人に言われちゃしゃーないね」

「ここは彼に免じるとしよう」

二人は右拳をぶつけ合い、ひとまず休戦することにした。

「凄いい〜くーちゃん。二人の喧嘩を止めるなんて、出来る人殆ど

居ないのに」

「そ、そうなんですか？」

「うん。前喧嘩した時は、本部の人総出で何とか止めたんだよ」

正義の味方の精鋭が集まる、この本部の面子が総出。

黒田は全身を冷たい汗が流れるのを感じていた。

「あ、そうそう、この二人の二つ名はどうする？」

「必要ないだろ。そもそも誰でも彼でも持つわけじゃないしね」

「え〜可哀想だよ」

「あのね、二つ名を持つ正義の味方がどんな存在か、知らんわけじゃあるまい？」

呆れたように、そして戒めるように要は言う。

「ま、今後必要になったら、その時考えればいいさね」

「む〜」

不満げに頬を膨らませる菜月。

「そつだ〜。なら勝手に付けちゃえば良いんだね」

「人の話聞いてたかい？」

「勝手に呼ぶ分には良いでしょ？」

好きにしる、と要は頭痛を堪えるように頭に手をやる。

「まずくーちゃんね。名前が黒田だから、黒っぽい奴が良いよね〜」

「黒、ブラック……おお、『ブラックブラック』とかどうだ」

「うわあ〜とつてもクールだね」

色んな意味で。

「じゃあしーちゃんは、白井だから白だね」

「白……白い……む、閃いた、『白い恋人』というのはどうだ」

「素敵〜、とつても甘い響きだね」

ええ、色々な意味で。

「ボス、決まりました」

「……なにがだい？」

「本日これより、『闘神』『戦女神』『ブラックブラック』『白い

恋人』の四名で、活動します」

「……さよか、精々頑張るといひさ」

匙を放り投げた要は、疲れた声で答える。

「よし、じゃあ行こうか『ブラックブラック』『白い恋人』！」

「「お願いします、どうか名前で……！」」

土下座して懇願する二人によって、前代未聞の二つ名は封印されるのだった。

正義の味方の戦いは、まだまだ続く。

日常を守るため、非日常の世界で。

ハルを巡る物語後日談へそして新たな物語が（後書き）

ハルを巡る物語、これにて完結です。

黒田と白井は正義の味方として、これから戦うこととなります。冬麻と菜月の下に付き、当面は見習いとしてですが。

ハルを酷い目にあわせた二人を、何故冬麻達が許したのか。許した訳ではなく、罪の償い方として服役するよりも、正義の味方として一つでも多くの悪を潰すことを選びました。結果的に、それがハルや秋乃がいる日常を守る事に繋がりますので、いずれ自分達が引退した時に、一人でも有能な正義の味方が居て欲しい、と言つ思いもあります。

黒田の娘は、日本支部の監視が付き、身の安全を確保しています。勿論、人質としての意味もありますが。

西園寺要については、菜月と並んで常識外の人物としか紹介出来ません。

魔法使いの名にふさわしく、馬鹿馬鹿しい程強いです。ババアと呼ばれています。実年齢はもう還暦に近いです。魔法で若さを保っている設定です。

色々ありましたが、これにて非日常の干渉は終了。ようやく、ハル達の日常が戻ってきました。ここから物語は、ゆっくりのんびりペースへ。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

ハピネス活動再開（前書き）

ハルの事件も一段落。
そして待望の時がやってきました。

ハピネス活動再開

ハピネス事務所崩壊事件から、数週間。

ハル拉致事件からも、数週間の時が経った。

それは、ある事を意味する。

即ち、ハピネスが再始動の時を迎えると言うことだ。

新事務所には、ハピネスの全メンバーが集結していた。

招集を掛けた千景は、それを満足げに見回すと、皆の前に立つ。

「みんな、よく集まってくれました。今日呼んだのは、言うまでも無いでしょう」

いつになく上機嫌な千景に、ハル達も頷いてみせる。

「ご覧の通り、ついに私達の新たな事務所が完成しました」

「おお！！」

「あらゆる面で、旧事務所を上回るスペックを誇ります」

「おおお！！」

「悲願だった光回線も導入済みです」

「おおおお！！」

「パソコンも最新型に切り替え。作業効率が桁違いに向上しています」

「おおおおお！！」

「更に対人迎撃システムを新たに導入。一個中隊の襲撃も恐れるに足らずです」

「おおおおお！！」

「そして極めつけ、対狙撃・砲撃の素材を使用、核の直撃だって耐えられます」

「おおおおおお！！」

「もはや私達に怖いものはありません。この日この時から、私達の伝説が始まるのです！」

「「よつしやああああ!!」「」

「……なんか色々、てか後半おかしくね？」

テンション最高潮のメンバーに、ハルの突っ込みは届かなかった。

「とまあ、少しはしやぎすぎしましたが、ようやく業務を再開できま
す」

「……自覚はあつたんですね」

「安心です。」

「でもこれだけの設備を整えたとなると、相当費用が掛かったんじ
ゃ」

「まあ、一億もあれば充分でしたよ」

「い、一億……」

宝くじでも当てなければ、一生手にすることはない額だろう。

改めて事態の重大さを思い知らされる。

「その費用も、全てドクター払い。折角なので、色々な仕掛けを付
けちゃいました」

「……蒼井」

自業自得とは言え、流石に同情を禁じ得ない。

「そう言えば、張本人は何処に？」

「研究室に籠もっていますよ。新発明で、今回の出費を挽回すると
息巻いています」

「ドクターならあ、寧ろ出費が増えそうだけどねえ」

「……笑えないよローズ」

「そこはご安心を。研究室の耐久力は、考え得る最高強度を誇りま
すから」

「一体何処を目指すつもりなんでしょうか。」

「まあ、仕掛けについては追々説明していくとして」
「誤作動とかしませんよね？」

「……………」
「黙られると、凄まじく不安なんです」
「……………即死系のトラップは、恐らく大丈夫かと」
「安心できない。」

「何一つ安心できる要素がない。」
「と言うより、トラップって何ですか？」

「急ピッチで作業を済ませたので、まだ動作確認できていない装置もありまして」

「……………例えば？」

「そうですね、まずビルの階段ですが、ここにもトラップがあります」

「どんなトラップを？」

「名付けて『つるつる坂』。一瞬で階段が収納され、滑る床に早変わりするトラップです」

「千景が自信満々に説明したその時、」

「うわあああ」

「階段の方から、男性所員の悲鳴が聞こえてきた。」

「どうした……………な、何だこりやあああ」

「す、滑るうううう」

「状況を確認しようと、事務所から飛び出た所員達が、次々悲鳴をあげていく。」

「……………千景さん？」

「どうやら、侵入者感知システムは再調整が必要のようです」

「千景は視線を逸らしながら呟いた。」

その後。

「お〜い千景、家具の配置だが……………なああああ！」

「事務所に入ってきた紫音が、突然床に開いた穴に吸い込まれてい

く。

「ななな、何だこりゃ!？」

「落とし穴です」

「んなアホな!」

「あ、千景さん。携帯鳴ってます……ぐふう!」

千景の机に置かれた携帯電話を取ろうとした奈美に、金ダライが命中。

「ドリフかよ……」

「私の机に近づく者への、無差別トラップです」

「どれだけ用心するんですか!」

「えっとお、銀行に振り込むお金はあ……」

金庫に近づいたローズを、とげ付きの玉が振り子のように襲い掛かる。

「ぬううん!」

身体を回転させて、間一髪回避するローズ。

「……これは?」

「スパイクボールです。泥棒対策ですね」

「ふ、ふふ、この緊張感。昔の感覚が戻ってくるわねえ」

「流石に不謹慎だと思いますが」

その後も誤作動を繰り返す、トラップの数々。

所員の大半が犠牲になると言う、本末転倒な事態となり、

「即刻撤去してください!!」

満場一致で、トラップは封印される事となる。

こうして、ハピネスは波乱に満ちた再出発を切るのだった。

ハピネス活動再開（後書き）

そんな訳で、ハピネス復活です。

久しぶりの日常なので、どうにも感じが掴めませんでした。
徐々に慣れていくと思いますので、ご勘弁を。

今後は変なシリアスは極力無くし、今まで通りの馬鹿話で行きたい
と思います。

日常話なので、伏線や謎も殆どありませんしね。

悪い言い方をすれば、ダラダラと続くかと思いますが、
次回以降もお付き合い頂ければ幸いです。

遊園地で、僕と握手（前書き）

日曜朝の戦隊物に嵌っている紫音。

そんなある日、ヒーローショーが開かれる事を知り……。

遊園地で、僕と握手

日曜日の朝。

仕事が始まる前の、ハピネス事務所に一人の少女が居た。

結城紫音、千景の姪にしてハピネス準メンバーの彼女が事務所にいる理由は、

「……格好いい」

テレビ鑑賞の為だった。

怪物戦隊ドロロンジャー。

日曜日の朝に放送している、特撮ヒーロー番組だ。

五人の男女が呪われた力を使い、悪の組織と戦うのが大筋の話。

時に悩み、時に苦しみながら、呪いが解ける日を願う姿は、子供だけでなく大人達にも大好評。

そして、紫音もすっかりはまっていた。

自宅のテレビは、千景がニュース番組を見るために使用不可。

なので、日曜日の朝は事務所で番組鑑賞するのが日課になっていた。

そんな平和な、ある日の事だった。

「ねえねえ紫音ちゃん、知ってる？」

「ん、何をだ？」

中学校の教室で、友人に主語を抜かれた質問を受けた。

「あのね、今週の日曜日のお昼に、デパートでドロロンジャーのショーをやるんだって」

「!!!!!!」

その時紫音に電流走る。

「ま、誠か？」

「うん、ほらチラシ」

紫音は受け取ったチラシを、限界まで凝視する。

『桜ヶ丘デパートで、僕達と握手！』

凜々しげに親指を立てる、ドロレットの姿に、紫音はすっかり心奪われてしまった。

その姿は、知らない人が見れば確実に恋する乙女のそれだ。

「紫音ちゃん、紫音ちゃん」

「……はっ！ すまん、少々考え事をしていた」

人はそれを妄想という。

「紫音ちゃんドロロンジャー好きだよな？ 行ってみたらどうかな？」

「うむ！ 貴重な情報感謝するぞ」

紫音は友人の両手を掴み、大げさに握手をする。

「帰ったら真っ先に、千景に仕事を入れないように伝えなければ」

彼女の思考は、既に日曜日のデパートへと飛んでいた。

学校が終わると、紫音は急いで事務所へと向かった。

仕事を入れないで欲しい、と千景に告げる為だ。

駆け足で階段をあがり、事務所のドアを開く。

すると、

「ねえ〜良いでしょ〜、一緒に行こうよ〜」

奈美が何かをねだる声が聞こえてきた。

「あんな、だから何処に何をしに行くのか言えって」

「日曜日にデパートの屋上でやる、ドロロンジャーのショーよ」

奈美の言葉に、紫音の心臓は跳ね上がった。

「何だよその、ドロロンジャーって？」

「「ご存じないのですか!?!」」

声は、事務所にいた全員から発せられた。

「な、何だよみんな揃って?」

「「不祥事で打ちきりになった番組の穴埋めからチャンスを掴み、大人気番組の座を駆け上がっている特撮ヒーロー新時代番組こそが、怪物戦隊ドロロンジャーです!!」」

何処の超時空シンデレラだ。

そんな突っ込みが言えないほど、ハルを除くみんなの表情は真剣だった。

「そ、そうなのか……」

「ええ。深く重厚なストーリーと、笑い有り涙有りの構成、メンバー同士の衝突とそれを乗り越えて芽生える友情、淡い恋心、更に見事なアクションシーンは、もはや一娯楽番組の枠を超えています」
力説する柚子に、事務所の面々は頷く。

「オモチャも多数発売してるしい、魚肉ソーセージも大人気。来年の初春にはあ、待望の映画化も決定したのよお」

「ゲームも発売日に完売御礼。一種の社会現象と言えるだろうな」
ローズと蒼井が補足説明をする。

「またも頷く面々を見る限り、ハル以外には周知の事実のようだ。」

「そんなドロロンジャーを知らないなんて……」

「た、頼む……そんな信じられない者を見る目を止めてくれ……」
マイノリティとは、これほど恐ろしいものなのか。

それから三十分ほど、ハルはドロロンジャー特別講義を受けた。

「……で、そのドロロンジャーのショーを見に行きたいと?」

「モチのロンよ。この機会を逃すなんてあり得ないわ」

「今週の日曜か……ちよっと待ってくれ」

ハルは手帳を開き、スケジュールを確認する。

「大丈夫だな」

「よっし！ じゃあ一緒に行こうよ」

満面の笑みを向けてくる奈美に、ハルは苦笑を浮かべつつも、満更ではない。

どうせ予定のない休日。

誰かと一緒に出かけるといのは楽しいものだ。

「分かったよ。んじゃ予定を決めるとしようか」

「OK。整理券の配布が十時からだから……」

早速当日の予定を話し始める二人に、

「コホン。なあ二人とも、私も一緒に行って良いか？」

紫音はさり気なくアプローチを掛けた。

「ん、紫音もドロロンジャー好きなのか？」

「ま、まあな」

ディーブなファンだとは言わない。

「俺は全く構わないよ。奈美は？」

「大歓迎よ」

やはり自分と同じ趣味の人が居ると嬉しいのだろう。

奈美は笑顔で紫音と握手を交わす。

その後、ハピネスのみんなも参加しようとしたのだが、

「……当然、日曜日もハピネスは通常営業ですよ？」

一人輪の外にいた千景の一言で、勤務予定だった半数が涙をのむことになった。

そして、日曜日がやってきた。

午前九時五十分。

デパートの屋上は、異様な熱気に包まれていた。

トップアーティストのコンサート並に、盛り上がる観客達。
開演十分前から、既にテンションはマックスだ。

「……なんか凄いな」

「うっ、遂に生ドロロブルーが見れるのね」

興奮を隠しきれない奈美。

「ドロロレッド……」

恋する乙女のように、うっとりとする紫音。

「ドロログリーンの体付きい、たまらないわねえ」

舌なめずりをするローズ。

「これだから素人は。玄人ならドロロイエローだろうが」

妙な拘りを見せる蒼井。

「ドロロピンクが可愛いんですよ」

はしゃぐ子供達に完全に紛れ込んでいる柚子。

ハルを除く全員が、今か今かとその時を待ち望んでいた。

午前十時。

舞台上にスモークと派手な音が響き、如何にもな怪人が姿を現した。

『がははは、今日はこのデパートで悪さをするか』

三体の怪人は、分かりやすく説明してくれる。

『そこのお前、人質になれ』

「きやあああ」

進行役のお姉さんを、これまたお約束通り捕まえる。

「みなさん、ドロロンジャーを呼んで下さい」

ハルが子供の頃遊園地で見た、ヒーローショーの流れそのものだ。

「大きな声で呼びましょう。せーのっ」

「ドロロンジャー！！！！」

ビリビリと、空気が震えるほどの大音量が屋上にこだました。

思わずハルが耳を押さえる程の声。

だが、約束事なのか、お姉さんはリテイクを指示する。

「もつと大きな声で」

「……いやいや、充分聞こえるだろ」

そんな突っ込みに答える無粋な人は居ない。

「もう一度、せ〜のっ」

「ドロンジャー!!!!!!」

騒音一歩手前の大音量だった。

大人も子供も、老若男女問わず声を張り上げる。

鳥たちが一斉に逃げるように飛び立つ程の声に応え、ついに彼らが登場する。

突然BGMが鳴り出し、舞台袖からスモークが焚かれる。

歓声の中、

『待てい。これ以上の悪事は許さないぞ!』

五つの人影がステージに躍り出た。

途端先程の声を凌駕する大歓声。

『悪を許さぬ正義の心が燃える、ドロレット!』

「きゃあああ、ドロレット〜」

紫音が壊れた。

顔を真っ赤にして、手を大きく振っている。

『悪を射抜くは冷たい眼光、ドロブルー!』

「ブル〜〜〜〜!!!! 格好いい〜〜」

奈美が大ハッスル。

『自然を愛する正義の戦士、ドログリーン!』

「素敵〜〜、抱いてええええ!!!!」

駄目だこの人、何とかしないと。

つまみ出されないかと、ハルをヒヤヒヤさせるローズ。

『悪を照らし正義を示す、ドロイエロー!』

「発明家魂を見せてやれ〜!!!」

カレーが好きという設定は無いらしい。

発明担当のイエローに、蒼井がかつて無いテンションで声援を送

る。

『慈愛の心で仲間を癒す、ドロロピンク!』

「……グッドです」

うっとり何度も頷く柚子。

紅一点で治療担当のピンクにお熱のようだ。

『呪われし力で悪を打ち砕く、怪物戦隊ドロロンジャー、ここに見参!』

「うおおおおお!!!!」

見得を切りポーズを取るドロロンジャーに、今日一番の歓声が向けられた。

後はお約束通りの展開だった。

殺陣を披露し、観客から別の人質にお越し頂き、ヒーローがピンチ。

謎の六人目、ドロロブラックが登場し、アドバイスを送る。

そしてみんなの声を力に変えて、悪を倒す。

三十分ほどのショーだったが、恐ろしいほどの一体感と満足感のあるものだった。

ショーの後は、握手&サイン会。

ハピネスの面々は、それぞれお目当てのヒーローからサインをゲットしていた。

「はあ〜満足満足。やっぱりブルーは格好いいな〜」

「うむ、これは家宝にするぞ」

「グリーンの手、遅しかったわあ」

「ふふふ、同じ発明家として、イエローのサインは吾輩の活力になる」

「ピンク、可愛かったです」

満足したハピネス一行が帰路につこうとする。

「……悪いけど、先に帰っててくれ」

「ん、どうかしたの？」

「ちょっと、買い物があつてな」

ハルは奈美達から離れ、一人デパートのある店へと直行する。

やってきたのは、DVD販売店。

ハルはあるDVDを手に取ると、迷わず購入した。

「……ドロロンジャー。侮れない」

デパートから出たハルの手には、ドロロブラックのサインと、ド

ロロンジャーDVDBOXがしっかりと握られていたのだった。

遊園地で、僕と握手（後書き）

タイトルは……勿論アレです。

作者も子供の頃、一度だけ連れて行って貰ったことがあります。いや〜アレは結構楽しいんですね。

紫音のキャラが変わったようにみえますが、そんなことはありません。

好きな物に関しては、思わず人が変わったようになるのは、普通の人なら誰でもあることだと思います。

紫音も、徐々に普通の女の子に変わっていますね。

興味ない人が、友人の薦めでその人以上に嵌ってしまう事って、ありますよね。

今回はハルが見事に嵌ってしまいました。

大人になってこういう物に嵌ると、結構洒落になりませんが……。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

将来に悩むのも若者の特権（前書き）

万能を地でいく御堂秋乃。

そんな彼女だが、最近悩みがあるらしく……。

将来に悩むのも若者の特権

万能の天才というのは存在する。

御堂秋乃という少女は、まさにそう形容するに相応しい存在だろう。

頭脳も、肉体も、常人のスペックを遙かに凌駕している。

どんな事でも、それなりどころか最上級の結果を出せてしまう。

だからこそ、彼女は悩む。

果たして自分に本当に与えられた適性とは何なのか、と。

「え、秋乃にあってる事？」

教室で急に尋ねられた奈美は、思わず問い返してしまふ。

「うん、私が本当に、一番得意な事って何なのかなって思ったの」

「ん、秋乃は何でも出来るから」

奈美は本心から思う。

秋乃と出会って一年足らずだが、今まで彼女が出来なかった事は無かった。

勉強も運動も、料理や裁縫、工作すらも完璧にこなす。

初めての事ですら、直ぐさま要領を掴んでしまふ。

「全部が得意な事じゃない？」

「……うん」

褒めたつもりだが、秋乃の表情は晴れない。

「でも急にどうしたのよ」

「先の事だけど、いずれ私達は卒業して、それぞれの進路に行くでしょう？」

「うん」

「私はどの道に進むのが良いのか……考えてたら少し悩んじゃって」
贅沢な悩みだ。

「だから第三者の視点から、私のことを分析して貰おうと思ったんだけど」

「そうね……………あっ！」

ピンっと、奈美は閃いた。

「ねえ秋乃。今日の午後暇かな？」

「予定は無いけど……………」

「よければ、ハピネスに来ない？」

「どうして？」

「秋乃の悩みを解決できるかも知れないわ」

自信満々に告げる奈美。

「一体何があるの？」

「えへへ、それは行ってみてのお楽しみで」

奈美は秋乃の問いかけには答えず、意味深な笑みを浮かべるだけだった。

そして放課後。

奈美に連れられて、秋乃はハピネス事務所を訪れた。

事務所の中には、ハルを始めとするいつもの面々が何やら賑やかに話をしている。

「こんにちわ」

「お、来たか……………って秋乃？」

奈美の後ろから事務所に入ってきた秋乃に、ハルは思わず驚きの声を出す。

同じように、他の面々の何事かと視線を秋乃に向ける。

「お邪魔します。実は」

秋乃は簡単に事情を説明する。

「なるほどねえ。優秀すぎる故の悩みかあ。」

「我が妹ながら未恐ろしい奴だ」

「でも、確かに今回のにはうってつけかも」

「それで、一体何があるんですか？」

「ドクターの新発明のお披露目です」

千景が席を立ち、みんなの元へと近寄ってきた。

「間もなく準備も終わると思いますが、秋乃さんも参加しますか？」

「……その発明とは？」

「なんでも、人の潜在的な素質を見つけ、職業適性を判別する機械らしいぞ」

紫音が答える。

「それはまた……随分ピンポイントな機械ですね」

「需要はあるからな。それで人生相談をして、金稼ぎするらしい」

少しでも建て替え費用を補填するため、蒼井も必死だ。

「ま、占いみたいな感覚で、話半分に試す分には良いかも知れないぞ」

「……そうですね。折角ですし、宜しければ私も同席させて頂きたいです」

「私は構いませんよ。サンプルが増える分には、ドクターも喜ぶでしょうし」

千景が認めれば反対する者は居ない。

秋乃は礼を言つと、蒼井の発明品登場の時を待つ。

五分後。

「はっはっは、待たせたな」

白衣姿の蒼井が、実験室から姿を現した。

手には帽子が一つ。

茶色いカウボーイハットの様な形状をしている。

「ドクター、それが？」

「うむ。これを被れば、その人間の適性をずばり言い当ててくれるのだ」

『……よろしく』

「喋った!!」

蒼井の手にある帽子が、渋い男性の声を発した事に、一同は驚く。

「人工知能を搭載しているから、喋るのは当然だ」

「……蒼井って、本当にまともな発明出来るんだ」

奈美の呟きが、ハル達全員の言葉を代弁した。

てつきり怒るかと思ったのだが、

「ふん、所詮愚民には天才を理解する事は出来んだろう」

いつになく上機嫌の蒼井は、僅かに笑みを浮かべながら軽くあしらう。

どうやら本格的に自信作の様だ。

「それでドクター、直ぐに始めますか？」

「ああ、何時でも行けるぞ」

「結構です。業務時間中ですので、手短に済ませるとしましょう」

「誰からやります？」

一同はそれぞれ顔を見合わせる。

どの様な判定をされるのかすら分からない現状、一番手に名乗り出るのは躊躇われた。

暫し無言の時間が過ぎ、

「ではドクター。まず貴方が手本を見せてくれますか？」

千景が蒼井に指示を出した。

「ん、構わんぞ」

蒼井は頷くと、帽子をそっと頭に乘せた。

『……ふむふむ……よし分かったぞ』

ゴクリ、と一同が見守る中、帽子が言葉を紡ぐ。

『汝は頭脳に優れているようだ。特に独創的な発想力と他を寄せ付けぬ技術力は、科学者や発明家として大成する素質充分だろう』

「ふふん、当然だ」

どや顔で余裕をかます蒼井。

良いことしか言わない帽子に、ハル達は疑いの眼差しを向けるが、だが、如何せん自己顕示欲が強すぎるな。抑えが効かず、暴走す

る恐れが高い。人類のためにも、首に鎖を繋いで貰う必要があると思っぞ」

「これは本物だ！」

ズバリ言い放った帽子に、思わず声を揃えて賞賛する。

「……どうやら失敗作のようだ。すまんが再調整を……」

「大成功だよ！ 流石は天才科学者だ！」

「そ、そうか？ そうだ……そうだろう。吾輩が失敗するなどありえないからな」

はっはっは、と高笑いをする蒼井。

ハル達はそれに見向きもせず、帽子に熱い視線を送る。

「どうやら、信頼できる発明のようですね」

「精度も高いしい」

「爆発の危険も無さそうだ」

「お兄ちゃん、この人……」

「いつものことだ、気にしたら負けだぞ」

可哀想なものを見るような視線の秋乃に、ハルはそっと呟いた。

「じゃあ次私がやってみるわね」

奈美は蒼井から帽子を受け取ると、さっと被る。

「……ふむ、分かったぞ」

大分早く結果が出た。

「汝は身体能力に優れている。特に肉体強度に関しては、人間のそれを遙かに凌駕しているぞ。それを活かせる職業なら、大成できるだろう」

「えへへ、そうかな」

「だが、思考力に関しては難ありだ。視野が狭く猪突猛進的な思考に陥りやすくなる。視野の広い理知的なパートナーを見つけることが大切だろう」

「ん、何か納得行かないわね」

不満そうな奈美だが、見事に本質を捉えているとハル達は感心す

る。

もはや疑う余地はない。

この発明は、（滅多にない）本物だ。

「ならば、私も試させて貰おうか」

紫音が帽子を被る。

「……………よし、分かったぞ」

帽子は変わらず渋い良い声で告げた。

『汝は不思議な力を持っているようだ。生憎正確な分析は出来ぬが、人とは違う才を持つ者として、それを伸ばしていくのが良いだろう』

「ほう、それが分かるか」

『だが、身体と精神はまだ未熟、成長過程だ。特に精神的な成熟が遅れているように見受ける。視野を広く持ち、多くのことを経験して、しっかりと軸を育てるが良いだろう』

「……………助言に感謝する」

まだ子供と言うこともあり、帽子の診断は具体的なものでは無かった。

それでも紫音にとって、十分な助言だったのだろう。
何度も納得したように頷いていた。

そして、

「……………あの、次は私がやっても構いませんか？」

秋乃が手を挙げて名乗り出た。

全員が頷くのを確認して、紫音から帽子を渡して貰う。
少し躊躇った後、静かに帽子を被った。

「……………」

「……………随分長いわね」

「迷ってるのかな」

無言を続ける帽子に、ハル達はざわめき立つ。

それでも秋乃は目を閉じたまま、帽子の言葉をただ待つ。

「……………ふむ、分かったぞ。待たせてすまん」

「いえ、お願いします」

「汝は、心技体全てに優れておる。あらゆる分野を極める事が出来るだろう。素質と言う面に置いては、私から言うことは何も無い」
羨ましいばかりの褒め言葉だが、秋乃の表情は晴れない。

その先の言葉を聞きたかったのだから。

秋乃のそんな心を察したのか、

「ふむ、どうやら己の進むべき道について迷っている様だな」

帽子が気を利かせてきた。

「ならば蛇足ではあるが……あえて最も優れた素質を選ぶならば、それは洞察力だろうな」

「洞察力？」

「物事の本質を見抜き、理解する力だ。故に、何かを調べる分野が適しているとも言える」

「……………」

「だが先も言ったとおり、どの分野でも大成出来るだろう。私の言葉は参考程度にし、焦らずじっくりと自分と向かうことだな。それが、己のためにもなる」

「……………ありがとう」

秋乃は満足げに微笑み、静かに礼を言った。

続いてハルが帽子を被る。

「……………ん、これは……………困ったな……………」

「おい、それは思っても言っちゃ駄目な事だろうが」

「ああ、分かっているのだが……………しかしこれだと……………」

何度も唸り声をあげる帽子に、途端不安になっていく。

「……………ま、これで良いか。よし、分かったぞ」

「をい、これで良いかって何だよ！」

「まあまあ、さて汝だが、どうにも妙な力があるようだ」

あっさりモノマネを見抜く帽子に、ハルは驚きの表情を浮かべる。

『だが、それ以外はいずれも平凡、よく言えば万能だが、悪く言えば器用貧乏と言える』

「ぐっ」

否定できない。

『どの分野でもそこそこ働けるだろうが、それ以上を望むことも難しいだろうな』

「な、なら一番優れてる素質とか、それは何だ？」

『……………突っ込み？』

「余計なお世話だあああ！！」

素質が開花した瞬間だった。

その後、千景、ローズ、柚子等も試したのだが、

『……………悪いがとても人前では言えぬ』

『己を知り尽くしている汝に、私から言うことはない』

『汝は既に己の才を発揮している。その道を進が良いだろう』

若い衆とはうってかわり、簡潔な一言で終わってしまった。

まあ、今更適性職業とか言われても困るだろうが。

「まあ、こんな所でしょうかね」

「なかなか面白い発明だったけどお、実用化は出来そうなお？」

「コスト面が問題だな。人工知能を簡略化すれば、大量生産も可能だろう」

どうやら今回のテストで、ある程度の手応えを感じたようだ。

蒼井は満足げに実験室へと入っていく。

「さて、今回のテストはこれにて終了です。お疲れさまでした」

千景の言葉で、ハル達はそれぞれの業務へと戻っていった。

一人事務所を後にし、寮へ帰路に就く秋乃。

行きとはうってかわり、迷いのない表情を浮かべている。

今回の件は、彼女にとっても、大きな意味を持つものとなった。

「全く、何を焦ってたんだろう」

両親の仕事を知り、少し気持ちが焦っていたようだ。

自分は普通の学生で良いのだろうか。

「先の事はその時。今は今を生きるだけだもんね」

沈み掛けている太陽に、秋乃はそつと微笑むのだった。

将来に悩むのも若者の特権（後書き）

将来について悩めるのは、若者の特権だと思います。
大人になれば、それが老後の悩みに変わりますから……。

万能故に将来の選択肢がありすぎて困る。

羨ましい限りですが、想像すると確かに悩むかもしれません。
まあ、ひとまず秋乃は自分なりの結論を出したようです。

一つご連絡を。

これから暫く、更新ペースが不規則になります。

今週から十二月中旬に掛けて、役所の監査やらが入るため、少々仕事で手一杯になってしまったためです。

大体五日に一回を目安に投稿して参ります。

（少数でしょうが）楽しみにしている方には申し訳ありませんが、
ご了承下さい。

それでは次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

文化祭へ行こう(1) (前書き)

奈美が通う白百合女子高校で、文化祭が開かれる。
ハルを誘いたい奈美だが、ハルには少し困った事情があつて……。

文化祭へ行こう(1)

ある日の夜。

ハルと奈美は、いつものように夕食を共にしていた。

たわいない会話をしながら食事を進めていると、

「あ、そうだ。ハルは今週の日曜日、何か用事ある？」

不意に奈美が切り出した。

「ん〜別に無かったと思うけど」

「じゃあさ、うちの文化祭に来ない？」

「……………無理だ」

「どうしてよ。ちゃんと招待券あげるから」

「俺はお前の所の理事長に、面が割れてるんだよ。次は見逃さない
って釘も刺されてるし」

コレクトとの対決時に、ハルの女装はあっさり見抜かれていた。

今回は大目に見るが、次は遠慮して欲しいとも。

「下手打てば騒ぎになるだろうし、パスさせてもらおうよ」

「むう〜。折角ハルに良いところ見せられると思ったのに」

頬を膨らませて残念がる奈美。

「良いところって、何か出し物でもやるのか？」

「実はね、クラスで劇をやるんだけど、私主演に選ばれたのよ！」

「へ〜そりゃ凄い。演目は何だ？」

「ロミオとジュリエットよ！」

言わずと知れた、シェイクスピアの名作だった。

四大悲劇よりも、日本では知名度が高い作品かも知れない。

「主演って言う……………ロミオか」

「凄い、何で分かったの？」

「……………消去法だよ」

奈美がジュリエットを演じる姿が、欠片も想像出来なかったから。

「でも文化祭で悲劇って言うのは、あまり共感できないチョイスだな」

「え？ ロミオとジュリエットって悲劇なの？」

シエイクスピアもビックリだ。

あれだけ人騒がせな悲劇もそうそう無いというのに。

「だってお前、もう稽古とかしてるだろ。台本読んだよな？」

「読んだけど、悲劇っていうか、寧ろ喜劇とか活劇っぽいけど」

驚くハル。

シエイクスピアはもっと驚いただろう。

「あれを喜劇や活劇って………ひよつとして、台本改編したのか」

「よく分からないけど、悲しい話なら私は呼ばれないと思うわよ」

「ああ、納得だ」

全力で頷いた。

「興味あるけど、やっぱり俺は行けないな。秋乃にビデオでも撮ってもらおうか」

「あ、それ無理だと思うわ。だって、秋乃も劇に出るから」

「この流れから行くと、ひよつとして……」

「うん、ジュリエット役で」

速攻でプランが潰され、ハルは頭を抱える。

「ん〜どうしたものか……」

「あのね、多分ハルが来ても平気だと思うわよ」

「何を根拠に」

「だって、ハルの顔を知ってるのは、理事長先生だけなんでしょ？」

こくりと頷く。

「理事長先生、あまり外に出ないから、注意して動けば会うことなんて滅多に無いわ」

「……うん、地味にフラグ立ったな」

『滅多に会わない』は、『何故かその日に限って』と言う名のフラグだ。

「駄目……かな？」

上目遣いでハルを見つめる奈美。

「劇で主役やる何て初めてだし、ハルに見て欲しいんだけど……」

「ぐっ……」

強力な精神攻撃に、ハルの心は揺れ動く。

「無理ならしょうがないけど……出来れば来て欲しいな」

「……………」

心の中の天秤が激しく動く。

天使と悪魔が互いにせめぎ合い、理事長との約束と奈美を秤に掛ける。

「おいおい、奈美がここまで言ってるんだぜ。行くのが男ってモンだろ？」

「駄目よハル。理事長先生と約束したじゃない」

「あん、ならお前は女の子を悲しませても良いって言うのかよ？」

「そ、そんな訳じゃ無いけど……」

「非常時で休日なら大目に見てくれるんだろ。文化祭の日は学校休みだし、通常時でも無いぜ」

「それは曲解だわ」

「あの婆さんなら、ばれても謝れば許して貰えるって」

「いけないわ。そんな邪な気持ちじゃ。理事長先生の気持ちを踏みにじる事になるわよ」

「断れば奈美の気持ちを踏みにじる事になるんだぜ？」

「だけど……」

「一生で一度になるかも知れない主役。見てやりたいじゃねえか」

「それはそうだけど……」

「……悲劇じゃないロミオとジュリエット、見たくないか？」

「うぐう……確かに見たいかも」

「なら決まりだ。ほらハルよ、行くなって言っちゃえって」

「……………」

『ほら、お前からも言えよ』

『コホン、ハルよ。神は見て見ぬふりをするでしょう。己の望むまま行動しなさい』

ゲームセット。

「天使弱いな〜」

「えっ？」

「いや、こつちの話。まあ、何とかしてみるよ」

「それじゃあ」

「ああ、文化祭に行くぜ」

心の中の天使と悪魔に後押しを受け、ハルは力強く言い切った。

一瞬驚いた奈美だが、直ぐさま満面の笑みに変わる。

「やった〜！ ありがとうハル」

「お礼を言われるのも変だけだな」

「すっごく嬉しいわ。最高の劇を見せるから」

「期待してるよ」

ハルは優しく微笑むが、思考は既に別の事を巡らせていた。

（完璧な女装が必要だ……となれば、やっぱり頼むしか無いよな）
生半可な変装では駄目だ。

ハピネスという強力な仲間の力を借りなければ。

（今回は迷いは無い。全力で………女装してやる）

吹っ切れたハルは、男を捨てる覚悟を男らしく決めるのだった。

そして、文化祭の当日を迎える。

文化祭へ行こう(1) (後書き)

更新ペースは、落ち着くまでこの位になりそうです。

ロミオとジュリエットは、学校で習った程度の知識しか無いので、本格指向の方はあまり期待しないで下さい………というか見逃して下さい。

ハルの中の天使と悪魔が初登場。

まあ、パワーバランスは圧倒的に悪魔有利でしたが。

奈美に関しては甘い、と言うのはここにも影響してました。

奈美と秋乃が演じるロミオとジュリエット。

果たしてどの様な舞台になるのでしょうか。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

文化祭へ行こう(2) (前書き)

いよいよ白百合女子高校の文化祭が始まった。
羞恥心を捨て、完璧な女装をしたハルだったが……。

文化祭へ行こう(2)

白百合女子高校文化祭当日。

花火が上がリ、お祭り気分の学校にハルはやってきた。

長い黒髪のウィッグと、千景&ローズ監修の徹底的な化粧。

男と気づく人は多分居ないだろう、とばかりに完璧な女装をして。

「ふむ、やはり休日に来るのとは雰囲気が違うな」

「文化祭だもんね。やっぱりみんな浮かれてる感じがします」

「……二人とも、くれぐれも頼むぞ」

ハルは同行している紫音と柚子に念を押す。

「承知している。ハルは私の姉という設定だな」

「そして、私の姉でもあるんですよ……」

「ごめんね、姉でごめんね。」

でもね、柚子が姉って言うのは無理があるんだよ。

何というか、物理的に。

「俺は秋乃の従姉妹で、妹たちと文化祭に遊びに来た。そう言う体
で」

「問題ないが、万が一理事長に遭遇したらどうする？」

「私達も顔を知られてますから、恐らく確実にバレると思いますよ
？」

「……その時は、俺は大人しく従う。劇は柚子がビデオに撮って
くれ」

ハルはハンディカムのカメラを柚子に渡す。

本来なら、最初からこの二人に任せるのが良策なのだが、奈美は
ハルに見に来て欲しいと言っていた。それは出来ることなら叶えて
あげたい。

そんなハルの決意を感じたのか、

「ふむ、どうやらハルは奈美に対して大分甘いようだな」

「良いんじゃないですか。好きな子に甘くてモ」

紫音と柚子は何やら納得した様に頷く。

「コホン、とにかく、劇まで二時間くらいある。怪しまれないよう、出店を回ろう」

「そうだな。私も文化祭というのを堪能したい」

「研究発表にも興味がありますしね」

ハル達三人は、入り口で招待券を渡して学校の中へと入っていった。

目立たなければ、どうと言うことはない。

完璧に女装したハルは、目立たない自信があった。

だが、それは直ぐさま砕かれる事になる。

「ふむ、見られているな」

「見られていますね」

「……何故？」

出店を巡る間、ハルには女子生徒からの視線が集中していた。

それは疑惑や悪意のある物では無く、むしろ……。

「ばれてるのか？」

「いや、違うと思う。そう言った嫌疑の視線では無いな」

「じゃあ何でだ。化粧も完璧にして貰ったのに」

「あの〜多分それが原因だと思います」

柚子の言葉に、ハルはどうして、と尋ねる。

「ハルさんは元々整った顔立ちですし、中性的な魅力があります。それを化粧で更に磨いてしまったので、恐らく……見とれているのかと」

「……はあ？ だって、みんな女の子だぞ？」

「女性は綺麗な物や美しい物に惹かれますからね。女子高では珍し

く無いんですけど」

完璧な女装が裏目に出た形だ。

女子生徒や来客から羨望の視線が集まり、ハルは凄まじく居心地が悪い。

「それだけハルが女性として認識されていると言っ事だ。良い傾向だろう」

「……そりゃそうだけど……何というか……複雑だ」
劇までの時間、ハルの気は休まる事が無かった。

約二時間。

幸いというか、理事長に遭遇する事は無かった。

だが、

『あの、お姉さまと呼んでも良いですか？』

『良ければ、私の妹に……』

次々と繰り出される精神攻撃に、ハルはすっかり参ってしまった。正直、知りたくない世界を知ってしまった気分だ。

「……早く……劇に行こう……」

心配そうな顔をする二人と共に、劇が演じられる体育館へと向かう。

そこには、

『新訳 ロミオとジュリエット』

とシエキクスピアが卒倒しそうな看板が大きく掲げられていた。

『新訳……奈美が言うには喜劇とか活劇物らしいけど』

「学祭用にアレンジしたと思いますけど、台本担当は大変だったでしょうね」

「寡聞にして知らないが、ロミオとジュリエットと言っのはどういう話なのだ？」

「ん〜簡単に言うと、男女の悲恋話かな」

ハルは簡単にあらずじを話す。

物語の舞台は、ヴェローナという都。

そこに、モンタギュー家とキャピュレット家という対立する名家があった。

ロミオはモンタギューの息子で、ジュリエットはキャピュレットの娘。

二人は偶然出会い、恋に落ち、秘密裏に結婚してしまう。

その後色々あり、ロミオはヴェローナから追放される事になってしまった。

ジュリエットは進められる縁談から逃れ、ロミオと一緒になる為に、仮死状態になる毒薬を飲む。

だが、その話がロミオに伝わらず、ロミオは本当にジュリエットが死んだと信じてしまう。

悲しみに暮れたロミオは、ジュリエットの側で自ら命を絶つ。

目覚めたジュリエットも、傍らで冷たくなったロミオを見て、後を追う。

若い恋人達の死により、両家の長年の不和は終わりを告げる。

「簡単に言つとこんな話かな。大分端折つたけど」

「ふむ……大筋は分かったが、それをどうやって喜劇や活劇に出来るのだ？」

それはハルも知りたい。

「ま、百聞は一見に如かずだ。精々楽しみにするでしょうか」

三人は体育館に入り、座席をキープする。

上演時間が迫るに連れて、続々と観客が体育館を訪れる。

十分前には、すっかり席は埋まり、立ち見まで出る大盛況ぶりだった。

そして、開演時間。

体育館の照明が消えて、舞台に明かりが灯る。

ゆっくりと暗幕が上げられ、舞台の幕が上がった。

簡単な説明が入る。

基本的な設定は、元の話と変わらないようだ。

場面はロミオとジュリエットの出会いへ。

『あら、貴方は？』

『名前を聞くときはまず自分からって、ハル……父上から習いませんでしたか？』

思わずハルは口に含んだジュースを吹き出し掛けた。

煌びやかな衣装に身を包んでいるが、奈美は奈美だった。

『私はジュリエット。このキャピレット家の娘にして、実質の当主です』

(……そうなのか？)

(いや、違う。多分これが新訳なんだろ)

『僕はロミオ。モンタギュー家の息子だ』

『ああ、貴方があの有名な馬鹿息子……』

『その歯に衣着せぬ物言い、気に入った。結婚してくれないか？』
がくつと、観客全員がずっこけた。

今までの会話で、何処をどう取ればその流れになるのか。

『そうですわね………くす、良いですわよ』

『本当かい？』

『ええ。貴方なら私の役に立ちそうですから』

『やった』

喜びロミオと、それを冷めた視線で見つめるジュリエット。

(………何か、ジュリエットが腹黒いな)

(新訳………の筈です)

観客全員の不安を受けつつ、劇は進行していく。

場面はモンタギュー家に。

『この馬鹿息子！一体何処をほっつき歩いてた！』

『うん、ちよっとキャピレット家の舞踏会に』

『馬鹿者おおお！ あそこと家の関係を知らぬ訳ではあるまい！』
『????？ 仲悪いの？』

再びずっこける観客。

『長年に渡って対立していると、前から言っていたらろっ』

『あくそう言えば聞いたことがあるような』

『はあ、まあ良い。それで、何も問題を起こさなかつたたらうな？』

『はは、父上は心配性だな。勿論何も……あ、一つあった』

『……何をやらかした？』

『大した事じゃないけど、ジュリエットって娘と結婚の約束してきただけだよ』

『何いいいいい!!!』

モンタギュー役の学生は、女性とは思えぬ名演技だ。

『結婚式には呼ぶから』

『ならん、ならんぞ。寄りにも寄ってキャピュレットの娘とくっつ

くなど、認めん!』

『え〜良いじゃん。そもそも、どうしてそんなに仲が悪いの?』

『………知らん』

『はあ?』

『先祖代々仲が悪いのだ。本音を言つと、儂はキャピュレットに何の感情も無いのだが、一応世間の面子とかご先祖様への恩義とか色々あるし……』

(………なんか、妙にリアルだな)

(現実にもありえる話だから困る)

『じゃあさ、これを切っ掛けに仲直りしようよ。丁度良い切っ掛けって事で』

『………だがな、あのジュリエットという娘、あれは魔女だぞ』

『変わった子だよな。そこが可愛いけど』

『………モンタギューは、終わったかもしれん』

ガツクリと肩を落とすモンタギューに、観客一同激しく同意した。

場面は変わってキャピュレット家。

『お父様、私モンタギュー家のロミオと結婚する事にしました』
『なっ！！』

『式は明後日にもあげます。司祭様も二つ返事でOKでしたわ』
『いかん、我がキャピュレットとモンタギュー家は……』

『大公様も大喜びでしたわ。あ、ドレスの見立てをしなくては』
『いや、だからね……』

『招待状は今から徹夜すれば間に合うでしょう。お父様も手伝って下さいね』

『その……』

『あら、何かご不満でも？』

冷たい目を向けるジュリエットに、観客はうわーと内心キャピュレットに同情した。

『無能なお父様が変わってキャピュレット家を切り盛りしている私に、まさか反対なんかしませんよね？』

『……くすん』

(ひ、酷すぎる……)

(ジュリエットとは、本来このような人物なのか？)

(いえ、運命の翻弄される十三才の少女の筈です)

『では準備がありますのでこれで』
舞台袖に引っ込むジュリエット。

『まずい、まずいぞ。だが僕はジュリエットに物を言えぬし……
……そうだ！』

(どうするんだろ？)

『ティボルトに頼んで、ロミオに喧嘩を吹っ掛けさせよう。それを口実に奴を罪人にしてしまえば良い』

(誰だ？)

(キャピュレット婦人の甥だよ)

(原作では、彼がロミオの友人を殺し、ロミオが彼を殺す事でロミオが追放されるんです)

一応、話の流れは原作に沿ってるようだ。
全く先の読めぬ展開に、ハル達は知らず知らずのうちに劇へ集中していく。

再び場面が変わり、テラスでロミオとジュリエットが会話するシーンに。

『やあジュリエット。今日も綺麗だね』

『ありがとう。ねえロミオ、貴方はどうしてロミオなの？』

『そりゃ、親が名付けたからだよ。君こそどうしてジュリエットなの？』

『不満かしら？』

『呼びづらいし噛みそうになるんだ。出来ればジュリとかに改名出来ない？』

『貴方が私の夫になれば、どう呼んでも結構よ』
名シーン台無しだ。

『ねえロミオ。モンタギューとかキャピュレットとか、馬鹿らしくない？』

『そうだね。僕もそう思うよ』

『折角私達が結ばれるんですもの。いっそ、一つにしちゃわない？』

『いいけど、何て名乗るんだい？』

『それは後のお楽しみ。それでね、多分明日あたり……』

ロマンチックは何処へやら。

二人の逢瀬は、何やら怪しい密会へと変わっていった。

またまた場面が変わって、ロミオとティボルトが対峙する。

『お前がモンタギュー家のロミオだな。何でかは分からないけど、絡ませて貰うぜ』

『ロミオ、お前また何かやったのか？』

『ん〜心当たりが多すぎて』

『だよな』

親友のマキューシオは、欠片も擁護する気はない。

『……えっと、とにかく覚悟!』

『危ないロミオ。ぐわあ』

ディボルトの刃が、ロミオを庇ったマキューシオの胸に刺さる。
リアルな血糊が衣装から溢れた。

『あゝやっちゃったね』

『い、いや、そんなつもりは……』

『カットなつてついやってしまった、そんな感じ?』

『そうそう』

どこの切れる若者だ、と観客達は心の中で突っ込む。

『えっとこの後は……そうそう、おのれよくマキューシオを殺したな』

『ぐわあ』

ロミオの手に掛かり、ティボルトは倒れた。

(ま、まあ原作通りかな)

(ええ、後はロミオが大公に追放の罰を受ければ)

その後は原作通り、ロミオはしょっぱかれ、追放の罰を受けた。

こっから悲劇に一直線。

の、筈だったのだが。

『此度の事件、全ての差し金は我が父キャピュレットによるものです』

大公にジュリエットは真実を告げる。

証人として、キャピュレットとティボルトの会話を聞いていた使用人も連れて。

真実が明るみに出たキャピュレットは失脚。

ロミオは罪を許され、ジュリエットは名実共にキャピュレットの当主に。

だが、まだジュリエットは止まらない。

『真実を見極められない者に、大公たる資格はありません』

ヴェローナ大公を罷免し、その座に着くこととなった。

綿密な根回しで、重要ポジションのほぼ全員を味方に付けたジュリエットに、大公は抵抗する事すら出来ずに、ロミオの替わりに追放されてしまう。

『今この時をもって、私がヴェローナの大公です。名をジュリエット・ヴェローナと改め、夫のロミオと共にこの街を収めます』

『えっと、じゃあ僕はロミオ・ヴェローナ？』

『ええ。これでモンタギューとキャピレットで悩むことは無いでしょう？』

『凄いやジュリエット』

『やがては王へと上り詰めますよ。着いてきてくれますね？』

『勿論だよ、ジュリ』

二人はそっとキスを交わすのだった。

文化祭へ行こう(2) (後書き)

はい、酷い話です。

カッとなってついやってしまいました。反省はしてません。

もしロミオが脳天気で、ジュリエットが知略に優れた強い女性だったら、と言っイメージだったので……完璧に千景化してましたね。

この後の話も続ける予定でしたが、尺が長くなりすぎたので分割しました。

次で文化祭の話は終わりです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

文化祭へ行こう(3) (前書き)

新沢ロミオとジュリエットは無事幕を閉じた。

ハル達は演技を終えた奈美達と会うことが出来たのだが……。

文化祭へ行こう(3)

ゆっくりと降りていく幕に、観客からは盛大な拍手が沸き上がった。

原作など完全無視で、無茶苦茶な話だった。

だが、それを抜きにすれば若い二人のサクセスストーリーとして、完成度の高い劇だ。

「古きしがらみを破り、自ら道を切り開く。良い話では無いか」

「そうですね。希望溢れる学生の劇としては、面白い話です」

「……なんか、秋乃が妙に生き生きと演じてたのを見て、少し不安に思えてきた」

腹黒で策士のジュリエット。

秋乃はそれを自然体で演じ、はまり役と言える名演技を見せた。兄として一抹の不安を感じずには居られない。

「運命に翻弄されずに切り開く、まさに新訳ですね」

「うむ、シェイクスピアは大した人物だな」

「……帰りに原作買って帰ろうな」

流石にシェイクスピアが可哀想過ぎる。

その後、ハル達は舞台を終えた奈美達と会うことが出来た。

「あ、ハル。本当に見に来てくれたんだね」

「まあ約束だったしな。理事長にも運良く見つからなかったし」

「……お兄ちゃん、後ろ後ろ」

秋乃に言われ、ハルは何気なく振り返る。

その時、初めて志村さんの気持ちが分かった。

「ふふ、こんにちは、ハルさん」

「は、ははは、ご無沙汰してます、理事長先生」

もう笑うしかない。

振り返れば奴が居る。まさにその通りだった。

「以前私が言ったこと、憶えてますよね？」

「……はい。約束を破ってすいません。どんな処分も受けます」

「ちょ、ちよつと待って下さい」

奈美がハルと理事長の間に割り込む。

「理事長、私が着て欲しいってお願いしたんです。怒られるなら、私の方です」

「貴方は……早瀬奈美さんですね」

「はい。お願いです、ハルを怒るなら私を……」

「身内の罰は身内で引き受けましょう。理事長、私に兄の責任を取らせて下さい」

二人を庇うように、秋乃が一步前が出る。

「でしたら、共に来た私も共犯。罰するなら一緒にお願いします」

「柚子殿に同じくだ」

紫音と柚子も理事長に願い出た。

その様子を見て、理事長は少し困ったような表情を浮かべ、

「おやおや、困りましたね。別に、ハルさんを怒るつもりなんて無いのですけども」

優しい顔で微笑んだ。

「男性の立ち入りは基本的にお断りですが、あくまで基本的には、です。許可を得た人は出入りができるのですよ」

「でも俺は……」

「今朝千景さんから連絡がありました、『先日の報酬として、御堂ハルの立ち入りを許可して欲しい』とお願いされたんです。大切な宝石を守ってくれた恩人の頼みは断れませんから」

ハル達は呆然とした顔で、理事長の話を聞く。

今朝女装をして貰ったときは、そんなこと一言も言っていないかったのに。

「騒ぎを起こさぬよう、この学校に相応しい格好で、と言う条件付きで許可致しました」

「そんなのアリ？」

「正直、本当に男の人なのかと見まごう程ですから、充分条件は満たしているでしょう」

「ははは、喜んで良いやら」

胸中は複雑だ。

「ですので、貴方を咎めるつもりは全くありませんよ」

その言葉に、ハル達は一齐に胸をなで下ろした。

「秋乃さん、奈美さん、先程の劇は大変面白く拝見させて頂きました」

「あ、ありがとうございます」

「お楽しみ頂けたのなら幸いです」

奈美と秋乃は揃って頭を下げる。

「運命とは自ら切り開くもの。若く力強いメッセージを感じましたね」

「えへへ」

「クラス全員で話し合い、テーマを決めました」

「なるほどな。しかし、秋乃殿ははまり役だったな」

「ああ、あれが素かと思うくらいだったぜ」

ハルの言葉に秋乃は一瞬驚き、

「……さて、どうでしょうね」

小悪魔的な微笑みを浮かべるのだった。

それから、ハルは奈美達と共に学園祭を回り、楽しい一時を過ごすのだった。

後日。

「おおおおお、秋乃おおおおお!!」

「うわ〜可愛いね〜。奈美ちゃんも格好いい」

ハルから送られてきたDVD映像を見て、大喜びの冬麻と菜月。そしてそれを、呆れた顔で見守る黒田と白井。

「あの〜冬麻様、菜月様、そろそろ作戦開始時刻ですが……」

「そんなの後だ後。今この時、これを見る以上に重要な事など無い！」

「へへ〜みんな楽しそうだね〜。良いな〜私も劇やってみたい」

「……お二方、イタリア支部より出撃の催促が来てますが」

「無視しておけば良い。ほら、お前達もこっちで一緒に見よう」
傍若無人とはこの事か。

「う〜ん、悪女な秋乃も素敵だな〜」

「生き生きしてるよね〜」

「……黒田、どうしましょう？」

「……気の済むまで待つしか無かろう」

結局そのまま一時間あまり、冬麻達は劇を見続けた。

これだけなら、タダの馬鹿親なのだが、

「ふはははは、気合い充分だ！ さあ掛かってこい！」

「よ〜し、私も頑張っちゃうよ〜」

テンションマックスの二人は、ものの数分で一つの悪の組織を壊滅させてしまうのだった。

「……理不尽ですよね」

「……世の中そんなものさ」

炎上する悪の組織の基地を眺めながら、黒田と白井は寂しそうに呟いた。

文化祭へ行こう(3) (後書き)

ひとまず、文化祭に幕が降りました。

いい話で終わりそうだったのに、あの馬鹿親に掛かってしまえば…。

黒田と白井も苦勞してそうです。

これを投稿している時に気づいたのですが、次回で百話なんですね。フラフラぐだぐだの小説ですが、感慨深いものです。

そこで、今回は趣向を変えて「座談会」を行いたいと思います。作者の前作では割とよくやっていたのですが、今回の小説では恐らく最初で最後になるかと思えます。

本編では説明しづらい話など、色々紹介する予定です。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話〈座談会をしよう〉（前書き）

節目の百話目。

どうやらハピネスは座談会を開催する様です。

小話〈座談会をしよう〉

千景「さて、それでは座談会を始めるとしましょうか」

奈美「うん」

ハル「どうした、難しい顔して」

奈美「なんかね、デジャビュと言つか……初めてなのに初めてじゃない様な……」

紫音「奇遇だな。私もそう思っていたところだ」

千景「気のせいでしょう」

柚子「気のせいですよ」

剛彦「気のせいねえ」

ハル「な、何か大人組が妙に団結してるな……」

千景「大人の事情というものです。それより、参加者は全員揃って……ますね」

一同「はい」

千景「ではまず、最初の話題は……」

蒼井「（事務所のドアを開け放ち）待てい！！」

千景「あらドクター。私の話の腰を折るなんて、良い度胸ですね」

蒼井「こつちの台詞だ！ 今吾輩が居ないの確認してから始めようとしただろ！」

奈美「蒼井居なかったんだ」

柚子「ちつとも気づきませんでした」

蒼井「しくしく……」

千景「まあ来てしまったものは仕方ないので、邪魔をしないよう大人しくしてて下さいね」

ハル「……俺、この光景もデジャビュだ」

く過去を振り返って

千景「今回のお話して、丁度百話目となるわけですが」

ハル「何というか、最初からあまり話が動かないですよね」

剛彦「基本的にい、何かを成し遂げる話じゃ無いからねえ」

柚子「結局新しいメンバーは、ハルさん、奈美さん、紫音ちゃんだけですから」

蒼井「後は当初登場しなかっただけで、元々所員だった訳だしな」

紫音「芍薬商店街との付き合いや、コレクト殿との因縁が産まれたくらいか」

千景「……事務所の建て替えなんかも……ね」

蒼井「（がくがくぶるぶる）」

千景「まあそれはさておき、基本的に大きな変化はありません」

ハル「良いんですか？ 何かこう大事件とか起きなくても」

千景「そう言うのは他の場所で起きてるでしょうから」

奈美「身も蓋もないですね」

剛彦「そもそも日常がテーマの話だからねえ」

紫音「これを日常と言うには語弊があると思うが」

柚子「怪盗と対決したり、悪の組織に誘拐されたりしてますものね」

蒼井「だが、世界や日本の危機とは縁遠い話には違いない」

ハル「そんなのこそ、どっかの誰かに任せるのが良いだろうよ」

奈美「んゝ個人的には、魔王とか倒してみたかったわ」

紫音「アレは人間がどうこう出来る相手じゃ……いや、奈美ならあ

るいは……」

剛彦「それは違う機会にしたら良いんじゃないかしらあ」

千景「ですね。私達はおくまで、その日その日を生きていくだけですから」

ハル「綺麗に纏めましたね」

千景「……いえ、実際これが一番大変と言いますか……」

一同（お、重い……）

～出番～

千景「これまでを振り返ると、一番出番が多いのはやはりハル君ですね」

奈美「まあ、仮にも主人公だし」

剛彦「一応主人公だし」

紫音「ひとまず主人公だからな」

蒼井「これでも主人公らしいぞ」

柚子「なんちゃって主人公、ですし？」

ハル「何だよその反応は！ てか柚子はどうして疑問系なんだ！！」

千景「まあまあ落ち着いて。ハル君が一番出番が多かったのは事実ですから」

ハル「はあ……」

千景「第二位は奈美、三位が紫音、その後は私と柚子、剛彦が団子です」

蒼井「ん、ちよつと待て。誰か抜けてないか？」

千景「ああ、失礼しました。大事な人を忘れていました」

蒼井「ふふん、まあ良い。それで、その大事な人はどの位置なんだ？」

千景「秋乃さんが私達と同じ位、美樹がその下ですね」

奈美「へえ、秋乃も結構出てるのね」

ハル「お前と学校で絡む機会が多いしな」

蒼井「違あああう。もっと大事な、唯一無二の存在を忘れてるだろ！！」

紫音「そつだぞ千景。冬麻殿と菜月殿を忘れてる」

千景「あら、私としたことが。お一方は秋乃さんの下、美樹の上です」

剛彦「そんな少なかつたのお。インパクトが強いからあ、もつと出てる印象があるわねえ」

柚子「ハルさん誘拐の時に、大幅に出番が増えたからですね」

一同「あつはつはつは」

蒼井「きいいいいいい！！ わざとだな、わざとやってるだろ」

千景「（不意に真剣な顔で）ドクター、本当に聞きたいですか？」

蒼井「ん、何だいきなり」

剛彦「知らない方があ、幸せな事もあるのよお」

奈美「あゝあ、折角気を遣ってあげたのに」

紫音「人は知らぬ事は出来ても、知ったことを知らない事には出来ない」

ハル「ま、まあ出番なんてこれから増やせば良いんだし、な？」

蒼井「何だ、何だ貴様等、その、妙になま暖かい視線は……まさか……」

柚子「千景ちゃん、本人が強く希望してるんだし、言ってあげれば？」

千景「分かりました……。ドクターは……。秋乃さんの……。下です」

蒼井「ぐふうふうふう！」

ハル「あ、蒼井が血を吐いて倒れた！ 衛生兵、衛生兵を！」

柚子「……………多分平気です」

ハル「何てやる気のない衛生兵……………」

奈美「まあ自業自得じゃない？ これだけみんなが避けようとしてた事を聞いたんだし」

剛彦「ドクターは登場が遅かったしい」

紫音「単独で主人公の話が無かったのも痛いな」

ハル「海に行ったときも、結局最初と最後だけしか出番無かったし」

柚子「コレクトさんとの対決も、二回目は蚊帳の外で台詞は殆ど無かったですね」

蒼井「……………し、信じぬぞ。吾輩は科学者、明確な数値を見なければ……………」

千景「（何か書かれた紙を手渡し）どうぞ」

蒼井「……………（何かが折れる音）」

一同（（心折れたか……………））

千景「人の忠告は素直に聞こう。みんなも良いですね？」

一同「はいはい」

蒼井「まだだ、まだ終わらんよ……きつとこれから吾輩がメインの話だつて……ある」

奈美「……言っただ方が良いのかな？ その予定は全くありません、て」

紫音「止めておけ。傷口に塩を塗り込む必要はあるまい」

〜これから〜

千景「過去を振り返るのはここまでとして、今後について話すしましょう」

ハル「今後つて言つと、これからの展開ですか？」

千景「ええ。とは言いましても、今まで通りなんですけどね」

剛彦「まあそつよねえ。あくまで日常の話だものお」

柚子「ではこれからも、ちょっとした出来事のお話を？」

千景「それがベースですが、そろそろ纏めに入っていこうかと」

紫音「ほう、纏めか。この小説も終わりが近いと言つことなのだな？」

千景「いえ全く」

一同「「をおい!」!」

千景「ただこの小説の性質上、大きな事件があつて終わり、とはならないので」

ハル「確かに……日本支配みたいな目標は無いですしね」

奈美「ハル、何言ってるの?」

ハル「ん、ああ、俺にも分からないけど、何かふとこの言葉が出てきた」

剛彦「まあまあ良いじゃないのお。でも千景ちゃん、それならどうやって終わらせるつもりい?」

千景「……禁じ手中の禁じ手、『フェードアウト方式』を使おうかと」

一同「「な、何いいい!」!」

奈美「???? 何それ?」

ハル「う、打ち切りの漫画とかでも用いられる、その後を匂わせて終わる禁断の手法だ」

紫音「『俺達の戦いはまだまだ続く』に代表される、アレだな」

柚子「ほ、本気なんですか？」

剛彦「幾らなんでもお、それは危険すぎるわあ」

千景「しかし……他に方法はありません」

ハル「早まっちゃ駄目です。きっと何か良いオチがありますよ」

紫音「そつだぞ千景。諦めたらそこで試合終了、と偉い先生が言っていた」

千景「諦めて試合終了にするのも悪くないですね」

剛彦「駄目な方に覚悟を決めちゃってるわあ……」

柚子「かくなる上は」

一同は、千景に対峙する。

千景「……一体、どういっつもりですか？」

一同「我ら一同、綺麗な終わり方を希望します」

千景「ふふ、私のフェードアウト方式と戦おうと言っのですか」

一同「それが我らの望み」

千景「……なら是非もない。ここで雌雄を決するしましょう」

ハル「は、初めて対峙したけど、どう考えても勝てそうにないぞ……」

…」

奈美「凄い威圧感……」

剛彦「気を抜いちゃ駄目よお。相手は『死刑宣告者』柊千景なんだからあ」

柚子「全員で戦えば勝訴は無理でも……」

紫音「どうにか無期懲役には持ち込める……のか？」

千景「……リミッター解除。完全抹殺モードに移行……」

一同（か、勝てる気がしない……）

千景「移行完了………抹殺開始！」

剛彦「みんなあ、行くわよお!!」

ハル「ええい、どうにかしてモノマネを……」

奈美「こうなったら、全力で戦うのみ！」

柚子「毒薬散弾銃、かすりさえすれば……」

紫音「叔母を止めるのも姪の役目か。結城家に伝わる最終奥義を今！」

全員「うおおおお!!」

彼らの戦いはまだまだ続く。

先生の次回作にご期待下さい。

千景「ふふふ、では本編のラストもこんな感じで」

一同「絶対に阻止しますっ！！！！」

蒼井「わ、吾輩は………いない子？」

会場大混乱につき、座談会は中断させて頂きます。

小話へ座談会をしよう（後書き）

実に久しぶり、この小説では初めての座談会でした。

ここに登場している彼らは、本編の彼らとは違う存在。

話した事も、座談会をやった事すら、本編の彼らは知りません。

……そう言う事にして置いてください。色々大変なので。

百話まで来れたのも、読んで頂いている皆様のお陰です。

誰一人読んで貰えなければ、恐らくここまで書き続けるモチベーションを保つことは出来なかったと思います。

本当に感謝しております。

今後もちよつとした日常話と、時たま起こる事件をベースに話を進めて行きます。

投稿ペースも、仕事が落ち着いたら元に戻す予定です。

終わりがどうなるかは、まだ分かりませんが、

どうぞこれからもお付き合い頂ければ幸いです。

ご意見・ご指摘・ご感想は大募集です。

少しでも良い文章を書けるよう、皆様からお声を頂ければ有り難いです。

どうぞよろしくお願いします。

奈美の父親（前書き）

ハピネス事務所に現れた一人の男性。
どうも依頼主ではないようだが……。

奈美の父親

とある日。

「失礼する」

ハピネスに、一人の男性が訪れた。

茶色の着物を着た、恰幅の良い男。

綺麗に整えられた髭と、鼻筋に走る一筋の傷痕。

鋭い眼光を放つ瞳は、明らかに堅気とは違う雰囲気醸しだしていた。

「いらつしやいませ。ようこそハピネスへ」

鈴木が何時も通りの挨拶をする。

例え相手が何者でも、対応を変えることはしない。

ハピネスのルールだった。

「ご依頼でしょうか？ それでしたら私がお伺いしますが」

「気遣いは無用だ。私は客では無い」

「……失礼ですが、当社にどの様なご用でしょうか？」

「ここで、早瀬奈美が働いていると聞いたが、本当か？」

男は威厳溢れる声で、鈴木に尋ねる。

「はい、確かに早瀬奈美は当社の所員です」

「……今何処にいるか教えて貰おう」

「失礼ですが、どの様なご関係でしょうか？」

「答える義務はない」

バツサリと男は鈴木の質問を切り捨てる。

かなり横暴な態度だった。

「申し訳ありませんが、関係を証明して頂かなければ、お教えする訳には参りません」

「ほう、私にその様な口を聞くか」

ギロツと男は鋭い眼光で鈴木を睨み付ける。

しかし鈴木は動じない。

「はい。当人の関係者以外には、お教えする事は出来ません」

「良い度胸だな、娘」

一触即発の緊迫した空気が事務所に流れる。

その時だった。

「これはこれは、珍しいお客様ですね」

所用で席を外していた千景が事務所に戻ってきた。

途端に事務所員達が安堵の表情を浮かべる。

「君か……」

「ええ、ご無沙汰しております」

千景は慇懃な態度で一礼する。

「こうして直接お会いするのは、何年ぶりになりますか……」

「君と世間話をするつもりは毛頭無い」

「それは失礼を」

男と千景の間に、微妙な空気が流れる。

「あの、所長。この方は？」

「この人は、早瀬^{はやせ}嵐蔵。奈美の父上です」

ハピネスに、文字通り嵐がやってきた。

応接スペースに、嵐蔵と千景が向かい合って座る。

「それで、どの様なご用件でいらっしやっただんですか？」

「父親が娘に会いに来るのに、理由が必要か？」

「では彼女の家に行かないのは何故ですか？」

千景の問いに、嵐蔵は僅かに眉をひそめる。

その様子を見て、千景は瞬時に理解する。

「どうやら、風様には無断で来たようですね」

「そ、そんな事はないぞ。ちゃんと許可は貰ってきた」

千景の発した言葉に、嵐蔵は分かりやすいほど動揺を露わにする。それが千景の言葉を肯定していた。

「凧様なら、奈美の住所を知っているはずなのですが……」
「ちょ、ちょっと聞き忘れたただけだ」
「では今から聞きましょうか。何なら私から連絡を……」
「しなくていい！ しなくて良いから！」
身を乗り出して必死に千景を制止する。
さっきまでの威厳は何処へやら。
すっかり情けない親父に早変わりしてしまった。

「では、奈美に会いに来た理由を改めて伺いましょうか？」
「だからさつきも言った通り……」
「貴方が理由もなく奈美に会いに来る筈無いですよ？ それも凧様に黙って」

「むうう」
「聞かせて貰いましょうか。理由を」
千景は携帯電話をちらつかせて、嵐蔵に詰め寄る。
何時でも連絡出来るんだぞ、と言っ意思表示に、嵐蔵は観念した。
「実は……」

「こんにちわ」
バッドタイミング。

嵐蔵が口を開いた瞬間、事務所に奈美がやってきてしまった。
奈美は挨拶を交わしながら依頼掲示板へと向かおうとして、

「……お父さん？」
ソファーに座る嵐蔵に気が付いた。

「おお奈美よ。久しぶりだな」
「どうしてお父さんがここに居るのよ」
奈美は胡散臭そうな目で、父親を見据える。

「丁度その話をしていた所です。奈美もこつちに座りなさい」
千景の言葉に従い、奈美は千景の隣に腰を下ろす。
「それで、一体何の用があって来たのよ？」
「……奈美よ。お前ももう十六才になつたな？」

「?? 何よいきなり。まあ確かにそうだけど」

「ハピネス全員で盛大にパーティーをして貰ったので、忘れる筈がない。」

「十六と言えば、もう結婚できる歳だ」

「……まさか」

「単刀直入に言おう。お前、お見合いをしろ」

「嫌よ!」

即答だった。

「奈美、私はお前に命令しているのだ」

「だれが聞くかっての。べつだ」

「アツカンベーをして奈美は明確に否定の意思を示す。」

「何故だ。この縁談は、お前にとって良い話なのだぞ」

「何言ってるんだか。私にじゃなくて、早瀬家にとってでしょ」

「……否定はしない。だがやがてお前の為にもなるんだ」

「嫌ったら嫌。絶対にお見合いなんかしないもんね」

「徹底抗戦の姿勢を取る奈美に、嵐蔵は顔をしかめる。」

「どうしてそこまで嫌がる………まさか」

「ふと何かに気が付いたように嵐蔵はハツと目を見開く。」

「お前、誰か好きな人でも出来たんじゃ無いだろうな?」

「なっ、何言ってるのよ。別にそんな事………」

顔を赤くしてもじもじする奈美。

バレバレの態度だった。

「何という事だ………幼少より男を寄せ付けぬよう、手を打って
いたというのに………」

「残念ながら、貴方の仕込んだそれは、既に修正してますから」

「何だとおお! 貴様か、貴様がやったのか!」

「いえ………違います。とある男の子、とだけ言っておきましょうか」

「ぬおおおおお!!」

嵐蔵は髪の毛をかきむしり絶叫する。

「認めん、認めんぞ。私は絶対に認めないからなあああ!!」

「別にお父さんに認められなくてもいいし」

「ごうなったら、早瀬家の総力を結集してその男を……」
瞬間、空気が変わった。

嵐蔵は背筋がゾツとするほどの、威圧感を感じる。

「……お父さん。もしハルに手を出したら……本気で潰すよ」
「ぬ、う……うう」

奈美の純粋な怒りを受けて、嵐蔵は何も言葉を紡げなくなってしまふ。

長い無言の時間。

それを破ったのは、千景の携帯電話だった。

「あら、ちよつと失礼……どうもご無沙汰しております」

千景は電話の相手と二言三言会話を交わして、

「嵐蔵さん、貴方になんか変わって欲しいと」

冷や汗を垂れ流す嵐蔵に携帯を手渡した。

怪訝な顔で携帯を受け取ると、嵐蔵は耳にあてる。

「もしもし……」

『私です』

受話器から声が聞こえてきた途端、嵐蔵の顔が恐怖に引きつる。

『色々聞きたいことがありますので、至急戻って来なさい』

「い、いや……その、こっちにも事情が……」

『聞こえませんでしたか？ 戻ってきなさい』

有無を言わせぬ絶対的な声。

嵐蔵に出来ることは、

「……はい、直ぐに」

素直に従うことだけだった。

嵐は去った。

「全く、あの人は変わりませんね」

「本当ですよ。里帰りしなくて正解でした」

「その事ですが……風様が会いたがっていましたよ」

「お母さんが？　じゃあさっきの電話は」

頷く千景。

「黙って来たみたいですし、相当お仕置きは激しくなりそうですね」

「良い薬ですよ。寄りにも寄ってハルに手を出すなんて……」

「ご立腹の奈美。」

自分のこと以上に怒りを憶えているようだ。

「まあ、当分は平気だと思いますよ。風様もご立腹の様でしたから」

「そうですね。お母さんが本気で怒ったら、お父さんなんてイチコ

口ですもん」

「ええ」

こうして、奈美のお見合い未遂は終わりを告げた。

奈美の父親（後書き）

奈美の父親初登場です。

話題自体は、大分前から出ていましたけども。

イメージは某美食倶楽部のあの人です。それを大分柔にした感じで本編で分かると思いますが、弱いです。

立場的な意味もありますけど、実力的にも圧倒的に弱いです。

多分、ハルとガチンコしたら負けるんじゃないでしょうか。

奈美が抱えていたアレは、全てこの親父が原因です。

娘が大切と言うのもありますが、それ以上に良い縁談を結ぶまで男に近寄らせない目的がありました。

とんだ迷惑親父ですね。

奈美の母親についても、名前が出てきました。

物語の転換期に登場願うつもりです。

丁度今頃から、十二月中旬くらいまでが、仕事の忙しさのピークです。

それを過ぎてしまえば、更新ペースもあげられるかと。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話へ子守は大変です（前書き）

ハピネスを訪れたハルと奈美。
そこで彼らが見た光景は……。

小話へ子守は大変です

「ふぎや〜ふぎや〜」

ハピネス事務所に、赤ん坊の泣き声が響き渡った。

「あらあ、どうしましょう……」

「ふぎや〜ふぎや〜」

「ほ〜らあ、よちよちい〜」

ローズは困り顔で、腕に抱く赤ん坊を必死にあやす。

だが、効果はない。

一向に泣きやむ気配を見せない赤ん坊に、ローズは困惑。

そんな時、

「「こんにちわ〜」」

救いの手、とばかりにハルと奈美が事務所に現れた。

二人は直ぐさま、ローズと赤ん坊に気づく。

「泣き声が聞こえると思ったら、本当の赤ん坊だったんですか」

「うわ〜可愛い。この子、ローズさんの子ですか？」

「残念だけど違うわあ」

でしょうね。

「依頼でねえ、半日子守を任せられたんだけどあ」

「ふぎや〜ふぎや〜」

「この通りなのよあ」

火が着いたように無く赤ん坊に、ローズはお手上げた目を閉じる。

「ん〜お腹が空いてるとか？」

「さっきミルク飲んだばかりだからあ、違つと思つただけどあ」

「おしめは？」

「それも替えたばかりなのあ」

「ん〜他に思い当たる節は無いけど……」

「ねえ、ちよつとハルちゃんが抱いてみてえ」

ローズから渡された赤ん坊を、ハルは優しく抱く。
すると、

「……きゃっきゃ」

途端に泣きやみ、ご機嫌な笑顔を見せてくれた。

「え、え、どうして？」

「やっぱりい、私の事が嫌いだったのねえ」

「……ひよつとして、怖かったんじゃないのかな？」

ハルの言葉に、ローズと奈美は首を傾げる。

「多分普段この子を抱いているのは、母親だと思っただとすると、男性の逞しい腕に抱かれるのが慣れてないから、むずがったの
かなって思う」

「そうなのかな？」

「勿論俺の勝手な想像だよ。他の原因があるかもしれないけども」

「何はともあれえ、泣きやんでくれて助かったわあ」

ハルの腕に抱かれ、もう穏やかな寝息を立てている赤ん坊を見て、
ローズは心底ホツとしていた。

「でも、どうしてローズさんが子守の依頼を？」

「丁度手の空いている人が居なかったのよお。事務のみんなは大忙
しだし」

視線を向ければ、鈴木を筆頭に事務員は皆必死の形相で業務を行
っている。

そして、原則的に事務員は依頼を受けない決まり。

結果として、適任者ではないローズが子守をする羽目になっ
た。

「みんな手伝ってくれて言ったんだけどお」

「余裕、無さそうですものね」

「何でももうすぐう、役所の監査が入るらしいのお。その準備らし
いわあ」

「柚子とか蒼井は？」

あの二人なら、ローズよりは上手くあやせるところが。

「柚子ちゃんは丁度依頼で出ててえ、ドクターは……」

「??？ 蒼井は？」

「抱いた瞬間、全身に蕁麻疹が出てねえ、病院に運ばれちゃったあ」

「……アレルギーなのかな？」

「どんなアレルギーだよ」

まあ、蒼井ならあり得なくも無いが。

何というか、純粹で無垢な存在に弱そうだ。

「紫音ちゃんは学校だし、千景ちゃんは……」

苦笑いするローズ。

「どうしたんですか？」

「抱こうとした瞬間、さつきよりも酷い大泣きされちゃったのよお」

「それはまた……」

チラリと千景を見れば、無表情の中にも不機嫌の色が浮かんでいた。

「あれ、でもさつきハルが言ったことが正しければ……」

「あくまで俺の想像だからな。一概には言えないよ」

「そんな訳でえ、ハルちゃんが来てくれて助かったわあ。本当にありがとうねえ」

「気にしないでくれよ。大したことしてないし」

「この子の母親が戻るまで一時間位。良ければ依頼を引き継いでくれない？」

元々依頼を受けにやってきた。

一時間子守をすることも、問題ない。

「別に構わないよ」

「じゃあ私も付き合おうわ。ねえ私にも抱かせてよ」

「……優しくしろよ。くれぐれも力を込めたりしちゃ駄目だぞ」

「もう、心配性ね。大丈夫だって」

奈美はハルから赤ん坊を渡して貰い、恐る恐る抱く。

「……ふぎゃ〜ふぎゃ〜」

「え、何でよ〜」

赤ん坊は短い眠りから覚め、再び火が着いたように泣き出した。

「ほらほら怖くないよ〜。いないいないば〜」

「ふぎゃ〜ふぎゃ〜」

「……………選手交代」

赤ん坊は再びハルの元に。

やはり直ぐさま泣きやみ、機嫌が戻った。

「む〜何でよ〜」

「まあ、俺は秋乃が赤ん坊の時、子守の真似事をしてたからな。少しは慣れがあるんじゃないか？」

「なら私も慣れるまでよ！ 慣れるまで付き合って貰っわ！」

「……人様の赤ん坊でやるなよ」

「そうよお。奈美ちゃんだっていずれ母親になるんだしい、焦ることは無いわよお」

諭すローズだが、奈美は不満顔。

「……母親に慣れるのは女の人だけ。お前は俺なんかよりよっぽど赤ん坊の扱いが上手になるはずだよ」

「そうかな？」

頷くハルとローズ。

「ま、子守は俺に任せておけ」

「え〜！」

「……何でそんなに驚くんだよ」

「だって……………」

「うふふう、今のはハルちゃんが悪いかしらねえ」

顔を赤くする奈美と、ニヤニヤ笑うローズにハルは首を傾げる。

「ねえハルちゃん。子供は好きい？」

「ん、そうだな……好きだと思っよ」

「ふ〜ん、良かったわねえ、奈美ちゃん」

「ななな、何を言ってるんですか」

「さくてえ、何を言ってるのかしらねえ」

意味深に笑うローズに、奈美は大慌て。

置いてけぼりのハルは、身体をゆっくり揺すり、赤ん坊をあやすだけ。

「家事一通りとお、子守まで出来るう。お買い得物件ねえ」

「だから……」

「……仲間はずれになっちゃったよ」

「きやつきゃ」

赤ん坊の母親が戻るまで、奈美とローズのやり取りは続くのだった。

その夜。

ローズは千景と馴染みのバーに来ていた。

「やれやれえ、とんだ依頼だったわねえ」

「ハル君が来なければどうなっていたか……」

幸い業務に支障を出すことなく、赤ん坊は母親の元へと帰っていた。

あのまま泣かれ続けていたらと思うと、冷や汗が出る。

「それにしてもお、お互い赤子には嫌われるわねえ」

「……子供は本能的に危険を遠ざけますから」

「私はともかく、千景ちゃん足を洗って大分経つのにい」

「一度付いた臭いはそう簡単には消えないでしょう。特に……死の臭いは」

千景は少し寂しそうな顔で、ウイスキーを煽る。

「なら私も同じねえ。血と硝煙、そして死の臭いがまとわりついてる筈だわあ」

「……本来、私達が日の光を浴びてはいけない人種ですから」

「感謝してるのよお。そんな私にい、暖かな居場所を与えてくれてえ」

「礼は不要です。ハピネスは私にとっても安らぎの場所ですから」
二人は微笑みながら、酒を飲み交わす。

大人な夜は、朝が来るまで続くのだった。

小話〈子守は大変です〉（後書き）

赤ちゃんって、結構人を見てますよね。

作者は親戚の赤ちゃんに良く泣かれます……。

赤ちゃんは潜在的に、危険から遠ざかるうとするらしいです。

ローズと千景が嫌われたのはそのせいです。

奈美は……抱かれていると色々危険だと察したのかと。下手に高い高いされると、天井突き破りそうですから。

過去に傭兵だったローズ以上に嫌われる千景。その過去については……実は作者はてつきりもう書き終わっているとはかり思っていました。

実はハッキリとした描写して無かったんですよね。

折角なので、近々千景メインの話を書こうと思います。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

幸福をもたらす呪い（前書き）

事務所で何やら悩んでいる紫音。

どつやら、とある道具が原因らしいが……。

幸福をもたらす呪い

とある日。

ハルと奈美がハピネス事務所を訪れると、

「む〜」

難しい顔をしている紫音が居た。

腕組みをしながらソファーに座り、何やら考えている様だ。

「おい紫音、どうしたんだ？」

「む、ハルと奈美か」

「考え事？」

「……少々厄介事があつてな」

そう言つと紫音は、机の上に載せられた木箱を指差す。

「何これ？」

「除霊の依頼とかか？」

「当たらずとも遠からず、だな。曰く付きの品には変わりないが」

紫音は木箱の蓋を取る。

中に収められていたのは、

「うわ、何それ。動物の手？」

「猿……かな？」

猿人類の物によく似た、二十センチほどの腕だった。

「ああ。……二人は、『猿の手』という物を知っているか？」

「背中を搔いたりする奴？」

「そりゃ孫の手だ」

こんな物で搔いた日には、背中が血まみれになるだろう。

「古から伝わる、呪いの品だ。持ち主の願いを、どんな物でも三つ

叶える事が出来る」

「凄いいじゃない。でもどうして呪いなのか？」

「願いを叶える為に、大きな代償を払う事になるのだ。それも、自

他問わずな」

「……昔、そんな名前の怪談を聞いたことがあるぞ」
ハルは臆気な記憶を探り、簡単に話す。

ある夫婦の元に、猿の手が渡った。

夫婦は願い事に、お金を求めた。

願いは叶った。が、それは息子が事故で死んだ慰謝料としてだが、悲しんだ妻は、息子を蘇らせてくれと願った。

願いは叶い息子は蘇った。事故でぐちゃぐちゃになった身体で。

夫婦は絶望の中、息子を墓に戻してくれと願った。

願いは適った。そして全ての願いを叶えた猿の手は、何処に消え果てていた。

残ったのはお金と、絶望だけだった。

「こんな感じだったと思うけど」

「……その通りだ。恐らくこの『猿の手』から作られた、実話なのだろう」

「何というか、救いよりの無い話ね」

「願いを叶える為に対価が必要と言つのは、良くある話だ。だがこれは、少々悪質でな」

紫音は嫌悪感を露わにして告げる。

「今に至るまで、数え切れぬ願いを叶え、そして同じ数だけ不幸をまき散らしてきた」

「……で、どうしてそんなやばい代物がここに？」

紫音が願いを叶える為に用意したとは思えない。

ならば当然、その疑問が浮かぶ。

「とある大富豪から押しつけられた。処分して欲しいと」

何でも、その家は遺産相続でドロドロだったらしい。

その中の一人の男が、猿の手を得て願った。

『遺産を独り占めしたい』

願いは叶った。

男以外の相続者が、奇妙な事故死を遂げたという形で。そして男は猿の手を処分しようと考えた。

あらゆる方面で情報を集め、ハピネスに依頼をしたのだった。

「その人、罪に問われないの？」

「警察も調べたが、原因不明の事故死として処理されたいらしい」

「何ともやりきれない話だな」

結果的に、ずるをした人間が得をする形になった。

あまり気分の良い話ではない。

「でも反省したんじゃない？ 処分したがったんだし」

「……だと良いけど、聞いた感じじゃ違うだろうな。恐らく……」

「ああ。願いを叶えた猿の手が自分の元を去り、いつか誰かが叶えた願いが、自分を不幸にするんじゃないかと不安に思ったらしい」

依頼人と直接会った紫音が言うなら、多分そうなのだろう。

ますます持つてやりきれない。

「紫音は受けたの？」

「経緯はどうぞであれ、こんな呪われた品が存在する事は、何としても止めたいからな」

それにはハルも賛成だ。

願いを叶えると言うより、不幸を呼ぶ呪いの品。

一刻も早く、消してしまった方が良い。

「じゃあパパつとやっっちゃえば？」

「……そう思ったのだが、無理だった。私の力が及ばぬ程、恐ろしい力が込められている」

「燃やしたらどうだ？」

「物理的な方法は効果が無い。霊的に消滅させる必要があるが……」
数百年以上も願いを叶え続け、人に不幸を与えた呪い。

それは、負の力となって猿の手に力を与え、人が被える力を遙かに超えていた。

「と言うわけで、どうしたものかと考えていたのだ」
「ん〜」

一緒になって考えるが、素人のハルが妙案を思いつく筈もなく、良い案が出ないまま、時間だけが過ぎていった。

「……………本家に頼るしかないか」

「本家って、紫音の実家か？」

「ああ。結城の家は退魔の総本山でな、私よりも優れた退魔師が居る」

「随分嫌そうな顔してるけど？」

「あまり良い思いは無いし、私は厄介払いされた身だからな。少々考える事はある」

紫音は平静を装うが、望んで居ないことは明らかだ。

詳しい事情を聞いてみたいが、興味本位で聞くことでもない。ハルは話題を切り替える。

「それで、その本家の人達なら除霊出来るのかな？」

「……………厳しいだろうな。だが、本家には大量の文献があるから、あるいは良い方法があるかも」

紫音は険しい顔で答える。

それが望み薄な事を分かっているのだろう。

「現状で打つ手が無い以上、あらゆる手段を試すしかないだろうな」
「そうか……………オカルトの話じゃ、俺達は力に無いな」

「いや、話を聞いて貰っただけでも助かった。お陰で頭が整理できたからな」

気遣う様に紫音はハルに告げる。

「ねえ、そんな難しい事なの？」

「お前は何を聞いてたんだよ」

「ようは、この手を消しちゃえば良いんだよね？」

「そうだが、物理的には無理だ。霊的な力でも除霊は難しい」
今までの話を理解して無かったのだろうか。

「あのね、この手はどんな願いも叶えてくれるんだよね？」

頷くハルと紫音。

「だったらさ……」

奈美は猿の手を右手に持つと、

「二度とこの世に出てこない様に、消滅しちゃえ」

制止する間もなく願いを告げてしまった。

すると、

ジュワアアアアア

猿の手は青白い炎に包まれ、あっという間に消滅してしまった。

「ほら、簡単でしょ？」

「な……こんなのアリかよ……」

「他者の不幸によって、持ち主の願いを叶える……確かにその願いなら……」

盲点だった。

最もシンプルな手段故に、見落としていた。

「これにて一件落着ね」

ニコッと笑う奈美。

呪いの道具『猿の手』は、自らの力によってその存在を消滅したのだった。

「でも、数百年もどうして誰も気づかなかつたんだらうな？」

「願いを何でも叶えてくれる、と言われたら、普通の人は私欲を優先するだらうからな」

「ああ。それが他人の不幸の上に成り立つとしても……」

「気にしないだらう。人間の大量に、強欲と言うものがあるくらいだ」

七つの大量。

人間は生きている限り、それから逃れる事は出来ない。

「私は奈美を賞賛するよ。数百年の呪いを、あっさりと終わらせたのだから」

「……脳天気なだけだよ」

「ふふ、かも知れないな。まあ、無事依頼は完了した。お礼にご飯でも奢ろう」

「……やっぱり、七つの大罪からは逃れられないみたいだよ」

七つの大罪の一つ、暴食。

それを奈美は、これから体現することになる。

幸福をもたらす呪い（後書き）

猿の手は結構有名なオカルト話ですね。

色々なアレンジをされて、あちこちに顔を出しているので、似たような話を聞いたことがある方も多いのでは？

根本で同じなのは、『他者の不幸によって幸せがもたらされる』の一点です。

想像では何とでも言えますが、実際自分の手元にあったとしたら……。

私は奈美の様な行動は取れないでしょうね。

そろそろ仕事が落ち着いて参りました。

少しずつですが、更新ペースを上げていこうと思います。

連日更新は先になると思いますが、少しずつ……。。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話〈焼き芋をしよう〉（前書き）

秋の味覚と言えば栗、柿、そしてお芋。

これは今から少し前のお話……。

小話〈焼き芋をしよう〉

ハピネス事務所に、甘い匂いが漂っていた。

その発生源は、

「美味しいね、このお芋」

「伊達に商売してる訳じゃないな。やっぱりプロの技だ」
焼き芋だった。

先程、

『いしやくきいも』

とお約束の声と共に、事務所の下を焼き芋屋さんを通った。

丁度夕方のお腹が空く時間帯とあり、満場一致で購入を採択。

手が空いていたハルがひとつ走りして、人数分を入手してきたのだった。

「ふふ、味覚の秋を実感出来ますね」

「ふかし芋も良いけどお、やっぱり焼き芋よねえ」

「疲れた脳に、甘い物が染みる」

「はふはふ……美味しいです」

全員が一旦作業を止め、秋の味覚を堪能する。

鈴木が入れたお茶を飲みながら、のどかな一時を過ごすことになった。

「これが……石焼き芋か」

「あれ、紫音は初めて食べるのか？」

「うむ、煮たり蒸したりした芋は食した事があるが、石焼き芋は初めてだ」

初めての焼き芋を、紫音は嬉しそうにぱくつく。

甘い芋がお気に召したようで、何度も頷いてみせる。

「……素晴らしいな。また一つ、視野が広がった」

「大げさだな……まあ、気に入ってくれたのなら良かったよ」

ハルは感激する紫音に苦笑を浮かべる。

「それにしても、焼き芋屋なんて久しぶりに見たよ」

「昔は多く見ましたが、最近は数が減っている様ですね」

「ええ、昔は良くおやつに食べてよね」

「二人が言つと凄い説得力が………何でもありません」
学習したようだ。

凄いで睨まれた奈美が、すごすごと引き下がる。

「でも焼き芋つてえ、自分で作ってもここまで美味しくならないのよねえ」

妙な空気を振り払うようにローズは話題を切り替える。

「これ幸いと、ハルもそれにのる。」

「そうなんだよな。オーブンとかでも、やっぱり自然の調理法には適わないよ」

「蒼井さんなら、そういうった装置が作れるのでは？」

「吾輩も研究した事があるが……やはり天然に勝る事はできなんだ」

「……役立たず」

柚子のぼそつとした呟きは、運良く蒼井の耳に入ることには無かった。

「といますか、相当期待してたんですね。」

「ふむ、では焼き芋を食べるには、お店が来るのを待つしか無いのか……」

「そんな事無いわよ。たき火でお芋焼けば良いんだし」

「ほっ」

奈美の言葉に、紫音の目が輝いた。

「こちらも相当焼き芋の虜になっているようだ。」

「詳しく聞かせて貰えるか？」

「えっとね、落ち葉とか集めて、火を点けて、そこに芋を入れて焼くのよ」

「昔は良くやりましたよね」

「やったわねえ」

「やりましたね」

「ふん、懐古するのは年寄りの……」
「ごぶうー!!」

トリプルコンビーネーションにより、蒼井は致命的なダメージを負い倒れた。

口は災いの元。

奈美も学習したのだし、蒼井もそろそろ憶えるべきだろう。

「たき火で焼き芋か……小学校の時にやった以来かな」

「……………」

「……やってみたいのか？」

コクリ、と紫音は頷いた。

「ん〜でも今は、その辺でたき火とか出来ないしな……」

「あら、それは問題ありませんよ」

どうして、とハルは千景の顔を見つめる。

「美樹に許可を取っておけば、合法的にたき火が出来ますから」

「千景さんナイスです」

「こ、国家権力……」

「大規模なたき火じゃ無ければあ、結構大目に見てくれるわよあ」

「だとすると、近所の公園が手頃ですかね」

「自治会長に公園掃除の名目で話を通しておきましょう」

トントン拍子で話が進んでいく。

普段の依頼以上に、アクティブに動いているのは気のせいだろうか。

「許可が取れました。明日は日曜日ですので、丁度良いですね」

「朝からやればあ、業務に支障も出なそうねえ」

「なら今日中にお芋の調達をしておきますね」

ハピネス年長三人組は、滅茶苦茶ノリノリだった。恐らく紫音以上に楽しみにしているのだろう。

そして、日曜日にハピネス主催の焼き芋が開かれる事となった。

この季節になると、朝は大分冷える。

吐く息がうつすらと白くなる中、ハル達は公園に集合した。

「みんな集まりましたね」

「はい」

元気良く返事をするハピネス一同。

数人の事務方以外は、全員参加していた。

「ではまず、この場所に落ち葉を集めましょう」

「結構ありますね」

公園は、地面が見えないほどの落ち葉が敷き詰められていた。これを掃除するのはなかなか骨だろう。

「ん、てか千景さん、竹箒が見あたらないんですけど」

「持ってきてませんよ」

「へ？ じゃあどうやって落ち葉を集めるんですか？」

「ハル君……こういう時は、裏技も許されるんです」
どんな時なのだろうか。

そんな疑問に答える事無く、千景は懐から扇子を取り出す。

「ふふふう、千景ちゃんの鉄扇術を見るのは久しぶりねえ」

「て、鉄扇!？」

「鉄で出来た扇子?」

その通りだ奈美。

言葉通りだが。

「腕が鈍っていなければ良いのですが……ふっ!」

千景が扇子をふわっと扇ぐと、周囲に風が巻き起こった。

まるで舞うかの様に、千景は鉄扇を扇ぐ。

風は徐々に強さと範囲を増していき、やがて公園中に竜巻が出現した。

「ななな、何だこりゃ？」

「千景さん凄くいい」

落ち葉は風に巻き込まれ、空中へと舞い上がる。

そして、千景が動きを止めると、風は収まり、落ち葉は地面へとゆっくり落ちてくる。

やがて公園内の落ち葉は、三つに分かれて積み重なった。

「ふふう、相変わらず見事ねえ。秘技風殺陣ひぎふうころん」

「ず、随分物騒な名前ですね」

「本来は葉っぱじゃ無くてえ、刃をまき散らして広域の敵を殲滅する技らしいわあ」

「……名前以上に物騒ですね」

「まあ、今はこんな事にしか使えませんがね」

千景は何事も無かったように鉄扇を懐にしまう。

「さて、自治会長との約束だった掃除は終わりました。次のフェイズに移行しましょう」

ハル達は落ち葉の中に、芋を仕込む。

「結構です。では、最終フェイズです」

「火を点ければ良いんですね？」

「ええ。誰かマツチかライターを持っている人はいませんか？」

しかし全員が首を横に振る。

「あれ、確か加藤は煙草吸わなかったっけ？」

「実はこの間から禁煙をしまして」

是非頑張って欲しい。

「ローズは何か火が着く物持ってないか？」

「うんそうねえ、チーフなら持ち歩いてるけどお」

三十八口径の危険物など、絶対に使わないでください。

「柚子はどうだ？」

「爆発性の薬品なら携帯してますけど……」

うん、それも絶対に止めてください。

と言いますか、職質されたらやばい人ばかり揃ってますよね。

「ん〜なんなら事務所までひとつ走り行ってきましようか？」

「それには及びません。紫音、頼みます」

「……焼き芋のためだ、やむを得まい」

不純な動機を口にしながら、紫音は懐からお札を取り出す。

「……南方の守護者よ……我が声に応えよ………火気！」

瞬間、ボツと札の先端に火が産まれた。

それを積み上げられた落ち葉に着火させる。

「ふむ、これで良いだろう」

「紫音よ、今のは術なのか？」

「うむ。自然界の精霊から力を借りたのだ。今回は火の精だな」

まさか火の精霊も、焼き芋の為に呼ばれるとは思わなかっただろう。

何はともあれ、舞台は全て整った。

立ち上る煙に、芋が焼ける良い香りが混じり、ハル達の食欲を刺

激する。

やがて程良く焼けた芋が、一同の手に渡る。

「それでは」

「……いったきま〜す」

初冬の青空に、ハピネスの元気な声が響き渡った。

昔ながらの手法で焼かれた芋は絶品。

あつという間に平らげて、次の落ち葉で再び芋を焼く。

寒空の中だが、身体も心もポツカポカだった。

そして、最後の落ち葉に火が点けられた時だった。

「ぐ、ぐう、ここまでか………がああ、ごおお、ひいいい」
倒れた蒼井に、容赦なく栗は襲い掛かる。

「もう止める。蒼井のライフはもうとつくにゼロだ！」

「あ、甘く見るな。この蒼井賢、たかが栗ごときに敗北など……ぐわああああ！！」

本当に口は災いの元だ。

調子に乗って立ち上がるうとしたために、蒼井はマシンガンの様な一斉射をその身に受けた。

今度こそ、完璧に、蒼井賢は大の字に倒れた。

「倒れるときは仰向けに……ドクターも男の意地を見せましたね」

「んな呑気な事言ってる場合じゃないでしょ！」

蒼井を満足行くまでうち倒した栗は、周囲にいる全員に攻撃を仕掛けてきた。

全方位に栗が弾け飛ぶ。

「うわあああ！！！！」

襲い掛かる栗に、右往左往する所員達。

そんな中、

「……ふっ！！」

千景が鉄扇で栗を弾き飛ばし、

「ていやあ！！」

ローズがサバイバルナイフの柄で栗を防ぎ、

「はあ！！」

奈美に至っては拳で熱された栗を殴り飛ばし、

「守護障壁展開！！」

紫音はチートな術を使って完全防御をしていた。

ハル達は匍匐前進をしながら、四人の後ろに逃げ込む。

まるで戦場の最前線さながらの防衛戦は、栗の球切れを持って終わりを告げるのだった。

「失神四名、軽傷六名、焼き栗二百七十五個。これが貴方の行動の結果です」

「あれ、二十五個どっか行っちゃいましたね？」

「反省しろ！！」

ハル達は焼き栗を食べながら、一斉に奈美へ突っ込んだ。

こうして、ハピネス主催の焼き芋は、多大な犠牲を払って終了した。

「なあハルよ、私は今、とても楽しいよ」

「そんなに芋美味しかったか？」

「……それもあるが、こうして皆で騒ぐのが、とても楽しいのだ。おかしいのだろうか」

「いや……………それで良いよ」

ハルは優しく微笑むと、紫音の頭をポンポンと叩くのだった。

小話〈焼き芋をしよう〉（後書き）

はい、そんな訳で一つ前の季節、秋のお話でした。

実は夏に執筆して以来、何故か放置されておりまして。

この機会に投稿させて頂きました。

焼き芋、美味しいですよ。

。味覚の秋は増量の秋でもあるので、あまり食べられません（苦笑）

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

無くし物は何ですか？（前書き）

ハピネスを訪れた秋乃。

どうもハルではなく、何やら別の用事があるようだが……。

無くし物は何ですか？

とある土曜日。

ハピネス事務所に、珍しい来客があった。

「ごめん下さい」

「いらっしやいませ。便利屋ハピネスによっこそ……って、あら、貴方は」

来客に対応した鈴木は、その姿を見て驚いた。

「こんにちは。御堂ハルの妹の、御堂秋乃と申します」

「確か、ドクターの発明披露の時にいらっしやってましたね」

秋乃はこくりと頷く。

「生憎、ハルさんは来ていませんが……」

「問題ありません。今日は、依頼をさせて頂きに参りましたので」

「……畏まりました。ではお客様、本日はどの様なご依頼を？」

業務モードに頭を切り換え、鈴木は事務的に対応する。

「実は、捜し物を手伝って欲しいのです」

「捜し物……詳細をお願いできますか？」

秋乃は頷き、状況を説明する。

「昨日の夕方、指輪を紛失しました。チェーンを通したネックレスみたいな物です」

「指輪……昨日の夕方ですね」

「普段は身につけて居ますが、体育の授業で着替えの際に外し、着替えと一緒に教室の机の上に置いてありました。その後授業を終えて教室に戻ると、無くなっていました」

「……盗難の可能性は？」

「有り得ます。教室は施錠されていましたが、窓は開いていたので、ただ」

「ただ？」

「私の教室は校舎の三階、近くに木がないので侵入するのは困難かと」

恐らく依頼する前に、自分で徹底的に調査したのだろう。

それだけ秋乃の状況説明は整然としていた。

「それと、指輪事態は安物で価値がありませんので、わざわざ盗む程の物でもありません」

「成る程……少々お待ち下さい」

鈴木は手早くパソコンを操作し、今の情報を打ち込み、依頼用紙を作成しようとする。

その時だった。

「おや、秋乃殿？」

紫音がひよつこりと事務所に現れた。

「貴方は……確か結城紫音さんでしたか」

「憶えて頂き光栄だ。今日はハルに会いにお出でか？」

「いえ、実は依頼をさせて貰いに……」

鈴木がパソコンを操作する間、秋乃は紫音に事情を簡単に説明する。

「成る程、失せ物探しか」

「ええ、ただ状況が状況だけに難しいとは思いますが……」

「……………その指輪は大切な物なのだな？」

「そうね。価値は無いけど、私にとってはお金に変えられない宝物御守りでもあるし」

秋乃の言葉を聞き、紫音は暫し黙り込む。

そして、

「ならばその依頼、私が受けよう」

キツパリと言い放った。

「え、でも……」

「失せ物探しならば、多少心得がある。何より、ハルの妹殿の頼み

を無下には出来まい」

チラリと視線を鈴木に向けて、

「鈴木殿、構わないかな？」

確認を取る。

「正直助かります。今は依頼を捌ききれないのが現状ですから」

「決まりだな。後は依頼主の意向だけだが」

紫音は秋乃を真っ直ぐ見つめる。

暫し視線を交わしあって、

「……お願いします」

秋乃は静かに頭を下げた。

依頼が正式に受諾されると、二人は応接用のソファーに移動する。

「それで、どうやって探すの？」

「まずはその失せ物の、大まかな現在地を探すとしよう」

そう言うと、紫音は世界地図を机に広げる。

そして、ポーチから先端に丸い重りの付いた十センチ程の紐を取り出した。

「えっと、それは？」

「秋乃殿はダウジングと言うものを知っているか？」

「隠れた物を、棒や振り子で探す手法だと認識してますけど」

「流石博識だな」

紫音は広げた地図の上で紐を垂らす。

ゆっくりと動かしていくと、ある場所で重りが不意にグルグルと回り始めた。

「動いた」

「どうやら指輪は国内にあるようだ」

世界地図をしまつと、今度は日本地図を取りだし、同じ動作を繰り返す。

こうして徐々に指輪の所在地を絞り込んでいく。

そして、

「……指輪は、白百合女子高校の敷地内にある」

最終的にそこまで絞り込む事が出来た。

あっという間にそこまで突き止めた紫音に、秋乃はただ驚きの視線を送るだけだ。

「では次に移ろう」

ポーチから、今度はトランプのような紙の束を取り出す。

「それはカード？」

「占いよりの護符だ。西洋魔術で言うところの、タロットに類する
これまた慣れた手つきで、机の上に護符を並べていく。

砂時計の様な形に並べられた護符。

「秋乃殿。その指輪のことを強く想いながら、真ん中にある三枚の護符を捲ってくれ」

「ええ」

秋乃は紫音の指示通り、指輪を思い浮かべながら護符を捲る。
何やら文字が書かれているが、秋乃には解読出来ない。

だが紫音には理解出来るらしく、ふむふむと頷く。

「……どうやら、指輪は屋外にあるらしい。それも、高い場所だな
「どうしてそんな所に……」

「秋乃殿の一番手前に並んだ護符から、一枚選んで捲って見て欲しい」

再び護符を捲る。

「……遊び、悪戯……と出ているな」

「盗まれたと言うことかしら？ でも施錠はしてあったし、三階の教室に侵入するなんて」

「……最後に、この中から一枚、好きな護符を選んでくれ」
「どれでも良いのね。ならこれを」

秋乃は一枚護符を選び、くるっと捲る。

それを見た瞬間、紫音は納得したように笑みを浮かべた。
「なるほどな。これで全ての謎が解けた」

「本当に!？」

「ああ。まず安心して欲しいのは、秋乃殿の身近に、と言うよりも犯人は人ではない」

「じゃ、じゃあ……」

「人では無い存在が、三階の教室より遊びや悪戯目的で指輪を持ち去り、野外の高い場所に移した。そこから導き出せる答えは」

「……………そう言うことね」

冷静に情報を整理して、秋乃もようやく紫音が言わんとしている事が分かった。

「私馬鹿だわ。ちよつと考えれば直ぐ分かる事なのに」

「それだけ大事な物だと言うことだろう」

表には出さなかったが、秋乃は相当焦っていたらしい。

「だが、ここまで分かった以上、後は簡単だな」

「ええ。直ぐにでも取り戻してくるわ」

「折角だ。私も付き合おうとしよう」

「良いの？」

「依頼は失せ物を発見すること。そこまでは、しっかりと責任を持たせて貰う」

小さく微笑む紫音に、秋乃もつられて笑う。

二人は早速、白百合女子高校へと指輪奪還へ向かうのだった。

数時間後。

「ただいま戻った」

紫音は事務所に帰還した。

丁度依頼を終えてきたハル達いつものメンバーが出迎える。

「お帰り。秋乃の依頼を受けてくれたんだって？」

「鈴木殿から聞いたか。まあ私から受けさせてくれと頼んだのだがな」

「何にせよ、妹が世話になったな。ありがとう」

「……礼は秋乃から貰っているが……どういたしまして」

苦笑を浮かべながら、礼を受け取る紫音。

そんなやり取りをしていると、

「くんくん、ねえ紫音。何か良い匂いがするんだけど」

奈美が鼻を尖らせて言う。

「ん、ああ。焼き鳥を貰ったんだ。良かったら皆で食べて欲しい」

「焼き鳥!? 私大好物なの」

紫音が袋からパック詰めされた焼き鳥を机の上に置くと、奈美は迷わず口に放り込む。

「もぐもぐ、うん、美味しい」

「お前な……少しは遠慮しろよ」

「気にするな。元手は掛かっていないから」

ん、とハルは首を傾げる。

「それで紫音。依頼の報告をお願いできますか？」

「分かった」

紫音は簡単に報告を行う。

「つまり、犯人はカラスだったんだな？」

「ああ。机の上に置いてあった秋乃の指輪。その光につられ、奪い

去ったのだろう」

「もぐもぐ、カラスってそんな事するの？」

「そうねえ。光を怖がるけどお、集める習性みたいな物があるしい」

ローズの言葉に、他の面々も焼き鳥を頬張りながら頷く。

「ダウジングで敷地内を探索し、カラスの巣から指輪を回収出来た」

「ご苦労でした」

「怪我とかしてませんか？」

心配そうな柚子の問いかけに、紫音は問題ないと答える。

「よく回収出来たな。カラスって結構厄介なのに」

「だな。吾輩も良く集団で襲われて、ナパームを使ってやっと互角に戦える程だ」

もう言葉にならない。

飲み込んでしまったものは、元には戻らない。

ハル達はその場で意味不明の挙動を繰り返すだけ。

「……紫音、からかうのはこれ位にしておきなさい」

「やはり千景には分かるのか？」

「舌が肥えている訳ではありませんが、一度食べたものの味くらいは分かります。これは、芍薬商店街の焼鳥屋さんの味です」

「ふふ、大正解だ」

悪戯が成功した紫音は、年相応の無邪気な笑みを浮かべた。

「恐らく、秋乃さんの入れ知恵では？」

「ほう、何故そう思う？」

「貴方が殿を付けないと言うことは、友達になつたのでしよう。そして、こんな事を貴方が思いつくとも思えませんので」

「それも大正解だ。秋乃からはハルと奈美を騙してやれと言われたが、折角だからみんな一緒にな」

嬉しそうに話す紫音を見ると、ハル達は怒るに怒れなかった。

紫音くらしいの子供なら、悪戯くらい当然。

今まで見せなかつた姿に、怒りよりも微笑まじさが勝った。

その頃秋乃は、取り戻した指輪を眺めていた。

「……紫音ちゃんには感謝しなくちゃね」

協力者であり、友人となった少女に感謝をする。

この指輪だけは、ハルに知られずに取り戻したかった。

子供の頃、ハルから誕生日プレゼントに貰った、安物の指輪。

だがそれは、今も御守りとして大切な宝物となっていた。

「本当に欲しい指輪は貰えないから、絶対にこれだけは無くさない」
ギョツと指輪を握りしめる。

そうするだけで、不思議と気持ちが落ち着く。

「……さて、明日はきつと奈美がカラス肉の焼き鳥を持ってくる筈。どう切り返そうかな」

真っ直ぐな友人の顔を思い浮かべ、秋乃は微笑む。

兄から貰った大切な絆は、無事妹の手に戻ったのだった。

無くし物は何ですか？（後書き）

紫音と秋乃という、珍しい組み合わせでした。

ハル奈美ペアと違って、何とも言えぬ安定感がありますね。

カラスは雑食なので美味しく無いとは思いますが……もし大好物だという方が居たら申し訳ありません。

この小説ですが、年内を目処に完結させたいと考えています。最終目標が無いため、区切りをつけないとズルズル行ってしまいうなので。

完結まで、どうぞお付き合います。

秋はとうに過ぎ去って（前書き）

ハピネスに訪れた一人の来客。
その人物が告げた依頼とは……。

秋はとうに過ぎ去って

寒さが厳しくなってきたある日、事務所に珍しい来客があった。

「ほっほっほ、久しいのう」

「ええ、ご無沙汰しております。会長」

「……………ねえハル、誰だっけ？」

「気持ちは分かるが口には出すなよ。ほら、芍薬商店街会長の」

「ああ、格さん！」

「おいしい。」

「そっちは副会長だ。」

「……………うちの子が無礼を」

「構わん構わん。お嬢さん、儂の名前は水戸家光じゃよ」

「みっちゃんの方だったのね」

「……………うちの阿呆がとんだご無礼を」

「ハピネス一同は揃って頭を下げた。」

「憶えて貰ってるだけありがたいのう。因みに格さんは別の仕事があつて今回はおらんよ」

「それで、わざわざご足労頂いたと言うことは、何かの依頼ですか？」

「うむ……………」

「真剣な表情に切り替わったみっちゃん。

「流石の貫禄で、ハル達の空気も一気に引き締まる。」

「実はな、お前さん達に出て欲しい大会があるんじゃないよ」

「大会……………今度はサッカーですかね」

「ラグビーかもよお」

「ラクロスとか」

「ゲートボールなら少し嗜んでいるが」

「王道ならバスケットだろう。因みに吾輩は全く出来ないがな」

好き勝手言うメンバーに、

「期待している所悪いが、スポーツでは無いぞよ」

みっちゃんは少し申し訳なさそうに告げた。

「となると、文化系ですか？」

「むう、分類するのが難しいが、どちらかと言えば身体を使う事になるのう」

まるでナゾナゾを出されたように、ハル達はあれこれ考える。

「それで、正解は？」

「うむ、実はは、お願いしたいのは、大食い大会への出場なんじゃ……この時季にですか？」

外は寒々とした曇り空、今夜あたり雪が降るかも知れない。

「そうよねえ、大食い大会つてえ、大体味覚の秋にやるものだし」「わ、儂の心の中じゃ今は秋なんじゃよ」

紫音が無言で窓に歩み寄り、がらりと窓を開ける。

ヒュウウウウウウ

暖房が効いた室内に、凍てつく空気が流れ込んできた。

「ぬおおおおお！！」

全員が身を縮こまらせ、慌てて暖房の前に移動する。

秋と言った手前、みっちゃんは応接ソファから動かないが、
「……………冬、じゃな」

真つ青な顔でポツリと呟いた。

「結局、みっちゃんが開催するのを忘れてたのね」

「べ、別に忘れてた訳じゃないもん。ただ秋はイベントが多いから、みんな大変だろうと思って」

何故ツンデレ？

「いや、孫が何か困ったときは、こう言えば大抵好意的に解釈されると教えてくれてのう」

「……ケースバイケースですよ、それ」

「人も選ぶしねえ」

「爺のツンデレなど、誰が喜……」

千景の手刀により蒼井はその場に倒れた。

「まあこの季節に開催する事情は分かりました。でも、大会に参加するだけではありませんよね？」

「ほっほっほ、流石に鋭いのう。お主達には、大会で優勝して貰いたいんじゃない」

「何故ですか？」

「実は……ここ数年、他の商店街から刺客が送り込まれてのう」

忌々しげに呟くみっちゃんを見て、ハル達は瞬時に悟った。

またいつものあれだと。

「優勝商品は、芍薬商店街の飲食店で使える十万円分の商品券なんじゃが、それをかつ攫われておるんじゃない。このままでは面子が丸潰れじゃよ」

「商品が随分豪華ですね」

「地域振興の為の企画じゃからな。食事のついでに買い物と、期待してのことじゃが」

他の商店街の刺客が、そんな手に乗るわけもなく。

「純粹に損失だけが重なっていると」

「そうなんじゃ。このままでは企画自体が潰れてしまう。そこで、お主達の力を借りたい」

一同を見据え、深々と頭を下げるみっちゃん。

断る理由など何も無い。

何より、この依頼にうってつけの人材がいるのだから。

「ここは」

「勿論」

「誰が出るかはあ」

「決まっているな」

「ハピネスで一番の大食いと言えば」

全員の視線は、ポカンとした表情を浮かべる奈美に集中した。

「へっ、私ですか？」

「あれ、乗り気じゃ無いのか？」

大食い大会と言われれば、真っ先に参加したがると思っていたが。

「えっとね、結局何をやる大会なのか分からなくて……」

「……ハル君」

頭痛を堪える千景に促され、ハルが簡単に説明する。

「どれだけ沢山ご飯を食べれるか競うんだ。勿論食べ放題で、優勝すればお食事券が貰える」

「やるわ!!」

理解してからは早かった。

瞳の奥に厚く燃える炎を宿し、奈美は力強く宣言する。

「……だ、大丈夫なのかのう」

「少なくとも、私達が出場するよりは、余程確実に優勝を狙えますよ」

一斉に頷く一同。

「よし燃えてきたわよ」。ハル、早速特訓よ」

「特訓？」

「今日の夕ご飯、いつもの十倍用意して！」

「……大丈夫そうじゃな」

かくして、奈美は芍薬商店街主催の大食い大会へ、出場する事となった。

そんなこんなで、大食い大会当日。

大会の会場では、まさに死闘と呼ぶに相応しい激しい戦いが繰り広げられた。

「両手に持ったフォークで、スパゲティを二皿同時に食べてるぞっ

「!!」

「あ、あれは……」

「知っているの、千景ちゃん!？」

「古来よりイタリアに伝わる、『パスタ乱れ食い』。まさか使い手が居たなんて」

「たんに両手利きなだけでは？」

「こっちの奴は、ピザを丸ごと飲み込んだぞっ!!」

「あれは……」

「知ってるんですか、千景さん!？」

「古来よりイタリアに伝わる、『ピッツァ躍り食い』。既に途絶えた技術の筈ですが……」

「途絶えたままでいて欲しかった。」

「カレーをご飯ごと口に流し込んでるぞっ!!」

「あれは……」

「知っているのか、千景？」

「古来よりインドに伝わる、『カレーは飲み物』。都市伝説の類と
思っていましたよ」

「それ日本発祥では？」

「豚の丸焼きを、一頭丸々いったぞっ!!」

「あれは……」

「知ってるの、千景ちゃん!？」

「古来より中国に伝わる、『中国四千年って言えば何とでもなる』。
まさかこの目に出来るとは」

「それは禁句ですって。」

「か、かき氷を一切躊躇せず食べ続けてるぞっ!!」

「あれは……」

「知っているのか、女!？」

「古来よりマゾに伝わる、『痛みやがて快感に変わる』。理解できない感覚ですが」

貴方はSですものね。

他の商店街からの刺客、そして奈美。

人類の限界をおおよそ超えた化け物達の戦いは、熾烈を極めた。あまりに馬鹿馬鹿しく、しかし極限まで鍛えられた技の数々に、観客達は呆れと関心が入り交じった（九割が呆れだが）歓声を送る。

「……大食い大会つて、こんな凄いものだったんですね」

「正直甘く見てたわあ。奥が深いわねえ」

「だが、だがあり得ん。明らかに食べてる奴よりも、食べた量の方が体積が大きい」

「脳からの満腹信号を無視するなんて……なんて危険な」

「見事だな。一つの物を極めると言うのは」

奈美の応援に来たハル達も、目の前の光景に完全に圧倒されていた。

制限時間六十分以内に、多く食べた人が優勝。

シンプル故に、純粹な大食い力が試される。

そんなガチンコバトルを制したのは、

「もぐもぐもぐもぐ、美味しいな」

ひたすら幸せそうな顔をして食べ続けた、我らが奈美だった。

優勝トロフィーと、食事券を誇らしげに掲げる奈美。

「俺は、正直今日ほどあいつが恐ろしいと思ったことはありません」

「多分だけお、食べた量はトン軽く超えるわよお」

「み、見てるだけでこちらが胸やけしそうだぞ」

「あり得ん………何処にあれだけの質量を溜めると言うのだ………」

「胃下垂とか、そんなちやちな物じゃ断じてないです。もっと恐ろ

しいもの……」

「もう私達には、奈美を止めることは出来ません」

諦め、恐怖、畏怖、絶望。

様々な感情が入り交じった視線で、ハル達は奈美を見つめるしか出来なかったのだった。

「ねえねえハル」

「何だ？」

「折角お食事券貰ったんだし、一緒に食事に行かない？」

「こ、これからか？」

「勿論よ」

「お前、あれだけ食べてまだ食べるのかよ！」

「ほら、昔から言っじゃない」

「何て？」

「美味しい物は別腹って」

ウインクする奈美は、本当に幸せそうだった。

因みに、来年以降大食い大会が開かれなかった事は、言うまでもない。

秋はとうに過ぎ去って（後書き）

奈美の胃袋は宇宙……と言つと某方と被つてしまいますが、底なしです。

夕食だけとは言え、食事の面倒を見ているハルの財政が心配なところですが。

後半は、大分多くのパロディを入れてみました。

全部分かった方は……一緒に酒でも飲みながら語り合いたいです。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話へ授業参観に行く《（前書き）

千景からハルへの頼み事。

それは紫音の授業参観に出て欲しいというもので……。

小話〈授業参観に行く〉

「参観日、ですか？」

ハルは今し方言われた事を聞き返す。

「ええ。明日は紫音の授業参観日なのですが、大切な会議が入っています」

「それで俺に？」

「正直、適任者が他に居ないので」

千景の言葉はもつともだ。

ハピネスの面々は一風変わっている。

中学校の授業参観に出席して、違和感のない人物というと大分限られてしまう。

事務の人は比較的まともだが、仕事もあるため都合が付かないのだろう。

「俺は構いませんけど……」

「何か問題が？」

「いえ、紫音の両親は来ないのかなって思っています」

ハルの言葉に、千景は僅かに表情を曇らせる。

「ひよっとして、聞いちゃ不味い事でしたか？」

「……私の口から話すことではありませんので。聞くならば、本人に하십시오」

やんわりとだが、それ以上の追求を拒否する言葉。

それを察し、ハルは軽く頷くと、

「分かりました。授業参観に行くのは問題ありませんよ」

話題を切り替え、千景の頼みを了承することにした。

そして翌日。

ハルは紫音の通う中学校へとやってきた。

授業参観と言うこともあり、親御さん達の姿が大勢見える。

それを見て、ハルはスーツ姿で行くように言われた理由を納得する。

「……何処のパーティーに行くんだよ」

平日と言うことで母親が多いが、その殆どが豪華に着飾った服を着ていた。

化粧も気合いが入っており、何しに来たのか聞きたくなる程だ。冬麻から貰ったイタリア製のスーツも、正直霞むほど。

ハルは苦笑いを浮かべながら、正門をくぐるうとして、

「受付？」

正門脇に設置してある机と、待機している教員の姿に気づいた。首を傾げながら、ハルはその場所へ近づく。

「あの〜、ここで何かやるんですか？」

「はい。防犯上の理由で、授業参観に参加される父兄の方には、参加状のご呈示をお願いしています」

物騒な世の中になったものだ。

確かに、誰でも彼でも学校の中に入れるというのは、不用心だが。「参加状……これかな？」

「ありがとうございます。どうぞ中にお進み下さい」

千景から渡されていた紙を渡すと、直ぐさま許可が出た。

本格的なチェックではなく、明らかな不審者対策という事なのだろう。

「最近の学校は大変だな」

ハルはご苦労様です、と呟くと紫音の教室へと向かった。

授業参観というのは、学生にとっても大きなイベントだ。

成績表やテスト以外で、自分の学校生活を親に見られる機会。

緊張する子や、興奮する子、関係ないねと強がる子など様々だ。

紫音はと言うと、

「随分落ち着いてるね、紫音ちゃん」

友人が驚くほど普段通りだった。

「ふむ、確かに周りの皆は少々浮ついてるな。それ程授業参観と
いうのは大事なのか？」

「だって、授業を親に見られるんだよ。緊張するよ」

「霞は母親が来るのだったな」

「うん。紫音ちゃんは……」

言いかけて、霞と呼ばれた友人の女性とは言葉を止める。

親元を離れて親戚の家に住んでいる、と以前話をしてくれた。

だとしたら、この話題は紫音にとって触れて欲しくないに違いない。
い。

「ふふ、気を遣わせてしまったな」

そんな友人の心を察し、紫音は優しく笑いかける。

「親は来ないが、代わりに親戚の者が来てくれるよ」

「そうなんだ」

二人が雑談をしている間に、教室の後ろに保護者が続々と現れた。

「まーくん、お母さん来たわよ」

「止めるよ母さん、みんな笑ってるだろ」

「ゆみちゃん、くれぐれも授業中寝たりしないでね」

「……………ぐー」

「おう、健児。バツチリ良いとこ見せるよ」

「……………どうして社会の時間が参観日なんだよ」

「うちのとしちゃんが、窓際なんて。紫外線で健康を害したらどう
責任を取るつもりなのかしら！」

「ママ、それモンスターペアレントって言うんだよ」

「……………賑やかだな」

「ホントだね。あ、ママだ」

霞は母親の姿を見かけると、軽く手を振って合図する。
紫音が視線を追うと、上品そうな女性が微笑みながら手を振り返している。

「あのご婦人が、霞の母君か」

「うん、とつても美人で、優しく、料理が上手で……」

「ふふ、自慢の母君なのだな」

満面の笑みで霞は頷いた。

騒がしくも和やかな空気が教室に満ちる中、

「……………あれは」

紫音は思いがけない人物を目にした。

教室に入ってきたその姿は、並ぶ親たちの中で一際目立つ。

若いこともそうだが、女性的な容姿とスーツ姿のギャップがその要因だろう。

気が付けば紫音だけでなく、クラス中がハルに視線を向けていた。

「誰だろあの人。随分若いし……………なんか可愛いね」

「……………本人が聞けば、さぞ悲しむだろう」

紫音は苦笑しながら、視線を浴びて居心地悪そうな、その人物に声を掛けた。

「ハル！」

教室に入った時から、何とも言えぬ視線を受けていた。

保護者と言うには若すぎると自覚しているので、多少は覚悟していたのだが。

（……………何でここまで見られるんだ）

白百合女子高校潜入の時と違い、一切負い目はない。

無いのだが、ここまでじろじろ見られると流石に居心地が悪い。

（参ったな……………一旦外に出た方が良かったか）

そんなことを考えていると、

「ハル！」

不意に聞き覚えのある声が掛けられた。

視線を向けると、そこには友人と並ぶ紫音の姿があった。

「あ、紫音。良かった、やっぱりここで間違い無かった」

ひよっとしたら来る場所を間違えたかと、本気で思い始めていた。

「お前が来たと言っことは……」

「うん、千景さんは急用が入ったらしくて、俺が代理だよ」

「そうか……」

ガツカリさせてしまっただろうか。

ハルは不安に思うが、

「来てくれて嬉しいよ、ハル」

笑顔で歓迎してくれた紫音に、ハルは少し安堵した。

「ねえねえ紫音ちゃん、あの人紫音ちゃんの親戚の人？」

「ん、……私の兄のような存在だよ」

嘘は言っていない。

本当の事を言っつて、混乱させる事も無い。

「えっ、じゃあ男の人なの？」

「そうだが」

「うわ〜信じられない。あんなに可愛いのに」

驚く霞の同調するように、クラス中がうんうんと頷く。

「……………」

横目で見ても、ハルが凹んでいるのが分かる。

「正真正銘の男だ。頼りがいがあり、優しく勇気がある男だよ」

「えへへ、あのお兄さんは紫音ちゃんの自慢のお兄さんなんだね」

先程言ったことをそのまま返されてしまった。

紫音は少し言葉を止め、小さく頷いた。

教師が教室に入り、チャイムが鳴ると流石に騒がしきは収まった。妙な緊張感が漂う空気の中、授業自体は滞りなく進む。

張り切りすぎて失敗する子等も居たが、それはそれで微笑ましい光景。

ハルが見守る中、紫音も積極的に手を挙げて授業に取り組む。一時間の授業は、あっという間に終わった。

この時間が本日最後の授業。

保護者が見守る中ホームルームが終わると、

「え〜この後保護者会がありますので、お時間のある方は是非ご参加下さい」

担任の先生が保護者に呼びかけた。

「ハルはどうするのだ？」

「俺の役目は授業参観代理。流石に保護者会は遠慮するよ」

「ふむ、なら一緒に帰るか」

紫音の提案に頷き、ハルは紫音と一緒に学校を後にする。

「しかし、参観日というのは面白いものだな」

「面白い？」

「家族の前では、友人達の何時もと違う姿が見れる。それが私には面白い」

「……悪かったな」

「何がだ？」

「家族が、千景さんが来れなくて、俺が代理で来ちゃって」

「……どうやら、私が勝手に思っただけのようだな」

寂しそくに呟く紫音に、ハルは首を傾げる。

「私はもう、ハルや奈美、ハピネスのみんなを家族だと思っていたのだが……」

「……悪かった、妹よ」

ハルはポンと紫音の頭に手を乗せる。

それは、紫音の言葉を肯定するものだった。

「……そうだな、丁度帰り道に美味しい今川焼きが売っているのだ

「が？」

「へいへい、俺の妹分は抜け目が無いね」

二人は微笑みを交わしながら、少し寄り道して事務所へと帰るのだった。

小話へ授業参観に行く (後書き)

本当に才チのない (最近そうですが……) 日常話でした。

授業参観って今もあるんでしょうか。

私が学生の頃は結構頻繁にあった気がしますが、時代も変わってますからね。

ところで、すっかり寒くなりましたね。

作者の所では降雪 + 凍結の最強コンボが猛威を振るっております。思い切り転んで打った肘が痛い痛い……。皆さんもお気を付け下さい。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

師走は何かと物騒です（前書き）

年末と言えば、やはり事件が多くなる時期。
ハピネスの犯罪対策はどうなっているのでしょうか。

師走は何かと物騒です

「あらあ、また強盗があつたのねえ」

「結構近くだな」

「物騒ですね」

ハル達が事務所で見ているのは、ニュース番組。

最新ニュースとして、ハピネスの近所で起きた強盗事件を報じていた。

「やっぱり夜間の時間帯は危ないわねえ」

「ねえハル。泥棒と強盗って何が違うの？」

「んゝ物を奪うつてのは一緒だけど、人に何らかの危害を加えるのが強盗、物を盗むだけなのが泥棒というか窃盗って感じかな」

細かく言えば色々違うのだろうが、簡単な説明ならこれで充分だろう。

「どちらにせよ、人の財産を奪うのは人道に反した行為だな」

「そうねえ」

「うちは平気なのかな？ 防犯システムとか」

「ふふふ、いらぬ心配だ。このビルは吾輩が全面監修した防犯システムを搭載しているのだ！」

かえって心配ですが。

「それって、警報が鳴ったりする奴なの？」

「もっと効果的な装置だ。レーザーと火炎放射器は当然として……」
「いやいやいや。」

「最終兵器として、衛星を利用したサテライトビームも作動させる事が出来るぞ」

「出来るぞ、じゃねえよ。明らかにオーバーキルだろそれ」

強盗どころか、一軍を相手に出来そうな武装だった。

「まあ、ハピネスの防犯については安心して事ねえ」

「でも強盗って、昼間に来ることもあるんですよ？」

奈美が珍しくまともなことを言う。

企業や銀行というのは、夜間のセキュリティはかなり厳重だ。だが、人が出入りする日中は甘め。

結果として、白昼堂々と強盗が起こるケースも多々ある。

「あるとは思わず。ただ、うちに関してはその心配はいらないだろうか？」

何せ、ハピネスには化け物クラスの人が居る。

千景を筆頭に、ローズも屈強な兵士だし、奈美も常人離れしている。

柚子や蒼井も道具を用いれば充分戦える。

「それもそうね」

「さあてえ、そろそろ仕事に戻るとしましよつかねえ」

ローズが席を立ち、依頼掲示板へと向かう。

「俺も依頼を選ぼうかな」

「あ、私も」

「私は部屋で宿題を片づけるとしよう」

「……確か依頼の時間がそろそろでした」

「吾輩は研究を再開するでしょう」

それに続き、一同も各々自分のやるべき事へと戻ろうとする。

その時だった。

「全員動くな！！！！」

事務所のドアが乱暴に開かれ、叫び声を上げながら一人の男が乱入してきた。

全身黒ずくめ。

サングラスとマスク。

手には包丁。

何処からどう見ても、

「強盗だああ!!!」

一同は驚きの声をあげた。

「全員その場から動くな。両手を上に上げろ！」

男は包丁で威嚇しながら、事務所の中へと歩いてくる。

ハル達は事務所の奥に。

鈴木達は男の右側、事務机が並ぶスペースに位置していた。

「ねえねえハル。あれ本物の強盗よね」

「何で嬉しそうなんだよ……」

「だって、私初めて見たんだもん」

「俺だって初めてだよ」

出来れば一生見たくなかったが。

「フラグってあるのねえ」

「噂をすれば、と古来より言われている位だからな」
全くです。

「千景ちゃんはお出かけ中だし」

「これもまた、お約束と言う奴か」

ですよね。

「ごちゃごちゃ喋るな！おい、女。この鞆に有り金全部詰める！」

男は黒いボストンバックを、鈴木に向けて投げつけた。

もうこれ以上はない、強盗っぷりだ。

「凄い凄い、ドラマで見たとおり」

「頼むから少し落ち着いてくれ。結構シリアスな場面だぞ」

「そうかな？ だって、千景さんは居ないけど、ローズさん居るし」
言われてみればそうだ。

大将は不在だが、ローズと奈美が居る以上何も問題が無い。

「……じゃあローズ。とつととやっちゃってくれよ」

「つぶつぶ、私が手を出すまでも無いわあ」

「へ？」

「それに強盗の対応は事務の仕事。出しゃばるのは悪いわよお」
「どういうこと、とハルが聞き返す必要は無かった。」

「おい、何してる！ 早く金を……」

「全員戦闘準備」

「「ヤー！」」

まさに一瞬だった。

鈴木の号令に答えたかと思った瞬間、事務員達はそれぞれ得物を取りだし構えた。

拳銃、マシンガン、刀、モーニングスター、更にロケットランチャーを向けるアホも居る。

「……………は？」

「うわあ、格好いい」

戸惑うハルと対照的に、奈美は大喜びだ。

「ななななな、何だお前等……！」

思いつきり動揺する強盗。

気持ちは分かる。

「直ちに武装を解除して投降しなさい。さもなければ……」

チャキリと、鈴木は手に持った拳銃の照準を強盗に定める。

他の事務員達も、同じように何時でも攻撃できる状態に移行した。

方や主目的は料理の包丁一本。

方や殺傷目的の威力抜群な武器の数々。

どちらが有利かなど、語るまでもない。

強盗は戦意を失い、包丁を床に落として抵抗を諦めるのだった。

その様子を見ながら、

「……………どっちが悪者が分からなくなった」

ハルは同情が混じった声を発した。

「え、何言ってるのよ。勿論強盗した方が悪いんじゃないの」
「そりゃそうだけど……」

「行動には覚悟と責任が伴うわぁ。特に悪いことには、ねえ」
ローズがハルを諭すように言う。

「しかし、まさか事務員の方々まで鍛えられているとは思わなかったぞ」

「千景ちゃんの部下ですから。そこそこの錬度はありますよ」

「特に懐刀の鈴木はな。ああ見えてかなりのやり手だぞ」

聞きたくなかった。

常識人だと思っていたのに。

「……この事務所で普通なのは俺だけか……」

「「えっ？」」

一斉に驚きの声が挙がる。

「何だよ」

「あのねハル。一応言っておくけど……」

「「一番普通じゃないのは、貴方だよ」」

便利屋ハピネス。

そこは奇人変人超人が集まる会社。

勿論普通の人もいるが……少なくとも、ハルはそこから除外されていた。

師走は何かと物騒です（後書き）

まあ、あの千景が所長ですから……。

多分事務員の皆さんは、ハルよりも全然戦力になると思います。

師走に事件が多く、特に強盗系の事件が多発するのは本当みたいですよ。

皆様も、どうか気を付けて下さい。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

聖夜の出来事（前書き）

サンタクロースは実在する！？
奈美に告げられた衝撃的な事実。
そして事態は急展開を見せる。

聖夜の出来事

サンタクロース。

聖夜に突如として現れ、独自にセレクトしたよい子にプレゼントを配る、謎の人物。

赤を基調とした服に、白い髭。

トナカイに引かせたそりで、空を自由自在に駆ける。

ほとんど伝説となっている人物。

それ故、殆どの人は彼を空想上の存在だと信じている。

信じているのは、まだ純粹な子供くらいだろう。

だが、疑っているのもまた子供だけだ。

大人達は、サンタが実在する事を知っているのだから。

さて、今日は十二月二十五日。

つまりはクリスマスだ。

恋人同士や家族で楽しく過ごす、喜ばしい日。

が、その一方で、一年で一番熱く燃え上がる日でもあるのだ。

ハピネス事務所。

クリスマスの夜だと言うのに、主要メンバーが集結していた。

その目的は、

「今年こそ、サンタクロースと決着を着けます」

と言う事だ。

「全員持ち場にきてください。剛彦、他の動きはどうなっていますか？」

「既に主要各国は動き出してるわねえ。米国はステルス小隊で索敵

を始めてるわよお」

「欧州の方も、衛星経由で探知を開始している模様です」

「……ドクター、こちらは？」

「ふん、準備完了だ。三十分後に発進出来るぞ」

「結構です。盗聴とハッキングを怠りなく、レーダーの監視も続けなさい」

「了解!!」

まるで戦争中の軍司令部みたいな空気が、事務所中に広がっていた。

そんな中、事態に着いていけない奈美が、ポカンとした表情で立ち尽くす。

「ん、どうかしたか？」

手が空いたハルが、奈美に声を掛ける。

「あのさ……みんな何をやってるのかな？」

「見て分かるだろ。サンタクロースの搜索だよ」

ハルは何を今更、と言った顔で平然と答える。

「本気で言ってるの？」

「何がだ？」

「だから、サンタクロースって想像上の存在で、実在しないでしょ」

叫ぶ奈美に、事務所中に視線が一斉に集まる。

「……お前、知らなかったのか？」

「何よ」

「サンタクロースは実在するぞ」

「……はあ？」

素っ頓狂な声を挙げる奈美。

おかしい。

どう考えてもおかしい。

サンタが居ないなんて、今時小学生でも知っている。

なのに……。

「だって……みんなサンタは居ないって……」

「うふふう、駄目よハルちゃん」

シヨックを受けた奈美の肩に手を置いて、ローズは窘めるように言う。

「奈美ちゃんはまだ高校生よお。知らなくても仕方ないじゃない」

「あ、そっか。ごめん奈美。秋乃は知ってるからつい……」

「何なのよ……」

申し訳なさそうに頭を下げるハルに、奈美はすっかり混乱して涙目になる。

「ん〜話しちゃっても良いかしらねえ」

「……構わないでしょう」

「なら奈美ちゃん。ちよっとお話ししましょうかあ」

ローズは微笑みを浮かべながら、奈美をソファアへと誘導した。

「実はねえ、サンタクローズの存在はあ、昔から確認されてるのよ

お

「嘘……」

「残念ながら本当よお。そしてえ、それは大人だけの秘密にされてるのよ」

「どうしてですか？」

奈美の言葉にローズは一瞬躊躇したが、

「サンタクローズの裏の顔があ、子供達にとって残酷なものだからよお」

覚悟を決めた顔で答えた。

「裏の……顔？」

「サンタはよい子にプレゼントを配る。じゃあ、悪い子にはあ？」

「それは……プレゼントを配らない？」

「違うわあ。悪い子にはあ………罰が与えられるのよ」

ローズの顔は、苦々しく歪んだ。

「この世は等価交換の原則で成り立っているわあ。何かを得るためにはあ、それと同等の何かを捨てなければならぬのお」

「それが……何の関係があるんですか」

「よい子に配られるプレゼント……それをサンタはどうやって調達してると思う？」

「え……」

ローズの問いかけに、奈美は答えられない。

サンタが存在しないと思っていたのだから、そんなこと考えもしなかった。

「サンタは人外の存在、プレゼントは不思議な力で作られているう」

「……………」

「でも等価交換は人外と言えども存在するう。ならその不思議な力の代償はあ……………」

「まさか……………」

「悪い子のお……………魂、つまりは命よあ」

ローズの言葉に、今度こそ奈美は完全に絶句した。

「それが判明したのはあ、もう百年以上前のことお。それ以来、大人は子供達に事実を知られることなく、サンタクロースと戦い続けてきたのお」

「そんな……………」

「去年はあ、世界中で千を超える子供の命が奪われたわあ」

「で、でも、それがサンタの仕業だって分からないじゃ無いですか！」

「……………サンタに魂を奪われた子供にはあ、共通してある刻印が胸に刻まれるのお」

「刻印？」

「アザだと思ってくれて良いわあ」

「どんな、アザだったんですか？」

「英語で一言だけえ。『メリークリスマス』と刻まれていたわあ」

二人の間に、無言の時間が流れた。

「だから私達大人は戦うのお。これ以上、悲しい犠牲を増やさない為にもお」

「どうして……どうして子供には本当の事を言わないんですか!?!?」
「知らない幸せもあるわお。貴方、この話を子供に聞かせられるう?」

「そ、それは……そうですけど」

「この戦いはあ、大人の戦いよお。本来なら奈美ちゃんは不参加の予定だったんだけどお」

ローズは苦笑を浮かべて奈美を見る。

元々、今日奈美は事務所に呼ばれていなかった。

ただ、ハルに着いてきただけだ。

ハルが止めなかったのは、さつきも言っていたとおり奈美が子供だと認識していなかったから。

「お話は終わりよお。さあ、奈美ちゃんは家に帰りなさい」

「……嫌です」

優しく諭すローズに、奈美はキツパリ拒絶した。

「ここまで聞かされて、はいそうですかって帰れません。私も戦います!」

「……良いのお?」

「私だって、ハピネスの一員です。仲間はずれは嫌ですから」

ローズはチラリと千景に視線を送る。

「構わないでしょう。知った以上、止める理由がありませんので」

「そうねえ。じゃあ、協力して貰うわね」

「はいっ!」

元気良く返事をして、奈美もサンタクローズとの戦いに加わるのだった。

「所長、日本海に配備されているイージス艦がサンタを補則」

「データをリアルタイムでとり続けなさい。政府の対応は？」

「航空自衛隊が迎撃に……………駄目です、全て撃墜されました！！」

鈴木の報告に、事務所がざわめく。

「サンタは不規則に軌道を変えて移動中。目的地は予測できません
！」

「攪乱のつもりですか……………」

「欧州各国はあ、既に犠牲が出てるわねえ。日本を回ってえ、最後にアメリカかしらあ」

「航空自衛隊より第二波、第三波が出撃しました！」

「無駄だ。奴の前では機動力、火力共に玩具同然。時間稼ぎにもならん」

蒼井の言葉通り、数分後には撃墜の報告が入った。

「そんなに……………そんなにサンタは強い……………」

「あれは……………ある種の神と言える存在だからな」

呆然と呟く奈美に答えたのは、紫音だった。

「千景よ、私の準備は出来て居るぞ」

「吾輩の方も問題ない」

「……………では、出撃するとうしましょう。鈴木、後は頼みます」

「了解しました。どうか、ご武運を」

事務所員全員に敬礼で送られ、千景は事務所を後にした。

ローズ、紫音、蒼井達もそれに続く。

「俺も行きます。役に立てるとは思えませんが、上手く行けばモノ
マネ出来るかも」

「私も！」

ハルと奈美も、千景達に続く。

一行が向かったのは、一階のガレージの更に下。

今まで隠されていた地下格納庫だった。

そこに、一機の飛行機が出撃の時を待ちわびていた。

「ドクター、行けますね？」

「当然だ。さあ、早く乗り込め」

蒼井は操縦席に入り、飛行機を起動させる。

飛行機は旅客機と言うよりも、輸送機のような構造をしていた。

ハル達は後部のハッチから飛行機に乗り込む。

「では行くぞ。吹き飛ばされないように何かに捕まっている！」

エンジン音が徐々に大きくなり、やがて、

「対サンタクロス専用飛行艇『グツバイメリークリスマス』発進

！……！」

物凄い急加速で、地下の滑走路を抜けて大空へと舞い上がった。

「ドクター、サンタクロースの位置情報を送ります」

「……確認したぞ」

「このままいけば、およそ百二十秒後に接触します」

「おい、貴様等。聞いての通りだ。今の内に覚悟を決めておけよ」

ハル達が居るカーゴに、操縦席の蒼井から声が掛けられる。

「……では、作戦の確認をしておきましょう」

「私達は飛行艇がサンタと併走している間に、サンタのソリに飛び移るわあ」

「その後、白兵戦にてサンタと決着を着けます」

「とんでも無いことをさらりと言ってるのける。」

「だが、今更騒ぐつもりもない。」

「全員が覚悟を決めて、ここに居るのだから。」

「誰かがやられても、落下しても気にしないように。目的はただ一つだけです」

「頷く一同。」

「もはや言葉はいらなかった。」

「……見えたぞ。これよりサンタに接近する。全員衝撃に備えろ！」

蒼井の声が聞こえた瞬間、飛行艇に激しい揺れが訪れた。

「な、何？」

「サンタの迎撃です。ここはドクターの腕を信じるしかありません」
「集中をきらしちゃだめよお。私達の出番はこの後なんだからあ」

激しい揺れと、何かが飛行艇にぶつかる音。

外の様子が分からない為、それは大きな恐怖だ。

それでもハル達は揺るがない。

そして、

「ぐ……よし、併走したぞ。ハッチを開けるから、どうにか飛び移れ！！」

苦しそうな蒼井の声と共に、カーゴのハッチが開かれた。

途端、凄まじい風圧がハル達を襲う。

身動きすらままならない状況の中、

「私から行きます。それではみんな、武運を」

千景が先陣を切って空へと身を投じた。

「次は私が行くわねえ。じゃあみんなあ、また後でねえ」

ローズがそれに続く。

「……紫音、行くぞ」

「ああ、頼む」

身体の小さい紫音には、風圧は天敵。

ハルは紫音を抱き上げると、一緒になって空へと飛び込んだ。

そして、

「……………行くわよ、奈美」

最後に残った奈美も、頬を叩いてから空へと身を躍らせた。

サンタのソリは、ハル達全員が乗っても充分すぎる程大きかった。ソリの後方に降り立ったハル達の視線は、一番前に座る赤い服の男に向けられている。

「……………やれやれ、招かれざる客だな」

男はため息混じりに立ち上がり、ハル達へと向き直った。

赤い服、白い髭、まさしく伝え聞くサンタクロースそのもの。

ただ一つ違うのは、太っているのではなく、ローズ以上に鍛えられた鋼の肉体だった。

「あれが……本物のサンタクロース」

「どう、千景ちゃん」

「……相打ちならば御の字、と言った所でしょうか」

千景にいつもの余裕はなく、頬を伝う汗がサンタの強さを物語る。

「それで、何の用だ？」

「サンタクロース。貴方に、消えて貰います」

「ふん、痴れ者が」

サンタはコキコキと間接を鳴らして、ニヤリと笑う。

その姿からは、子供に夢を配る聖人など微塵も想像できない。ただ一人の、鬼だった。

「……ローズ、援護を。初手で決着を着けます」

「OK」

「……行きます！」

見事な瞬歩で、サンタとの間合いを詰める千景。

同時にローズも走りながら、マシンガンでサンタを牽制する。

サンタの目の前に来た千景は、

「秘技ひぎ朧おぼろ」

まるで消えたかのような速さで、サンタの後ろに回り込む。

そのままサンタの首を鉄扇で落とそうとするのだが、

「温いわー!!」

サンタに腕を掴まれ、

「ぬうん!!!!」

「……無念」

そのままソリの外へと放り投げられてしまった。

米粒のように小さくなる千景を、ハル達は呆然と見つめる。

「筋は悪くないが……儂の相手など百年早かった様だな」

「サンタクロオオオスウウウ。差し違えて、その命を貰うわあああ！……！」

「こわっばがああ。身の程をしれい！」

マシンガンを乱射しながら突進するローズ。

だがサンタは、銃弾を平然と受けながらローズの腹に拳を打ち込む。

そして、うづくまるローズをソリの外へと蹴落とした。

「弱い、弱すぎる。こんな腕で儂に挑もうなど、笑い話にもならん仁王立ちするサンタに、ハル達は言葉を失う。

最強のツートップが、成す統べなく倒れた。

信じられない、信じたくない現実を受け入れられなかったのだ。

「どうする、ハル」

「どのみち逃げ場は無いんだ。だったら、前に進むだけだよ」

「……同感だ」

紫音は札を構えて、サンタと対峙する。

「西方の守護神……激しき浄化の雷にて……我が敵を殲滅しろ！！」

「行くぞおおお！！！」

紫音から発せられた、雷の奔流がサンタを飲み込む。

「効かぬわああ！！！」

「まだまだ！！！」

追撃とばかりに、ハルは瞬歩で間合いを詰めると、

「一緒に落ちろおお！！！」

サンタの腹にしがみついで、そのままソリの外へとダイブしようとする。

だが、

「落ちるのは、お主だけだ」

サンタに軽く振り解かれ、ハルはソリの外へと落下していった。

「そ、そんな……ハル……」

「……奈美よ。後は……頼んだぞ」

「え？」

「中央の守護神よ……我が命を対価に……全てに滅びを！！」

まるで夜の闇のような黒い光が、サンタに向かって放たれる。しかし、サンタは軽くそれを避ける。

「ま、まだだ！」

光を横に薙ぎ払う紫音。

サンタはそれも回避するが、光にかすったソリは一瞬で消滅した。「滅びの術か。若いのに大したものだが……」

初めてサンタが賞賛の言葉を口にする。

「だが、当たらなければ無駄だ」

「……ここまでか」

奈美の隣に居た紫音は、力尽きたかの様にうつ伏せに倒れた。

そのまま紫音は風圧に逆らえずに、ソリの遙か後方へと吹き飛ばされた。

「命を削る禁断の術……だが無駄死にだったな」

「みんな……」

「さて、残るはお前だけだ」

「……みんな、私に力を貸して」

奈美の呟きに答えるように、うつすらと奈美の全身に光が溢れる。

「ば、馬鹿な……その力は……」

「私は一人じゃないわ。みんなと一緒に……あんたを倒す！」

「良いだろう。こい、小娘！！」

「うわあああ……！！」

突進する奈美。

迎え撃つサンタ。

今ここに、長い戦いに終止符が打たれる。

「……て夢を見たの」

「へえ、そうかそうか。それは面白そうな夢だな」

「えっと……怒ってる？」

「いーや、全然。パーティーが始まってるのに、爆睡してたお前を起こしにアパートまで寒空の中往復させられた事なんて、ちつとも怒ってないぞ」

にこやかに笑うハルだが、その目は欠片も笑っていないかった。

「その……何というか……ごめんなさい」

「全くお前は。あれだけ電話したのに、ちつとも起きやしない」

「だって……ハピネスのクリスマスパーティーが楽しみで、昨日寝れなかつたんだもん」

「子供かお前は」

呆れたようにハルは言う。

「まあ良いよ。まだパーティーも始まったばかりだし」

「北風を貸し切ってるんだよね」

「ああ。いつもの面々は全員揃ってるぞ」

「折角のクリスマスなのに、みんな一緒に過ごす人がいないんだね」

「……お前、それ絶対に言うなよ」

間違いない修羅場になるから。

「で、結局その夢の結末はどうなったんだ？」

「それがさ、丁度決着を着けるタイミングでハルが起こしたから、分からないのよ」

「……ちくしょう、微妙に気になってる自分が悔しい」

夢の話とは言え、なかなか凝った設定だった。

せめて結末まで見てから起きて欲しかったものだ。

「でもさ、やっぱりサンタクロースは居ないんだよね」

「そりゃ分からないよ」

「え？」

「今まで誰も見たことが無いってだけだろ。なら、居る可能性は否

定できないさ」

悪魔の証明と言つものがある。

それが居ない、と証明することは、居る証明に比べて極めて困難。現実的に不可能に近いとされている。

屁理屈と言われてしまえばそれまでだが。

「まあ、居るかもしれないと思つてた方が、夢があつて良いと思つけどな」

「……そう、だよな。あ、雪だわ」

チラチラと夜の闇に白い粒が舞い降りる。

寒いと思つていたが、どうやら雪が降り出したらしい。

「ホワイトクリスマスか。悪くないな」

「そうね……あれ？」

「ん、どうした？」

「ハル……あそこ……」

口をぱくぱくとさせて、奈美が空の一点を指差す。

ハルが視線をそちらに向けると、

「……嘘、だろ」

きらきらと光を纏つた何かが空を飛んでいた。

いや、ここは誤魔化さずに言おう。

あれは間違いなく、

「さ、サンタクロスだあ!!!?」「」

話題のその人だった。

ハル達の叫びが聞こえたのか、サンタと思われる人物は笑顔で手を振る。

「ま、マジでか……」

「サンタさ〜ん」

呆然と立ち尽くすハルを余所に、奈美は心底嬉しそうに手をふり返す。

時間にして、ほんの数秒の出来事。

だが、確かに彼は存在していたのだ。

「ねえねえハル、見た、見たよね？」

「……ああ」

「凄い凄い、私サンタクローズ見ちゃった」

大はしやぎの奈美。

一方のハルは、頭の整理が追いつかず呆然と空を見続けている。

「これはみんなに自慢しなきゃ………はつくしょん」

「風邪か？」

「ううん。ただちょっと寒くて」

慌てて家を出てきたからか、奈美はマフラーも手袋も着けていなかった。

さぶさぶ、と赤くなった手を擦り合わせて息を吐きかける。

その様子を見て、ハルは小さくため息をつく。

「……ほら」

奈美の隣に立って、長いマフラーで奈美と自分の首を繋ぐ。

「ハル？」

「手袋は……悪いが半分こだ」

左手の手袋を外して、奈美に手渡す。

そして、奈美の右手と自分の左手をギュッと握る。

「これで少しはマシだろ。向こうに行けば暖かいから」

「………」

「……両方寄越せとか言わないよな？」

「うん……ありがとね」

奈美は微笑むと、ハルと手を繋いで歩き出した。

「折角サンタを見たのに、プレゼントを貰い損ねたな」

「……私は貰ったよ」

「何を貰ったんだ？」

「えへへ、内緒」

不思議そうなハルに、奈美は幸せそうな笑顔で答える。

（ホワイトクリスマスに、ハルと手を繋いで歩く……最高のプレゼントをありがとうね）

奈美はサンタクロースへ、心の中で感謝を伝えるのだった。

聖夜の出来事（後書き）

まず最初に、すいません。

クリスマスに合わせて投稿しようとしたのですが、色々あって間に合いませんでした。予約投稿にしておけば良かった……。
イブでテンションが上がって、勢いだけで書きました。

無茶苦茶な話ですが、どうかご勘弁を。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

小話へ痴漢は犯罪です！〜（前書き）

ハピネスを訪れた美園警視。

何やら依頼があるようですが、どうもコレクト絡みでは無いらしく……。

小話へ痴漢は犯罪です！

ハピネス事務所にやってきたのは、お馴染み美園警視だった。

またコレクトからの挑戦かと、ハル達は身構えるのだが、

「今回は別件での協力をお願いしたいのです」

美園はハル達の態度を見て、直ぐさまそれを否定する。

「警察が怪盗以外の事件で、民間である私達に協力を求めると？」

「それは申し訳なく思っています。ただ、この件に関しては警察もお手上げです」

無念そうに告げる美園。

そのただならぬ様子に、ひとまず話を聞くことになった。

応接スペースに集まった面々を前に、美園は口を開く。

「実は……とある犯罪者の対策について、知恵を貸して頂きたい」

「何の犯罪です？」

「……………痴漢です」

美園は怒りと呆れが混じった声で答えた。

痴漢。

公共の場所で相手に羞恥心を抱かせ、不安にさせる行為を行う者もしくは行為。

現代日本では、電車内で行われる事が多いらしい。

「てことだ。分かったか？」

「うん、何となく。あれでしょ、女の人のお尻とか触る変態」

「女性に対して不埒な事をする不届き者、と言う認識で良いのかな？」

ハルの説明で、奈美と紫音はひとまず理解したらしい。

紫音はともかく、奈美が知らないのはどうかと思うが……。

「でも痴漢の対応なんて、それこそ警察の仕事だと思いますけど」

「私も同意見です。だからこそ、美樹が私達に相談する理由が聞きたいですね」

ハピネス一同の視線は、沈黙を守っている美園に向けられる。

「痴漢の常習犯である男がいます」

美園は小さく語り始めた。

「その男は巧妙な手口で、数え切れない女性に屈辱を与えてきました。が、当然当局が見過ごすはずもなく、現行犯で男を逮捕しました」

「……めでたしめでたし？」

「そうは問屋が卸しませんでした。その男、釈放された後も懲りずに何度も痴漢を繰り返し、捕まり懲役を受け、釈放後にまた痴漢を行っているのです」

「生粋のクズねえ」

吐き捨てるように言ったローズに、ハル達も賛同する。

「捕まる事に、男の手口は巧妙化しています。まるで、実戦で経験を積むかのように」

「実戦に勝る修行はないと言うが……救いようが無いな」

「だが解せない。長く豚箱に放り込んで置けばいい話だろ」

蒼井の言葉に、しかし美園は首を横に振る。

「日本の法律では、痴漢という罪は無いのです。基本的に迷惑防止条例と強制わいせつ罪が適用されますが……」

「どちらも、さほど重い罰は与えられませんね」

補足する千景に、美園は頷く。

「最長で十年の懲役ですが、それが付くことは殆どありませんし……」

「他に何か？」

「刑務所では模範囚で通ってますので、刑期の短縮が認められてしまいます」

「何よそれ。繰り返すって事は、反省してないって事じゃない！」

「上辺だけでも反省しているふりすればあ、それを本心かどうか見

分けられないのよお」

「……やりきれない話だな」

応接スペースに、何とも言えない沈黙が訪れた。

「それで、貴方はハピネスに何を依頼しようと言っているのですか？」

「何らかの手段で、その男に痴漢を止めさせて欲しいのです」

「んんんんん」

美園の言葉に、ハル達は難しい顔。

今の話を聞く限り、どう考えても不可能だろう。

「……何かアイデアがある人はいますか？」

「あ、はい」

諦め半分で尋ねた千景に、奈美が元気良く手を挙げる。

「はい、奈美どうぞ」

「徹底的にボコボコにして、二度と痴漢出来ない身体にしちゃえば良いと思います」

「それ採用!!」

「んな訳ないだろおお!!」

ハルと美園のダブル突っ込み。

「え、凄い良いアイデアだと思ったのに」

「そんな事すれば、今度はお前が犯罪者になっちゃうぞ」

「いえいえ、そこは美園警視殿が何とかするでしょう。ねえ、美樹？」

「私の首と引き替えにしても、流石に庇いきれないですって」

「勿論冗談です」

本気の目をしていた。

間違はなく、本気だった。

「千景ちゃんたらあ、無理言っちゃ駄目よお」

「分かってくれますか、剛彦」

「勿論よお。やるならあ、証拠を残さないようにしないとあ」

「成る程……剛彦、移動中の電車、狙撃できますか？」

「三キロ圏内なら確実にい」

「だからああああ!!」

奈美より圧倒的に物騒な二人に、美園は頭を抱えて絶叫する。

「駄目だよ二人とも」

柚子が窘めるように注意する。

常識人が来た、と美園とハルは安堵するのだが、

「狙撃じゃ銃弾が証拠になるじゃない。殺るなら千景ちゃんが一番適任だと思うわ」

「ブルータスお前もかああ!!」

やっぱり柚子もハピネスの所員だった。

その後も色々な案が浮かぶ。

のだが、そのどれもが男を物理的にどうこうする物ばかり。

当然警察である、美園の許可が出るはずもない。

「はあ、はあ、いい加減突っ込み疲れてきました……」

「……今日は少し楽だな」

突っ込み役が他に居るといふのは、何とも気楽だった。

「まあ、そろそろ美樹虐めも飽きたので、真剣に話すようにしましょうか」

「「はい」」

「あ、貴方達は……」

「気にしていると疲れますよ」

額に青筋を浮かべる美園に、ハルは経験者として助言する。

「物理的な行為が駄目なら、やはり意識改革しか無いな」

「でもどうやって？ 話を聞く限り、本人は全く罪の意識が無いっぼいぞ」

「紫音の術で操るとかは？」

確かに物理的では無い。

無いが、結構グレイゾーンだ。

「一時的には可能だろうが、持って三日。持続に問題有りだ」

「ならやつぱり、私の開発した新薬を……」

「ん~~~~」

それも物理的や、と突っ込みたいが、ギリギリ妥協出来るラインでもある。

正直考えが煮詰まってきた事もあり、それで行くかと言う空気が流れ始めてきた。

そんな中、奈美が不意に言葉を発する。

「あのね、私ちよっと思っただけ……」

「何だよ」

「子供の頃ね、私お母さんに人を訳もなく殴っちゃ駄目って教えられたの」

「そりゃ当然だろう」

「で、どうしてって聞いたら、思い切りお母さんに殴られて、『痛いでしょ？ 自分がされて辛かったり嫌な事は、人にしちゃいけないのよ』って教わったわ」

過激な方法であるが、奈美の母親の言葉は正しい。

子供にいけない事を教えるには、何故駄目なのかをキチンと教える必要があるからだ。

「……なるほど」

奈美の言葉で、千景は理解したようだ。

「つまり、それは今回の件にも適応できると」

「はい。自分が痴漢されれば、相手の気持ち分かるんじゃないかと思うんです」

「でも相手は男だろ。それこそ痴女でも居なけりゃ……」

そこまで言っつて、ハルはふと思いつき、視線をある人物へと向ける。

思いは同じらしく、その場にいた全員が同じ人物を見る。

その人物は、

「……あらあ、私かしらあ？」

その道のプロ、ハピネスが誇る男の天敵、ローズだった。

「剛彦、やれますか？」

「うふふう、私を誰だと思ってるのぉ」

ウインクをするローズは、頼りがいのある台詞を言った。

もつとも、中身は非常に情けない話だが。

「良いわぁ。私の友達も集めてえ、徹底的にやっちゃっわよぉ」

「い、いや、同性でも痴漢は成立する訳でして……」

美園が一応警察として止めようとするが、

「悪質な犯罪者に報いを与え、多くの女性達に安心を与える。何か

問題でも？」

「因果応報だな」

「今までの案で、一番まともかと」

「そもそも立件されなければ良いわけですし」

「車両を身内で固めてしまえば、現行犯も通報も恐れるに足らずだ」

「良く分かんないけど、良いんじゃないですか？」

妙に乗り気なハピネスメンバーには馬耳東風だった。

「では詳細を詰めましょう」

「はい」

こうして、美園警視公認？のハピネスによる、痴漢更正作戦が始まった。

その後。

「依頼は達成と言うことで？」

「不本意ながら」

ニヤリと笑う千景に、美園は不服そうな顔で報酬を手渡した。

「全く、これが表沙汰になればとんでも無い事ですよ」

「でも表沙汰にならなかった。貴方の望み通りの結果をもたらして、
ね」

「……やりすぎの様な気がします」

ハピネスの作戦は、痴漢男を逆痴漢して反省を促すという物。
女装したハルが囮となり、ローズ達その道のプロしか居ない車両
に痴漢男を誘い出す。
後は……………ご想像にお任せする。

まあ、過程はともあれ、美園の依頼そのものは成功と言えるだろ
う。

男は二度と痴漢に手を染めることが無かったからだ。
ただその副産物として、

「人生観まで変えるなんて……………」

「協力者達は喜んでましたよ。仲間が増えたって」
新宿二丁目の住人になってしまったが。

「今度剛彦達と一緒に、お店に行ってみるつもりですけど……………貴方
も一緒にどうですか？」

「……………遠慮しておきます」

かくして、女の敵である痴漢の更正作戦は幕を閉じた。

小話へ痴漢は犯罪です！〜（後書き）

何とも酷いオチでして……。

最後に残った良心で、詳しい描写はカットしました。

痴漢が『アツ』された場面なんて、誰も読みたく無いでしょうし、何よりR18タグ付けなきゃいけないので……。

タイトル通り、痴漢は犯罪です。

因みに本編でもあるように、同性でも成立するらしいですよ。

気を付けましょう……って気を付けてる時点で駄目なのですが。

次回もまたお付き合い頂ければ幸いです。

とあるお歳暮（前書き）

千景の元に贈られてきた、大量のお歳暮。
その中に、ある所からのお歳暮が紛れていて……。

とあるお歳暮

「ん、なんだこりゃ？」

ハピネスの事務所を訪れたハルは、とある張り紙を見て思わず呟いた。

『希望者に缶詰をお分けします。詳しくは柊か鈴木まで』

簡潔な一文だけの張り紙だ。

「缶詰……依頼の報酬とかかな」

「いえ違いますよ」

「あ、千景さん」

いつの間にか背後に立っていた千景に、ハルは軽く一礼する。

「これ、一体何なんですか？」

「実はお歳暮が届いたのですが……今年は何故か全員缶詰の詰め合わせでした」

「あゝたまにありますよね、妙に重なるとき」

ハルは両親の事を思い出して答えた。

「私も紫音も缶詰はあまり好みませんので、折角ですからお裾分けをと思ったんです」

「なるほど。因みにどれくらいの量だったんです？」

「東京ドーム二個分位ですかね」

「!!!??？」

大きさ以外の単位で登場するとは思わなかった。

「勿論冗談です。が、それでも数百個はありますので」

「ん〜なら俺も貰って良いですか？」

「大歓迎です。おつまみ、食材、フルーツ、何でも揃ってますよ」

「店が開けそうですね。あ、それなら奈美に言えば大喜びで引き受

けるんじゃ」

「……あの子に引き取って貰って、この量なんです」

「あゝそれはまた……」

あの奈美が引き取って、数百個の在庫。

恐るべきは千景のコネクションか。

「持ち帰るのなら、社用車を使って構いませんので」

「どれだけ持ち帰れと。」

「はあ、それじゃあ折角ですから適当に貰って行きます」

「では倉庫に。案内しますから」

二人は事務所の上の階にある、倉庫へ移動した。

「ふふ、大量に引き取って頂けて助かりました」

「こつちこそ。奈美対策に、これだけ食料があると有り難いです」

「今もあの子と夕飯を？」

「最近、一人で食べる方が物足りなくなりましたね」

「……人は暖かさを知ると、寒さに耐えられない生き物です。ハル

君のそれは当然の反応ですよ」

因みにハルが貰った缶詰は、後日車で家に輸送することになった。

「今日もご指名が幾つか入ってますよ」

「またペット探しますか？」

「それが三件、躰代行が二件。いずれもハル君ご指名です。すっかり売れっ子ですね」

「嬉しいやら悲しいやら」

指名は信頼の証なので、嬉しいのは確かだが。

「人に出来ないことが出来る。それは誇って良いのですよ？」

「そんなものですかね」

「意外にハル君は、動物関連の職業が向いているのかも知れません」

「……考えてみますよ」

そんな話をしながら、二人は事務所に戻った。

「あ、所長。実は丁度今、新たなお歳暮が届いたのですが……」
事務所に入るやいなや、鈴木が申し訳なさそうに伝える。

見れば事務所の一角は、さっきまで無かった箱の山が積み上げられていた。

「……千景さんこそ売れっ子ですね」

「優しい皮肉をどうも。依頼しますから、仕分けを手伝って貰えますか？」

「良いですよ。じゃあ動物相手の前に、お歳暮の相手をするのでしょうか？」

ハルは苦笑を浮かべながら、お歳暮の仕分けに取りかかる。

「カニ缶詰め合わせ……フルーツ缶詰め合わせ……こっちは……」
「ンビーフセット」

「何かの呪いかしら……」

「てか、これだけの数が来るなんて、千景さんの交友関係はどうなってるんですか？」

「ハル君が思うほど広くはありません。一応贈っておくか、と言うレベルですよ」

缶詰の詰め合わせというのは、とつてもリーズナブルなお歳暮。

あまり親交はないが、贈らないのも、と言う場合にとつても役立つ商品だ。

「例年は石けんやタオル、そばとか色々贈られるのですが……」

「重なる時には重なるものですね……あれ、これは缶詰じゃ無いですよ」

中身をチェックしたハルが、少し驚いた様に報告する。

「これは……お菓子の詰め合わせですね」

「あら珍しい。誰かしら」

「えっと……え、結城？」

ハルは剥がした宛先を見て、思わず呟いた。

「……なるほど」

「あの千景さん、結城つて紫音の……」

「実家ですよ。恐らく大切なあの子を預かって貰ってるから、贈ってきたのでしよう」

千景の言葉に、ハルは疑問を感じた。

「大切？ 紫音は自分が厄介払いされたと言ってましたが」

「あの子がそう言ったのですか？ …… あの老人達が考えそうな事ですね」

「違うんですか？」

「ええ全く。寧ろ溺愛してますよ」

呆れたように言う千景に、ハルの頭はすっかり混乱していた。

その様子を見て、

「……仕分けもあらかた終わりました。休憩ついでに少し説明しましょう」

千景は小さく微笑んで告げた。

ハルと千景は事務所隣にある、喫茶北風に場所を移した。

テーブルに運ばれてきたコーヒーが、湯気と共に良い香りを鼻に運ぶ。

「まず、紫音の実家ですが、これはご存じですね？」

「はい。結城家は退魔師の家系だって、前に紫音が言っていました」

「日本には古来よりそう言った家がありまして、結城家はその一つです」

千景が言うには、日本各地に退魔師の家が存在するらしい。

各地方に代表格の家があり、そこを中心に人知れず魔を払っている。

紫音の家は、関東の代表格で、退魔師の間ではかなり名の知れた家のようなのだ。

「あの子は宗家の一人娘で、いずれは結城家を継ぐ身でした」

「へえ、凄いですね」

「両親を早くに亡くしたあの子は、祖父や曾祖父、まあ老人達に育

てられたのです」

「……知らなかった」

「気軽に話す事ではありませんから。ハル君もなるべく口外しないで下さい」

真剣な千景の目に、ハルは頷いて答えた。

「幼少の頃から退魔師として育てられたあの子は、現時点で正二位の位を持っています」

「正二位？」

「階級みたいな物です。一番上が正一位、下は従五位まで」

「あんな小さい子が、ですか？」

「完璧な実力主義ですからね。力があれば、年齢性別は問われない世界です」

千景はコーヒを一口飲み、一呼吸置いた。

「……話を戻しましょう。そんな紫音が、何故家を出て私の元に来たか、ですが……」

「何か切っ掛けがあったんですよね」

「ええ。それを作ったのは、まあ私なのですが」

何とも言えぬ表情で頬を掻く。

「あの子の小学校卒業祝いに、遊園地に連れて行ってあげました」

「はあ」

「今まで娯楽に触れる機会が無かったあの子は、大層喜びまして」

「まあそうでしょうね」

「それを老人達に嬉々として話したそうなのです」

「あゝ」

何となく想像が着いた。

「目を輝かせ、満面の笑顔で遊園地の感想を話す紫音に、老人達は大変衝撃を受けたらしく、私を結城家に呼びました」

「千景さんは紫音のおばさん……いえ、血縁関係に当たるんですね？」

思い切り睨まれたので、ハルは言葉を変えて尋ねる。

「私の母親は紫音の母親の姉です。退魔の力は薄かったらしく、長女でも無かったので家を出て普通の人として暮らし、父と出会ったのですが……まあそれは別の話として、とにかく呼ばれました」
「はい」

「そこで結城家の緊急会議に巻き込まれて……」
千景は渋い表情でその様子を語った。

「おう、良く来たのう千景」

「何用でしょうか？」

「うちの紫音がなあ、あんたに連れてって貰った遊園地を大層気に入ってねえ」

「それは何よりです。それで？」

「あんないい顔する紫音、儂らは初めて見たんじゃ」

「ほんにもう、目に入れても痛くないちゅうのはああ言っつのを言っ
んじゃろっつな」

「……それで？」

「紫音を、お前さんの所で預かって貰えんかね？」

「……はい？」

「おお、引き受けてくれるか。そりゃ良かった」

「別に返事をしたわけでは……とにかく、理由を説明して貰えますか？」

「儂らの望みはなあ、あの子の幸せじゃ」

「それが一流の退魔師に育てる事で叶うと、勝手に思いこんでおっ
た」

「じゃが、昨日のあの子を見て、考えが変わったのう」

「紫音にはもっと、色々な世界を見せてあげた方が良くと思ったの
よ」

「……今更ですね」

「お主の言葉はもっともじゃ。じゃがな、今ならまだ間に合う」

「色々な世界を知って、自分で幸せに繋がる道を探して欲しいんじ

「や」

「……それであの子が退魔師以外の道を選んだら、無理矢理連れ戻すつもりですか？」

「そんな阿呆な事はせんっ！！」

「む、無駄にシンクロして……」

「さつきも言ったとおり、儂らの望みはあの子の幸せじゃ」

「退魔師以外の道を選んだとしても、あたしらはそれを喜んで見守るつもりよ」

「……結城家の後継者が居なくなると、大変なのでは？」

「ん、ならそんな時は結城家は終わらせて、他の家に退魔を任せれば良いじゃろ」

「幸い関東には他にも退魔の家は沢山あるから」

「嫌がるあの子に無理矢理後を継がせる位なら、家を終わらせる事を儂らは選んだんじゃ」

「紫音が笑顔で居られる最善の選択肢として、お主の所を選んだわけだ」

「過大な評価どうも。ただ、私がどう言った人間かをご存じの筈ですが？」

「承知の上で言っておる。それに、もう足は洗ったんじゃろ？」

「それは……まあそうですね」

「なら何も問題あるまい。紫音もお主の事を気に入ってるみたいだから」

「どっじゃ千景。あの子を預かって貰えんか？」

「………幾つか条件を付けますが、それで良ければ」

「勿論じゃ。一応聞かせてくれるか？」

「一つ、私の仕事の手伝いを、あの子にさせる事の了承
「構わん」

「一つ、私はあの子の叔母として接し、過度の干渉はしません」

「それも構わん。親代わりをしる、等と無理を言つつもりは毛頭無いからのう」

「一つ、あの子には普通の中学校に通って貰い、普通の学生として生活して貰います」

「変な条件じゃのう。何故確認する必要があるんじゃ？」

「普通の学生は、当然異性との出会いや、恋愛、交際を行う可能性がありますので」

「なつつつ！……！」

「人の心は分からないもの。心を制限するような真似をしたくはありませんから」

「ぬ、ぬぬぬぬ」

「儂らの紫音が、何処の馬の骨とも知れん奴と……」

「こ、交際と言つことはじゃ、まさか、せ、接吻とかも……」

「有り得ますね。最近の子供は進んでますから、それ以上の関係も」

「がああああああ……！」

「紫音が、儂らの紫音が汚れて……」

「おじいさん落ち着きなさい。ちー坊はあくまで可能性の話をしていただけじゃよ」

「そうとも。交際は両者の合意が必要、あの紫音が間違っても男と交際などと……」

「じゃがもし、もしもじゃ、運命の相手と出会ったりしちやったら

……」

「言つな！ 頼むから想像させんでくれ……涙が出て来ちゃう」

「以上の条件を飲んで頂けるなら、紫音を預かりましょう」

「ん~~~~~」

「私は忙しいのでこれにて失礼。答えが出たら、ご連絡下さい」

「と、まあこんな事があつたのです」

長く話して喉が渴いたのか、千景はコーヒを一気に飲み干し、お代わりを頼む。

「何と言いますか……過保護、いや、親馬鹿ですね」

「まさしくその通りです」

「紫音が千景さんの所に来た経緯は分かりましたけど、どうして厄介払いなんて言ったんでしょう」

今の話を聞く限り、どう考えても厄介払いではない。

なら何故紫音の認識が違っているのだろうか。

「今まで退魔師として修行を積んでいたのに、突然家を出ると言われたからでしょうね」

「だって、今の話を聞けば……………まさか」

「老人達が何も言わなかったのでしょうか。多分、面と向かって言うのは恥ずかしいのでしょうか」

ツンデレだ。

酷いツンデレがそこにいた。

「色々納得しました」

「何よりです。ああ、この事は紫音には話さないで下さい」

「どうしてですか？」

「話せば優しいあの子の事、きっと結城家と今の生活で悩むでしょうから」

「……………なるほど」

「ハル君は今まで通り、紫音の兄貴分として接してくれば充分です」

「奈美は姉貴分ですかね？」

「どちらかというと、妹分でしょう」

二人はどちらからともなく笑い、暫し穏やかな時間を楽しむのだった。

後日。

「ねえハル、私はどうすれば良いの？」

「……どろしてこつなつた」
缶詰の重量に耐えきれず、奈美の部屋の床が抜けたのは、また別の話。

とあるお歳暮（後書き）

紫音の厄介払い発言の真相は、まさかのツンデレでした。間違いないく実家の老人たちからは、溺愛されています。

両親については、退魔の仕事中に殉職してます。故に老人たちは紫音を強く育てようとしていました。

今の紫音を見たら、きっと老人たちは号泣する勢いですね。

年末年始は、ネット環境のない場所にあります。

投稿は恐らく年明け少ししてからになるかと。

予約投稿が間に合えば、いつもどおりのペースで投稿いたします。

今年一年、お付き合い頂きありがとうございました。

来年はこの小説を完結させ、また新たな物語に取り組みたいと思います。

よろしければ、これからもお付き合い頂けたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7390s/>

便利屋はじめました

2011年12月31日00時45分発行